セミテリオの仲間たち

音天響子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セミテリオの仲間たち

【Ｎコード】
Ｎ７３９７Ｌ

【作者名】
音天響子

【あらすじ】
セミテリオ（霊園、所在地：東京都桜山区）に居住する、薩摩出身の彦衛門とマサ夫婦、ご近所の殺害被害者亜米利加人元外交官ロバート、産後の肥立ちが悪く住人となった仏蘭西人女性カテリーヌ、肺病で住人となった高等学校生徒虎之介、お見合い直前で西班牙風邪で住人となったユリ、その他近隣住民が、乗って旅する見聞録。
鬼が出るか蛇が出るかは見ての、いや、読んでのお楽しみあれ。

第一話　セミテリオの烏

第1話　セミテリオの烏

（烏が・・・）
（あぁ、またとまっておるな。主がいたら腹立てるだろうが）
（烏は墓場にはつきものですわ）
（生きておる時には烏はうるさいものだったが、今では烏も気晴らしになる）
（夕方なんですねぇ。昔は烏のお家も近かったでしょうに）
（この辺り、住民は増えたが、元々山は皆無、帰る家はどこにある。昔は狸も出たのだが）
（いつ頃のお話をなさってらっしゃるんですか。狸などわたくしの頃にも出ませんでした。お故郷ではまだしも）
（おぉ、鳴いておる、泣いておるのか）
（♪烏何故なくの、烏は山に可愛い七つのこがいるからよぉ♪）
（マサはその歌、好きだねぇ。私の頃には無かった歌だが）
（昭和の初期に生まれた末の孫娘、朝子が歌っておりました。あなたさまはあちらでは会ったことないんですね）
（墓参りに来てくれた折々にあるがの。孫も皆、鬼籍に入ったそうな。それにしても、私たちが鬼とは・・・あの可愛かった孫達も鬼にされるとは・・・こちらの世は住み良いのだが）
（そうですわねぇ。だんだん、わたくし達を覚えていてくれる方々が減ってしまい、さみしくなりますわねぇ。いえ、こちらで会おうと思えば会えるものの、わたくし達、だんだん薄くなって参りました）
（こちらでの、あの再会、マサはすねておったのう）
（そりゃそうですわよ。わたくしはあなたさまより八つも若うございましたのに、わたくしは八十五のおばあさん、あなたさまは六十

一のままなんですもの。ずるいですわよ。わたくしの事はお婆さんとして記憶され、あなたさまはお爺様の入り口で記憶される）

（そうかね。私も六十過ぎて、しっかり爺さまだったと思うが。私にあちらで直接会った者はみな、とうに鬼籍、いや、こちらの世界の住人。私の写真はあちらにはないからね。マサは写真が残っておるから、会ったことのない曾孫や玄孫にも記憶が語り継がれていくだろうが）

（年寄りのままのわたくし．．．若い頃のわたくしを知るのは．．．）

（こちらにはたくさんおるだろうが）

（そうですわねぇ。あなたさまと、あなたさまのご兄弟さま、ご両親さま、ご祖父母さま、わたくしの祖母二人、両親、兄たち．．．でも、最近はお目にかかることもめっきり減りました）

（思い出してくれる者が減ると、薄くなっていくからのう）

（そうして大気と混ざって宇宙に漂う．．．あなたさまも薄くなりました。おつむはふさふさでも、お気は薄くなりました．．．烏が相変わらずないておりますわねぇ。お山もないのに、どこに帰るのでしょう）

（コルネイユ、からす、クロウ、鳴き声からの呼び方なんでしょうね）

（あらカテリーヌさん、おひさしぶり）

（マサさま、彦さま、お元気でいらっしゃいますか。あらっ、まだ癖が抜けなくて。もう八十年も経っておりますのに、つい覚えた時のままで、最初にこうご挨拶するものだと。私たちの間でお元気というのも変なものですわ）

（カテリーヌさんはすっかりお薄くなってしまわれて、お可哀想に）

（セラヴィ。私を思い出してくださる方など少なくて、遠い血縁の者が家系図の整理をする時だけ、異国日本で死んだ私の名前を読み上げるくらいですもの）

（最近は仏蘭西までいらっしゃらないのですかの）

（コルネイユでは仏蘭西まで飛んでいってくれませんし、両親にも祖父母にも夫にも次男にももう久しく会っておりませんわ。私の所にいらしてくださるのは、外国人のお墓が珍しいからと、一つずつ墓石を読まれる方ぐらいですもの）

（夫君は・・・・忘れっぽくて、ええと、仏蘭西でしたかの）

（いえ、ロバートは祖国、英国の墓地に、ご両親様や次男の近くで。私は赤ちゃんのロビンとここで二人ですわ。ロバートは後妻さまとご一緒ですの。少しだけ、今でも妬けます）

（そうでしたわねぇ。お寂しいですわねぇ。わたくしどもも、ご先祖さまは皆、薩摩のお墓でしょ。こちらではなかなか会えなくて）

（乗り者がないと、なかなかねぇ）

（最近はこの辺りのお参りはとんと減って）

（カモが来た）

（鴨ですか、烏ではなくて）

（カモ、乗り者だよ）

（噂をすればカモですか）

（噂をすれば陰、じゃなくて、駕篭だの）

（汽車だ、電車だ地下鉄だ）

（おお、皆の衆、お目覚めのご様子）

（通りすがるだけさ）

（通り道ですものね）

（便利な世になったもんだ）

（道路が上を走る、電車が下を走る、墓地の真ん中突っ切って賃貸し車が走る）

（私の頃には、遠くへは汽車、街中は馬車鉄道。私の葬列はここまで馬車だった。あれは馬糞拾いが・・・）

（あなたさま、またそのような）

（こっち向いてくれ）

（通過するだけですって）

（若い娘が・・・昔なら、墓場など怖がって近づかなかったろうに）

（今は灯りが煌煌と、墓場は逢い引きの場となり）
（俺たちの旅を助ける乗り者となる。だめだ、近寄ってくれない）
（見知らぬ人の墓になど、そうやすやすとは近寄ってくれるわけがない）
（せっかく目が覚めたのに、またまた退屈な時が流れていく）
（どなたかご体験談、旅のお話なさっていただけませんかしら）
（マサさま、この前のお話、もう一度お願いしますわ）
（この前のって、もしやもう四半世紀も前の、例の笑い話ですか）
（四半世紀など、セミテリオの住人にとっちゃ、あっと言う間さ）
（あの時の朝子ったら、でも皆様、構いませんかしら。構うようでしたら、ご退席なさってくださいませ）
（あの話しとは、私とマサが朝子に乗っていった時のか）
（そう、わたくしたちの末娘悦がこちらの住人になったと、朝子がここにお参りに来て報告してくれました折りの）
（その朝子ももうこちらの住人だがの）
（わたくしども、朝子に乗って、東京駅につきました。あの昔の赤煉瓦の建物のままでしたわ。そこから京都まで。あら、あなたご生存の頃には東京駅はああでしたかしら）
（こちらに来る前ぐらいから話は出ていたが、私の頃には赤煉瓦は新橋だった。そうそう、新幹線というものに乗るのは朝子に乗った時のが初めてだったな）
（話が逸れてるなぁ）
（虎さま、よろしいじゃありませんか。逸れた話も退屈しのぎですわ）
（東京駅に着くと、朝子の長女がいたんですよ。久しぶりに会った朝子の長女、綾子はもう大きくなっていて、おなかも大きくなっていて。それで、駅の売店で買ったという冷たいカチカチの霜降りみかんと、透明の器に入った煎茶を手に朝子を待っていたんです）
（旅に茶は付き物とはいえ、あの透明のふにゃふにゃのはいただけぬ。私の頃には陶製のしっかりしたものだったがの。飲み終わると、

窓から投げ捨てたものだったが、新幹線は窓も開かぬ）

（時代は変わるものなのですねぇ。あのはやさ。朝子から振り落とされるかとしがみつく思いでした。わたくしどもの頃にも汽車は走っていましたが、東京から京都まではたっぷり一日かかりましたっけ）

（それを三時間ちょっとでしたかの）

（悦の葬儀の後、綾子は身重だからとこちらには来ず、実家で産もうと京都に帰る朝子と東京駅で待ち合わせ。わたくし、孫の朝子もひさしぶり、曾孫の綾子はもっと久しぶり、その上、おなかに玄孫ですもの。嬉しくて）

（しかし、新幹線は速かったの。玄孫が飛び出てくるんじゃないかと、ハラハラ、朝子の家に着けば、犬が腹にとびつくし、私は犬にはドキドキ、というか、薩摩の赤犬に似て美味しそうな犬だったが）

（怖い犬でしたわね。家の中で犬を飼うなんて、狆でもないのに）

（その晩、真夜中過ぎに、綾子が朝子を起こしに来たんです。破水したみたいだと）

（やはり、新幹線の速さで玄孫がびっくらこいたのやもしれぬ。マサは平然としておったがの）

（わたくし、あなたさまのお子を五人も産んだのですよ。そのくらいじゃびくともしません）

（私は気もそぞろ。こちらの住人になっても、どうもお産は苦手での）

（てっきりお産婆さんを呼びに行くんだと思ってました。朝子は歯を磨き、着替えて外套をはおって、それからおもむろに引き出しを開けて、指輪を選び始めたんですよ。娘が破水しているというのに、夜半にタクシーに乗るのだから指輪を選ぶなどと、わたくしよりも落ち着いていましたね。私がしわくちゃになった頃、朝子は小さい時からおしゃまな子でしたが。お産婆さんを呼ぶのではなく、綾子が電話して呼んだタクシーに乗って、二人は病院に行ったのでした。病院は非常灯のみの暗がりで、出てきたお産婆さん、いえ、助産婦

さんが、朝子を身重だと勘違いしましてね。朝子の外套がやたらぶくぶくで裾が広がっていたんですよ。綾子が、破水しているのは私です、と慌てて）

（マサは、そこから私の目を塞いだ。男はだめですよ、と）

（わたくしたち、朝子に乗っていたものですから、結局そこで綾子とは別れて、翌朝、朝子は綾子の夫、捺美くんに、綾子が入院したことを電話で伝えて）

（電話・・・私の頃には、警察や役所にしかなかった）

（おじいちゃん、また話が横に逸れる）

（私は、虎之介殿におじいちゃんと呼ばれるのは、どうも好かん）

（よろしいじゃないですか。あっ、彦衛門さまをおじいちゃんとお呼びする方ではなくて、話が横に逸れる方ですわ。私たちの時は永遠のようなものですもの）

（後で知ったのですが、捺美、綾子の夫ですわね、電話で入院したことを聞いてから一日中、腹痛だったそうです。仲のよろしいことで。あなたさまは毎回、お産婆さんと私の閉じこもった部屋の外でそわそわおろおろだったとおっしゃいますが、腹痛までは起こしませんでしたでしょ）

（捺美君は、名前に美がつくし、二つの世界大戦のあと徴兵制もなくなってから産まれたから、軟らかいというか優しいというか、藩校で文武を習ったものとは違うに決まっておる）

（一週間後、綾子はお腹を平にして、腕に赤子を抱えて帰ってきました）

（赤ちゃんのお名前、マナさんでしたっけ）

（あらカテリーヌさん、私の玄孫の名前まで覚えてくださって、ありがとうございます）

（どういたしまして。マナって、神秘的な力のことだと、ずいぶん昔に学んだことなんです。私たちのことみたい、でしょ。ですから覚えやすかったのですわ）

（それからが大変だったの。まだ時の感覚のない赤子。夜半にも腹

を空かして泣く）

（朝子は綾子と摩奈と同じ寝室にしていました）

（私とマサが朝子に付くのと同様に。犬が朝子に付いてくる。つまり、寝室には、私とマサと孫、曾孫、玄孫に犬。窮屈だったと申すより、犬が近くにいるのには、どうも落ち着かない。犬の方も、私とマサを薄々気づいているようだったしの）

（摩奈が腹を空かして泣く、綾子は熟睡、アルが、おっと、アルというのはその美味しそうな犬の名だがの、アルが綾子を鼻先で突いて起こす。綾子が摩奈の襁褓を換えて、汚れた襁褓を風呂場の樽に入れ、手を洗ってから乳を含ませる。それを見て、嫉妬するのか、アルが嘔吐し始める。朝子が起きてアルの嘔吐を始末する。摩奈が寝付いたら綾子は日記に記録してから就寝。これが一晩に一度二度と繰り返される。何もできぬ私たちは、ただただはらはら、犬に気づかれないかとどきどき、朝子も綾子も寝不足ぼんやり。元気なのは私たちと、寝てばかりいる摩奈とアル。しばらくして捺美君が会いにきて、初めての我が子を愛おしそうに、怖そうに抱き上げた。新しい命に触れられるとはうらやましい）

（あら、わたくし、あなたさまには五人も抱かせてさしあげましたわ。末の子の時など、初めての女の子によだれもたらさんばかり。悦ばしいから悦と名付けられて）

（ほら、また横道に入った）

（虎さま、構いませんことよ）

（僕たちには時間は限り無い・・・か）

（赤子の入浴もたいへんでしたわねぇ。朝子も思い切ったことをするもので。お台所の流しの桶で洗ってましたっけ）

（そうそう、横で綾子はあきれ、アルは吠える）

（病院に行く駕篭、いや、タクシーに乗るために指輪を選んだり、流しで赤子を洗ったり、朝子は思いがけないことをする孫でしたわ。赤子の成長は早いもの。ひと月もすると流しでは洗えなくなり、板張りの床に、何て言うんでしたっけ。油紙のような、つるつるで水

をとおさない布みたいなのを敷いて、その上に盥を置いて、そこで湯を使わせはじめました）

（あのせいで、私たちはこちらに戻ってきてしまったんだ）

（でも、そのお話、おうかがいする度に、目に浮かぶようですわ）

（朝子が摩奈に湯をつかわせる。綾子はおひさまの香りのする大きなふわふわの手ぬぐいと着替えや襁褓を用意する。まだ湯に慣れない摩奈は両手両腕両足を上げて泣く。赤子が泣くと犬が吠える。挙句の果てに呼び鈴までなる。犬がまた吠える。「ちょっと待って」「誰が出る」。中で騒いでいるから留守とは思われず、呼び鈴は何度もなる。朝子に乗っている私たちが代わりに出るわけにもいかず、犬は吠え続ける。赤子の泣き声と朝子と綾子のやりとりに犬はさらに吠えるし呼び鈴は鳴り続けるし、赤子は気配に覚えて手足を余計にばたつかせ水がそこら中にはねる。私たちは気もそぞろ、おやおやたいへん、でもいいお湿り、そう思った瞬間、気が緩んだのか何故なのか、私たちはここに戻ってきてしまったんだが）

（あれから四半世紀、摩奈もさぞかし成長したことでしょうに。きっとわたくしや孫に似て可愛い、それとも悦や曾孫に似て美しい子になったことでしょうね。玄孫じゃ墓参りにも来てくれませんしね）

（一度会ってみたいもんだが）

（綾子は何人産んだのだっけ）

（風の便りでは摩奈だけのようですよ）

（子は宝なのにの。昔は大人になる前によく死んだからの）

（わたくしは、あなたさまのお子を皆成人させました。ご存知でしょうに。あっ、カテリーヌさん、ごめんなさい）

（私の子も言葉を覚える前でしたわ。今でもお話はできませんのよ。日本語でも英語でも仏蘭西語でも）

（あっ、虎之介殿、ユリさんにもごめんなさいね）

（僕は、一応大人になりかけてましたし）

（ユリもね、一応大人みたいなものでした）

（たしかに私の子は皆成人したが、ここに住む子は、戦死した孫よ

り後に入ってきた敦のみ）

（セラヴィ）

（烏が・・・）

第一話　終わり

第一話　セミテリオの烏（後書き）

お楽しみいただけましたなら幸いでございます。
ご感想は彦衛門さま、マサさま等、セミテリオの仲間にお届けいたします。
第３話まで下書きはしてあります。
第５話まで聴取メモはあります。
後は、アップする時間だけ。
彦衛門さま、マサさま、私のこちらの世は、多忙なのです。

第二話　セミテリオでため息（前書き）

セミテリオにやってきた高校生はため息ばかり。

第二話　セミテリオでため息

「クヮ～コルネイユクヮ～コルネイユ」
（烏が・・・）
（烏さんが仏蘭西語でないてくださってますわ）
（仔が待つから家に帰るのだろ）
（おっ、乗り者が・・・）
（子が待つから家に帰るのだろ）
「あ～」
（溜息ですわね）
（あらぁ、あのお歳じゃ、お子さまはいないと思います）
（そうでしょうか。私はなかなか子供に恵まれませんでしたが、ユリさまの頃もまだご結婚は早かったのではないかしら）
（お友達は皆早かったの。番茶も出花、花も恥じらうユリはね、箱入り娘扱いでしたの。縁談をお父様お母様に断り続けられて、二十歳前にやっと初めてお見合いを整えて頂いて、なのに西班牙風邪で・・・ユリはお見合いも体験してないんです）
「あ～」
（また溜息ですな）
（あの青年というか少年というか、僕ぐらいだろうか）
（あらぁ虎さま、そんなお歳でしたの）
（僕は現在、え～と、さんじゅを過ぎました。）
（三十ですか。私とお近いのかしら）
（カテリーヌさん、僕はおばさんより若いのです）
（でも、わたくし三十五で止まりました。三十と大差ないですわ）
（あっ、いや、さんじゅとは、三十ではなく傘寿、八十と言うことで）
（まぁ、八十・・・そんなお歳には見えません。）
（あっ、つまり、僕のあちらでの年齢が止まったのは十七でして。

え～と、カテリーヌさんは今おいくつで）
（まぁ、女性に年齢を尋ねるものではございませんわ。でも、え～と、百と二十と・・・）
（ほらほら、生まれた年でも、年が止まった年齢でも僕の方が若いのです）
（ここの年齢はややこしいものだのっ。マサは私より八若くとも止まった年齢だと私より二十も上の婆様になる）
（婆様ですか・・・だんなさ～、それは辛うございます）
（浮世ではなし、辛いことはないだろ）
（だんなさ～とは、ひこさまのお名前ですか）
（いえいえ、旦那様、つまり、夫君ということで、マサがつい薩摩言葉になってしもうたの）
（だんなさ～、いえ、あなたさま、わたくしの方が若いのですのに、辛うございます）
（浮世ではなし、辛いことはないだろ）
「あ～」
（浮世のあの青年には辛いことはあるのかな）
（先ほどから歩みが遅くて、それに溜息ばかりついてらっしゃる）
（僕みたいに肺病かな）
（虎ちゃん、結核でしたの）
（虎之介は寅年生まれ。その頃流行っていた芥川龍之介の小説を好きな父がちなんで付けた名前なんだよ、ねぇ父さん、ねぇ母さん・・・返事がないな。僕より四十年も後にこちらに来た両親はお休み中のようで。龍虎、どちらも強いと思いきや、僕が生まれた翌年、龍は自殺、そして僕も結核でおだぶつ。あの亀歩きの青年、細くて薄くて青白くて、ほんと僕みたい）
「あ～」
（あらあら、お腰をおろされましたわ）
（あの床机台、冷たかろうに）
「あ～」

（あ～、ばかりなの）
（そりゃそうだ。ユリちゃん、君、いとうとえとおを考えてごらんよ）
（い～、だわ）
（だろう）
（う～、じゃなんだか詰まっているみたいだし）
（はばかり、厠、便所）
（だんなさー、いえ、あなたさま、お止しになってくださいませ。なんだか漂ってきそうで。乗せられてしまいそうで、あまり乗りたくない臭いですもの）
（私達には縁のない行為。だがちと懐かしいのっ）
（そして、え～、じゃ落語の始まりだ）
（あら、お～、でしたら、驚きですわ）
（カテリーヌおばさん、驚いちゃいけない。やっぱりあの青年の見かけだと、あ～、が似合う）
（おばさん・・・あんまりですわ）
（年の差からだとおばあちゃん、でも見かけでおばさんにしたんだよ）
（はぁ～。わたくしもため息つきたくなりました）
「あ～」
（ほんと溜息ばかり）
「なんで僕が・・・」
（あ～、じゃないこと言ったわ）
「あ～、なんで僕が。立場が逆じゃないか。弟と妹にどう言おう」
（なんだか深刻みたいですわね）
（病気かな）
（立場が逆とは、どういう意味でしょうかな）
（あら、ロバートさま、お久しぶり）
（先ほどから参加しておりましたが、気付かれなかったようですな。皆様おかわりございませんか。今日はご隠居の姿が見えませぬな）

（ご旅行に乗っていかれて、まだお戻りではないのですよ）
「あ～」
（あ～、ばかりじゃわかりゃしない。さっさと先を続けてくれよ）
（虎ちゃん、青年には聞こえないから、無駄よ）
（聞こえたら大変ですわね）
（あの男ですか。墓場には珍しい客人ですな）
「あ～、宙と由佳にどう言えばいいんだよ。中一と小四だってのに。僕だってまだ高二。立場が逆だよ。僕のせいでってならともかく」
（立場が逆って何かしら）
（そうそう。買う者と売る者、殺される者と殺す者、そして私は殺された）
（ロバートさま、まだ下手人をお探しなんだのっ）
（こちらの世界に来てからずっと探し続けてておりまする。下手人が分かるまでは死ぬに死ねぬ。いや、死んではおりますが、空気にはなれませぬ）
（下手人もこちらの世界にいるから、難しいんじゃない）
（あ～、左様。あ～）
「あ～」
（また溜息ですな。中一とか小四とか高二とか・・・今の学制だと、え～と、小学校は六年、ってことは中一というのは、数えで十五になるのかな、どうもよくわからぬわ）
（だんなさ～、今は数えでは数えないそうですよ。満何歳とだけのようですわ）
（マサ、お前の頃には寺小屋だったろう。おなごは藩校にも通えぬ身）
（ですから、わたくし、娘にも孫娘たちにも教育が大事と思いましたから、きちんと女学校まで卒業させました。だんなさ～もご存じのこと）
（あの男、何歳ということになるのかな。日本人は若く見える。いまだに吾輩は日本人の年齢が見当つかぬ。ましてや時代が変わると

なんとも）
（高二というのは、僕の頃の中学五年生ということかな。だとすると、普通十六か十七）
（ほうっ、やはり若く見える。吾輩には十二、三にしか見えぬ。背丈は、確かに高いが）
「あ～、どうすりゃいいんだ」
（また溜息ですわ。乗って行きましょうよ）
（あちらまでちょっと遠いですね）
（何か香りがあれば）
（おっ、鞄から何か出した）
（きせるかな）
（パイプのことですね）
（いや、何かもっと太い瓶のような、醤油・・・）
（醤油を飲んで死にそうになって、入営から逃げるっての、僕が中学の頃には流行っていたんですよ。自殺志願かな）
（うふふ）
（おのこは戦に行くものと相場が決まっておる）
（そういう時代もありましたねぇ）
（うふふ）
（今は平和）
（わたくしどもは、もっと平和）
（ユリちゃん、どうして笑ってるんだい）
（だってあれ、醤油じゃないの。飲み物なのよ）
（あんな真黒い物が飲み物なんですか。でも葡萄酒あれほど黒くはないです・・・）
（あれね、亜米利加の飲み物なんですって）
（僕の頃なら敵国アメリカ、ルーズベルトのベルトが落ちてなんてのでしたね）
（私の頃は開国を迫るペルリの国、赤鬼か青鬼か）
（あの、みなさま、吾輩の祖国です。気の存在の我ら、ちと気を配

っていただきたく申し上げます）
（お～お～そうだったの）
（吾輩の頃にはあのような飲み物はなかったが）
（あのね、あれ、コーラって言うんです）
（オー、コーラか。相当流行っていたのですな。だか、コカインが入っているからと言われて、一度も飲んだことがないまま日本に来てしまいました。外交官の卵といたしましては、異国に紹介するために本国のものを試そうか、それとも地位や社会背景にそぐわない下々のものは試さぬべきか悩みました）
（たかが飲み物なのに、その大仰な逡巡、お仕事たいへんだったと見受けられるの）
（この前、といってももう四半世紀よりもっと前かしら、私が乗せていただいた女性がよくいただいていました）
（美味しいものなのかね）
（さぁ、私には記憶の中の味だけですから、どのような味だかわかりませんが、あの時の女性は毎日のように飲んでいましたよ）
（ということは、コカインとは無関係、いや、やはり習慣性ということは）
（危ない薬だったなら、禁じられているだろ）
（いやいや、我が国がこの国を占領していたわけだから、阿片戦争の事を考えると、いやまさか、だが・・・）
（おっ、香りが漂ってくる）
（なんだか歯医者のような）
（妙な香りですわね）
（乗せていただきましょうよ）
（ここにいても日がな一日、四六時中、一年三百六十五日、年々歳々退屈な日々、吾輩は乗る）
（ロビンちゃん、お留守番していてね）
（バ～ア）
（お婆ちゃんみたいだよね）

（虎さまっ）
（乗り心地、悪くないですわね）
（気もそぞろのようですな。吾輩たちが乗っても気配も感じなかったようです）
（えーと、どなたがお乗りになったのかしら。虎ちゃんでしょ、カテリーヌさまでしょ、ロバートさま、彦衛門さまとマサさま、あらっ、ロバートさまを除いて御常連）
（ふむふむ、道中仲良くいたしましょう）
「あ～、つながらない」
（何がつながらないのかしら）
（ラヂオじゃございませんか）
（ラヂオ、あっなるほど。ハイカラお婆ちゃん）
（虎さまっ）
（虎之介殿もご存じのようですね。あら、もしかして、今ここにいらっしゃる皆様はあちらの世界ではお目にかからなかった、いえ、お聴きになりませんでしたか）
（お婆ちゃん、もとい、おばさん、ラヂオじゃないよ。だって紐がつながっていない）
（んだもしたん）
（んだもしたん、どういう物なのでしょうか）
（ごめんあそばせ、カテリーヌさん、ついお国言葉が出てしまいました。驚くと出る言葉ですわ）
（あのね、私がコーラを知った時には、もうラヂオは電灯線がついていなかったです）
（あら、ユリさんもご存じなんですね）
（私が知っておるのはテレビと申すものだが、あれは動く絵があった。これは動く絵はないテレビかのっ）
（でも、ラヂオに話しかけはしませんよね）
（そういえば時々、セミテリオを通る方々がこれを手に一人でお話してらっしゃいますわ）

（そうそう、王様の耳は驢馬の耳の逸話の如く、鬱憤を晴らす地面の穴の代わりの機械なのかと吾輩は思っておりましたな）
「あー、つながらない。そうかぁ。母さんが料金払わなかったんだ。止められちゃったんだ。畜生」
（まぁ乱暴なお言葉ですこと）
（電話料金とは・・・ラヂオというものやテレビとは電話料金を払うとつながるものなのかのっ。電話料金ということは、単純に考えれば、電話かのっ）
「そりゃそうだ。母さんに払えるわけない。電話どころじゃない。これからどうやって生活すればいいってんだよ。食費、ガス、水道、電気、どれも止められたら困るし。それに僕の授業料。由佳と宙の給食費や学級費用もある。僕一人じゃどうにもできない。なんで母さんまで」
（お母さま、こちらの世界の住人になられたのかしら）
（お父上もそのようだのっ）
（あら、たいへんですわね）
（弟と妹がいて、金がないってことか）
（だがこの青年は高等学校に通っておりますな）
（金持ちの親戚でもいるとか）
（それでしたら妹や弟も面倒見ていただけるでしょうに）
（そのうちわかることですわよ）
（そうですわね）
「家宅捜査・・・立ち会えだって。だから明日は学校行くなと・・・宙と由佳が登校した後に来る・・・配慮してくれたというか・・・でも、でも、僕が立ち会うなんて。母さん、何で泥棒なんて。そんなに金に困っていたのなら・・・げっ、この前くれた、このナイキのシューズを買った金・・・うわっ」
（シューズとは靴のことですな、わが母国の言葉です）
（泥棒・・・お母さまが・・・）
（こっちの世界の新住人ではないんだぁ）

（吾輩思うに、もしやお父上も泥棒）
（我が子の靴を買う金なくて、泥棒ということだのっ。よくあることだ）
（よくないですわ）
（よくあってもいけないですわ）
「コーラ、こんなものもう飲めない。校内で買ったから百円だったけれど、でも百円あればコロッケが買える。セールの三十円なら三個。夕飯のおかずになる。キャベツはいくらぐらいするんだろう」
（セールというのもわが母国の言葉です。大売り出しという意味ですな）
（コロッケが一つ三十円もする時代なんですね）
（コロッケは、わたくしの国の言葉ですわクロケッ）
（コロッケなら、僕の時代でも普通に売っていましたよ。馬鈴薯をつぶして揚げたもの）
（ございましたわね。こういう歌が。♪けふもコロツケ、明日もコロツケ、年がら年中コロツケ♪）
（おばあちゃん、歌が上手。おばあちゃんってコロツケ毎日食べてたのかな）
（コロツケは・・・買いませんでした。良い油を使っていませんからね、女中に作らせておりました）
（マサはコロツケを作っておったのか。私は食したことがないが）
（だんなさ～御存命の頃には既にコロツケはございました。でも、だんなさ～のお病気に油ものはよくないといわれておりましたから）

（ユリはその歌知らないわ。三十円って、ユリの頃でしたら、お家が買えたのかしら）
（ユリちゃん、いくらなんでも、家は買えなかったと思うよ）
（ところで此の御仁は乗り物には乗らないのだろうか。今日は何に乗れるかと楽しみにしておるのだが）
（電車は苦手ですわ）

（吾輩は電車は楽しみですな。乗物を移れますからな。人から人へと、接触部分から乗り移り、ずいぶん遠くまで参れます。電動の乗物の中で人動乗物に乗り移り、電動乗物よりさらに遠くへの旅路）

＊

（電車にも地下鉄にも乗れず、面白くなかったよ）
（ご近所の様子が見られてよかったですわ）
（ほんと、久しぶりですものね。建物がみな高くなっていて、道路がみなきれいになっていて、お店の中が明るくなっていて）
（暗いのはこの青年だけ）
（セラヴィ）
（街中に漂う香りにはどうも慣れない。空気が悪い、気に悪い）
（車の多いこと）
（人も多いですこと、セミテリオと違ってにぎわってますわね）
（道を渡る時など恐ろしくて、生きた心地がいたしませんでした）
（ふふ、僕たち生きてはいないから）
（でも、ほら、気を失うと乗物から落ちてしまうから）
「ただいまぁ」
「お兄ちゃんお帰りなさい。お腹すいたぁ」
「あれっ、兄貴、帰る途中で弁当買ってくるって言ってなかったっけ」
「弁当も飽きたから。今日はコロッケ。あとは飯だけというわけにもいかないから、キャベツ買ってきた。宙、切れるかぁ」
「あったり前。シェフになりたいから高校行かないつもりなんだから。でもコロッケと飯とキャベツだけか。わかめのスープぐらい作るよ」
（シェフとかスープとか、私には分からない言葉だのっ）
（シェフってわたくしの国の言葉で頭ってことですが、何の頭になりたいのかしら。高等学校に行かないでなれる頭って）

（スープとは吾輩の国の言葉。汁のことですな）
（汁は、ぶたじるが一番だのっ）
（とんじると言うんだろ）
（虎之介殿、薩摩ではぶたじると申すのでございます）
（そうなんですか。日本語は難しいのですね）
（カテリーヌさん、お国によって言葉が違いますように、日本の中でもお国によって言葉が違いますもの。こちらに参りましてから、いろいろとわたくしも苦労いたしました）
（ポトフが懐かしいですわ）
（ポトフとはどのようなものでございましょう。お国のお料理なんでしょうね）
（いろいろと煮込む仏蘭西の料理です）
（吾輩はコーンスープが懐かしい。おっと、コーンとは唐黍のことですな）
（うわっ、砂糖の汁。とっても甘そう）
（いやいや、砂糖は砂糖黍からでして、唐黍とは緑の中が黄色くて、黄色い実がたくさんついておって）
（玉蜀黍のことですね。黄色い汁ですか。砂糖はお足しにならない）
（吾輩も日本語の難しさを感じてますな）
「そのかわり、コロッケは十個。九つ買ったら一つおまけしてくれた」
「今日も母さん帰ってこないのかなぁ」
「母さんは仕事が忙しいんだろ。僕はお米とぐよ。由佳は、後片付けをよろしく」
「ふ～ん、つまんないの」
「兄貴、母さんから連絡もらったのか」
「いや、推測推測」
（うわぁ。押すだけで火がつく竈。前のお散歩の時は、まだマッチで火を点けていたのに）
（おのこが台所に入る。料理をする、ふむ）

（ほう、ロバート殿のお国では男児は厨房に入るべからずですかな）
（いや、下々の者に任せて、我が輩の階級では、女も母も妹も料理はしませんでした。まだ奴隷のいた時代でして）
（わたくしもそうでした。でも彦さまはいたしましたのよ。鶏をさばいて鶏飯など、大層上手に。彦さまの鶏飯が懐かしゅうございます）
（うわぁ、この弟君、私より手際がいいわ）
（ユリちゃん、ごはん作れないのかい）
（私も、母は作りませんでしたし。辿りつけませんでしたお見合いのお相手の方々もそういうご家庭でしたわ）
（わたくしもそうでした。でも、日本に参りましてから、こちらの使用人たちはあちらの料理、できませんでしょ。ですから私が記憶を辿って、たいへんでした）
（かつおで出汁をとっている。おのこながらあっぱれあっぱれ）
（あら、このパリパリの小さいのがわかめなんですね。昔はわかめはぬるぬるしたものでしたが）
（昔もあったよ。乾物で。もっとでかかったけれど。仏蘭西や英吉利では使わないかな）
（なるとのわかめが美味だったのっ）
（なると、ですかな。渦巻き模様の）
（ロバートさんがご存じなんですか。東京では私がこちらに参ります前には見かけましたが、その前にはなかったと思いますがのっ）
（散歩の時に見たことがあるんですよ。蕎麦の中に入っていました。あれもわかめなんですかね）
（おじさん、それ違うよ。蕎麦に入っていたのは蒲鉾の仲間、わかめは海藻。鳴門は地名。渦巻き、うずしおで有名な所で、なると巻きはその渦巻きに似ているからですよ）
（日本語は難しいですな。いつまでたっても充分とは申せませぬ）
（ロバートさまがおっしゃるなんて、わたくしはどうしたらよいのでしょう）

（僕ね、帝大に入る勉強していた時、いつもそう思っていたよ。勉強してもしてもきりがないって。史学など、後で生まれた方が損するに決まっている。覚える事が増えて行く、なんてね）
（あちらの世界で終りではなかったですのっ。こちらに来てからも、新しいものがどんどん。世界もどんどん広くなって）
（あきらめてしまう方が多いのでしょうねぇ。好奇心旺盛なわたくしどもはまだ永らえておりますが）
（執着しないと飛ばされる、空気になって風に乗って）
（うわぁ、キャベツの切り方、とっても上手。この弟君、料理人になれますわね）
「由佳、今の内に宿題終わらせとけよ。八時からドラマ見るんだろう」
「うん、お母さん、いつ帰ってくるのかなぁ」
「電話ぐらいしてくれたっていいよね、兄貴、連絡貰ってないの」
「僕の携帯、切られているんだ」
「へぇ、兄貴、料金払わなかったの」
「母さんが払ってくれると思っていたから」
「お母さん、元気かなぁ」
「元気だと思うよ」
「今頃夕ごはん食べているかなぁ」
「たぶん」
（うわぁ、なんだか切ないですわ）
（目で見て鼻でかいで、でも喉を通らないからね）
（そうじゃなくて・・・こちらのご兄弟の置かれた状況が）
（そうですわね。おかわいそうに）
（喉を通らない、だから出るものもない。それもまた楽だのっ）
（だんなさ～、またお話をそちらに持って行かれるのですね）

＊

「おはよう、妹さんと弟さんはもう学校に行かれたようで、えぇと、外で立ち話もなんだから、中に入ってもいいかな」
「あっ、はい、どうぞ。あっ、それから、おはようございます」
「それじゃあがりますよ」
「あっ、はい、どうぞ。あのぉ、どうして四人も」
「私は、昨日学校の外で会ったからわかってるよね。桜山署刑事課大谷警部補です。これが、同じく桜山署刑事課の国井巡査部長、それと、生活安全課の岡崎巡査部長、こちらは桜山区役所福祉課の早川さんです」
「君には立ち会ってもらわなきゃならないけれど、こちらも同僚、国井に立ち会ってもらう必要があってね。岡崎は少年の担当なんで、一応君のために、それと早川さんには君の今後の生活のこともあるから、相談先として」
「あっ、はい」
「早速家宅捜査と行きたいのだけれど、まずは最初に説明しましょう。君のお母さんは、お父さんとご離婚なさって、その後も、お父さんと一緒に窃盗、つまり泥棒をしていたという疑いがかけられています。一昨日検察庁取り調べも行われ、お母さんは正直に話されていて、窃盗を認めています。それで、お母さんの話によると、この家に、窃盗した日時や物品の記録、まだ換金していない貴金属も一部隠してあるとのことで、その場所も聞いているので、そのための家宅捜査です。君にとってもショックなことだろうから、少年事件担当で少年に慣れている岡崎にも立ち会ってもらうことにしました。それと、お母さんは、居住地がはっきりしているから、早目に帰宅させようと思っていますが、それにしても、君たち、特に小中学生の弟さんや妹さんのこともあるので、今後の生活をどうするか相談もしなければならないので、区役所福祉課の早川さんにもいらしていただいたというわけです。早川さんとの相談は、家宅捜査の後で、私たち警察官が帰ったあとでゆっくりお願いしたいのですが、それで、いいかな、早川さん、それでいいですか」

「あっ、はい」
「はい、そうしましょう」
（うわぁ、すごい話なのね）
（んだもしたん）
（おかわいそうに）
（面白そうだね。推理も半分当たったし）
（虎之助どのは悪趣味ですわ）
（吾輩の時もこのように同僚たちにあたってくれたのだろうか）
（少年のことだから女性なんですね）
（少年事件って女の子も扱うからではないでしょうか）
（女の子も事件起こす時代なんですか、恐ろしい）
（少年って男の子のことだけじゃないんですか。日本語って難しいですわ）
（日本語はややこしいですな。昔、兄弟に会わせると言われて、姉や妹に挨拶されたことがありましたな。いつになったら兄や弟が出てくるのかと待ちました）
（警察の中に生活安全課などというものがあるのかのっ、私の頃にはなかったが、今の世の中、生活の安全を守る警察なのかのっ）
（今の世の中、困った人を助けるようにできているんですね）
（昔なら、親が泥棒だとこどもは・・・）
（あらぁ、ちゃんとご近所で助け合いしてましたよ）
（肩身の狭い思いをして、学校にも行けなくて）
（日本では泥棒には入れ墨を入れたそうな）
（ほぅ、ロバート殿、よくご存じだのっ。でもあれは明治には廃止になってのっ。それどころか刺青はえ～と、明治の五年でしたかのっ、泥棒に入れるどころか、刺青を禁止したんですのっ。野蛮な風習だとして、北のアイヌと南の琉球では、署内が逮捕者であふれて困ったそうな）
（何が野蛮になるかは時代次第、上に立つ者次第ってことですわ。私の国も夫の国も欧羅巴以外は野蛮な国だと教えられましたし）

（亜米利加もでしたね。新大陸の国々は野蛮な国、二流国扱いでしたな。日本でこそ、明治以前から上へも置かぬもてなしをされましたが）

（ペルリの黒船が怖かったからのっ。薩摩は英吉利に腹立てたのっ）

「あの、ひとつだけ、先に、あのぉ、母にはいつ会えますか」

「う～ん、お母さんには、早く君と会った方がいいと言っているんだけれど、こどもたちにあわせる顔がないって。今後の生活のことなど、いろいろ相談しなくちゃいけないんだろうけれど、とても恥ずかしがってね」

「はい。僕も、弟や妹にどう言ったらいいかわからなくて」

「それで、まぁ、早川さんと岡崎とも、まず相談してください。え～と、お母さんが言っていたのは、お母さんが使っている部屋の押し入れの布団の下の乾燥マットの下にノートと水枕があって、中に盗品が入っているとのことでした。君にはそれを出す時に立ち会ってもらいたいのです」

「あっ、はい、わかりました。母の部屋はこちらです。あの、水枕ってなんですか」

（水枕、私も知らぬ。マットもノートもわからぬのっ）

（だんなさーは・・・この世の最期の頃に使われました。まだ珍しい物でしたしお高かったんですが、少しでも気持ちよろしいかと、けれど水が漏れましてね、手拭いで何重にも巻いて、それでも、箱枕と違って柔らかいので頭が落ち着かないようで、直に使用をやめたように覚えておりますわ。他の皆様は、水枕はご存じでしょう。）

（私、使いましたわ。私もこの世の最期に）

「国井、手袋はめて」

「水枕、君、知らないのかい。熱出した時に使うの」

「アイスノンですか」

（アイスノンって何でしょう）

（吾輩には理解できませぬ。アイスは我が国の言葉で氷、ノンはカテリーヌさんのお国の言葉、合わせて氷が無いとなるが）

「いや、アイスノンじゃなくて、水を入れて冷やす枕なんだが」
「氷じゃなくてですか。水で冷えるんですか」
「まぁ、出てくればわかると思うよ。君の世代になると水枕も知らないのか」
「大谷さん、僕も知りません。僕は何を探しているのでしょうかね」
「ブルータスお前もか」
（これならわかりますわ）
（吾輩もじゃ）
（僕もわかるよ）
（あら、さすが虎ちゃん）
（わたくしどもにはさっぱり）
（ぶるぅたすとは、虎之介どの、何ぞや）
（人の名前です。二千年以上も前のね。僕たちでも会えるかどうか。もう雲散霧消の世界ですよね。その人がカエサルという皇帝を殺した時に、皇帝が言った言葉ということを沙翁が書いたんです）
（虎ちゃん、ややこしいです）
（沙翁とはシェークスピアのことである。何ゆえに日本人は皆漢字にしたがるのか。ちなみに、沙翁は四百年ほど前の、カテリーヌさんの夫君の祖国英吉利での劇作家であるぞ）
（下克上だのっ。古今東西）
「押入れ、開けさせてもらいますよ」
「あっ、はい」
（ねぇ、この坊や、あっ、はい、ばかりですわね）
（動転しているのっ）
（そりゃそうですわよ）
（面白い、興味深い。僕、こういうの初体験。わくわくしちゃう）
（警察沙汰なんて、恐ろしいですわ。初体験いたしたくもないですわ）
（虎ちゃん、私たちのお仲間にも、生前は警察官だった方がいらっしゃいますわ。そのお方に色々お話をお伺いなさいませ）

（どの方がそうなの）
（カテリーヌさん、どうして）
（あっ、ごめんなさい）
（えっ、なに、誰なの）
（わっはっはっ。カテリーヌさん、どうしてご存じなのですかのっ。話したことありましたかのっ）
（えっ、おじいちゃんがそうなの）
（ふむ。まぁその話はおいおい。今はこちらを見ていたいのでのっ）
「国井、布団、丁寧に扱えよ」
「はいっ」
「大谷さん、これじゃないですか」
「そのようだが、上からそっと一枚ずつおろして」
「これですね」
「国井、写真が先だ。ほら、カメラ」
（写真機ですな。小さいですな。これが文化の発達というものなのですな。吾輩の頃のカメラはこの数倍はありましたな）
（便利な世の中になったもんだのっ。私の頃にはどこから押収したかを文章で表わさねばなりませんでした）
（だんなさ～よくおっしゃってましたわね。警察官たるもの文章力が欠かせぬと）
（そう、それと達筆であること。達筆でありながら読める字であること、これが難しい）
「君、ここから出てきたということ、それと中身確認して、今リスト作るから、それと、この書類に署名捺印もね」
（リストとは一覧表のことですな）
「あっ、はい。えぇと、はんこうは、家のでいいんですか」
「あぁ、シャチハタじゃなければ」
「シャチハタなら玄関に置いてありますが、シャチハタ以外のは・・・」
「じゃぁ、う～ん、拇印でもいいかな」

「あっ、はい」
「じゃぁこれで」
「赤くないんですね」
「うん、これだと指があまり汚れないでしょ」
（シャチハタってなんでしょうか）
（印鑑と関係あるようだが、シャチとは鯱のことかのっ、名古屋城のかのっ。その旗かのっ。それにこの黒いの、これは面白い。私の頃にはなかったのっ。指が汚れないというのは良い。指についた朱肉はなかなか落ちないからのっ）
「国井、写真終わったら、部屋の間取りと押入れの計測、図面作成して」
「はいっ」
「おいっ、何しているんだ」
「いえ、あの、計測に邪魔なので、このゴキブリホイホイをどけた方がいいかと」
（ごきぶりほいほいって、これ、何でしょう）
（紙でできているようですね。なんだかおもちゃのおうちみたい）
（ゴキブリって）
（ウ～ララ）
「わっ」
（ゥワオ）

（嗚呼、至極残念。現代の警察をもっと見ていたかったのにのっ）
（すみません）
（カテリーヌさんがお謝りになることございませんわ）
（でも私があそこで叫ばなければ）
（いえ、カテリーヌさんが叫ばれたからではないと思いますわ）
（吾輩思うに、あの国井という巡査部長が叫んだからではないかね）
（そうですわ。男の方も、しかも警察官がごきぶりを怖がるなんて、今の時代は殿方もひ弱なんですわね。私など手でたたきつぶしてお

りましたわ）

（ユリさんもそうでしたの。わたくしも、薩摩おご女たるもの、ゴキブリなどに悲鳴をあげるなどはしたない。関東のごきぶりは小さいですしね、黒いですけれど）

（すみません。私、てっきりおもちゃのおうちだと思っておりましたので。中をのぞいてみましたら黒いものが動いておりましたので）

（あらぁ、虎ちゃんがいないのかしら）

（ほう、もしかすると、どなたかに乗り換えできたのかのっ）

（そういえば、初体験に興味津津でしたものね）

（若いから機敏なんですな）

（まぁその内、戻ってきたら土産話を聞かせてもらおう）

（そうですわね。あの青年がまたこの辺りを通るかもしれませんし。後日談もその内）

（ほんとに、私が叫んでしまったばかりに、申し訳ございませんでしたわ）

第二話　終わり

第二話　セミテリオでため息（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
彦衛門さまやマサさまとお仲間の世界お楽しみいただけましたなら幸いです。
まだまだ続きます。

第三話　セミテリオの国際？井戸端会議（前書き）

セミテリオー霊園で、いつもの面々が暇にまかせて井戸端会議

第三話　セミテリオの国際？井戸端会議

第三話　セミテリオの国際？井戸端会議

（烏・・・）
（が鳴いておるかのっ。鳴いてないぞっ）
（いえ、はい、烏も鳴かないですわ、と申し上げようと思っておりましたのに、だんなさ～はせっかちでらっしゃる）
（彦衛門さま、この世界での時間は永遠ですわ。ごゆるりと）
（気が急いてのっ。生前からの癖と申すかのっ）
（亡くなるのまでせっかちで、わたくしより三十二年も先でしたものね。わたくしは昭和の御代まで永らえました。だんなさ～の祥月命日にこちらに参る度に烏が鳴いてました）
（烏って、どうして墓場に多いのでしょう）
（ユリさんはもう火葬でしたか。私は火葬でしたが、だんなさ～は土葬でしたの。土葬ですと、烏が来るんですよ。ですから、烏は死を知らせる鳥のように思われてましたの。黒いですしね）
（コルネイユは、欧羅巴ではあまり死とつながってませんでしたわ。聖フランシスコさまは腕にたしか烏もとまらせたのではなかったかしら。それに聖ベネディクトさまも、烏に助けられたように教わりましたわ）
（日本にもヤタガラスとかあったように吾輩は記憶しておるが）
（八咫烏だのっ。ロバート殿、おくわしいのっ）
（あれは関西のどこかので、金鶏とは別物と教わりました）
（金鶏は神武天皇が日向の国を出る時に案内役だったの。我が薩摩の近く）
（ロバート殿、本当にお詳しくていらっしゃる）
（鳥は人間と関わっているんですね。欧羅巴でもこちらでも）
（身近な生き物ですものね）

（金鶏は鳶ですわよね）
（♪と～べと～べとんび空高く、な～けなけとんび青空に♪　でしたわね）
（マサ、また歌かのっ）
（はい、これも朝子がよく歌っておりましたわ。ユリさんごぞんじかしら）
（いえ、残念ですけれど、烏の歌もぞんじませんし）
（ごめんなさいね。ユリさんお若いから、つい、でも、わたくしより先にこちらにいらっしゃったのでしたものね）
（今日は風が強いから、烏も鳶も飛ばないのっ）
（鳶は、最近はこのあたりでは見かけませんわね）
（東京市だったころには、よくいましたわ。婆やが家の前でお豆腐屋さんからあぶらあげを買う時、いつも上を注意していました）
（まぁ、どうしてでしょう）
（カテリーヌさん、あぶらあげもご存じではないでしょう。お豆腐を揚げたものですわ。鳶の好物だそうで、上から急に舞い降りてきてさらうそうです）
（怖そうですわ。あっ、あぶらあげは存じております。でも、あぶらあげがお好きなのはお狐さんではなくて）
（面白い。カテリーヌさんが狐におを付けるなんて）
（女中がお狐さんって申してましたので。女中は、私にもお狐さんにあぶらあげをお供えするようにと。でも、わたくしカトリックでございしょ。でも、女中の信仰を否定もできず、女中に余分にあぶらあげを買わせてお供えさせましたの。あのあぶらあげ、本当にお狐さんが召し上がってらしたのでしょうか。翌日になりますと消えていましたが）
（ははは頭の黒いお狐さまかの）
（頭が黒い狐っているんですか。ユリ見てみたいです）
（ユリちゃん、なに、人間のことさ）
（あらっ。虎ちゃん、お帰りなさい。楽しまれたかしら）

（はい、存分に。またその内、みなさまにご披露いたしましょう。我が冒険談）

（貴女は、心がお広い方ですな。キリスト教は一神教。他の神は異端。他の考え方ですら容認できぬ者が多い中、ましてや宗教になると理屈より感情。容認できぬことが多いのですがな。我が亜米利加でも南米でも、くろんぼや土人はキリスト教の神を信仰することを知らぬ以上、魂がないのであり、よってこれを人間とは認めぬ、いや、それでも神が造られたものであるから、先に神を知った我ら進んだ西洋人が土人や黒人の魂を救わねばならぬ、などと喧々諤々、羅馬の教皇まで巻き込んで議論されたものが）

（まぁ、そうだったんですか。わたくし存じませんでした。魂が無い・・・）

（わたくしたち、魂、霊ですのにね。セミテリオは日本語では霊園とおっしゃるのでしょう）

（ユリね、その言葉好きなの。だって霊園、私たち霊の園なんですものね）

（考えてみたら不思議だね、あちらの世には、僕もあちらにいた頃はそうだったけどさ、目に見えないから非科学的だ、よって霊などない、ってそう思う人が多いのに、霊園って呼ぶなんてね）

（風が強いと、鳥が飛ばぬ。人も通らぬ。妙な音のみ風に運ばれてくる）

（ああ、あれ、風の流れで時々聞こえる、あのぶつぶつぶつぶつ、気の滅入る様な、耳をすましたくなくなる独り言）

（頑固爺の声ですわね）

（頑固爺、とは、カテリーヌさんらしくないおっしゃり様）

（虎さまがいつもそう呼んでらっしゃいますわ）

（貴女はおよしなさい。虎之介殿のは若気の至りの乱れた日本語ですからな。貴女が模範とすべき日本語はマサさまとユリさまのでござる）

（いえ、ロバート殿、わたくしのは安政生まれの古い薩摩なまりで

ございます）
（あら、ユリのも、明治とはいえ、東京なまりですもの。それに、父は越後ですし）
（頑固爺様とお呼びすればよろしいのでしょうか）
（あっはっは。爺に様を付けても、他人様を頑固と呼ぶことは構わぬのかのっ）
（でも、頑固という言葉、他にどういう日本語があるのかしら）
（意地っ張り、強情、きかん坊、一刻者・・・たしかにどれを取ってもあまり良い響きではないのっ、う～ん、一徹、これならよかろうのっ）
（では、一徹御爺さま、これでしたらどうでしょう）
（カテリーヌさん、そういうことにいたしましょう）
（えっ、でも、可笑しいでしょうか。ユリさまはこういう言葉をお使いになりませんか）
（はい、あっ、いいえ、使わないですけれど、面白いです。ここだけのお話ですものね。私たちの間だけではね）
（それで、一徹御爺さまは、どうして頑固爺、いえ、一徹なんでしょう）
（あちらの世で偉かったからでしょう）
（偉い・・・とは、地位の高い人物のことですな。たとえば徳川将軍や明治天皇。我が国の場合ならリンカーン大統領、ワシントン大統領、リー将軍ですな。一徹殿も左様なお方ですかな）
（リンコルン大統領の名は耳にしたことあるのっ。ワシントンも大統領ということですの。それで、最後のリー将軍というのは、徳川将軍家の様に、亜米利加にも天皇と将軍のように、大統領と将軍がいらっしゃるのかのっ）
（彦衛門殿、それはちと違いまする。吾輩の国では一番上にいるのが大統領で、大統領の下で軍を指揮するのが将軍でして。リー将軍は、南軍の将軍でして、北軍と戦った英雄でござる）
（ならば、我が国の江戸時代でも明治でも、そういうことでしたの。

いや、明治以前ならば、将軍の上に天皇様、明治の世ですと、将軍の上にいるのは陸軍大臣であり、いや、江戸時代ですと・・・実際のところ徳川家の世であって、いや、末期は我が薩摩や長州、土佐、肥前が強かったしの、その後は皇室で、今のあちらの世では総理大臣かのっ。いや、やはり天皇様かのっ。それで、ロバート殿、南軍とおっしゃるのは、我が国の少し前までの南町奉行と北町奉行のようなものかのっ。おっと、南町奉行と北町奉行は戦いはせなんだ。奉行所は裁く所。北軍とは、別の国の軍隊ですかのっ）

（おのこのなさることはややこしいですわね。みなさんが安寧に暮らせられればそれでよろしいのに、ねぇカテリーヌさん、ユリさん、そう思いませんか）

（ほんと、男の方って、すぐ喧嘩なさるし、すぐ戦争だって勇ましいこと）

（私の国にも大統領がおりますわ。私の曽祖母さまの頃でしたらナポレオン皇帝でした。偉い方とおっしゃる方もいらっしゃれば、自分勝手だとおっしゃる方もいらっしゃいましたわ）

（ユリ、わからなくなります。大統領様と皇帝様と王様と天皇様と首相さまと将軍様と。男の方ってそういうのお好きなんでしょうか）

（あちらの世界では、最近はおごじょも好きだそうですわ）

（彦衛門殿、南軍も北軍も亜米利加国内の軍でして、日本の方に説明するのにそういう表現をするのでして、えぇと、南軍というのは亜米利加南部の奴隷制を支持する州の軍隊でして、北軍というのは奴隷制に反対する北の州の軍隊でして）

（奴隷・・・まぁおぞましい。亜米利加には奴隷がいたんですか、おかわいそうに）

（人が人を動物のように使うなんて・・・でも、そういえば夫が申してましたわ。印度は英国のもので、印度人は英国人のもの同様と）

（貴女の国もあちらこちらに進出し、弱い国々を支配下においたのですぞ。然様な国々では、土人はやはり奴隷同然。もっとも、亜米利加ではわざわざ暗黒の地から黒人を連れてきて奴隷労働させたの

ですが、いや、英国も、印度人を連れてきてましたな）
（あのぉ、先ほどもおっしゃってらした、土人ってなんでしょうか。土でできた人のことでしょうか）
（その土地の人ということでしょうな。だが、亜米利加土人とか英国土人とか仏蘭西土人、日本土人とは言いませぬな）
（黒人ってくろんぼさんのことですか。ユリ怖い）
（そう。ユリさんの頃には日本ではほとんど見られなかったでしょう。怖いですか。しかしながら、我が輩の調べたところによると、時は戦国、信長公の従僕に弥介という名のくろんぼがおったそうな。くろんぼも、慣れれば同じ人間。吾輩は黒人の乳母に育てられたのでござる。慣れぬものを怖がるのは人間の常のようですがな）
（最近はあちらの世界の日本にはいろいろな肌の方がいらっしゃいますわね。白い方、黒い方、間の色の方。あら、でも白と黒を混ぜたら、灰人にはなりませんわね。不思議ですこと。髪の色も目の色もいろいろ。昔の大和のおなごはまっすぐな髪が自慢でしたのに、近頃の日本のおなごは他国の方々のように縮れさせてますわね。わたくしの頃には縮れ毛は嫌がられました。時代は変わるものですわ）
（ふむ。そうえいば、私が幼い頃には、日本が外国に乗っ取られると心配し、攘夷運動華やかでしたの。それでロバート殿、南と北とどちらが勝ったのかのっ）
（北でござる）
（それでは奴隷はいなくなったのですか。あらっ、でも、どうしてリー将軍が偉い人なんですか。負けた側の将軍でしたのに）
（石川五右衛門が大泥棒でも、人気があるのと同じかしら）
（ユリさん、それは違います。リー将軍は、北軍との戦には負けましたが、人格高潔、大学の学長にもなったのでござる。この国にも判官贔屓という言葉がありますな。負けた義経に人気がある）
（鼠小僧次郎吉というのもあるよ）
（義賊ですな。次郎吉殿とはちと違う）
（ほう～）

（それに、奴隷はいなくなったわけではござらぬ。奴隷という立場が無くなって、かえって食べるにも事欠いて、北部の工場で働ける者もいた一方、食事と居所の代わりに、そのまま南で暮らし続けた者も多かったのでござる。実は、吾輩の家にも元奴隷がおって、その奴隷が作るコーンスープが美味しかったのでござる）

（この前お話になってらした唐黍の汁ですね。あちらの世におりました時に味わいたかったですわ。こちらに来てしまうと、見えても嗅げても味わえませんもの）

（ついでに申すなら、吾輩のロバートというのも、リー将軍の名前にちなんでおる）

（ほう～。それはそれは。それほどに愛される方だったのかの。だがロバート殿は軍人ではなかったのっ）

（はい。我が輩は外交官として来日いたしました。日本のことをいろいろ知るにつれて、次の任地には参りたくなく、そのまま居ついてしまったのですな）

（ロバートさまのお話が面白いので、忘れておりましたのに、また耳に入ってまいりましたわ。ぶつぶつぶつぶつ、一徹御爺さまのお声が）

（こちらにお仲間にいらっしゃればよろしいのに）

（うわぁ、ユリ、ちょっと苦手です）

（ユリさん、くろんぼと同じですよ。慣れれば怖くなくなる。まずは相手を知ることから。楽しくなりますよ。吾輩が日本に居ついてしまったように、未知のものはまず知りたいと思えば怖くなくなります）

（わたしたちやわたしたちのこちらの世界が怖がられているのも、あちらの方々はこちらを知らないから怖いのかもしれませんわ）

（そうですわね。幽霊、おばけ、天国、地獄、色々と）

（あちらの世界にいる間に、こちらの世界を知ろうとしたってそりゃ無理だのっ）

（知りたくて、知りたくて、こちらの世界にいらした方に再会した

くて、色々と試されて、という方もいらっしゃいますわ）
（非科学的だと、目に見えないものは信じない方々に批判されますしね）
（天国だ、幸せな所に行けると思って来るのと、地獄に行かされると思って来るのでは、後者の方が楽ですな）
（とはおっしゃるものの、地獄に行かされると思ってあちらの世界で生きている者は、他人を不幸にしているわけですの。その場合、不幸な人間は極楽に行けるものと思い込んでいるのだろうかのっ。不幸と幸福は紙一重というところかのっ）
（こちらの世界が極楽か地獄かは、あちらの世界での生き様だけではなかろうし）
（一徹御爺さまは、どちらなのでしょう）
（ぶつぶつぶつぶつ、文句があるということは、こちらの世界では不幸ということですな）
（あちらの世界ではどうだったのでしょうか。マサさま、何かご存じのご様子）
（えっ、あっ、はい、いいえ、ちょっと奥さまとお話いたしたことがございますの）
（一徹御爺さまの奥さま．．．とんとお見かけいたしませんな）
（どうしましょう。うっかり口を開いてしまいました。噂話は女の特権とは申しましても、苦手でございます）
（井戸端会議ははしたない女のすることですよ、と母がよく申しておりましたわ。ユリはね、好きでしたの。で、母に隠れて裏通りの長屋の奥に参りますと、婆やに連れ戻されまして、母にお説教されました。でも、構わないんじゃございませんこと。私たちの世界ではどなたかに乗せて頂いて楽しむか、長話しかございませんもの）
（井戸端会議とは井戸の周りでご婦人方が会議をするということなのでしょうか）
（カテリーヌさんは上流のご出身ですからご存じないようでござる。炊事や洗濯、家事には、おっと、火事にも必要。いや、家事には水

がつきもので。女が家事をする下々の暮らしでは水場に女が集まる。そこでなさる噂話のことですな）

（さすがロバート殿、お詳しい。だが、私も、藩の演武館にて剣柔弓道の後、汗を流しによく井戸端で水を使いましたの。確かに、おごじょは噂話が好きですのっ）

（おごじょ・・・先ほどからおっしゃってるのは、おなごのことですかな）

（さよう。おう、ロバート殿でも知らぬ言葉がございましたのっ。薩摩言葉でおなごのことをおごじょと申すのだの）

（日本の方言は難しいですわ）

（マサさま、井戸端会議、霊園会議にしてしまいましょうよ。ユリなんだかわくわくしてまいりましたわ）

（ええ、ええと、どこから始めましょうか。夢さまは二年ほど前にこちらにいらしたのですけれど、狭いお墓は嫌です、やっと自由になれたんですもの、と、お子さま方がお参りにいらっしゃる度にお乗りになってあちこちご旅行ばかりなさってらっしゃるのです。一徹さまが二年遅れでこちらにいらしても、夢さまはいつもお留守で。それでぶつぶつ）

（お子さま方がお参りにいらっしゃる時に、一徹御爺さまも夢さまとご同行なさればいいのに）

（一徹殿は、出不精のようですのっ）

（だんなさ～とは違うようですわね。だんなさ～はわたくしが出かけるときにはほとんどいつもわたくしとご一緒ですものね）

（私はマサとは仲睦まじいと自認しておるのでの。おまえ百まで、わしゃ九十九まで、共に白髪のはえるまで、だのっ）

（だんなさ～、何をおっしゃるのです。だんなさ～は六十一、わたくしは八十五、共にどころかわたくしのみ白髪。早々とわたくしをおいてこちらにいらっしゃっておいて）

（すまんのっ。私も白髪になってみるか）

（どうだっ。白髪を思い浮かべたのだがのっ。これで共白髪）

（あらっ、やはりだんなさ～は黒髪がお似合い）
（気の我ら、自由気ままの変貌自在、とはいえ、やはり元のお姿がお似合いですな）
（夢さまがお出かけなさろうとすると、一徹さまは、おまえはそうやってすぐにほいほとしっぽを振って出て行く、若い者とどこぞにいって何が楽しいんだ、浅はかな、おまえはそもそもいつもそうやって俺の言うことを聞かない、そもそもその態度は何だ、口を閉じていれば、耳を閉じていればいいというのか、耳をよぉくかっぽじって聞くがよい。おい、俺の言うことを聞け、聞いているのか、誰がおまえを養ってやっていると思っているんだ、この墓だっておれの父が買ったからお前はここに入れているんじゃないか、なんだその目つきは、殴られたいのか。この調子で延々と。夢さまがお気の毒になります。ですから、夢さまは、お留守ばかり。一徹さまのお傍にはいらっしゃりたくないようで）
（ほんと、お気の毒ですわ。連れ添うって難しいんですね。ご夫婦ってみなマサさまのところみたいだと思っておりました。私の両親も仲好しですし、今は仲良くこちらで静かですけれど）
（彦衛門殿、たしかそういうのを小言幸兵衛と申すのでは）
（そうそう、ほんとロバート殿はお詳しい）
（落語にあるそうですな。庶民のものだそうで、一度も耳にしたことはないのですが、一度ぜひどなたかあちらの世界で連れて行っていただきたいものですな。寄席という処に）
（でも、難しいのではございませんこと。落語って面白いものなのでしょう。お笑いになった途端にこちらに戻されてしまいますわ）
（笑いは生命の元。笑いの無い生活など無味乾燥。たしかにこちらに戻されると話が中途半端になるかもしれませんな。できるだけ笑わないで、最後まで我慢する）
（それではお楽しみになれませんわ）
（う～ん、難しい）
（夢さま、一徹さまがこちらにいらっしゃるまでは、一人身を楽し

んでいらしたのに。わたくしともよくおしゃべりいたしましたのよ）
（ほう。私は聞いていなかったのかのっ）
（だんなさ～は、いつもおごじょのお話に口をはさまずそのままお昼寝でしたもの）
（あのころの夢さまは、生き生きとしてらっしゃった）
（生き生きとは、ははは、こちらの世界で生き生きね）
（あちらの世界ではさぞかし生き生きできなかったのでしょうね）
（一徹さまがいらしてからは、ほとんどご旅行で、たまに戻ってらっしゃっても、わたくわたくしとお話なさろうとすると、一徹さまが横からぶつぶつぶつぶつでしたから、私も一徹さまのお言葉を耳にするのは辛うございますし）
（ユリ、やっぱり苦手です）
（かといって、転居は難しい我ら、つき合わざるを得ない辛さ）
（あちらの世界でしたら、伴侶選びは慎重に、と良い教訓になったかもしれませんが、こちらの世界ではね。わたくしたちの頃でしたら、釣り合った家柄やお相手の人品骨柄もそれなりに伝わってまいりましたし、狭い付き合いの中でお相手を探しておりましたものね、そう無茶な方とのご縁はなかったのかもしれませんわね。夢さまの頃は、最後の大戦の後でしたから、お相手を選ぶのもかなり自由になってましたもの。かえって難しいのかもしれませんね。恋する眼にはあばたもえくぼ。子供ができてしまえば、どれほど辛くてもなかなか別れるのはね、かえって江戸の頃の、いえ、大戦前の、親が選ぶということで親も責任を負い、しかも財産を持って嫁いだ時代の方がいざという時に別れ易かったのかもしれませんわね）
（ユリもね、嫁ぐ時には婆やが一緒のはずでしたの）
（ユリさん、私もそうでしたのよ。ロバートに嫁ぐ時にはね、英国迄は付き添ってくれたのですが、でも、日本に参ります前に、私の婆やは、どうしても船には乗りたくない、男が裸でとっくみあう野蛮な東洋の国など恐ろしくてと、何が何でも暇をいただきたいと言われました）

（わっはっはっ、その婆やさんは、さぞかし相撲の錦絵か浮世絵でも目にされ怖気づいたのでしょうな。今、一瞬ぎくりといたしました。カテリーヌさんの夫君は私と同名なんでしたな）

（私のロバートは濃い茶色の髪、濃い緑の目、息子ロビンが受け継ぎました。ロバートさまの金髪や青い目ではございませんの）

（興味深いのっ。どうして異人は髪や目の色が様々なのかのっ）

（ユリね、初めて青い目を見た時にはね、目の見えない方がびーどろを目玉のかわりに入れてらっしゃるのだと、おかわいそうにと思ったの。婆やも一緒になって、ラムネの玉がうまく外せたら、差し上げましょうなんて申してましたし。そしたら、青いびーどろが動いたので、腰が抜けそうになりました）

（私は、こちらの世界に来てからだが、黒人がここを散歩するのを見て、何か仮装大会があって、墨を顔や手に塗りたくっているのだと、仰天しましたの）

（いや、その墨を顔や手に塗りたくった白人というのもおったのですな。丁度我が輩が来日した頃には、亜米利加の水兵がそういう格好で新しい音楽を横浜で披露しておりましてな。しかし、セミテリオを散歩していたというのは、たぶん先の大戦後、占領時代のことであろうか）

（白人が黒い墨を塗っても灰色にはなりませんわね。白と黒をあわせても。肌色を肌の色という意味だと思っておりましたが、どの色になるのかしら。髪の色も、最近では黒白金銀赤に茶、緑や紫も目にいたしますわ）

（ねぇ、みなさま、折角の気の存在の私たちですもの、セミテリオ仮装大会などいかがですか）

（ユリちゃん、気をしっかり持ち続けないと、すぐに元の姿に戻ってしまうよ）

（わたくしは、日本に参りました当初は大層困りましたわ。皆さん黒髪黒眼、肌の色もあまり差がなく、異なるのは背丈と細いか太いかでしたから、みなさんが同じに見えてしまい、女中たちの名前や

顔を覚えるのがとてもたいへんでした）

（カテリーヌさんもでしたか。吾輩もそうでしたな。まだ写真機が普及していなかった当時の日本で、下手人の人相書きがどれを見ても同じに見えました）

（ほう、そんなもんですかのっ。あの人相書きは江戸以前からの慣れでして、高札に書かれる内容で結構私達には通じたのだがの。それにしても、どうしていろいろな髪や目や肌の種類があるのだろうのっ）

（だんなさ～、その内、ご隠居さまが戻ってらしたら、新しい知識をいろいろ教えてくださるかもしれませんわ。その時まで気長に待ちましょう。気だけのわたくし達ですもの）

（ご隠居様は森鴎外の後輩だそうで、いまだに好奇心盛んだからのっ）

（森鴎外って、小説を書かれた方ですわね）

（小説も書かれましたが、軍にもいらした。お医者さまだったのですよ）

（器用な御仁ですな）

（あらっ、そういえば夢さまがおっしゃってましたわ。え～と、頑固、じゃなくて一徹さまもお医者さまだそうですよ）

（ご隠居さまにお友達ができそうですわ）

（カテリーヌさん、それはちょっと難しいかもしれませんわよ。ご隠居様は好奇心旺盛であちらこちらすぐお出かけになりますけれど、頑固、いえ一徹さまは、ねっ、ぶつぶつぶつぶつの方で、お出かけにならないようですから）

（うふふ、なんだかゆり、判ってきました。夢さまも、一徹さまではなくて、ご隠居さまとご一緒になれば、気の合う者どうしでしたのにね）

（縁は異なもの奇なもの、気の我々は気楽な稼業、乗って旅してなんぼのもの。ご隠居殿は、新しいものは何でも好き。好奇心旺盛。一方頑固、いや、一徹殿は、つまり頑固なわけで、変わらない、い

え変われない、融通が利かない、これが違いなんですかな）
（あっ、なぁるほど。一徹さまは、妻女はこうあるべきもの、世の中はこうあるべきもの、って決まっているんですね。だから、その決まりから外れたものは、みな苦手。あってはならないものってことになってしまうんですね）
（うわぁ、カテリーヌさんの説明、わかりやすいです。でも、ユリ、そんなの耐えられないです。だって、それって、だめだめだめだめ、あれもだめ、これもだめ、何をしてもだめなんでしょ。夢さまはよく我慢できたんですね。あっそうか、だから、こちらにいらしてからは我慢なんて無し。だから一徹さまは我慢できなくてぶつぶつぶつぶつ）
（連れ添ったら、互いに我慢することは多いものだのっ）
（わたくし、たくさん我慢いたしました）
（私もですのっ）
（それがご夫婦というものではないでしょうか）
（カテリーヌさん、我輩も貴方と同意見ですな）
（ご隠居様のところは、奥様はいかがお過ごしなのでしょうか、お見かけいたしませんわ）
（ユリ、知ってます。ハナ様でしょ。ハナ様は・・・とってもお堅いの。あらっ、もしかしてやはり一徹様かもしれません）
（女の一徹ですかのっ、おお怖）
（だんなさ～、女が一徹で何かいけませんかしらっ）
（そうですわ。男が優しくたってかまわないのと同じですわよ）
（カテリーヌさん、マサさま、あちらの世界の時から今のような、なんと申しましょうかお強かったのですかな）
（いえいえ、わたくしも昔はいわゆる女らしい、あるべきと言われておりました姿にとらわれておりました）
（ユリもそうでした。立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花のように、美しくあれ、しとやかであれ、親に口答えするな、嫁しては夫に従え等々しつけられましたわ。でも、こちらに参りましてから、

あちらの今の世界の方々を目にして、何もそういう考え方にとらわれなくてもいいって、まして気なんですもの。気ままにね）

（でも、あちらの世界で生きておりました頃には、決められたことに従って生きていれば間違いないと思っておりました）

（自分で考えなくてすむから、楽は楽なんだよ。けれど、抑えて抑えて、男でも辛かったからましてや女性陣には辛いことだったのかな）

（そうですわね）

（そうでございますわよ。ハナさまは、一徹。遊ぶなどもってのほか。墓にはじっとしているもの。女は外を出歩かないもの。そういう世間的には理想的嫁女でいるのを置いてほっつき歩く好奇心旺盛なご隠居さまが腹立たしいそうで）

（お呼びかなぁ）

（あらぁ、噂をすれば影、元々、気の私たちには影などございませんが）

（またハナが文句言ってましたかぁ）

（あらっ、申し訳ございません。ハナ様は何もお話になってらっしゃいません）

（ごめんなさい、ユリがついつい、噂話をしてしまいました）

（井戸端会議にうわさ話はつきものさ）

（今聞こえたのですが、立てば芍薬ってのは、漢方の薬のどれを摂ればよいかという説もごじゃるのですよ）

（さすがお医者さま）

（ハナが腹立てたら芍薬を煎じるとか、効果のほどは知りませぬが、試したこともないが、ましてや今ではハナも気の存在。腹を立てるとぷんぷん立腹気分が漂うのじゃが）

（ハナさまと一徹さまがご一緒になればよろしかったのに）

（ぶつぶつと立腹ぷんぷんですか、ユリ、怖いです）

（ご隠居様、今回はどちらへ）

（いくら気とはいえ、長旅の後は疲れます。また今度ゆるりとお話

いたしましょう）
（まずはハナのご機嫌伺いじゃ）
「クワ～コルネイユ～クロウ～クワ～」
（あらあら、烏も国際交流それとも井戸端会議かしら）

第三話　終わり

第三話　セミテリオの国際？井戸端会議（後書き）

お楽しみいただけましたなら、幸いです。

第四話　セミテリオのこども達　その一（前書き）

セミテリオにこども達がやってきました。

第四話　セミテリオのこども達　その一

（今日は烏がないてませんわ）
（マサのおきまりの台詞が聞けないのう）
（烏でも少しは遠慮するのかしら。めずらしく、幼子がたくさん）
（幼子とは、イエスさまのこと、ではございませんわね）
（カテリーヌさま、幼子とは、こどもたち、ってことですわ。ユリにもああいう時代があったんですわね。でも、お墓では遊べませんでした。ユリ、怖かったです。今になってみると、あちらの世界の方がよっぽど怖い所だとわかりますけれど）
（生きている身には死は怖い。死んだ身は、もう死なないですし）
（人間、知らないものは怖いものだからの）
（知っていても怖いものもございますわ。おごじょにとりましては、おのこの力も強引さも怖いものです）
（でも、こちらに参ってしまいますと、ここはとても穏やかですものね。力が無いですから、みな安寧）
「もういいか～い」
「まぁ～だだよぉ～」
「ちょっと待って」
「もういいか～い」
「もういいよぉ～」
「待って、待って、うん、もういいよぉ」
「大和君みぃつけたぁ」
「翔君みぃつけたぁ」
「あれっ、大和君、琴音ちゃんがまだ見つかっていないよ」
「琴音ちゃん、どこにいるのぉ」
「琴音、おやつの時間だから帰るよぉ」
「おやつでつるの」
「琴音は食べ物ならつれる。琴音～、帰るよぉ～」

「おさかなならみみず、だっけ。琴音ちゃんはどんな食べ物がいいのかなぁ」
「琴音ちゃ～ん」
「琴音ちゃ～ん、苺が待ってるよぉ、プリンも待ってるよぉ」
（プリンって何かしら）
「琴音は甘いもの好きじゃないんだ」
（甘いものが好きじゃない幼子って不思議ですわ）
（おやつのことらしいの、うらやましい限りだの）
（干し柿、さつまいも、砂糖黍の搾りかす、甘いものが美味でした。江戸、いえ、東京に参りましてからは、練りきり、こんなに美しいものを口に入れてしまってよいものかしらと、ご先祖さまにも味わっていただこうと仏壇にお供えして、わたくしは眺めるだけ。しばらくしたら硬くなってしまいました。ご先祖さまはご覧になるだけでしたのにね）
「琴音、お煎餅がたくさん待ってるぞぉ、白黒抹茶小豆珈琲柚桜、あっ、これは名古屋の従姉の口癖で、外郎のことだ、えっと、お煎餅だから、白海苔抹茶ごま醤油粗目カレーに青海苔山椒。お兄ちゃん先に帰っちゃうよぉ、先に帰ってお煎餅みんな食べちゃうよぉ」
（お煎餅、美味しいですわよね。でも苺の方が赤くて甘くて幼子に向いていると思いますわ）
「参ったなぁ、僕だっておやつはやく食べたいし」
「ママも何か持ってくるって言ってたし。でも、琴音ちゃんを置いて帰るわけにもいかないし」
「仕方ないからみんなで探そう」
「こんなに広いのに。ばらばらに探していたら僕たちがはぐれちゃうから、どうしよう」
「一列ずつ、あっちの道まで行って待てば」
「隼人君、あったまいい」
（隼人だと。おぉ、薩摩隼人。我が同郷。吾は熊襲なりし）
（あなたさま、熊襲なんですか。わたくしと同じ隼人の血筋と思っ

ておりました）
（薩摩と熊襲、いずれにせよ、同郷だの。どちらもはるか昔のご先祖さまが海を超えて渡ってきた。隼人と熊襲、低黒太濃、高白細薄どちらがどちらだったか。うむ。その頃のご先祖さまは、もうこちらの世界でも消えてしまわれたかの。訪ねてみて尋ねてみたいものだの、貴方さま貴女さまはどちらからいらしたのですか、隼人ですか、熊襲ですかと、薩摩言葉なら通じるだろうかの）
「琴音」
「琴音ちゃん」
「琴音ちゃ～ん」
「琴音ちゃん」
「琴音ちゃ～ん」
「琴音、いいかげんに出てこいよ。もうかくれんぼは終わり」
「いなかったってことだよね、じゃ、次の三列を探そう」
「今度は元いた道まで戻って待つんだよね」
「そうそう」
（この同じ制服を着たお子たち、本当にお墓を怖がらないんですね）
（霊園がどういう所なのか知らないのでしょうか）
（まだ字も読めないでしょうし）
（読めても、表札だと勘違いしているかもしれぬしの）
（表札みたいなものですわね、確かに）
（そういえば、数字も書いてあるし。何丁目何番地）
（この、区や種や号や寄りとは、なんなのだろうの）
（わかりにくいですわね）
（外国の方にはわかりやすいものなのでしょうか。カテリーヌさん、いかがでしょう、カテリーヌさん）
（あらっ、先ほどまでユリのお側にいらしたのに）
（しぃっ、すみません、みなさま、お静かにしていただけますかしら）
（カテリーヌさま、どうなさった・・・あらっ）

（このキリストではない幼子がね、わたくしにもたれて来ましたの。可愛いでしょ。わたくし、男の子しか産んでませんし、幼子を育てた経験もほとんどございませんし、ですから女の子にどう接したらよいのかわからなくてとまどっておりましたの。疲れていたみたいで、うとうとし始めたこの幼子は、わたくしとお話できるみたいなんです。午前中までいた幼稚園のマリア様のことなどお話ししてくださるの）

（マリア様ってどなたですか。ユリ知りません。この女の子のお友達かしら）

（キリスト様のお母様ですわ。キリスト様もご存知ないかしら）

（耶蘇教の神様のことかしら）

（いえ、神様とは違うのですけれど、どうご説明いたしましょう・・・）

「ああっ～琴音ちゃん」

「いたの」

「見つけたんだね、今そっち行く」

「琴音、なんでこんなに離れた所まで来て隠れるんだよぉ」

「あっ、お兄ちゃん、見つかっちゃった。離れた方がみつからないでしょ。それにほら、ここ、十字架がついてるから」

「ほんとだ」

「神様に守ってもらって、みつかりにくいって思ったんだ。ずるい」

「おやつのお煎餅が待ってるから帰ろうって呼んだのに」

「わたしね、お砂場でプリン作ってマリア様に差し上げたって、カテリーヌさんにお話してたの」

（プリンって何かしら）

（砂で作る食べ物らしいの）

（ビスケットとは別物かな。あれには珪藻土が入ってるけれど）

（さすが虎ちゃん、高等学校生。難しいこと知ってる）

（ユリちゃん、ビスケットの箱に書いてある、あっただけさ）

（ビスケットとは、栗鼠の毛布かのっ。栗鼠に毛布をかけるわけで

はないだろうから、栗鼠の毛を縫い合わせて毛布にするのかのっ）
（栗鼠じゃなくて、ビス、ケットは毛布じゃなくて）
（私の国でも良く召し上がるお菓子のことですわ。砂糖や牛乳やバターやメリケン粉を使って焼くんです）
「カテリーヌさんって誰、どこにいるの」
「ここのお家に住んでるの」
「だってここにお家なんてないよ」
「琴音ちゃん、ごめんね。僕たちがいつまでも見つけないから、眠っちゃって夢でも見てたんだよね」
「夢じゃないもん。カテリーヌさん、ほら、ここにいるもん、カテリーヌさんのお友達もよ」
「琴音、まだ寝ぼけてる。翔君ちに帰ろう。おやつだ」
「うん、カテリーヌさん、さようなら」
（さようなら・・・さようなら、じゃございませんわ。わたくし、琴音さんに乗ります）
（ユリも乗ります、彦衛門さま、マサさま、虎ちゃん、行って参ります〜す）
（おっと、乗りそびれた。プリンがなんだか見たかったの）
（お砂でございましょ。どちらにしても頂けませんわ）

＊

「ママ、ただいま」
「お帰りなさい、遅かったわね。もう隼人君のママも大和君のママもいらしてるわ。すぐにおやつにしましょうね。みんな手を洗ってらっしゃい」
「翔君ママ、ごめんなさい。お母さん、琴音がね、かくれんぼでうんと遠くに行っちゃったから」
「だって、琴音はカテリーヌさんとお話してたんだもん」
「琴音ったらさ、かくれんぼの最中にうたたねしてたんだよ」

「琴音ちゃんはまだ小さいから、幼稚園で疲れたんだよね」
「はい、苺。お煎餅は大和君と琴音ちゃんちから、プリンは隼人君ちから頂いたのよ」
（プリン、お砂のお菓子なのでしょうか）
（カテリーヌさま、もうじき見られますわ。味わえなくとも）

＊

（ユリさま、これでよかったのでしょうか。先ほどお玄関で琴音さんにさようならって言われた時、ちょっと寂しかったですわ。せっかくお話できるこちらの世界のお子に会えましたのに）
（またセミテリオで会えるかもしれませんわ。それに、カテリーヌさまとユリと二人で乗っていたら、私達を感じられる琴音ちゃんには重荷ですもの。この隼人君なら、気づいていないみたいですし。そうそう、プリンはお砂じゃないってこと、彦衛門さまや皆様にお伝えしましょう）

＊

（隼人君、眠りましたね）
（ロビンも今頃眠っているかしら）
（赤ちゃんを置いてくると、ご心配でしょ）
（セミテリオの皆様が面倒見てくださると思いますし、それに、生きている時でもまだ天使みたいな子、それほど心配いたしておりませんわ）
（わたくし、日本のご家族のご生活を見させて頂くの、とても久しぶりなんですよ。楽しめました）
（ユリもね、四半世紀、いえ、この前、あのため息亀さま青年の所に参りましたが、お子様ばかりでしたものね）
（隼人君に乗せて頂いて、お風呂やお手洗いにもご一緒して、驚く

ことばかりでしたわ）
（螺子を回せばお湯が出てくるんですものね。石鹸は液体ですし、名前も漢字ではないですし）
（手ぬぐいは薄くないですし色々な色がついてますし、体を洗うのと頭を洗うのは別のものを使いますし。お花のようなすてきな香りでしたし、男の子でもいい香りのもので洗うなんて、ユリびっくりしっぱなしでした）
（ブーケッって書いてありました。わたくしの国では花束のことです。そういえば日本の男性は香を使いませんわね。西洋では殿方も香りを楽しみますの）
（寝間着も浴衣ではないですし）
（お母様がお子を洗うのは一緒ですわね）
（でも、びわちゃん、お姉様の方は一人で入浴なさってましたわね）
（びわちゃん、もしかして私たちのこと、見えるのかしら）
（そうそう、ちょっと気になっておりました。こちらをじっと見つめてましたでしょ。お食事中もびわちゃんが見つめるのを隼人君が気にしてました）
（お食事にも驚かされましたわ）
（そうそう、お父様をお待ちにならないで）
（無理もございませんわ。随分遅いご帰宅ですものね）
（お酒をお召し上がりになったご様子でもなく、お夕飯もあの時刻までお召し上がりになってらっしゃらなかったご様子。お仕事お忙しいのでしょうか）
（セラヴィ。でも、わたくしの夫は日暮れ時には帰宅いたしておりましたわ。夕食は女中が作ったものか、時には上野の精養軒に参りましたし、そのあと、少しだけ近辺をお散歩したり。懐かしゅうございます。服装が服装でございましょ。夜目にも異人と分かるらしくて、じぃっとは見られないのですが、ちらっちらっと。ですから少しだけのお散歩でしたわ。靴も土ぼこりや泥で汚れましたし、ですからロバートに腕を支えてもらって）

（ユリの父はお家で商売でしたから、いつもお家におりました。いつもお食事は一緒でした。お箸で。今日の驚きました。お箸はありましたが、お子があのなんていうのでしたっけ。小さな刃物と先が割れたのを上手にお使いになって）

（西洋の食器と東洋のお箸と、両方使える日本のお子はすばらしいですわ。わたくし、お箸には苦労いたしましたもの）

（隼人君もお休みになりましたし、カテリーヌさま、私たちももそろそろ）

（そうですわね。隼人君、明日はどちらに連れてってくださるかしら）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その一（後書き）

お楽しみいただけましたなら、幸いです。
第四話、長くなります。ただいま、その五を執筆中。できるだけ毎週アップするようにいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その二（前書き）

第一話から、あるいは第四話その一から読んでいただいた方が流れがつかめると思いますが、ここからでもどのお話から読んでいただいてもＯＫ．

第四話　セミテリオのこども達　その二

「お父さん、梅雨っていつから」
「もうすぐだよ、どうして」
「雨が降ったらね、長靴はいていったら、水たまり探検ができるの」
「あっ、そうだったね。でも、お父さんは雨嫌いだよ」
「雨が降らないとお百姓さんが困るんだって、蒲原先生が言ってたよ。それにシスターも、雨は神様が降らせるんだから、人間の自由には降らせられないって」
（シスターってどなたでしょう）
（先生がおっしゃった、と最近のお子様はおっしゃらないんですね）
「今、雨を降らせる実験している国もいくつかあるらしいけどね、隼人には難しいかな」
「お父さん、もっと速く歩いてよ」
「信号まだ赤だから」
「でも青になったらすぐ渡りたいんだから。昨日は大和君と琴音ちゃんに負けちゃったでしょ。今日は一番になりたいんだから」
「はいはい」
（あら、セミテリオへの矢印がございますわ。ここから五百メートルですって）
（メートルって、ユリにはわからないのですが、遠いのでしょうか）
（それほどでもないですわ。この桜並木、葉がおいしげって、鮮やかな色ですわね）
（ユリ、苦手です。毛虫が落ちてきたら、悲鳴あげちゃいます）
（ユリさまが悲鳴上げられたら、わたくしたちきっとセミテリオに戻ってしまいますわね）
（悲鳴あげないようにがんばります。折角カテリーヌさまとこうしておでかけして楽しんでおりますもの）
（紫陽花もうつくしいですわね）

（ユリには、この紫陽花は珍しいんです。いつ頃からこちらばかりになったのでしょう。ユリが生きておりました頃には、日本の紫陽花の方が多かったんですよ。背が高くて、花が大きくてまばらなのが）

（こちらの紫陽花は、ユリさまのおっしゃる紫陽花を西洋で作り替えて、また日本に戻されたそうです。こちらの方が強いのかしら、たくさん咲いていますわ。幼稚園にはお父様がご一緒なさるのですね）

（幼稚園ってどのような場所なんでしょう。ユリは行ったことないから、楽しみです）

（わたくしも、存じませんわ。隼人君は怖がっていないようですから、お優しい先生方なのでしょう）

（あれかしら）

（あら、あれは耶蘇教の教会ですわ。ほら、屋根の上に十字架がご覧になれますでしょ）

（ほんと、カテリーヌさまのお家のと同じ。西洋の物語の挿絵みたいです）

（教会の前を通り過ぎてしまいましたわ。久しぶりに中に入りたかったのですが）

「隼人、危ない、待ちなさい」

「シスターおはようございます」

「隼人君、おはようございます。一番ですよ」

「よかった、じゃぁね」

「隼人君、お待ちなさい。お父様にちゃんとご挨拶なさい」

「お父さん、ありがとうございました。行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃいませ」

「やったね、僕一番」

「隼人君、ちゃんとお鞄とお帽子とお弁当を掛けてからですよ」

（教会のお庭が幼稚園みたいですね）

（マリアさまがいらっしゃいます）

（えっ、どちらに。あっ、あのお子様を抱かれたご仏像ですか）
（いえ、ご仏像ではなくて、はい、イエス様をお抱きになってらっしゃいます。ほら、昨日、えぇと、琴音ちゃんがお話していた）
（マリアさまって美しい方なんですね。あら、お砂のプリンがあります）
（あれは、うふふ。頂けませんわ）
（うわぁ、みんな小さくて、おもちゃのお家みたいです。お机やお椅子が赤、橙、黄、緑、青、紫、きれいですわ。天国みたい）
（天国ってどんなところなんでしょう。今わたしたちのいる世界は天国なんでしょうか。でも違うみたいですし）
（かわいくて、うきうきしてしまいますわ。ロビンを連れてくれば良かったかしら）
（ユリもこどもになって遊びたいです）
（なってみましょうよ）
（ユリちゃん、可愛いです。でも髪型もお変えになった方がよろしいですわ）
（カテリーヌさま、いえ、カテリーヌちゃんもお人形さんみたい）
「琴音ちゃんおはよう、大和君おはよう」
「隼人君、おはよう。あぁあ、今日は負けちゃった。パパがおトイレ長かったんだもん」
「隼人お兄ちゃま、おはようございます。私、シスターのところに行く。あっ、カテリーヌさんおはようございます。お友達にも」
（琴音ちゃん、おはようございます。こちらはユリさんですよ）
「カテリーヌおばさんっ。昨日より小さくなっちゃったの。どうして幼稚園の制服着てるの」
（おほほ）
（琴音ちゃん、初めまして。おはようございます）
「ユリお姉様、初めまして。ユリお姉様も小さくなってる」
（うふふ、ユリちゃんの制服、似合ってるでしょ）
「う〜ん、なんか、ちょっと、でも、うん」

「琴音、朝から夢みてる」
「夢じゃないもん。隼人お兄ちゃまの横にいるんだもん、ほら」
（あちらの女の子、マリア様に百合のお花をさしあげてますわ）
（マリア様は、百合がお好きなんですよ）
「交代でね、しらゆりさんたちが、お花を持ってくるの」
（私のこともマリア様はお好きかしら）
（マリアさまはお心のお広い方でらっしゃいますもの。まぁ、お花がきれい）
（美しい色ですこと。先ほどの建物の中のお机やお椅子の色と同じですね。でも、ユリの知らない花ばかりです。セミテリオにはこういう花はないですし。ユリがあちらの世界にいた頃にはこういうお花はなかったです）
（仏蘭西にはございました。日本で西洋のお花をたくさん見られて、懐かしくて、わたくし幸せですわ。でも日本語ではなんというんでしょう）
（こんなきれいなお花がいっぱい咲いている仏蘭西は天国みたいな所なんでしょうか。あっ、こちらはユリの頃にもありました。鉄棒でしょ、ブランコでしょ、滑り台でしょ、自転車も。自転車、ユリ乗りたかったんですよ。でも、女子の乗るものではないと言われてました。あら、ユリの頃には空き地には大人が作ってくれた、なんていうんだったかしら、大きな丸太がぶら下がっているのがないです、あれみんなで乗れて揺れて面白かったのに）
（わたくしも自転車には乗ったことございませんわ。殿方が颯爽と走るのがうらやましかったものです。まぁ、琴音ちゃん上手に乗ってますこと）
（あら、後ろに小さい車輪が両側についていて、転ばないようになっているんですね）
（次から次へとお子が入って来ますね）
（お父様よりお母様が多いようですわ。シスターもご挨拶たいへんですわね）

（でもにこにこしてらっしゃる）
（シスターってお名前、どういう漢字を書くのかしら）
「さぁみなさん、こちらに集まって、ばらさんは小山先生のところに集まりましょうね。さくらさんは蒲原先生、しらゆりさんは中山先生の所。朝のご挨拶をいたしましょう」
（ばら、さくら、しらゆり、ってお花の名前だけじゃなかったんですね）
「小山先生、蒲原先生、中山先生、シスター、神様、マリア様、おはようございます。♪たのしいようちえん、ばら、さくら、しらゆり～♪　てんにましますわれらのちちよ、ねがわくはみなのとおとまれんことを、みくにのきたらんことを、みむねのてんにおこなわるるごとくちにもおこなわれんことを～　アーメン）
（アーメン、あら、わたくしもつい一緒にあわせてしまいました）
（これはなにかしら。幼稚園のお歌にしては難しそう）
（日本のお寺や神社ではみなさまでお声を併せてお祈りいたしませんか）
（あっ、お経なんですね。それで、アーメンって）
（ユリさま、申し訳ございません。いえ、恥ずかしいです。わたくし、今まで意味を考えたことございませんでした。どうしましょう。あちらの世界におりました時には日に二度は唱えておりましたのに）
（うふふ、ユリも、お経の意味、知りません。今度ご隠居さまにお尋ねいたしましょうね。シスターには先生って敬称がつかないんですね。どうしてかしら）
（シスターって、英語でご姉妹のことですけれど、あっ、日本語では修道女さま、尼さんと同じかしら）
（あぁ、だから、頭に尼さんみたいにかぶってらっしゃる）
（面白いですわね。信心が異なっても、女性は頭に布をかぶるのですね。不思議ですわ）
（あら、隼人君と大和君と琴音ちゃんと、みんな違う所に入っていきます）

（隼人君とは翔君がご一緒ですわね。あら、こちらから大和君のいるお部屋も、琴音ちゃんのいるお部屋も見えますわ）
（芸術の時間みたいですね。隼人君の絵は何かしら）
（芸術・・・お絵描きっていうんです。あっ、大和君のところは粘度遊びかしら）
（隼人君の絵は、たぶん、え～と、これ、蛙の赤ちゃん、ですわ）
（おたまじゃくしっていうんですよ。でも、おたまじゃくしに眉毛はないのに）
（人間みたいに描いてしまうんですね、でも、かわいらしい、おたまじゃくしが笑ってます）
（琴音ちゃんが、私たちを見ながら描いてます。ユリ、手を振っちゃいます）
（あら、神父様がいらっしゃいました）
（お寺でしたらお坊さんと同じ、ですか）
（えっ、はい。あら、日本人ではないみたい）
（あら、髪の毛の色がカテリーヌさまと同じで、目はロバートさまと同じ。色々な組み合わせがあるんですね。どこのお国の方かしら。西洋人だとは思いますが。何語でお話なさるのかしら）
「ゲオルク神父様、おはようございます」
（シスターが日本語でお話になってますわ。よかった。ユリにも分かって）
（ゲオルク・・・独逸のお名前だと思います。仏蘭西のお隣の国ですわ）
「園長先生、おはようございます」
（神父様が園長先生なんですね）
「皆さん、今日は水曜日です。一緒に教会で神様とお話しをする日なのですが、今日は明日の結婚式の準備をしていますから、神様とお話するのは金曜日になります」
（明日はこちらで結婚式があるんですね。参列したいですわ。でも無理かしら。幼稚園のお子達は入れないんでしょうね）

（ユリも教会の結婚式って見てみたいです。お餅を配るのかしら。ところで、神様ってお話できるんですか）

（う〜ん、どう申しましょう。ユリさま、お寺でお経を読まれた時、何か考えてませんでしたか。ご先祖様のこと思い出したり。仏さまにお話いたしませんでしたか。あの、日本の結婚式ではお餅を配るんですか）

（お国によって違うらしんですけれど、あっ、このお国ってのは、仏蘭西や英吉利ではなくて、日本の中のどこの出かという意味です。東京にはいろいろなお国の方がいらっしゃるので。ユリが小さかった時、結婚式やお家を建てる時や、おめでたい事があると、お餅を配るお家もございました。それと、お経は、大事だとは思っていても、意味がわからない言葉が多いですし、はい、ユリ、確かにぼんやりして、おじいさまやおばあさまのこと思い出したりしてもいました）

（そういう時に考えたこととか感じたことって、もしかしたら神様、いえ仏様のお言葉だとは思いませんでしたか。なんとなく心が安らぐような）

（あぁ、はい、なんとなく分かったような気がします）

「描けた人、粘度細工ができあがった人は、シスターか園長先生にご覧になっていただきましょう。何ができたか描けたか、ちゃんと説明できるかな」

（うわぁ、みんな違う。お花を描いたお子や、猫を作ったお子、時計の絵や、あらっ、数字ばかりのお子も、山の形の粘度や、お家、あらっ、これはセミテリオかしら。まぁ、蟻をこんなに大きく作ったり、お友達の鼻だけなんて、面白い。自転車の絵かしら、難しそう）

（このお子は、こちらで遊んでいるお友達を描いているのかしら）

（カテリーヌさま、でも、夜ですわ、お月様が出ています）

（えっ、あら、昼間ですわ、これ太陽ですもの）

（いえ、黄色いからお月様ですわ。幼稚園は夜も開いているのです

ね）
（ユリさま、これ、太陽です）
（でも、黄色いから、お月様ですわ）
（ユリさま、太陽は黄色ですわ、それにお星さまもないですし、昼です）
（お星様は、ほら、セミテリオでも最近は見えなくなってきてますし、お日さまは真っ赤じゃございませんこと）
（ユリさま、太陽をご覧になってくださいな、黄色ですわ）
（お日様をみたらいけないって、目に悪いそうです。でも夕日って真っ赤ですよぉ。お月様はご覧になるでしょ、黄色いお月様の中で、兎がお餅つきをしてるんです）
（えっ、そうなんですか）
（はい、ユリはそう聞かされてました。でも、もう四半世紀より前に旅しました時に、数日前に亜米利加人がお月さまから帰ってらしたたそうで、その時には兎はいなかったって、白黒のテレビでやっていました。たぶん、兎さんは怖かったから隠れていたのかもしれません）
（わたくしは、悪い人と女の人が住んでいると聞きました。月って、どのくらいの広さなのでしょう。小さく見えますが、兎さんと悪い人と女の人が隠れられるくらいなのでしょうね）
（でも、兎さんや悪い人や女の人が住んでいるってこと、どうしてみなさんご存知なのでしょう。亜米利加人より前にお月様に旅した方がいらしたのでしょうか）
「琴音ちゃんの絵は何かな。お友達かしら」
「うん」
「誰かな」
「隼人お兄ちゃまと、カテリーヌさんと、ユリさんなの」
「隼人君は、うん、上手ね。カテリーヌさんとユリさんってお友達なのかな」
「うん、昨日お友達になって、今日は隼人お兄ちゃんと一緒にいる

の」
「そうね、絵の中で、隼人君とお友達になったのね。お人形さんみたいに可愛いお友達ですね」
「違うよ、今、隼人お兄ちゃまと一緒にいるの。昨日は大人だったけど、今日はこどもなの。隼人お兄ちゃま、今お友達と一緒にいるでしょ」
「えっ、うん、翔君と、翼ちゃんと、茉莉ちゃんと、まりなちゃんと、裕樹君と」
「カテリーヌさんとユリさんも」
「昨日のセミテリオのお友達のことでしょ、ふ～ん」
「琴音ちゃんの新しいお友達なのね。仲良くしましょうね。茶色い髪も緑の目もすてきね。まりなちゃんみたいですね。あら、神父様、大丈夫ですか、どこかお加減悪いのではないですか」
「あっ、いえ大丈夫。この緑の目に、いや、ハンブルクの従妹に似て、いや、なんでもありません」
（やっぱり、琴音ちゃんにだけ私たちが見えるみたいですね）
（神父様にも見えないんですね。ちょっと残念です。神様にお仕えなさる神父様や修道女さまでしたら、もしかしたらわたくし達に気づいてくださるかもしれない、と思ったのですが）

＊

その三に続く

第四話　セミテリオのこども達　その二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。お楽しみ頂けましたなら、幸いです。
来週水曜日にはその三をアップいたします。再見、安寧

第四話　セミテリオのこども達　その三（前書き）

第一話からでも、第四話その一からでも、この第四話その三からでも、どこからでもどうぞ。

第四話　セミテリオのこども達　その三

「あんなちゃん、お母様がお迎えですよ」
「毎日お世話になってます」
「そら君、かえでちゃん、お母様がお迎えですよ」
「そら君、ほら、お帽子忘れてますよ」
「今日は元気でしたよ。もう大丈夫ですね」
「シスターさようなら」
「さようなら、明日またね」
「ゆうや君、あら今日はお父様がいらしてますよ」
「うん、お父さん、今日お休みの日なの」
「よかったわね。いっぱい遊んでいただけるわね」
「ううーうん、お父さん、お休みの日はごろごろしてるだけなんだもん」
「あはは、すみません」
「毎日お仕事でお疲れですものね」
「みづきちゃん、みずほちゃん、お母様がいらしてますよ」
「大和君、琴音ちゃん、お母様ですよ」
「ばいば～い」
「ありがとうございます」
「先生さようなら」
「それじゃまた明日」
「さようなら～」
「シスター、ばいばい」
（お帰りのお時間なんですね。なんだかほっとしますわ）
（でも、ちょっぴり寂しいような。こんなすてきな場所なんですもの）
「びわの体操服が小さくなったから、商店街に買いに行くの。今日しかあなた達空いていないでしょ。授業終わった頃に校門まで迎え

に行くから、後三十分ぐらい遊んでいていいわよ」
「だって、みんな帰っちゃったし、一人で遊ぶのつまんない」
「鉄棒の練習でもすれば。お母さん、逆上がり手伝ってあげようか」
「いやだよ。ここで遊んでいると先生達から丸見えだもん、恥ずかしい」
「恥ずかしがることないじゃない。最初は誰だって何だってできないのが当たり前でしょ」
「いいのっ。じゃあ、本読んで」
「絵本持ってきてないもの。お買い物行くのに荷物になるでしょ」
「じゃぁ、お教室にある分」
「今からお教室に入ったら、お掃除してらっしゃる先生方にご迷惑でしょ」
「することないもん」
「じゃぁ、お母さんと教会に行く」
「僕、明日の次の日に教会行くもん」
「明日の次の日は、明後日って言うのよ。その次の日はしあさって」
「しあさっての次の日は」
「やなあさって、というらしいけど、あんまり使わないわ。で、教会の中ならお母さん日焼けしないし、静かだし座れるし」
「静かにするのももういいもん」
「いいでしょ、神様とお話するの。静かにすると神様とお話できるんでしょ」
「え〜と、明後日お話するし、この前もしたし、それにお母さん信者じゃないじゃない」
「あら、隼人だって信者じゃないでしょ。幼稚園のお友達だって信者じゃない子の方が多いでしょ」
「うん、でも」
「いいじゃない。お母さん、教会好きよ。信者じゃなくったって、教会やお寺や神社好きよ」
「どうして」

「だって、すてきな静けさ、心の豊かさ、ゆとりってのか」
「お母さんの言っていること、わかんない。でも、うん、行けばいいんでしょ。逆上がりの練習よりいいもん」
（年代を感じさせる扉ですね）
（年代、わたくし達女性には辛い言葉かしら。でも、わたくし達は思いで見かけをかえられますものね。わたくし達のみかけを見てくださるこちらの世界の方は少ないのが残念ですけれど。あら、ユリさま、お浴衣、いつものお姿ですわね）
（あら、カテリーヌさまも、いつもの高い襟のお服。気力が続かないと戻ってしまいますわね）
（静かですね。ユリ、教会の中に入ったの初めてです）
（キリスト教は、禁止されなくなっても、まだまだでしたものね）
（ユリ、教会は遠目に見るだけでした。血を飲むとか肉を食べるとか気持ちの悪いことばかり、怪しい、まやかしの怖い所と聞かされてました）
（よく知らないことは怖いものなんですね。私もお寺が怖かったですもの。ユリさまのおっしゃるのは、たぶん、聖体拝領のことだと思います。キリストの血、キリストの肉と言われてますから。でも、葡萄酒ですしお煎餅みたいなものなんですよ）
（今日見られるかしら。ユリ見てみたいです）
（今日はミサあるのかしら。夕方ならあるかもしれませんわ。他の方に乗り移って、ミサまで教会に留まりましょうか）
（他の方・・・いらっしゃれば。隼人君とお母様と私達の他には、どなたもいらっしゃらないんですもの。窓がきれいですね。こちらも色とりどり。お隣の幼稚園のお机や椅子と同じで、鮮やかですね）
（美しいでしょ。この窓、絵になっているんですよ）
（あら、ほんと、幼稚園のお庭にあったお像と似た絵も）
（ろうそくが灯されています。ろうそくはお寺でも使います）
（そうなんですか。不思議ですね。宗教は異なっていても、似ているところもあるんですね。シスターと尼さんのかぶりものとか。そ

ういえば、セミテリオにいらっしゃる方がよくお持ちになっている、あれに似たものもあるんですよ）

（お数珠です。そういえば、鐘もどちらにもありますね）

（あらっ、この教会には鐘が無いみたいですわ。屋根が低いからかしら。そういえば、セミテリオにおりまして、鐘の音はどこからも聞こえてきませんわね）

（昔は聞こえていましたわ。覚えてらっしゃいません、ほら、サイレンの前に）

（ああ、ありました。火事を知らせる鐘。大地震の時や空襲の時にもよく鳴っていました。いつからなくなったんでしょうね）

（あの正面の十字、カテリーヌさまのお家にもついている十字はなんなんでしょう）

（イエス様が磔にならられた十字架です）

（まぁ、磔なんて、恐ろしい。悪い事なさった罰ですか）

（悪い事をしたってことにされて、私たち人間の罪をあがなう為に）

（ユリ、磔なんて悪い夢見そうです。あっ、でも私達、夢みたいな、いえ、人生は夢みたいな、あらっ、わからなくなりました）

＊

その四に続く

第四話　セミテリオのこども達　その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。お楽しみ頂けましたなら、幸いです。
８月３日夜までにはその四をアップいたします。再見、安寧

第四話　セミテリオのこども達　その四（前書き）

その三の続きです。ここからでもお読みになれますが、第四話、その一からの方が、ストーリーは判りやすいと思います。

第四話　セミテリオのこども達　その四

（ここが学校みたいですね）
（はい、桜山区立桜山中央小学校って書いてあります。ユリの頃と全然違います。尋常って付いておりませんし。ユリのころは全部木造でした。こういう、なんていうのかしら、石みたいなのではなくて、木で、茶色くて、窓の枠も木でした。ここ、窓枠が金属みたいです。それに建物が四階建てなんて。ユリの頃は全部一階だけでした）
（幼稚園と違って、制服じゃないんですね。みんな違う服着てます。みんな靴なんですね。靴の色も色々。隼人君の灰色と青の制服、すてきですのにね。みなさん鞄を背負うんですね）
（ユリの頃は、ああいうのなかったです。いえ、あったんですけれど、ユリの後から流行ったんです。ユリは風呂敷に包んでいました。みんな黄色い帽子かぶってますね。幼稚園のお帽子の方が可愛いです。　お着物のお子も裸足のお子もいませんわ。男の子と女の子が、話してる。ユリの頃は、男の子と女の子とお話しちゃいけなかったの。兄弟でも家の中だけで、外では誤解されるからだめだって）
（そうだったんですか。わたくし学校には行ったことございませんもの）
（女の子は男の子を乱暴だと言ってましたし、男の子は女の子を馬鹿にしてました）
「お姉ちゃんだ」
（また、隼人君というか私たちの方をびわさんがじっと見ていますわ。気づいているのかしら）
「びわ、お帰りなさい」
「ただいま。ほんとは、放課後ジミニちゃんや彩香ちゃんと遊びたかったのに。隼人さぁ、なんかぼんやりしていない」
「僕、ぼんやりなんかしてないもん」

「体操服、今日しか買える日無いから、仕方ないでしょ、あなたは明日英語だし、隼人は明日スイミングだし、金曜日はお母さんお約束あるし、土曜日はあなたお誕生日会にお招ばれでしょ。日曜日はお店が閉まっているし、体操服きついままた来週になっちゃったらいやでしょ」

（スイミングって、水泳のことですわ）

（何語なんでしょう）

（英語です、少しは覚えております。ロバートとは英語と仏蘭西語と混ぜて、後には日本語も混ぜて話しておりましたの）

「うん、動きにくい。鉄棒するとお腹見えちゃうし」

（なんだか毎日みなさんお忙しいようですわね）

（ユリも忙しかったです。お茶にお華にお琴に踊りにそれぞれおさらいして準備して、ユリは学校のお勉強どころじゃなかったです）

（日本の方っていつもお忙しくしてらっしゃる）

（そんなことないと思います。ぼんやりしていることもありましたし。カテリーヌさまは毎日お忙しくなかったのですか）

（お勉強はさほど。国語、ラテン語、算術、科学、刺繍、昼間しかできませんでしょ、先生は家にいらしたのでわかるまで教えていただきましたし。ですからおさらいも一緒、早朝や夕方は一緒にお散歩していました）

（ユリもです。灯りがもったいなくて、おさらいも昼間の明るい時だけ）

（セミテリオは夜になると街灯だけになりますでしょ。あの街灯でも、わたくしがあちらにおりました頃より大層明るいですものね）

＊

「こっちじゃちょっと大きすぎるかしら。すぐ大きくなっちゃう、というか体操服がすぐ小ちゃくなっちゃうし。ついでに半ズボンも。あぁ、帽子の黄色いゴムもついでに。他にここで買うものなかった

かしら」

（ユリ、ちょっと驚いています。このお店、お着物、浴衣も置いてないんです。もう着る人いないのかしら）

（セミテリオに新しくいらっしゃるみなさまも、最近は日本の服の方減りましたわね。私の襟の高い服も全く。そろそろわたくしたち、今の流行を研究して、服を着替えましょうか。無理かしら。わたくしたちを思い出してくださる方々はわたくしたちに昔の服装でいてほしいのでしょうし、それに、先ほどの幼稚園の時の様に、せっかく着替えても気力が続かないと元に戻ってしまいますし）

（うわっ、お雑巾まで売ってますっ。それもまだ新しい布でっ）

（お洋服も柄がみな可愛くて。色鮮やかで、いろんな種類があって。出来上がりで売っているんですね。わたくしの頃は、作らせておりました。その度にあちこち計られて）

（ユリも着物ばかりでしたから、でも、計ると言っても、着物の時には背丈で大きさが変るくらいで、後はあまり関係ないんですけれど）

（日本の着物って、すばらしいと思います。まっすぐに切っているだけなんだそうですね。ほどいて洗って仕立て直して、ってできるそうですわね。何度も仕立て直して、最後は雑巾にするんだ、と聞いたことがあります）

（ええ、浴衣などは、お襦袢にしたり、お雑巾にしたり。こちらで売られている服って、服に人間が合わせるってことなのでしょうか）

（そういえば体操服でも色々な大きさのがあって）

（これで女の子が体操するなんて、ユリだったら恥ずかしいです。腕も脚も見せてですか）

（ユリさま、明日は隼人君ではなく、びわちゃんに乗りませんこと。小学校に行ってみましょうよ）

（えっ、ユリ、幼稚園も教会も色が色々、お花いっぱいで天国みたいな所で明日も楽しめるなんて思っておりました。でも、お招き頂きましたからご一緒いたします。後ほど、どこかで隼人君から降り

てびわちゃんに一緒に乗り換えましょう）
「今日は本屋さん、行かないの」
「こどものとも年中とかがくのともは先週届いたでしょ、今日は荷物増やしたくないし、あなたたちと本屋さんに行ったら長くなるでしょ。のんびりしていたらおやつを食べる時間なくなっちゃう。まだこれから夕飯のお買い物なの」
「この前のかがくのともね、カブトムシのことだったでしょ。デーツーで幼虫売ってるよ」
「買ってもいいけど、ちゃんと世話できるかなぁ。たいへんよ。幼虫の内だって霧吹きしたり、それに幼虫ってほとんど動かないし。でもいい勉強ね。いいわよ、今日は逆方向だから、今度ね」
（カブトムシ、って虫ですか）
（ええ、このくらいの、黒くて、頭にかぶと、えぇと、一角獣みたいな角みたいなのがあって）
（虫をかうんですか）
（仏蘭西では虫をかわないのでしょうか）
（ファーブルという方がいらっしゃって、その方は色々な虫を調べている、いえ、もう亡くなったと思いますが、普通はどなたも。あっ、かうってそういう意味ではなくて、お金を出して買うのでしょうか）
（ユリの頃も、鈴虫は買っていました。カテリーヌさま、鈴虫、ご存知でしょ、売りに来ていたんですよ）
（鈴みたいな声で鳴くと言われましたが、私にはそうは聞こえませんでしたわ。黒くてちょっと気味悪い。蜚？と同じに見えます）
（カブトムシ、きっと今ではもうこの辺りにはいないんでしょうね。でも買うなんて、ユリにも不思議です）
（カブトムシ、どうしてこの辺りにいなくなったのでしょう）
（さぁ、ユリ、あんまり虫のこと知らなくてすみません、ファーブルさんに伺ってみませんこと）
（ファーブルさん、今はどちらにいらっしゃるのでしょう）

「昨日は洋食だったから、今日は和食か中華、どっちがいい、あなた達で決めていいわよ」
「僕、中華、こいのあんかけ姿煮がいい」
「うわっ、ぜいたくもの」
「私は和食、えぇと、豚の冷しゃぶ」
「じゃぁ、じゃんけんして、あんかけはだめよ、鯉はお母さん苦手、とても料理できそうにないわ」
（あんかけも冷しゃぶも、わたくし全くわかりません、日本語なのでしょうか）
（あんかけは、上にとろりとしたものをかけるものですけれど、れいしゃぶはユリにもわかりません。昨日のお夕食もそうでしたけれど、今の料理は全く違っていて）
「じゃんけんぽん」
「あいこでしょ」
「私の勝ち。和食ね」
「じゃぁ、和食で、豚の冷しゃぶね」
「ちょっと待って、じゃんけんで負けたから和食。でも豚か魚かは、今度は僕に選ばせて」
「なんか、ずるいっ」
「いいじゃない、じゃ、明日は豚で中華ってことで、今日は和食で魚、両方今日買っていくわ」
「じゃぁ、チェリーでまとめて買うの」
（チェリーって何でしょう）
（さくらんぼ、のことですわ）
「う〜ん、せっかく商店街に来ているんだから、今日はこっちで買うわ。商店街で買わないと、商店街なくなっちゃうから」
「えっ、そうなの」
（そうなんですか、どうしてでしょう。ユリも両親は商いしておりましたから、なんだか怖いお話です）
「あのね、お金をたくさん持っていると大きなお店ができるでしょ、

たくさん支店作れるでしょ。商店街のお店は小さなお店で種類がたくさんあって、でもお金はたくさんはもうからないでしょ、だからこどもが後継ぎしたくないでしょ、年とってくるとお店やめちゃうらしいの。ほら、お米屋さんも靴屋さんもなくなっちゃったでしょ。両方ともチェリーで買えるから。いつもチェリーで買えるから、みんなは困らないかもしれないけれど。チェリーは大きいスーパーだからなんでも売っているし、お休みも少ないし、でも元々の商店街じゃないから。ほら、チェリーができてから、金物屋さんも鞄屋さんもなくなっちゃったし」

（チェリーって、大きいスーパーだそうです）

（スーパーって、すばらしい、という意味ですが、何でしょう。大きいすばらしい、って、大きいさくらんぼ、もしかして今朝のお皿に乗っていたあの、ゆすらうめみたいな、あれかしら）

（ゆすらうめは、わたくしわかりませんが、あの赤いのですね、なんだったんでしょうね）

（なんでも売っている、ということは、勧工場というのがわたくしの頃都内の方々にありましたが、あれみたいなものでしょうか）

（勧工場って、新橋辺りにもあったあれかしら。色々と売っている。デパートとは違うのかしら）

（デパートって、出発するって意味なんです。あれもよくわからないままでした。ロバートが色々な部門のあるお店のことを言う英語の半分を取った日本語だと申してはおりましたが）

「ふ〜ん、そうなんだ。ここの瀬戸物屋さんは、同じクラスの明雄君ちだし、表通りのお花屋さんは彩香ちゃんちでしょ。そういえば、明雄君ちはおじいちゃんとおばあちゃんがお店やってるって。お父さんは会社に行ってるって言ってた」

「僕、わからない。けど、ここは裕樹君のお家で、ずっと前からここにあるって、それと翼ちゃんのパン屋さんは、翼ちゃんが生まれてからここに引っ越してきたんだよ」

（クラスって、ユリにはわかりません、これも英語なのかしら）

（仏蘭西語でも同じです、お教室のことですわ、今の日本語には随分たくさん他所の国の言葉が使われてますのね。大戦後の占領時代に増えたのでしょうか。商店街がなくなったら、みなさんお買い物困りますわね。わたくし達は何も買えないですし困りませんけれど）

（ユリの両親のお店も、誰かが継いでいるのかしら）

（なんのお店でしたの）

（最初はお着物の小間物を扱っておりました。呉服でも帯でもなく、帯〆や半襟、髪飾り、色々とこまごまとしたものでした。その後、お財布やレースのハンケチなど洋装の小間物も扱い始めて、でもユリは洋装したことないんです。もしかしたら先ほどみたいなお店をしているのかしら）

（ユリさま、ご兄弟は）

（お墓、ユリが最初なんです。父は後継ぎではなかったので、越後から上京して丁稚奉公して、もう暖簾分けの時代でもないと、頂いたお給金を貯めてお店を開いて。ユリの次にセミテリオに入って来たのが弟。弟はお店の後継ぎでしたから招集されないと思っておりましたの。招集されそうだってわかって、慌ててお見合い、すぐ結婚して、身ごもった若妻を置いて、弟は戦地からセミテリオに直接戻って参りました。無口になって。戦地のことどころか、弟は何も語りません。気の私たちですから、気力がないと語れませんわね。ユリや弟より後にセミテリオに参りました両親によれば、終戦直後に生まれた子を連れてというか、義妹は再婚して、ユリの両親のお店を手伝っていたそうですが、その両親がセミテリオに参ったのが三十年以上前です。両親の三回忌までは義妹は弟の子を連れて墓参りに来てくださいましたが。その後は全く。その義妹もそろそろセミテリオに来る年齢だとは思いますが、再婚で名字が異なってますでしょ。弟の妻は再婚相手の方のお墓に入ることになるでしょうから、ユリの甥がユリ達のお墓を継ぐのかしら。甥が入ってくる頃まであんなに無口な弟の気力が続くでしょうか。あちらの世で一緒に過ごせなかった弟と甥が、セミテリオでも行き違いにならなければ

よいのですが。どちらにしても、お店のことは何がどうなっているのか、さっぱりです）

（いつもは快活なユリさまですのに、しんみりとしたお話をさせてしまってごめんなさいね）

（いえ、あちらの世でも、どうしようもないことたくさんでした。こちらの世では、心配しても始まらない、いえ終わりもないですし。こうしてみなさん人生をあちらでもこちらでも過ごして行くのでしょうね）

（セラヴィ）

（カテリーヌさま、そのお言葉よくお使いになりますが、どういう意味なんでしょう）

（それが人生、とでも訳しましょうか。そんなものですわ、と申しましょうか。ただね、ヴィは、人生だけでなく、生命、生活、全部を意味しておりますの。日本語では人生と生命と生活って言葉が異なりますでしょ。ヴィは全部、全部一緒でも、あるいはバラバラでも、全部つながっておりますしね）

「へぇ〜らっしゃい。今日も生きのいいのが揃ってるよぉ」

「あらっ隼人君じゃない」

「裕樹君ママこんにちは」

「やめてよ。ママなんて柄じゃないわ、おばちゃんでいいわよ」

「今日は何にします」

「鯉」

「鯉は入っていないなぁ。あれは注文しといてくれないと」

「こいのあんかけがいいなんて言うんですよ。無理無理。だいたい、お高いでしょ」

「おがつくような上品な値段じゃないね、ただの高い。それにお宅四人でしょ、食べきれないって」

「ただの高いって何、ただは高いの」

（ユリさん、私もわかりません。ただは高いのでしょうか）

（あはは、ただより高いものはない、って言葉もありますけれど）

（余計にわかりません）
（いえ、つまり、お高いのおはいらないってことです）
「そうそう、賢いねぇ。ただは高いんだよぉ。おまけなんてついてくるともっと高くなる。危ないんだよおまけにつられるとね」
「ふ～ん、そうなんだぁ」
「あれっ、お嬢ちゃん納得してるね」
「お嬢ちゃんなんて柄ではないです」
「いやぁ、お客さんだもん、大事にしなくちゃ。ほら花嫁修業なんての始めたらお客さんになるかもしれない」
「まだまだ先ですわ。それに、今は男性の方が婿修行に料理習うそうですよ」
「そんなこと言っちゃぁ世の中おしまいだ、って先々代も先代も言ったろうねぇ。でもその先々代も先代も、俺みたいに男伊達らに魚さばいてたってわけだ。先見の明ありだね、あはは。んで、今日は何をさばく、切り身どっちかな」
（世の中おしまいって、どうなるんでしょう）
（人間だけがいなくなる、ってことかもしれませんわ。でもユリたちの世界は気でいっぱいになったりして）
「う～ん、そこの鰤、四切れちょうだい」
「はい、五百八十円、他には、しらすなんてどう。朝ご飯にさ」
「家、朝はパンなの」
「じゃぁ、ひじきは、今日煮て、残りは明日のお弁当」
「ひじきっておさかななの、知らなかった」
「いやぁ、海草。海で取れるから一緒に売ってんだ」
「僕、お弁当にひじきがいいな」
「いいなぁ、今日たくさん食べなきゃ。給食じゃ持ってけないし」
「お宅のお嬢ちゃんもお坊ちゃんもひじき好きなんだ、偉いねぇ、裕樹は苦手だよ」
「じゃぁひじき百三十円足して七百十円、おまけして七百円ね」
「えっ、おまけって危ないんでしょ」

「おまけしないとチェリーさんに負けちゃうからね。坊ちゃんも婿修行の時にはここで買ってね、その頃は裕樹が店主だ、といいなぁ、継いでほしいね」

（楽しそうですねぇ。女中達もこういうお話を楽しんでいたのかしら）

（カテリーヌさまは、お買い物なさったことございませんか）

（えぇ、仏蘭西でも日本でも、お金に触るのは下々のすることだと。それに、こういう会話もできませんわ。いたしたことございませんもの）

（ユリね、小さい頃は、お魚屋さんに嫁ぐって言ってたんです。毎日おさしみ食べられるからって）

（おさしみ、生のお魚ですわね、わたくしはどうも）

（ユリさま、ほらあそこご覧になって。今朝の赤い大きい実。名前が書いてあるのですが、崩れていて私には読めません）

（あら、へぇ、トマトって書いてあります。プチトマトって。トマトでしたのね。あんなに小さいトマトを採っちゃうんですか、可哀想）

（プチって仏蘭西語なんです。小さいって意味ですわ。確かに小さいトマト。いつの間に日本でこんなにトマトを売るようになったのでしょう。トマトは日本人のお口には合わないって思っておりました。日本人も召し上がるようになって、収穫が間に合わないから、あんなに小さい内から採ってしまうのでしょうか）

「ひじき買ったから、え～と、油揚は冷凍してあるし、人参はまだあるし、八百屋さんで買うものあったかしら」

「あっ、大根おろし、あら、冷や奴もいいわね。大根重いから、先におとうふやさん。やっぱりついでに油揚も。びわ、買って来てくれる。きぬごし，二丁じゃ多いかしら、やっぱり二丁ね、それと油揚二枚、三百円で足りるわね、はい」

（油揚、おきつねさんを思い出しました）

「大根一本、甘夏と苺とどっちがいいかしら。あらっ、枇杷がある

わ。びわ、高いなぁ」
「奥さん、今年は枇杷高いんだよ。これお買い得。次いつ入るかわかんないし」
「じゃあ、大根一本とこれちょうだい。娘の名前だもんね。旬の内にいただかないと」
「びわって名前いいですね」
「びわって可愛い感じでしょ。でも変な名前って言われるらしくて文句言われます」
「言いたい奴には言わせときゃいいんだ。すてきな名前だから妬いてんだよ。しめて六百円、はいおつり四百円ね」
「はい、お母さん、お豆腐と油揚、おつり百円」
「あら、九十円じゃなくて」
「うん、おまけしてくれた。小学生なのにお手伝い偉いねって。スーパーと違っておまけしてくれるんだね」
「うん、そのかわり、スーパーより高いこともあるけどね。えーと、あとはお肉屋さんだけね」
（ここ面白いですね。色々なお店が並んでいて）
（ユリのいた所も似ていました。でも、こういうお店はなかったです。ほら、あちらの）
（パンっ。まぁ、嬉しいです、懐かしいです、口に入れられないのが残念です。でもこの香り。焼きたてパンの。すてきです。あらっ、入ってくださらないのね）
（こういうのもパンなんですか。ユリの知っているのは、あんパンぐらいです。銀座の木村屋さんの、上に桜が乗っているの。美味しかったです。パンってお菓子だと思っていました）
（ユリはあちらのお店に入りたいです。ここも隼人君素通り。お煎餅やさん。海苔、さとう、ごま、お口に入れてぱりぱりできないのが残念です）
（こういうお店はなかったです。この前、亀歩き青年が持っていたような小さな電話ばかり売っていますわ。電話屋さんって言うのか

しら）
（百均、って書いてあるここは何かしら。斤ってのは重さですけれど）
「さてと、買うもの買ったし、おやつにしようか」
「どこがいい」
「ジョナサンか、ケンタかマックか」
（全部日本語ではないみたいです）
（食堂の名前なのでしょうね。健太は人の名前かしら）
「僕マクドがいい」
「私もマック」
「あんまり食べ過ぎはだめよ。遅めのおやつなんだから。食べ過ぎたら夕飯入らなくなるでしょ」
「うん、わかった、先に行って何にするか考えるね」
「あっ、そこ信号ないから」
「横断歩道あるもん」
「隼人、ちゃんと右見て左見てから渡ってね」
「右見て左見て右見て、って言うんだよ」
「そうなの、へぇ〜、お母さんの頃は、右見て左見てだったわ」
「右見て左見てだとね、左見ている間に右から来ていることがあるからだって」
「なぁるほど」
「ただね、右見て左見て右見て、その最後の右見ての間に左から来るってのはないのかなぁって、私思うのよ」
「でも、そんなことしてたら、いつまでも渡れないじゃない」
「うん、私ばかかなぁ」
（ユリ、知りませんでした。ユリの頃、まだ車そんなに多くなかったですし）
（わたくしの幼い頃にも、日本に参りました頃にも少のうございました。でも、馬車でも怖いですよ。大きなお馬さんでしょ。ただ、馬車は音がはっきりしてました。自転車は音もなく、急に現れます

から、怖かったです。車は、乗り合いでも速いですものね、今は昔以上に。昔でも充分怖かったですのに）

（隼人君、ちゃんと右見てます。左見てます、もう一度右を見てますね）

キィッィィィィッーーー

（うわっ）

「わっ」

（アアァァァ）

「・・・」

「隼人っ」

「・・・」

「大丈夫ですか」

「う・・・」

「お母さんっ」

（カテリーヌさま、カテリーヌさま・・・）

「お母さんっ，隼人っ」

「・・・」

（カテリーヌさま・・・）

＊

その五に続く

第四話　セミテリオのこども達　その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。お楽しみ頂けましたなら、幸いです。
８月１１日までにはその五をアップいたします。再見、安寧

第四話　セミテリオのこども達　その五（前書き）

この、その五からでもお楽しみになれると思いますが、第四話その一から、あるいは第一話からの方が、ストーリーが判りやすいと思います。

第四話　セミテリオのこども達　その五

（夢さま、本当にありがとうございました。とっても助かりました）
（いえ、どういたしまして。今度一緒にご旅行いたしましょう）
（うわぁ、ありがとうございます。ぜひお誘いください）
（では、私はここで、ごきげんよう）
（さようなら）
（戻ってらっしゃいましたね。お疲れのご様子。色々お話をお伺いたしたいところですけれど、わたくしどもには時は永遠、またのお楽しみにしておきましょう。ごゆっくりお休みになってくださいな）
（マサさまのお言葉、とっても嬉しいです。でもね、ユリ、色々と。あっ、カテリーヌさま、お戻りだったんですね。よかった。とっても心配いたしました。びわちゃんがね、隼人君から何か薄い煙みたいなのが抜けて行ったって言うし、お母さまはそれを聞いて、隼人君の魂が抜けたっておっしゃるし、私は、カテリーヌさんが私たちの世界からどこかに去られたのでは、と心配でしたし）
（ユリさま、本当にごめんなさい、とても残念です。あのままご一緒いたしたかったのに）
（ユリちゃん、ゆっくりしゃべんなよ。時は永遠）
（でもね、ユリ、あまりにいっぱいあって、いえ、あまりにたくさん見て来て、あまりに困って、え～と、どれから話したらいいのかしら）
（ユリさん、まずは一休みなされませ）
（そうでござる。まずは英気を養ってくだされ）
（ユリ、だめです。興奮状態で気が動転していて、気が狂いそうで、英気を養うなんてできません。全部お話しないとおさまりませんっ）
（ははは、じゃぁどうぞ）
（どこからお話すればよいのかしら。え～と、自動車が走って来て、すごぉい音がして急にとまって、カテリーヌさんが気を失って、じ

ゃなくて、隼人君から抜けちゃって、お母様が気を失うばかりで膝をついちゃって、腰が抜けるってあぁいうことなんですね。びわちゃんがおろおろして、私もカテリーヌさんが気を失ったんだとその時は思っていたのでおろおろして）

（ユリさん、落ち着いて。深呼吸、息をして、はいっ、続きをどうぞ）

（はい、それで、誰も怪我はしていなくて、近くにいた人が駆けつけて来て、自動車を運転していた人はおりて来て、隼人君は転んでもいないし、怪我もしていないし、自動車もぶつかっていないし、だから大丈夫だってことで、え～と、それで、私は隼人君にはもう私しか乗っていないって気づいて、カテリーヌさんが私を置いてどっかに行っちゃったんだってわかって）

（ユリちゃん、はい深呼吸、空気を吸ってぇ）

（あっ、はい。お母さんが、ちゃんと右見て左見て渡りなさいって言ったでしょ、びわちゃんが、右見て左見て右見てって言ったでしょ、って隼人君に言って、そしたら隼人君が、僕、ちゃんと右見て左見て右見て渡った、って言って、でね、ユリもたしかに見たし。隼人君ちゃんと右左右って見ていたしって思いました。でもね、轢かれそうになったわけでしょ。だって自動車は来ていたわけで。お母さんが気づいたの。見るだけじゃだめだってこと。見て、車が近くにいたら渡らない、ってことまでちゃんと付け加えて最後まで言っていなかった、ってことにね。隼人君はちゃんと見たけれど、見ただけで、見て危ないと思ったら渡らない、ってことまで考えなかったのね。確かに、見たからって車が止まってくれるわけない、あれっ、車も止まらなきゃ行けないのかなぁ。でも、こどもが見ていたら渡らないって思ったのかもしれないし。私たちだって、目の力で物を動かせる方ってとっても少ないですし。なんだかわからなくなってきちゃいました）

（ユリちゃん、右左右左も誰が誰に言ったのかも、ややこしいよ）

（ユリさま、一息つきましょう、いえ、本当にごめんなさいね。わ

たくし、自動車がすごい速さで近づいてきた時に息を止めていました。で、あのキィッ～って音で気を失いましたの。気づいたらセミテリオにおりました。ユリさまを置いてきてしまって、本当にごめんなさい）

（はい、いえ、あの、それで、あの時でしたっけ、お話してましたでしょ。次の日はびわちゃんに乗って小学校見学にって。私、隼人君に乗っているのも怖かったですし、隼人君はお母さんとびわちゃんに挟まれて両手をつながれちゃって、もう一人で歩かないで、なんて言われて、ですから、私、そのすきにつないだ手からびわちゃんに移ったんです。お母さんが、もうまっすぐ家に帰ろうとおっしゃって、でも、びわちゃんも隼人君もおやつ食べるって言い張って、それで、え～とマクドでしたっけ、マックでしたっけで買って、何を買ったかって、え～と、これは前私が乗せて頂いたお若い方の時と同じで、ハンバーガーっていう、パンの間にひき肉を丸めて焼いたのやお漬け物をはさんだものを買っていました。あとポテトと呼んでいたぽていとぉ、英語でじゃがいもを角切りにして揚げたものです）

（ユリちゃん、いつの間に英語勉強したんだい）

（うふふ、後でお話します）

（それでお家に帰って、おやつ食べて、びわちゃんはなんか、宿題とか本読みとかやってました。その内お夕食の時間になって。和食でした。私、なんとなく懐かしい感じ。だってね、冷や奴と大根おろしと鰤の照り焼きと、胡瓜の塩揉みと、ひじきの煮付けと、枇杷でした。あっ、夕食にはね、お父様ご一緒でした。でね、お母さんとびわちゃんが隼人君が自動車にぶつかりそうになったこととかお話なさって、その後、びわちゃんが、マックをマクドというお父さんと弟は変だって言い出して、お父さんが、関西じゃマクドで、関東じゃマックで、どちらでもいいじゃないかってお話なさって）

（英語で書いてある店のことでござろう。最初の文字はＭではなかろうか）

（ロバートさま、最初の字は、え、え、えぬでしたっけ。あれっ、あの、頭だけのお魚が上向いて口開けているような字です）
（ユリちゃん、君、面白い覚え方するんだね。ついでに、えぬってのは、縦棒二本。左の棒の上と右の棒の下がつながっているんだ）
（やはりＭｃＤｏｎａｌｄ’ｓのことでござろう。赤地に黄色い字で。昨今、方々にあるハンバーガーのお店のことでござるな）
（ロバート殿、よくご存知でらっしゃるのっ。いつの間にご体験なされなのっ）
（両親が泥棒というあの亀歩きの青年が持っていた電話が気になりましてな、最近は旅をしていない、これじゃぁ世間に乗り遅れると反省いたしまして、先日日帰り旅行を試みましてな、うまく行かず三泊してしまいましたがな。その折にＭｃＤｏｎａｌｄ’ｓには辟易いたしましたので）
（辟易とは、これまた何故）
（いやぁ、何度も乗り移りまして、いや乗り換えいたしまして、ところが乗り換えした方々がみなさまやれ昼食だ、やれおやつだ、やれ腹減った、やれ朝食だと、みなさまＭｃＤｏｎａｌｄ’ｓに入るものでしてな、我が輩何度見せられたというか嗅がされたのであろうか。最初の頃は、懐かしの我が故郷近くセントルイス世界博覧会での話題の食事と嬉しかったものですがな。あまりに続くのでうんざりしておりましてな、その内気づいたわけです。煙草を吸わない乗り物、いや、人間がＭｃＤｏｎａｌｄ’ｓに入るんだと、あそこは禁煙と入り口に書いてある、しかもなぜか英語でＮｏ　Ｓｍｏｋｉｎｇなどと書かれておって、それじゃ煙草のにおいのする御仁に乗ればいいのだと、そういう御仁に乗り換えたものの、その御仁はこれまた喫煙席のあるＭｃＤｏｎａｌｄ’ｓに入るというわけで、喫煙をする席が決まっているというのも驚きでしたが、一度など、隣に、これまた英語で店名が書いてあったＫｅｎｔｕｃｋｙなんとかという、入り口に白い服を着た太ったご高齢の白人男性人形がある処に入りたいと思っていたようだが、やっぱ高い、と凄まじき日

本語をつぶやいて結局またＭｃＤｏｎａｌｄ，ｓに入ると言う体験をいたしましてな。Ｋｅｎｔｕｃｋｙ州は先日お話いたしました南北戦争の舞台となった地でもありまして、きっとそこの料理を出す店なんだろうと期待したのですがな。そうそう、乗り物、いえ御仁方がみな、マックとかマクドとかその店を読んでましてな。おう、日本語化した英語と、我が輩は一人にやりとしたわけです）

（ほう、またどうして）

（あのぉ、ユリに話続けさせてください）

（ユリさん、申し訳ない。一寸お待ちを。彦衛門殿、つまりですな、英語読みをしますと、あれはまっどうなーず、となるわけでして、それをマクドナルドという母音がきちんと入る日本語読みにいたして、それを更に短くしてマックとかマクドと読んでいるわけですな。つまり頭の二文字Ｍｃだけを読んでいるわけでして、このＭｃというのは、英語というよりもアイルランド語でしてな、正式には二文字ではなく、Ｍａｃと三文字でして、既に省略された形で、息子という意味なのでござる）

（あのぉ、ロバートどの、亜米利加では英語でしたわね。どうしてアイルランド語が亜米利加で使われるのでしょう）

（マサさま、亜米利加とは元々インディアンしか住んでおらなかったのです。インディアンというのは、印度の土人という意味で）

（亜米利加に印度人、なんですか）

（否、亜米利加を見つけた人がそう思ったわけでして）

（見つけたって、でも、そこに住んでいた人は見つけられたってこと）

（迷子になっていたわけでもないのに、ですか）

（あ～、ややこしい。整理しましょう。西洋人は、新しい土地を探していたわけです。そして亜米利加の地をみつけた、いや、みつけたじゃまずいわけですな。亜米利加の地に出会った。しかしそこは以前から知っておった印度だと思い込んだ。だからそこの土人を印度人、すなはちインディアンと呼んだ。インディアンしか住んでい

ない広大な土地、そこが印度では無いと分かってからですが、広いから欧羅巴からどんどん人が入ってくる。西洋とは異なる新しいものとの出会いを求めて、西洋の窮屈な生活、宗教から逃れて、西洋で食い詰めてなど理由は様々でしたがな。アイルランドからは、一八四十年代にじゃがいもの疫病が広まり、じゃがいもを食べていた農民が飢えに苦しんで亜米利加に大量に移住しまして、そこでアイルランド系の名前を持つ人が増えたというわけで、我が輩がセミテリオに参る直前頃には、ＭａｃＤｏｎａｌｄ爺さんの農場という歌も流行りましてな）

（ロバート殿、その歌、聞かせてくださいませ）

（ロバートさま、ユリのお話の途中なんですが）

（ユリさん、すみません。ということで、マサさま、貴女のご要望には今回は応じかねますがお許しいただきたい。ひよこや牛や豚やラバが歌う面白い歌なのですがな。もっとも、我が輩、歌はあまり得意ではござりませぬ。美声でもありませぬ）

（おじさん、それで、その歌とお店と関係あるのかなぁ）

（いや、多分に関係は無いと思われます。実際、ＭｃＤｏｎａｌｄという名字は、田中氏や佐藤氏程では無いと思われますが、結構よくある名字でして、そもそも亜米利加では名字の数は日本に比べて限りがござる）

（ロバートさま、ユリのお話、続けてもいいかしら）

（ユリさん、大変申し訳なく存知ます。丁度、話しも一区切りいたようですな）

（じゃぁ、みなさま、ユリの話に戻ります。あれっ、どこまでお話したかしら。え～と、そうそう、あっ、マックかマクドかってお話と夕食のことはお話いたしましたわね。それからびわちゃんは、え～と、ほらあの亀歩き青年の家にもあった、動く絵が映る、え～と、あってれび、てれびでお話を見て。私ねてれびじょんはもう四半世紀も前に、ほら、前お話したコーラ、お醤油みたいで歯医者さんの匂いのするってお話の時ので、知ってはいたんですけれど、それに、

あの青年の家のも、どういったらいいのかしら、大きかったでしょ。こう、さいころを大きくしたような。それがね。びわちゃんの家のは薄くて、広くて、中の絵も色がついていて、その色もまるで本物みたいで、前の色みたいにぼやけていなくて、ですから、もうなんだか目の前に人がいたり公園があったり本物みたいで、気分が悪くなりましたの。それで、見ないようにしておりましたら、うとうとしてしまい、次に気づいたのは、朝ご飯の時）

（ユリちゃん、ロバートおじさんの話が間にあったせいか、少し落ち着いてきたみたいだね）

（はい、ほんと、少し。あっ、でも、やっぱりお話したいことあまりにありすぎて、早くお話しないと忘れそうです）

（まだ午前中ですし。わたくしどもの時間は永遠ですし、ごゆるりと）

（マサさまありがとうございます）

（朝ご飯はね、あっ、朝パンはね、カテリーヌさま、前の日の、カテリーヌさまがご覧になったのとほとんど同じでした。そういえば、カテリーヌさま、あれ、おもしろかったですね。水と粉みたいな珈琲を入れて、電気をつなぐと、ごぼごぼ音立てて珈琲ができあがるんですよ）

（おお、似たものが例のまっどうなーず、マックとかマクドとか呼ばれている所にもありましたぞ。こ～んな大きい機械でござろう）

（いえ、そんな大きくなかったです。このくらい）

（ほう～）

（僕、あの香りが好きで、でも、僕がこっちに来る少し前には、敵国飲料とされて、飲めなかった）

（ほう～、敵国ですか。そりゃたしかに亜米利加人はよく飲みますが、しかし、亜米利加で作るものではなく、伯剌西爾や哥倫比亜などでつくるものでして、あっ、しかしながら、先の大戦ですと、この両国も亜米利加側でしたな。たしかに敵性国家）

（おっほん、私はその珈琲なるものを知らぬが）

（あら、だんなさ～、ご存知なかったですか。わたくしは何度か口にいたしましたが、だんなさ～は、こちらにお一人の時にはわたくしに乗らなかったのでしょうか、もっとも、珈琲のどこが美味しいのか、わたくしにはさっぱり。茶色い泥水みたいで、苦くて。焦げ臭くて）

（マサ、私は一人で、セミテリオにもまだ住人は少なく、誰も、乗るということを指南してくれなかったのでのっ。知っておったら、マサに乗って日々退屈しなかったろうにのっ。珈琲は苦い泥水、香りに騙されてはいけないということだのっ）

（彦さま、そのようなことはございませんの。文化の違いでございます。わたくしも、当初はお抹茶をとても苦く、気味悪いくらい緑色と思っておりましたわ。お菓子も、甘い豆など気持ち悪くなりましたが、慣れてしまえば和菓子に抹茶という最高の組み合わせになりましたもの。まぁ、あの頃、珈琲を手に入れるのは大変でしたしね。あ～、練りきりのあの軟らかい甘さが懐かしいです）

（カテリーヌさん、あちらでお目にかかっておりましたなら、わたくしご招待いたしましたのに。わたくしも江戸、いえ東京に出て参りましてからは、抹茶と和菓子のお時間が大層楽しみでございました）

（マサさまとは、あちらの世界で二十年ほど同じ時代を生きておりますのね。わたくしの方が先にこちらに参りましが）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その五（後書き）

お楽しみ頂けましたなら、幸いです。その六は１８日までにはアップいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その六

（あのぉ、お話戻しても構いませんかしら）
（いいよ、ごめんねユリちゃん）
（あらっ、虎ちゃんが優しい。優しくしてくださっても何も出せませんわよ。珈琲がごぼごぼして出て来て、パンがパンッって飛び出して来るんですよね、カテリーヌさま）
（そうそう、台所で火の上で焼くのではなく、パンも電気をつないだ機械で焼くんです。それにパンが保冷庫って言うんですか、ほら、あの亀歩き青年の家にもあった、あっ、冷蔵庫って言うんでしたっけ。昔のテレビの数倍大きくて、扉がたくさんあって、その冷蔵庫の別の扉を開けるともっと冷たい所があって、そこからカチンカチンの硬いパンを出して来るんです。それを機械に入れてしばらくするとパンッて音がして、きつね色のいい色に焼けて飛び出してくるんです。半熟卵もね、機械でつくるんです）
（ほう〜、卵を機械に入れると、半熟になって出てくるのかのっ、その珈琲といい、パンの機械といい、半熟卵製造機といい、こりゃまたその内、誰かに乗って今の世界を見物しにいかないとのっ）
（う〜ん、卵は卵の大きさの入れ物に入れて、その入れ物を、別の機械、やっぱり電気でつながっている機械、ほら、あの亀歩き青年の家にもこれはありました。昔のテレビと同じくらいの大きさの箱形ので、あれに入れてなんだかあっち回したり釦押したりして、数分したらもう半熟卵ができちゃってました）
（わたくしが見た朝食と同じですわね）
（ええ。腸詰めの小さいのもありましたし。違ったのは、枇杷が付いたくらいです。そのかわり、ほら、カテリーヌさま、大きなさくらんぼだと思ってしまったあのちっちゃいとぅめぃとぉはなかったです）

（とぅめぃとぉってなんですかのっ）
（トマトのことですな。英吉利人には卑しいとされる懐かしき亜米利加式発音、貴女は何処で学んだのですかな）
（ユリの話の腰を折らないで頂ければ、ちゃんとお話いたします）
（申し訳ない）
（すまんがのっ、そのトマトというのは、あの、毛唐が好む赤い球体のもののかのっ）
（だんなさ～、確かに、だんなさ～ご生存の頃にはあまりありませんでしたわ。でも、その後、ケチャップ、あら、ケチャップもだんなさ～、ご存知なかったでしょうかしら。どろっとした、赤い調味料で、私も頂いたこと何度かございますわ。でもトマトの方は苦くて青臭くて苦手でした。砂糖をかけて頂いておりました）
（マサさまもそうでしたの、ユリもそうしてました）
（日本の方は、トマトにお砂糖をかけるんですか。お砂糖は贅沢なものでしたでしょ。でも、和菓子やトマトにも、お使いになってらしたんですね）
（亜米利加が鯨を追って西に来た如く、日本は砂糖を追って、琉球からさらに南に向かったのでしたのっ、いや、これは我が輩やみなさまがこちらの世界に来た後のことですがな）
（ロバートおじさん、砂糖もですか。僕は、石油だと思ってました）
（あのぉ、ユリのお話、続けたいんですっ）
（パンッのパンとごぼごぼの珈琲と、終了しましたってお話する箱で半熟卵と腸詰めと、トマトの朝パンを全員揃って食べて、隼人君とお父さんが出て行って、その後すぐびわちゃんも、いってらっしゃいの声に送り出されました。ユリね、一人で乗るの初めてでしたから、心細かったんですけれど、カテリーヌさまの代わりにしっかり尋常小学校を見てこようと思ってました、あっ、いえ、尋常は付いてませんでした。ただの小学校）
（そうそう、僕がこちらに来る少し前には、国民学校って名に代わって、その後、国民も取れたらしいね。ほら、この前僕が乗り続け

て見てきた警察でもそう言っていた。高等科ってのもなくなって、中学校になって、中学校は僕らの頃の中学校とは違って三年間で、中学校の後が高校になってるみたいだよ。それで、中学校までは義務教育で、でも実際には今は高校までほとんどみんなが行くらしい。日本人の教育の質が高くなっているってことなんだろうか。ほとんどみんなが、僕みたいに帝大に行くような勉強をしているんだとしたら、大変だろうね。あんなに難しいことを勉強する必要があるんだろうか。僕だって思っていた。理系に行く連中はなんで古典や漢語が必要なんだ、僕みたいに法律を学ぼうとしていた身には、なぜ物理や科学が必要なんだってね）

（虎ちゃん、お願い、続けさせて）

（ごめん、ごめん）

（学校に向かう途中で、びわちゃんはカタリナちゃんとジミニちゃんと彩香ちゃんと会って四人で学校に向かいました）

（ユリさん、ごめんあそばせ。でも、私も一言。そのカタリナちゃんって、日本人でしたでしょうか）

（いえ、え～と半分日本人みたいです。お父さんが秘露人みたいです。ついでに、ジミニちゃんは日本人みたいですけれど、名字が二つあって、お父さんとお母さんが違う名字で、韓国ではね、ってジミニちゃんが言ってましたからたぶん韓国の子で、えぇと、彩香ちゃんは日本の子みたいです）

（みたいです、って、どこの國の方かおわかりにならなかったということでしょうか）

（はい、秘露も韓国も、ユリにはわかりませんし。韓国は朝鮮半島の南半分のお国らしいです。でも、地図には韓国って名前じゃなくて漢字四文字でした。そうそう、國って漢字も中に王様がいらっしゃる字になっていました。王様ががあちらこちらにいらっしゃるのでしょうね）

（南半分とは・・・北は支那ということかのっ）

（どうも、あちらこちらで国の数が増えているらしいですな）

（わたくしがセミテリオに参ります頃には、朝鮮半島も支那の一部も日本でしたわ）

（僕がこっちに来る前は、南方の国々も大東亜共栄圏という名で日本の領土みたいなものだったし。でも、日本は戦争に負けたから、朝鮮半島の北半分は支那のものになったのかなぁ）

（いえ、北半分は別の国、たしか朝鮮なんとか国って漢字で長い名前が書いてありました。あのね、マサさま、生活科の教科書で偶然、どこの国からっていう頁があったのでユリも覚えていますけれど、見かけだけでは、琴音ちゃんやこの前ここに遊びに来ていたお子様達も、どこの国の方かわかりませんわよね。カテリーヌさま、私たちがお訪ねした隼人君のご家族も、たぶん日本人だとは思いますけれど、わかりませんでしょ。国の名前が書いてあるわけではございませんし、日本に長くいれば日本語もお話しなさるでしょうし）

（そうですわね。どこの国の方かとは話題になりませんでしたし、その国の方々にとっては当然ですし、見かけが少し違えば、どちらからですか、とお尋ねもいたしますが。わたくしがあちらの世界におりました頃には、西洋人は異なって見えましたからひそひそ話されたり、逃げられたりでしたから、かえって西洋人どうしは仲良くいたしてもおりました。それでも服装を目にいたしましたり言葉を耳にいたしますと、自分とは違うお国の方なんでしょう、と想像は付きました。あっ、いえ、あの、つまり、わたくしが口をはさませて頂いたのはそういうことではなくて、あの、そのカタリナちゃんってお名前、私と同じですのよ）

（ほうっ、カテリーヌさんとカタリナちゃん、確かに似ているような）

（ええ、仏蘭西ではカテリーヌ、西班牙、葡萄牙、伊太利亜などでしたらカタリナ、英吉利や亜米利加ではキャサリン、露西亜ではエカテリーヌになるんです）

（ほぉっ、日本人の名前にそういうのはあるのだろうかのっ）

（日本語ではカテリーヌは絣んになるようでござる）

（絣んとな。ロバート殿、これまたどうして）
（いや、人の名前ではなく、台風の名前でござる）
（台風に名前が付いておるのかのっ。私は知らなかったのっ）
（僕も知らない）
（わたくしも）
（ユリも）
（我輩も先日の散歩で偶然知ったのだが、電柱に白い線が引いてあり、それが六十年程前の絣んという名の台風の時に浸水した高さだと、私の乗った御仁がご友人に説明しておったのでな）
（六十年程前ということは、今ここにいらっしゃるわたくし共はどなたもあちらにはいらっしゃらなかったですわね。この国が占領されていた頃のことですから、占領した連合軍が名付けたのでしょうか。でも絣ん、絣ってすてきなお名前かもしれませんわ）
（素敵などころか、大層な被害をもたらしたようでござる。我が輩も詳しくは知らぬが、その御仁が説明しておりました）
（台風の名にまでなったのですか。それより、わたくし、その、同じ名前のカタリナちゃんに会ってみたかったです。乗ってみたかったです。残念ですわ）
（もう、ユリ、話を続けますっ。それでね、カタリナちゃんとジミニちゃんと彩香ちゃんとびわちゃんは、宿題やってきた、今日の給食なんだか知ってる、体操服新しいの、昨日買いに行ってその帰りに弟が交通事故に遭いそうになったの、なんとか先生のとこ男の子が生まれたんだって、四年の聡君かっこいいよぉ、そんなことないって、三年の洋君の方がいつもにこにこしていて、やだぁ、いつも笑顔なんて信じられない、あっ、ジミニちゃん洋君のこと好きなんだぁ、そんなことないってば、なんて女の子のおしゃべりはいつも変らないんだなって思いもいたしましたし、先生に敬語も使わないですし、男の子のことお話するなんて、それこそユリには信じられなかったんですけれど、その内学校について、学校がね、ユリ、びっくりしました。だって、そりゃその前の日、カテリーヌさまとご

一緒の時でもお着物の方見かけませんでしたし、幼稚園は制服でしたからお着物のお子がいなくてもともね。学校ではね、こども達も先生も皆、体操のお授業の時以外はばらばらのお服ですのに、先生方もどなたも、お子たちも誰も、だぁれもお着物じゃないんですよ。日本の服、誰も来ていないんです。みんなお洋服。それに女の子でもスカートの子が少ないの。信じられない。それでお教室に入ったら、机がね、一人ずつなの。木だけじゃなくて金属も使ったお机とお椅子で、こども達の数も少ないの。一つのお教室に三十人ちょっとしかいないんです。男の子と女の子が別のお教室じゃないですし、あっ、これ、まだ二年生だからってんじゃなくて、六年生でもそうらしいでしたし、男の子もユリ達の頃みたいに乱暴じゃないし、坊主頭の男の子も少ないですし、お河童頭の女の子もほとんど見かけませんでしたし、だぁれも継接だらけのお服や寸釣天や大きすぎるお服なんて着ていないですし、みんなこざっぱりとしていて、それにほら、ジミニちゃんやカタリナちゃんもですけれど外人が多いみたいで、肌の色の黒い子や髪の色もロバートさまとカテリーヌさまの間みたいな薄い茶色の子もいたり、なんだかユリの知っている日本じゃないみたいでした。大戦の後、占領されたままなのかしらって思ったくらいです。それで、先生が入ってらして。池田先生って男の先生でした。羽織袴はもう期待しておりませんでしたが、背広でもなくて、体操服みたいなのを着てらっしゃいました。三十歳ぐらいかしら。起立礼着席があると思ったら、起立礼だけなんです。立たないで、座ったまま気をつけなの。すぐ授業が始まる訳じゃなくて、読書たいむなんてのがあって、たいむってなんだか知りませんけれど、いいですっ、虎ちゃんもロバートさまも黙っていて、もう、途中でお口をお挟みにならないでねっ。みんな勝手に自分の好きな本を読んでいるの。少ししたら国語の時間で、国語の教科書がこれまたびっくり。とってもきれいで、紙もつるつるで、挿絵がいっぱいあって、それにね、色がついているのよ。教科書に色がついているの。天然色って言うんでしたっけ。黒と一色っていうんじゃ

なくって、たくさん色使っているの。お話も日本のお話じゃなくて、すいみぃっていう黒い魚が他の赤い魚と協力してってお話でした。国語なのに、日本のお話じゃないんですよっ。まだ小学校二年生で、もう外国のお話。先ほども申しましたけれど、文字が違っているんです。ゐもゑも使っていないみたいです。ジミニちゃんやカタリナちゃんもそうだったけれど、他の外国のお子たちもね、国語の教科書を上手に読むし、もちろんお話は全部日本語でお話ししていて、私、ずっと、カテリーヌさまやロバートさまの日本語がお上手なことに驚いておりましたけれど、お子達もとっても上手）

（ユリちゃん、わかった、口挟まないから、ゆっくり話して）

（虎ちゃん、ほら、口挟んだじゃないっ）

（ごめん）

（じゃぁ、ゆっくり話します。え～と、二時間目は算数で、これがまたね、わからないの。ユリ、ちゃんとお勉強したのに、全然わからないの。だって長さのことをお勉強していたんですけれど、英語の文字で書いてあるの。ほら、カテリーヌさま、幼稚園の近くにセミテリオまでの距離が書いてありましたでしょ。あれです。何メートルとそれより小さいなんとかメートルと、それより更に小さい別のなんとかメートルってのがあって。なんとかメートルをいくつ集めるとなんとかメートルになって、正確な呼び方と簡略な呼び方とね。尺も寸も間も使わないの。でね、色んな所の長さを計ろうって、机の上では定規を使っていてね、定規にも尺も寸も書いてないんです。黒板の長さを計ろうって時にはね、巻き尺を使ったのね。尺は使わないのに、巻き尺っていうの。面白いでしょ。もしかして、間尺に合わないって言葉ももう使われなくなってるのでしょうか。わたくし、あの言葉好きでした。面白いですわよね。間にも尺にもあわない、ってことでしょ）

（杓子定規とか尺度って言葉も使われなくなってるのかなぁ、まさか尺取り虫って名前まで変っていたりして）

（しゃくにさわるってのはいかがでしょう）

（カテリーヌさん、難しい言葉をご存知ですのっ。然し乍ら、あれは癇癪の癪で、漢字が異なりますのっ）
（あら、すみません。ユリさま、長さのメートルというのは、わたくしの国から始めましたのよ。一メートルは約三尺ですわ）
（そうそう、亜米利加の一フィートと一尺は同じくらいでござる）
（ユリ、続けますっ。あっ、そういえばね、黒板が黒じゃないの。緑、濃い緑でした。でも黒板っておっしゃってました。不思議でしょ。緑板じゃないんです。お手洗いはね、お手洗いって書いてなくて、これもまた英語の文字で書いてあって、え～と、えむの字を逆さまにした文字と長さの時に使った文字でした。中に入ったら、ユリが昔からよく知っているしゃがむのだけじゃなくて、びわちゃん家みたいに腰掛けるのもあって、落とし紙もね、自分で持って行くんじゃなくて、びわちゃん家みたいにくるくる回る紙がついていて、水で流すのもお家だけだと思ってたら、学校もなの。壁の近くに手を近づけるだけで水が流れるの。それにね、お手洗いの扉も勝手に開いたり閉まったりするし、手を洗う所なんて蛇口の下に手を持っていったら勝手に水が出て来るの。手をどけると勝手に水が止まるの。濡れた手は拭かないのね、機械の間に手を入れると風が吹いて乾かしてくれるの。これも、手を入れると風が出て、手を出すと風がとまるの。だからお手洗いがきれいなの。ここのお手洗いはあんなじゃないでしょ）
（ほうっ、そりゃ面白そうだのっ。次に乗る時にはそういう厠に参りたいもんだのっ）
（だんなさ～、厠の話はお好きですものね）
（おうおう、好きだのっ、今じゃ出したくても出せない。ひねりもできなきゃちびりもできぬのっ。こちらの世界に来てしまうと、糞じじいとか糞ばばあって言葉は意味を成さぬ、ははは）
（だんなさ～、お止しになってくださいませ。カテリーヌさんがお顔をしかめてらっしゃいます、んだもしたん）
（あら、わたくし、いえ、おほほ。わたくしもお手洗いでは、日本

に参りまして面白かったこともございますのよ。お手洗いそのものではなく、その外の、え～と、つまり本当に手を洗う所のことなんですが。中の方のお手洗いは、おほほ、昔は、いえ、わたくしが幼い頃はまだ、仏蘭西ではおまるにして、道や家の裏などに捨てていたみたいですわ。あっ、わたくしが面白いと思いましたのは、手を洗う方、あの下からに細い棒を押し上げると水が出てくるのでした）

（そうそう、下に手水鉢があってね、横に手ぬぐいがぶらさがっていて。確かにあれは面白い）

（ユリもね、好きでした。ちょんちょんってつついて、何度もつついて遊んでおりましたら、ばあやに叱られました。誰が上に水を入れると思っているんですか、水だって只じゃないんですっ。井戸水だけじゃないんですからね、ってね）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その六（後書き）

お楽しみ頂けましたなら、幸いです。その七は２５日までにはアップいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その七

（あら、ユリまで脱線してしまいました。元に戻します。そういえば、忘れてました。床がね、お教室の中も廊下も、木じゃないんです。なんかすべすべしていて。ですから、昼食の後のお昼休みの後のお掃除の時にもね、ほうきじゃなくて、長い棒の先にひらひらの毛虫みたいなのがいっぱいついたのでこすっておしまい。お雑巾で拭かないのよ。で、話を元にもどして、えっと三時間目は体育でした。そうそう、校庭の地面も、地面って言っていいのかしら。土じゃないの。なんだか緑色っぽい、ふわふわみたいな変なの。そこに線が引いてあってね、あっ、徒競走の線、運動会が近いからその練習なんですって）

（運動会が近いって、ユリちゃん、まだ初夏だというのに、秋の運動会が近いってのかい）

（ユリもね、運動会って秋にするものだと思ってたの。だって、運動会ってほら、ご両親やご家族がみんなで集まってお弁当並べて、それでまだ青い蜜柑がすっぱくって、ってね）

（青い蜜柑、なつかしいのっ）

（日本語ではなぜ緑色を青とおっしゃるのですか、わたくし不思議でしたの。日本人の目には緑色は青と同じに見えるのでしょうか）

（カテリーヌさん、碧という漢字は昔からあおともみどりとも読んでいるようでござる。日本語では碧と青と緑が混在しているようですな。最近の散歩ではあちらこちらで見かける信号の光の色も、青というよりは緑に見えるのだが、あれを日本人は青と呼ぶのも、そういうことなのではないかと、我が輩は認識しております）

（う〜ん、体育の授業のお話から蜜柑にしてしまったのは、ユリです。でも、蜜柑から青のお話に、また逸れてしまってますっ。話を元に戻させてくださいな）

（ユリさん、セミテリオの時は永遠ですわ。ごゆるりと）

（それで、体育の時間でも、その前のお時間の算数の長さの説明をなさってました。ここまでが何、何でしたっけ。校庭を一周すると、とか。あっ、行進の練習やお遊戯の練習、ラヂオ体操ってのもしてました。ラヂオをかけるんじゃなくて、どこかから音がしていたんですけれど、ユリにはわかりませんでした。第一から第三まであるそうで、第一を練習しました。音楽に合わせて体を色々な向きにうごかしたり、ぐるぐるまわしたりするんです。ちょっと面白かったです）

（ラヂオは私にも分かるが、そのラヂオ体操というのはなんですかのっ）

（だんなさ～、わたくしにお乗りになってらっしゃっていればお分かりになりましたものを。あれはいつ頃からでしたでしょう。大正の御代、いえ昭和の初めの頃からでしたかしら、毎朝広場や境内に集まりましてね、町会長さまが前にお出になって、ご近所のラヂオの音を大きくしましてね、みんなで体を動かすわけです。音楽に合わせて、動かす順が決まっておりまして、町会長さまが♪いっちにぃさんしぃ、ごぉろっくしっちはっち♪、などと声をおかけになって、そこに出て来ない者は朝寝坊のぐぅたら穀潰しとか悪口も飛び交いましてね、ちょっとぐらい熱があっても、参らないと何を言われるか、家にまで訪ねてらして、御加減いかがですかという、善きにつけ悪しきにつけ、左様な雰囲気でございました）

（おばあちゃんの齢でもそうだったの、へぇ～）

（虎之介殿、わたくしは貴殿の祖母ではございませんっ）

（はいはい。僕も尋常小学校や中等学校ではそれやらされました。いや、最初はね、みんなと一緒に同じ事をするってのも面白かったですよ。小さい子ってそんなもんでしょ。夏休みだって冬休みだって、学校がお休みでも朝寝坊はできない。いや、二年坊主ぐらいまではね、校庭に一番乗りだっ、なんて競争したりもしましたけどね、段々、進級するにつれて、特に高等学校に入ってからは、なんだか馬鹿らしく思う自分がいるわけですよ。ところが時が時だけに、中

国相手に戦争していたわけですから、国民一丸となって、でしたし、中等学校にも高等学校にも軍事教練で軍から軍人が来てましたからね、ラヂオ体操どころか、陸軍兵式体操だの海軍体操だのどこかの国の体操やら、やらされました。僕、薄々気づいてはいたようにも、今から思うとそう思うのですが、たぶん既にその頃胸を煩っていたんですね。体操をすると息切れがする、辛いから動きが緩慢になる、たちまち怒声が、拳骨が飛んでくる。たるんでるぞっ、我が皇国臣民としてなんだかんだ云々云々と続くわけですよ。まぁ、直に休学してしまうわけですが、高等学校の代名詞みたいなバンカラの格好も世が世なだけに少なくなっておりましたが、下駄も重くなりまして、いや、ゲートル巻いて下駄ははけなくなりましたが、そんな僕が制裁拳骨などに耐えられる訳もなく、ひ弱な恥知らずの臣民の末席に置かれておりました。軍人なんぞのどこが偉いんだ、帝大で法学を見につけ見返してやるなど初期の意気込みすら気もなえ、気も吸えず、煙草を吸えばごほごほ、酒を飲めばよれよれに）

（貴殿も苦労なさった由、そのバンカラとは面白い言葉なのでござる。日本語と英語をつなげた言葉ですな。ハイカラ同様、カラが付くが、はてさてこのカラは何なのか。二説ありましてな。ひとつは襟、カラー、すなはち高い襟、もう一つは階級、クラス、つまり高い階級、すなはち上流階級、どちらなのでござろうか。最初に二つの言語をつなげてこの言葉を作った御仁に尋ねてみたいものですな。ちなみに、こちらにいらっしゃるカテリーヌさんですと、ハイカラの両方に当たりますな。襟の高い服を身に着けた上流階級の方ですから）

（いえいえ、わたくしなど上流などとはとても申せませんわ。英吉利ですとじぇんとるまん階級になるのかしら。新しい階級とでも申しましょうか。財産はそれなりにございましても、王室のような歴史的家系ではないと申しましょうか、うまく説明できませんわ。わたくしにも祖父母、曾祖父母そのご先祖様と、歴史はございますし、どなたにもご先祖様はいらっしゃいますし。え～と、ずうっと昔か

らお金持ちというわけではなかった、ということかしら、それとも政治力を持たなかったということかしら、うまく立ち回れなかったということかしら、あら、よく分かりませんわ）

（なんだか、またユリの話、脱線させられちゃいました。あのぉ、それで、体育の話は、もうやめます。あっ、でも、校庭でね、面白いもの見つけました。カテリーヌさまとご一緒した幼稚園にはございませんでしたのに、小学校には鶏小屋と兎小屋があったんです）

（もしや、時折聞こえる朝の雄鶏の挨拶は小学校から聞こえてくるのでござろうか）

（ほうっ、こども達の食料用に飼育しているのかのっ。さぞかし鶏もうさぎもたくさんおったのだろっ）

（彦衛門さま、いえ、あの数羽ずつでした）

（ほう～、貴重品だのっ。師匠の食料かのっ）

（それとも、僕みたいに虚弱な子に生卵を食わせるためとか）

（虎之介殿も、肺病には滋養第一と生卵を召し上がられてたのですね）

（はい、いえ、そろそろ物資欠乏が始まっておりまして、僕が療養とはいえ戦中行く宛もなく親元におりました頃には配給制度も始まり、かといって都内で誰もが鶏を飼っていたわけではなく、雌鳥の若いのを両親は分けて貰ったのですが、一羽では毎日たまごを産み続けてくれるわけでもなく）

（そういえば日本人は生卵を召し上がるのですね。あれはわたくし、気持ち悪くて）

（カテリーヌさん、仏蘭西人もえすかるごを召し上がるであろう。我が輩はあれは苦手でござる）

（えすかるごって何ですか。美味しそうな名前に聞こえます）

（ユリさん、貴女もきっと気に食わぬ、否、食えぬ筈でござる。なめくじ、じゃなくて、貝に入った、ほら、そこの紫陽花にいる、あっ、まいまい、でしたかな。そう、えすかるごとはまいまいでござる）

（まぁ、カテリーヌさま、まいまいをお召し上がりになってらしたんですかっ）

（あら、美味しゅうございますわよ。バターでいためたり、ケチャップで煮たり）

（ほうっ、それぞれ違う物を食べるものだのっ）

（文化の違いでござるな。違う文化を野蛮と思うか、崇拝するか、受容の程度こそ受容する側の文化度なのでござろう、という結論に我が輩は達しました。ただ、受容するということは食せるということとは別の物とも思っておりますな。生卵を食べようとまいまいを食べようと、そういう文化があるということでしかなく、そういう文化だから素晴らしいとか野蛮だとか、そう考えるからことがややこしくなるのでござろう）

（まぁ、人間、自分の基準で他人を判断しがちでのっ）

（わたくしも、江戸、いえ東京に参りましてから、言葉や風習の違いに苦労いたしました。薩摩言葉は乱暴、薩摩言葉を話すおごじょ、おなごは田舎者だのなんだかんだと言われておりました。田舎者と言われて、はいそうです薩摩は田舎です、と開き治れるまで随分時間がかかりましたわ。わたくしにとりまして、薩摩はわたくしの故郷、素晴らしいところ、それをご存知ない方に田舎者と言われて悲しみ、でも、気付いたのですわ。田舎者という言葉をおっしゃる方が田舎というものを下に見ている、田舎を下に見るという文化しかお持ちでない可哀想な方なんです、と）

（マサさま、ユリの父は越後の出です。明治になってからは、日本のあちらこちらから上京してらした方々ばかりでしたでしょ。江戸の頃からの江戸育ちの方より、江戸育ちでない方々の方がよっぽど多かったんじゃございません。ですから三台目江戸っ子などという言葉もございましたし。田舎者ということをおっしゃってらした方々も田舎者だったのかもしれませんわ。哀しいことですけれど、あちらの世界にいると、よその方を下に見ることでしか自分を下に見ない術がないと思ってらっしゃる方々が多いんですもの）

（そうそう、男か女か、餓鬼か大人か老人か、金があるか貧乏か、学があるか無学か、地位があるか庶民か、医者か乞食か官僚か、家系が良いか家系が辿れないか、嫡子か庶子か、容姿が良いか悪いか、基準を作って枠にはめて誰が下だとか上だとか、他人を判断して安心する。こちらに来ちゃえば関係ない、たぶん、本当はあちらの世界でも、誰が上とか下とか、無い方が楽だよね。本当に大事なのは、性格なのかもしれないって、僕は思う。じゃぁいい性格って何かって考えると、これ、難しいんだけれど、まだ結論でていないんだけれど、たぶん、違う物を受け入れる余裕のある性格、なのかな、って思う。財産や容姿や学歴が違うから別の種類の人間だって思うのって、なぜなんだろうね）

（我が祖国亜米利加では肌の色の違いがひいては戦にまでなりましたが。日本に参りましてからは、金髪碧眼の我輩ではともかく逃げられる。こちらが日本語で話してもぼんやりされる。八百屋の爺さんだけが日本語の話相手でした。あの爺さんは江戸っ子、最初の内こそ我輩を目にすると、それまで曲がっていた背中をぴんと伸ばして、顔を上げて睨むようにしておりましたが、我輩の日本語を面白がるようになってからは、あの爺さんだけは日本の生活の中で我輩を同じ人間として扱ってくれた日本人でした）

（福沢諭吉爺が学問のすゝめで、天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと書いてただろう。逆に言えば、人がそうしていたから嘆いていたんだろうね。でも、爺ですら、生まれた時には差は無いけれど、生きている内に差ができるのは学問故、とも言ってるしなぁ、だから学問を勧めたってことなんだけれど。それに、男に生まれるか女に生まれるか金持ちの家に生まれるか貧乏人の家に生まれるかで、学問の機会も違うだろうし。どこに生まれるかは選べないし。士農工商の別がはっきりしていた江戸では親と同じ職に就くと決まっていたようなもので、明治になってからは職は選べるってことになったけれど、限界あったしね）

（うふふ）

（ユリちゃん、何がおかしいんだい）
（ユリね、福沢諭吉さまのその書物、表紙だけは目にしたことあるんです。学問は読めたんですが、すゝめが読めなくて、すずめとか、すっめとか読んで大笑いされたんです。ですから、中身は知らなくても、その表紙は覚えています）
（明治の御代は驚天動地、下克上、上を下への大騒ぎ、あらゆる枠が外されたような時代だったというのは錯覚だったがのっ。巧く立ち回れるかが勝負の決めてだったのかのっ。金を儲ける奴がいりゃ、儲ける術を無くす者もいた。太平な江戸三百年近くの生きる術では生きられなかったのっ）
（だんなさ～お金がなければこのセミテリオは買えませんでした）
（そうだったの。私が死ぬことを見越して、マサは早めにここを買っていたものな）
（セミテリオに入らなくても人は死ぬだろ、どこで死ぬかなんてわからないし）
（我輩は突然殺されましたしな）
（戦があれば死人が出る。死人を埋葬する暇もないということも古今東西枚挙なしですな）
（江戸の頃からの江戸っ子は、薩長土肥のものを馬鹿にする。まぁ、怖かったのかもしれんがの。知らぬものは怖いもの。見慣れぬものは怖いものだからの）
（眉毛が、毛が濃い、肌の色が黒い、目が飛び出てる、言葉が違う、風習が違う、もう、何でもかんでも、田舎者という言葉でくくられて、悔しかったり哀しかったり）
（カテリーヌさん、貴女はそれほどでもなかったでしょうかな。仏蘭西は江戸幕府と外交関係がありましたし、貴女のご主人は英吉利で、これまた薩摩と戦って勝ってますしな。我が輩の米国も、ペルリ以降怖がられてはおりましたが、なにしろ仏蘭西や英吉利からすれば二等国家、西洋人の間でのそのような階層が日本人の間にも通じていたようで、我が輩が亜米利加人だと知ると、やや下にみたよ

うな、もしかすると、薩摩の方々と我が輩は、前からの江戸っ子にしてみれば同じ余所者、勝手に江戸にやってきて我が物顔をする輩だったのかもしれませんな）

（ユリちゃん、鶏小屋の話の続きは）

（あら、ごめんなさい。わたくし、だんなさ～ともう少し思出話に花咲かせとうございますわ。鶏小屋と言えば、だんなさ～、覚えてらっしゃいますかしら、もう五十年以上前のこと、悦が朝子と克子と朝子の子綾子を連れてセミテリオに参って、ほら、すぐそこでお昼をご一緒したこと）

（おうおう、そういうこともあったの。重箱がいくつも並んで、のり巻きやお稲荷、卵焼きや蒲鉾や竹輪、たくあん、煮しめなど、ああ、あの卵焼きのことかのっ）

（いえ、あの時、わたくし達、迷いましたでしょ、誰に乗るか。娘の悦か、孫の朝子か克子か、それとも幼い綾子にするか、って）

（おうおう、そうだったの。それで、朝子に乗ったんだった）

（それでしばらく滞在しておりましたでしょ。朝子の家はあの頃三田にございましたでしょ。朝子の家には鶏小屋がございました。覚えてらっしゃいますかしら。ほら、市電、いえあの頃は近くを都電が走っていて、綾子の通う幼稚園には牛がいました）

（おう、あれはもう戦後随分経っていたのっ。あの牛は何の為だったのかのっ。あの鶏小屋は卵のためだったと記憶しておるが）

（そうでした。朝子が毎日たまごを取りに中に入って行って。でも幼い綾子は鶏が怖くて、外から葉っぱを差し出して、鶏がついばむ直前に葉っぱから手を離してましたその様子が可愛らしくて。指先をついばまれると大泣きしてましたわね）

（綾子はよく泣く子だったからの）

（もしかして、わたくし達が朝子に乗っているのを気づいてたからでしょうか）

（さぁなぁ、幼子は感が強いからの）

（それで、鶏もだんだん卵を産めなくなり、朝子は、情けない事に

自分では捌けないらしく、生きたまま鶏をお肉屋さんに持って行き、絞めてもらって、綾子の誕生日に洋風の鶏料理を作ってましたっけ）

（鶏料理といえば、麹町の武人は、鶏飯が好きで、私同様自分で料理しておったの）

（そうそう、兄の所には、悦を行儀見習いで預けておりましたでしょ。あの頃、悦が申しておりましたわ。おじさまは卵料理が好きで、けれど生卵にこだわって、黄身がぷっくりもりあがり、黄身に混じりけが無いものを食さねばならぬと、毎日いくつも卵を割っていたそうですわ。それで割ったけれど兄が食べなかった卵がいくつもあるので、毎日出汁巻きを作っていたそうです）

（武人は薩摩の頃、我が輩同様藩校で学んでいた頃から、少し胃腸が弱くての、生卵にあたったことも何度かあって、慎重になっていたのであろうのっ。あの頃は、割った卵がややおかしかろうと、食べないなどとはもったいないからの、少しぐらい傷んでおっても食べてしまったからの）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その七（後書き）

お楽しみ頂けましたなら、幸いです。その八は9月1日までにはアップいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その八

（ユリちゃん、なんかおじいちゃんとおばあちゃんの話、とっても横道入りしているよね。で、小学校のお話は）

（あっ、そうでした、卵じゃなくて、鶏小屋と兎小屋のことでした。鶏も兎も、生活科用みたいでした。体育の後の授業でちらっとそういうお話していました）

（その学科で調理をして食べるわけだの）

（生活科とはなんぞや。我が輩、左様な学科名を耳にしたことはござりませぬ。哲学数学天文学科学化学物理学地学生物学経済学政治学文学史学人類学歯学薬学医学他にも色々ござろうが、生活科とははてさてこれまた何のことやら）

（読み書き算盤、修身読書作文習字算術体操、国史地理唱歌武道図画工作裁縫、農業工業商業水産業軍事教練外国語、どれでもないのかい）

（家政ってございませんでしたかしら）

（家政、家の政、つまり炊事掃除洗濯倹約信心の道かのっ、やはり鶏も兎も食用だのっ）

（そうそう、マサさま、それみたいな、あら、でも違うかしら、食べるためじゃなくて、観察のためみたいです。あと、世話もかしら。でも世話は、世話係のこども達だけみたいでしたし。一寸待ってください、まだ三時間目の体育のお話ですわ。え～と、でも、もういいかしら。後、あっ、カテリーヌさま、あのね、幼稚園と同じで、鉄棒がありました。あと自動車の車輪の外側の、ちょっと軟らかくて黒い、何と言うんでしたっけ）

（ユリちゃん、タイヤのことだろ。僕が聞いたところでは、足袋屋の石橋さんという人が作ったそうな。名前を逆にして橋ブリッヂに石ストンを付けてブリッヂストンという会社を作ったそうだ）

（虎ちゃんありがとう、そのタイヤが半分埋まってたくさん並んで

いて、その上を休み時間になると、こども達がとんだり歩いたりしてました）

（ほうっ、タイヤのセミテリオ、生き埋めかのっ、タイヤの霊園でこどもが遊ぶ）

（だんなさ～、タイヤにも生命があるのでしょうか）

（カテリーヌさま、幼稚園でもユリが名前を思い出せなかった丸太のはありませんでした）

（ユリちゃん、どんなもの）

（虎ちゃんたぶん知ってるわ。長い丸太の両端を太い縄で結わいて、上から吊るしてあるの。みんなでまたがって、木の長さの方向に前後に揺らしてっての）

（ああ、遊動円木だね。うん、あれは面白い）

（あっ、そうです。虎ちゃんありがとう。幼稚園で見かけなかった時から名前を思い出せなくて気になってたんです。ユリは幼い時には遊ばしてもらえたけれど、お着物だと女の子はまたげないし、横座りすると危ないから、大きくなってからは男の子がうらやましかったんです）

（とめておいて上を歩くってのもやったっけ。急に揺らされて落ちちゃったりしてね。へぇ、小学校になかったの。あれ、どこに行ってもあったと思うけれど）

（はい、ありませんでした。鉄棒はたぁくさん、高さの違うのが並んでました。ぶらんこもなかったです）

（私は鶏と兎にこだわっておるのだが、食べるためではなく観察のためとは何と贅沢な）

（彦衛門さま、マサさま、カテリーヌさま、ロバートさま、虎ちゃん、みなさま最近のご旅行で、鶏や兎をご覧になりましたかしら。この辺りではご覧になれませんでしょ。小学校のこども達は、学校でしか見られないようでしたわ。後は動物園ぐらいなのかしら）

（まぁ、それでは今のあちらの世界の方々は兎も鶏もお召し上がりにならなくなったのでしょうか）

（いえ、そんなことないと思います。カテリーヌさん、覚えてらっしゃるでしょ、ほら、あそこの商店街でお肉屋さんに寄りましたでしょ。あの時、牛肉、豚肉、鶏肉売ってましたもの）

（ほうっ、すると、江戸、否、東京ではないどこかで牛も豚も鶏も飼っているんだのっ）

（そうみたいです。産地が書いてありました。豚肉はね、薩摩の黒豚が一番高い値段が付いていました。一番安いのは亜米利加だったかしら）

（彦衛門殿には喜ばしいことですな。我が輩はちと納得行きませぬ。何故、我が祖国亜米利加よりも近い薩摩の肉の方が高いのでござろうか）

（豚肉だけじゃないんです。牛肉もどこだったかしら飛騨や兵庫のが高くて亜米利加のは安かったです。鶏肉は宮崎のが高くて伯刺西爾のが安かったです）

（伯刺西爾・・・こちらに来る前から武人殿が渡りたがっておるところだのっ）

（だんなさ～、兄は、死ぬ前に一目と申しておりましたのに、かないませんでしたから）

（あっ、そういえば、伯刺西爾のお子様も、小学校の上の学年にいるみたいです。え～と、カタリナちゃんが話してました。日本語じゃない言葉でした。色の黒い女の子と色の白い男の子で、でも姉と弟なんですって）

（ほうっ、そのどちらかに巧く乗れれば、武人殿も伯刺西爾に渡れるやもしれぬのっ）

（我が輩の記憶に間違いなければ、先の大戦で亜米利加は日本に勝ったのだが、その亜米利加の肉が日本の肉より安いとは、いかがなものか）

（左様でございますわね。楊貴妃が荔枝や桃を取り寄せたから唐は亡びたのでしたわね。それくらいに大変だということでございましょ。日本も亡びてしまうのかしら。亜米利加や伯刺西爾から牛や豚

や鶏を黒船に乗せてくると、途中の餌や水もかかりますわね。大変ですわね）

（安いと売れる、薄利多売、少ないものは高く売れるからじゃないのかなぁ）

（仏蘭西の葡萄酒や香水は、日本にはあの頃少なかったですから、少し運んでくると高く売れたそうです、夫が申しておりました）

（つまり、薩摩の黒豚は少ないから高くなる、ということかの、そういえば、私の頃、あちらには豚はたくさんいたが、江戸には少なかったのっ。江戸人は肉を好まなかったのかのっ）

（豚や牛や鶏がたくさん乗った船って、なんだかにぎやかで臭そうです。伯剌西爾って、地球の反対側のお国でしょ。日本から一番遠い国ですよね。卵を積めば、日本に着く頃には食べごろの若鶏になってるのかしら。あらっ、ユリったら、自分で話を逸らしてしまってます。もう・・・）

（ユリちゃん、時代が違うから、もしかしたら、飛行機に乗ってくるのかもしれないよ。飛行機だと卵を積んだんじゃ間に合わないね）

（うわっ、飛行機に乗るんですか。ユリ、乗ったことないのに。牛や豚や鶏が飛行機に乗るんですか。鶏は飛べないのに、空を飛ぶんですか。虎ちゃん、からかわないでよ）

（僕、中学の時に飛んだんだ。人間で飛べないけどね）

（ほう、屋根から飛ぼうとして落ちたとか）

（いえ、浦和高等学校の航空部にいた従兄に、乗せてもらったことが一度だけあるんです。戦闘機じゃなくて、グライダーってやつ。ふんわりふわぁって感じで、気持ち良かったですよ。ユリちゃん、パチンコ知ってるだろう。ゴムで石を飛ばすの）

（知ってます。でも、ユリは女の子ですから、そんな乱暴なことしたことありませんっ）

（パチンコの石になって飛ぶんだ）

（石なんかになりたくないですっ。もう、話を元に戻しますっ。それで、その生活科です。きれいな教科書にね、地球の絵があって、

その中の日本があって、そこまでは教科書に書いてあるんです。そこから先は、こども達が自分で書くんです。教科書にですよぉ。地球の絵のまわりに、同じ学校にいるお友達はどこから来たのかな、って書いてあって、そこに、名前や国の名前も書くようになってるんです。ジミニちゃんやカタリナちゃんも書いてありましたし、何年生のだれだれっていくつも書いてありました。それから、日本の中の東京都、東京との中の桜山区、桜山区の中の自分たちの学校のまわりを調べようって。今までにお店や動物は調べてあって、先週の宿題がお花や木を調べてくるってので、それの発表でした。その時にね、発表したのを先生が黒板に書かれて、みんなは自分の前の紙に書いて行きました。どこに何があったかって。その地図を見てユリね、帰りたくなってしまったんです。だって地図の右端に霊園、セミテリオって書いてあるんですよ。こんなに近くにいるのに、カテリーヌさんと離れてしまって、寂しくなってきて、ぼんやりしていたんです。授業受けているわけじゃないでしょ。ユリはぼんやりしてたって廊下に立たされたり居残りさせられませんし。班別に発表していって、びわちゃんの班の発表になって、びわちゃんが話始めたからユリも引き戻されたんですけれど、あのままぼんやりしていたら、もしかしたらここに戻れたのかなぁなんて、一人で気落ちしていたんです。で、びわちゃんが、びわちゃんとカタリナちゃんとジミニちゃんと彩香ちゃんで見つけたお花や木の名前を発表したんです。桜や柏や桐や欅や梅や松や、菫や蒲公英や紫陽花や薔薇や百合やたちあおい、露草、もう他の班の発表で出て来たものばかりでしたから、そろそろ終わるのかな、って思ってたら、どんどん続くんです。むくげ、カーネーション、後はユリも名前覚えきれないお花がいくつか続いて、それから向日葵・・・ここでね、学級の中がざわめいたんです。向日葵って夏の花なのに、あるわけないよぉ、とかね。で、先生が静かにしろっ、って。それでびわちゃんが続けたんです。ブーなんとかとか、テンなんとか、とか、あっ、覚えているのは胡蝶蘭・・・ユリの知らないお花の名前が黒板にたくさん

並びました。そしたら先生が、どこで見つけたのかな、って。で、彩香ちゃんが、私のお家です。池田先生のお顔が一瞬ゆがんで、学級の何人かがずる～い、家たってお庭じゃなくてお店でしょ、花屋さんだもん、花がたくさんあるに決まってるよぉ、って言い出して、びわちゃんに乗っているユリ、なんだか自分が責められているみたいな気分でした。先生が苦笑なさって、たしかにお店には花がいっぱいあるけれど、う～ん、先生の宿題の出し方が悪かったかな。ごめんなさい。なんで先生が謝るのか不思議でした。え～と、どれがお店にだけあった花かな、って先生がお尋ねになって、黒板に書いた花の名前の上に何本か線を引かれました。生活科はね、午後にももう一時間あったんです。自分達の地図を完成させようってことで。こういう授業でしたけれど、生活科って家政とも違いますよね）

（生物学かなぁ。でもお店も書き込んだんだろ）

（お店はもう書き込んでありました。あと動物も。だから、烏や鳩や雀や燕や、燕はどこに巣があるか、ってのも。あっ、校庭の兎と鶏もね。それから、どこに犬がいるとか猫がいるとか、ってのも。あと、蟻とか蛞蝓、蝸牛、蜘蛛とか、蠅や蚊、蜚？も毛虫も蝶々も、あっ、蝙蝠が、霊園の辺りにたくさん書いてありました）

（そんなのどこにでもいるだろう）

（はい、でも、見つけた場所ですから、それに、ユリが書いたわけじゃないです）

（そういえば、仏蘭西でも蝙蝠はお墓や教会の辺りによくいましたわ）

（そりゃそうですな。鶏以外は飛んでいますからな。おっと、また余計な口をはさみました。ユリさんが怖い顔してます）

（生活科二時間の間がお昼で、お当番さんが白い服着てから、どこかから、なんて言うのかしら。台に車輪がついているの）

（荷車かな）

（いえ、あんな大きくないんですけれど、二段になっていて、食器や牛乳やお食事が乗っていて、それをお教室の前まで運んでから、

車輪を動かないようにして、お当番さんじゃないこども達は列になって、順番にお盆を持って、お当番さんにご飯やお汁やおかずをよそってもらって、牛乳もコップに注いでもらって、席に戻って、みんなでいただきます、って。ご飯はね、真っ白だったの。おかわりしてもいいみたいでした。それから小さい入れ物に入った納豆と、キャベツともやしと豚肉の炒めたみたいなの。あっ、いやだなぁ、あの豚肉は飛行機に乗ってきた豚さんなのか、それとも船に乗ってきたのかって、気になってしまいます。え～と、あと、寒天で固めたみたいな蜜柑もありました。あっ、お箸とコップはお家から持ってきてました。ですから大きさも色もまちまちでした。お食事中は前の黒板の上から音楽やお話が聞こえました。ラデオみたいでした。お食事が終わると、お当番さんは牛乳の入っていたこのくらいの紙の箱、全部で八つぐらいあったんですけれど、水道で洗って窓際にさかさまにして、前の日の乾かしてあったのを鋏で切り開いて、一緒に車のついた台で運んで行きました。それからお休み時間なんですけれど、みんな歯を磨いていました）

（歯を磨く、懐かしいですわ）

（然様、あちらの世界でこその習慣ですのっ。こちらでは、食べない飲まない出さない磨かない。便利というか味気ない、もちろん味もわからない、けれど匂いは分かるからのっ）

（彦衛門さまがお口を挟んだこの機会を逃さず、わたくしも一つ質問させてくださいな。牛乳の入っていたその入れ物、紙なんでございましょ。牛乳を入れて、漏れないものなのでしょうか。それと、洗うまではわかるのですが、どうして一日干して、そのあと切るのでしょうか）

（えこって言ってました。鋏を使うでしょ。ですから先生が横にいらして、その時にこどもの一人が家でもお母さんがこれやってるけど、どうしていつもこれやるの、って質問していて、先生が、えこだからって）

（えことはなんのことでしょう）

（英語ですと、こだま、やまびこみたいなものですな。箱を切るとやまびこ、これはありえませんな。えこのみぃ、経済ですかな。しかしわかりませんな、何故、牛乳の箱を洗って乾かして切り開くと経済なのか。切らないでそのまま使えばそれこそ経済。おっと、我が輩がこちらの世界に参る前にえころじぃという学問が始まったのだが、あれは生物と環境の関係がというもので、牛乳は牛が作り、その牛乳のいれものは人間が作り、いや、えことはたしか希臘で家という意味だが）

（またまた家政学かのっ）

（牛乳の箱を洗って干して切り開いて、何かに使うのでしょうかねぇ。お酒やお醤油の瓶でしたらわたくしも洗って、ご用聞きの酒屋さんに返すと、次の代金から僅かばかりお安くなってましたが）

（瓶ではこども達には危ないですわ。あっ、でも、あのお昼ご飯のお皿ね、陶器なんですよ。でも、割れませんでした。こども達がぶつかっちゃって、持っていたお盆を落として、中身はこぼれたんですけれど、お盆もお皿もコップも割れませんでした。床が軟らかいからかしら。陶器なのに割れないなんて）

（わたくし、まだ気になることがあるのですが、ユリさん、もう少しいいかしら）

（マサさま、どうぞご遠慮なさらず。もう、ユリ、慣れてきました。みなさまとっても知りたがり屋さんばかりなんですものね。ユリもそうですけれど、だからわたくしたち長生き、あらっ、生きているわけではないですけれど、こちらの世界に留まれているのですもの）

（あのぉ、ごはんは真っ白で、おかわりが構わなくて、それで学級に三十人ぐらいでしたっけ。それってお米もたいへんですわね。今の日本って大層豊かになったんですわね。校庭で兎や鶏を飼っていても食べなくて。それに、蜜柑ですか。初夏に蜜柑とは贅沢ですわね。それで、気になりましたのは、ご飯と蜜柑と牛乳という組み合わせです。ご飯と牛乳も、ご飯と蜜柑も合わないと思うのはわたくしだけでしょうか）

（ご飯と牛乳というのは、我が輩は馴染みがありますな。牛乳でご飯をゆでるという料理もありましてな）
（わたくしも存じておりますわ。え～と日本語でなんでしたか、あっ、肉桂です、とお砂糖をちょっぴりかけて頂くと美味しゅうございます。仏蘭西ではお食事の後に珈琲と頂きましたわ）
（ほうっ）
（牛乳は滋養に満ちてと言われて、飲むように言われて、でもあの匂いが苦手で、わたくしなど鼻をつまんで頂きましたわ）
（蜜柑の方は、ユリも牛乳と一緒なんて信じられませんでした。だって、蜜柑を頂いてから牛乳を飲むと、気持ち悪くなりますでしょ。あっ、でも、寒天寄せみたいなので、蜜柑そのものではなくて）
（納豆を昼に、というのも僕には不思議な気がする。納豆って朝ご飯だろ）
（虎ちゃん、世の中もいろいろ、時代も違うし。あちらの世界の頃のユリでしたら、バンカラなんて汚い格好、ユリには耐えられませんでしたし）
（これは、そのぉ、あの頃の僕たちのお洒落というよりも、あのねぇ、銭湯代がもったいない。それに、寮だと男ばかりだからほころびても縫ってくれる優しい女性はいないし、新しい着物や袴、制服を親に作ってもらったり買ってもらうのは気が引けるし、新しいのを着ると目立つし。おっと、誤解を招いているかな。僕、実際に高等学校に行っていた頃には、もうバンカラはほとんど無かった。ゲートル巻いて軍服に似たのを着ていたよ。ただね、僕の僕に対する理想というかあるべき姿がバンカラなんで、それでこういう格好をしている訳）
（服がほつれていたら繕ってさしあげるべし、女は殿方の世話をすべし、それを喜びとすべし、なんてね。お裁縫も母から習いましたし。でも、どうして女はそうしなきゃいけないの）
（う～ん、みんながそうするから、だからそうすべきだって思うから、そうしないと仲間外れにされるから、嫁に行けないから）

（ユリはね、お見合いの前にこちらに来てしまいましたけれど、結婚してもそういうことをしなきゃならない、とは思ってませんでした。だって、たぶん、女中が一緒に嫁ぎ先に来る筈でした）

（ってことは、ユリちゃんは、女中がそういうことをするべきだ、って思ってたんだろう）

（だって、女中は住む場所があって、食事もあって、でしょ）

（それはユリちゃんがそういうものだって思ってるからだろう。結婚すれば旦那の稼ぎで生きていける女房なわけだし）

（でも、それって、女が稼げないから、馬鹿だから、ってこと、ってのも変でしょ）

（そういう風に世の中ができている、いたからだろ。女は子を産んで育てて、男は子育てする女も養う。でも、僕はそうは思っていなかったよ。女に働く場所がない以上、男が養う。連れ添う以上、優しく大切に、って思ってた。見合いすらしなかったってユリちゃんは言うけれど、僕は懸想すらほとんどすることなく肺を病んだしね。高等学校生たるもの、女子は大切にすべし、だったけどなぁ）

（おごじょはもしかしたら殿方より賢いのかもしれませんわ。賢いおごじょに困った殿方がおごじょには教育を受けさせなかった、のかもなどとわたくしは思います。どちらにいたしましても、そういう殿方を育てるおごじょには教育が必要だとわたくしは思いましたから、娘の悦も孫娘もみな女学校を卒業させました）

（う〜ん。やっぱりユリ、わからなくなっちゃいました。でも、いつも思うんです。どうして、こうしなければいけない、そう決まっている、だってみんながそうしてる、考えても無駄だ、ってなっちゃうんでしょう）

（人生、何がどうなるか、分からぬものです。我が輩も少年の頃には日本に来るとは思ってもおりませんでしたしな、ましてや日本で殺されるとは）

（そうだの、私も薩摩からはるばる江戸に出てくるとはな）

（私も巴里郊外でどなたかと結婚してこどもを産んで育てて教会の

墓地に眠ると思っておりました。英吉利人と出会って結婚して日本に来て、異国のセミテリオに三十路で入るとは、思ってもおりませんでした）

（ユリちゃん、一つだけ分かってることがあるよ。こちらの世で長生きしているのは、こうでなければいけない、とは思わない霊たちさ。変って行く世の中を見て、面白がっている僕たちさ。驚くこともあるけれど、いや、驚く事ばかりだけれど、だからいけない、そんなじゃいけない、間違っている、とは思わない僕たちさ。あるがままを受け入れる、受け入れて嘆かない僕たちだよ。だって、あるがままを受け入れられないで嘆いてばかりだと、何もできないのに嘆いていると、消耗してしまうからね）

（たしかにそうですわね。こちらからあちらの世界に文句を申しましても、聞こえるわけもなし、なにもどうにもできませんものね）

（いや、そんなこともないみたい、かもしれないんだ。時々、すごい気力で、自分はここにいるんだ、って主張する者もいるだろう。音をたてたり、あちらの世界の物を動かしたり。それに、ほら、この前ここに来た女の子、え～と琴音ちゃんだっけ、僕たちに気づいていたし）

（幼い子は気づくこと多いみたいですわね。たぶん、ありのままを受け入れるからでしょうか）

（そうですわね。霊なんていやしない、そんなのは気のせいだと思って、そう言われて、だんだんありのまま、あるがままが見えなくなるのかもしれませんわね）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その八（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
お楽しみ頂けましたなら幸いです。
次話は９月８日にアップいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その九

（ユリ、こういうお話より、あるがままの見たままをお話する方が楽です。元に戻して続けさせてくださいませ）
（大歓迎ですのっ。歯磨きから話がまただいぶ逸れましたのっ）
（はい、で、歯磨きが終わったらお休み時間で、外に行って走り廻る子や、お教室でご本を読んだりおしゃべりしたり、黒板に絵を描いたり、今の内に宿題終わらす、ってがんばってた子も。そうそう、教科書に落書きしている子もいました）
（なんとっ。書物にらくがきだとっ。もったいない）
（ユリもそう思いました。でも止められませんでしょ。あっ、それと、ほら、みなさま、あの亀歩き青年の家にも置いてあった水色の薄くて細長い箱、覚えてらっしゃいますかしら）
（あの亀歩き青年の妹の机の横にあったこのくらいの水色の箱かな）
（そうそう、それ、虎ちゃん。あの女の子の名前、何でしたっけ。ごめんなさい、忘れてしまいました）
（あちらの世界には何億何十億といて、こちらの世界にはもっといて、名前を覚えるのは大変ですからな）
（忘却の彼方ですわ）
（あの水色の箱の中にね、オルガンみたいなのが入っているんですよぉ。びっくりしました。脚で踏むんじゃなくて、口で吹くんです。管を付けてね。それで、お休み時間に、あの水色の箱から出して、数人で一緒に吹いて弾いて遊んでるこども達もいました。お教室の後ろの棚、あっ、これもこどもの名前がそれぞれ書いてあって、そこにあの水色の箱が入っていて、みんなが持っているみたいでした。ほんと、今の日本って裕福なんですね）
（わたくしには、ユリさまも恵まれていると思えるのですよ。ユリさまは尋常小学校でお勉強なさいましたでしょ。わたくしの頃には、おごじょには学は必要ない、でしたもの。今はお子たちは誰でも学

べるのですね）

（ユリは高等小学校にも行かせてもらいました。お勉強はそれほど好きではなかったんですけれど、うふふ。え～と、それで、お休み時間が終わるとお掃除で、お当番さんだけじゃなくてみんなで一緒に。窓を開けて、あっ、この前みなさまであの亀歩き青年の家に行った時、それからカテリーヌさん、この前の隼人君のお家、あそこでもご覧になった窓硝子、昔のと随分違ってましたでしょ。学校のはね、もっと厚くて、もっとしっかりしていて、そうそう、私の頃と比べたら窓が大きくて、ですからお教室の中が明るくて、お掃除するとほこりがきらきら輝いて見えてました。ユリ、なんだか鼻がむずむずしそうになりました。うふふ、私たちってくしゃみできるのかしら、なんてね。お掃除の後は、午前中の続きのお勉強で、その次、そうそう、二年生なのに六時間もあるんですよぉ。六時間目は音楽で、あの水色の箱の中のオルガンみたいなのを使うのかしらと思っておりましたら、使わないんです。贅沢でしょ。使わないのにみんなが持っているなんて。音楽鑑賞だからって、四階にある音楽室って所に行きました。階段もね、木じゃなかったです。音楽室にもお教室と同じようにお机とお椅子が一人ずつのがあって、でも、お教室より広くて、てっぺんの無い大きなピアノや高い脚の木琴や横向きの大きな太鼓や色々な形の楽器が並んでいました。壁には、カテリーヌさまみたいなお服の殿方の怖いお顔の額縁に入った写真がたくさん並んでいました。みなさん虎ちゃんみたいに髪が長くて）

（実は、これも僕の中の僕のあるべき姿でして、先ほども申しましたが、実際に僕が高等学校に通っていた頃には坊主頭でした）

（でも髪の色は茶色や白や金でした。日本人のお顔は御真影もなかったのに。ユリは明治と大正の御真影にお目にかかれましたのよ）

（ほうっ、西洋では昔から写真があったのかのっ）

（おじいちゃん、絵だと思うよ。だって、モーツァルトとかベートーベンっておじいちゃんより百年ぐらい前の人だもの）

（そうです。モーツァルトは墺太利の方、ベートーベンは独逸の方

だったと思います。わたくしが仏蘭西におりました頃にも既に有名でしたわ）

（それで、池田先生がね、このくらいの丸い、いえ、レコードじゃないです。レコードでしたら目にしたことございます。黒くないんです。銀色かしら。小さくて、きらきら光るんです。その丸いのをどこかに入れたら、びっくりしました。気絶するかと思いました。気絶したらセミテリオに戻れましたのにね。だってね、音楽教室の四隅から蠅の大群が飛び出してくるかと思って怖かったんですよぉ。そしたら、熊ん蜂は飛ぶって音楽でした。その蠅じゃなくて蜂の音は本物ではなくてヴァイオリンの音だそうです。それともう一曲聞きました。今度はピアノの音で、土耳古行進曲でした。モーツァルトって人のとベートーベンって人のを両方聞きました。先生が、壁の上の方の写真を指して、この細くて若い人がモーツァルト、この白髪を振り乱して目がぎょろっとしている人がベートーベン、って説明してらっしゃいました）

（しかし、なんだのっ、塊土利と独逸の御仁が土耳古の行進曲とは、どういうことかのっ、土耳古は人気の国なのかのっ）

（さぁ。びわちゃんのお隣の男の子は、蜂の大群の音にもめげずっていうのかしら、気にしていなくて、教科書をぱらぱらめくるから、ユリは覗いて見ていたのですが、日本の曲はみつけられませんでした。ユリが尋常小学校の二年生だった頃どんな歌を教わったかなって、日の丸の旗とか案山子とかだったかしら、日本の歌ばっかりでしたのに。あっ、日の丸の旗の歌はなかったけれど、一番最後の頁に君が代は載っていました。運動会の前に練習しましょうって、校歌と君が代を一度だけみんなで歌っていました。あの歌は変らないままなんですね。でも、なんだか、言葉は同じでしたが、調子が少し違った様な気がしました）

（あれは元は薩摩の恋歌でのっ）

（万葉集の詠み人知らずだって、僕聞いたけど）

（左様かのっ、薩摩人が好きな歌での、島津の初代のお殿様が好き

な歌だと思ったが。好きなおごじょにいつまでも長生きしてほしい、という歌だのっ、いや、好きな青年がという説もござったのっ、いづれにせよ恋歌だのっ。薩摩藩士が明治政府最初の軍楽隊となって演奏した筈だのっ）

（曲は外国の方がお作りになったのではなかったかしら）

（英吉利公使館のフェントン氏が苦労なさったとは、我が輩も耳にしたことはござるが、その曲では歌い辛いとかで、次に独逸のエッケルトが編曲したのではなかったろうか）

（ロバート殿、お詳しいのっ）

（我輩来日のたかだか四半世紀程前のことですからな。明治政府にはお抱え外国人がまだ多かった、とはいえ、いわゆる西洋文明国の中で二流国亜米利加の国民、いえ当時は外交官といたしましては、色々と異人の活動は気になることでしたからな）

（あのぉ、それで音楽の授業は終わって、みんなで一階のお教室まで戻って、そこで宿題や連絡のまとめをして、さようならをして、みんなお家に帰るんだなぁ、ユリもセミテリオに帰りたいなぁ、カテリーヌさまは大丈夫だったかしらなんて思っていて、帰る方法を探っていたんです。そしたらね、お家に帰らないんですよね。あっ、学校は出たんです。朝と一緒で、ジミニちゃんとカタリナちゃんと彩香ちゃんとおとなりのお教室の子と一緒にね。カタリナちゃんはお隣のお教室の子と体操教室に行くからってそこで別れて、あっ、そうでした。あのね、さようならって言わないんです。みんなバイバイ、なんです）

（校門で何を売り買いするのかのっ。それとも倍々かの）

（だんなさ～、お別れの言葉でございます）

（おう、グッバイでござるな、そのバイが二つ重なっておる、ふむ）

（びわちゃんとジミニちゃんと彩香ちゃんは手をつないで行きました。道の向こう側に幼稚園と教会が見えて、あっ、昨日はカテリーヌさまとご一緒でしたのに、ユリ一人で寂しいです、って一寸しんみりしていました。それでチェリーに入って行ったんです。チェリ

ーってさくらんぼでしたよね。でも、ほら勧工場みたいなお店です。なんでも売っているような、そこで浅草十二階にありましたが乗せて頂けなかった箱が上がっていくの）

（うひゃっ、僕、ユリちゃんって呼んではいけない気がしてきた。ユリちゃんって浅草十二階知ってるんだぁ。僕が生まれた時にはもう過去の物だったってのに。あれ、僕が生まれる前の震災で崩れたんだからっ。あっ、え～と、それ、エレベーターって言うんだ）

（デパートでエレベーターに乗ると、若い女性が乗っていて、乗る度、降りる度に扉を開けてお辞儀してくださいましたわ。網の様な扉もございましてね。上がる時も下がる時も耳が変になったのを覚えております。狭い所に閉じ込められるのが少し気味悪かったですわ）

（ほうっ）

（そうそう、そのエレベータってのに乗って、チェリーの上の方に行ったの。そこが英語のお教室で、幼稚園みたいに、色々な色のお椅子やお机がありました。びわちゃん達がお靴を脱いで入っていくと、水色の絨毯が敷いてあって、そこの大きな机に異人さんの若い女性と日本人の若い男性がいらして、は～い、って言うんです。するとびわちゃんたちもは～いって言って、ご挨拶みたいでした。ジミニちゃんが、先生暑いよって言って、そしたら男性の方が何か小さい箱みたいなものを手にして天井の方に向けたら、ユリ、びっくりしました。セミテリオにすぐ戻れるほどにはびっくりしなかったのですが、天井から風が吹いてくるんですっ。天井見上げても大きな扇風機があるわけでもなくて、でも、やわらかい風でした。他にも何人かこども達がやってきて、異人さんの女性が黒板、え～と、今度は緑色じゃなくて、白いので、白板かしら。そこに絵と英語の字が書いてあるのをぺたぺた貼っていくんです。磁石みたいでした。白板が磁石なのかしら。大きく書いてある英語の字を読んで、同じくらい大きな絵の英語を言ってるらしかったです。絵の下の方に全部で四つ文字が書いてありました。硬い感じの大きい字と小さい字、

丸っぽくて右に傾いた軟らかい感じの大きい字と小さい字、一つの文字に字が四つあるらしいです。たいへんですわね）

（日本にも色々な書体がござろう。我輩がこちら、いやセミテリオでなはく日本に参った当初はまだ漢字ばかりの文書が多かったが、その漢字にも楷書行書草書隷書他にもござろう。しかも日本語には漢字のみならずひらがなカタカナ、英文字表記もござる。日本語の方がたいへんですな）

（だから、漢字をなくそう、とか、全部横文字表記にしようとか、明治大正時代に言われていたけれど、ほら、僕の頃は逆に全部日本語にしようとしていたんだ。敵性言語とかでね）

（我輩は漢字には苦労させられましたが、慣れると便利至極。何しろぱっと見てぱっとわかる、紙を無駄遣いしないですむ。ただ、タイプライターは、文字数が多い日本語では作れないだろうと思っておりましたがな、最近はあるんですな、驚きました。一台で色々な国の言語が打てるようでしてな）

（ロバート殿、そのタイプライターとは何ぞや）

（紙を挟み文字の小さな板を打ちますと、文章が書ける機械でござる。便利なものでしてな、誰にでも印刷したような文字が打てるのでござる。紙に一行打ちましたなら取手を持ちて右から左に戻す、すると、紙の行が一段下の先頭になる。その時のチンガシャッという音が何とも言えず近代的な音に響きましたな）

（ほうっ、便利なものでござるのっ）

（ユリさま、英語の字なのですが、英語だけではなく、色々な言葉であの字は使いますのよ。わたくしの国、仏蘭西でも同じ字を使いますの）

（貴女のお国では英語にない文字も使いますな。瑞典語、独逸語、西班牙語や葡萄牙語、伊太利亜語にも英語に無い文字がありますからな、英語はＡＢＣの文字数が一番少ないと思います。虎さん、英語は勉強しましたな。疑問文の最後に付くはてな印、西班牙語では文頭に逆さになって付くのでござる）

（へぇ、面白そう、最初から疑問文だと分かるのはいいですね）
（同じ字が色々なお国の言葉で使われるのは、漢字が日本と支那と朝鮮で使われるのと同じなのでしょうか）
（漢字の場合は、その文字で同じ意味なのだと思うが如何でござろう。ＡＢＣの場合は同じとは限らないが）
（ロバート殿は何カ国語も操れるのかのっ、流石、元外交官）
（いえいえ、我輩が操れるのは英語日本語仏蘭西語のみでござる。ただ、？々他国の言語を目にいたしました。おっと、古代羅丁語と古代希臘語も教養として学ばされはいたしましたが）
（お隣は独逸や伊太利亜でしたし、夫は英吉利でした。確かに基本的な文字は同じですが、ロバートさま、希臘は文字が異なりますでしょ）
（然様ですな）
（ユリのお話、続けてもよろしゅうございますかしら）
（はいはいユリちゃん、いやユリ様かなぁ）
（ユリちゃんでいいです。その方が若返ります。それで、白い黒板、変ですわね。白板に貼ったのと同じ絵の歌留多取りしました。ですからユリも少し英語をお勉強したんです。同じ字から始まる言葉が数枚ずつ、それぞれの絵が描いてあるんです。今でもいくつか覚えてますよ。蛇の形をした文字が蛇の言葉の最初の文字で）
（おう、すねーくのＳですな）
（逓信省の記号の上の一本少ないのが、とぅーめーぃとーぅ、トマトのてぃー、でしょ。それで、そのままの音でお茶って意味もある、でしょ。それから、あっぷぅがえいで始まってえいこーんってのがあってこーんってのは唐黍で右側が開いている丸）
（りんごとどんぐりにロバートおじさんの好きな物、しぃの字）
（然様、虎さん覚えていてくださり有り難い。嗚呼、懐かしの我が故郷の味）
（丸はおぅで丸ばつでおうし。縦棒一本が、あいで、私。お魚が上向いて口を開いているのがえむでお猿さん。それぐらいかなぁ、あ

っ、あと書がぶっ、でしょ）

（ユリさん、発音が美しいです。わたくしなど、英語の発音が仏蘭西語式になって苦労いたしました）

（ちゃんと見ていればもっと覚えられたかもしれません。でも、ユリ、どうやったらセミテリオに帰れるか一所懸命考えていたんです。歌留多の中には百合の絵もあったんですけれど、なんだか覚えてませんし。ただね、百合や向日葵やお花って歌留多を見ていて、そういうのはみんな彩香ちゃんがさっと取って行くから、あっ、彩香ちゃん家はお花屋さんだから、なんて納得していて、それで、もしかして、って。セミテリオにお参りにいらっしゃる方々ほとんどお花をお持ちでしょ。もしかしてお花屋さんにいたらセミテリオに帰れるかもしれない、だったら彩香ちゃんに乗れば、って。それで、歌留多取りでびわちゃんと彩香ちゃんの手が重なるのを待っていたんですけれど、一瞬のことなのでうまく行かなくて、それに、もし他のお子に乗ってしまったら、いつまでも帰れなくなるかもしれないのが心配で。折角いい考えだと思ったのに、その後、えむの牛乳としぃのお菓子でおやつになって、次は、食べられる物は、動物園にいるものは、なんて白板に分けて貼っていくお遊びをしたりして、彩香ちゃんにはいつまでも乗り移れなくて、英語のお教室が終わって、エレベーターで一階まで降りて、スーパーチェリーを出たんです。ジミニちゃんを真ん中にはさんで左側に彩香ちゃん、右側にびわちゃんでやっと手をつないでくれたので、お願い、三人とも手を放さないでって祈りながら、びわちゃんからジミニちゃんを通って彩香ちゃんに乗り移りました。そのすぐ後にジミニちゃんがじゃぁね、あんにょんって言って手を放しましたから、間に合ってよかったです。びわちゃんと彩香ちゃんもあんにょんって言ってました。たぶんジミニちゃんのお国でさようなら、なんだと思います。でも、もしジミニちゃんに乗っていたら、韓国のことも色々見てこられたかしら。それとも日本でずっと暮らしているから隼人君家や彩香ちゃん家とあまり変らないのかしら）

（僕ならカタリナちゃんに乗って秘露と日本と混じった生活を見てきたかも）

（虎ちゃんはいいんですっ。乳母日傘で育ったユリには初めての一人旅だったんですから、心細くて寂しくて）

（ユリさま、先日も婆やのことおっしゃってましたでしょ。乳母日傘って、やはりユリさまも上流のお育ちじゃございませんこと）

（カテリーヌさま、違います。ユリの頃の日本は、婆やや女中や丁稚や見習いがたくさんいたんです。女中がいない家は商家では珍しかったと思います。たぶん、上流のご家庭でしたら、執事や運転手などもいたのではないかしら）

（そういえばそうだったような気もいたします。あまり日本のお店には参りませんでしたから存知ませんが。夫の貿易会社にも社員以外にも色々と雑用をこなすまだ少年といったお年頃の子達がいましたわ）

（そうそうそうだったのっ）

（わたくしも、そりゃ薩摩の娘時代にも下女は一人おりましたが、東京に参りましてからは女中が二人。でもだんなさ～が部下を連れて来てご馳走なさること？々。お夕食にはわたくし一人ではとても間に合いませんでした。もっとも、麹町の兄の処など、女中は何人でしたかしら。五人ほどはいたかしら。運転手までおりましたものね）

（ああ、あの運転手、というか一番最初は馬車だったのっ。乗用車になってからは最初の頃は巡査のお迎えだったから。警察をやめてからは自分で雇っていたがな）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その九（後書き）

お読み頂きありがとうございます。
お楽しみ頂けましたなら幸いです。
その十は９月１５日にアップいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その十

（彦衛門さま、マサさま、ユリのお話続けても構いませんかしら）
（おう、すまん、すまん）
（びわちゃんと彩香ちゃんもすぐばいば～い、また明日って、お花屋さんの前でお別れして、彩香ちゃんはお店の中に入って行きました。お花屋さんでしょ。もう色々なお花の香りが甘いの。色も色々。ユリに分かったのは百合と紫陽花と百日草ぐらいで、他のはお名前が書いてあっても、カタカナの長ぁいので覚えられませんでした。あっ、一つだけ覚えています。土耳古桔梗、紫色がきれいでした。青や水色や白や黄色や赤や桃色や橙色のお花がたくさん。お花が大きいのも小さいのがたくさん付いているのも、丸いのや細長いのや蕾ばっかりのも、花が全然ないのも、大きい葉っぱや小さいの細長いの、緑色も濃いのから薄いのまでたくさんあって、そういうのが細長い桶に入っていたり、植木鉢に植わっているのもあったり、お花の先だけ、それも生きていない乾いたみたいなのや布や紙でできたお花がお人形さんと一緒に小さい篭に入っていたり、それから、ほら、よくセミテリオにお持ちになる方が多い、あの透明の薄いのに包まれた花束もお店の道路側に置いてあって、ユリほっとしたんです。たぶんセミテリオにお持ちになる方がここで買われるんだって。ユリの想像通りになりそう、お花と一緒にセミテリオに帰れるわって。おリボンも色とりどり、おリボンや何種類もある色々な柄の包装紙と一緒に針金や鋏や細々としたものや、値段を書く紙やきれいな袋に入った色々なお花の種や球根も少し、大きい篭や小さい篭、三角帽子のお人形さんや大きい木を植えるための結構大きい植木鉢もいくつかあって、兎さんや猫さんや犬さんお猿さんの植木鉢の動物は本物の大きさみたいでした。そういうのも計算する機械の横に置いてありました。計算する機械ってね、これがすごいの。算盤じゃなくて、釦を押すと下の引き出しががしゃんて開いて、中に

お金が見えて、機械が計算してくれて頂いたお金とお釣りが細長い白い紙に印刷されて出てくるんです。先ほどロバートさまがおっしゃった機械とは別のものかしら）

（然様、異なる物ですな。それは私も最近あちらこちらのお店で見かけております。ユリさんがご覧になったのより一層驚異的な物もありました。商品に貼られたり最初から印刷されている何本も並んでいる棒に、本体と繋がった四角いものをあてるとそこが赤く光って、その後、客から受け取ったお札や硬貨を本体の上の部分から入れると、下から釣り銭が出てくるのでござる。あれには最初は感心いたしましたが、どうも、人間が馬鹿になるのではないかと心配でもござる。心配したとて何ができるわけでもないとはいえ）

（ほうっ、便利な世の中になりましたのっ。それでは算術算盤などなくとも職に就ける。学問をする理由はなくなるのかのっ）

（だんなさ～、やはり、自分で計算することは大切かと思います。まだみなさまがそういう機械を持ち歩いているわけではないでしょう。それに、機械は壊れても算盤は壊れません。算盤ぐらいできないと困りますでしょ）

（おばぁちゃん、算盤も壊れることがある。ほら、逆さにして上に乗って廊下をすべる、あれ面白かった。けれど、下の段の玉が四つになったりして、計算できなくなるでしょって叱られたけれど、もう四つになって壊れたから他も四つにしちゃおう、なんてね）

（なんと罰当たりな）

（誰の罰が当るの、太鼓の撥かなぁ）

（虎之介殿、算盤も進化した様でござる。我輩が目にした計算する機械の横には算盤も置いてあってな、どうも我輩が見慣れた物とは異なるのでじっくり見たところ、下の段の玉の数が四つなのだ）

（きっとそのお店の人が遊んで、ついでに全部四つ玉にしたんだ。こどもの頃の僕みたいなのがいるんだね、わはは。それともまさか、亜米利加に占領されて十進法ではなくなったとか）

（虎之介殿、まず最初に、亜米利加が占領したのではなく、連合国

軍であり、英吉利や豪剌太利やまだ独立前の印度軍もおりましたな。今も亜米利加軍は多数日本にいるようでござるが、皆様覚えてらっしゃいませぬか。ここセミテリオにも様々な国の兵士が散歩してましたことを。次に、亜米利加は十進法の国でござる。おっと、一フィートは十二インチ、十進法ではないものもござる。こりゃ困った。あっ、いや、日本も時計は十二時間ずつ計二十四時間で一日ですしな）

（今もまだ占領下なのですかのっ。随分長い）

（いや、占領下ではないらしいのだが、いや、しかし、先日の旅の最中にもそのような新聞を目にいたしました。どこぞで亜米利加軍兵士が自家用車で日本人を轢き殺して逃亡した、司法権が日本にあるのか云々と）

（おっ、それでは私の頃と変わりがないですのっ、やはり占領下ですのっ。私が幼少の頃、江戸幕府は亜米利加や英吉利と妙な条約を結びまして、たしかその頃にも異人の犯罪を幕府は裁けなかったとか。おっ、しかしながらあの頃は占領下ではなかった。異人の強い要請であちこち開港せざるを得ませんでしたがのっ）

（僕の従兄が言っていたけれど、不平等条約を締結せざるを得なかったのは、日本の法律が整備されていないと他国に思われたからだと。だから法整備の為に司法、つまり法学に力を入れる必要があった為に法学を設置する大学が多かったと。僕が法学に興味を持ったのはそれ以来なんですが。僕亡き後にもまだ不平等が続いているようですね、ということは、まだ日本の司法制度は欧羅巴に遅れていると思われているということなのでしょうか）

（彦衛門殿、今はどうもそれ以上らしいのでござる。亜米利加軍基地というものが、日本のあちらこちらにある様で、その基地を減らすとか移転するというのも、どうも日本政府の一存ではできないような仕組みになっているようでござる）

（ほうっ、やはり占領下かのっ、戦に負けたからであろうのっ。印度軍や英吉利軍もまだ日本に駐留しておるのかのっ。あまり兵を目

にせぬが）

（だんなさ～、戦はわたくしもう結構。どうして殿方は戦、戦と殺し合いをなさるのがお好きなのでしょう）

（血が騒ぐというのか、こりゃ間違っておる、正さねばならぬ、と思うわけで）

（正さねばならぬと、どうして思われるのでしょう。他所様には他所様の考え方がございましょうに）

（しかし、誤りは正さねばならぬものでのっ）

（誤りを正すのにどうして戦をせねばならぬのでございましょう。西郷さまは勝さまとお話合いなされて江戸市中での戦は避けられました）

（それでも上野のお山や、會津で戦はあったのっ、西郷さんは西南戦争をしたのっ。マサの兄上も西南戦争では政府側で活躍したのっ。同じ薩摩の出でありながら刃を向けて戦った兵はここセミテリオに幾人も眠っておるしのっ）

（おのこの血が騒ぐのは避けられぬことなのでしょうか。おごじょにはわかりません）

（ユリも戦は嫌いです。日清、日露と十年毎でしたでしょ。父や父のお友達が懐かしそうに勇ましそうなお話をなさってました。提灯行列で街が橙色に染まって歓声があがったのを、母の腕に抱かれて見ていたことをユリもおぼろげに覚えておりますが、こちらの世に参ります前には世界大戦。ユリは恐ろしゅうございました。遠く離れた欧羅巴では多くの方々が戦火に追われ殺されているのだと思うと、生きた心地がいたしませんでした。でも、帝国陸海軍の軍人さんのお姿は凛々しくみえておりました。こういう方々が命を失う戦になど行かずに済めば、戦など起きなければとお祈りいたしておりました）

（日露戦争、戦勝記念提灯行列、懐かしいのぉ。次から次へと宮城に押し寄せて来てのっ、警備がたいへんだったと同僚が申しておったわ。その後、東京市内だけでもいくつも凱旋門ができたのだが、

ユリさんはご存知かのっ）
（はい、京橋にも浅草にも）
（新橋と日比谷にも確かありましたな）
（うわっ、僕見たことないよ。そんなにいくつもあったの。凱旋門って門だから一つでいいのに）
（ほうっ、虎之介殿はご存知ない。さてはこれも大地震か先の大戦で失くなったのかのっ、浅草十二階と同じだのっ）
（凱旋兵を迎える為でしたからな。日本の各地にできたそうです）
（へぇ、そうだったの。それでも僕は一つも見たことないよ）
（凱旋門と言えば、一番著名なのは巴里のですな。作れと命じた本人はくぐれなかった凱旋門）
（あっ、それなら僕も知っている。奈爺でしょ）
（奈爺なら私も名前は聞いたことあるのっ）
（もしかして、それ、仏蘭西の皇帝ナポレオンのことでございますか。日本語では奈爺と言うのですか。今まで存じませんでしたわ。私が奈爺を知らないと申しますと、日本の方々が怪訝なお顔をなさっていたのは、道理で。まぁ、そうだったのですか。私の曾祖父母の頃のお方です。伊太利亜遠征先で凱旋門を目にして、巴里にも作るように命じて、でもご自分がくぐられた時は棺の中だったそうですわ）
（仏蘭西は露西亜と共に大戦を戦いましたの。日本も中国で独逸と戦ってました。日本からわざわざ仏蘭西軍に加わった方もたしかいらっしゃいました。でも、わたくしも戦は嫌いです。ですから、お話を戻させて頂きますわ。仏蘭西では十進法とは違う部分もございますの。八十は四掛ける二十、九十九は四掛ける二十足す十九になるんです）
（やはり算術は必要ですわね。あのぉ、お話を元に戻させていただいて、算盤は小さいですし。持ち歩けますでしょ）
（いや～、マサさま、例の紐が繋がっていない電話、あれにも計算機がついておる。あれは算盤より更に小さい。我輩も驚きました。

あの紐が繋がっていない電話、携帯と呼ぶらしいのだが、そもそも、携帯するものは多いであろうに、何故携帯と皆がよぶのか、ともかくその携帯はこれまたかなり皆が持っておるのだ。ユリさん、びわちゃんや彩香ちゃんは持ってなかったですか）

（ユリは見ていません。でも小学校の中で、たぶんそれかしら。池田先生に何か言われている子がいました。切っておきなさい、って。あんな硬そうなもの、どうやって切るのかしらと思っていました。

鋏の刃が折れてしまいますわよね。それで、彩香ちゃんがただいま～ってお店の奥、その色々な色のおリボンや計算する機械がある所なんですけど、そこの椅子にお母様がいらして、ママお腹空いた。英語教室でおやつ食べたんでしょ、夕ご飯まで待ちなさい、その間に宿題すませちゃいなさいっておっしゃって、彩香ちゃんがつまらなそうな顔して、パパお腹空いた、って言いながら暖簾の奥に入って行ったら、正面に神棚があったんです。神棚見たの、ユリ久しぶりでしたから懐かしくて。でも、神様はいらっしゃるみたいには感じませんでした。ユリが毎日お家で拝んでいた時には神様いらしたって感じてましたのに。お休みだったのかしら。六月は水無月でしたよね。神無月じゃないですよね。あっ、神棚の下ではお父様がテレビジョンみたいなのと英語の字がたくさん並んでいる板みたいなのがくっついたので何かしていました）

（おっ、それですな。ユリさん、先ほど我輩が申し上げた、何語でも書ける機械です）

（はい。でも、数字ばかり書かれてましたわ。お父様は、お帰り、明日の仕入れの予定を作っているから一寸待って、今日は何を勉強したなんておっしゃって、お母様がいらっしゃいませ、何にお使いですかとおっしゃって、お店の入り口の方に向かってらっしゃるのが見えて、そこでユリ気付いたんです。彩香ちゃんに乗っていてもセミテリオには戻れない、なんとかしてお母様に乗せて頂かないとって。彩香ちゃんは明日になったらまた学校に行くから、それまでにお母様に乗り換えしなければ、彩香ちゃんとお母様が手をつなげ

るか、もっとお側に寄ってくださる機会を逃さない様にしなければって。お風呂にでも一緒に入ってくださらないかしら、でも前日、びわちゃんはお一人で入ってらしたしなんて考えておりました。ママ、夕飯なぁに。今日はぴざにするわ。さっきさらだは作っておいたから。ぴざのえるを二つで足りるでしょ。足りないかなぁ。ぐらんまはどれくらい食べるかしら。やっぱり三枚かな。うわっ、嬉しい、やったね、片方は選ばせて、めにゅうどこにあるの。なんだかわからない言葉がいくつも出て来て、あっそうだ、きっとえるってのは英語教室の檸檬の時に出て来た直角の形の字ね、とは思ったのですが。ぴざがなんだかわかりませんし。さらだもわからないですし。その時にすぐわかったのは、彩香ちゃんが見ていためにゅう、お品書きだってでわかったのですが、あっ、そのめにゅうね、とってもきれいなんです。薄っぺらい紙じゃなくて、厚手の紙で、総天然色の印刷でお写真みたいでした。ぴざってのはお好み焼きの豪華なのみたいで、色々な具が乗っていて、それぞれのお写真の下に具の名前が書いてあって、それと蛇の字とえむとえるって書いてあって、値段が書かれてました。大きさを蛇の字とえむとえるで分けているみたいでした）

（我輩は理解できましたぞ。例のＭｃＤｏｎａｌｄ，ｓでもじゃがいもや飲み物が大きさ別にございましたな。蛇の字えすはスモール、小という意味で、えむはミディアム、中という意味で、えるはラージ、大、すなはち、小中大でござる）

（松竹梅ですわね）

（お婆ちゃん鋭い。小中大と松竹梅は似ているっ）

（マサさま、その松と竹と梅の場合、大きさではなく、内容が豪華なことを示しておるのではないかと思うのですが、いかがかな）

（マサさま、わたくしも不思議でございました。松と竹と梅がどうして良いものなのか）

（わたくしもよくは存じませんのよ。お琴の曲とか支那の古典とか噂は耳にいたしましたが。いつ頃のことか、江戸、いえ、東京に参

ってからそれも昭和の御代になりましてから食堂などで等級を表すようになったようです。ですからそれ以前、カテリーヌさまやロバートさまがお耳になさった時には、たぶん、お目出度い三種類ということだったのでは）

（どうしてでしょう）

（ユリも知ってます。松と竹は冬でも緑、梅は冬に咲くからです、ね）

（ユリちゃん、お婆ちゃん、浦和にいた僕の従兄がね、浦和は鰻が名物だとかで鰻屋でごちそうしてくれたことがあって、その時に松竹梅って品書きに書いてあった。松が上なのか梅が上なのかわからなくて、従兄に散財させちゃ申し訳ないと思って、中学生の僕はまんなかの竹を選んだんだ。そしたらね、従兄が、贅沢者め、まっいいか。こんなことは滅多にないし、と言ったんだけれど、その時に、松が上だって説明してくれたよ。松は門松で竹より背が高いだろう、って。でもさ、門松では竹の方が高いのが多い、だろ）

（で、洋食贅沢お好み焼きでは、大きさだけで値段が違うみたいでした。彩香ちゃんはじゃがいもがたくさん乗っているのを選んでいました。あとはお父様が、ぐらんまの好きなのはカレーで、パパはこれがいいかなって、貝や海老がたくさん乗っているのを選んでいました）

（カレー、懐かしい、あれは旨い）

（精養軒で私が頂いたあれはカレーだったのでしょうか。夫が印度のカレーとは別物と申しておりましたが）

（カレーは私も食べましたぞ。カレーライスもカレーうどんも。あの黄色いどろどろさ、妙にてかてか、ところどころに野菜や肉が浮かんでおって、なんとなく似ておるのっ）

（だんなさ～、何をまた）

（それで、お父様がお電話なさって、あっ、お電話も、もちろんぐるぐる取っ手を回すのではなかったんですけれど）

（亀歩き青年が持っていた、あの紐無し電話、だろうのっ）

（いえ、それでもなくて、ちゃんと壁につながっていて、数字の釦を押すんです。それで、ご注文なさって、七時に届けてください、っておしゃって）

（七時に夕飯とは遅いの。私の頃は七時というと酒を飲むか、灯下書を楽しむか酒を飲むか寝るか）

（だんなさ〜、わたくしの頃の昭和には、もう東京市内ではかなり電灯が普及しておりました。家の中でも各部屋に電灯を付けておりました。ほら鶏が朝子の家にいた頃、戦後でしたけれど、わたくしがこちらに参ります頃には、あのくらいには明るい夜でした。綾子が摩奈を生んだ時など、どう申しましょう、こういう、太い紐を円状にしたような明るいラムプがどこのお部屋にもございましたでしょ）

（どーなっの形の事ですな、ほう、確かにあれをどう日本語で表現するのか、我輩にも分かりませぬが、彦衛門殿、ご理解できますかな）

（円盤の中央をくり抜いた形ですのっ、目にいたしましたので、わかります。亜米利加ではあれをどーなっの形とおっしゃるのだのっ。いや、形の方は分かるのだが、マサの言う電灯の普及と私の疑問が噛み合ぬようだのっ）

（いえ、だんなさ〜、わたくしがこちらに参る前には、電灯が普及しておりましたから、夕餉のお時刻が遅くても大丈夫になって参りました。朝子の処はご主人様が官吏でしたからお帰りも早かったので夕餉は七時前でしたが、悦のところは遅かったですわ。昔でしたなら、暗くなる前にお支度を終えないと油がもったいなくて、電灯ももったいないのですけれど）

（なるほど、最近の日本でこどもが少ないのは、どこにでも電灯があるからなのだのっ）

（だんなさ〜、わたくしにはだんなさ〜のお考えに付いていけません）

（つまりだのっ、昔は灯りがもったいないから、早く寝た。今は電

灯を点けてももったいないとは思わないらしいからなのか早寝しないから、子ができぬ、というわけだのっ。マサは五人産んで、悦も五人産んだが、朝子は三人、綾子は一人、どうみても先細りなのは、電灯のせいなのかのっ）

（そういえば、日本には貧乏人の子沢山という言葉がありますな。独り身の我輩には分かりませぬが、しかし、あれはそういうことだったのでしょう、いや、まだ電灯より灯油ラムプでしたし。いや、灯りはいずれにせよ金がかかりますし。はてさて。我輩は貧乏人の子は早死にするから何人も作るということかと、いや、しかし、何人も作ると育てるのに更に貧乏になりますな、これは悪循環ですな。子沢山でなければ更に貧乏になることもなく、生まれた少数のこどもを大切に滋養豊かに育てられますがな。しかしながら、裕福ならば問題ない。我輩は六人兄弟でした）

（おう、ロバート殿も六人ですか。私も六人兄弟でした）

（はい、六人で皆育った。一方、元奴隷の黒人達は、やはり数多く生まれて数多く死んで行きましたしな）

（ロバートさまはカトリックでいらっしゃいましょ。わたくしもそうでしたから、子は神の思し召しですものね）

（ロバート殿、貧乏人の子沢山を見かねた荻野久作博士とおっしゃる方が過度の妊娠を避ける為と、子宝に恵まれない婦人の為に、おごじょが何時みごもるのか、月経との関連を解明なされたのです）

（荻野久作博士、僕の大先輩ですっ）

（あら、虎ちゃんのなの。へぇ～。越後には著名な荻野博士がいらっしゃる、と父が自慢気に語っておりましたが、ユリが、どうして著名なのと尋ねたら、教えて頂けなかったの）

（ユリさん、嫁入り前のお嬢さまにはちょっとね）

（オギノ式として産むため産まぬ為と一人歩きし始めて、わたくしがこちらに参ります直前には、支那で戦争始めてだいぶ経っておりましたし、ＡＢＣＤ包囲網とやらで今にも別のお国とも戦争が始まりそうでしたから、まずは国力増大、人口増やそう、産めよ増やせ

よとなりました）

（天皇の赤子ね。赤紙で招集される。産めよ増やせよと言われるより前に生まれて増えていた僕より少し先輩は片っ端から戦地に送られていく時代でした。同じ赤子でもこちとら末席汚すひ弱な肺病病みだったけれど）

（虎ちゃん、すねてる）

（いやぁ、すねてはいません。どちらにしてもセミテリオ送りだったわけで。戦死者が多かったから戦争は終わり、僕たちが死んだから肺病が解明されて、どちらにしても僕たちの後の世代は死ぬ原因が少しは減ったわけだしね）

（セラヴィ、それが人生。それが人間、次の世代に引き継がれて行くんですね。私の長男も、その子、またその子、その子って、あら、産まれているのかしら。先細りかしら。あら、まただいぶお話が逸れてますわ。ユリさま、ごめんなさい）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その十　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
お楽しみ頂けましたなら幸いです。
その十一は、２２日にアップいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その十一

（いいえ、どういたしまして。え～と、それからびわちゃん、じゃなくて彩香ちゃんは宿題をすることにして、算数の教科書の問題を帳面に解いていきました。一緒にユリもお勉強しようかななんて思ったんですが、ほら、例の長さので、どうもメートルとか何とかメートルとか四種類あって、それぞれ十倍ではなくて、百倍のや千倍のもあって、よく覚えていません。十寸が一尺で、六尺が一間でしたっけ。あら、これも十進法だけじゃないんですね。あら、ユリが逸れてしまいました。算数が終わったら国語の宿題で、これは教科書を二度、声を出して読むのでした。例の、小さいお魚が集まって主人公のお魚が目になって、っていう異国の物語です。彩香ちゃんね、もう何度も読んでいるらしくて、すごぉい早口で読んでいたら、お婆さまが階段を降りていらしたの。彩香ちゃん、それじゃ心がこもっていないわ。まるで早口言葉の練習じゃないの）

（早口言葉、おほほ、となりのきゃくはよくかきくうきゃくだ、とか、ぼうずがびょうぶにじょうずにぼうずのえをかいた、ですわね）

（カテリーヌさんは、日本の早口言葉でからかわれましたかな）

（たけやがたけたてかけた。私には竹屋が何だかわからなかったのっ。竹などどこにでもあったからの。江戸では竹を売る店があるんだと、不思議だったが、今でも江戸、否、東京には竹屋はあるんだろうのっ）

（我輩、来日当初、？々からかわれましてな、汝の早口言葉は舌が回っておらぬとな。舌が回るものかと真剣に考えたこともございましたな。意味がわかるようになると、漢字を思い浮かべてすらすら言えるようになりましたな。最初はどこで切れているのかわからず、そういえば、日本語は単語が離れないで書かれるので難しいのでござる）

（ほうっ、ロバート殿のお国の言葉は、ぶつ切れに書かれるのかの

っ。それは空白が多くて紙の無駄遣いだのっ）
（あのぉ、続けてもいいですよね。ぐらんま、毎日二度もなんだよぉ、それにもう二週間目だから、いやになるの、って彩香ちゃんが言って）
（ぐらんま、と申したましたか。こりゃ驚き桃ノ木山椒の木。流石英語教室で勉強しているからですかな。ぐらんまざぁで祖母という意味なのでして）
（ぐらんま、かのっ。老婆が妙に異人ぽい）
（何語であれ、老婆は老婆、わたくしも老婆、老婆は白髪。それにいたしましても、日本語は乱れているようですわね。孫が祖母に敬語を使わない世は嘆かわしゅうございます）
（嘆くでない。嘆くと消えたくなるからのっ）
（わたくしも老婆ですわ。生年からですと。わたくしの孫はどこにいるのか、何語を話しているのかしら）
（ユリも、老婆、なんですわね。若い姿をしておりましても。彩香ちゃんのお婆様はユリよりお若いんですよね。お婆様が、私は毎朝毎晩お経を唱えているのよ。今日なんか、祥月命日でお墓参りしてきたから、お昼にも唱えたわ。二週間どころか、ぐらんぱが亡くなってからずぅっと欠かさずですよ）
（ぐらんぱ、ですか。ぐらんふぁーざーで祖父ですが、あぁなるほど、ぐらんぱぱ、なんですな。ふむ）
（おっと、ロバート殿が英語に感心しておるご様子）
（ぐらんまのお経は趣味みたいなもんでしょ。からおけに行くのに喉が鍛えられていいって言ってるじゃない、って彩香ちゃんが言って、あのぉ、ぐらんまとぐらんぱは、話の流れでユリにも分かりましたが、からおけって、ロバートさま、何でしょう）
（英語ではないような。カテリーヌさん貴女お判りになりますか。仏蘭西語でしょうか）
（いえ、わたくしの知らない言葉のようですわ。宝石の大きさと英語のＯＫではございませんかしら）

（空桶とは何ぞや）

（風呂桶に水が入っていない処に行くのがご趣味なのでしょうか。喉を鍛えるためのお経ですか。あら、だんなさ～、湯船で歌えば美しく聞こえる、あれかしら。でも、空の桶では楽しくないですわね。江戸ではお水はあまり不足いたしませんのに）

（僕にも聞かないでね。判らないよ）

（ともかく、お婆様が彩香ちゃんを軽く睨んでから、上に行って、ご仏壇の前でお話をぐらんぱに読んでらっしゃいよ、ちゃんとぐらんぱがわかるようにゆっくりねと言われて、彩香ちゃんも、うん、面白いかも、って教科書持って上に上がって行きました。ご仏壇の前に座った彩香ちゃんは、教科書を開いてお膝に乗せ、お座布団に座って、りんをちんと叩いてから読み始めました。段落毎にお座布団から腰を浮かしてちんって鳴らすんですよ。でも、ゆっくり大きい声で読んでいました。私も、学校でのと合わせて聞くのはもう三度目でしたから、ご仏壇を眺めていました。あらぁ、今気付きました。びわちゃん、この宿題してませんでした。いけないんだぁ。あっ、それで、一番手前にお爺様のご位牌、その奥にも三柱ございました。どなたもご仏壇をお留守にしているようでしたから、彩香ちゃんが折角読んでるのにとも思いましたが、たぶんお近くのセミテリオまで届いているのかもしれないわ。ユリもその音に乗って帰りたい。お婆様がセミテリオにいらっしゃるのが明日だったならお婆様に乗れましたのに、なんて思っておりました。途中でお婆様が彩香ちゃんの後ろに座られて、あっ、そこお婆様のお部屋だったらしいんですけれど、にこにこなさってました。その時、階段を下からどなたかが駆け上がってくる気配を感じて、あら、ご先祖様が彩香ちゃんのお話を聞きに戻ってらしたのかしら、とユリが思ってましたら、扉に何かがドンとぶつかって、ご先祖様は豪快な方なんだ、と思う間もなく扉が勝手に開いて大きな白くてふわふわの丸いものがお婆様のお膝に飛び乗ったんです。ユリは目をまんまるにして驚いていたんですよ。すごぉいご先祖様なんだって。なのに彩香ちゃ

んとお婆様は驚かないので、あらっ、ユリにだけ見えているのね、と思ったんです。でも、お二人ともけらけらお笑いになって、ゆきちゃん、また太郎君が来たのねって、その丸くて白いふわふわを撫でるんです。ユリちゃんって言われたのかと思ってユリはもっと驚きました）

（私達の中には白く丸くなる者もおるのかのっ、初耳ですのっ）

（お婆様と彩香ちゃんには、わたくし達がご覧になれるのかしら）

（ユリもね、そう思ったんです。ゆきちゃんはご仏壇の中のご位牌のどなたかで、太郎君もユリ達の仲間かなって。太郎君はどこにいるのかしら。後からゆっくり階段を上ってくるのかしらって。彩香ちゃんが、おしまい、ちんと鳴らして、本読み終わり。ぐらんま、後ではんこ押してねって言って、ゆきちゃ～ん、太郎君怖いんだね。あの格好だもんね。でもあんな格好にしたのは太郎君じゃなくて太郎君のご主人様だからねって言いながら、お婆様のお膝の上の白いふわふわのを撫でたら、返事しました。にゃ～んって。甘え声なんです。猫だったんです。霊じゃなかったです。太郎君怖いんだぁ。でも、ゆきちゃん、小さい頃は太郎君と仲良く遊んでたんだよぉ。太郎君はかふぇのますたーのしゃむからゆきちゃんを守ってくれてたでしょ。ぐらんま、どうしてあんまりかふぇに行かなくなったの。だって、かふぇのますたーとばーばー次郎の次郎さんと同級生だったのはぐらんぱなんだもの。ぐらんぱがご位牌になっちゃったら、なんだか行き辛くて。それにゆきちゃんはしゃむにいじめられるし、あのかっとの太郎君を怖がるし。彩香ちゃんとお婆様はこんなお話をなさってらしたんですけれど、ユリ、チンプンカンプンでした。ゆきちゃん、あんなに大きい真っ白な猫、ユリ初めて見ましたし。かふぇが珈琲店だってのはわかりますけれど、かふぇのますたーって何の事。婆婆なのに次郎って男の人の名前ですし、君とさんと婆とで、次郎さんが太郎君の弟なのか妹なのかわからなかったんです。格好だと思っていたのにかっとって何でしょう。そりゃ、ユリがこちらの世に参りましてから、もう九十年も経ちましたけれど、あち

らの世がこんなにややこしいことになってるなんて、そろそろユリこちらの世界からも消えなさいって言われているのかしら）

（あちらの世では自殺できるけれど、こちらの世では自殺できないからなぁ）

（あちらの世で殺せるのは肉体だけですからのっ。まぁ、祖父母ぐらいまでの記憶はありますからの。孫が生きている内は思い出してくれるとその時だけちょっと元気になりますの。その後は、思い出してくれる方が多いと続くようですの。ですからお釈迦様や耶蘇教の基督様はこちらでも長寿なのですかのっ）

（我輩の場合は、気力と好奇心ですな）

（僕も好奇心で続いている。僕の世代のこちらに急に来ざるを得なかった方々はみなさん石みたいな気で、固まってるみたいだけれど。固まったままを受け入れたらおしまいなのかなぁ。氷みたいでも溶けることもあるみたいだし）

（こんな筈じゃなかったと、ありのままを受け入れられない、ご自分の置かれた気という状態を否定なされば、割と早く消えられる様ですな）

（わたくしもカテリーヌさんもユリさんも、好奇心ですわね。あちらの世がどんななのか、どうなって行くのか気になって気になって面白くて、ですものね。ですから、ユリさま、気落ちなさらないで）

（わたくしもお仲間に寄せてくださいませ。老女とはいえおごじょの身。好奇心は人一倍ですわ）

（大丈夫だよ。音天さんが僕たちのこと気にしてくれている間は僕たちはこの世に居続けられる）

（然し乍ら、音天さんもその内、こちらの世に来るのが定め）

（その頃にはまた新しい音天さんが現れるよ、きっと）

（そうですなっ。我輩の国や西洋社会では魔法使いとか魔女とされる様な方々を、何故か日本は大切にしますからな。巫女や口寄せ、ゆたなどが社会の中で活躍の場を与えられてる不思議な国ですからな）

（そうですわね。わたくしもあちらの世におりました頃には、日本のそこが不気味でした。西班牙ほどではなくとも、耶蘇教の社会では基督さまや聖人さまを除いて、奇跡を起こしたり尋常でない行動は魔女、怪人扱い、奇人変人狂人でしたものね。うっかりすると宗教裁判、破門され社会的に抹殺されたり火あぶり）

（日本でも似た様なお話がございましたのよ。だんなさ～が亡くなられた年だったかしら、熊本の方や長野の判事の奥様が不思議な能力をお持ちだとか、新聞で騒がれておりましたが、たしかお二方とも自害なさいました。インチキ、イカサマ、ペテンだと非難囂々でしたのよ）

（インチキ、イカサマ、ペテン、何語なんだろう、なんだか日本語っぽくないように聞こえるのは僕だけですか）

（英語にも仏蘭西語にもあまりないように思いますが）

（明治の末頃ですかな。もう西洋文明の視点が日本にも浸透しておりましたからな。残念ですな。我輩も、西洋文明で学びましたからな、来日当初は、宗教がいくつも共存する異常文化、日本は劣った社会だ、などと西洋文明の視点で捉えておりましたな。草や木、山や海にもそれぞれ神がいるなど原始的宗教であり云々と）

（ロバート殿、便所にも神がいらっしゃるのだのっ）

（紙じゃなくてですか）

（存じております。正月になると便所にもお供え餅を飾るのを初めて目にした時に、如何に我輩が驚いたことか）

（あのぉ、ユリの謎をどなたか解いてくださいませ）

（ますたーとは英語であるならば修士、支配者、つまり珈琲店の主人ですかな。ばーばーも英語ならば床屋、つまり次郎床屋の次郎さんの太郎兄さん、ですかな。ユリさん、納得いたしましたかな）

（えっ、はい、なぁるほど、うふふ）

（しゃむは仏蘭西語みたいなのですが。たぶんシャム国）

（沙室のことですか。僕らは泰と教わりました）

（おっ、猫ですな。しゃむ猫。沙室原産の猫ですな。英吉利のかつ

ての大使夫妻の公邸におりました）
（あら、上野の動物園にいたあれかしら。細くて、薄茶色で、尾が黒くて長い。ユリさん、たぶん、珈琲店の主人の猫ですわ）
（ああ、シャム猫ですか。僕は、裕福に見える婦人の腕に抱かれている写真や絵を見ました。日本の丸っぽい猫とは違うし、色もね）
（あっ、あれがシャム猫なんですね。うふふ。あのぉ、ゆきちゃんも猫でした。白くてふわふわ）
（それは、我輩も存ぜぬ）
（もしかしたら、わたくしが来日する前に英吉利人が仏蘭西猫と呼んでいたのが似ているように思いますが。南の方から連れて来て掛け合わせて作っていたそうで、でもそれって随分前のお話ですし）
（かっとは何でしょう。ユリ、勝手に格好と思っていたのですが。太郎君を格好って。でもかっこじゃなくてかっと）
（かっとって切るってことですよね。ロバートおじさん）
（然様。太郎を切る、太郎が切られる。嗚呼、我輩は切られたのではなかったが、刺された、いや切られたのだろうか）
（ロバートさま、そのお話はまたごゆっくりお伺いいたします。わたくし、恐ろしくて）
（つまり、次郎床屋のお兄様が切られていて恐ろしくて、でも、その太郎お兄様は、ゆきちゃんが珈琲店のご主人のシャム猫にいじめられるのを助けてくれる、ってことかしら。猫のゆきちゃんがシャム猫にいじめられるのを助けてくれる太郎おじさんは切られているからゆきちゃんは怖いってことなんですね。じゃぁ、ゆきちゃんは恩知らずということなのでしょうか）
（カテリーヌさま、あちらの世のことはわからないことが多いものですわ）
（うふふ）
（ユリちゃん、どうして笑ってるんだい）
（えっ、だって、わかったんですもの。でも今は内緒。それでね、あちらの世のゆきちゃんは、こちらの世のユリをわかっていたみた

いなんです。そこにいるでしょ、私にはわかってるんだからね。黙っていてあげるけど、って気を送ってきました。ユリ、ちょっとぎくってしましたけれど、でも、猫さんが彩香ちゃんやぐらんまにお話しできるわけもないでしょ）

（そうかのっ。飼い猫や飼い犬や飼い鶏、飼い豚、飼い牛、飼い馬に、人間は話かけるがのっ）

（猫も犬も鶏も豚も牛も馬も、返事はしているみたいですわね）

（返事はできても、猫は人間の言葉は話せませんな）

（ユリ、なんだかゆきちゃんにじっと見られているみたいで落ち着かなかったです。お婆様が箪笥の引き出しから印鑑を出してらして、本を読みましたってことで厚紙に捺印されて、彩香ちゃんは教科書と厚紙を持ってお婆様のお部屋を出て、お隣のご自分のお部屋に入りました。またまた総天然色のお部屋で、お机とお椅子と箪笥が白、カーテンとべっとの上の布は同じ柄でした）

（ユリちゃん、べっとじゃなくてべっど、だよ）

（あらぁ、ユリはべっとって教わりました）

（う〜ん、確かにそうも言ってたけれど、でもあれは英語のベッドゥからだから、べっど、って濁るんだってば）

（そうそう、面白いものですな。日本の方はバックとおっしゃるので、我輩は背中のことと思いましたが、バッグなんですな）

（そのバックとかバッグとはなんぞな）

（だんなさ〜、かばんのことですわ）

（おっ、かばん、これなら私も一言あるぞ。かばんとはそもそも日本語ではなかったのだのっ。支那語だったそうだのっ）

（支那の漢字だったのですね）

（いや、それがまた違うのだのっ。銀座に谷澤鞄屋というのががあってのっ、そこの店主がこの字を作ったそうな。革で包むものだからと。陛下がその字を読めなくて尋ねたので、支那語の読みをお伝えしたところ、革に包むという新しい漢字を鞄と読むことになさった。そこからかばんと言う様になったそうだのっ）

（ほう、我輩初めて耳にしました。バックはバッグで鞄は明治にできた日本の漢字で、かばんという音は支那語なのですな。こちらの世に参りましても学ぶことが多うござる）

（学び、好奇心は僕たちの空気、食料）

（あのぉ、それで、カーテンとべっどの柄は、耳と目鼻だけ黒い、長い耳の白い犬さんと黄色い小鳥さんと、日本人ではないらしい髪の色をしたこども達の漫画で、ところどころに蛇と丸の文字の外国語が書いてありました。彩香ちゃんは時間割を見ながら黄色い覆いのついた鞄から教科書を出したり机の書棚のを入れたりして、あっお箸出さなきゃと独り言を言って、お箸とコップの袋を手にして、鞄を閉じてからべっどにどすんって背中から乗って、あ〜あ、って伸びをした途端に、お机の所でにぎやかな音楽がしたんです。ユリびっくりしました。彩香ちゃんがべっどから飛び起きて音のする方に行ったら、この前の亀歩き青年のお電話とは違うんですけれど、もうちょっと大きいので、一階からの電話みたいなので、お母様が、ぴざが届いたから、ぐらんまにも声かけて下りてらっしゃい、あっお箸とコップ洗うから持ってきて、うんわかった、今持ってるって彩香ちゃんが返事して、家の中で電話があるんですよぉ。ちょっと階段上がってくればすむのにね。それで彩香ちゃんはお婆様のお部屋のふすまを開けて声をかけてから先に階段を下りました。お台所のお机の上にぴざと言われるものが乗っていました。やっぱりお好み焼きに似ていました。もうちょっと厚くて、きれいな丸で淵が盛り上がっていました。でもね、ほら、お好み焼きってねぎぐらいでしょ、それともそういうのってユリのお家だけかしら。あっ、ユリね、初めて作ったというか、それしかできないんでした。お好み焼きは作ったことあるんです。いえ、作ったというか失敗。ねぎを刻んでも薄く切れないし、それにとんとんとんとんってやってみたらみんな繋がってしまいましたし。で、うどん粉をお水でといて、焼いても焼いてもその水ときうどん粉が減らないの。だからお母様に見つかったら叱られるって思って、お手洗いに捨てたら、婆やにみ

つかって、お嬢様、うどん粉を厠にお捨てになりましたね。もったいない、とやはり叱られてしまいました。あっ、それでお話を元に戻しますね。ぴざは三種類あったんですが、みなとてもきれいで、色々なものが乗っていました。お好み焼きよりうんと大きいです。直径が一尺以上あるみたいでした。あんな大きなのをどうやって焼くんでしょうね。でも、大きさよりも、ユリが一番驚いたのは、ぴざが乗っているお皿でした。あんなの信じられない。だってね、荷物を入れる箱みたいな、白い色できれいなんですけれど、でも、ほら、中が波うっているような紙を数枚重ねたような）

（ユリちゃん、それって段ボールのことだろう。僕がこっちに来る前には段ボールでランドセル作っていたよ。ランドセルって、ほら、小学生が肩からかけている。やだなぁ、さっきのペテン、イカサマ、インチキもだけれど、段ボールって何語なんだろう。ボール紙ってのもあったね。厚紙のことをボールっていうのは、仏蘭西語ですか英語ですか）

（仏蘭西語ではボウルは大きいおどんぶりみたいなのを言いますが）

（英語ですと球ですな。日本語では外国語の語尾が変化したり消えたり、途中の子音と子音の間に母音が入りますからな。はてさて）

（あぁ、そうそう、あのお鞄、ランドセルって言うんでしたね。で、その段ボールのをお皿にしているんです。ランドセルにするくらいなら、お皿でも不思議じゃないのかしら。その大きな四角い段ボールが三つ並んでいて、あっ、あと、くぅぽんでただになったというぽぅていとぉの箱も三つありました。これも紙の箱でした。仕出し、いえ、出前って、もしかして今ではおうどんやおすしも、瀬戸物ではなくて紙のお丼や桶なのかしら。そういえば、ぴざとさらだが何なのか、ユリが先ほどお尋ねした時にはどなたも答えてくださらなかった、ですよね。でも、いいです、ユリにはわかりました。つまり、ぴざは西洋風お好み焼きで、さらだはお野菜がたくさんってことらしいってわかりましたから。でも、くぅぽんって何でしょう）

（ユリさま、ぴざは、たぶん、伊太利亜で小麦粉を練って色々乗せ

て焼く食べ物だと思います。わたくしの祖母の頃は、伊太利亜は仏蘭西が統治いたしておりましたのよ。その頃にすでにございましたぴっつあのことではないかしら。それと、くぅぽんは仏蘭西語の、切るって意味の言葉に似ているように思いますわ）

（切る、ですか。たしかに、お母様が包丁を出してらして、一枚を八つに切ってらっしゃいました。横からお父様が赤いへらでお皿にわけてました。あっ、こちらは瀬戸物のお皿です。彩香、冷蔵庫からコーラ出して、と言われて彩香ちゃんが冷蔵庫を開けたので、冷蔵庫がどんなものなのかも、ユリ見てきました。すごいんですよぉ。中に色々な入れ物に入った食べ物がたくさん、たぁくさん入っていて、扉にもたまごや瓶に入った調味料や牛乳とかジュースって書いてある紙箱も入っていました。小学校のお昼ご飯の時にお当番さんが注いでいた牛乳の箱と同じ形のでした。お母様が、彩香、そっちじゃなくて、野菜庫っておっしゃって、彩香ちゃんが冷蔵庫の下の、あっ、これも上と一体なんですけれど、別の引き出しを開けて、そしたら中にいっぱい、かぼちゃやとぅめいとぅやお葱や胡瓜やお大根が入っていて、そこにコーラの、瓶というよりふにゃふにゃの一升瓶よりちょっと小さめのが二本入っていて、彩香ちゃんは一本取り出して、栓抜きを探すのかしらと思っていたら、上の蓋をくるくるまわして開けていました。あら、なんだか彦衛門さまが、出せるものなら涎を出しそうなお顔ですわね）

（いや、食べられぬ、飲めぬ身とは知りながら、口から入れるものと下から出すものには、どうもまだ執着があってのっ）

（だんなさ～、こちらでまでそんなですから、あちらでは糖尿病になられて、あんなに早く亡くなったのですわ。まぁ、こちらでは召し上がれませんものね）

（マサ、なんだか意地悪言われているように感じるのは、私の僻かのっ）

（旨いものをたらふく食べて早死にするか、我慢して長生きするか、こりゃどちらを選ぶか難しい。旨いものをたらふく食べて長生きで

きればよかったのにのっ。どうも目の前に人参をぶらさげられているのに食べられない馬のような気分だの）

（彦衛門さま、マサさま、お食事風景、お話するのよした方がいいかしら）

（いやいや、お話しくだされ）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その十一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
お楽しみ頂けましたなら幸いです。
次回は２９日にアップいたします。

第四話　セミテリオのこども達　その十二

（お婆様がお好きだというカレーの西洋風お好み焼きは、薄く切ったじゃがいもや玉葱や薄いお肉が乗っていて、カレーの黄色い色してました。彩香ちゃんが選んだのは、やっぱりじゃがいもや唐黍や緑色の輪っかのものと薄いお肉が乗っていて、白っぽかったです。緑色の、ユリは知らなかったんですけれど、お母様が、彩香、ぴぃまん出しちゃだめよ、食べなさい、っておっしゃってたので、ぴぃまんだってことはわかりました。ロバートさま、英語ですか）

（いえ、仏蘭西語ですわ。このくらいの大きさので、え～と、日本語では唐辛子です。でも、あれは赤いですわね。辛いからお嫌いなのかしら）

（あっ、緑のは、ししとうだね、あれも辛い）

（あのぉ、ユリも唐辛子とししとう、それに鷹の爪も知ってます。でもどれとも違うと思います。輪切りになっていて、輪がこのくらい。唐辛子もししとうももっと細　いでしょ。それとも、とぅめいとぉの小さいのがあったのですから、もしかしたらししとうの大きいのも今はあるのかしら）

（え～と、脱線ついでに、我輩も一寸お尋ねしたいことがござるのだが、その異国風お好み焼きに乗っていたのはじゃがいも、でしたな。我輩、長らく疑問に感じておりましたが、芋には薩摩芋というのがござろう。彦衛門殿、マサさま、薩摩では薩摩芋のことを薩摩芋とよぶのですかな）

（否、あれは唐芋。しかし唐からではなく琉球から伝来したものと聞いてますがのっ）

（じゃぁ、僕もついでに、薩摩揚げは、薩摩ではなんて言うんですか）

（付け揚げですわ）

（あ～、東埔寨から来たからかぼちゃって言うのと一緒なんですね）

（天からぷらっと来たから天ぷら、うふふ、冗談です。カテリーヌさま、本気になさらないでくださいね。お話続けます。お婆様はカレーのを二切れと、じゃがいものと海産物のを彩香ちゃんと半分ずつ、お父様は海産物のと、カレーのをそれぞれ二切れずつとじゃがいものを一切れ、お母様はじゃがいものを二切れと、カレーのと海産物のをそれぞれ一切れ、彩香ちゃんはじゃがいものを一切れ半と、海産物のを一切れ半と、カレーを一切れ召し上がりました。さて残りは何切れでしょう。うふふ、みなさまご不便でしょ。紙も筆も鉛筆もなくて、気の中で計算するのって）

（え～と、一枚をいくつに切り分けたんだっけ）

（八つです）

（ユリさん、申し訳ないが復誦していただきたいですのっ）

（全部で三枚ありました。それぞれ八つに切り分けました。彩香ちゃんとお婆様は、じゃがいものと海産物のを半分こしました。その他に、彩香ちゃんはじゃがいものとカレーのと海産物のをそれぞれ一切れずつ食べました。お婆様はその他にはカレーのを二切れお召し上がりました。お母様とお父様は三種類それぞれ一切れずつお召し上がりになって、お母様は他にじゃがいものを一切れ、お父様はカレーのと海産物のをもう一切れずつ召し上がりました）

（ユリさん、先ほどとおっしゃり方が違いますな）

（あらロバートさま、同じことを言い方変えただけですわ）

（残ったのはね、何切れだったか、ユリのお話が終わった後もごゆっくりお考えくださいな。ふふふ。それで、残ったのをお皿、ちゃんとした瀬戸物のお皿に移して、お母様は冷蔵庫から取り出した長細い箱の中から目に見えないようで見える透明の薄い布みたいなのを出して、箱の横でねじって切って、その薄くて透明のをお皿にかけてらっしゃいました。お皿の下にまわしたら勝手にくっついてとまるんです。ほこりや虫除けなんだと思います）

（おっ、それは朝子の家にもあったの。なんとかっぷっと言うんだ）

（軍港の名前がついていませんでしたっけ。舞鶴、佐世保、横須賀、

呉・・・）

（彦衛門さま、日が暮れてしまいます）

（舞鶴なんとかっぷ、佐世保なんとかっぷ、横須賀なんとかっぷ、呉なんとかっぷ。いっぷ、ろっぷ、はっぷ、にっぷ、ほっぷ、へっぷ、とっぷ、ちっぷ、りっぷ、ぬっぷ、るっぷ、をっぷ、わっぷ、かっぷ、よっぷ、たっぷ、れっぷ、れっぷ、何か似ている様な。そうだ、らっぷだ。舞鶴らっぷ、佐世保らっぷ、横須賀らっぷ、呉らっぷ、おっほん、呉らっぷ、だったの。思い出せたの）

（それじゃなかったと思います。皿がついていたと思います。そう、皿らっぷ、あら、まだ何か違う様な。名前はどうでもいいです。ともかく、蠅帳に入れればいいのにとユリ思ったんですが、見当たりませんでした。今の蠅帳は皿か呉のらっぷに変ったみたいです。残ったって申してはいけないのかしら。お二回の仏さまにお供えするのに後でお婆様が持って上がるんだと思っていました。お二階には四柱いらっしゃって、気の方々ですからお召し上がりになる量も少ないでしょうから、と申しますか、ねぇ彦衛門さま、私たち、食べられないですものね。ですからお供えは残り物でも、その心だけでいいんですものね。忘れていませんよ、ちゃんと覚えていますよ、ってことだけで、充分ですわよね。ぴざとぽてぃとぉとさらだとコーラでお夕食終えて、洗い物が少なくていいなぁ、コーラを入れた硝子とさらだを入れた器とさらだを食べたお箸を洗うだけですもの、とユリは思っていたんです）

（コーラを入れた硝子、ですか）

（はい、硝子っておっしゃっていました）

（コップじゃないのですか。朝子はコップって言っていました。硝子でできた透明の細長い器、でしょ）

（そうそう、コップって朝子の家ではよんでいたの）

（我輩思うに、コップはカップで、硝子はグラスではなかろうか。しかし、窓の場合に同じ材質をガラスとよぶ）

（ロバートさま、ユリにはちんぷんかんぷん。硝子はビードロとか

ギヤマンと同じものだとはユリも思っておりましたが）
（カップは器の形のことで、日本語ではコップになった様だ。グラスは材質であり、硝子のことであり、どうも、その彩香さんのご家庭では、硝子のコップをグラスとよんでいるようなのだが。しかし、珈琲店では，我輩が珈琲茶碗と申したら、亜米利加の方が何をおっしゃいます、これはかふぃかっぷですと言われましたな。元の英語が日本語では二つの別の容器になったのですかな。コップは硝子製で取っ手がなく、茶碗は陶器で、カップは陶器で取っ手があって、グラスは硝子製の、おっ、では陶器のコップ状のものは、これもグラスですかな、硝子製ではなくとも）
（コップっていうのは江戸時代以前から使っていた言葉だと、僕は聞いたけれど。葡萄牙や西班牙や阿蘭陀では、あれをコップに似た音で言うらしいよ）
（なんだか、頭の中がごちゃごちゃです。コップと硝子とどう違うのかしら。あっ、それでね、その硝子、ぐらす、ですか、それとお皿などを洗わないんです。いえ、洗うんですけれど、手で洗わないんです）
（手で洗わない・・・のですか）
（まさか足で洗うわけじゃないだろう）
（あっ、手って言えば、西洋風お好み焼きは、皆様手でお召し上がりになってました）
（握り飯と同じだのっ）
（サンドイッチと同じですな）
（サンドイッチとはなんだのっ）
（だんなさ～、パンの間に色々挟んで食べるものです）
（ほぅ、どこにでも手で食うものはある、ということだのっ）
（夫が申しておりましたわ。印度ではカレーも手で食べるそうですわ）
（カレーを手で、どうやって。手ですくうのかなぁ）
（虎さま、違う様です。ごはんとこねるそうです。わたくしも見た

ことはございませんが）

（あのぉ、それで、ぴざを手でお召し上がりになると、手がべたつくようで、べたべたの手でお箸は持ちたくないでしょ。お婆様も他のみなさまも、彩香ちゃん取って、彩香、てぃっしゅの箱もっと真ん中に置いて、とおっしゃって、それぞれその箱から薄い白い紙を出して手やお口をお拭きになってました。このてぃっしゅってのが、面白いんですっ。ユリにも手があったらやってみたかったです。このくらいの大きさの箱なんですが、上の面の真ん中に楕円の穴が開いていて、そこから紙の端が飛び出しているんです。誰かがそれを引っ張ると、一枚だけ出てきます。そしてあらあら不思議摩訶不思議、次の一枚の頭がまた飛び出しているんです。それをまた誰かがぴっとひっぱると、一枚だけ取れて、またまた不思議摩訶不思議、次の一枚が頭出しているんですね。冷蔵庫の中からお母様が出してらした薄くて透明の布みたいなのと同じで、箱の淵に刃がついているのかしら。それともお手洗いの落とし紙の巻き紙と同じように切れ目がついているのかしら。お手洗いのも冷蔵庫のもユリ試してみたいとは思わなかったのですが、てぃっしゅのは、う～ん残念、生きていれば、手を出せれば、飽きずにずっとてぃっしゅの箱から引っ張りだしたいなって思っていました）

（ユリさま、おほほ、ねぇ、だんなさ～、思い出しません、朝子の家の犬のこと）

（わっはっっはっっ、そりゃユリさんに悪い）

（えっ、何がおかしいんですか。ユリに悪いって、何がです）

（あのね、ユリさん、朝子の家で、そのてぃっしゅの箱から飽きもせず引っ張りだしていたのは、アル、犬だったんですよ。犬の手、いえ犬の口の届くところにてぃっしゅの箱をうっかり置いておこうものなら、アルが全部引き出してました。綾子が摩奈の世話するのに、てぃっしゅをよく使っていたんですよ。涎や泪やお乳を拭くのにね。で、適当にその辺りにてぃっしゅの箱を置いておくと、すかさずアルが飛びついて、てぃっしゅの箱を空にするまで、まるで意

地になっているみたいに引っ張りだして散らかすんですよ。床に落ちたてぃっしゅを赤ん坊に使うわけにも参りませんでしょ。それで朝子が綾子を叱ると綾子はアルを叱る。そんなことが何度もございました）

（ユリは犬並みなんですか）

（犬が人間より劣っている、と思っているなら辛いだろ、ユリちゃん。でも、犬や他の動物が人間より劣っているって決めているのは人間だけなのかもね。高等学校の授業で聞いた話だけれど、独逸ではね、昔、豚や虫も裁判にかけていたそうな。こういう雑談だけはしっかり覚えているもんだね）

（あのぉ、てぃっしゅのお話じゃなくて、え～と、ユリがお話ししておりましたのは、あのね、食器を手洗いしないんです）

（じゃぁ、そのてぃっしゅで拭くんだ。手や口と一緒で）

（虎ちゃん残念でした。ユリ、先ほど、洗うって申しました）

（ユリさま、洗うということは、お水をお使いになるのですよね）

（ユリさん、もしかしてお湯ですか）

（あっ、それ、ユリにもわかりません。たぶんお水かお湯だと思います）

（ユリさん、もしや、我が国の女性が発明したあの機械のことだろうか。女中があまりにも皿を割るのを見かねて作った皿洗い機械。いや、その前にも何人か試作していたらしいが、どうも使い物にならなかったそうな。木箱に入れて手動で水を皿に吹き付けるもので、市我古の博覧会に出品したそうだが、何分にも百年以上前のことゆえ、我輩の記憶も定かではないが）

（食器洗い機っておっしゃってました。ですから、ロバートさまのおっしゃってるのと似ているのかもしれません。でも、手動じゃなかったです。電気が繋がっていました。このくらいの大きさで。中に入れてあちこち釦押してました。お婆様が食卓を拭いて、あっ、もちろんこれは手で、布で拭いていらっしゃいました。こんなでしたから、後片付けなんてほとんどなくて、食べてすぐお風呂じゃ体

に良くないし、野球中継は嫌だろう、どこのちゃんねるならいい、とお父様がテレビに向かって何かテレビを操作するこれくらいのもの、ほら、カテリーヌさま、隼人君のお家にもございましたでしょ。あれでテレビの画面を変えていたんです。そしたら横から彩香ちゃんが、パパ、たまには一緒にうぃ～しようよ。あれ、なんだかさぼっているって叱られそうだから嫌だなぁ、いいじゃないママもよがやるわ、グランマはからおけなら一緒にやるわよ、だめ、パパの体重管理しなきゃ、っておしゃって、はい、ユリにはわからない言葉がいっぱい出てきました。ちゃんねる、でしょ。うぃ～って、彩香ちゃんがお酒飲むわけじゃない、でしょ。からおけはわからないまますし、よがやるって何でしょう。ただね、うぃ～とよがはすぐに目にしました）

（私はさぼるもわからないがのっ）

（我輩にもわかりませぬ）

（あっ、それ、僕たち使っていました。授業をさぼる、って級友が言ってました。もっとも、もう、さぼっても行く先が無かったですけれどね。先輩の時代にはそれこそ珈琲店とか早々悪所通いとか、あっ、ユリさん、失礼。サボタージュが元の言葉だそうです。労働争議で労働者が抵抗して仕事をしないことだそうです。露西亜語だったかな）

（仏蘭西語ですわ）

（おう、さぼたーじゅ、仏蘭西語で怠けるということですな、なるほど、短くしてさぼるですか。日本人は外国語をそうやってどんどん日本語化しているのですな。からおけもきっとそうなのですかな。ちゃんねるは、水路や海峡、何かの通り道のことだが、はてさて）

（それで、彩香ちゃんが、てれびに向けるのとは別の、これくらいの白くてまわりがふにゃふにゃのを持って来て、それをてれびに向けたら、びっくりしました。てれびには慣れてますから、絵やお写真が動くのも音がするのももう何ともないんですけれど、お婆様とお父様とお母様と彩香ちゃんとゆきちゃんと、あと知らない若い黒

髪の男性と黒んぼの女の子と、金髪の男の子が画面にいたんです。似顔絵っていうのかしら、そっくりなんですけれど、お写真じゃなくて、それで彩香ちゃんが手にしてたものをてれびに向けると、しばらくして画面に彩香ちゃんが持っているのと同じものの絵が出て、コント何とかとかブラグとかスト何とかってカタカナが並んでいました。ユリには分からない言葉ばかりでした。それから、一週間以上前に測定しました、って書かれていて、彩香ちゃんが、ほらパパ、一週間以上測っていないじゃないって言って、だから嫌なんだとおっしゃった本物のお父様は食卓の所でぐにゃっとなさってらしたんですけれど、てれびの中のお父様がしゃきっとなさって、そうしたら本物のお父様も立ち上がられて、てれびの前のこのくらいの白い台に乗られて、そうしたらてれびの中でこんばんは、って声がして、おなかひきしまってマスか、って書かれてあって、ほらうるさいんだから、ってお父様がおっしゃって、そのあと、おひさしぶりデス、ココでマメ知識を聞きマセンかワタクシ云々って書かれていたんですけれど、マス、ココ、マメ、マセン、ワタクシ全部カタカナなんです。今の日本は全部カタカナでもなくて、一部だけカタカナで書くようになったんですね。乗ってくださいってれびに言われて、お父様が白い台に乗られて、しばらくしたら体重が出ていました。七十なんとかで、太り気味ってことでしたけれど、貫や匁じゃないのでユリにはよくわかりませんでした。そのあと、台の上でお父様が体を右や左に動かしたりなさって、バランス年齢ってのが出ました。実年齢とか満年齢とかユリには分かりますけれど、バランス年齢ってなんでしょう。それで、五十二歳って書かれてあって、お母様がほら見なさいさぼっているから、一回りも上じゃないのっておっしゃったから、お父様は本当は四十歳らしいです。その後彩香ちゃんも台に乗って、いいの私は測らなくてって言ってペンギンさんがたくさん出てくるのをなさいました。後ろの方にペンギンさんがたくさんいて、手前の大きい氷の上に顔のところだけ彩香ちゃんのペンギンさんが乗っていて、彩香ちゃんが台の上で右に傾いたり左

に傾くとテレビの中のペンギンさんも同じ様に動いて、氷が傾いて、青や黄緑や赤いお魚さんを食べるんです。不思議でしょ。どうして台の上の彩香ちゃんとてれびの中の彩香ちゃんペンギンさんが同じ動きになるのか。次にお母様が体重を測られて、三日ぶりだったようです。体重が出た時にはお母様てれびの前にいらっしゃって画面を見えなくしてました。彩香ちゃんが、ずるいとおっしゃってました。あっ、バランス年齢の時にも画面を隠してらして。お母様はヨガをなさいました。ヨガはカタカナでした。体操みたいでしたよ。画面にはお母様じゃなくて、体にぴったりした短い服の若い女性が出てらして、両手を上に上げてとか、息を吐きながらとかおっしゃって、それに合わせてお母様が動かれて、最後に九十六点って出て、うふふ、いいでしょっておっしゃって、お婆様も体重測ってからバランス年齢が出て六十歳です、っててれびに言われて、おほほ、若いわよと喜んでらっしゃいました。あのぉ、皆様、ご質問やご意見、ないのでしょうか。珍しいことですわ）

（いや、あまりに信じられなくてのっ。てれびは見たことありますぞ。何回も。てれびだとて、初めて目にした時には肝をつぶさんばかりに驚きましたのっ。家にいて弁士付きの活動写真がいつまでもいつまでも続くわ、丸いのを廻すと何種類も見られるわ、その内、総天然色にはなるわ、ユリさんのお話しを聞いていると、そのてれびも今では薄くなっているわ、こういうのをてれびに向けると勝手に点いたり消えたり他の放送局のにかえられるらしいわ、あげくの果てに、今度は家人と文字や音で会話もするわ、もう、想像の域を超えすぎておっての、言葉もなかったのっ。こりゃ是非実物を目の当たりにしてみなくてはと、私もまた旅に出たくなったのっ）

（僕だって同じさ。ラヂオだけでも凄まじいことと思っていたんですから。僕がこちらに参ってから、もう六十年以上経っているとはいえ、映画が家で見られるだけでも驚きなのに、そこにもってきて、人間と話すてれびなど、もう見てみなくては信じられない、いや、ユリちゃん、ユリ様かな、のお話を信じられないというのではなく

て、はぁ～）

（左様でございますわね。薩摩におりました頃にはラヂオとて無く、だんなさ～はラヂオもご存知なかったですものね）

（わたくし、どうしてペンギンさんのお顔が彩香ちゃんになるのか、とても不思議なんですが。今のてれびは、そういうこともできるんですね）

（ペンギンさんだけじゃないんです。彩香ちゃんだけでもないんです。綱渡りってのがあって、お婆様がなさる時にはお婆様のお顔に、お母様がなさる時にはお母様のお顔になるんです。それに体の形も同じなんです）

（そりゃそうだろうのっ。顔がそっくりならば体もそっくりになるわけだの）

（髪型や髪の色もですよ。お婆様は白髪まじりになってましたし、お父様の少しぽっちゃりなさったところも、みんな。あっ、お服の色だけ違っていました。それで、高い建物の間に渡された綱を渡るのですが、怖いですよぉ。ユリ見ているだけで怖かったです。てれびの外のお父様は綱の上にいらっしゃるわけではないのに、ふらふらなさると、てれびの中のお父様もふらふらなさって、落ちちゃうんです。やっぱりこれはパパには向いていないな、しゃわー浴びてくるわ、とお部屋を出ていかれました。浴びてとおっしゃってましたから、しゃわーってのは、行水かひと風呂という意味だと思うのですが）

（ユリさん、正しいです。まぁ、ひと風呂という場合には浴槽につかる、のだとしたら、しゃわーはつかりませんが。行水というのは、盥につかることですかな。これもやや異なりますかな。しゃわーと申すのは、おっと、英語だとしてですが、水ないしは湯がたくさん穴のあいた先から出てくることですな。おお、如雨露、あのような）

（ほうっ、如雨露を片手で持ち、あいた手で洗うのですかのっ）

（いや、如雨露の様なものは固定されておりまして）

（如雨露に水を入れるのはたいへんですのっ。すぐ空になってしま

う。厠の外の手洗い水と同じですのっ）

（彦さま、わたくしがユリさまとご一緒でした時、隼人君がお母様とお風呂に入られた時に使われたのが、たぶんそのしゃわーなんです。このくらいの如雨露みたいな形のものが、長い柔らかい管の先についておりまして、その管は壁の辺りで、こう、螺子の大きいのに繋がっておりましたので、壁の中からお湯が出てくるようでした。彦さまも一度ご覧になるとお分かりになると思います。摩奈ちゃんがお生まれになった時にはございませんでしたか）

（マサ、覚えているかのっ）

（いえ、あそこのお風呂は昔のとはあまり変らなかったと思いますわ。木の桶で、風呂場の外側から、と申しましても全くのお外ではなく、お台所のたたきの辺りから燐寸で火をつけてましたでしょ。薪ではなかったですわね。時折、ボッと外にまで炎が出て来て、前髪がちりちり、瓦斯だったのかしら。戦後すぐ建てられたあの官舎は古うございましたと申しますよりも、おんぼろ）

（とはいえ、私の頃には、瓦斯で風呂を沸かすなど贅沢極まりなかったがのっ、燐寸とて、まだまだ珍しいものだったがのっ。あれは、幕府崩壊後の士族の活計だったのっ）

（燐寸は、箱の模様が面白かったですよね。収集しているのが、仲間にいました）

（それで、お父様が出て行かれて、彩香ちゃんが次はどれにする、ママ、一緒にやろうよ。う〜ん、じゃぁ自転車なら。で彩香ちゃんとお母様が自転車をなさいました。あっ、こぐんじゃなくて、てれびの外の彩香ちゃんが両手に持った白いものを上下にゆするとてれびの中の彩香ちゃんが進んで、曲がる時には両手をその向きに曲がらせると、てれびの中の彩香ちゃんが曲がるんです。てれびの中で競争していて、お母様と彩香ちゃんが抜きつ抜かれつしてらして、その時にお父様が、お〜い、ぱんつ持って来るの忘れたってお風呂場から大声出されて、たおる巻いてくればいいじゃない、いやぁ彩香もそろそろ年頃だしと会話がございましたから、ぱんつは下着の

ことで、たおるは手ぬぐいかしらとユリも一瞬思ったんですが、競争が面白くて目が離せませんでした。お母様がお婆様に、ちょっと替わってと白いのを二つ手渡されて、結局下着をお持ちになったようでした。お婆様は自転車初めてなさったらしくて、交代してしばらく彩香ちゃんにどんどん離されていらしたのですが、最後にはかなり接戦になりました。その頃にはお母様は戻られていたのですが、お婆様が、彩香、もう一回やろうって。それでお婆様と彩香ちゃんがもう一度。どうも、振り方の調子が乱れたり早すぎるとてれびの中の自転車が止まってしまうらしいんです。お婆様に負けてたまるかと、彩香ちゃんがむきになると、自転車がとまってしまって。二度目は彩香ちゃんが負けたんです。もう彩香ちゃんは悔しくて、もう一度。どうして急にそんなに上手になるのよ。おほほ、まらかすだと思えばいいって分かったのよねぇ。あっ、ずるい、ぐらんま空桶で鍛えてるから。空桶が分からないユリにはまらかすも分かりませんでした。たぶん空の桶の中で手に持って調子良く振るものなんでしょうね。三度目は接戦になって、でもお婆様がまた勝たれて、疲れたよぉ、まま交代って、あっ、上手くしたらお母様に乗り移れるわと思って待ち構えていたので、ユリはお母様に乗れました。お母様も、最初はお婆様がお強いなどと思ってらっしゃらなかった様なんですが、てれびの中のお婆様はとても速くて、お母様は引き離されてしまって、彩香ちゃんはお母様を応援なさって、何度も続けてらっしゃいました。漸くお母様がお婆様を抜かれて、ゴールが見えて来て、あっ、ゴールってユリも何度も目にしましたから、あの、最後の所です。白い紐をちぎる所。お婆様がしゃにむに手を上下に降られて自転車をこいで、お母様が抜かれそうって時に、バサッて音がして強い風が吹いてきて、ユリはてれびの中の風かと思ったら、いきなり六尺三寸ぐらいの大男がぬっと入って来て、ユリはすわ強盗かと思ってとっても怖かったです。だってもう九時過ぎていてお外は真っ暗だったんですよぉ。お婆様が、大樹、いきなり開けないでよ。びっくりしてママに負けちゃったじゃない、お母様は、あら

おかえりなさい、もうそんな時間なの、あっ、鍵かけといてね。ユリはそんな所にお勝手口があるなんて知りませんでした。大男君が食卓の椅子にどかっと座って、大きな鞄を二つどさっと床に置いて、おっ、美味そうなものがある、頂き、とさっと手を伸ばそうとした途端に、彩香ちゃんが、お兄ちゃん手も洗ってないでしょ。お母様が、さっさとシャワー浴びてらっしゃい、大体、ぶかつの前と塾の前とお弁当食べたでしょ、これは夜食、一日五食もなんだから。うわぁすごい、だからこんなにでかいんだぁ。あれっ、ご先祖様へのお供えじゃなかったんだわ。ってことは、お供えなさらないんだ。そりゃ、ご先祖様、お食事なされないだろうけれど。塾で頭使ったんだから腹ペコなんだよ。このままシャワー浴びたら死んじゃう。だめ、先にシャワー浴びてらっしゃい。すごすごと大男君は鞄二つ持って二階に上がって行きました。ところで、ぶかつって何でしょう）

（さぁ～。午後の授業がぶかつなら、その前に食べるのは昼食。しかしそれだと五食というのがどうなるのか）

（ぶかつって、科目の名前なのでしょうか）

（生活科に加えてぶかつ科というのもあるのかのっ）

（あのぉ）

（あら、カテリーヌさま、ぶかつって仏蘭西語なのでしょうか）

（いえ、ぶかつが何だかは、わたくしも分かりませんが、ただ今のユリさまのお話、面白かったのですよ。オノマトペがたくさん）

（小野間飛べとはなんぞや）

（おぅ、擬音語擬態語のことでござるな）

（擬音語、擬態語も私にはわからぬが）

（彦殿、物の音や動作を表す言葉でござる）

（カテリーヌさんにはそのようなものが珍しいのですかのっ）

（はい、仏蘭西語にはあまりないのです。動物の鳴き声ぐらいかしら）

（然様、英語にも少ないですな）

（まぁ、そうなんでございますか。日本語ではあまり斯様な言葉を多様いたしますのは士族では下品と思われるのですわ。ですから先ほどのユリさんのお話用を伺っておりまして、ユリさんは近代的なお嬢様なのですねと思っておりました）

（そうなんですか、バサッ、ぬっと、どさっ、どたっ、って、ユリ、そう感じたものですから）

（とてもわかりやすいですわ。わたくしは面白く感じておりました）

（私には、腹ペコも分からぬが。空腹だという意味だろうとは思うが、カテリーヌさん、ロバート殿、ご存知であろうかのっ）

（紅茶の等級にオレンジペコーというのがござるが）

（ロバートさま、あれは、英語と支那語が混じったものと夫が申しておりましたわ）

（オレンジは英語であるから、ということはペコーは支那語ということですかな。併し乍ら、空のオレンジでは意味を成さぬ）

（僕たちもう使っていたよ。腹ペコって言葉）

（虎さんがお使いになってた、ということは敵性言語ではなかった、ということですかな。ということは日本語、流行語だったのですかな）

（ぶかつの後に塾に通うのかのっ。何の塾であろう。四書五経ということはなかろうのっ）

（算盤、書道ってこともございませんでしょ）

（仏蘭西語の塾も英語の塾も、わたくしの頃にはございましたわ）

（あっ、それは、ユリ、今からお話するつもりでした。大男君、いえ、大樹君は、着替えのお服と、あっ、もちろんお洋服でした、と、お弁当箱二つ持って降りてらして、お弁当箱を流しに出して、すかさずお母様が、水に浸けてよ、うん、で浴室に向かいました。その後、お婆様が、大変ねぇ、いつまでぶかつ続くのとお母様にお尋ねになって、中学最後の公式戦は夏休みに入る直前だったかしら、それまではお弁当二つ作らないと。その後も、夏期講習に入るから、夏休みは無いも同然。受験はやっぱり大変ね。彩香は、いっそのこ

と中学受験する方がいいかしらね。嫌だよぉ、今から学習塾なんて。あら、中学受験なら来年、三年生でも塾に通うのは早くはないのかも。お兄ちゃんは私立じゃひ弱になるかと思って中学受験は考えもしなかったけれど、それにしても、あの子背が高いしれぎゅらぁだし、公式戦終わるまではやめられないみたいよ。体作るにはいいのかしらね。独活の大木じゃないだけよかったのかしら。パパが大樹なんて名前つけるから、あんなに大きくなっちゃって。百八十ぐらいで止まると思っていたのにね。私、あんなに大きくなりたくない。私はぶかつ合唱がいいから身長関係ないし。彩香はまだ小学校のくらぶにも入っていないのに。でももう合唱って決めてるの。お兄ちゃんは入学前から目をつけられていたものね。ばれぇとばすけに。で、ばすけを選んだけれど、などとお話が続いてました。つまり、塾とは学習塾で、学習するってことは、高等学校に受かる為のお勉強らしいです）

（それにしても、中学生にしては遅い帰宅ですわね）

（いつの時代も受験は大変なんですのっ。私の頃は、士族なら藩校には入れましたがのっ。ところで、倶楽部とは、小学校に倶楽部があるのかのっ。記者倶楽部かのっ）

（だんなさ～、記者と合唱は話しが食い違いますわ。たぶん、同好会のようなものかと。曾孫の綾子が中学校で手芸くらぶに入ってた時のお話しをいつかなさってましたでしょ）

（あぁ、あれかな、玄孫が生まれる前に作った何かがその時に教わったやり方だとか）

（ユリには、れぎゅらぁもばすけもばれぇもわかりませんでした）

（れぎゅらぁは、英語でなら一般のという意味だが、それとばすけは篭、ばれぇは、ほら、西洋の舞踊のことですな）

（えぇ、バレー、こう白いふわふわのをつけて、つま先で踊る）

（あっ、ユリ、あぁ、バレーならわかります。でも、バレーって背が高くなきゃいけないのかしら。たしか、小柄な方がいいって聞いたことあります。女学校に行ったお友達でバレーを習っていた方い

らっしゃいました。大男君が浴室から出てらして、上で食べるよ。あっ、野菜庫にコーラがあるわ。わかったと返事されて、洋風お好み焼きのお皿を片手に、出したコーラのふにゃにゃの容器を上に投げる真似をなさって、お母様が、ぼぅるじゃないんだから、コーラ吹き出すわよ）

（ぼぅる、とおっしゃったのですかな）

（はい）

（我輩、分かりかけて参ったように思います。バスケッボール、バレーボールのことではなかろうか）

（うん、おじさん、僕も気付きました。バスケットボールもバレーボールも、確かに背が高い方が有利ですね）

（共に我が祖国亜米利加で考案されたものですな。ボール、すなはち球をバレーは相手の陣地に返す、バスケッは相手の網に入れる球技でござる）

（おう、玄孫が生まれた頃にてれびで見たあれがそうなのかのっ。我輩、せっかく網に入れたのに網の下から球が出て来るのが解せんでのっ。何度も球を入れるとだんだん網がもろくなって、網を買い替える金がないのか、まだまだ世の中貧しいのっ）

（おじいちゃん、違いますよ。網に入る度に網から出すのは大変でしょ。だから網の下から球が出るようにしてあるんですよ）

（そうかのっ、それでは、じっくり見ていないと、入ったのかかすめたのかわからないだろうに。ところで、先ほどの異国風お好み焼きの残りは、私の計算によれば、八切れなのだが、五食目にして、八切れ食べたのだろうかのっ）

（だんなさ～）

（彦さま、大正解ですっ。八切れでした。びっくり仰天でしょ。八切れって一枚ですから。一枚って、こんなに大きいんですよぉ。それも五食目だというのに）

（うらやましいのぉ、それにしても五食目というのも、どう数えるのか）

（え～と、順番に、朝ご飯、部活の前のお弁当、塾の前のお弁当、洋風お好み焼きですわ。あら、一食足りない・・・）
（だのっ。先ほど私はこの疑問を呈したのだがのっ、どなたも気にもとめなんだのっ）
（だんなさ～、こちらに参りますとね、食べ物には、皆様こだわらなくなるんですわ）
（うむ。寂しいことだのっ）
（だんなさ～、食べられないのに食べる事気にしておりましても仕方ありませんわ）
（うむ）

＊

続く

第四話　セミテリオのこども達　その十二　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日午後にアップしております。
またのお越しをお待ちいたします。
来週その十三で第四話完結いたします。

第四話　セミテリオのこども達　その十三　最終回

（大男君、え～と大樹君が二階に上がられて、彩香ちゃん、お婆様、お母様と入浴なされて。そうそう、お母様がね、お風呂に入られる前に、冷蔵庫より小さ目の、前に大きな丸い硝子の扉のついた中に脱いだお服を入れられて、また釦あちこち押されて、そうしたらお水が中に入って来て、ユリ、そこまでしか見られなかったんですけれど、どうして前面に扉があってもそこからお水が漏れないのか不思議でした。お皿を洗うのが食器洗い機と言うそうですから、あれは、衣類洗い機なのかしら。お母様がお風呂から出られた時も、まだ中でお水とお服がぐるぐる回っていました。お母様と一緒に、わたくしも就寝いたしました。お父様はテレビジョンで野球をご覧になってました。翌朝、お母様がご起床なさった時には、お父様はもう市場に出られた後で、お母様はお弁当を二つ作られて、朝ご飯を作られて、あっ、パンじゃなくてご飯でした。鯵の干物とお大根のお味噌汁と卵焼きと、冷蔵庫から色々な器に入ったいろいろな佃煮やお総菜を食卓に並べてらっしゃいました。あら、彦さま、また涎たらしそうなお顔）

（だんなさ～）

（いや、なに、そのご家庭の朝の膳は贅沢だのっ。一汁一菜どころではなさそうだのっ、相伴したいものだのっ）

（だんなさ～）

（それで、お食事の後、お箸とコップも忘れないでね、行ってらっしゃいの声に送られて、大男君が勝手口から、彩香ちゃんがお店の方から出て行かれて、上でお経を読んでらしたお婆様がゆきちゃんと降りてらして、丁度お父様が市場から帰られて、お母様がゆきちゃんに缶詰を開けてあげて、それから大人三人で食卓を囲んで、一服なさったお父様がお店でお花を籠や筒に移されて、お母様は例の食器洗い機に洗うものを入れて、あちこち釦押されて、その辺りを

さっと片付けて、神棚にお参りしてお店に出て行きました。お店の中は色々なお花の甘い香りでむせかえるようでした。でも、お花に囲まれるって幸せですよね。お母様は、ちょっと元気のなくなったお花を別の筒に移されたり、セミテリオ用の菊のお花がたくさん入った花束やしきみの束をいくつも作られたり、お父様は値段が書いてある紙を貼られたり）

（あのぉ、彦様、マサさま、ご存知でしたら教えて頂きたいのですが、しきみって何でしょう）

（ほら、墓に持ってくる花束じゃなくて緑の葉っぱばかりのがあるのっ、カテリーヌさん、あれのことだのっ）

（どうしてお花じゃなくて、葉っぱなのでしょうか）

（わたくし、だんなさ～がこちらに参ってから最初の頃毎回、お花よりもしきみをたくさん持ってきましたわ。あの葉っぱには毒があるそうです）

（まぁ、ご主人様のお墓に毒の葉っぱをお供えなさってらしたのですか）

（いえね、主人は土葬でしたでしょ。あの葉っぱをお墓の上に置いておくと、虫や動物がつかないらしいのです）

（まぁ、防虫剤なのですね）

（土中で遺体が虫に喰われるのは、当然といえば当然であることながら、生きている身には親しい者の遺体が喰われて行くのを想像するのはとても辛いだろうからのっ）

（でも、火葬も怖かったです。生きている時ですけどね。だって、もし死んでいなくて、生きたまま火葬されたら、とってもとっても怖いですわ）

（然様。墓を掘ってみたら、棺桶に爪で引っ掻いた傷がいくつもあった、などという話しは我輩も？々耳にいたしましたな。古今東西、死んだと思っていてもまた息を吹き返すということもあったのですな）

（僕は肺病でしたから、ゆっくり、生きている内からゆっくり死ん

で行った様なものでしたから、あまり生きたまま焼かれるという恐怖はなかったですけどね）

（わたくしも老衰でしたし、ゆっくり死んで行ったわけですわね、ひからびていてさぞ燃えやすいだろうにと思っておりました）

（それで、お母様はお花の籠を見栄えよく並べたりしてらして、その時、無視してあげるわねって気が送られて来たのでユリ気付いたんですけれど、ふわふわのゆきちゃんがおリボンの棚の上の方にお人形さんみたいにすまして座ってました。お母様は例の計算機の後ろのお椅子に座られて、新聞を折り畳んで読んでらっしゃいました。ユリは、今日こそセミテリオに帰れるかしらと思いながら、お外を眺めてました。セミテリオの方に向かうのは幼稚園に行くお子様とお母様、たまにお父様ばかりで、あっ、隼人君は見つけられませんでしたけれど、何人か、幼稚園でお見かけしたお子たちはユリの前を通っていきました。ほとんどの方が、セミテリオとは逆方向に歩いて行かれるので、あちらが都心なのかしら。あちらに乗り合いバスの停留所か電車の駅があるのかしら。でも、こちらからいらしても、セミテリオにいらっしゃるとは限らない。しきみの束、あの桶にいくつ入っているのかしら、普通二束ずつお供えよね。お花もあら、でも、御仏壇用に買われる方もいらっしゃるでしょうし、両方合わせて二で割って、その三分の一ぐらいはセミテリオにいらっしゃる方が買われるのかしら。何人ぐらいがここで買われてセミテリオに向かうのかしら。花束をお渡しする時や代金、おつりの受け渡しの時に乗り移らなきゃ。ぼんやりしていられないわ。でも、御仏壇にお供えする方と、セミテリオにいらっしゃる方とどうやって見分けたらいいのかしら。下手に乗り移って、どこか他所の、と言ってもこのご近所の方だと思うけれど、また別のお宅に参ったら、折角お花屋さんに来られたのに、うわぁ、難しい。人通りが増えてきて、お母様はお店の入り口にいらっしゃって、マスターお早うございます。後ほど、カフェ用のをお届けいたします。今日は何色系がよろしいかしら。華やかなのですね。はい承知いたしました。あ

ら、今日はごゆっくりですわね。おはようございます、行ってらっしゃいませ。どちらまで、ちょっとそこまで、お帰りにお寄りくださいませ。近くのお店やご近所の顔なじみさん達と言葉を交わされ、まだどなたもお花を買いにはいらっしゃらなくて、その時お爺様がいらっしゃって、菊ばかりの花束、黄色いのと白いのと紫色のを束ねたのを二つ買われて、この方はどうも御仏壇用みたい、と乗り移るのをやめて、しばらくしたら今度はお婆様、うわぁ、どちらかしら、ためらっている内に乗り移れなくて、セミテリオの方角に去ってらして、あら、乗り移ればよかったかしら、でもあちらにいらっしゃってもご自宅があちらかもしれないし、うわぁ、ほんと難しい。お花屋さんだからって彩香ちゃんに乗り移って、お店にいらっしゃるだろうお母様に乗り移って、そこまではユリも我ながらいい考えだと思っておりましたのに、いざとなると、見極めがつかなくて、決心できなくて、ぐずぐず、うじうじ、疲れておりました。後ろからゆきちゃんが、ほらね、うふふ無理無理って気を送ってくるんです。もう、嫌な猫だわ、無視してくれるんじゃなかったの、意地悪っとユリは気を送ったんですが、それは無視されました。今度は真っ黒い犬を散歩させている母娘が通りかかり、お店の前で止まりました。犬のお散歩だから、ご近所の方に決まってるわ。この方も無理ね。あ～あ、ため息ついた時でした。ユリさんじゃございませんこと、こちら、ユリさんのご子孫さまのお店なのかしら。いえ、あのぉ、ゆきちゃんの意地悪そうな気を感じながら、ユリ口ごもりました。あのぉ、どなたでしょうか。あら、ごめんあそばせ。ユリさん、マサさまのお友達でございましょ。わたくし、最近と申しましても三年程前にこちらの世界に参りましたのよ。夢でございます。初めまして。いえ、本当は初対面ではないのですけれど、わたくし留守がちにしておりますので、ご記憶にないのも無理ございませんわ。あっ、夢さま、マサさまのお友達の夢さま。その時、夢さまはとっても素敵な笑顔を浮かべられて、こちらにいらっしゃいな。でも、犬のお散歩みたいなので、ユリはセミテリオに戻りたいんです。

大丈夫ですよ、これ、わたくしの娘の愛と孫娘の望ですわ。今からわたくしのお墓に参りますの。お乗りになってとにっこり微笑まれて。でも、犬のお散歩では。いえ、ほら、ユリさんもご存知でしょ。セミテリオは犬が入っても構わないでしょ。それで愛も望もいつもお墓参りにはマックを連れて来るんです。川口から電車で。まぁ、犬が電車に乗れるのですか。ええ、特別な切符がありますよ。この子達に乗るのには特別な切符など不要ですわ。ちゃんとセミテリオ行きですから、どうぞご遠慮なさらずに。あのぉ、本当に構わないんですか、じゃぁお邪魔します。ユリは乗せて頂きました。あら、またお供え用のじゃないお花を買ってる。愛がね、わたくしは菊が好きでないからと、いつも菊以外のを買うんですよ。たしかに棺には菊は入れないで、好きじゃないから、と伝えてあったのに、葬儀屋さんに伝えるのが遅過ぎて、棺は菊だらけでしたの。その罪滅ぼしみたいにお墓には菊は持って行かないんですよ。ゆきちゃんがふんと鼻をならしていました。ユリはあっかんべぇをしたかったんですが、初対面みたいな夢さまの前で気兼ねしてしまいました。夢さまありがとうございます。本当にありがとうございます。ユリ、セミテリオに帰りたくて帰りたくて、どうしたら良いか困っておりました。もう二晩も一人ぼっちだったんです。あら、わたくしなどひと月あまり愛の家におりましたのよ。でもお嬢様のお家でしょ。わたくし、全く見ず知らずの方々のお家でしたの、と四日前からの経緯をかいつまんでお伝えいたしました。愛ちゃん、なんかお婆ちゃん以外の人が乗っていない。かもね、ねぇ、母親に向かって愛ちゃんって言うの、せめて外ではやめなさいよ。夢さま、お嬢様やお孫様、もしかして。えぇ、感じるみたいですよ。ですからお構いなく。わたくしが乗ってるのも二人とも知ってます。あっ、マックも知ってますわ。あぁ、皆様、夢さまのお嬢様の愛さまのお宅のマックは、先ほどご覧になったあの黒い犬ですけれど、あれは、ロバートさまがおっしゃる、どこでしたっけ、え～と）

（愛蘭語の息子のことですな）

（はい、いえ、その愛蘭語ではなくて、真っ黒だからマックだそうです、夢さまがこちらの世にいらっしゃる少し前までは夢さまが毎日抱いてらした犬だそうです）
（たしかに真っ黒でしたのっ。何処に目があるや、何処に鼻があるや、分かりませんでしたのっ）
（日本の犬のようではなかったですわね）
（なんとかテリアっておっしゃってました。その内、夢さまが教えてくださると思いますわ）
（スコッチテリアでなかろうか。そういう名前の酒がありましたな。蘇格蘭で作る酒の瓶の絵が、たしか先ほどの黒い犬と、もう一匹似た様な白い犬の二匹の絵が書いてあるウヰスキーでしたな）
（犬から酒をつくるんですか）
（ユリさん、怖いことをおっしゃいます）
（薩摩や支那や朝鮮では犬を喰うのっ、犬の酒があってもおかしくはないのっ）
（だんなさ～、食べるのは赤狗ですから。黒や白や小さいのは頂きません）
（いえ、中身じゃなくて、商標ですな）
（犬の絵が描いてある酒瓶ですか）
（日本にも大礼服の絵の仁丹が）
（あれは、人の胆を使ってるとか）
（虎ちゃん、気持ち悪いです）
（そうかなぁ、動物の肝は漢方薬になってるよ）
（征露丸を買うと露西亜をやっつける大砲の弾作りに寄付すると思っておりました）
（マサさま、それは嘘です）
（ユリさん、我輩が申したいのは、つまり、絵と中身は関係ないということでして、まぁ、我が国でも、女性服を売るのに女性がその服を着た絵を配布したところ、女性が買えるものだと思い込んで、男性からの注文が殺到したという嘘のような実話がござるが）

（それじゃぁ、どうしてお酒の瓶に犬の絵を描いたのでしょう）
（さぁ、たぶん、製造者が犬が好きだったとか）
（犬が好きな人が買うからってのもあるんじゃないかな）
（どうする、正門から入る。ううーうん、こっちからの方が近いわ、そうおっしゃって愛さまと望さんとマック君が左に曲がられてすぐのところに、かふぇじゃるだんわふみゃうとひらがなで書いてあり猫と犬と豚の絵が描いてある硝子の扉がありました）
（まぁわたくしの言葉ですわ。珈琲、庭、わんにゃんとでも訳しましょうか）
（同じことを愛さまもおっしゃってました。望さんが、愛ちゃん、入ろうよ、きっと可愛い犬や猫や、もしかしたらみに豚にも会えるかもしれないじゃない、マックにお友達ができるかもよ。みに豚ってなんでしょう、豚の品種かしら。愛さまが、帰りにマックが嫌がらなかったらね。犬が嫌がるってどうしてかしらとユリが思ってましたら、マックさぁ、いつかは死ぬんだから、それにマックはここじゃなくて、私の部屋に置いといてあげるから、ここじゃ遠いもの、きっと高いし、と望さんがおっしゃって、愛さまは、きっとあちらの世界の犬や猫の霊がたくさんいて、マックは困るんじゃないかなぁ。あなただって、おばあちゃん以外の霊気をたくさん感じたら、嫌というか困る、重いんでしょ。うん、そうかぁ。マックもあちらの世界の霊気の犬さんや猫さんと遊べればいいのにね。あなたねぇ、自分ができないことを犬に要求するわけ。あなたの側に来たり乗ってくる霊気さん達とあなた遊べないでしょ。でも、今日こそ入ってみたい。ぺっとかふぇだからってんじゃなくて、霊園の方、見てみたいじゃない。きっと可愛い犬や猫の写真もたくさんあってお花も飾ってあって素敵なんじゃないかなぁ。マック、入ろうよ。夢さまも入ったことないそうですが、どうもそこは動物を連れて入れる珈琲店で、奥の方には動物の霊園があるらしいと、夢さまが説明してくださいました。ほら、私達のここの霊園には動物は埋葬できないでしょ）

（然様ではないのですのっ。ユリさんご存知なかったのかのっ。この霊園にはちゃんと軍馬や軍犬の墓があるのだのっ。お国の為にご奉公した馬と犬には明治の世から墓がある。私より先にこの霊園に入った馬や犬もいたのだのっ）

（まぁ、わたくし存知ませんでしたわ）

（僕思うんだけれど、またやっかみって言われそうだけれどさ、馬や犬に、お国の為なんて意識、あったんだろうか）

（大事な馬や家族同然の犬を育て、戦の為に訓練し、先陣切って敵に殺されあっぱれ戦死した犬や馬の墓をつくる主人の気持ちは、馬や犬にも伝わったと思うがのっ）

（愛さまと望さんがお話ししていました。この喫茶店とペット霊園ね、お母さんが小さい時にはなかったのよ。この辺一帯、お茶屋さんだった。お茶屋さんって何、喫茶店もお茶屋さんでしょ。え～と、お茶を売る所じゃなくって、お母さんもよく知らないんだけれど、お婆ちゃん、あっ、あなたのお婆ちゃんじゃなくて、私のお婆ちゃんが生きてた頃にはね、つまりお母さんが大学の頃にはね、まだこの辺りお茶屋さん、茶店、ちゃみせよ、さてんじゃなくて、がいっぱいあって、それぞれ霊園のお墓の所有者から委託されて、ってのかなぁ、面倒見ていたのよ。何々家って書いた桶、墓石を洗う水を入れる桶ね、それからお花とかお線香とか用意していて、納骨の前にそこで桶やお花やお線香を買ったりして、納骨の後には列席者がお茶屋さんでお清めのお食事をしたり、一見さんもふらっと立ち寄って霊園の行き帰りに一休みする所ってのかなぁ。へぇ、それじゃれすとらんみたいなの。でもそこでは料理は作っていないみたいで、仕出しをたのんで、お茶屋さんはお茶とお菓子を出すくらいかなぁ。だからこの辺りには仕出し屋さんも数件あったはず）

（そうでしたわ。今は、茶屋がそんなに減ってしまったのでしょうか。だんなさ～が亡くなった日にはすぐに茶屋に連絡を、と思いましたのに、何しろ日が日）

（マサ、すまんのっ、然し乍ら、私とて、死ぬ日を選べはせなんだ）

（あぁあっ、墓石に書いてありますね）
（おっ、我輩にも見えますな）
（あらぁ、ほんと、日本では大層大事な日ですわね）
（うわっ、これじゃ、大変でしたね）
（めでたい日というかめでたくない日というか、あはは、いや、笑っちゃいけない、おじいちゃんごめんなさい）
（人騒がせでございましょ。ほんと、大変でしたのよ）
（日本中がお祝いしている時に、葬儀の手配をしなければならない。作ったおせち料理を食べていいものか迷いますし、家は神道でしたが、神主さんもお忙しい日でございましょ。三が日はどうしようもなく）
（寒いとはいえ、三日になりますと、もうお線香もうもうにいたしまして臭い消し）
（弔問にいらっしゃる方々も、複雑なお顔で、あちらこちらお訪ねなさっておめでとうございますの口癖が抜けぬご様子で、そりゃ、どちらも羽織袴紋付で構わないのですから一石二鳥なのかもしれませんが）
（何が辛いと申しまして、まぁ、亡くなった時はそれなりに多忙で気も紛れますでしょ。それから毎年お正月が命日というのは、お節料理を作るのは気が引けますし、でも新年のご挨拶にいらっしゃる方々に振る舞いできませんのもね、で、神棚にはお花、お正月のお花なのかだんなさ～へのお供えのお花なのか、なんともね）
（すまん。しかしながら、先ほども申したがのっ、自分で死ぬ日は選べぬものでのっ。私にしてみれば、マサがお節料理を準備している時にせめてつまみぐいしておれば、とこちらの世に参ってからも後悔しきりだったのっ）
（あら、また、すみません。わたくし達の話をしてしまいました。たしかに、昔は、セミテリオの周囲にはお茶屋さんがたくさん並んでおりました）
（愛さまが、たしか、ほら、裏通り、商店街の方にすーぱーがある

でしょ。あそこは仕出し屋さんだったと思う。でも、今、いちいちお茶屋さんに寄らなくてもお線香やお花は簡単に買えるし、喫茶店だってれすとらんだってどこにでもあるでしょ。水だって霊園の中に水道あるし、家みたいにマックのお水兼用でぺっとぼとるに家から入れていけるし）

（ぼとるは、英語の瓶のことだと我輩思うのだが、ぺっと、すなはち愛玩動物に飲ませる水を運ぶ容器をぺっとぼとると、今の世ではよぶのですかな）

（愛玩動物専用水筒といったところかのっ。それにしても動物が大切にされている時代なのですのっ）

（お墓の場所がわからなきゃ管理棟で訊けばいいし。お墓参りも減っただろうし。だからお茶屋さんは減っちゃったのね、きっと。それで皆商売替えたり、売ったり。お墓参り、減ったのかなぁ。減るでしょ。後継ぎ生まれないとお墓も継いでもらえないし。管理料払えなきゃお墓そのものが無くなっちゃうらしいし。これ聞いて、ユリ、ぞっとしました）

（お墓が無くなるのですか）

（らしいですわね。でもどうして。永代供養料って、ずっと未来永劫供養していただける、ってことじゃないのでしょうか）

（言葉の綾なのだろうのっ。墓石が欠けてもろくなってとか木の墓標だと腐るだろうし、確かに古い墓は消えて行くのっ）

（どこに消えていくのかなぁ。時々、そういえば掘ったり、墓石がどかされている）

（でも、無くなるんですか。だんなさ～が生存中にここを買われた折、お安くはありませんでしたでしょ。永代供養ということでしたから、ずっとずうぅっと、と思っておりましたのに）

（神主も僧侶も、ただじゃ供養はしてくれぬ、というわけですのっ。世知辛い世の中と申すか、なるほど、坊主丸儲けというのはこういうことかのっ。常に人は死ぬ。死人を常に永劫供養するから喰いっぱぐれ無用の心配）

（子孫がいればいいわけだよね。後継ぎ、というか墓を継いでくれる人がいればいいわけだ。あっ、戦前の多産の時代、墓を継ぐ子孫がいなくなるなんて誰も思わなかったのかなぁ）

（まだだんなさ～もわたくしも安泰ですわね。幸いにも長男の長男のと玄孫まで生まれておりますものね）

（だがのっ、直系は、もはや誰一人として江戸、否、東京には住んでおらぬのっ。どんどん郊外、郊外へと。墓は継いでくれても、墓参りには滅多に来やせぬ）

（あら、わたくしどうしましょう。英吉利か仏蘭西から、わたくしの夫や子やその子孫がこのわたくしのお墓の管理料を払ってくださってるのかしら）

（我輩の場合は、亜米利加合衆国がそれ相当の対応をしたと思うが、よって、カテリーヌさんの場合も同様ではなかろうか。貴女の仏蘭西国ないしは夫君の英吉利国が）

（愛さまと望さんのお話が続いていました。ぺっとかふぇ兼ぺっと霊園は、まだお茶屋さん、茶店関連の業種みたいなものでしょ。そこの床屋さんは完全に商売替えだわね、ここもたしかお茶屋さんだったから、とおっしゃった愛さまが指したのは、かふぇなんとかの並びの、お隣なんですけれど、かふぇなんとかが）

（ユリさま、かふぇじゃるだんわふみゃうです）

（先ほどまでは、お話する為に覚えておりましたの。カテリーヌさまがお国の言葉だとおっしゃったので、カテリーヌさまにおまかせすることにして、もうユリ忘れてしまいました。でもね、ユリ、よく先ほどまで覚えていられたって、自分では感心してます。だって、カテリーヌさまと離れてから二晩以上前のことから、ユリずっとお話ししてるんですものね。あら、でも、かふぇなんとか）

（かふぇじゃるだんわふみゃう、ですわ）

（はい、ありがとうございます。その、かふぇじゃるだんわふみゃうの前を通り過ぎたのは今朝、ほんの少し前なんですわね、嫌だわ、ユリったら。あっ、それで、そのかふぇじゃるだんわふみゃうはと

っても広く道に面していて、腰から上ぐらいが全部硝子で、中が見えるんですけれど、中には猫がいて、硝子の中からマックの横を歩いて追っていました。黒と灰色の間くらいの短い毛で日本の猫ではなくて、その時望さんが、ほら、マック、中からしゃむ猫が挨拶してるよ、とおっしゃったので、あっ、これが珈琲店のしゃむさんね、しゃむ君かしら、例のゆきちゃんをいじめるしゃむね、と思ったのです。でも、ゆきちゃん意地悪だし。それで、その長く続くかふぇじゃるだんわふみゃうの硝子が途切れたお隣の、これまた硝子戸に、バーバー次郎って書いてあったんです。うわっ、これだわ、彩香ちゃんのお婆さまがお話なさってらした婆婆次郎って。ユリ、その時にはまだバーバーってのが何だか知らなかったんですけれど、バーバー次郎がここだってことはわかったんです。まだその時には婆婆次郎さんが、お婆さまなのかお爺さまなのかわからなかったんです。でも、ここに、ゆきちゃんをシャム猫から守ってくれる次郎さんのお兄さん太郎さんがいらっしゃる、と思った時、望さんが、太郎君、太郎君って声出すんです。うわっ、どうして望さんが太郎さんのお名前をご存知なのかしら、どうして太郎君なんて君呼ばわりするのかしら。ここまで敬語はなくなったのかしら。あっ、そういえばお墓参りにこの道何度か通られてるのね。だからご存知なのね、でも、よその方を君呼ばわりなさるなんて、今時の若い女性はすさまじいのね、ユリはこういうこと考えている時、口に出していたわけじゃないんですけれど、夢さまが吹き出されて、太郎さんって、犬の名前なんですよ。ほら、そこの硝子戸の横に犬小屋があるでしょ。小屋というには大きすぎる家でしたけれど、屋根が青赤白の三色に塗られていました。その犬小屋じゃない犬大家の屋根の下に何か薄茶色のものが動いていました。よくいる柴犬みたいな色を濃くした毛の色で、でも柴犬の犬小屋にしては大きくて、あっ、秋田犬かしらと思ってました。でも女性か男性か分からない次郎さんのお兄様が太郎君ならば、次郎さんも犬なのかしら。夢さまが、ユリの思考を読んでらっしゃって、からころ笑うんです。望、他所の子を構うん

じゃないの。マックが焼きもちやくから。マックが犬大家の近くで鼻を鳴らしたら、中からのそっと出て来たんです。犬じゃなくて、お獅子。うわぁ夢さま、犬じゃなくてこれはお獅子です、って申し上げましたら、夢さまがくすくすからころからんころんお笑いになって、むせられて、でも犬なんですよ、よくご覧になってくださいな、都内で獅子など飼えませんわ、動物園でもあるまいし。で、ユリじっと見ていたんですけれど、やっぱりたてがみがありますし、尻尾も先だけ毛がありますし。でも、ばふって吠えたんです。がぉぉおっじゃなくて。目つきも優しいんです。でもお獅子の格好なんです。愛さまが、可愛そうよね、いくら床屋さんだからって、犬をライオンカットするなんて。あぁ、今はユリ分かりますよ。ロバートさまがおっしゃってらしたから、お獅子みたいに切るって意味ですよね。ユリ、そのライオンカット、お獅子格好みましたから。望さんが、たぶん寒いんじゃないかなぁ、剃ってる所が。ちゃうちゃうもこうなっちゃ哀れだわ。ユリが疑問を感じた途端に夢さまが教えてくださいました。ちゃうちゃうってのは犬の種類のことで、中国原産だと。ユリが、支那ですね、と申しますと、支那は今では中国って言うんですよ、とも。お詳しいですのね、と申しますと、望は獣医志望なんですよ。わたくしの生前から動物の話はたくさん聞かされているんです、とおっしゃって、女の子が獣医さんじゃ大変ですわね、象さんやきりんさんや馬さんや牛さんを診るのでしょう。本人は動物園の獣医さんになりたいそうですけれど、近頃は犬猫相手の獣医さんがたくさんいるんですよ、と。それで、太郎さんがお獅子恰好の犬なら、次郎さんも犬なのでしょうか、とユリがお尋ねいたしましたら、またまた夢さまころころ笑われて。ユリね、その時納得したんです。ゆきちゃんが太郎さんを怖がるのは、太郎さんが大きな犬で、しかもお獅子の恰好だからなんだって。先ほど太郎さんのことをお話した時には、ユリが後で分かったことは申し上げませんでした。だって、あそこで太郎さんが犬だってことお話してしまったら、ユリが不思議に思ったことも、皆様には不思議でも面

白くもなくなるでしょ、ごめんあそばせ。あっ、それでね、ゆきちゃんを守ってくれるという太郎さんは恰好は恐ろしくても優しそうな犬さんで、マック君とも顔なじみらしくて、ちょんと鼻先で挨拶していました。マック君が、僕知ってるからって、それまで愛さまと望さんの間を歩いていたのに、先頭に立ってそこから五分ぐらい歩いたら、もう霊園でした。やっとセミテリオに戻れて、ユリはほっとしました。ユリのお話、カテリーヌさまとご一緒の一泊とユリ一人だけの二泊、とってもとっても長かったです。おしまい。ご静聴ありがとうございました）

（お疲れさま、ユリさま、本当にごめんなさいね。琴音ちゃんやお子達、また遊びに来てくれるかしら）

（ユリちゃん、ゆっくり休んでね）

（虎ちゃんに優しい言葉をかけられると、後が怖くなります）

（僕は、根は優しいんだよ）

（根はですかな、あはは）

（気疲れは気が薄くなりますから、ごゆるりと気を養ってくださいませ）

（いや、ちょっと待ってくだされ。昨日夕方に猫のユリさんが）

（彦さま、違います。ユリは私、猫はゆきちゃんですっ）

（すまん。それで、そのゆきちゃんが上がって来た時に太郎さん、否、犬の太郎君は花屋に一人で、否、一匹で参ったということかのっ）

（まさか。太郎君がお金を持ってお花を買いに来たというのですか）

（いや、利口な犬ならそういうこともあろうのっ）

（あっ、ユリ、そういう風に考えませんでした。婆婆次郎さんが太郎さんと一緒にいらしたんだと、勝手に思ってました）

（それでも、その男か女かわからない婆婆次郎さんが太郎さんと一緒に来たわけだろうのっ）

（うふふ、わはは、彦さま、お分かりになってらっしゃらない）

（わたくしもわかりませんわ）

（婆婆次郎さんは、それで男だったのだろうかの、それとも女だったのだろうかの、興味津々）
（ロバート様がおっしゃってらしたでしょ。次郎床屋って。つまり、次郎さんは床屋さんなんです）
（犬が床屋さんをしている世の中になったんですかっ。そりゃ♪ちょっきん、ちょっきん、ちょっきんなぁ♪では蟹が床屋さんでしたが）
（マサさまも、まだお分かりになってらっしゃらないっ）
（はい、まだ後を思い出せませんわ）
（いえ、歌ではなくて）
（ですが、太郎さん、否、太郎君が犬なのですから、婆婆次郎さん、床屋の次郎さんも犬ですわね。まさか猫ですか）
（いえ、ですから、次郎さんは人間で、床屋さんで、太郎君は犬で、次郎床屋さんの看板犬なんです。床屋の次郎さんが、ご自分の腕をふるって、犬の太郎君をお獅子恰好に切った、ってことなんです）
（なんでまた。次郎は太郎の次に来るものだろうが）
（左様でございますわ。人間の次郎さんの飼い犬が太郎さんなどと、おぞましい）
（あら、ユリは面白いと思いましたのに。人間と犬のどちらが上でも下でも構いませんでしょ）
（おうおう、この世は、否、あちらの世は、下克上が人間と犬の間で起きているのだのっ。その内、こちらの世も動物ばかりになるかもしれないのっ）
（彦様、それでは、かふぇ、え～となんでしたっけ）
（かふぇじゃるだんわふみゃうです）
（カテリーヌさまありがとうございます。いくらひらがなで書かれていても、日本語でないものは覚え辛くて。彦様、そのかふぇじゃるだんわふみゃうなんですが、珈琲店でも、動物用の珈琲店だそうですけれど、もっと驚かれますかしら）
（なんとっ、言葉もないわ。人間が、いや、もしかしたら動物が動

物に珈琲を出す所なのかのっ）
（もしかして、動物が珈琲店の中で煙草を吸ったり新聞読んだりしているのでしょうか）
（字が読めるかどうかはユリも存じませんし、愛さまと望さんがかふぇじゃるだんわふみゃうの前を通られた時は準備中の札がかかっていましたから、でも、犬が珈琲を飲んだら変かしら。犬って人間と同じで何でも食べますよね）
（つまり、そのかふぇなんとかは、動物の霊園兼お茶屋、なのかのっ）
（そうかもしれませんわね。愛さまと望さんが夢さまのお墓から帰られる時に、彦様とマサさま、お乗りになられては。あら、今日はもう帰られたみたいですわね。ユリのお話、長かったですもの。夢さまにお声かけなされば、次回夢様がお嬢様のお家にいらっしゃる時にでも、もしかしたらマック君に先導されて皆様でかふぇじゃるだんわふみゃうに入れるかもしれませんわ）
（う～む・・・）
クワ～コルネイユ～クロウ～クワ～

第四話終わり

第四話　セミテリオのこども達　その十三　最終回（後書き）

長い長い第四話をお読み頂きありがとうございました。
お読み頂きありがとうございました。
お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日午後にアップしています。
気の世界にまたのお越しをお待ちいたします。

次回は１０月１３日番外編伊の童話
第五話は二週間後１０月２０日にアップの予定です。

セミテリオの仲間たち　番外編伊　童話　わにのこちい

なにかふわふわのものの中に、ぼくは浮かんでいた、ってのがぼくの最初の記憶でした。ジャカレ、ジャカレという声がしていて、ぼくが目を薄く開けると、黒い目がぼくを見ていました。それからぼくは柔らかいものに包まれ、ごわごわのものに包まれ、だぶだぶのものに包まれ、そっと置かれて、ごろごろ、がたがた、どすん、ごぉっ、どすん、がたん、ごとんごとん、がたんがたん、ざっざっ、とんとん「はぁ〜い。うわぁ、和さん、お久しぶり、ブラジルいかがでした。三通目のブラジリアからの絵葉書が夕方届いたばかりよ」「アマゾンの河口のベレンていう所からも一昨日出したんだけれど、航空便の絵葉書より、航空便の僕の方が先に着いてしまいました。これ、いちこさんにお土産。ちょっとばかり大変だったんです。何しろ陶器、壊れちゃ困るから、衣類の間に挟んで。気に入って頂けたら嬉しいのですが」ごわごわのものと柔らかい物がぼくのまわりからなくなって、無防備でちょっぴりおびえていたぼくの目を、優しそうな黒い目が見つめてきました。「可愛い！　和さん、ありがとう。きれいなわにさんね。ブラジルにはこんな色のわにさんがいるんですね」「いや、これはインディオの生活支援をしている店で買ったもので、インディオの手作りだということです。ポルトガル語では、ジャカレと言うんです」「黒や茶色に黄色や緑や赤が混じっているわにさん、すてき」

ぼくは、本箱の、いちこさんのお仕事関係の本の前に、白いレースのハンカチを二つ折りにした上に置かれたました。いちこさんは、毎朝毎晩ぼくを手にし、ジャカレ君おはよう、ジャカレ君おやすみなさい、と挨拶してくれ、ぼくもいちこさんに挨拶していました。

やがていちこさんは和さんと結婚し、和さんが移り住んで来てか

らちょっぴり狭くなった同じ本箱の前の同じレースのハンカチの上のぼく。でも、いちこさんがおはよう、おやすみなさいと言う相手は和さんになったので、ぼくは置かれたままになって、でも、いちこさんと和さんが幸せそうなので、ぼくは満足。

いちこさんのお腹が大きくなり、ある日、いちこさんはどこかにお出かけし、和さんと戻ってきたいちこさんのお腹は元に戻り、いちこさんの腕には人間の赤ちゃんがが抱かれていました。赤ちゃんは隆君と名付けられ、いちこさんがおはよう、おやすみなさいと言う相手は隆君と和さんになって、ぼくは相変わらず、もっと狭くなった本箱の前のレースのハンカチの上。ぼくはずうっとここにいるんだよ。ぼく、ちょっぴり寂しい。

隆君が歩ける様になって、和さんといちこさんと隆君は、小さな庭のある小さなお家にお引っ越しすることになりました。いちこさんが小さい時から持っていた物、和さんが持ってきた物、隆君が生まれてから頂いたり買いそろえた物で、家が狭くなったからでした。本箱の上の段から箱詰めしていたいちこさんは、埃が薄くかかって灰色がかったレースのハンカチの上の、やはり埃をかぶってくすんだぼくを見つけてくれて「あら忘れていたわ。ジャカレ君ごめんなさいね。あなたを頂いた時、あんなに嬉しかったのに、毎日挨拶していたのに」懐かしそうに微笑んでいるいちこさんを見て、隆君が手を伸ばし、「見てて、見てて」いちこさんはレースのハンカチを折りなおして、きれいな面でぼくを拭いてから、隆君の小さな手にそっと乗せました。「割れちゃうから気をつけてね」「きれい。これ、わに」「そうよ、わにさん。名前はね」「ちっちゃいからちい」隆君が言ったので、ぼくの名前は、ジャカレ君からちいに変わりました。隆君、きっと優しいよね。

ぼくは隆君の他の玩具と一緒に段ボール箱に入れられて、新しい

お家にお引っ越し。「ちい、ここぼくの部屋。ちい、今度からここで一緒に遊ぶの、ほら、犬のわん君、熊のがおたん、オウムのおたべりちゃん、猿のきい君、ちいです、よろちくお願いします」電車ごっこも、病院ごっこも、おままごとも、幼稚園ごっこも、動物園ごっこも、ぼくは隆君と、わん君、がおたん、おたべりちゃん、きい君と一緒。隆君が幼稚園に行くようになっても、小学校に行くようになっても、家に帰ってくると、ぼくと遊んでくれました。でも、隆君の勉強がだんだん難しくなってきて、塾に行くようになり、遊ぶ時間も減って来て、ぼくは玩具箱の中に居続け。たくさん遊んでくれてありがとう、ぼくも楽しかったよ。

物が増えて狭くなってくる隆君の部屋をいちこさんが整理を始めました。捨てられるんじゃないかって、ぼく、とっても怖かったけれど、リメイクやリフォームの好きないちこさんは、ぼくの汚れを洗い、ラッカーで色を塗り直してくれました。よかった、優しいいちこさん、ありがとう。ぼく、さっぱりしたよ。

いちこさんはぼくをお外に連れて行きました。和さんといちこさんの庭には、ガーデニングのお店で買ってきた赤い三角帽子のこびとさんと、青い三角帽子のこびとさんや、緑の風見鶏のついた小さなお家に囲まれて、小さな池がありました。隆君が数年前に金魚すくいですくってきて、どんどん大きくなった金魚さん達もいました。その池の淵に、ぼくは置かれました。こびとさん達はじめまして。金魚さん達こんにちは。風見鶏さんよろしく。ぼく、ちいですよろしくお願いします。いちこさんと会えるのかな、隆君は来るのかな、和さんは、と心配するぼくに、大丈夫、毎日二回、私たちにごはんをくれるから。それに草むしりしたり球根植えたり、お花に水やりに来るよ。ぼくには新しい仲間ができました。

会社に入って、どこかに出張に行って帰って来た隆君の声が、家

の中から聞こえてきました。「母さん、これフロリダのお土産。そういえばさ、ちい、捨てちゃったかな」「捨てるわけないわ、あれは和さんからのプレゼントだったのよ」「そうだったっけ。俺の玩具だと思ってた」「ちいはね、今はいちこのにわの池のまわりでこびとさんたちと一緒にいるわ」「ふ〜ん、いちこのにわね。明朝見に行くよ」

こびとさんや金魚さんたちに別れを告げる間もなく、隆君の大きな手に握られて、ぼくは洗面所で洗われてタオルで拭かれて、テレビの上に置かれました。そこには花柄のわにがいました。「ほら、ちいに仲間ができた」「ちいが喜んでいるかもね、こちらはフロリさんよ」フロリさんはぼくに、よろしくね、とにっこり微笑んでくれました。久しぶりに見る和さんは白髪頭、毎日見ていたから気付かなかったけれど、いちこさんにも白髪がちらほらあって、二人とも少し小柄になったみたいに見えたのは、隆君がとっても大きくなったからかな。

隆君が買って来た花柄のパッチワークはフロリさんだけじゃなかったのです。テディベアが翌日、美紗さんに渡されて、しばらくして、隆君は美紗さんと結婚し、近所の家に住み始め、またしばらくして、洋君が生まれました。美紗さんもお仕事があるので、昼間は和さんといちこさんが洋君を預かっていました。小さい頃の隆君そっくりでした。洋君の成長をぼくとフロリさんは見ていました。

洋君がつかまり立ちできるようになった頃、テレビの上からテレビの台に移動していたぼくとフロリさんをみつけて、「くまちゃん、くまちゃん」「違うのよ。これはわにさん。こっちがフロリさんで、こっちがちい君。ちい君はおじいちゃんがブラジルから連れて来て、洋君のお父さんが小さい頃、遊んでいたのよ。フロリさんはお父さんがアメリカから連れてきてくれたの」ぼくが初めて会った時には、

洋君のお母さんとお父さんより和さんもいちこさんも若かったんだよ。その頃にはフロリさんはいなくて、ぼくは、わん君やがおたん、おたべりちゃんやきい君と一緒に隆君と遊んだんだよ、みんなどこにいるんだろう。お庭にはこびとさんたちや風見鶏さんや金魚さん達もいるよ。きっと今もいるよ。ぼくとフロリさんは、それから、洋君のお店の人になったり、お客さんになったり、幼稚園の先生になったり、時には動物園のわにの役もしました。

小学校に入学した洋君は、お父さんとお母さんのお仕事が終わるまで、放課後は和さんといちこさんの家で毎日過ごしていましたが、ぼくもフロリさんも、テレビの台の上に置かれたままになりました。隆君ともこうだった。フロリさん、初めてで辛いでしょ。でも、ここでみんなを見ていられるんだよ。

いちこさんと一緒に動物のＤＶＤを見ていた洋君が、ふと「おばあちゃん言ってたでしょ。ちい君はおじいちゃんが、フロリさんはお父さんがこの家に連れてきたって。あのね、この前図鑑で調べたら、ワニって地球の陸地が一つだった頃からいたから、今は世界中にいるんだって。だから、僕大きくなったら、ブラジルとアメリカじゃない他の国に住んでいるワニさんを連れてくるね」

フロリさんと和さんといちこさんの目が輝きました。

第四話の、桜山中央小学校三年生のいつも笑顔の洋くんの祖父母の家のテレビの台の上のフロリさんの横にいるちい君の作文でした。

セミテリオの仲間たち　番外編伊　童話　わにのこちい（後書き）

お読み頂きありがとうございました。

来週水曜日午後
セミテリオの仲間たち第五話その一をアップいたします。
よろしかったら、また気の世界へお越しください。

第五話　セミテリオのご隠居　その一

（皆の衆、ご機嫌いかが）
（ご隠居さま、こんにちは）
（ご無沙汰しておりますわ）
（僕はじっとしていられない質でしてね、どうもセミテリオよりもあちらの世の方が面白くて、ついついひょいひょい出かけてしまいますから。ハナが付合ってくれないのが残念です）
（ハナさまは、何故お付き合いなさらないのでしょう、あら、立ち入ったことをお伺いしてごめんなさい）
（いえ構いませんよ。ただ、それを話し出すと長くなりますから）
（お気遣いなく。たぶん永遠の時の中にたゆとうわたくし達ですもの）
（それじゃぁ、話してみましょうか、あちらの百年、こちらの十年の人生）
（ご高齢とおみかけいたしますが、おいくつなんですの）
（カテリーヌさんよりは若いと存じますが、おっと失礼、見かけではなく、あちらでの出生はですよ。見かけでしたら、カテリーヌさんは私の三分の一ぐらいでしょうか。どの年齢を申しましょう。生まれてからなら百十年、あちらの世で止まった年齢でしたら丁度百、切りの良い年齢ですよ。こちらに参ってからでしたらまだまだ若輩十歳の若造です）
（ご隠居様、百十年前ということは、うわっ、もしかして、明治三十二年ですか）
（はい、そうです。僕は西暦ですと、丁度千九百年の生まれです。これまた切りがよい）
（うわっ、うわっ、あら、まぁ）
（ユリ様、どうなさったのでしょう）
（マサさま、だって、ですから、あのぉ）

（ユリちゃん、深呼吸、はいっ）
（あの、あのぉ、ご隠居様、ユリと同じお年なんです）
（うわっ、ユリちゃんって、百歳なのか、いや、百十歳）
（ということは、わたくしはユリさんより先に生まれてますあら、百歳を超えている、あら、セラヴィとはとても申せませんわ）
（僕、なんだか、ここにいらっしゃる方々の中で、ほんと若造。といっても、え〜と、あのまま生き続けていたら、今、僕は、八十四歳。やっぱり二十六もお姉さま、母でもおかしくない方をユリちゃんとよんではいけないみたい。ユリさま、ユリおばさま、ユリお婆さま、かな）
（いえ、やっぱり、ユリちゃん、でいいです。いえ、ユリちゃん、がいいです）
（ほう、ほう、僕はユリさんと同じ年ですか。ユリさんはいつ頃こちらへ）
（大正九年に、西班牙風邪で）
（十九の時ですね、あぁ、あの頃、僕が結婚できるかどうかという頃でしたね。ふむふむ。あれから八十一年僕はあちらで生きて、うむ。まぁあちらの世は動きも浮き沈みも苦楽も激しいですからね。ユリさん、こちらの世界は穏やかでしょ）
（はい。穏やか過ぎて、このまま空気になりそうです）
（僕はまだまだ当分空気にはなりたくなくて）
（それで、最近ちょくちょくおでかけなのですね）
（マサさん、そうなんです。元々ひょいひょい、身軽な今じゃひょいひょいひょいひょい。何しろつい最近、玄孫が生まれましてね。赤ん坊は見ているだけで面白い）
（命の輝きを感じますでしょ。男の子ですの、女の子ですの）
（両方です）
（まぁ、双子さん）
（いや、三つ子でして）
（三つ子の魂百までですわね）

（カテリーヌさん、それはちと違いますのっ）
（あら、彦さま、三つ子は百歳まで魂が長持ちするということではないのでしょうか）
（雀百までってのもあるんだよ）
（虎ちゃん、カテリーヌさまをからかっちゃだめっ）
（えっ、雀は百歳まで生きるって意味ですか）
（いや、雀は百歳まで踊りを忘れないという意味で、三つ子の方は、三歳までに覚えたことは百歳まで忘れないという意味ですよ）
（やはり、百歳まで生きるんですね。存じませんでした。鶴や亀が長生きするというのは、来日してから知りましたが、雀もなんですね）
（最近の日本人はどうも二百歳や百五十歳がぞろぞろいることになっているらしいのです）
（ご隠居さま、まぁ、そうなんですか）
（それだと、私やマサより前に生まれた方々ということになるのっ。すさまじいですのっ。大和魂は長生き魂なのですのっ）
（いやいや、彦さん、マサさん、実はそうではなくて、こちらの世に参った方々を役所、役場が把握していない、要するにいい加減なんですよ。戸籍や住民票をきちんと管理していないからで）
（あのぉ、戸籍はわかりますが、住民票ってなんですか）
（おっ、ユリさん、そういえば、孫が生まれた時には住民票はまだなかったですね。え〜と、孫は今年六十になったから、六十年前より後なんですね。そうそう、昔は戸籍だけでした）
（わたくしが生まれた頃には戸籍制度もなかったのですよ）
（あれは、私が薩摩から上京した頃だったかのっ。戸籍を作るというので、亡き父や母、父方祖父母など過去帳と記憶を頼りに整えたのは）
（過去帳には戒名しか書いてなく、おごじょは某の娘などだけでの、名前はもとより、いつ生まれたのかいつ亡くなったのかもわからなくて。お国がしっかりした制度を作られたものだと感心いたしまし

たのよ）
（血税と課税の為に整えた制度と、僕は教わりました）
（課税の他に、血税って何でしょう）
（血で払う税金のことさ）
（まぁ、血を抜かれるんですか、恐ろしい）
（いや、血どころか命かな。あっ、徴兵のことを血税って言うんですよ）
（その、百五十や二百まであちらで生きていることになっていた方々は、つまり税をとられていた、ということですかのっ）
（まぁ、こちらの世からは払えませんよ）
（それにいたしましても、三つ子とは珍しいことですわね）
（昔なら、犬腹とか嫌われましたな。日本では、逆にそれが安産につながるから戌の日に腹帯を巻く風習があるのですな。しかし一度に三人ですと、一人ずつが小さ過ぎて、昔でしたら育たなかったですな。それにしても三つ子とは珍しい）
（え～と、ロバートさんでしたっけ。最近は珍しくもないんです。子ができないとかえって双子三つ子になるんですね）
（ご隠居様、わたくし、日本語がわからないのでしょうか）
（いや、カテリーヌさん、僕がきちんと話してませんので。つまりですね、結婚したがこどもがいつまでもできない、そういう場合、どうするか、で、双子や三つ子が生まれるのです）
（わたくし、わかりませんわ）
（カテリーヌさん、大丈夫です。安政に薩摩で生まれて昭和に東京で亡くなりました、八十五年も日本から出たことの無いわたくしでも、理解できませんもの。ご隠居さま、どういうことなのでしょう）
（つまり、子ができなかったので、曾孫の精子を受精した曾孫の妻の受精卵を妻に戻して、着床できない場合もあるので四つ戻したところ、三つが着床して、勿体ないから一度に三人産むことにしたわけです。お分かりにならないことが多数あったと存じますので、今からおいおい説明いたしましょう）

（わたくしの頃でしたら、子を生さねば離縁でしたわ）
（そうですねぇ。夫婦には相性というものもありますが、とはいえ、子を生さぬのは、何も女性側に全責任があるわけではなく、男性側にある場合も、まぁ半分といたしましょう。でも、かつては女性側の責任にされた。哀しいですね。今では、どうしても子が欲しい場合はどちらに原因があるのか検査します。これまた結果は辛いものもあります。まぁ、原因が分かれば対処のしようもあるというもの）
（離縁ですか）
（まぁ、そういう場合もあるやもしれぬが、でも、別れたくはない場合、それでも子が欲しければ）
（貰い子ですのっ、家系を継ぐ為に養子をとるとかのっ）
（しかしながら、できれば自分の血を分けた子が欲しいですね）
（まぁ、そりゃそうだが、それが無理な場合だろうのっ。男兄弟の子を分けて貰えば一番よい）
（それは、彦衛門さん、男の視点）
（殿方の家系を未来永劫残すというのが定め）
（ということになっておりましたね。古今東西、ほとんどの場合世の習い。でも、女性側とて自分の血を分けた子がほしい、けれど身籠らない場合。しかし、卵子と精子はある場合）
（卵子と精子ですか、何か生ぐさい）
（ユリさんにはお耳の毒かしら、あら、虎ちゃんにも）
（マサさま、ご心配ありがとうございます。あちらでは花も恥じらう年頃でしたけれど、もう百十歳ですもの。ユリ、大丈夫です。ご隠居様のお話、新鮮です）
（僕は、一応知ってはおりますが、う〜ん、恋だの愛だのとは無縁の、人生十七年。何か、人が動物と同じというのは、分かったような、辛いような）
（虎さん、あはは、すみません、虎さんとおよびすると、あちらの世界の寅さんの映画を思い出します）
（へぇ〜、寅の映画があるんですか）

（はい、渥美清氏が演じる葛飾柴又の寅さん、シリーズで映画になりました。面白かったですよ）
（シリーズとは、連作ということですな）
（はい、五十作近く作られたと思います。是非ご覧になってください。面白いですよ。そうそう、彦衛門さん、下のお話お好きでしたね。寅さんのには面白い台詞があるんです。結構毛だらけ猫灰だらけ尻の廻りは糞だらけ、蛸は疣疣、鶏二十歳、毛虫は十九で嫁に行く、というのがあるんですよ）
（うむ、そりゃ面白い、猫の尻の廻りは糞だらけ、ということですかのっ。葛飾柴又の寅さんが活動弁士ということですかのっ）
（彦衛門殿、言葉遊びの様でござる。猫の尻だけではなかろう。これは、我輩の好きな日本の世界の様でござる）
（弁士が寅さんではなく、物語の主人公が寅さんで、あっ、でも寅さんは香具師というのでしょうか、あちらこちらで怪しげな物を売る時の口上ですよ。日本各地が舞台になってます）
（うんっ。怪しげな物を売る香具師ですかのっ、私の警察魂に火がつきそうですのっ）
（だんなさ～、魂に火がついたら、こちらの世からどこぞの世に参るやも知れず、お止めなさってくださいませ）
（うまく見る機会があれば、是非見たいものですなっ。葛飾柴又とは我輩の興味をそそります。ましてや日本各地が舞台ですと、乗って旅せずとも見られるわけですな）
（物語ですがね。で、話しを元に戻しますと、え～と、虎さん、人間も動物ですから。脊椎動物、哺乳類、虎さん、わかりますね）
（背骨があって、乳で子育てをする、はい）
（哺乳類は卵ではなく、子を産む）
（難しい名前で呼ばなくとも、人間なら当たり前のことだのっ）
（まぁ、科学というものは、分類も大切でして。で、子が生まれるには卵子と精子が必要で）
（つまり、おごじょが持つのが卵で、殿方が持つのが精で、という

ことでございますわね。こういうお話しをおおっぴらに語るなど、あちらの世におりました頃には考えられませんでしたわ）

（まぁ、おおっぴらと申しましても、こちらの世の、ここだけの話しですよ。もっとも、今ではあちらの世でも、このくらいは教科書に載っておりますよ）

（まぁ、教科書にですかっ。はしたない）

（いえいえい、マサさま、みなそうして生まれてくるわけでして、はしたなく生まれてくるわけではなく、まぁ、はしたなく生きる御仁はいますがね）

（それで、卵子か精子の片方が問題無い場合、問題ある方をなんとか得られれば夫婦の片方の血は継げるわけですね）

（おごじょ側に問題があれば、お妾さん、ですわね。江戸の頃は、後継ぎを作るために、お殿様には大奥がございましたでしょ）

（殿方側に問題があると分かった場合、男版大奥という文化は、古今東西少なくて、この場合は貰い子をする。これは、女性側にのみ貞節を求めた文化ですね）

（あら、然様でございますわね。そういう風に考えたことございませんでした。男版大奥ですか）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１０月２７日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その二

（どうも話しが脱線しますね。元に戻しましょう）
（ご隠居様、こちらの世では急ぐことなどございませんわ。脱線ばかりで構いませんのよ）
（確かに。まぁ、僕など、あちらでも、脱線ばかりのおしゃべりを楽しんでおりましたね。え～と、どこまで話しましたっけ）
（つまり、ごく最近までは、子を生さぬ場合には、男の場合は妻以外と交わえば解決できたやもしれませんが、女の場合には、そう易々と夫以外とは交われませんでしたからね。社会規範として女には許されてませんでしたからね。しかしながら、現代医学はここを解決したわけです。卵子と精子を出して）
（おっ、精は出せるが、卵は出せぬだろう）
（月のもので、卵は出ますが、あれは・・・）
（女性は、いや、哺乳類の雌はこの世、否、あの世に生を受けた時にすでに大量の卵を持っているのです。その卵を取り出すのです）
（如何様にですかな、腹を切り裂くのですかな。腹を切り裂いて子を出すというならばカエサルが生まれた方法があるが、子ではなく、卵を取り出すのですかな）
（蛙ですかのっ、蛙はたしかに卵をうみますのっ。何も切腹して取り出さずとも）
（蛙じゃなくて、カエサル、二千年以上前の羅馬の皇帝ですな）
（彦衛門さん、ロバートさん、切らないで採卵するのです）
（鶏じゃあるまいし、採卵ですか）
（はい、採れるのです。採った妻の卵と夫の精を体の外で受精させる）
（おさかなさんみたい。越後の出の父が申しておりました。しゃけ、蝦夷ではできたのに、下越村上では失敗したって）
（いや、まぁ、その、その辺りは顕微鏡下で）

（顕微鏡とはなんですかのっ）
（中学校や高等学校でよくのぞきました。おじいちゃん、小さいものが大きく見えるんです。独逸がたくさん作っていましたね）
（遠眼鏡かのっ、遠眼鏡なら存じておるのっ）
（いえ、遠眼鏡、望遠鏡ではなく、顕微鏡というものはごくごく小さいものを大きく見せるもので、我が高等学校には独逸製のが何台もあるというのも自慢でした。日本製のも出始めていたのですが、独逸のは上のレンズの部分がすうっと、きれいに滑り落ちるのが気持ちよかったです）
（レンズとはなんでしょう）
（え～と、僕はレンズと教わったから、そう言われてみれば、日本語ではなんて言うのだろう。つまり、眼鏡の硝子の部分のような）
（ふむ）
（それで、顕微鏡下で卵と精を交わせて、それを受精卵というのですが、それを母体に戻すのです）
（一度体の外に出して、また戻すのですかっ）
（マサさま、はい、そうです）
（出したり入れたりそれでまた出てくるつまり産まれてくるわけですか）
（はい）
（なんとややこしい）
（医学的には、現在ではさほど難しいことではないのですが）
（ですが、の後に何か付きそう）
（はい、倫理的にというのも、まぁクリアしたのですが）
（ｃｌｅａｒ、ですかな、明らかになった、という意味ですかな）
（あっ、いえ、問題を乗り越えたという意味です）
（つまり、倫理的には問題はなくなった、ということですな、されど何かがまだある）
（はい、日本の場合、法律がややこしくて）
（え～と、ここまではみなさま私の話しを理解できましたでしょう

か。つまり、卵と精があれば、どの卵と精でも交わせられるわけですが）

（それって、何か恐ろしい。採卵できれば採精できればいくらでも人間も動物も作れるということですね）

（まぁ、理論的にはですがね。ただし、母体が確保されねば、まぁ、その母体の代わりになる機械もなきにしもあらずな訳ですが、そこまで行くと、生命を人間が作り出してよいものか、とここで倫理が出てくるわけですから、実際には世界中でもほとんど行われていないとは思います。ですから、倫理的な問題は理論的可能性を制限することで乗り越えたわけですが、法律は、これまた国によって差がありますが、今の日本ではややこしいのです）

（ぞっとしないですのっ）

（あのぉ、ぞっとしないのでしたら、構わないわけですわね）

（カテリーヌさん、ぞっとしない、というのは、ぞっとする、というわけで）

（えっ、しない、は、する、の反対なのでは）

（はい、普通はそうなんですが、ぞっとしないは、ぞっとすると同じなんです）

（わたくしの日本語、まだまだですわ）

（え～と、母の卵と父の精を合わせた受精卵を、母体が育てられる環境ではない場合、腹を借りる、つまり別の女性に戻せば、九ヶ月後には産まれてくるわけですが）

（九ヶ月っ）

（ユリ、十月十日と教わりました）

（今の子は、一ヶ月も早く産まれるのかのっ）

（彦衛門さん、あれは陰暦、ひと月が月の満ち欠けで計算されてますから）

（月のものもほぼ同じでございましょ）

（マサさま、ご存知で）

（はい、オギノ式の話しは、先日いたしましたのよ）

（あっ、父が自慢の越後のお医者さま、ですね）
（荻野博士は、生まれは確か愛知で、その後は僕と同じ、一高、東京帝大卒業後、新潟で研究なさってました。はい、そうです、新潟にいらした。で、ひと月を太陰暦で計算しますと十月十日、太陽暦では九ヶ月になるわけです）
（なるほど）
（え～と、話しを元に戻しましょう。母の卵と父の精からなる受精卵を別の女性の腹を借りて育てた場合、産まれた子は、今の日本の法律では父と母の子とは認められないのです。血統はたしかに両親のものでも、産んだのは母でないからですね。一方、妻のではない卵と夫のではない精の受精卵を、妻に戻して妻が産めば、今の日本の法律ではその夫婦のこどもになるわけです。血統は全く異なっていても、というわけです）
（お腹を痛めて産めば、血は異なっても我が子、というわけですね、産めばお乳も出ますわね）
（産むまで、母が食べて胎内の子を育てるわけですからのっ。しかし、血はひいていない）
（え～と、なんだか、ややこしい、です）
（でも、産みの親より育ての親とも申しますし）
（いっそのこと、どちらも認めてしまえば構わないのではないのかのっ）
（しかし、極端な話、どちらも認めてしまうと、血統がわからなくなります。人間が人間工場でつくられるような）
（やはりぞっとしませんのっ）
（つまり、彦衛門さまはぞっとなさってらっしゃる、ってことですね）
（そうですのっ、ぞっとします。人間が工場で作られるようなのは。品質管理すればいいのやもしれませんが、自分の親がどこにいる誰なのか全く分からない、自分の子がどこでどう育てられているのか全く分からない、やはりこれは頂けない）

（そうですわね。わたくしたちが日々口に入れてましたものは、どこの畑で採れた、どこの農家の鶏、どこで育った豚、どこの海で釣った魚か、分かっていましたものね）

（マサさま、それはマサさまの頃のお話ですね。昨今のあちらの世はだいぶ違ってきております。マサさまのお話を伺って、そうでしたね、あの頃は良かったですね。なんだか老人の繰り言のよう、確かに僕は老人ですが、でも、あの頃の食生活は貧しくとも、まだ正常だったような。今の世はですね、トレーサビリティ、どこで作られたか辿れる、ということなのですが、やっと認識され始めて、これも狂牛病で米国産牛肉に対する不安があって、産地偽装があって、いやはや全く）

（トレーサビリティ、英語のような、我輩、然様な英語は存ぜぬが、もしや和製英語ですかな）

（Mr. Robert, it is an English word, recently created one, connecting two words together, trace and ability, means able to trace, where it came from and where it was cut and processed and so on, originally used in industrial products to control its quality）

（Goinkyosan, you speak quite a beautiful King's English, it reminds me of our diplomatic American English）

（I surely had learned King's English when young, but there is no more King's English. It has been Queen's English, since

・・・ｍｉｄ　１９５０ｓ）

（ユリ、チンプンカンプン。何語ですか）

（私にもわかりませぬのっ。琉球の言葉より難しい）

（わたくしはわかりますわ。英語でございましょ。ご隠居さんがお使いになったトレーサビリティという言葉の由来。夫の英語を思い出しておりました。懐かしゅうございます）

（僕にも分かりました。今の英語は王様英語じゃなくて女王様英語だと。そうなんですか。英吉利は今は王様ではなく女王様なんですね）

（わたくしやだんなさ～ご生前の頃も女王さまでしたわね。英吉利の王室も長生きの家系なんでしょう。あら、いえ、たしかその後、わたくしがこちらに参ります頃までに王様が三人ほど変られて。日本に比べてお忙しいと思ったのでしたわ。長生きどころか短命なのでしょうか）

（僕は中等学校でも高等学校でも王様英語を習いましたが）

（あのぉ・・・）

（ユリさん、わたくしにもわかりますよ。いえ、わたくしにもユリさんが分からないということがわかりますよ。とれーさなんとかと王様英語と女王様英語と、一体全体何が何だか）

（失敬。いや、ついロバート殿に会えて、久しぶりに英語をしゃべってみたくなりましたので）

（我輩は一瞬若返りました。占領下の頃にはセミテリオで交わう不届きな占領軍兵士の米語英語印度式英語を耳にいたしましたが、ご隠居さんのような美しい王様英語、いえ女王様英語を耳にするのは感激至極ですな）

（ロバートさんこそ、その日本語は、僕のより格調高い明治の日本語ですよ。僕にはそういう日本語はしゃべれません）

（いや、有り難き幸せと申しますか、どうも最初に身につけた日本語から離れられず）

（それでですのっ、何をお話になってらしたのでしょうかのっ、知

りたいですのっ、ねっ、ユリさんも）
（はい、皆さん、なんだか彦さまとユリがここにいないみたいな）
（あら、わたくしもだんなさ～と同じで、ご隠居様とロバート殿、虎之介殿、カテリーヌさんに無視されたと感じておりました）
（つまりですね、ロバートさんが、トレーサビリティという単語は知らないとおっしゃったので、追跡可能なという意味の新しい英語の造語で、元は工業製品の品質管理に使われていた単語で、ということを、僕が英語で申したわけです。僕の英語が王様英語だとお褒め頂いたので、いや、今は王様ではなく女王様だと）
（つまり追跡可能な食物ということでしょうか、当たり前のことでしたが、もしかして今はそうではないのでしょうか、どこぞの畑の誰のたれべぇが作った、どこぞの浜の誰のかれべぇが釣った、というのが全くわからないのでしょうか、まぁ、そんな）
（日本のみならず世界の人口が増えましたからね。食料生産量も科学技術の進歩に伴い増加しておりますし、輸送手段も格段の進歩を遂げましたから、口に入れたものがどこの誰がどうやって作ったかなど、普通にはわからなくなっておりました）
（ほら、僕がグライダーに乗ったって話しした時の、ユリちゃん覚えてる。ほら、黒船に卵を乗せたら、日本に着く頃には丁度食べ頃の若鶏になっている、とか、黒船の上が豚や牛でうるさいんだろう、とか、飛べない鶏が飛行機に乗って空を飛ぶなんて話ししてたの。あのことかな）
（はい、覚えてます。つまり、卵を乗せたお船や、若鶏まで育てた船員さんが誰かってことが分かるってことかしら）
（ユリさん、虎さん、今は、飛行機も船も冷凍で運ぶんです。肉にしてからですよ。生きたままの牛や豚を運ぶのではないのです）
（冷凍・・・ってなんでしょう）
（皆の衆、冷蔵庫はもうご存知ですか。皆様があちらの世にいらした時にはまだ無かった物ですが、その後、あちらこちらと乗られて旅されて、冷蔵庫はもう目になさってますか）

（はい、つい先日、彩香ちゃん家で）
（亀歩き青年のところで）
（隼人君のお宅で）
（四半世紀前にはありましたわ。京都の朝子の家に）
（マサ、五十年程前にも、まだ三田にいた朝子の所にもありましたのっ、氷を入れておく木製のが）
（うん、検事部屋にもありました）
（検事部屋・・・）
（虎之介殿、然様な所にも旅されましたかのっ、警察官に乗ったあの時ですかのっ）
（うん、まぁ、あったんですよ。こんな小さいのでしたけれど。刑事課のはその倍ありました。あっ、僕の旅話はまた別の機会に）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１１月３日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その三

（冷蔵庫は物を冷やして保存する所ですね。冷凍庫はもっと冷やしてしまうんです。カチンカチンに。冷やせば保存が効きますね。そうやってアメリカやブラジルやオーストラリアやフランスや中国やあちらこちらの国々から、日本は食品を輸入しているわけです）

（異国の物をそんなに輸入するほど日本は豊かになったのかのっ）

（それとも、人間が増え過ぎて、食料不足でしょうか。支那事変の頃、産めよ増やせよでしたでしょ。お一人が五人ずつ産んで、その五人が四人ずつ産んで、あら、どうしましょう。お一人が五人産んでもその半分は男の子。半分の女の子が四人産んでも、二人が女の子で、あら、ややこしいですわね。え～ともう七十年ですから、産めよ増やせよで生まれたお子達の曾孫も生まれているやもしれませんし）

（ご夫婦が二人産んでいたら、病で途中で死ぬこともありますでしょ、人口は減って行きますよね）

（マサさん、ユリさん、人口は簡単にはわかりませぬな。何しろ、男一人がお相手の女性は妻だけとは限りませぬ。女性も再婚する場合もあったでしょう）

（え～と、子が成長して次の世代をつくるのに二、三十年かかるとして、僕の両親、そのまた両親、祖父母、曾祖父母としていって、もしかしたら平安時代ぐらいには日本には二人しかいなかったことになりそうですね）

（あはは、それは面白いのっ。平安時代の二人の子孫達が我らということですのっ）

（まさか、それはございませんでしょ）

（それに、わたくしは日本人ではございませんし、ロバートさまも）

（つまり、平安時代に二人ではなく、もっとたくさんいらした方々の御子孫は途中で途絶えたということなのかしら、ユリが産まれた

のはとても恵まれていたってことなのかしら）
（彦衛門さんの人生満開の頃の人口はいかほどでしたでしょう）
（私の人生満開の頃、明治三十一年署長退職の頃ですかのっ。あの頃、我が国の人口は、はてさて、知らぬのか覚えておらぬのか）
（我輩が来日いたしました頃、三千五百から四千万人程度と教わりましたな）
（今の日本、一億二千万人を超えているのです）
（なんとまぁ。産めよ増やせよでそこまで増えたのですか。三倍を超えますわね）
（え～と、僕が帝大に入る前、で、もうハナが寺に来てましたから大正九年か十年だったと思いますが、さる男爵夫人が出産するこどもの数を減らそうと運動し始めまして、不思議に感じたことを覚えております。そんなこと自然の摂理に任せとけばいいじゃないかってね。その後、大阪だったかな、警察がその運動を取り締まったんですよ。日本人が増えた方がいいのか減った方がいいのか、国力増強の為に人口を増やすのか、食料安定の為に減らすのか、そんなことに警察や政治が入ってくるのが不思議でした）
（ほうっ、警察がのっ、こどもを産むか産まぬかに口を出したのですかのっ）
（三倍以上になる勢いですわね。そういえば、支那事変の頃から、一億一心とか言ってましたわね。でしたら、みなさんそんなにお産みにならなかったのかしら。あら、産めよ増やせよとこどもの数を減らすのと、どちらが強かったのかしら）
（ほうっ、もう一億もおったのかのっ。私の死後どのくらいのことかのっ）
（え～と、だんなさ～が亡くなってから、三十年ぐらいかしら）
（三十年で三倍になったのかのっ）
（お爺ちゃんお婆ちゃん、違いますよ）
（だんなさ～もわたくしも、虎之介殿の祖父母ではございませんっ）
（う～ん、だって、彦衛門さま、マサさまとお呼びすると堅苦しく

て。あのね、あの一億ってのは、日本人だけじゃないんだ。朝鮮の人口も入れてなんだ。つまり、大日本帝国臣民の数として一億。それにしても、僕の同世代が大震災と戦争でたくさん亡くなったのに、一億二千万とは随分増えたのですね）

（原爆というのもあったのですよ。ご存知ないですか）

（なんですか、それ）

（アメリカが開発した、いや、ドイツのアインシュタイン博士の理論に基づいてアメリカが一番乗りで開発できた、あの頃は新型爆弾と言われていたものなのですが、第二次世界大戦末期、昭和二十年に広島と長崎に落とされ、八月六日の広島で二十万人、八月九日の長崎で十二万人程、ほぼ一瞬に死亡したんですよ）

（まぁ、恐ろしい。ユリそれより前に死んでいてよかったです）

（アインシュタイン博士って、もしかして日本にもいらっしゃったのではなかったでしょうか。なのに、日本にそんな爆弾が落とされたのですか）

（そうそう、そうでした。来日途中の船上でノーベル賞に選ばれたとかで、来日後、帝大や他でもあちこちで講義なさったんでした。僕も誘われましたが、医学じゃないですし）

（あのダイナマイトを発明して戦争に使われたのが残念で、賞金にしてくれと言い遺したノーベルのですかのっ）

（そうです。あっ、彦衛門さんもノーベル賞はご存知でしたか）

（戦争に使われたのは不本意だっただろうのっ）

（そのノーベル賞に選ばれたアインシュタインが来た日本に、アインシュタインが関わった爆弾が落とされたのですか）

（はい、アメリカの飛行機から）

（おぅ、我輩は辛い）

（ロバートさん、原爆もですが、何しろ戦争でしたからね、他にも三月十日の東京大空襲だけで十万人弱、三月から六月の沖縄戦で十万人強、徴兵されて外地での戦死者二百万人以上ということです。日本各地で空襲がありましたし。概数ですよ。何しろ多過ぎて、数

えきれない。凄まじい数ですからね。記録も取りきれない。誰の記憶にも無い死者もいて当然。役所も燃えましたから戸籍でも確認できない。一人一人の生命がとても軽くなってしまいます。日本人だけでこの数でしょ。戦地での連合国側の兵士庶民の戦死者数、当時日本にいた、あるいは日本軍にいた外国人も含めるともっともっと増えますし。戦争とは恐ろしいものです。数を聞いても、大きい数過ぎて実感湧かないでしょ。そんな数の人間が地球上のあちこちで死んでいったんですよ。僕ね、この数を聞いた時、紙に鉛筆で点を打ってみたんですよ。百ぐらいまでなら楽々、千になるともううんざり、万なんてとてもなわけで、僕が打てないほどの点の一つ一つが命だったわけですから、戦争って恐ろしいですね。その一つ一つの命に関わった人は数倍でしょ。祖父母、両親、妻子、友人、同僚。大震災でせっかく生き残った生命が失われていったわけです。僕の子が言うんですよ。東京の大正生まれは貴重な存在なんだってね。大正時代は短くて、その上震災があって、さらには戦死したんだからって）

（沖縄とは琉球のことかのっ。薩摩が支配しておった）

（はい。琉球です。薩摩に支配され、日本に支配され、戦後はアメリカに支配され、今は日本ですが、中国が琉球は中国のものだと言うこともあるらしいです）

（ほうっ。そんなに人気があるのかのっ。黍の黒糖と海産物ぐらいの島だったがのっ）

（軍事的に価値があるそうで、米軍基地がたくさんあります）

（亜米利加の支配下ではないのにかのっ）

（我輩の祖国はペリーの頃より琉球が気に入ってましたからな）

（軍事的、失礼ですわ。そこに住んでらっしゃる方々の日々の暮らしよりも軍事なんですか）

（暮らしどころか人命ですら軽かったですからね。敵に対してどころか味方に対してもですし。無差別爆撃で非戦闘員を殺すのは戦争犯罪だと言われています。でも、戦闘員だって同じ生命ですからね。

そりゃ中には自分から志願して兵や将校になった者もいるでしょうが、徴兵されてしぶしぶ、でも勇ましくせざるを得ない。しぶしぶなんておくびにも出せないわけでしょ）

（東京の空襲は記憶しておりますわ。このセミテリオからも、空が赤く、真っ赤に染まるのが見えました。一昨日はあちら、昨日はこちら今日はまたあちらやこちらや、警報が鳴り響き、半鐘が鳴り響き、悲鳴が怒号が飛び交い、住む場所が無くなりセミテリオに野宿なさる方もいらっしゃいました）

（招集されなくても、こちらの世に来る人が、僕の世代でまた増えたって思っていました。僕たち、当時の若者がどんどん減っていって、この先次世代を作れなくなったら、日本はどうなるんだと思いました。でも、今は一億二千万を超えているのですね）

（我輩、申し訳なく感じるような。我輩の死後四半世紀でそのようなことになったとは、薄々察知はしておりましたが、セミテリオに安住しておりますと、まぁ、あちらの世事には手出しできませぬし。それにしても、外交官達は何をしていたのですかな）

（戦争ですからね。外交官よりも武官、軍人の時代。我慢できなくて先に手を出したのは日本ですしね。まぁ、いずれにせよ、もう半世紀以上前のことです。いや、たった半世紀前なのでしょうか）

（ほぅ・・・）

（真珠湾を攻撃しましたよ。当時は大層盛り上がりました）

（Ｐｅａｒｌ　Ｈａｒｂｏｒです。ハワイの）

（おっ、布哇ですのっ。土人の王国が亜米利加に併合されたのでしたのっ）

（土人というのは今の日本では差別用語なんですよ）

（なんでかのっ。土の色したその土地の人なのにのっ）

（日本土人とかアメリカ土人、フランス土人とは言わないでしょ）

（然様でしたわね。土人というのは、文明も文化もない、まともな生活をしていないという方々を呼ぶ言葉でした）

（それがね、傲慢なわけですよ。どのような生活をしていようとそ

れはそこの生き方であり、外の者が、外の自分たちの考え方や生活こそが発展した優れた物だとばかりに、相手を劣っているから、教えてやらなきゃと勝手に思うわけでしょ）

（国という体面があれば国民、国という概念がなければ土人と呼んでましたね、たしかに。僕は、土人という言葉に何か楽しい響きを感じていましたが）

（国なんて、人間が考えだした物ですからね。それにとらわれていないと劣っていると考える）

（なんで攻撃して盛り上がるのでしょう。変ですっ。どうしてよその方々が亡くなるのが嬉しいのでしょう。ユリには信じられませんっ）

（自分が死ぬよりは相手が死ぬ方がいい、ってことさ。相手が死ねば、少なくとも、その死んだ相手はこっちを殺しに来はしないしね）

（でも、殺されたら、その周囲の方が仕返ししたくなりませんか）

（日本にも仇討ちという週間がございましたな。西洋ですと決闘ですな。古今東西、そういうものですな）

（仏蘭西でも決闘は？々ございました。でも禁止令も？々出されておりましたのよ）

（日本もそうですのっ。男たるもの仇討ちするは当然という考え方と、一方、喧嘩両成敗という掟）

（仕返し、仇討ち、決闘、人間の感情としては当然なのでしょうか。でも、それをしていたら切りが無いですわ）

（一対一の喧嘩じゃないでしょ、戦争は国と国、国々と国々でしょ。切りがなければ人間がいなくなってしまいます）

（国とは民を守るためのものなのか、民が生命かけて守るのが国なのか、卵が先か鶏が先かよりは明確でしょう。最初は民、民が集団を作って、大きな集団が国と呼ばれ、その国家の中で民が生まれるわけで）

（人間が生まれるのは自然のこと。国家は人間が作ったもの。自然と人間とどちらが上位かということなのか）

（自然の中に人間もいるわけですから、自然が上位でしょう）
（なんだか、ご隠居さんと虎ちゃんのお話し、難し過ぎて、ユリにはわかりません）
（殿方はこういうお話しお好きですわね）
（カテリーヌさん、仏蘭西でもそうでしたの）
（はい、仏蘭西でも、夫の英吉利でも。殿方は政治や戦争や哲学が好きで）
（そんなものなくたって人間は子を産んで育てて死ぬのに）
（理屈をこねて、暇つぶし）
（死ぬのも死後も怖いと思われていても、実はセミテリオの方がよっぽど幸せですわね。いくら血が騒ぐっておっしゃっても、血はないですし、騒いでも手を出せませんから戦争にはなりませんもの）
（あの頃は、天子さまの神国、日本国を守るために民が血税を流したのです。民を守るための国を守るために民が死ぬのは構わないのか、どうなんでしょうね。本末転倒みたいな）
（誰だって普通は死にたくないでしょ。でも、国を守って天皇の赤子として死ぬことは美しいこと、男の本懐と言われて）
（疑いはさむと怖くなりますからね。自分でもそう信じようとする、まわりもそう信じているふりをしている内に、本当に信じる。信じれば怖くない。集団で催眠術にかかったような。誰だって、冷静に考えれば敵とはいえ人を殺したくはない筈。でも殺してしまう、近くの人が殺されれば仕返ししたくなる）
（ですから、切りがなくなりますでしょ）
（ですから、死者が出る戦争になる前の外交努力が大事なんですな。どちらがより悪い、こちらは正しいなどと譲らねば、喧嘩、戦争になってしまう）
（どちらも悪いんです。喧嘩両成敗と申しますでしょ。まったく、殿方はどうしてすぐ戦うのでしょう）
（面子がね）
（面子より生命でしょう）

（え～と、またまただいぶ話しが逸れているようですが、つまり、日本の人口は今や一億二千万を超えていまして、農産物や畜産物も海外から輸入しているわけです。今では、外国を植民地化したり戦争して占領しなくとも、平和に輸出入できるわけです）

（理想的な世界ですわ）

（いや、まだまだ、やはり、理論が、宗教が、経済格差が、民主的でない、などなんだかんだと理屈をつけて、あちらこちらで戦争はやっていますが、まぁ日本は一応、昭和二十年を最後に戦争しておりません）

（平和はいいことですわ）

（しかしながら血が騒ぐのっ）

（殿方はまったくもって手におえませんっ）

（それで、え～と、牛が狂う病気に罹った牛肉を食べると、煮ても焼いても死なない物質がありまして、それを人間が食べると人間も狂うというのがありまして、また、狂うわけではないのですが、鰻や筍や産地偽装がありまして、それでトレーサビリティが大事になってくるのですが、一方、人間はトレーサビリティを意図的に隠しているわけです。さもないと、生物学的には実の親である卵や精の元の持ち主、あるいは子宮を貸して育てた産みの母親が育ての親に知れるのはよくないということでして、人間の場合にはトレーサビリティが使えないわけで）

（誰の物とも知れぬ卵や精や子宮をどうやって入手するのですか）

（買うんです）

（買うんですかっ。卵や精や子宮をっ）

（ユリには信じられません、別世界ですわ）

（ユリちゃん、実際、別世界だからね。あちらの世とこちらの世は）

（卵や精を提供したり子宮を貸す女性を紹介する銀行や会社のようなものがあるんですよ）

（まぁっ）

（まぁ、人類皆兄弟ではありますし）

（兄弟喧嘩をするわけですわね）
（夫婦喧嘩もですか）
（ユリさん、どうして）
（えっ、あのぉ、今日もですけれど、ご隠居様、いつもお一人でしょ。お噂では奥様がすぐそこ、こちらの世にいらっしゃるのに。それでご隠居様は夫婦仲がお悪いのかと。立ち入ったこと、ごめんなさい。でも、今日のご隠居さんのお話、そこから始まったのですし）
（いえいえ、仲が悪いというのではなく。あ～、これをご説明すると長くなるんです。そうそう、長くなっても構わないということでお話し始めたのでしたね）
（長くなるのは構いませんことよ。こちらの世は暮れないですし、永遠）
（一緒に乗って出歩くこともあるんですよ。ただね、ハナは嫌がるんですよ）
（どうして）
（何故でしょう。出歩かないと石みたいになってしまいますのに）
（好奇心は大切なんですよ。こちらの世で長生きするためには）
（ユリ、気になります。どうしてですか）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
気の世界をお楽しみ頂けましたなら幸いです。
次回は１１月１０日にアップいたします。

第五話　セミテリオのご隠居　その四

（僕がセミテリオに参って早十年、ハナはそれより三十五年も前でして）

（あら、もしかして、お年寄りと歩きたくない若い女性、ですかしら）

（いえ、そんなことない、と思いますよ。ハナが亡くなった時、あちらの年齢で六十五でしたから）

（まぁ随分お若い奥様でしたこと）

（マサさん、そんなことありませんよ。同じ年の生まれです。今の私は百歳、先ほども申しましたが、生まれてからは百十年で、こちらはハナも同じですよ）

（ついついお見かけで判断してしまいますものね。わたくしも、だんなさ～よりかなり老けて見えるので辛いですわ）

（まぁ、それだけあちらの世で長生きしたということですよね）

（僕、十七でしょ、みかけは。あちらで長生きできなかったから）

（ユリやカテリーヌさんみたいに、時々仮装なさればよいのに。気の私たちですもの。なりたい見かけの年齢を念じて、気力を持ち続ければ、お若くもお年寄りにもなれますわ。先日もマサさま、黒髪でお顔の皺もなくされたことございましたでしょ）

（気力を続けるのはしんどうございます）

（僕はこちらに参ってたかだか十年。いくら東京の変わり様が激しくとも十年ですし、まぁ、十年一昔とは申しますが。でも、僕はほら、ひょいひょい出かけますから、変化にもついていけているわけです。ところがハナは、何しろオリンピックの翌年にあちらからこちらに参り、その後は、たぶんみなさんご存知の様に出不精、いえ、気が参って、気が滅入って、ですからね、あちらの世の変化についていけないわけですよ。僕と出かけると、浦島ハナ子なわけですね）

（ご隠居様のお名字は浦島さまとおっしゃるのですか）
（カテリーヌさん、喩えですぞっ。浦島太郎という日本の昔話がござる）
（あっ、わかりました。浦島太郎さんが助けた亀に連れて行ってもらった海の中で数日間遊んで、陸地に戻ったら数日どころか数百年経っていたという）
（つまり、ハナさんは、浦島太郎同様に、今のあちらの世では居心地が悪い。されど、開ける玉手箱もなし、というわけですのっ、まっ、玉手箱を開けてもこちらの世ではどうにもなりませぬのっ）
（♪昔昔浦島は、助けた亀に連れられて竜宮城に行って見れば、絵にも描けない美しさ♪　ですわね。それで、ハナさまは気が参って、滅入ってらっしゃるまま三十五、いえ四十五年ですか）
（まぁ、色々ありましたから）
（もしや、後添えを貰われたとか、女遊びがお盛んだったとかかのっ）
（いえいえ、そういうことではございません。それはもう、ハナ一筋で）
（まぁ）
（それにも色々訳がございまして）
（お伺いしても構わないのかしら。ユリ、好きです。ごめんあそばせ。つい、まだ十九の気持ちのままで。前もマサさまとお話いたしておりましたの。ご結婚生活ってどのようなものなのか、と。ユリ、お見合い目前でこちらに参りましたでしょ。ですから興味津々。ましてや、ご隠居様どころかハナ様もわたくしと同じ年齢ということですし）
（いやぁ、参ったなぁ。いや、あの、話しをすることが嫌なのではなくて、どこから話しましょうか。そうですねぇ）
（なれそめは）
（なれそめですか。う～ん、これまた難しい。本人達が、つまり僕もハナもまだ十二の頃に遠縁同士で決めた許嫁でして、ハナは広島

から嫁いで参りました。寺の大黒になるということでね）
（えっ、ご隠居様は、たしかお医者様でしたわね）
（はい、そこなんですよ。僕の家は代々、寛永の頃から寺でして、僕も長男でしたから寺を継ぐ定め、運命ではあったんです。しかしながら、どうも文系は苦手でして、僕は理科、とりわけ生物学が好きで、一方、一つ年下の、本来、寺を継がない筈だった瑞光は信心深く仏の御心が好きで好きで溜まらないわけです。で、僕の一高受験の直前に二人して父を説得しましてね、父は割とすぐに納得して下さったのですが、まぁ、そりゃ、解剖ばかりしている僕が坊主じゃね、あっ、その時既に母はこちらの世におりましたから、父さえ了承して下さればそれでよかった、と思ったのが甘かったわけです）
（弟様が瑞光さま、ご隠居様は何というお名前でらっしゃるのでしょうか）
（そういえばそうですわね。いつもご隠居さま、ご隠居さんと皆様でおよびいたしておりまして、お名前、当然ございますわね）
（あっ、墓石に書いてありますが、ここからでは読めませんね、瑞顕ともうします。けんの字を顕にするから医者になってしまった、なんて悪口言われました）
（なってしまった、などというものではございませんでしょ。お医者さまとは大層立派なお仕事ではございませんこと）
（いやぁ、それは買い被りです。医者の社会的地位を高めたのは、医者達の策略。ほんの百年ちょっとのことですよ。まぁ、技術の進歩と相次ぐ戦争で大量に出た死者、重傷者というのも役立ったのですが）
（あら、わたくし、なんとなくその感覚わかりますわ）
（カテリーヌさんがですか、ということは、貴女の国、フランスでもですか）
（歯医者さんもお医者さんも、切ったり貼ったり血を流したり、伝染病に対処したり膿に触れたり死人に触れたりですから、表向きは病気を治す方として尊敬される一方、裏では忌み嫌われておりまし

たわ）

（技術の進歩がどう関係するのでしょうか）

（マサさま、例えば、顕微鏡の発明は技術の進歩です。とても役立ちました。小さいものがはっきり見えるようになって、ものが腐るには菌が関係していると分かり、菌の種類が分かり、病原菌が分かり、ひいては、病気への対処法が分かります。どう防ぐか、どう治療するか）

（戦争が医学の進歩に役立ったのかのっ）

（大量に出た死者を解剖できる。大量に出た傷病人を外科手術することによって、体内の構造が熟知され、手術の技術も向上する。脳の役割など、戦争傷病人がたいそう役立ったそうですよ。脳の半分を吹き飛ばされても生きている者、吹き飛ばされた部分には脳のどのような機能があったのか、などです）

（そういえば、たしか、江戸末期から明治初期には、刑場の死体が腑分け用に人気だったと耳にしたことがあったのっ。埋葬したことにして裏で医者に渡していた、それで袖の下を受け取った者を処罰するかどうかごちゃごちゃあったのっ）

（まぁ、恐ろしい。そんなことがあったのですかっ）

（お医者さまは、昔のお医者さまより学ぶことが増えたわけですわね。お可哀想。虎ちゃんが前に言っていた、後で生まれて来る人ほと、歴史で学ぶ事が増えてたいへんだ、ってのと似ていますね）

（昔は、医者は医者、病気ならなんでもござれ、でしたが、その内、内科と外科に分かれ、もっとどんどん細分化され、内科一つとっても消化器内科、呼吸器内科、循環器内科、神経内科、心療内科など分かれていますしね。以前より確実に治療法がわかっている、という意味では、医者の重要性は高まりましたね。昔は、結構適当だったようで、士農工商、後継ぎになれないが小金があれば、ちょっと書物を揃え、衣服を整え医者らしくし、話術と商才で信用を勝ち得て、後は薬師まかせ、だったという話しも聞いたことがあります。ただ、その頃は、何しろ病人と病人の家族に信頼されなきゃならな

いから、上辺だけでも心のこもった対応だったそうですよ。医者は謙虚だったのです。かえって、一千年以上の歴史があって、朝鮮王朝時代や中国からの知恵に基づいた東洋医学にも詳しい薬師の方が、どういう症状にはどういう漢方が効くのか詳しかったし、医者に何とかして貰うよりは、最初から薬師に尋ねる方が安上がり、どうせ薬を買うのだから、と。まぁ、これとて、医者にかかるよりは安いとはいえ、薬を買う金があれば、ですがね）

（そうですわね、昔は、どの葉っぱをどうすれば傷が治る、どうすれば火傷によい、などと、何時の間にか身についていました）

（まぁ、中にはかえって症状を悪化させるものもあり、科学の発達で、そういう対処法は間違っている、などとされ、その内、科学的根拠が明確でない東洋医学、漢方は非難され、欧米中心の科学的根拠が明確な西洋医学一辺倒になりましたね。ごく最近、東洋医学には根拠がある、治癒できると再認識されるようになり、自然の植物や昆虫の中に人間の病気を治療するのに役立つものがあると分かり始め、インドネシアやブラジルなどジャングルの中を欧米の科学者が目を皿のようにして荒らしているようですが）

（ご隠居さまが医学を志された頃は漢方を学ばれたのでしょうか）

（いえいえ、もう西洋医学一辺倒でした。今、東洋医学の大学はたぶん、一、二校講座を設けている所はあったと思うが、必修講義なのだろうか）

（必修講義、懐かしい言葉です）

（虎さんは、高等学校に通われたのですね）

（はい、少しだけ。殆ど必修でしたが、少しだけ選択もできて）

（医科の場合も殆ど必修なんですよ。内科学、外科学、整形学、小児科学、産科学、婦人科学、神経科学、精神科学、耳鼻咽喉科学、歯科口腔学、公衆衛生学、免疫学、病理、生理、解剖その他諸々、全て西洋医学で必修でした）

（やはり、お医者様は偉いお方なんですね。そんなにたくさんお勉強なさる）

（まぁ、頭はいいんでしょうね。頭というか記憶力。判断力。国家試験もありますしね。ただ、頭が良くても心が良いとは限らない。俺様は頭がいい、記憶力がいい、病気への対処も知っている、尊大、横柄、傲慢不遜に陥り易いわけですよ。僕はそういうのが嫌いでね。江戸の頃でしたら、医者にはなっても、治せるかどうか、薬次第、運次第ってところもありましたから、医者はある意味謙虚だったと思うんですよね。その分、患者や患者の家族に接するのは上手い、心を読み取る能力があったと思います。まぁ、筍医者なんてのもいたそうですが）

（藪医者じゃなくてですか）

（ユリさん、薮じゃなくて、薮よりひどい筍です）

（ユリ、分かりません）

（おっ、私が分かったように思うが。筍は育っても竹、薮にはならない、ですかのっ）

（あらぁ、彦さま、竹薮ってのもありますっ）

（そうですね。いやぁ、僕もそこまで考えませんでした。もしかして、筍はめくっていくと何もなくなる。書物と衣類を剥げばただの人、知恵も残らぬ、ってのはどうでしょう）

（ご隠居様、薮だって刈ればきれいさっぱり跡形無くなります）

（そうですねぇ、だとすると、どうして筍医者などと言われたのでしょう。江戸人の諧謔センスなのでしょうね）

（扇子、ですか）

（いえ、センスというのは、感覚と申しましょうか、Ｍｒ．Ｒｏｂｅｒｔ，ｈｏｗ ｄｏ ｙｏｕ ｔｒａｎｓｌａｔｅ ｔｈｅ ｗｏｒｄ ｓｅｎｓｅ ｉｎｔｏ ａ ｎｉｃｅ Ｊａｐａｎｅｓｅ?）

（え～と、感覚は正しいですね、ましてお医者様ですと。そうですねぇ、我輩、洒落っ気と訳しますが、如何かな）

（おぅ、流石ロバート殿、ありがとうございます。日本文化にも日本語にもお詳しい。僕など足下にも及びません。つまり、江戸人の

洒落っ気、明治も半ば以降の生まれの僕には理解できない洒落ということなのでしょう。ところで、僕は、何のお話しをしてたのでしたっけ・・・あっ、そうそう、僕が医学を志すことで起きた一悶着の前までお話ししたのでした。本人達が十二の折に、双方の親族が決めた許嫁。ハナは広島の高女を卒業し、早々と行儀見習いで上京してきました。家風に馴染む為とのことでしたが、当時既に僕の母は他界してまして、家風も何も、廃仏毀釈は免れたものの、檀家も少なく、父と僕と弟に、婆やだけでしたから。そこに若い女性が単身来たら、男所帯の寺に、若い女性、これは一悶着起きそうでしょ、ところがどっこい、ハナが上京する直前ぐらいに僕は本郷の寮に入っていた）

（ご隠居さんの頃には本郷だったんですね。僕は駒場でした。でも、向ヶ岡の寮歌は歌っていましたよ。毎年新しい寮歌を作るのに、あれは名作なんでしょうか）

（♪嗚呼玉杯に花うけて、緑酒に月の影宿し、治安の夢に耽りたる、栄華の巷低く見て、向ヶ岡にそゝりたつ、五寮の健児、意気高し♪ですわね）

（おっ、その歌、私も知っておるのっ）

（我輩も）

（わたくしも耳にしたことございます）

（ユリも。あの、ほら、虎ちゃんはなさらなかったらしい、汚い恰好の学生さんがだみ声で歌ってました）

（何故あの寮歌ばかりが有名になったのでしょうね。戦後、寮歌祭というのが毎年開かれていて、あっ、今もまだあるのかなぁ、旧制高校を卒業した一番若いのが八十前後だから。ナンバースクール出身者が集まって、出身校別に歌うんですよ。袴やマントや高下駄手拭姿で、肩組んだりして。息子はたまにしか出席しませんでしたが、僕はほとんど毎年行ってました。あちこち観光も兼ねてね。夜の宴会も楽しみで。時折、地元の旧制高校が前身の新制高校の合唱部なんてのが昼間の部には参加してくれましてね、合唱部だからなのか

女子高生ばかりで、みんな孫がいる年になっても制服姿の乙女の集団を見ると若い頃を思い出して妙に気恥ずかしくなって赤面するものもいたりでした。旧制高校生は、まぁ、中には軟派もいましたが概ね硬派でしょ、純情素朴真面目に天下国家を語っていた口ですからね。あっ、それで、何故か一高というと、やはりその♪鳴呼玉杯に花うけて♪ばかり歌うんですよ。まぁ、他の年のを出されると、知らないこともありますから結局有名なのばかり歌うので、余計にそればかりが歌い継がれるのでしょうか）

（そうですか、僕が在籍したのは、旧制高校と言われているんですか。旧制ですか、なんだか、ここでは十七のままの僕が、とっても旧くなったみたいで、一寸寂しいです。ところで、ご隠居さん、お読みになったことありますか。鳴呼玉杯に花うけての寮歌を元に佐藤紅緑が書いた小説。僕は尋常六年の時に読んだのですが、鳴呼玉杯に花うけてを題にした小説で、舞台は高等学校じゃなくて中学、一高じゃなくて、浦和なんです。僕の浦高に行った従兄が気にしていましたっけ）

（聞いたことはあったが、読んでません。少年倶楽部に連載されていたらしいですね。話を続けましょう。父を説得して、僕は医科進学予定の三部にね。たまにしか寺には帰らない僕、一つ年下の弟はまだ中学生の筈、だったのですが、これが賢くてね、飛び級で、僕と同じ年に合格ですから、ハナが来た時には父と婆やだけ。ハナの第一のがっかり。尋常小学校の最初の二年間ぐらいだけですからね、女の子が近くにいたのは。あとは、中学も男ばかり、寮も男ばかり、それが、休みに寺に帰ったら若い女性、それまで僕は、遠縁が決めた許嫁、会ったこともなかったですからね、驚嘆至極、弟とて同じ。僕が寺を継ぐのかと思いきや、僕は医科進学予定。ハナの第二の誤算。じゃあ弟の嫁になれば大黒さんになれる、とはいえ、弟は弟で別の許嫁がいたわけで、じゃぁ交換しちゃえば、そんな訳にはいかないでしょ）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１１月１７日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その五

（ふと気付いたのだがのっ、坊主、すまん、僧侶は結婚できるのでしたかのっ）

（そういえば、カテリーヌさんも我輩もカトリックだが、神父は結婚しない一方、同じ基督教でもプロテスタントの牧師は結婚してますね）

（彦衛門さん、昔はできませんでした。けれど、明治の最初の頃に政府が僧侶の結婚を認め、その後、多くの宗派で認める様になったのです。剃髪もしなくなりましたしね、魚も食べる）

（妻もいりゃ、髪があり、酒も飲む、じゃぁ何が違うのかのっ）

（お経を知ってらっしゃる）

（ははは、僕だって寺育ち、坊主じゃなくてもお経は詠めます）

（それでは何が違うのでしょう。お寺に住むことでしょうか）

（僕だって、寺に住んでましたしね、昨今では寺に住まない坊さんもいる。法事などで頼まれればお経をあげる、要するに職業なんでしょうかね。瑞光、弟も帝大印哲を出て、本山で修行後寺を継いで、僕も学部を終え、それぞれ許嫁と結婚し、つましやかな生活してました。僕は、大学に残って研究し続けたり博士号まで取るつもりもなく、その頃にはもうハナは妊っていて、いや、義妹も妊っていましてね）

（あら、お医者様って博士様と違うんですか）

（世間では、お医者様は博士だと思われているようですね。違いますよ。昔は大学まで稼ぎもせずに勉強だけしてりゃいいなんて贅沢でしたから、いきおい、立派な人だと周囲が思う、学士でも博士と呼んでいただけですよ。ただ、町医者の場合は、博士号を持っていると箔が付く、昨今のあちらの世でも、博士号を壁に貼っている医院が結構ありますからね。偉い先生なんだと思うと、病気が治るのも早いかもしれませんし、あはは、でもこれほんと。信じる者は救

われる、別に僕が寺育ちだから言っているんじゃありませんよ。栄養剤だと思って砂糖水飲めばしゃっきり元気になるんですから）

（僕、肺病だったんで、小石川の伝通院の夫婦塚を撫でてこい、って言われました。行かなかったんですが、行けば治ったのかもしれないのですかね）

（まぁ、結核は、体力あると治る人もいましたからね、治そうと思う力が強ければ、不思議なものですけれど。それで、男三人と婆やが住んでいたおんぼろ寺に若い女性が二人増え、直こどもも二人増える、庫裏にはもう無理。まさか本堂に住む訳にも行かず、さぁどうしよう。瑞光は寺を継ぐわけだから、長男でも僕が出て行くしかないじゃありませんか。かと言って、金もなし。丁度隣家が空いて、そこを借りて、開業したわけです。内科。なんでもありの内科です。耳鼻科や外科に比べれば、機材がほとんど必要ないでしょ。極端な話、聴診器と舌圧子だけでも、それすらなくともいいわけで。後は医者の判断力。初期費用がかからない。内科はなんでも屋みたいなもんですから、火傷しました、お腹こわしました、でも来るでしょ。時には卒中や高熱で、あるいは赤痢疫痢猩紅熱、伝染病予防法に該当するものもあって、目黒の方にあったでしょ、伝研に行った仲間に連絡したり、手がほどこせない場合もありましたがね。まだ衛生教育できていないですから、トラホームや蓄膿、虫歯だらけの子がたくさんいた頃ですよ。手を洗うことすら大人でもいいかげんでしたから、食器や食物をきちんと洗わない、畑の西瓜をざっと洗って切ったって、疫痢赤痢になりかねない。蚤壁蝨虱蚊蠅鼠の天下といっちゃ大げさだけど。また、健康保険のない時代でしたけれど結構繁盛して、医院が繁盛ってのはあまりよくないことなんですけれどね。僕は助かった。ハナも助かった、とは思ってくれていなかった様です。医院と言ったって僕一人、看護婦なし、ハナは受付と会計をやらざるを得ない。寺の大黒さんになる筈が、医院で病人の対応をせにゃならぬ。感冒でも大変、ましてや結核など伝染されたら赤子の生命さえ危ぶまれる。ハナは神経質になって、紙幣は天日干し、

硬貨は酒精綿で拭く毎日でした。あっ、二人とも七月に産まれました。僕の方には男の子、父が名付けて瑞鏡、結局一粒種でした。弟の方が数日先に産まれて女の子。赤子二人、暑い夏がそろそろ終わる頃、赤子もそろそろ首もすわるかと思っていた頃、ぐらっと来ました。瑞鏡を抱き上げたハナと僕は医院件住居から、姪を抱いた弟夫婦は庫裏から慌てて飛び出して来て、地面にはいつくばっていました。父が出て来ないんですよ。本堂から経を詠む声がして。年のせいなのか信心がしっかりしているのか、父は肝が据わってましたね。幸い寺も医院も庫裏も、建物には被害は少なくて。でも、周囲は、倒壊したり、火災で、揺れと火と煤と埃から赤子を守らねばならないし、朝食のあと何も食べていないと気付いたのは薄暗くなってからで、近所の人たちと一緒に火をおこしたり、夜には本堂を提供したり、翌日ぐらいでしたかね、朝鮮人の暴動だとか、朝鮮人が放火したとか井戸水に毒を入れたとかいろいろ流言蜚語も伝わってきまして。あっ、そう、彦衛門さん、警察のいい話があるんですよ。その当時は知らなかったのですが、戦後時折話題になるんですよ）

（いい話しですかのっ、是非お聞かせ願いたいものですのっ）

（え〜と、神奈川の、鶴見はわかりますか）

（おう、わかるとも。生麦事件の辺りだのっ）

（あっ、そうでしたね）

（生麦事件って、夫の国英吉利の方が二人、殺された、あの事件、ですか。薩英戦争につながる）

（そうそう、久光公の行列に乱入したからのっ）

（不幸な事件ですよ。今の日本で同じことが起きたとしたら、文化背景を知らぬ傲慢な外国人の行動として、裁判にかけられる。いや、しかし、殺害することはないのでしょうか。しかし、あの時代背景、殺すのは当然とも言えますし。それで戦争になるんですから、どうも互いに面子が問題になるということなのでしょう。あっ、それでその鶴見の警察署長が、関東大震災の日本人暴徒に追われた朝鮮人を数百人署内にかくまいましてね、出せ、殺せという日本人暴徒に

むかって、朝鮮人を殺すなら私を先に殺せと言ったらしいですよ）

（おう、いい話しですのっ。あいがともさげもした）

（震災の翌年弟には男の子、瑞祥も産まれました。儲かってきたから、本山と檀家の許可を得て、寺の敷地に医院建て、看護婦に薬剤師も雇い、受付は看護婦が兼任、ハナは解放されました。急に暇になったハナは、もう一人欲しい、女の子が欲しいと。だが出来ぬものは出来ぬ。これもハナのがっくりでした。寺は、ある程度復興し、ここで駄目になったら、先生、隣の寺で葬式出してください、檀家じゃなきゃだめですか、檀那寺は東京市内にはないのですが、などと言われもしましたが、たぶん、後から考えてみると、あの頃が一番僕の周囲が皆幸せだったのかもしれません。まぁ、ハナの願いはかなえられませんでしたが。支那事変の少し前からきな臭くなってきて、時折、女の子ならよかったのに、とハナが小声で言うようになりました。真珠湾攻撃の翌年末ぐらいまででしたかね、暫くは日本の勢いもよかったのですが、だんだん、ラジオの勇ましい放送とは裏腹に日常生活にも重苦しさがのしかかってきて、僕も白衣の下は国民服を着るようになって、寺の鐘も供出し、数少ない檀家も伝手を頼って疎開し始め、それでも、昭和十九年の春に姪がハナの遠縁の広島の寺に嫁いだ折り東京での祝言の席ではもんぺではなく婚礼衣装でした。その時ばかりは、娘と離れる義妹の寂しそうな姿を見て、女の子じゃなくてよかったのかしら、とハナは申しておりました。僕の息子は僕と同じ道を歩み帝大にいて、一方甥の瑞祥も帝大のこれまた印哲にいたのですが、甥は卒業を早められ、昭和二十年三月に、学徒壮行会もなく入営しました。学徒壮行会って、ほら、あれですよ、テレビの歴史物でよくやる、雨中の神宮外苑という、あっ、みなさまご存知ないのですね、え～と、本来学生は二十六歳までだったかな、徴兵を猶予されていたのですが、兵力不足ということで、徴兵年齢が段々下げられ、昭和十八年の秋でしたか、明治神宮外苑競技場に数万人の学生が集められ、戦地に送られて行ったんです）

（それ、僕がセミテリオに来た頃ですね）
（虎之介さんは、何年生まれですか）
（大正十五年です）
（すると、僕の息子の三歳下ですね。ぎりぎり徴兵は免れたけれど、志願して戦地に行った若者が多かった世代ですね）
（はい、僕はもう病んでいましたが、高等学校を休学して出征するからと、我が家に挨拶に来た級友もいました。若いですからね、級友も僕も、お国の為だなどと励ましたりして、友は、貴様とは靖国で会おうと言っても会えないしな、なんて笑っていました。でも、母は後でしんみりしてましたよ。お母様はどれほど苦しんでらっしゃるか、と。たぶん、先行き長くはない僕の身にも重ねていたのでしょうね。その友、蒙古の方に送られて、暇な時には寒さしのぎの為にらくだの毛を引っこ抜いてた、なんて、戦後、ここに来て僕の墓前で語ってましたから、やはり靖国では会えなかったのですけれど）
（弟も瑞鏡も甥も煙草を吸わなくて、配給の煙草、僕を入れて四人分僕が吸っていたのですが、あの頃、配給の本数がたしか七本だったかな、それが半減しまして、更に甥の入営で減らされるのが辛くてね。まぁ、幸いにも、今だから言える言葉ですけれどね、当時は、幸いなどと口が裂けても言えない雰囲気でしたから、うっかり口を滑らせたらどこでどう密告されるやもしれず。幸いにも三月の東京大空襲では寺も医院も焼けませんでしたが、建物疎開も進んでいなかった近所は結構焼失しましてね、本堂にも罹災者が避難してました。配給切符を持ち出せないままですと、食料にも事欠く。助け合い精神とはいえ、自分の食料を削ってまで炊き出ししてどこまで他人に優しくなれるか）
（あのぉ、建物疎開というのは、ユリ、初めて耳にしました。まさか建物が歩いたり電車に乗って疎開するわけでもないでしょうし、どうやって移動させたのでしょうか）
（あぁ、なるほど。いえ、え〜と、東京初空襲は、いつでしたっけ）

（僕がセミテリオに参る前の年でしたから、昭和十七年の四月ではなかったでしょうか、なんだ、大したこと無いんだ、って思いました）

（そうそう、あの最初のはね、こんなもんか、そうでしたね、どんどんひどくなっていったんですがね。宮城を上から狙われる可能性など、考えられなかったことでした。あの後、類焼を防ぐ為に、家屋の密集地では家と家の間を広くすれば良い、命令で取り壊される一帯が決まる。慌てて家財を持ち出す、家が取り壊される。これには高等学校生が多数動員されましてね、初期の頃には、その日の予定数が終了すると真っ白な握り飯が配布されるので、若い学生には嬉しかったらしいですよ。気力も体力も漲っている年頃の学生には、力任せに破壊するというのも、今から思えば、発散できるいい機会だったのでしょうね。お上の命令とはいえ、壊される方は文句も言えず、お国の為と言われても心の内はどんなだったか。白い握り飯は、労働奉仕でも貰えたそうです。若い男手を兵にとられてにっちもさっちも行かなくなった武器製造工場や近郊の農村に高等学校生や大学生が送られましてね、役場で各農家に数人ずつ配置され、田植え、水やり、草むしり、稲刈りの奉仕を年数回、一週間ぐらいずつ勤労奉仕。田んぼ仕事の終わりの風呂の心地よさ、白米のにぎり飯の旨さ、夜、電灯も無く、ラヂオも無く、星空を眺めながら聞く蛙や虫の声は、僕も地球の中にいるんだ、自然の一部なんだと実感できた、などと瑞鏡は申してました。そうそう、お父さん、僕は二宮金次郎になりました、と申すので何かと思ったら、田んぼに水を入れるのに、ばたんばたん足踏み続けるだけで、目は暇だから、片手で専門書を手にして足踏みしていたそうです。二年目も息子達は同じ家庭に行きました。戦地への学徒動員は始まってましたが文系中心、瑞鏡は医科の最後の二年になってましたから、卒業は待ってくれました。医科理科工科系の学生は将来の帝国を担う存在ということでね。卒業後は軍医になる短期訓練に行ったのですが、実習も少なく半端なまま、どこの戦地に送られるのか、ハナ共々心配して

おりました。その頃、姪の出産が迫っておりまして、あちらも呉がありましたが、帝都の方が危ない、身重の娘を旅させるよりもと、なんとか切符を工面しましてね　七月半ばに義妹が自分の配給米を持って東京駅から広島に向けて発ちました。そろそろ赤子が産まれたと、弟の所に葉書でも来るのかと思っておりましたら、広島に新型爆弾が落とされたと知り、戦後になっても、姪からも義妹からも嫁ぎ先からもなしのつぶて。赤子はたぶんもう産まれた筈、五体満足だろうか。三日後には長崎にも新型爆弾が落とされ、これはいよいよ息子も軍医として戦地に送られると、覚悟しておりましたら、数日後息子がひょっこり帰って来まして、終の別れの挨拶か、秘蔵の酒を出して、いや、水杯を交わすのかと思いきや、暫く自宅待機と命じられたのですが、理由がわかりません、と。それじゃ暫く医院を手伝うかと言いたくとも、薬も底をついていましたからね。病名は判断できても、何もできやしません医院は開店休業状態。その頃、父が亡くなりました。特にどこが悪いということもなく、まぁ老衰。弟が坊主ですから葬儀はできたものの、火葬がね、順番待ち。そもそも、都内には火葬場が少ないのに栄養失調ですぐに病気になる、すぐに死ぬ、空襲に続く空襲、焼死体だからとて生焼けも多数。火葬せぬわけには行かない。火葬場でですよ、終戦の詔勅を聞いたのは。父が焼かれその煙が空に登って行くのを見ながら直立し耳にしました。息子は涙を流していましたが、あれは祖父への涙なのか陛下への涙なのか負けたことへの涙なのか、本人も分からないと申してましたっけ。敗戦、終戦と言われても、変わったのは空襲警報がなくなったくらいで、どうも日本のあちこちでまだ戦争を続けたいと将校や兵卒が暴れていたり、たがが外れたような混沌、不穏な空気と、底が抜けた様なあっけらかんとした明るさとが共存していた記憶があります。妻と娘と赤子の行方はまだ知れず、父の葬儀もあって参っていた弟に追い打ちをかける様に、寺が進駐軍に接収されましてね、便利な場所でしたから）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その五（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１１月２４日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その六

（お寺はどちらにございましたの）
（カテリーヌさん、おわかりになりますか。え～と、三代将軍家光公に言われて、梅を取りに曲垣平九郎が馬で登った階段のある神社の近くです。ほら、あそこに見える塔、東京タワーというのですが、あちらの方です）
（家光公、いつのことですの）
（江戸の、え～と有名な話しだのっ、三百六、七十年前かのっ）
（♪汽笛一声新橋を早我が汽車は離れたり、愛宕の山に入り残る月を旅路の友として♪）
（そうそう、お月見しましたね。少しでも高ければお月様に近くなってよく見える、美しさを堪能できるからでしょうか）
（その歌は私も知っておる。マサの歌う歌で私が知っているのは珍しいことだのっ）
（だんなさ～、その内、東海道のを全部一緒に歌いましょうよ。田原坂も阿蘇のお山も出て来る九州のもありました。もう少し早く出ていれば、生きてらっしゃる内にだんなさ～がお喜びになったのにと、残念でしたわ。わたくし、だんなさ～とお話しようとここにに参る度に、小声で歌を歌っておりましたが、聞こえてらっしゃったのかしら）
（そうだったかのっ。旧い事は覚えておらんのっ）
（んまっ）
（僕知ってる。あっ、歌もですけど、史話の方も。でもいつも、あの話本当かな、本当だとして、それでどうやって馬で石段を降りたのかと。だって、階段って登るのは大変、でも怖いのは降りる方でしょ。登る方ばかり大変だ大変だって言われていて、たぶん、降りる方が馬が怖がったから、怖がる馬の上でもっと高い所にいた平九

郎さんは一層怖かったのじゃないかって）
（ユリ、平九郎さまにお尋ねしてみたいです。曲垣家のお墓はどちらかしら）
（さぁ、たぶんお近くなんでしょうね）
（鵯越の逆落としというのもありますのっ。一の谷で義経がというのが。ですから、馬は案外怖がらないのかもしれませんのっ）
（もっと旧い話、覚えてらっしゃるじゃありませんかっ）
（それ、いつのことですの）
（平安時代より後だからのっ、八百三十年程前のことだのっ）
（一の谷もお近くですの）
（うふふ、神戸の方ですわ、とっても遠いです）
（神戸は港のある所ですわね、わかります）
（♪鹿も四つ足、馬も四つ足～馬の越せない道理はないと、大将義経真っ先に♪）
（マサ、その歌は、私は知らんのっ）
（ユリも知りません）
（だんなさ～、朝子が幼い頃の歌ですもの）
（僕は知ってます。尋常小学校で教わりました）
（まぁ、愛宕は便利な地でしたが、大して広くないので、接収されていたのは移転先が見つかるまでのひと月半ばかり。その最中に、仙台に住む見知らぬ方から寺宛に葉書が届きました。甥と同じ東京の部隊に入った東北帝大生からのもので、ご子息とは生前親しくさせていただきました。復学する途中そちらにお伺いいたそうと思いましたが首都は混乱、食糧難の由、書状にての遅ればせながらのお悔やみ申し訳ございません。小生、ご子息とはつかの間のご交誼を賜り、苦しい戦中を楽しく過ごさせていただきました云々と書かれてありましてね、弟は真っ青。その後何度か連絡を取り、とは申せ、戦後混乱の中、郵便も遅れがちで、それでも、甥が部隊移動中の六月の名古屋空襲で、軽症だったものの壊疽にかかり、左足を切断したが治療介無くとわかったのですが、お骨も戻らず、戦死通知はそ

の年の終わり頃に届きました。戦死扱い。仙台からの葉書が届いた頃、本堂には占領軍がいるわけです。直接甥に危害を加えたわけではなくとも、少し前までは敵の兵士、みな甥や僕の長男瑞鏡と大して年の違わない連中なわけで。僕だって複雑な気分でした。ましてや弟がどれほどの感情を抑えていたのだろうかと。少し前まで鬼畜米英という言葉が流行っていた頃には、弟は米英も鬼畜ではなく同じ人間なんだと声を潜めて申しておりましたがね、息子の死を知らされてしまうと、目の前の米国人がさぞかし鬼畜に思えたのではなかろうか、されど賤しくも最高学府で印哲を学び僧侶を職業とする身。辛かったと思います。で進駐軍が転居し、土足で踏み荒らされた本堂を何度も拭き清め、遅ればせながら形ばかりの父の四十九日法要を終え、小さなご本尊さまの前で肩を落とした瑞光の寂しげな姿。一方、気を取り直したかのごとく、瑞鏡は大学に戻りました。もう少し勉強やり直して、さて、専門をどれにしよう、軍医になりかけていましたから外科中心だったのですが、戦争が終わったのなら今更外科はさして必要なかろうと、これからは何の時代、父さんのあと継いで内科にしようか、戦後復興で増えるだろうこどもの為に小児科だろうか、　結局整形外科を選びました。傷痍軍人の役に立てるかもとね。ハナは、なんだか生き返ったみたいでした。今から思うと、あれは更年期から抜け出たのでしょうか。一人になってしまった瑞光と僕と息子の食い物を入手しようと、闇物資の買い出しに生き生きとしていました。便りの無いのは良い便りと気を強く持っておりました弟も憔悴気味。　便りが無いまま息子に先立たれましたからね。それでも妻と孫にはまだ希望を託していたようです。父を亡くし、行方不明のままの妻と長女と男の子か女の子かも分からない多分産まれた筈の孫の安否を気遣い、接収されたけれどすぐに返された本堂を拭き清めたものの、物資は少ない東京に戻っては来ない檀家、罹災証明書がないと東京に戻って住むのは大変でしたしね。元々少ない檀家とはいえ置き去りにされた寺脇の墓の草むしりをしている最中に弟は倒れまして、ハナが気付いた時には既に死

亡していました。心労。心が痛んで心臓に来たのでしょう。寺の長男だった僕の一応まともな経で弟の葬儀を終え、さぁ寺をどうしよう。本山に連絡して僧侶を送って頂けるのか、戦争で兵に取られ数が少なくなっている折、食糧難の東京に来て見知らぬ寺をまもってくれる僧侶がいるものだろうか、医院を瑞鏡に任せて僕が寺を継ぐべきなのだろうか、寺と医院と二足の草鞋というのはやはり、ね。けれど長男だしと考えあぐねておりましたその時に、弟の私物を整理していたハナが僕宛の弟の手紙を見つけました。父の四十九日の後に書かれたもので、弟が先に逝った場合の弟の家族のこと、翌年末まで待っても連絡無き場合には死亡したものとあきらめること、本山との調整で土地も寺も個人所有にしてあり、鐘も供出したことであり、連絡の取れた檀家には伝えてあるから廃寺にしてよい旨、寺脇墓内遺骨の取り扱い方や、廃寺後にもし義妹と長女と孫の生存が分かった場合には生活を助けてやってほしい、後は兄さんの望むように医院拡充なりなんなりと、と記されておりました。万が一のことを考えて細かく書かれた手紙によって、今いる僕の墓ができたのです）

（あっ、それでなのですね。お寺のご長男のご隠居さんが、どうして霊園の墓地にいらっしゃるのか不思議だったんです）

（僕も不思議だったんだ。だって、ご隠居さんのお墓に書かれた家の名前、たくさんあるでしょ。何何家代々の墓は最近増えているけれど、それにしても合葬の数がと思ってました）

（そうそう、寺脇の墓、連絡取れて檀家がお骨を引き取った所もありましたが、連絡取れない方が多くてね、弟の記載通り、家ごとにそれぞれ小さな布袋に入れて、それを骨壺にまとめて入れて、寺の名を記し、父や弟や僕のご先祖様と共に、ここに一緒に。皆さん寡黙でして。弟も寡黙のまま。お骨は無くとも、甥や、一応義妹の名前も記しました。姪と姪の子は、嫁ぎ先の墓にたぶん。何しろそのまま連絡途絶えましたからね。気も訪ねて来ないのですよ。新型爆弾は気も昇華させてしまったのでしょうか。原爆の落とされた夜、

そして次の晩、地表から光が多数、球になって空に上って行くのを見たという記録がいくつかありましたが、それがもしかしたら昇華した気なのでしょうか、数多の骨の成分の燐が燃えたということなのだろう、いわゆる人魂だと、あちらにいる時には思っていたのですが、昇華だったのだなどとこちらに参ってから僕、思うんですよ）

（昇華、昇って華になる、美しい言葉ですわね）

（あら、ってことは、ユリは、昇り切っていないから、華にはなっていない、ってことなのかしら）

（昇華してしまうと、今の我輩の様な楽しみは無くなるということですかな）

（昇華すれば華になる、昇華せねば、楽しめる、う～ん、難しいのっ。今は痒みも痛みも無いが、食べられぬ、ひねられぬ、吸えぬ、飲めぬ。どちらが良いか。うむ、こういう悩みもなくなるのが昇華かのっ）

（だんなさ～、そういう雑念をお持ちですと昇華はご無理でございましょ）

（そう、欲を出さねば昇華できる、と思うか、欲を出さねば昇華してしまう、と思うか。僕はまだまだ欲出してこうやってあちらの世をこちらから楽しんでます。どうもね、僕より三十五年も先にこちらに参ったハナは、昇華してしまいたいようで、今のあちらの世は嘆かわしいことだらけだそうで、同じ墓の中の僕以外の方々のお仲間になりたいようなんですよ）

（ハナさま、確かに滅多にわたくし達の井戸端いえ、セミテリオ墓前会議にはいらっしゃいませんが、無理にお誘いいたしましてもね）

（まぁ、色々、先ほどまでの話しの後に続いたものでね。戦後、食糧難の時代、ハナはほんと張り切ってました。もうもんぺなどはかなくても構わなくなっていたのですが、もんぺをはいて、背嚢を背負って、若くも細くもなかったからさほど心配はしませんでしたが、ものすごい混雑の列車に乗って、神奈川千葉茨城埼玉栃木群馬山梨と物物交換に買い出し、闇市で買い出し、統制されてましたからね、

駅で官憲にみつかると没収。あっ、僕、いつも思っていたんです。没収した後、官憲はどうしていたんだろうって。没収したものを仲間内で分け合っていたのではなんて。それともまた闇市に流していたんだろうか。ともあれ、没収されないように、色々と工夫したようですよ。サツマイモの形がばれない様に、玄米の妙にへこむのがばれない様に、外側は物々交換されなかった衣類でくるむとか、重そうに見えるとまずいから軽々と背負うとか、近くにいる幼子を借りて孫と老婆のように装うとかね。こちらだってなけなしの、というわけでもなかったのですが、ハナの嫁入り道具を片っ端から持って行って交換してましたからね。なのに帰路没収されたら、意気消沈、その上からＤＤＴをかけられる）

（なんですかな、そのＤＤＴとは、英語の様でござるが）

（ｄｉｃｈｌｏｒｏ－ｄｉｐｈｅｎｙｌ－ｔｒｉｃｈｌｏｒｏｅｔｈａｎｅでしたかな）

（はっ、我輩にもわかりませぬ）

（殺虫剤ですよ）

（人間に殺虫剤をかけるのですか。虫ではないのに。官憲がですか）

（昭和の警察は然程の狼藉をのっ）

（元はアメリカ軍が持ち込みまして、それを官憲が代行しまして、頭から振りかけてました。都内に入ってくる列車の駅では改札の中や外で待ち構えてましたね。池袋や新宿や浅草や上野。上野には戦災孤児も多数いましたしね。ハナも時折、髪や肩、背嚢やもんぺを真っ白にして帰って来ました）

（おじいちゃん、それくらいなら狼藉でもないかもしれない。僕がこちらに来る前には警察は恐ろしい所だった。僕は直接じゃぁなかったけれどね、あの頃、泣く子も黙る特高ってのがあって）

（それも警察なのかのっ）

（そう、特別高等警察、略して特高。政治犯取り締まりで。直接軍と結びついていたのかどうか知らないけれど、特高に睨まれたら即激戦地送りって言われてました）

（警察は民の方を向かねばならんのにのっ、嘆かわしい）
（アカを取り締まるためですからね、特高で殺されたという噂話は流布していました。火の無い所に煙はたたない、でしょうから、たぶん火はあったのだろうと、僕たちの間でもひそひそ。僕の遠縁の家で起きたことも、僕は今まで誰にも話せませんでした。両親に口止めされてました。うっかり口を滑らしたら、僕にも危害が及ぶから、と）
（アカってなんですかな、ｒｅｄの赤とは違うようですな）
（ロバートさんもご存知ないですか。露西亜ですよ）
（露西亜革命ですかな）
（そう、共産主義社会主義の思想とその思想を持った者のことをアカと呼びました。たぶん、露西亜、いえ、ソヴィエット国の旗の色からでしょうか）
（ソヴィエット国とはなんでしょう）
（露西亜が名前を変えたのです。ソヴィエット社会主義共和国連邦でしたっけ）
（まぁ、そうなんですか。時が経つと国の名前が変わったり、国の数が増えたりするものなのですね。仏蘭西も、もう千五百年も前に東西と中部とに分かれたり大きくなったり小さくなったりしたと教わりましたわ）
（虎之介殿、何があったのでしょう。わたくしも特高の名は耳にいたしましたが。恐ろしい話ばかりでした）
（おばあちゃんもですか。その僕の遠縁の家では、ある日、特高がやってきて、土足のまま家にあがり込み、書棚から洋書を全て持ち出し、主を無理矢理車に乗せて連れ出した。翌日主は怪我一つ無く帰って来たが一週間後には中国戦線に送られたそうです。もう四十過ぎていたのにですよ。両親に言わせると、全くアカではなかったのだそうですが、早稲田の文科出身で欧米の軟派戯曲を翻訳していたのが特高の気に障ったのではなかろうかと言われていました。英語と仏蘭西語の書物は全部没収、独逸語のは返却された、その中に

学生時代に受けた講義で使った資本論があったのが笑止千万だったと。あれこそアカの元なのに）

（そのような警察があるのかのっ）

（今もあるのかどうか。この前僕が警察署と日比谷公園脇の検察庁を旅していた時には、特高というのは目にしませんでした。あっ、おじいちゃん、特高じゃなくても、ほら、オイコラ警察って言うじゃありませんか）

（あれはのっ、困ったもんだのっ。力を得ると力を誇示したがる輩が多いからオイコラがそういう意味になってしまったんだのっ）

（彦衛門さまのおっしゃること、ユリ、わからないんですが）

（オイ、にもコラにも、そのぉ、相手を叱責するような、権力を傘に着る様な意味もないのですのっ）

（さようでございますわ。薩摩では、オイもコラも、あのぉ、ちょっと、ねぇというような、やぁ、子等、というような呼びかけの言葉です、でしたのよ）

（然様、明治の世の巡査には我が故郷の者が多くてのっ、民を呼び止めるのに、あのぉ、ちょっと、という意味で使っておったのだのっ。しかしながら、要望風貌の異なる我らや薩摩言葉に慣れぬ江戸や他の民が、巡査に呼び止められるのは恐ろしいと思うから、オイとコラが一人歩きして、恐ろしい言葉になったのだのっ。あれは勘違い。いやぁ、そう感じさせた巡査達にやはり非があるのだろうのっ）

（あのぉ、どうしてそのＤＤＴがふりかけられるのでしょうか）

（長引いた戦中、戦後の混乱生活で、蚤壁蝨虱が増えていましてね。風呂にも入れず洗濯もできず、着の身着のままそりゃ虫には居心地いいですから。食糧難で体力落ちていますから、発疹チフスやその他の病気になりやすいですし、進駐軍にしてみれば、そんなの伝染されたくないわけで。まずは衛生状態確保、しかも手頃な、だったんでしょうね。実は、ハナが頑張って生き生きと買い出ししていた頃、僕も闇物資が手に入るようになっていたんですよ）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１２月１日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その七

（内科医院でしたからね、まだ細々開店休業中。僕の所が医院だってのは、本堂に進駐軍がいたから知られてました。その進駐軍が、女を連れて僕の所に来るわけですよ。僕は泌尿器科でも婦人科でも性病科でもない、とは思えども、患者が少なきゃ食っていけない、患者を選ぶなんて贅沢はしてられない、患者は困っているわけだし、ここで病が分かれば伝染は防げるなどとなんだかんだと理屈をこねて自分を納得させましてね、来るもの拒まず、性病検査してました。口コミで広がる）

（口コミとはなんでしょう）

（マサさま、すみません。僕、つい今の言葉を使ってしまって）

（いえいえ、言葉はうつろうもの。今のあちらを知らねば、旅しても困ります）

（え～と、口は口、これですね。コミは、ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ、ロバートさん、どういう日本語にしましょうか）

（伝達連絡通信手段）

（おっ、虎之介殿、我輩より早い。さて、どれが適当ですかな。口とｃｏｍｍｕｎｉｃａｔｉｏｎ合わせて口コミ、え～とマサさま、うわさ話ではいかがでしょう）

（なるほど、人の口から口へと噂が広まる、ということですね）

（そうです、つまりうわさ話で、ＧＩからＧＩへ、パンパンからパンパンへ）

（あのぉ、ユリも質問です。じーあいとぱんぱんが分かりません）

（おっと、困った、そうですね。お分かりになりませんね。これば かりは、ロバートさんにも、虎さんにも、もしかして、いややはり おわかりになりませんね）

（僕、わかりません）

（我輩にも）
（ＧＩはＧｏｖｅｒｎｍｅｎｔ　Ｉｓｓｕｅなんですが）
（政府の問題発行出版）
（分かりませぬな）
（米兵のことです）
（お米のですか、えっ、あっ、亜米利加国の兵隊ですわね）
（なるほど。我が国の兵士をそう呼ぶわけですな）
（米の兵隊・・・おう、亜米利加国の兵隊のことですのっ。で、ぱんぱんは）
（食べるパンがたくさん、ですか。闇で亜米利加のパンをたくさん入手できたということかしら）
（ユリさん、うら若き女性の前ですみません、という話しなのですが）
（お構い無く、ほら、ユリ、若い姿のままですけれど、本当はご隠居さんと同じ年なんですもの）
（そうでしたね。いや、でも、やはり申し訳ない、ハナが嫌がりましたしね）
（話しが読めないのだがのっ）
（いや、つまり、ぱんぱんというのは、え～と江戸時代で言うなら女郎のことです）
（つまり、戦争が負けたあと、女郎を英語にしてパンパンと呼んだということですかのっ）
（まぁ、麹町の兄が廃止しましたものを）
（マサ、あれは明治のことだろうのっ。禁止しても禁止しても、民はたくましいのっ）
（おっ、マサさまのお兄様は然様な方なのでしょうか）
（えっ、はい、まぁ・・・）
（あっ、僕の頃の悪所って言われてた所ね、僕は肺病で行ったことなく、童貞のままこちらに参りました、あっ、ユリさん、ごめん）
（いいですっ、ユリももう、え～と、百十歳ですからっ、今更どう

でもいいですっ）

（彦衛門さん、事はそう簡単ではなかったのですよ。元々の女郎だって、そりゃいろいろな事情があってそういう生活をしていたわけなんですが、敗戦でね、進駐軍が日本の地を踏むわけです。男、それも生きのいい男が大量に入ってくるわけです。かつて日清日露どころか支那事変以降自分たちも兵だった頃の記憶がある男達は、男がどういうものか知っているから、妻や娘や孫娘の身が不安になるわけです。それで、敗戦後二週間以内に設立されたのが慰安所。新聞や街中に広告を出したわけです。日本女性の防波堤たれ、と。少し前までは女子挺身隊という言葉で軍需工場で働かされていた乙女たちが、戦中同様の高揚させる文句につられ赴く。説明受けて大半は止めたものの、夫は戦死し乳飲み子幼子を抱えた寡婦や、それまで帝国軍人相手にしていた女達が、一般婦女子の操を守るためと勇ましく、いやたぶん自分を納得させ奮い立たせ職に就きました。もっとも、足りなくて、戦前の女子挺身隊をそのまま無理矢理説得して戦後の女子挺身隊にさせたらしいとの噂もありましたがね。慰安所を警察は護ったのですよ）

（警察がっ、嘆かわしい）

（兄が知ったら失神ものですっ、なんということ）

（そうなんです。なんということ、でしょ。でも、まぁ、それで、一般婦女子が護られたというのも反面真実。都内だけでそういう慰安所が三十以上ありました。でも足りない。また女性の側もね、そこに入らなくても商売できる）

（商売・・・ご自分の体を使ってですか、お可哀想）

（哀れ、とも思う反面、哀れと思うのも失礼なのかも、とも。僕の中でもいまだに整理がつかない点なのですね。何故売春、つまり女が女の体を売ることはいけないのか、なんですが。例えば外科医ならば外科手術の技で金を儲ける、運転手なら運転技術で、官僚や学者なら頭を使って、音楽家なら指や口を使って、絵描きなら手に筆持って、大工漁師百姓理容師美容師それぞれ技術や力で稼いでいる

わけですよね。頭や手や足や指や口を使って稼ぐのはよくて、なぜ性器を使って稼ぐのはいけないとされるのか、僕にはどうしても理解できないのです。古今東西、この商売があり、どこかの哲学者か文学者が世界最古の商売と言うほどのものであり、世の中の半分はいる男性の過半数は否定しないだろう、あるいは男性の一部やもしれぬが利用するのに、蔑まれ貶められる職業なんですね。国によっては個人が個人の責任において売春することは合法としている所もありますがごく希）

（悪所という呼ばれ方でしたけれど、僕たちの中では、なんか浪漫を感じる部分もありました）

（浪漫って、言葉は知ってるけれど、ユリ、よくわかりません）

（そういえば、大正浪漫という言葉が、もう四半世紀以上前に流行ったことがありました。当時より半世紀前の僕の若かりし頃と重なる時を懐かしむ風潮。たぶん、四半世紀前にご老人になられた方々が、あっ、僕もそうなんですが、昔はこんなによかったんだと語る中で懐かしまれたのでしょうか。確かにね、戦争に突入して行くその後の暗く重苦しい時代とは違っていました。そうそう、この前外出した折に埼玉の川越に帰られる方に乗りましてね、大正浪漫通りって所の近くに住んでらっしゃる方で、町並みが昔の建物ばかりでして、ちょっと懐かしさを感じましたよ。石造りの店や二階の格子戸の硝子窓、店名の字体など。売っているものは勿論現代の物なんですが、戦前の街並はこんなだったなぁと。空襲さえなければ、ああいう街並が方々にあったのかもしれない。あのままの平和が続かなかったのは、時代の流れ。でももしあそこで戦争がなかったなら、いや、戦争がなかったとしても、今の様に結局はやたらめったら高い建物ばかりになってしまうのも時代の流れなんて考えさせられました）

（浪漫、う〜ん、どうしよう、ロマンチックならわかるかな）

（それもあんまり。少女趣味かしら）

（う〜ん、夢想するような、甘い、ってのか）

（ロバートさま、教えてくださいな）
（・・・・・・）
（ロバート殿いかがなされたかのっ）
（・・・・・・）
（ローマンでしたら代わりにわたくしがお答えできるかしら。仏蘭西で、わたくしが生まれるより百年程前に流行ってましたわ。空想的で現実から逃げるような）
（しかしのっ、浪漫だろうが空想的だろうが、男は女達をそう思っておっても、実態は、女は嫌々、親に売られて、女衒に騙されて、というのが大多数だろうにのっ。勝手に思い込んで通う男達を女達は適当にあしらっておったのかのっ、それとも、厳しい日々を過ごすのには空想に逃げ込む女達もおったのかのっ。男と女と騙しあいの夢想ごっこかのっ）
（夢想で辛い現実から逃れる、だからローマンなのでしょうか）
（永井荷風や吉行淳之介がそういう女達のことを書いているんですよ。椿姫もそうですね。そこに浪漫を感じるか、辛さを感じるか、どう感じるか、男と女で視点が、受け止め方が異なるものなのか、こんなことを満也さんと話したことがありましてね。あっ、満也さんは僕の友達で、ブラジルの作品を訳していて、医学的な事が出て来るので確認の為に僕と話していたんですが、主人公の娼婦テレザが幼い頃に男に売られて云々という話でした。僕の死後、医院に持って来てくれて今は一階の居間に置いてあって、でも、ほら、僕、頁めくれませんからね、結構分厚い本で、皆途中までしか読んでくれなくて、未だに僕は最後まで読んでないんですよ、満也さんからあら筋は聞いていても、云々の部分を知りたいわけですよ。テレザがどうなったかをね。男と女の関係、そこに金銭をからめる。古今東西、需要と供給の経済の世界と割り切るか、文学にするか、法で守るか法で排除するか、永遠の謎なんですよ）
（Ｌａ　Ｄａｍｅ　ａｕｘ　Ｃａｍ?ｌｉａｓですわね。怖々読みました。そういえば、小説のことを、ロマンと申す事ございますわ。

ローマンは小説的ということかしら。それで、そういう女性がいるということは、わたくし、仏蘭西におりました頃にも、英吉利でも日本でも存じてはおりました。世界が違う方々。たしかに、触れてはならない、いけないお仕事という印象ですわね）

（カテリーヌさん、然様でございましょ。ご隠居さんがおっしゃった永井荷風さん、婦人は読んではいけないとされてましたわ。ご立派な家柄の方なのに不良青年と言われて。もうお一人の方は存じませんが）

（あっ、吉行淳之介ですね、瑞鏡と同じ年頃の生まれですし、戦後に売れてましたから、マサさんはご存知ないでしょう。それでね、マサさん、カテリーヌさん、どうも世間は、特に良家の子女とされている方々はお二方同様に感じている。そう感じるのは、そう感じるように教育されたからなのか、それとも女性でなくとも人間として本来受け入れがたく感じるからなのか、なんですよ。性が拒否されるなら、あちらの世に産まれたことも拒否されるべき、しかしそうはならない。産まれると多くの場合歓迎される。なのに産まれる前の行為は隠されたもの、なのでしょうか。それとも隠すべき行為であるから、それをおおっぴらにすべきでない行為を職業にするから、公言はできないのでしょうか。自分も利用した女は自分以外の男も利用するわけだから、自分がその女に誠実である必要はないし、ましてやどこの誰が父親か分からない子を義理を持って育てるのは適わん、という訳なのでしょうか。誰とでもの女は蔑まれ、誰とでもの男は讃えられるなんてのは、判断基準を男と女で分けるという意味で、卑怯だと思うのですよ。僕はね、これを考えると、いつまでもどこまでも理解できない出口の無い迷路にはまりこむのです。あっ、先ほどお話ししていた、子を成さぬと一方的に女性が離縁される、という時代がありましたが、実は、今の科学、それこそ顕微鏡の世界でですが、分かった事がありまして、精が卵を選ぶのではなく、卵が精を選ぶのですよ。同様に、多くの動物で雌が雄を選んでいるのです。雌に選ばれなければならないから雄は美しさを競う。

ほら、孔雀でも、獅子でも雄の方が見た目にこだわった恰好でしょ。人間でも実態は男性は女性に選ばれている、もしかしたら売春というのは唯一男性が女性を選べる行為だからなのか、いや、昨今あちらでは男娼というのもいるわけで、あ～、わからなくなる。子の父が誰だか分からないのが困るからなのだろうか、何故嫌悪される職業なのか、何故取り締まられる職業なのか、ＧＩがパンパンを連れてきた頃からでも、もう六十五年ですか、僕はずっと分からないまま、あちらの世でもこちらの世でも考えあぐねているんです。方や、江戸の花魁、京都の舞妓は文化だとされているわけで）

（ロバート殿、お静かですのっ）

（ロバートおじさん、どうしてさっきから黙ってるの）

（彦衛門殿、虎さん、いや、実は、我輩、外交官だった頃には、日本の遊女は性病が、ということで禁止されておりましたが、その後、幾度か。花魁道中を見に行きまして、何度か通い馴染みになりまして。遊郭は日本の文化の一面だと思っておりまして、いや、下っ端の女郎達が地方から買われて来てなどとは存知ておりましたが）

（まぁ）

（マサさま、すみませぬ）

（正直に免じて許してさしあげますわ）

（かたじけない）

（つまり、慰安所そのものは直に閉鎖されるのですが、その頃には食いつなげない女性がどんどん街中で兵に声をかけるようになりまして、そういう女性をパンパンと呼んだのです。で、避妊具を使うよう、進駐軍も指導していたそうなのですが、いかんせん足りない、あるいは不良品。性病が流行る、性病は怖い、性病には罹りたくないが性欲は満たしたいＧＩ、性病には罹りたくないが金は欲しいパンパン、というわけで、僕の所に性病検査に来るようになったわけです。金は当然払っていきましたが、同時に、やはり恥ずかしいのかそれとも口止め料なのか、いろいろと米軍物資を持ってきてくれるわけです。僕はＬｕｃｋｙ　Ｓｔｒｉｋｅが嬉しかったですね）

（緑の地に赤丸のですな。懐かしい）
（ロバートさんも吸うのかのっ）
（昔は、はい。でも吸えなくなって早や九十年。日本では墓前に線香代わりに煙草をくゆらす方がいらっしゃるから、その時だけですな、気を吸う、気を養う気分ですな）
（え～と、Ｌｕｃｋｙ　Ｓｔｒｉｋｅは白地に赤丸だったと思いますよ。あと、ココアとかビスケットとか、小麦粉やバター、コーヒー、ケチャップ、マヨネーズ、あっ、有名なチョコレートとか、色々貰いました）
（有名なチョコレートとは、どこのが有名だったのでしょう）
（あっ、いえ、占領時代の有名な言葉がありましてね、ギミチョコレー、チョコレートを頂戴、というのが。僕は目にしたことないのですが、米軍がトラックの後ろからこども達に向けてチョコレートやガムをばらまいていたそうなんです。占領初期の頃、あるいは米軍が日本の地方に視察に行った時に、日本人を慰撫するため、てなづける為だったとも言われていますが、何しろ食糧難の戦中戦後ですから、甘いものが欲しくてたまらない。こども相手にばらまいていたのを横から大人が掠めとるなんてのもあったそうです）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その七（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１２月８日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その八

（チョコレェトは私にも分かるがのっ、ガムとはなんですかのっ）
（わたくしも存知ませんわ）
（僕も知らない）
（わたくしも、仏蘭西にございましたかしら）
（我輩は分かりますぞ。ｃｈｅｗｉｎｇ　ｇｕｍ　やｂｕｂｂｌｅ　ｇｕｍのことですな。何度か食しました。紐育地下鉄駅で機械が売っていましたな。あまり旨いものではござらぬが、こう、小さい球体で、色がついておって、で、色が違っても味は同じで。ゴムからできているからガムと言う、いや、英語では違うのだが、日本語ではゴムとガムに別れた元の言葉は同じで）
（ロバートさま、わかりませんわ）
（もしかして、タイヤのゴムに味をつけるとガムですか）
（虎さん、違います。いや、たぶん元の樹木は似たようなものかもしれませんが、タイヤは噛みません、ガムは噛みます。噛んで味がなくなったら吐き出す菓子なんです。最近この辺りでも噛んでる人多くないでしょうか。あちらの世界、哀しいかな禁煙流行でね）
（あら、お口のあたりをいつまでも動かしてる方のお口の中にあるのがガムなのでしょうか）
（たぶんそうでしょう。え～と、それで、僕はそういったアメリカ産の食品を入手するようになったわけで。小麦粉、ハナはうどん粉と呼んでいましたが、あっ、メリケン粉とも言いますね。大層喜びましてね、何しろ米ですら配給が少ないは遅れるはの時代ですから、主食はサツマイモみたいな時代でしたからね。ハナはせっせと昼間買い出しに行ってたので、僕の診療実態は知らず、てっきり、かつて本堂に来ていたＧＩが僕の所に来るんだろうと思っていたんですね。そんな筈ないじゃないですか、基地内には軍医がいるわけですから。でも、ハナは知らない。ところがある晩、結構遅く、医院の

曇り硝子戸が叩かれ、僕が出て行くとGIとパンパン。これでばれたというか、ハナは悟ったわけです。自分が相当喜んだアメリカの食品、取り分け喜んだうどん粉がどのようにして入手できたのか。怒り狂いましたね。けれど、怒り狂ったハナも自分で分かっているわけですよ。うどん粉がいかにありがたいか。とってもありがたい、だからよけいに腹が立つ。またしてもハナの憂鬱、ですかね。弟の長女も孫も結局行方知れずで、残された庫裏と寺、瑞鏡が結婚することになったので、その前に寺を少し改装して仮医院にし、庫裏の方にご本尊さまと僕たち三人が住み、その間に医院を建てなおし、二階建てにしました。一階に受付と薬局、二階に僕の内科と瑞鏡の整形外科。心肺胃腸内蔵と何でもござれの内科と骨関節筋肉の整形外科ですね。瑞鏡は実習先の病院にいた薬剤師と結婚し、翌昭和二十五年、女の子、瑞穂が産まれました。その頃には米兵の数も減り、日本は講和条約に調印し、健保制度、あっ、健康保険制度です。毎月幾ばくか払って、いざ病気になると、罹った治療費と薬代の一部を払うだけでよいという制度ですよ。これがだいぶ実をともなってきてまた患者が増え始めました。僕とハナは庫裏に住み、瑞鏡と母子が元本堂に住んでいましたが、日中はハナもそちらに入り浸りで、よく言ったものですね、子より可愛い孫、目の中に入れても痛くない、ましてや、ハナが欲しかった女の子でしょ。瑞穂が幼稚園に入ると、千代子さん、瑞鏡の嫁ですが、医院の薬局に復帰しました。瑞穂が小学校二年生のクリスマスイヴに東京タワーに登れるようになりましてね、でも連日すごい列で）

（まぁ、あの塔、登れるんですか。エッフェル塔と同じですわ）

（エッフェル塔よりほんの少し高いだけですよ。今、浅草の方に、更に高い塔を建てています）

（何の為にそんなに高い塔が必要なんですかのっ。火の見やぐらももう殆どなくなったのにのっ）

（エッフェル塔は、金属産業の傑作を作ろうとしたらしいですわ）

（東京タワーはテレビ、ラジオの電波用でした、今建設中のも同じ

目的だそうです）
（高いのが好きなのかのっ）
（馬鹿と煙は高い所に上りたがる、そういう言い回しが日本語にはありますな）
（あっそうか。馬鹿が増えたからもっと高い所にあがりたがるのだったりして）
（そういえば、テレビが流行りだした頃、一億総白痴化とか言ってましたね。今、人口一億二千万なので、二千万増えた分だけ高くなる。違いますよ。東京タワーじゃ電波が届ききらないからだったと思いますよ）
（結局、みんなで東京タワーに上ったのは、瑞穂が三年生になる前の春休みだったのですが、いやぁ、すごかったですよ。行列もですが、何よりも見晴らしがね。幼い頃には、愛宕山から結構見渡せていたのですが、もっと、高いわけですから、医院がやけに小ちゃく見えて、あぁ、そう、あの頃は、まだ平屋建てが多くて、二階はあっても物干し台に出る為にあるようなものでしたし。まだまだ木造の家、瓦葺きの家でした。あの辺りにはビルもほとんどなくて、僕が幼かった頃とさほど違いはなかったですね。その後、東京オリンピックの頃から都内の建物がどんどん高くなってきて、それでもまだ首都高でどこにいるかわかるくらいでしたが、今は首都高に乗ってしまうと、表示板かカーナビを見ていないともうどこにいるか分からないくらい高いビルばかりですからね）
（あのお、分からない言葉がたくさん出て来ました。ビルはビルヂング、ですか。オリンピックは東京でオリムピックが開かれたのですね。首都高とカーナビは全く分かりません）
（ユリさん、ビルヂングです。今はビルと言っています）
（日本人は、ほんと、なんでも短くしてしまうのですな）
（東京オリムピック、私がこちらに参る前の年に開かれる筈でしたが、あの後開かれたのですね。中止になって残念でしたわ。冥途の土産に、だんなさ～にお話ししてさしあげましょうと思っておりま

したのに）
（昭和三十九年でした。最初の開催予定の二十四年後でしたね。え～と、首都高とは、首都高速道路、略して首都高。実際、高い所を通っているんですが、ほら、あれもそうです。空中に道路があるでしょ）
（おぅ、あれだのっ、たしかに高い所にある）
（ただですね、彦衛門さん、高い所にあるから高速道路なのではなく、速度が高いから高速なんです。つまり、車が速い速度で走れるように作ったわけです。信号や四つ角をなくして。車専用、人は通れないんです。でも実際、あの上も渋滞するんですよ）
（ほうっ。そこら辺を走るより更に速いわけですのっ）
（まぁ、恐ろしい）
（今は、時速三百キロメートルぐらい出る車もあるそうです）
（時速三百キロメートルとはどれくらいでしょうか）
（え～と、三百キロメートルは、一理が三点九キロメートルですから、約四で割って、約七十五里、一時間に約七十五里進めるということですか。東海道ですと日本橋から名古屋の手前ぐらいまででしょうか）
（それを一時間で行くのですかのっ）
（もしや、マサ、朝子に乗って乗った新幹線より速いようだのっ）
（あっ、彦さま、マサさまは新幹線をご存知なんですね。えぇ、新幹線より速いですね。ただ、そんなスピードで走るとすぐに捕まっちゃいます）
（スピードとは、速度のことでござる）
（Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ，　Ｍｒ．　Ｒｏｂｅｒｔ．　そう、速度です、どうも、僕の日本語には少し前の日本語に比べて外来語というか新しい言葉が多すぎるようですね、すみません、いえ、ロバートさんや虎さんがいらっしゃるから、すぐに的確な日本語にして頂いて、ありがとうございます）
（捕まるとは、警察に捕まるのですのっ）

（はい、高速道路専用の警察隊がありまして、え～と、あれは戦前なんと呼んでおりましたかね、戦前にもあったのかな、あまり見ませんでしたね。ほら、時々セミテリオの中を走っている、自動二輪車）

（あぁ、あれね、僕の頃にはほとんど無かったですね）

（あら、後ろにぶらぶら揺れる台を乗せて走るあれですか、ユリ、分かりました）

（おっ、あれですのっ、いい匂いをさせて走る。あれは出前をしてるんですのっ）

（わたくしも分かりました。ぶるぶるうるさいのですね）

（ぶるぶるはまだ静かですわ）

（時折、ぱぴぽぱぴぽぱぴぽぷぅなんて音を出して、面白そうなのもありますわ。あら、わたくし、オノマトペを使ってしまいました。あら、おのまとぺって勝手に作っても差し支えないのかしら）

（カテリーヌさん、それが日本語の面白いところなのですな。一度作られると、作る楽しみがおわかりになりましたかな）

（はい、ロバートさん、私の楽しみが一つ増えたように思います。あら、こちらの世でもっと長生きできそうですわ）

（警察のサイレン鳴らして走る四輪者に追いかけられている、あれですわね）

（そうそう、マサさん、それです、あれの警察専用のがありまして、時速七、八十里も出せば当然捕まります）

（つまり、出せば捕まる、捕まるということは違法なのですのっ）

（違法ですね）

（違法になる速度を出せる自動車を何故作るのですかのっ）

（性能を誇示したい作り手なのでしょうか、僕にも分かりません。え～と、カーナビはですね、僕がこちらに参る数十年前でしたかね、最初のは。普及してもう十五年ぐらいでしょうか。車の運転席の前にあるパネル、え～と、画面です、テレビを小さくした様な、そこに、いる所と行く所を入力すると）

（あぁっ、もしかしてユリがテレビで見た、彩香ちゃん家のみたいに、勝手にテレビが話しかけてきたりするんですか）
（う～ん、まぁ、似ているのかもしれません。その彩香ちゃん家のは、たぶん僕の曾孫の所にあるのと同じだと思いますが、ｗｉｉでしょ。あれとはちょっと違うんですが）
（ご隠居さん、え～と、瑞賢さん、まず、先ほどからおっしゃってる車というのは、自動車のことですのっ、人力車や荷車、馬車ではないですのっ。その車が高速道路という車専用の道で渋滞するほどに数が多くて、しかもその車の多くに、会話をする小さいテレビがついている、ということですのっ。想像を絶する世界なのですのっ）
（彦衛門さん、僕もラジオの無かった頃を知っていますから、ほんと、この百年の技術の発達はすさまじいですね）
（さぁ、彦衛門どうするか。そろそろ年貢の納め時、昇華するか、はてさて好奇心に火を灯し、乗せて貰って旅するか）
（だんなさ～、昇華する時にはわたくしもご一緒いたしますわ。まだしばらくあちらの世の変化を楽しみましょう）
（あちらの世で生きていてもなかなか技術の発達についていくのは難しいようですよ。ましてやこちらに来て四十五年のハナは旅するのが嫌いでね。え～と、東京オリンピックの翌年、昭和四十年の秋でした。家の前の道路で、飛び出してきたこどもを避けようとした車が、街路灯にぶつかって、その衝撃で街路灯が外れて落ちましてね、運悪くハナの頭を直撃して、即死でした。あと二分も歩けば家の中に入れる場所でした。銀杏の黄色い葉っぱが舞い散る中、葬儀を行いました。僧侶は呼ばず、読経は僕がしました。大黒さんになる筈だったのに、女の子がほしかった、女の子だったらよかったのにとのかつてのハナの声が耳の中にこだまして、せめて僕の読経で三途の川を渡らしたかったんです。六十五年のハナの人生中、ほぼ三分の二を僕と過ごしたのです。僕の父は七十五でこちらに参ってますから、その頃、僕はあと十年ぐらいかと、それまで待っていてくれとハナに告げていました。なのに、なのに、え～と、三十五年

も待たせてしまったんですね。こちらに参ってまで、ハナの期待に添えませんでした。交通事故だけでも予想外のことでしょ。ましてや車道を歩いていたわけでもなく。街灯が落ちてくるというのも希にしかないこと。ですから、僕がこちらに参って、ハナを連れ出そうとしても、嫌がるんですよ。あの頃ですら私はこういう目に遭いました。今のめまぐるしいあちらの世で、いくらもうこれ以上死なないからといっても、恐ろしい目に遭うのはごめんこうむりますっ、ってね）

（確かにね。でも、どうして死ぬのが恐ろしいのだろう）

（僕、それも？々考えていたことの一つです。こちらに参るまでは、こちらの世界を知りませんでしたからね。というよりも、理科の習い、こちらの世界があるなど戯け言、こちらの世があるなどと申してるのは精神科領域だとすら思ってましたから）

（たぶん、死ぬ時には、苦痛が伴う。体にも、親しい人と別れる心にも辛い、未体験ですしね、死後の世界から生還するなど滅多にないわけですし）

（僕もね、ずぅっと、死は辛いことだと思っていたわけです。いえ、死ぬ側だけではなく、死なれた側にもね。実際、祖父母、母、父、弟、妻と送りましたから、辛かったですよ。いくら門前小僧というよりも寺の長男、医者という、宗教心からも医学的視点からも死をとらえられる職業とはいえね。ところがね、ヒンズー教、印度の辺りの宗教らしいのですが、この宗教では、どうも死が辛くて恐ろしいものとはとらえられていない様なんですよ。驚きましたね。死ぬ側も死なれる側も、喜んでいる。これで現世の辛さから逃れられる。輪廻で再び現世に戻って辛さを味わわないですむよう、儀式まであるんですよ。子牛の尻尾を臨終の人に握らせるんです。こちらの世まで連れてってくれる、とか。その儀式をすれば現世に戻らなくてすむそうで。ですから川辺の火葬時でも泣かない。皆笑ってました。不思議でした。そういう風にとらえれば、悲しくも辛くもならないのか、と。苦しいだろう、悲しいだろう、怖いだろうと、そう感じ

るだろうというのも文化次第なのか、とね）
（印度にいらしたのですか）
（いえ、テレビで見たんですよ）
（テレビジョンは素晴らしいですわね。昔ならそこに行かなければ見られなかったものを。日本にいて印度のお葬式に参列できるのですものね）
（我輩は確かに死の苦しみを味わいましたな。刺されちゃね。刺されたらやっぱり痛いですからな）
（そりゃ、刺激を与えられて痛いと感じなきゃ、それこそ死んでいますね。生きていればこそ痛い）
（おっ、つまり死んだら痛くない、だから死んだら楽なのかのっ）
（僕は夢現の中でしたから、苦しみは感じませんでした）
（ユリもです。高熱でうなされて、気付いたらこちら）
（わたくしも）
（わたくしもですわ。これもセラヴィと思っておりました）
（私もそうだったのっ、ただ、お節料理に未練があったがのっ）
（だんなさ～）
（ご隠居さん、瑞賢さんはいかがでしたかのっ。つまみ食いしておくのだったのっ）
（僕は、え～と、これはまた別の機会にして。それで、ハナに戻りますが、僕がこちらに来てからも僕は？々家や医院に戻って遊んでいたのですが、それにも付合わないハナを、強引に説得して、六年前、曾孫、男の子、瑞樹二十四歳の結婚式に連れて行ったんです。その時に大変でね）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その八　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１２月１５日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その九

（先ほどお孫さんが小学校の三年生に東京タワーに上られた、までしたわね。なのに、もう曾孫さんの結婚式ですか）

（いやぁ、僕の高等学校時代からハナの輪禍までほぼ半世紀分話し続けておりまして、僕もですが、みなさまもお疲れでしょうと思いまして、少し端折りました）

（少しですか・・・・四十年くらい分ですわ）

（ユリの人生二つ分ですぅ）

（また、別の機会にでもちゃんとお話しいたしましょう。いえ、この先、おいおい。そもそも、たしか、ハナが何故僕に付合わないかのご説明の筈だったのですが）

（そうでしたっけ）

（あら、そういえば、ユリ、覚えています。カテリーヌさまとマサさまが、そうお尋ねなさってました。ユリも井戸端調子でお尋ねしようと思っておりましたのに先を越されたので黙ったのを思い出しました。そうですわ。どうしてハナ様がいらっしゃるのに、ご隠居さんはいつもお一人でお出かけになるのでしょう）

（そう、そのお話だったんですよ、ですから、ハナの憂鬱、ハナの屈託を語る内に我が人生の半分以上を語ってしまいました。残りの半分はまた別の機会にして、まあ、要するに、孫の瑞穂が結婚して曾孫の瑞樹が産まれて、その曾孫の結婚式なんですが、そこにハナも参列させたかったわけです。で、結論から申しますと、ハナを参列させるのには成功しました。連れ出せましたから。ただね、その体験が元で、その後はとんと、付き合わなくなりました。元々、嫌がるのを連れ出した僕が悪かったんですね。ここまで語りましたように、そもそも大黒さんになりたかった、娘が欲しかった、うどん粉の件、そしてこちらの世に来る時の事故ですからね、あちらの世

はまっぴら、なわけですよ。こちらの世で、我が先祖や我が母、あちらの世で互いに顔見知りだった我が父、我が弟、檀家の面々と共に、静かな時を三十五年過ごしてましたからね、日常の何気ないことで寂しくなって、僕がここに墓参りに来ても、僕に話しかけてきはしませんでしたしね。いつも一方的に僕が話していただけでした。ハナが秋に亡くなる前に、医院と我が家の前の庭にハナが植えていた球根が、翌春先に咲きましてね、チューリップとヒヤシンス、赤と黄色のチューリップ、ピンクと水色と紫のヒヤシンスが綺麗に咲いて、僕はほろりとしまして、ここまで参ってハナに報告しました。その時に線香の香りとハナ行きつけの花屋で買って持ってきた菊の香りに交じってヒヤシンスの香りが漂ってきたのが、ハナの返事だったのかと、それ以外、僕がここに入るまで、年に数回は墓参りに来ていた僕に何も語ってくれず、そぶりも香りもなし）

（あっ、それでご隠居さんのお墓の廻りには、お墓には珍しいチューリップやヒヤシンスが咲くんですね）

（ユリも不思議だったんです。どうして毎秋、必ずどなたかがいらして球根を植えられるのかと）

（最初の内は皆で揃って墓参り。僕は休診日以外にも来てましたが。だんだん足が遠のいて。それでもハナの命日には、僕と孫の瑞穂、息子。僕がこちらに来てからは息子が来て毎年植えてますから。はは、欲を出せば、息子より瑞穂に来てほしいんですよ、あっ、墓の中じゃなくて、墓参りの方ですよ）

（やはりお孫さんは目に入れても痛くないからですか）

（いや、はい、それもありますが、あの子だけが煙草を吸うんでね。ロバートさん、彦衛門さん、分かりますよね）

（そうですのっ）

（そうそう、そうですな）

（ハナの名前の漢字は華だったのですが、花になったようです。元はカタカナでしたが、戦後はカタカナだと老人臭いってね、勝手に華の字をあてていたんですよ。大黒さんにしてやれなかった一件以

降数々の罪滅ぼしというわけでもないんですが、そんなハナの気晴らしを兼ねて、曾孫の結婚式に連れ出そうとしたわけです。結婚式は医院近くのフレンチレストランを借り切りましてね、ごく内輪での予定だったようですが、そこからしてハナは気に食わないわけです。廃寺とはいえお寺の家系で、どうしてフレンチなのか、あっ、フレンチレストランとは、フランス料理の食堂のことです。なぜ異国の食堂なのかとね。僧侶も神主も神父も牧師もいない食堂で何故結婚式ができるのかとね。で、僕が、息子の時だって僧侶も神主も神父も牧師もいなかったじゃないか。息子の、僕もでしたが、大学の学士会館を借りたじゃないか、と申しましても、いえ、その前に、私とあなたの時にはお父様が、瑞鏡と千代子の時にも寺でご仏前で式だけすませました、と申すわけです。次に、食べられもしない料理を目の前にするなんて、ましてや和食じゃない料理なんて、匂いをかぐのも嫌です。それにお式に着ていく恰好じゃないですし。ハナを棺に入れた時にはハナの気に入っていた、戦後買い出しの折にも物物交換には持って行かなかった、嫁入り時に持って来た鴇色京友禅の訪問着を着せたのですよ。もったいないという声もあがりましたよ、でも千代子さんも瑞穂も、やっぱりおばあちゃんのだからということで、ですから、ハナは気の世界でも訪問着なんです。もし他のにしたかったら、気を振り絞れば着替えられると申しても、そんな気力はありません、いえ、私の服装ではないんです。あなたのその恰好が嫌なんです。そりゃ、僕は隠居してから気楽にと、亡くなった時の毛糸の帽子にマフラー、タートルネックのセーター、コーデュロイのズボンに運動靴、え～と、みなさま、また分からない単語ばかりだとおっしゃいますね。つまり今の僕がしている恰好、これです。僕を棺に入れる時は、ちゃんとスーツ、え～と背広ですね、を着せられたのですが、僕はいつもこの恰好が楽なので。それで、どうせあちらの世の人に見られるわけじゃなし、と申せば、いえ、訪問着の私と、浮浪者みたいなあなたとでは一緒に歩くのが恥ずかしいです、と申すから、じゃあ一寸待って、スーツ、背広に着

替えたわけです。すると、あなた、結婚式でしょ、もっとちゃんと、と申すので、いっそのこととばかりにもう燕尾服にしちゃいましたよ。この調子で、やれ草履が僕の靴が、やれ帯締めが帯留めが、やれ髪型が、と細々とね。これじゃあ、生きている時よりも出かける前の時間がかかる、じっと我慢。何しろ慣れていないハナは、変身に時間がかかるわけです。このおしろいじゃぁ、とかこの紅じゃぁとかね。あなたに頂いた指輪はどこにあるのかしら。墓に持ち込めるわけがないじゃないか。火葬場で苦情が出るから金属は駄目なんだ、いえ、でも、気力を使って思い出せばよろしいのでしょ、あの指輪どこに行ったかしら、あれは物物交換には出してない筈、そうそう、私の死後、あなたは千代子さんに差し上げたっておっしゃってましたわね、じゃぁ千代子さんは今日してくるかしら、だったら私がして行ったらよくないわね、それじゃぁどの指輪にしましょう、あら思い出せませんわ、あっ、あれはサツマイモと換えた時かしら、お米に換えた時かしら、卵に換えた時かしら、行田だったかしら、羽生だったかしら、太田だったかしら、薮塚だったかしら、あの時のお百姓さんは強欲だったわ、あちらは無愛想だったし、あら、あそこの若いお嫁さんは親切だったわ、鶏に追いかけられた時だったかしら、青大将が出た時かしら、日帰りぎりぎりの距離でしたよ。駅ごとにみつからないようにして、重くて肩に食い込むのを軽そうな振りしたり、大変でしたけれど楽しかったですよ、などと他の思い出話に逸れたり、逸れるほどに珍しく元気なハナに戻ってましたが。なんとか外見が整って、ハナは僕を見るゆとりができたのでしょう。燕尾服の僕をしばらく見て、あなたそれじゃぁあんまりです、園遊会にいらっしゃるみたいじゃないですか。大げさですわ。大丈夫、生きている人の目では普通は見えないんだから。でも、私の訪問着とあなたの燕尾服じゃつりあいがとれません。あなたがこちらにいらした時の黒っぽいスーツになさいな。ネクタイは、あの時の赤じゃなくて、白ですよ、白。気力を使いまして、僕はまた着替えました。するとハナは僕をまたじっと見て、あなた、小さくなられ

ました。そりゃそうです。僕は百年生きたのですから、こちらに来た時にはもう乾涸びて、医学的にはでずね、関節と関節の間の滑液が減少し、長年の重力で身長も低くなってますしね。一方ハナはご存知の通り、中年太り、中年、いやあの当時六十五歳はしっかり老人でしたが、恰幅良いわけです。これじゃぁ蚤の夫婦じゃないですか。しかもあなたご高齢、私、あなたの孫ぐらいに見えちゃいます。というわけでまたまた気力を使いまして小太りの僕をイメージ、えぇと、想像しまして、ハナがこちらに参った頃の僕、つまり六十五歳の僕にして、少し太らせて、きつくなったスーツのサイズ、ええと、大きさです。サイズを大きくして、やっとハナの合格点を貰いました。それで、あなたどうやってそのフレンチレストランまで行くのですか、タクシーを呼ぶ訳には参りませんでしょ。電話はかけられないですし。タクシーの運転手さんには見えない私たちがタクシーをとめられるわけもないですし。タクシーは、みなさんごぞんじですね）

（はい、大丈夫です。綾子出産の折りに、わたくしとだんなさ～は朝子に乗って乗りましたし、そのお話もみなさまにいたしましたので）

（今まで知らなかったのかい、僕がどうやって出かけて行くのか。どなたかに乗せて頂いてたのは見てましたよ。同じ方法で行くんだよ。そのどなたかのお宅じゃなくて、フレンチレストランに行くのに、どうやって、乗り継いで行けるのでしょう、人から人に乗り移るのですか、だって、どこに行かれるかわからないのに、いや、慣れればなんとかなるもんなんだ、僕にしっかり掴まっていれば大丈夫、まぁ、あなたに掴まるのですか、人目があるのに。大丈夫、こちらの世の住人にしか普通は見えないんだから。それでも何か恥ずかしいです。わたくし明治の女ですのよ。そんなこと今更言っていたら、式に間に合わない。はい、いいえ、じゃぁ。だから時間がかかるからもう出なきゃいけないんだ。幸いこちらの世ですと、出かける直前にトイレ、え～と、厠のことです、には行かなくてすみま

すからね。少し待っていたら初老の男性が通りました。僕はハナをつかみ、ハナは僕の腕をしっかり握り、その初老の男性に乗りました。その男性、歩むのが遅くて、僕はもっと速く歩いてくれないかなぁと思っていたんですが、ハナは、初めての乗車いえ乗人体験でしたから、自分のではない揺れに戸惑っていました。それでも、この方良い香りがいたしますね。丹頂のヘアトニックとは違いますわね、髪がないですし。どこから匂うのかしら。あら、耳の後ろ、まぁ、今時の男の方は女みたいに香水つけるのですか。セミテリオの外に出て、人通りが増えた所で、電車に乗りそうな人を見つけて、今度は若い女性でしたが、階段を上らずエスカレーターに乗りました）

（その、エスカレーターってのは、なんですかのっ）

（あっ、みなさまの頃にはなかったでしたっけ。え～と、階段なのですが、動くのです）

（もしかして、自動階段のことではございませんこと。上野にございましたわ）

（あっ、ユリ、分かりました。三越呉服店にありました。あら、あれ、大震災の前です。あら、あれは自動昇降機の方だったかしら、下駄を脱いで乗るの。もしかして、虎ちゃん、これもご存知ないかしら）

（いえ、どこかで乗った記憶はあるんですが、下駄も靴も脱がなかったけど、はてさてどこだったか）

（虎之介殿、自動昇降機の方はご存知でしょう。エレベーター）

（エスカレーター、我輩は、昔は知りませんでしたが、今は知っておりますぞ。あちらこちらの駅や摩天楼にありますな。あの、階段状になった段が動くものですな）

（ハナは文句言うわけですよ。若い内からご自分の脚を使わないなんて、とね。どうして右側があいているんですか。どうしてお隣に乗らないのですか。どうして前の方との間に一段あけるのですか。もったいないじゃありませんか。いや、ハナ、これはもっと早く行

きたい人のために片側をあけているんだ。下手に並んだら後ろから文言われるんだ。まぁ、日本人はそんなにせっかちになったんですか、急がなくたって構わないじゃありませんか。それに、横にお二人お並びになればよろしいのに。いやぁ、最近の人は知らない者が隣に並ぶのは窮屈に感じるらしいんだ。日本は狭いお国なのに、人口が減ったんですか、もうラッシュなんてないのかしら。いやぁ、ラッシュはあるんだけれど、相変わらず、電車の中に押し込むバイトもあるようだし）

（ラッシュ、ｒｕｓｈですかな、急ぐですな。バイトは、ｂｉｔｅ、噛むですな）

（おっと、これも和製英語ですね。ラッシュとは、混雑していることを言います。元は多分、みんなが急ぐ時間という意味だったのでしょうか。バイトは噛むじゃなくて、え～と、英語じゃなくてドイツ語のａｒｂｅｉｔ、労働なんですが、それを短くして、短期労働、学生の賃仕事みたいな）

（まぁ、相変わらずそんなに混んでいるのに、片側を開けるなんて、余計に無駄ですわ。いや、そういう時にこそ、片側は早歩きする人が通るから空けておくんだ。まぁ、忙しないこと。あらまぁ、あなたまでご一緒に忙しないこと、ですから私は外出は嫌だとお断りいたしましたのに。東京じゃ右をあけておき、大阪じゃ左をあけるんだ。まぁ、同じ日本なのに違うんですか。その時ぞっとしました。お願い、エスカレーターは歩かないでください、駅長って張り紙があったんですよ。もう早速ハナが文句を言うわけです）

（　まぁ、エスカレーターが歩くんですか。動くんじゃなくて、歩くんですか。ユリ、怖いです。あの階段ごと上がって行くのでもなんだかからだがふらふらいたしましたのに。その自動階段が自動で前後左右にも動くのでしょうか。まぁ、恐ろしい）

（ほうっ、自動階段ですら信じがたい光景、ましてやそれごと前後左右に動くとはのっ）

（まさか、そのような事はないのですけれど）

（あら、残念ですわ。もし、階段に乗って、上下のみならず前後左右にも動くなら、どこにでも参れますもの）
（おっ、マサさん進んでますな）
（おばあちゃん、僕もそう思う。とっても便利だよね）
（でも、それでしたら、みなさまが同じ方向にいつまでも行くのではございませんこと）
（カテリーヌさま、そうですよねぇ）
（そうなんです。いくらなんでも、エスカレーター、自動階段は、それごとは動きません。でも、昨今の駅には時によって、いえ、場所、駅によって、エスカレーターは歩かないでください、駅長、って書いてあるんですよ。駅長本人が書いているのではなくて、ワープロが書いているのでしょうけれど）
（まぁ、今では駅員さんをワープロと呼ぶのですか、何語でしょう）
（いえ、ワープロというのはｗｏｒｄ　ｐｒｏｃｅｓｓｏｒのことです。え～と、文字を入力して変換させてプリントアウト、つまり印刷する機械なのですが、つまり、人間が文字を機械に打ち込み、候補の漢字から適切なのを人間が選び、確定された文字を縮小したり拡大したり、文字の種類を選んだり、飾りをつけたりして、それを機械が印刷するわけです）
（あのぉ、僕、なんとなくしか分からないのですが、それってもしかして刑事さんや検事さんが使っていたもののことでしょうか。パソコンとおっしゃってました）
（あぁ、パソコンとはまた違って）
（我輩、分かりました。ユリさん、お花屋さんでお父さんが使っていたのがパソコンですよ。我輩もよく見ました。ああいうのは確かに、そう、パソコンと呼んでました。ユリさんのお話の時には我輩も名前を思い出せませんでしたが、今ご隠居さんがおっしゃったので、そうそう、パソコンでした。で、パソコンとｗｏｒｄ　ｐｒｏｃｅｓｓｏｒとは異なる物なのですね、ご隠居さん）
（パソコンは、ロバートさん、ｐｅｒｓｏｎａｌ　ｃｏｍｐｕｔｅ

rの日本での言い方なんです。つまり、個人用の電脳機械とでも訳しましょうか。そのパソコン、殆どの物に付いているのが今ご説明しております ワープロ機能なんです）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その九（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１２月２２日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十

（それで、その、エスカレーターは歩かないでください、駅長という張り紙をプリントアウト、つまり印刷しているのはワープロ、自動筆記装置とでも申しましょうか、なのですが、入力、つまり文章を作っているのは駅員さんでしょうから、駅員さんが入力の段階で日本語を間違えている訳です。エスカレーターは歩かないでくださいじゃ、エスカレーターが歩けることになってしまうのですが、ですからみなさんも今色々と楽しい、恐ろしい誤解や空想なさいましたね。ハナは、お得意の僕の気が滅入る反応。まぁ、いくら私がセミテリオに四十五年いたからって、まさかエスカレーターが歩くわけないじゃありませんか。駅長さんの学力が落ちたのですわね。情けないですわ、日本語が乱れています。どういう教育を受けたのかしら。小さい子も利用するこういう駅で間違った日本語をこんな大きな紙に書いて貼るなんて恥知らず。それに、歩かないでくださいと書いてあるのにエスカレーターの上で歩くなんて、まぁ。それで、改札を入る時に、あら、この方切符を買われないのですか、定期をお持ちなのかしら、あら、駅員さんがいない、ストの最中なのでしょうか。え～と、ストはみなさんご存知ですか。ストライキ、労働争議とでも申しましょうか、労働者が労働者の権利を守ったり要求する為に、労働を一時的に停止することなのですが）

（僕の頃にもありました。アカ、でしょ）

（桃色でしょ）

（えっ、社会主義や共産主義だからアカでしょ。賃下げ反対、解雇反対、対資本家の活動で、世界大恐慌の後、方々で起きて、あれは、反乱、ソヴィエットができた元みたいな。労働争議にはたしか特高も目を光らせていましたよね）

（あら、桃色なんです。虎之介殿はご記憶にないかしら。わたくしがこちらに参る少し前でしたが、松竹少女歌劇で東京ではターキー

が湯河原に、大阪では三笠静子が高野山に立てこもりましたでしょ）
（ターキー、ｔｕｒｋｅｙ、七面鳥は日本にはおらぬと思っておったが、七面鳥は湯河原に隠れていたのですな、それともトルコの大使館が湯河原にですかな。七面鳥は美味なんですな）
（ほう、亜米利加では七面鳥も喰うのですか。たしかに、鶏よりでかい分だけ得ですのっ）
（おほほ、ロバート殿、ターキーって、水の江瀧子さんの愛称ですのよ、少女歌劇団のお話ですのに）
（それ、母から聞いたことあります。僕は覚えていないんです。尋常小学校に入った頃かなぁ、それ、桃色なんですか）
（はい、桃色争議と、新聞に書き立てられていました）
（時が経つと面白いものですね。今では、ストライキは労働者の権利として、現在の日本国憲法では認められているのですよ）
（えっ、そうなんですか）
（まぁ）
（それに、ストライキは決してアカではない、とも言えるのです）
（アカでも桃色でもないのですかのっ、どうも、私にはよくわかりませんのっ。下克上の一種かのっ）
（我輩には奴隷解放と似ているようにも思えますな）
（夫の国、英吉利に対抗していた印度のシパーヒー達のと似ていますわ）
（あっ、カテリーヌさん、印度はもう英吉利から独立して六十年以上経っています。おっ、ですから、独立運動の初期の動きだったんでしょうね）
（なるほど、日本では下克上、アメリカでは奴隷解放、印度では独立運動、スト、ストライキは労働争議、皆、同じ様なものなのですねぇ。苦しけりゃ戦う。戦う相手は自分たちを苦しめて金を儲けている人たちということになるのですか）
（そういう考え方がアカだからって特高が目を光らせていた、つまり労働争議はアカ、ですよね）

（虎さん、そこが不思議な所でね。僕だって当時は知らなかったですよ。ストライキはアカの行動だって思ってました。ところがね、どうも、ソヴィエット、今は露西亜と国名を換えたのですが）

（えっ、我輩の頃は露西亜だったのが、ソヴィエットになったと、先ほどそうお伺いした記憶がありますが）

（そうそう、私も耳にしましたのっ。もう露西亜と呼んではいないのだと頭に、否、気に刻みましたのっ）

（え〜と、昔は露西亜でした。革命、それこそアカの革命で、ソヴィエット連邦と名前を換えました。今から二十年ぐらい前でしたかね、今度はソヴィエット連邦が解体して、独立国家共同体と名前を換えて、すぐにロシア連邦とまた名前を換えたんだったと思いますよ。この頃、曾孫の瑞樹が中学受験でしてね、早口言葉みたいに唱えていたので覚えてしまいました。えぇと、何の話しをしていたんでしたっけ、あっ、そう、ストライキ、今ではストと言ってますが）

（また、いつもの、何でも短くする日本語ですな）

（はい、それで、ストはアカの行動じゃないんですよ。アカ嫌いのアメリカでは、警察官や消防士や公務員がストできるんですね）

（えっ、日本では、僕の頃には特高が取り締まっていたのに、アカじゃないアメリカでは警察官がストできるんですか。アカ嫌いというところでは同じでも）

（そう。逆に、ソヴィエットや中国ではストライキは禁止されていました。今もかな、今の中国はアカじゃないみたいで）

（えっ、支那じゃなくて今は中国だというのは、もう分かっていますが、中国もアカになって、でも今はアカじゃないんですか）

（中国は今も社会主義の国だと本人達は言っていますよ。国旗も赤いですし。でも実態は共産主義で中央集権、でも経済活動は資本主義的、アメリカより一層資本主義的なようですよ。僕がこちらに来た頃はそれほど資本主義ではなかったようなんですが、最近はすごいらしい。社会主義や共産主義の国は随分減って、今、どこが残っているのでしょうか。キューバとベトナムとモザンビーク、一応中

国と北朝鮮ぐらいでしょうか、他にもあったかなぁ）

（キューバは、カリブ海の島国ですな。あそこは我が国が西班牙と戦った後、僕がこちらに来る前に西班牙から独立したのですが、あそこもアカになったんですか。モザンビークとベトナムは、我輩には分かりませぬ）

（キューバの場合は、確か、アメリカと仲良くてね、で、上の方はそれでよくとも、下の方は、アメリカの自由主義経済に組み込まれて苦労して、それで革命が起きて、え～と、東京オリンピックより前に、ソヴィエットが援助してアメリカの経済支配から逃れて、今もたしか共産圏ですよ）

（あのぉ、社会主義と共産主義とどう違うのでしょう）

（さぁ、僕も詳しくはわかりません。ただ、今の日本の政党には共産党と社会党、え～と社会民主党に名前を換えたんだっけ、があります。僕には似た様に見えるのですがね。そうそう、民主社会党じゃなくて、民社党というのもありますし、つい最近までは自民党という政党が政権とっていましたし。どうも民という字が人気の様です）

（私は警察官の労働争議に感心があるのだが、労働争議を取り締まる警察官が労働争議を起こすとは、取り締まるのは誰なんだろうのっ）

（彦衛門さん、それは日本の話しじゃなくて、アメリカの場合です）

（我輩も疑問ですな、軍が出てくるのですかな）

（さぁ、すみません、僕もそこまで知らなくて。ロバートさん、その内、お国のどなたかにお乗りになっては）

（然様ですな）

（私にはまだよく分からないのだがのっ。いや、その労働争議ではなくて、支那のことなのだがのっ。私が生まれる前に阿片戦争というのがござったの。私がセミテリオに来る前に日清戦争というのがあったのっ。マサがセミテリオに来る前に支那事変があったのだったのっ。中国にはたしか皇帝がいて、それも下克上で今はいなくな

ったのかのっ）

（彦衛門さん、僕の専門外ですからご容赦ください。え～と、皇帝はいません、いなくなりました。皇帝の変わりに主席という共産党のトップ、一番上の人がいて、あれっ、共産党なんですよね。でも中国は共産主義じゃなくて社会主義って言っているらしいです。あっ、曾孫の瑞樹のを思い出しました。中学の時の歴史のテスト、えぇと、テストとは考査のことですよ。その考査の前に早口言葉みたいなのを唱えてました。どうだっけ、え～ともしもしかめよの歌、皆さんご存知ですか）

（おおっ、私でも知っているのっ、こりゃ嬉しいですのっ。兎と亀ですのっ。♪もしもし亀よ亀さんよ、世界の中でお前程、歩みの鈍い者はない、どうしてそんなに鈍いのか♪）

（♪なんとおっしゃる兎さん、そんならお前と駆け比べ、向こうのお山の麓まで、どちらが先に駆け付くか♪　この話は昔から知っておりましたわ。日本の昔話ですものね。歌ができたのは最近、いえ、明治でしたかしら）

（そのお話、日本のお話ではございませんことよ）

（まぁ、カテリーヌさま、まさか。この歌日本のお話しのですわ）

（然様、その話しは我輩も存じております、兎が寝ている間に亀が先に到達するのですな）

（まぁ、亜米利加のお話しなのですか）

（いえいえ古代希臘の愛江祖母とか伊曽保と日本語で言われたイソップが作った話しですな。我輩、驚きましたよ。我が国が建国されるよりさらに前に日本にイソップの物語が入っておりましたのでな）

（何時頃のお話しですの）

（え～と、日本に入ったのは、信長の頃のようです。作られたのは、紀元前六百年ぐらいだそうですから、今から二千六百年前ぐらいですね）

（あら、日本が紀元二千六百年をお祝いしたのが、わたくしがこちらに参る前の年でしたから、神武さまよりは新しい方ですのね。そ

れにいたしましてもお古い方ですのね。わたくし、自分がとても若く感じますわ）

（その歌の音楽に合わせて、中国の王朝を覚えるというのがありましてね、曾孫が歌っておったのだが、え～と、うろ覚えで、殷周秦漢三国晋、間は覚えていなくて、最後の方が、清、中華民国、中華人民共和国、なんですよ）

（僕ももうあまりしっかり覚えてませんが、少なくとも間に、随唐元明の四つは入りますね。宋ってのもありましたね。あぁ、春秋戦国とか五代ってのも、金ってありませんでしたっけ）

（あったような。それで、つまり、今は中華人民共和国という名前なんですよ。あっ、これも民という字が入りますね。あっ、そう言えば、民という漢字が二つ入る国がありました。朝鮮民主主義人民共和国）

（あっ、それ、私、びわちゃんの教科書で見ました。そこと日本の間の国が韓国でジミニちゃんのお国）

（そういえば、あの時、ユリさんおっしゃってましたわね。朝鮮半島に二つ国があるって）

（はい、それ、それです）

（韓国は、正式には大韓民国と言うんです。僕がこちらに来てからサッカーで、え～と、ボール、つまり球を蹴り合う競技で、それの世界大会が日本と韓国両国開催だったんですよ。あの頃までは、あちらは名前を変えさせられたり、慰安婦にされたり強制労働させられたり日本支配下での辛苦の記憶を持ち、こちらは謝罪してもすぐ他の者が発言を翻したりで、両国の間に確執があったのですが、政府や政治家よりも国民同士が仲良くなってきた様ですよ）

（大戦で日本が負けたら、朝鮮は二つに分かれたのですか）

（そうなんです。ソ連、え～と、先ほど説明しましたソヴィエットのことですが、ソ連が北側、中国に近い方を、アメリカが日本に近い方を取ったんです）

（つまり、日本の領土みたいだった所を、勝った国々が分けたとい

うことでしょうか）

（いえ、あの戦争ではなくて、第二次世界大戦のあと）

（第二次・・・）

（はい、虎さんはお分かりになりますね。みなさんが大戦と呼んでらっしゃるのは、大正七年に終わりました）

（知らないのは私だけだのっ）

（その後、支那事変が昭和十二年で）

（あら、それはわたくしと虎之介殿しか）

（その頃、イタリアとドイツが、概ねヨーロッパの残りの国々と戦っていましたので、合わせて第二次世界大戦と呼ぶのですが、この第二次世界大戦は先にイタリア、次にドイツ、最後に日本が昭和二十年八月十五日に降伏して幕を閉じたのですが、日本の支配からは自由になったとはいえ、中国も朝鮮も共産主義と自由主義がしのぎを削っていたのです。日本の敗残兵の一部もそれぞれに参加したりして、そのまま大陸中国は一応一国でしたが、朝鮮半島の方は、ソ連やアメリカも加わってまた戦争になりましてね、もし広島や長崎で原爆、例のすさまじい爆弾ですね、あの時日本で使われていなかったなら、きっとアメリカは朝鮮戦争で使ったでしょうね。新しい兵器を使いたくてたまらなくなるのが常ですからね。原爆は使われませんでしたが、日本からも米軍、あっ、アメリカの軍隊です、空軍爆撃機がどんどん飛んで行って、朝鮮戦争のお陰で日本は戦後復興したのでした。戦いは二年程続いて、休戦。今も休戦状態なんですよ）

（まぁ、まだ戦争が続いているのですか）

（両国とも終戦宣言はしていないようですよ。半島の真ん中あたりに軍事境界線があって、にらみ合いが続いてはいるようです。大きな戦闘はないのですが、ちょくちょく北、つまり民の字が二つついている方が、南、つまり韓国にちょっかい出しているみたいです）

（まぁ、お二つに別れるなんて、お可哀想）

（第二次世界大戦の後、ドイツも二つに分かれたんですよ）

（まぁ。独逸がですか）
（はい、東西の二つに。こちらも朝鮮半島同様ソ連側とアメリカ側と。ベルリンなど街まで二つに分けて）
（まぁ）
（ドイツは僕がこちらに来る前に統一されましたが、朝鮮は二つに分かれたまま。実は、日本も二つに分けられていたかもしれないんですよ）
（まぁ）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その十（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１２月２９日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十一

（どこで分けたんだろう。あっ、もちろん分けられるなんて嫌だけれど、ちょっと興味があるので。例えば糸魚川構造線とか）

（それ、なんだのっ）

（糸魚川と諏訪湖と安倍川を結んだ線の両側の植物が異なる、でしたっけ。東北帝大の先生が見つけたんだったと思います）

（東北以北がソ連、四国が中国、中国地方と九州がイギリス、つまり英国、その他がアメリカで、東京だけは米英ソ中だったでしょうか）

（フランスは入らないのですか）

（ですね、印度も入っていないですね、まだ独立前でしたかね）

（なんだのっ、私の孫曾孫がご先祖さまの地に帰ろうとしても国境があったかもしれないのだのっ。ここ、セミテリオはどこのものに、嗚呼、やはり考えたくもない。薩摩の遠い親戚が、私の弟達の子孫が私を訪ねることもできなくなったやもしれぬのだのっ）

（まぁ、どちらにしてもそういう方、こちらにいらっしゃったことなかったですわね。わたくしの方もそうですが）

（寂しい事だのっ。兄弟は他人の始まりかのっ）

（実際、今でも韓国の方は北鮮に墓参するそうですよ。そういえば、ベトナムも二つに分かれていたんだっけ）

（ベトナムとは、どこですのっ）

（虎さんの頃の印度支那、彦衛門さんの頃には安南でしたか。え～とフランスが支配していたんでしたっけ。その後は日本、日本の後はまたフランス、その後はアメリカ、たしかこの頃二つに分かれたんです。南北に。やはり南がアメリカ側、北がソ連や中国が後ろ盾になって、そういえばあの時にも原爆を使うって言っていたんでした。二つに分かれなかった国日本、二つに分かれたけれど一つにな

ったのがドイツとベトナム、二つのままなのが朝鮮半島。朝鮮戦争の時にもベトナム戦争の時にも、米軍は日本から飛び立ち、米兵死者は日本でエンバーミングされて本国に戻ったのですよ）

（エンバーミングとはなんでしょう）

（あっ、これは我輩がお答えいたしましょう。死化粧です）

（死化粧でしたら、特に女性の場合は昔からいたしますわ）

（我が国の場合は、日本より丁寧というか念入りでして、場合によっては内蔵を抜いて長持ちさせたりするんです）

（まぁ、抜いた内蔵はどうなさるんでしょう）

（そうそう、アメリカでは盛んだそうですね。今では血管に赤い液体を入れて肌の色を生前と同じようにまでするそうです。ただ、朝鮮戦争とベトナム戦争の時には、戦争ですからね、腕が取れたり脚が無かったり、目が飛ばされていたりですから、縫い合わせたりも結構あったそうで、医学の解剖実習よりよほどすさまじかったと聞いたことがあります。それこそ学生のバイト、例のドイツ語の労働、としては高収入になったそうですよ）

（朝鮮戦争とかベトナム戦争とか、我が国はそれほど戦争ばかりしているのですかな。二流国がそんなに戦っていては大変。我が死後のこととはいえ、気になります）

（ロバートさん、貴殿のお国はどうも戦争好きなようですよ。血の気の多いお国なんでしょうか。ところで、たしかにアメリカはロバートさんの頃には二流国だったようですが、第一次世界大戦の後はヨーロッパ各国から成金呼ばわりされていましたが、第二次世界大戦の後は一流国とされていますよ。資本主義と自由主義で世界一流大国ですよ。ただ、どうも、国内の景気が悪くなるとすぐに戦争したがるようですね。日本はピカドン、あっ、原爆のこと、例の新型爆弾の後、憲法で戦争放棄しましたし、実際もう六十五年間戦争していませんからね。一方アメリカはあちこちでちょっかい出している。朝鮮戦争とベトナム戦争以外にもパナマ侵攻、カンボジア侵攻、湾岸戦争、イラクやアフガニスタンでも、確かチリや中米、中央ア

メリカのことですが、そこでもクーデターや内戦に裏から手を回してます。世界の警察と自称しているらしくてね）

（元外交官としては、哀しいですな。外交とは戦争を避けるもの、と我輩は思っております。あちこちで戦争をしてしまう、というのは、外交努力が足りないのか、外交力不足なのか、血の気の多いはやる気持ちを抑えられないからなのか、いやはや実に情けない）

（警察なんですのっ。それじゃ、悪い事ではないですのっ）

（おじいちゃん、特高は、僕、もうこれ以上死なないから言えるけれど、やっぱりあれは悪い警察だと思うから。警察にも悪いってのもあると思うけれど）

（悲しいですのっ。信頼されない、嫌われる警察というのは、治安の維持どころじゃないですのっ）

（彦衛門殿、軍も警察も、それ自体では考えぬものではなかろうか。時の政治、首長、法律で動くものではなかろうか。どこまで自由裁量権があるものなのだろうか）

（そうそう、朝鮮戦争の頃に、警察予備隊というのが日本にできました）

（警察の予備とはどういうことですかのっ）

（警察では不足の場合にということでできて、つまり、朝鮮戦争に米軍が行く、占領下の日本は誰が守るかということで、警察だけには任せられないからできたらしいですよ。それが自衛隊に昇格して、今では陸海空自衛隊があります）

（要するに軍隊、日本の軍隊ということかのっ）

（見方は色々です。それこそ戦後ずぅっとね。軍事力は持っている、けれど憲法で戦争放棄をしているわけですから。要するに名前の通り、自衛の為の軍備ということなのでしょうか）

（じゃぁ徴兵されるんだ）

（いえいえ、徴兵はしていません。募集です。あっ、ロバートさん、貴殿のお国でも、あちこちで戦争や内戦に首をつっこむ割には、徴兵制度はもう無いも同然なんですよ。今、徴兵制度のある国は世界

でも数少なくなってきました。そういう意味では平和なのでしょうか。僕は医者です、でしたからね、自衛というのは免疫と同じだと思うので、あるべきだと思っていますが、議論はかまびすしい。他国に攻めてこられるのが分かっている時に座して待つのかとか、武器を持つから戦いたくなるのだからとか。自衛隊、最近では他国の平和維持活動に派遣されたり、それと日本国内では災害救助に活躍してますよ）

（おっ、明治初期の警察と同じですのっ。大水が出たり疫病が流行すると、警察が色々と頑張ったものでした）

（そうでしたわね）

（ユリ、思うんですけれど、太閤秀吉さんでしたっけ、刀狩りなさったの。刀狩りなさったから、お侍さんの他には、刀で喧嘩しなかったわけでしょ。やっぱり、刀を持つから喧嘩した時に怪我したり死んだりするのだと思うのですが）

（そうそう。だから難しいのですよ。侍はあの頃むやみに町人百姓を殺しはしなかったでしょ。たまにそういう無茶苦茶な武士がいたら、武士の掟で取り締まられたと思うわけですよ。あっ、ロバートさん、貴殿のお国では一般国民が銃を持てるのですよ。西部開拓時代からの伝統で、我が身我が家族の安全は自分か守るといったところでしょうか。誰かが銃を持つ、その誰かがいつ襲ってくるかわからないから、こちらも銃を持つ、そう言っていたらみんなが銃を持つことになる、というのがアメリカ型。ほとんどの人が銃を持っていないから、自分が銃を持っていなくても安全、というのが日本型。これを軍備に置き換えると、何も持たない方が安全、なのかもしれません。けれど、軍備というのは金が儲かるものでね。矛盾の矛と盾みたいに、より強いものを求める、相手が自分の武器を負かせる武器を手に入れたら、その武器に勝つ武器を考える、作る、持つ、売る、ですからね、いつまでたっても切りがない）

（あのぉ、矛盾の矛と盾って、なんでしょう）

（カテリーヌさん、ｃｏｎｔｒａｄｉｃｔｉｏｎですな）

（あ～はい）
（カテリーヌおばさん、矛盾という日本語は中国の古典から来ているんですよ。どんな盾をも突ける矛、どんな矛からでも守れる盾、変でしょ。矛と盾は何だかわかりますか）
（英語ですとｐｉｋｅとｓｈｉｅｌｄですな）
（あ～、はい、分かりました。変ですわね。でも、矛と盾を交互に強くして行くって、はい、なるほど、矛を売る方も盾を売る方も儲かりますわね）
（ところで何の話しをしていたんでしたっけ。あっ、駅の改札に駅員がいないから、ストライキだとハナが思ったんでした。でも、僕も不思議に思います。昔、改札にいた駅員達は今どこで働いているんでしょう。まぁ、ともかく、僕とハナが乗った御仁はスイカをパッとあてて通って）
（すいか、ですか、すいかを持ち歩くことはなかろうのっ、西瓜は一年中あるわけではないのっ。ということは、また英語ですかのっ）
（英語にはないと、我輩は思いますな。それ、我輩も目にしました、緑色と灰色のようなので、ペンギンの絵が描いてあるものですな。もう一種類ござろう。ＰＡＳＭＯというのが。こちらは英語なんだそうですな。通る、手形の意味でのパスにもっとのｍｏｒｅのモだと、どこかで読みました）
（スイカは、勿論西瓜ではなく、たぶん、すいっと通れるカード、しかし、西瓜の絵も見た様な覚えがあります。やはりすいっと通れるで、西瓜は駄洒落でしょう。え～とカードは日本語で、歌留多の様な）
（歌留多も元々は日本語ではないのですよね。ユリ、尋常小学校で習いました。南蛮のお国の言葉でしょ、でも、歌留多がどういうものかは、ユリにもわかります）
（それを持っていたら、切符を買わなくていいのですか）
（そう、それで切符も買えますし。ＪＲ、国電、省電以外にも今では新幹線や私鉄にもそれで乗れるんですよ。機械で、カードの中に

お金を入れるんです。改札を通る度にカードからお金が支払われるのです）

（なんだか、カードの中に小さな駅員さんがいらっしゃるのかしら。もしかして、小さい駅員さんが中からお金受け取ったり払ったりするのかしら。えっ、でも、歌留多の大きさなのにお金が入るんですか。どうやって。あっ、お財布みたいになっているのかしら）

（ユリちゃん、僕だって理屈はわからないけれど、ユリちゃんみたいに可愛い考え方はできない）

（電子マネーなんです）

（ｍｏｎｅｙ金のことですな）

（電子が金になるのかのっ、そもそも電子とはなんですのっ）

（電子とは、うわっ、僕には説明できません。虎さん、いかがですか）

（電子とは、ｅｌｅｃｔｒｏｎだということは覚えておりますが、電気の何でしたっけ。一番小さい単位、でしたっけ。いやぁ、定かでなくて）

（最新物理学ですな、いや、でしたな。そして、現在ではそれが日常生活に活用されているというわけですな。おぅ、進歩しておりますな）

（つまり、え～と、本物の紙幣や硬貨とカードを機械に投入すると、機械がカードにいくら預かったかを記録して、その記録した金額が電子マネーとして使えるようになるもので、改札を入る時にはどこから乗ったかが記録され、改札を出る時にどこまで乗ったかを自動計算してその金額が電子マネーから差し引かれてカードに記録されるわけです）

（まぁ、それじゃあ、計算に結構お時間かかりますわね。昔でしたら駅員さんが切符を一枚一枚あっという間に見て、受け取ってましたでしょ）

（あぁ、すごい目ですよね。早業）

（いやぁ、きせるなんてのもありましたしね、そうそういつも早業

じゃぁなかった）
（煙管って、あの、煙草を吸う時に使われる道具でございましょ。駅とどう関係あるのでしょうか）
（カテリーヌさん、煙管は、煙草を詰める部分と吸い口は同じ物でできているでしょう。真ん中の部分は別の物ですよね）
（はい）
（ですから、例えば上野から東京回りで渋谷に行くとして、上野から東京までの切符と目黒から渋谷までの切符を持っていて、東京から目黒までの分を払わずに済ますってことをきせるって言うんです。煙管の真ん中は素通りですから）
（なるほど、面白いです。でも、両方の切符を買ってなければできないでしょう。かえって無駄遣いになりませんかしら）
（そうそう、それに、駅毎に鋏の形が違ってましたでしょ）
（いやぁ、上野と渋谷なら東京経由にしたら高くつきますが、これが東海道で東京京都間で同じ様なことをすれば、随分経費が浮くわけです。もちろん見つかればお目玉ですよ、縄付きになることもあったらしいです）
（スイカの前にあったイオカードというのを僕も使っていて、直にスイカが使えるようになると聞いた頃に僕の寿命が尽きて、ですからそれなりに知ってはいるのですが、それで、ハナは全く知らないわけですよ。改札には駅員さんがあの箱の中に入っていて、券売機で買った切符に鋏を入れてもらって改札を通るのしかね。まだイオカードでしたらハナも納得したかもしれませんね。機械に入れていましたから。でも、スイカはタッチする、え～と、機械にカードを触れるだけですからね。それでその女性のスイカに問題があったらしく、通り抜ける直前にバタンと閉まってしまったんです）
（まぁ何が閉まったのでしょう）
（え～と、これは僕の頃のイオカードの時にもそうだったんですが、この辺りの高さに両開きの柔らかい扉、このくらいの大きさなんですがありまして、カード、つまり通行手形の料金が不足していたり、

機械が読み取れないと扉が閉まって通れなくなるのですが、その扉が閉まってしまったんです。ハナは、ほら、こんなんじゃ通れるわけないですよ。それに危ない。このお嬢さんが妊っていたら、驚いてしまいますわ。お腹にあたって流産でもしたら大変ですわ。うん、まぁ、柔らかく作られているから。そりゃぁね、私が他界してから四十五年も経ちましたわよ、もう食糧難の戦後じゃないのも分かりますわよ。それにしてもみなさん太めになった様に感じます。まぁ、またエスカレーターがあるんですか。だからお太りになるんですわ。まぁ、ここでも、エスカレーターの上を歩くなんて、そんなに急いでいるんでしょうか。気忙しいどころか忙しないです。あら、それとも痩せる為に運動なさってるのでしょうか。こんな世の中見とうございませんでしたわ。ですから私は外出など望んでおりませんでしたのに。エスカレーターどころか、歩く歩道の上を歩く人だってたくさんいる時代）

（まぁ、歩く歩道があるんですか）

（ユリさん、ハナみたいなことをおっしゃいますね）

（いやぁ、僕も思いました。だって、自動階段や自動昇降機は上に昇るのが疲れるからとも思えますが、歩道が動くとなると・・・歩けない方の為ですか。あっ、僕、歩道が歩くとは思ってませんよ、ユリちゃんとは同じにしないでください）

（虎ちゃん、またっ。だって、歩道が歩いたら大変でしょ。いえ、大変じゃなくなって、人が動かなくてすむのかしら。どこにでも連れてってくれるのかしら）

（いえ、どう申しましょう。平らな道を、乗っているだけで前に進むんですが。その道の上を、更に早く行きたくて歩く人がいるんですよ）

（歩かないで脚が怠けるのを避ける為に鍛えておるのだのっ。感心感心）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その十一（後書き）

霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
半年間お読み頂きありがとうございました。
次回は１月５日の予定です。

明治４２年元日死去の彦衛門さまのご冥福をお祈り申し上げます。

みなさまよいお年をお迎えくださいませ。

第五話　セミテリオのご隠居　その十二（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年も気の世界におつきあいよろしくお願い申し上げます。

第五話　セミテリオのご隠居　その十二

（ハナの文句は続きました。まぁ、この黄色いポツポツはなんですか。白線は別にあるのに。あら、灰皿がどこにもないですわ。線路に煙草の吸い殻も落ちていない。僕が存命中にはまだ灰皿があったのにね。僕がこちらに来る少し前でしたが、国鉄の赤字解消の為に煙草特別税をあてるといって値上げしておいて、なのに灰皿撤去なんて不条理不合理な。僕は思い出して怒っていたんですよ。僕がこちらに来た後もどんどん禁煙ファッショでしょ。あっ、皆さんご存知ないでしょう。ロバートさん、貴殿の国アメリカがもう三、四十年前に言い出してね、今じゃ世界保険機構が音頭取って、日本では厚生省、今は厚労省というんですが、そこが音頭取って、もう僕なんか医者の癖に喫煙するなんて、と散々言われましたからね）

（あら、お煙草、吸っちゃいけないんですか）

（吸う人の側にいると吸い込む煙に毒がある、喫煙者のマナーが悪い、癌予防、医療費を減らそう、なんだかんだと理屈つけて。車の排気ガスだって同じなのに、車を減らそうとは言わない、自動車産業は守るけれど煙草産業はいじめられる。煙草吸って早死にするならその方が邪魔者が早く減っていいだろうに。禁煙で長らえさせられても年金は勝手に使って減らしておいて、反面煙草税はうんとむしり取るいじめ政策。そもそも厚生省は名前を変えたって、昔から民の健康を守っているような表の口先ばかり、官僚がいかに生き延びるかばかり考えて、医者や製薬業者や権威にはとんと弱いごまり集団だから薬害も公害対策も事実を見ようとしないで、どれほどいいかげんだったか。健康優良児だの、歯は一日何回磨けだの、卵は一日一個だの、正しい食生活だの、腹の周りを測るなどと馬鹿げた行為も要は医院を儲けさせる為。科学という名を借りて、自分の導きたい結論に都合の良い理論と結果ばかり採用して、反対理論や反する事実は隠して、いつの世も、尻馬に乗って寄らば大樹の影で、

一見正しそうな理屈であなたの為だからという言葉で正しいことをやっていますと思い込んで徒党を組んで主張するファッショの元ばかり作りおって、事細かく干渉されるのに慣れた馬鹿息子や主体性の無いこどもならなんとも思わないかもしれないが、まるで口うるさい姑根性、と厚生省に腹立てていたわけです）

（でも、セミテリオでは煙草を吸われる方が増えたと感じるの、ユリの気のせいかしら）

（確かに増えてますのっ）

（だんなさ～、紫煙をいつも喜んでらっしゃいますものね）

（喰えぬ、ひねれぬ、飲めぬ、吸えぬ身、否、気だからのっ、紫煙ぐらいは嗅ぎたいですからのっ）

（なんて訳で腹立てておりましたなら、現代語で申しますなら、頭にきて、むかついて、つい気が逸れて、いつもの気楽な姿に戻ってしまっていたのです。ハナの怒ること怒ること。なんてこと、あなた、それで結婚式に行くんですか、そんな恰好じゃ私一緒に歩くの恥ずかしいです。何言ってるんだ、誰にも見えやしない、それに自分の脚で歩いているわけでもなし。でも嫌です。それでしぶしぶまた気力を使って、スーツ、あっ、背広に着替えました。あら電車が。まぁ、この電車、なんですかっ。いつからこんな色に。ハナの頃はもう色が付いていただろう。えぇ、もちろん小豆色ではなかったですわ。しっかり色が付いていました。山手線は黄緑色、中央線が黄色でしたっけ。なのに、これ何ですの。全部銀色じゃないですか。あら、たしかに線だけ色が付いてます。でも、なんだか弱そうな色、ちょっと叩いたらへこみそうじゃないですか。それに窓がこんなに大きくて、ぶつかったらほんと、恐ろしい。いいじゃないか。もう爆撃されるわけでもなし。明るくて外がよく見えるだろう。まぁ、こんなにビルがあって、これじゃぁ外が見えてもビルだらけじゃないですか。まぁ、なんですか、この窓開かないようになっているんですか、空気が悪くなります、どなたかがお風邪召していたら皆様に伝染りますわ。ちゃんと換気しているだろう、ほら上。あら、こ

れ電気使ってるのかしら、無駄なことを、窓さえ開ければすみますのに。日本人はいつからこんなに無駄遣いするようになったのですか。ですから私、外出は嫌でしたのに。まぁ、なんですか、これ、席の手前に、こんな所に棒が、あちらにもこちらにも。ちゃんとたくさん座るようにね、そうしないとたくさん座れないから。棒の分だけ邪魔じゃないですか。いや、こうやってここは何人と分けないと座れる人が少なくなるから。まぁ、いつから日本人はそんなに自分勝手になったのでしょう、嫌ですわ。あら、これはなんですか、このつり革の色が違うのは。それにここだけ座席の色が違います。えっ、ここは妊婦さんや怪我人やお年寄りが座る所なんですか。そういう人はここにしか座っちゃいけないんですか。いや、違うんだ。え～と、最近は席を譲る人が少なくて困る人が多いから、ここだけ優先席で、えっ、なんですか優先席って。まぁ、そんな。えっ、それじゃぁここにいるこの髪の毛の金色で目は黒い、どこかの方やどうみても四十代にしか見えないこの男の人、この派手な化粧の茶色い髪の若い方、怪我人や病人や妊婦なんですか。まぁ、だから居眠りしたり、あっ、脚を折られたから脚を伸ばしてるんですね、お可哀想に。　耳になんか突っ込んで、　新しい聴診器ですか、まぁ、胸の方につながっていますっ。自分の心臓の音をいつも聞いていなけりゃならないのかしら、まぁ、大変、あら、でもあちらの普通の座席の方にも、なんですか、こんなに心臓のお悪い方が増えたのですか。もう日本人は滅亡するのでしょうか。あら、そうえいば小さい子が少ないですね。まぁ、あちらの方々は心電図を小さい画面で見てるのかしら。まぁ、大人が漫画読んでいますっ。あら、あんな所にテレビが。まぁ、どこで降りたら階段やエスカレータがどこにあるか書いてあるんですね。まぁ、こんな所でもコマーシャルが入るんですか。コマーシャルって、広告のことです。一億総白痴ってこういうことだったんですか。しかもカラーじゃないですか。カラーって、色が付いているってことですよ。電車の中でカラーなんて。これはあら、なんですのこのＪＲというのは。ハナが乗っているこ

の電車のことだ。省電が国鉄になって、今度は私鉄になったんですか。いや、え～と、それは話すと長くなるんだが、国鉄の赤字解消の為に民営化していくつにだっけな、分けたんだよ。ＪＲ東日本、ＪＲ東海とか、あっ、新幹線はＪＲ東海だよ。まぁ、それじゃぁ、山手線で東京駅まで行っても、新幹線に乗るのには別の会社の切符を買うんですか。いや、ここからなら品川駅の方が近い。あなた、品川には新幹線は止まりませんっ。いや、今は止まるんだ。まぁ、そんなっ、東京駅を出て品川でもう止まるんですかっ。それじゃぁ超特急の意味がないじゃありませんかっ。まぁ、まさか白雪姫がお二人。いえ、白雪姫とは違いますわね。でも、瑞穂と千代子さんと一緒に銀座の映画館で見たデズニーの白雪姫そっくりの恰好ですわ。デズニーじゃなくて、ディズニーだ。ハナが生きていた頃、もしかしたらあの番組はやっていたっけ、ディズニーランドって番組。はい、ございました。瑞穂がおばぁちゃん昨日の見たってよく聞いてきたので、見なくちゃと思って、あなたも私とご一緒に見てらしたでしょ。たしか夜の九時から、毎週じゃなくて、無い週もあって、瑞穂が今週は無いんだってがっかりしていた時もありました。カラーテレビになって色がきれいになりましたわね。ハナ、あの頃は、テレビで見たディズニーランドはアメリカの西海岸のだったろう。今は東京、いや実際には千葉なんだが、東京ディズニーランドってのがあるんだ。まぁ、瑞穂が喜んでるでしょうね。いやぁ、瑞穂はもう、あれいくつだっけ、六十だからね。でも瑞樹が小学生の頃はよく連れて行ってたよ。白雪姫の恰好の方は、もしかしてその東京のディズニーランドに行くのかしら。それにしてもどうしてこんなに外人が多いのでしょう。　ほら、あちらにはネールさんみたいな、印度の方かしら。その向こうには青い目の方もいらっしゃるし、ほら、こちらには金髪の、あら、でも目が黒いわ。混血かしら。外人かしら。　今日も東京オリンピックみたいな何か催し物があるんですかっ。ハナ、外人って言っちゃいけないんだ。外国人って、今は言うんだ。あら、どうしてですか、それに、どうせどなたにも聞こ

えないんでしょ。いや、セミテリオにも外人墓地、いや、外国人墓地があるから。え～と、外国人が多いのは、東京国際フォーラムや国際展示場や幕張メッセで、毎日たくさん色々な国際展示や国際会議があるからね。えっ、そんなにたくさん、そんなに毎日。だから、こんなに外人が、いや、外国人が。そのメッセってなんですか、滅相も無いみたいな言葉。ドイツ語のＭｅｓｓｅｇｅｌ？ｎｄｅ、見本市場だよ。あら、枢軸国は戦争に負けたのに、ドイツ語を使うんですか、節操のない。いや、もう戦後六十年だから。あらっ、日本人だと思ったら、支那語です。支那もいけないそうだ。差別用語だそうだ。もうっ、何もしゃべれなくなるじゃないですかっ。よかったです、他界してなかったら無口になりますっ。ですから外出なんて嫌だと申しましたのにっ）

（支那はいけないんですかな）

（はい、どうも、支那は差別語だそうで）

（しかし、英語でもＣｈｉｎａ、Ｃｈｉｎｅｓｅですが、今は違うのでしょうか）

（あのぉ、仏蘭西語でもＣｈｉｎｅ、Ｃｈｉｎｏｉｓですわ、今は駄目なのかしら）

（どうしていけないのでしょう）

（さぁ、アメリカやイギリスやフランスにいる中国人がＣｈｉｎｅｓｅ、Ｃｈｉｎｏｉｓと言われてが差別されていると感じるかどうかは知りませんし、よく分からないのですが、まぁ、日本では、支那人と言われると中国人が差別されていると感じるから、だそうです）

（あら、ユリ、来来軒の支那蕎好きでしたのに、なんて呼ぶのでしょう、支那竹は）

（普通は、拉麺って言っていますよ。あと、中華蕎とも。支那竹は麺麻って言ってます）

（そうなんですか、なんだか違う物みたい）

（まぁ、私たちの後ろから聞こえるのは、支那語、いえ中国語でも

ないみたいです。朝鮮語かしら）
（ハナ、朝鮮語というのもね）
（朝鮮語とは言えないのですか）
（マサさん、そうなんです。でもややこしくて。北のは朝鮮語で南のは韓国語だそうで、それで、面倒だからハングルって呼ぶって言っていたこともあるんですが、ハングルってのは文字のこと、それにハングルを漢字で書けば韓国なわけで、どうもね、定まっていないようです）
（もしかして、僕の頃みたいに、鮮人、ってのも言えないんですか。鮮人は北だけになるから）
（いやぁ、言っちゃいけないらしいのですが、理由は南北に分かれているからではなくて、支那人同様、差別されていると感じるからしいです）
（ふ～ん）
（びっこやめっかちも駄目なんですよ）
（びっこやめっかちの方が差別されていると感じるからですか）
（じゃぁ、びっこやめっかちをどう言えばいいのでしょう）
（脚の不自由な方、目の不自由な方）
（まぁ、たしかに不自由ですわね）
（ひっくるめて、身体障害者、略して身障者とも）
（日本語お得意の短い言葉ですな）
（それじゃぁ、虎ちゃんみたいに意地悪な方は、心障害者）
（僕、意地悪かなぁ。そういうことというユリちゃんの方が心障害者かも）
（ほらっ）
（それじゃぁ惚けちゃったら）
（あっ、惚けもいけなくなったんですよ。え～と、認知症っていうんです。僕は、認知症の方が言葉としては嫌いなんですけれどね。惚けの方が可愛いでしょ。で、先を続けます。ハナの憤慨は続きました。あらもう降りるんですか。まぁ、車掌さんのこの言葉、普通

じゃないですか。調子まで変わってしまったんですか。あの鼻にかかった調子がなくなるなんて寂しいです。いや、たぶんマイクの性能が良くなったんだろう）

（マイクとはなんですかな）

（ｍｉｃｒｏｐｈｏｎｅですよ、ロバートさん）

（我輩、まだ分かりませぬが）

（えっ、もしかして、マイクが分かるのって、お婆ちゃんと僕だけですかっ）

（え～と、音を大きくする装置です。テレビジョンで見たことないですか、こう、下から棒が立っていて、その先、口の高さくらいの所に握りこぶし二つ分ぐらいのが付いているのを。あの先の部分のことです）

（ほうっ）

（へぇ～）

（まぁ）

＊

続く

第五話　セミテリオのご隠居　その十二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１月１２日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十三

（なるほど、長く生きるということはこういうことなのですね。いや、後の時代で生活すると、ということなのでしょうか。どんどん新しいものが出て来ているわけですね。毎日目にしていると昔からあるような気がしてしまいますが。ハナは僕よりたった三十五年早くこちらに来ただけですが、それでも色々、感心というより憤慨していました。まぁなんですか、まぁ降りる前に乗って来るなんて、まぁこの音楽はなんですかっ、えっ、下りのエスカレーターまであるんですか。ここにも、エスカレーターでは歩かないでください、駅長って書いてあるのに、歩くんですか。あら、こちらはちゃんと、でが入っています。正しい日本語をご存知の駅長さんもいらっしゃるんですね。ほっとしました。でも、こう書いて貼らなきゃいけないなんて、みなさんせっかち。まぁ、小走り。やはりハナの小言が出ました。僕は混ぜ返したかったんですよ、歩かないで走るならいいじゃないか、歩かないんだからなんてね。まぁ私みたいな和服の方が電車の中どころか、駅にもいらっしゃらないじゃありませんか。スカートの方も少ないですし、そんなに男勝りばかりなんですかっ、それとも戦時中みたいなんですかっ。スカートは膝が見えてますし、はしたないっ。私、今から着替えた方がよろしいのかしら。いや、もう、いい、誰にも見られないから。あら、でもほらあそこのお年寄りの肩の所に寄り添ってらっしゃる方、あの方、和服ですわ。ああ、僕たちの仲間みたいだ。たぶん、あの男性のこちらの世の奥さんじゃないのかな。ハナも僕が墓参りに行く度に僕に乗ればよかったのに。あの頃の僕ならば、こういうことができるなど知らなかったが、ハナは楽しめたろうに。いえいえ、私、もう外出はこりごりです。死んだ時のことを考えると、外を出歩くなんて恐ろしくて。でも、もうこれ以上死なないのだし。死ぬとか死なないの問題じゃ

ございませんっ。目の前で車の前にこどもが飛び出しただけでぞっといたしました。車が私の方に向かったのでぞっとしました。その車が街灯にぶつかってぞっ、そのすぐ後には頭にがつん、そこまでしか覚えておりませんが、ああいう死に方はもう金輪際こりごり金輪際結構です。だから、もうこれ以上死なないだろう。死ななくとも、ぞっとするのはもう金輪際結構です。だが、もっと外出していれば、今みたいに色々細々ショックを受ける事はなかったろうに）

（ショックとは、驚愕という意味でござる）

（ロバート殿、かたじけない）

（あいがとさげもした）

（ですから私は今日の曾孫の結婚式もお断りいたしたじゃございませんか、なのにあなたはこうやって私を連れ出して。私、外をほっつき歩いているあなたからお話しを伺えればそれで充分でしたのに、いえ、それでもお釣りが来ますのに。伺うだけでもたくさん）

（ほっつき歩くとは、なんかひどい言われようですのっ）

（まぁ、僕、たしかに、ほいほいひょいひょいですから、でも歩いているのは僕じゃなくて僕を乗せてくださってる方々なんですよね）

（左様でございますわね）

（まぁ、こんな調子で、まぁこの東京地下鉄ってなんですか、営団じゃないんですか。あっ、これは僕がこっちに来てからそうなったんで。僕がこっちに来た時にはまだ営団だったよ。こっちってどちらです、ややこしい。こっちって、つまり今僕とハナがいる世界で。でも今あなたも私も動いているこっちの世界はこっちでしょう。いや、え〜と、つまり、生きていた頃の世界じゃなくて、今、ああややこしい。生きている人たちが動いている世界はあちらの世界で。でも私たちこうして動いておりますのも生きている方々の世界ですから、私のこちらの世界はこの生きている方々の世界でございます。う〜ん、ともかく、僕が生きていた頃は営団だったのよ。何度名前を変えればいいんでしょう。最初は東京地下鉄道でしたのに。あっそうか、今は道を取っただけでほとんど元の名称に戻ったんだよ。

どうして、省電は元に戻らなかったのに。そんなこと僕が知るか、ほとんど僕切れかけていました。あっ、腹が立つという現代語ですね。もっとも百を超えた僕が使うにはやや若者言葉なんですが。こんな調子でしたから、僕もいつもの調子じゃなくて、降りる駅を間違えていたのでした。いえ、降りる人に乗り移るのを間違えていたのです。恵比寿で降りる人に憑けば日比谷線で一本で、これならハナの生きていた頃にもあったから、さぞや文句を言われまいと思っていたのですが、ついつい降りる人並みに乗せられて、というか乗っている人から降りそびれて渋谷で降りてしまったんです。そこでまたＪＲ、省電の山手線に乗る人に乗り換えればよかったのですが、まあなんとかなるさ、どの人が渋谷で外に出るのか銀座線、半蔵門線、井の頭線、東横線に乗るか分からないでしょ。一寸した賭けみたいになりまして）

（まぁ、その半蔵門線とは何ですの）

（地下鉄ですよ。途中まで銀座線と同じなんですが、逆方向には神奈川までのびています）

（半蔵門とは、江戸城の半蔵門ですかのっ。忍者の出と言われた服部半蔵に因んだ門ですのっ、ということは、城の下に地下鉄を走らせているのかのっ、天子さまに不届き千万、という世の中ではなくなったということかのっ。それにしてもお堀の下を通るのかのっ。土竜みたいに地面を掘るのはさぞかし大事ですのっ。それに、地下に汽車を走らせると煙はどこにいくのですかのっ）

（あら、だんなさ～、電車はご存知でなかったでしたっけ。あの頃山手線が電車になりましたのよ。地下鉄はもちろん電車ですわ。ですから煙は出ませんの）

（あの頃ね。うむ、私はみていないのっ。私の頃は、日本鉄道の汽車だったのっ）

（我輩の頃も、そういえば、今世紀、いや、もう前世紀の初めの頃に東京市内には電車が走っておりましたな。我輩は最近、例の携帯、あの紐無し電話のことでござるが、あれ以来、旅して参りましたの

で、東京の私鉄や地下鉄網の便利さややこしさは理解しておりますな）

（ユリも少しは電車知ってます。日本鉄道はほとんどまだ汽車でしたけど）

（わたくしの頃には、銀座線と東横線と井の頭線はございました）

（僕の頃もそうです。あの頃は、院電じゃなかったでしょうか）

（地下鉄がどんどん増えたんですよ。僕があちらにいた頃、自分の脚で歩けた頃でも、駅で路線図を見て、どの経路がいいのか悩むことありましたから。ましてや僕にはどこに行くのか分からない方々に乗せて頂いてますとね、うまく乗り移らないと。なのに、渋谷で降りてしまったので、しかも半蔵門線に乗ったわけです。で、次は青山一丁目とアナウンスが入りまして）

（アナウンスって、何かしら）

（ラヂオでニュースを読むことでございましょ）

（あっ、え〜と、例のマイクで車掌が告げることなんですが、でも車掌じゃなくてテープだと思うんですが）

（テープって、紐のことですか）

（いえ、え〜と、どこの駅ではどこ行きの電車に乗り換えられるとか、次はどこの駅だとかを録音してあるものがテープで、あっ、もしかしたら今はそれもテープじゃないのかもしれませんが、ともかく、次は青山一丁目だから、大江戸線に乗り換えれば六本木で日比谷線に乗れる、と思ったのですが、ここで、都営地下鉄はハナの頃にあったっけ、また何か言われるんじゃないか、大江戸線などという、面白いけれどハナが何か言いそうな名前だし、と降りる人に乗り移るのをやめてしまったんです。何しろ、シルバーシートが省電と地下鉄で色が違う。シルバーって銀なのに、銀色じゃないです、なんだかんだとまぁ、文句の付けっぱなしでしたし。あっ、シルバーシートというのは、優先席、先ほど説明いたしました、弱者用の席のことです。その上、この地下鉄に乗ったら江戸時代に戻れるわけないのに、時代錯誤な名前を付けたのはどなたですかっ、と言わ

れたら説明面倒ですし。丸の内線ならばハナも文句は言うまいと、永田町で降りて、赤坂見附から丸の内線に乗って、霞ヶ関で日比谷線に乗って神谷町で降りたわけですが、もう、僕、どっと疲れていました。自分で歩くわけじゃないですから、行きたい方に行く人に乗り移るわけでしょ、自分一人ならまだしも、何かと小うるさく文句を言う、乗り移り若葉マークのハナを連れてですからね、こんなことなら歩いた方が速かった、せめて自転車か、でもそうそう都合良く愛宕行きの人がみつかるとも限りませんし）

（若葉マークってなんでしょう）

（え～と、車の運転に未熟な者が車に貼る印です。つまり、初心者という意味で。何はともあれ、神谷町の駅に着いたわけです。まぁ、お家が無いですわ。ビルばかり、あら、愛宕山が低く見えます。まぁ、東京タワーの下の方が見えませんわ。あら、道路がこんなにきれいに舗装されて。まぁ、車の色が色とりどり。あら、電柱が木ではないのですね。まぁ、物干が無いですわ、皆様洗濯物を干さないのかしら。あら、まぁばかりのハナでした。コンクリの建物は家には見えないようだったので、いや、ビルはビルでも住んでいて、事務所やレストランやお店ばかりじゃなくて、と説明しなければなりませんでした）

（コンクリとはなんですかな）

（ｃｏｎｃｒｅｔｅです）

（あっ、建築に使うものですな、虎さん、かたじけない。またしても短縮されてますな）

（えっ、ユリにはわかりません。セメントとは違うのですか）

（セメントは仏蘭西が日本に輸出しておりましたわ。あら、もしかして、中に鉄の棒を入れる方法かしら）

（あぁ、鉄筋コンクリートって言いますよ。僕もよくは知らないのですが、たぶん、セメントに色々と混ぜたものをコンクリと言うのかなぁ。ともかく、今の日本にはコンクリの建物が多い訳です）

（最近、セミテリオにもそういう墓石があるように思うがのっ）

（それで、丁度神谷町の駅を出た所で、胸にコサージュをつけた華やいだ雰囲気の若い女性が三人、自販機の前にいたので、たぶん曾孫のお相手のお友達だろうと、勝手に見当つけて乗り移りました）

（自販機とはなんですか）

（自動販売機。え～と、ペットボトルのお茶やコーラ、缶入りのコーヒーやジュースなどを売っている機械です。あれ、皆の衆ご存知ないですか。ここセミテリオの管理棟の近くにも設置されてますが）

（気付かなかったのっ）

（便利なものがあるんですね）

（ペット用の飲み物も売っているんですね）

（はっ、ペット用の飲み物は売ってないですよ。ああ、ペットボトルのことですか。あっ、ペット用じゃなくて、え～と、なんて言ったけな。何かの略語なんですよ）

（日本語お得意の簡略語ですな。Ｍｃ　Ｄｏｎａｌｄ，ｓをマックやマクドと言う様な）

（いえ、それとも少し違って、ＰとＥとＴが何か化学物質の略でした。それで、その化学物質でできた容器に入れて売っているものですよ）

（化学物質とは。安全なんですか）

（まぁ安全なんでしょう。世界中でそれに飲み物入れて売っているそうですよ。それで、その自販機の前で話していたのが、まぁ、僕からすれば、若い子の普通の発言なんですが、ハナには堪えられないものでした。茜さぁ、上手いことやったよねぇ。卒業して早々に結婚なんて。もしかしてできちゃった婚なのぉ。違うと思うわよ。しかも医者だもんね。折角大学まで出たのにもう永久就職なんて、もったいなぁい。何言ってるの。それって親の台詞みたいじゃない。だって、看護学勉強した意味ないじゃん。あら、子育て一段落したら戻ればいいのよ、親の台詞みたいだけどさぁ、手に職つけるって強いわよ、離婚できるし。縁起じゃないわ。あら、縁起なんて担ぐの。それに勤め先が自分の旦那の医院なんて、職住接近だし、いい

なぁ。そうかなぁ、夫婦喧嘩していたら、家でも職場でも顔合わせるの嫌じゃない。そうかっ、これで離婚でもしたら、一気に職住失うんだ。だから、手に職つけてれば離婚したって他の病院に務めればいいわけでしょ。養育費だってがっぽり取れるだろうし。なんか披露宴に出る前に縁起でもない。あら、また縁起担いでる。だってさぁ、もし私たちが結婚する時に友達が離婚の可能性なんて話していたらやっぱり嫌でしょ。なんだか嫉妬してるみたいじゃん。そりゃそうね。あの二人ね、付合って長いのよ。中学からだもん。だからできちゃった婚じゃないと思うんだけど。むしろ長過ぎた春なんじゃないかなぁ。もぉほとんど幼なじみの領域でしょ。あら、二人とももしかしてエスカレーター入学だったの、知らなかった。うん、私もそうだから。下から上がって来る子って、もまれてないからなんかお嬢様お坊ちゃまなんだよねぇ。悪かったわね。私もそう、お嬢様でございますわよ。でもね、ほんとのお嬢様は看護士にはならないわ。よっぽど志が高くない限り、切ったの貼ったのはやっぱりね。家だって、どうせ切ったり貼ったりなら医者になった方がいいって言われたわよ、でもそこまで成績良くなかったから。えっ、あっ、やっぱり内部進学でも選抜されちゃうの。そうよ。よっぽど良くないと医学部や希望する学部には入れない。そうなんだぁ、でも外部からよりは楽でしょ。まぁね、それだけ中高と払っているし。あっ、それでね、あの二人たしか中二の頃から仲良くて、高校入ってからはもうステディ。瑞樹君、三高じゃなくて二高でしょ。でも、なにしろ、十年近く愛を育んだ仲だから。いいなぁ。じゃぁこの結婚ももう決まっていたようなもんなんだ。そう、そうじゃなきゃ、卒研中に結婚するなんて、ちょっと厳しいでしょ。そうなんだ、できちゃった婚じゃなかったんだ、ふ〜ん。そろそろ行こうよ。うん、新婦茜さまご友人らしく振る舞わなきゃ。そうそう、新郎側ご友人方々にいいのいないかなぁ。三高なんて欲張り申しません。一高でもいいから。こんなとこで油売っていたらやばいわ。さぁ、おしとやかでしっかりしていて優しい看護士の新婦友人に変〜身〜、てく

まくまやこん、な～んちゃってね。こんな発言だったわけです。もうハナは鼻息荒くなるくらいに怒りまくっているわけですよ。大学を出たお嬢様方がこんな言葉遣いなのですかっ、私達の頃の高女卒の方がよっぽどましでした。しかも話の中身の何と下品なこと、はしたない、世も末ですわ、こんなのを耳にするなんてっ、ですから外出は好きでないと申しましたのにっ、こんな方が看護婦さんでは病院にも参れませんわ）

第五話　セミテリオのご隠居　その十三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１月１９日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十四

（あのぉ、三高じゃなくて二高だといけないのでしょうか。一高は三高や二高より低くなったんですか。そりゃ仙台より京都の方が評価高いかもしれませんが、一高は一番上ではなくなったのですか）

（虎さん、三高、二高というのは高校の名称じゃなくて、え～と、あちらの世では、収入学歴身長の高いのを三高と言いまして、女性が結婚相手の男性を求める時の条件の呼び方です。曾孫の瑞樹の場合、収入はまぁそこそこ期待できますね、自分の家の医院の後継ぎですから。学歴は大卒、しかも医学部。で、後の一つが足りないから二高なんです。背が低いんですよ。百七十そこそこ。え～と、四尺五寸くらいでしょうか）

（おっ、それだけあれば充分だのっ）

（彦衛門さん、今のあちらでは小柄に見えるんですよ）

（ほうっ、外国から食物を輸入して来て、食料に満ち足りておるのだのっ、これはいい）

（あのぉ、できちゃった婚ってなんでしょう）

（結婚より先に妊娠することですよ）

（まぁ、はしたない）

（そうかのっ。昔もあったがのっ）

（古今東西どこでもでしょうな。未婚の女性が孕むと、親は慌てる。早く結婚させないと、とね）

（なぜ早く結婚させるのかしら、みっともないからかしら）

（ユリちゃん、男が逃げるからだと僕は思うよ）

（つまり、結婚って、男の方に責任を取らせるってことなのかしら。何か、ユリの夢壊れそうです）

（ユリちゃん、結婚って現実的なもんだからさ）

（面白いものですな。我輩も虎之介殿もユリさんも、みなあちらで

は生涯独身でしたからな。恋だの愛だの夢だの結婚だのかしましい、いや、我輩には想う令嬢がおりました）

（あらっ、ロバート殿、すみにおけない、お話しお聴かせくださいませ）

（いや、まぁ、旧い話で）

（そうそう、結婚などして当たり前。できぬ男は甲斐性の無い男。昔は稼げねば結婚できぬ、というのも、建前と本音が別でしたのっ。稼げぬ男でも娘が孕んじゃ仕方ない。結婚させるわけでのっ）

（殿方が稼ぎ手ですから、どのような殿方、家柄に嫁ぐかで、おごじょの人生が幸せかどうか、でしたわ）

（それでマサは幸せだったかのっ）

（はい、たぶん）

（たぶん、かのっ）

（だんなさ～、他の方に嫁いだことございませんから、比べられませんでしょ。わたくしは幸せだったと思っておりますから、たぶん幸せでしたのでしょ。ですが、他の方から見て幸せかどうかは分かりませんもの）

（なんだか竹を割ったとはほど遠いのっ）

（だんなさ～をこちらの世に送りましてから三十二年も独りでしたのよ。もう少し長くあちらで生きてくださってたなら、はい、もっと幸せでしたでしょ）

（すまんのっ）

（あのぉ、もう一つ、ユリわからない言葉があったんですけれど。え～と、すてなんとか、高校入ってからっての）

（あっ、ステディですね）

（ｓｔｅａｄｙ、安定したですかな）

（はい、いいえ、え～と、もう他の異性とはつきあわない、という意味で使うようです）

（それって、若い女性と若い男性がおつきあいしていても、他の異性とおつきあいする男女がいる、ってことでしょうか）

（カテリーヌさん、仏蘭西でも我が国我が時代でも、一対一ではなく、多数で集うことはございませんでしたか。左様な状況では、何人もの異性とある種のおつきあいがあるわけで、その中で互いに意中の人であれば一対一でおつきあいをする、そういうことだと我輩は理解しましたが、ご隠居さん、いかがでしょう）

（そう、そう、そうです。あっ、西洋文明ですと然程不思議ではないのでしょう。彦衛門さん、マサさん、それにお若い、いえ若くないのか、まぁ、それはともかく、虎さんやユリさんには分からないでしょうね。僕が生まれた頃、いや、その後も、東京オリンピックぐらいまではなかなかね、男女が勝手につきあうと世間の目は厳しかったかもしれませんね。恋愛結婚は大正時代にもありましたが、戦前戦中は親の目や人目を忍ぶどころか、官権や軍の目も忍ばなけりゃなりませんでしたしね。恋愛も様変わりしました。戦前でしたら手をつなぐのがやっと。映画のキスシーンで大騒ぎでしたからね。そもそも恋愛という言葉ですら御法度）

（鱚死因って何かのっ）

（口吸い、口づけ、接吻場面です。そういうことが想像される映画は見ちゃいけないという建前、隠れて見に行くという本音、僕の周囲にいっぱいいましたよ。本音と建前の葛藤に身悶えしてるってのが）

（虎さん、でも、たぶん虎さんの頃には、傘の中とか、窓の中とか、見えないようになってたでしょ。日本ではそういう場面はカット、あっ、切るって意味ですが、つまりそういう場面があっても見せないようにしていたんですよ。そうそう、思い出しました。ＧＨＱがね、キスシーンのある映画を日本人に見せるようにって通達したんでした）

（僕、もうちょっと長生きしたらそういう映画を見られたんだ。あっ、でも長生きしていたら、赤紙が来ていただろうけれど）

（まぁ虎ちゃん、いやらしい）

（ＧＨＱとは何かのっ。おっ、前にも同じ質問をしたような気がす

るがのっ、もしそうだとしたらお許しあれ。何しろ忘却の彼方に漂っておってのっ）

（Ｇｅｎｅｒａｌ　Ｈｅａｄｑｕａｒｔｅｒの略ですな）

（そう、総司令部、あれは、米軍総司令部だったんだと思います。もしかして連合軍総司令部、いや、どっちもかな、日本が占領されていた頃のトップ、一番上にあった機関です）

（つまり、その頃のお上が、そういう場面を日本人に見せろと、なんとまぁ。接吻など、あら、わたくしこの言葉を口にするだけで赤面しそうですわ。それを映画で見せるなど、なんてまぁ、恥知らずな）

（マサさん、分かります。そうでしたよね。結婚相手の顔を見るのは結婚してからなんてのが当たり前みたいでしたからね。実際、僕も、顔を見ずに許嫁。周囲が認めた、経済的にも階層的にも似た立場の者を紹介する、家柄の釣り合った、似た様な家庭で育って来ているから、恋だの愛だの一時の迷いで盲目になって選ぶよりしっかりしている、そういう風潮でしたよね。好いた惚れたは犬畜生、なんてね。釣書を見れば氏素性は分かる。そもそも結婚する当人じゃなくて親祖父母が決めるのが当たり前でしたし。おっと、それでマサさんは彦衛門さんとどうして）

（あら、わたくしは、だんなさ～とは幼なじみでございましたの。わたくしの兄とだんなさ～も竹馬の友というわけで。ですからごく自然に。人柄も互いによく存じておりました）

（幼なじみですか。それじゃあ、曾孫夫婦と似たようなものですね。曾孫夫婦は仲良くてね、高校生の頃から僕の所に遊びに来て、人前で平気で手をつないでましたよ。今の若い子はいいねぇなんて、僕のお仲間にひやかされても平然としてました）

（手をつなぐくらいで騒がれるのですか）

（はい、カテリーヌさん、そうでした。そうでしたよね、虎さん、ユリさん）

（はい、そんなことといたしましたら、町内どころか東京市中に広ま

るんじゃないかと大騒ぎされたでしょうね）
（高校でならともかくも中学の頃でしたら不良分子扱いでしたね）
（ですからわたくしが夫と腕を組んで歩くと、遠巻きひそひそでしたのね）
（そうだったんですよね。そんな日本に、ＧＨＱは接吻場面の映画を積極的に見せるように通達を出してから四半世紀後、え～と東京オリンピックより後、あれはいつ頃でしたか、ベトナム戦争の頃でしたか。アメリカから流行って、日本にも入って来たのが性の解放、いや、フランスが最初でしたかなぁ。フェミニズム）
（なんですかのっ、蛇水飲む）
（彦衛門さん、フェ、ミ、ニ、ズ、ム、です）
（屁、見ずに、無、そりゃ屁は見えないし無いようなものだがのっ）
（笛をはやく言ったようなフェですが、エフの発音は今の日本語には無いですからな）
（えふなのかふえなのか、えとふとどちらが先なのかのっ）
（文字はえふ、この言葉はふえ、になります）
（で、その笛ミニズム、とは何でしょう）
（ｆｅｍｉｎｉｓｍですな、フランス革命の後に始まった）
（あぁ、あれですか、え～と、人間は平等というのに、殿方と婦人が平等でないという）
（ほぅ、フランスが最初だったのですか。僕も知りませんでした。僕が知っているのは、人種間の不平等が問題になったアメリカで、人種もだが、男女間の間も不平等だというので、どうして女性は家庭、男性は外で仕事なんて分担があるのか。どうして社長は男性で、秘書は女性なのか。どうして女性は大学を出ても同じ給与同じ仕事ではないのか、とかね。日本でも、平塚らいてうさんが色々とおっしゃってましたよ。ハナは、そんなこと言ったって、誰がごはんを作るんですか、でしたがね。で、アメリカでは、性が平等ならば、女性にだけ処女を求めるのは変だ。そもそも男は子を産めない、男も女から生まれるのだから女の方が偉いんだ、ってなりましてね。

日本でならともかくも、女は男の肋骨から神がお造りになったというキリスト教の西洋では、すさまじい言い分なわけですよ）

（西洋では、女は男のあばら骨から作られたと信じられているのでしょうか）

（まぁ、それでは、西洋人の殿方は日本人の殿方よりあばら骨が一本少ないのでしょうか）

（ユリちゃん、まさか、と言っても僕も自分の肋骨だって数えたことないし、ましてや外人、いや外国人の肋骨を数えたことはないけどさ）

（僕も実際に数えて比較したことはありませんが、まぁ、同じでしょう。ただね、人種によって、皮膚の色やまぶたの厚みが異なる様に、脂肪の厚さや罹り易い病気も違うってことは最近分かってきていますが、おっと、人種と言うのも最近では無いことになっている、いや、しかし分類状、いや、この話をするとややこしい）

（ご隠居さま、何をお一人でぶつぶつと。なんだかハナ様のがお伝染りになった様です）

（いや、話を続けましょう。それで、女の方が偉いと言う論調になれば、当然男達から反発が出る。その点、日本ではさほど主張も激しくはなかったので、反発も激しくはなかったのですが。主張と反発の度合いによってその中央あたりに変化していくのが世の常だと僕は思うのです。女が偉いという主張、いや男が偉いという主張、その間で、どちらも偉いとなれば平等なんでしょうね。もっとも僕は、偉いとか立派という言葉は嫌いです。フリーセックスという言葉も流行始めましたが、エイズなどの性交感染症により一応下火になったような、実態はどうだか微妙なのですが、僕も性病の診療からは占領時代以降遠ざかっていますから、詳しくは知りませんが）

（フリーセックス、エイズ、自由、性、援助、ですか）

（虎さん、半分当たりです。性の自由、性の解放、つまり極端な話し、誰と交わろうと構わないというのと、エイズは援助ではなく長い病名の頭文字を取ったもので、元はサルだったかな。性交渉で感

染するなかなか完治し辛い病で）
（まぁ）
（ほうっ）
（ユリ、一応ご隠居さんと同じ年齢なのですが、十九で止まったようなものなので、生々しくて）

第五話　セミテリオのご隠居　その十四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は１月２６日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十五

（僕がこちらに参る十年ぐらい前からは、労働者不足解消ということで外国人を積極的に受け入れるようになって、それまでの日本の文化とは異なってきたということもありますが、日本人男女共に外国人と結婚する人が増えて来ましたしね。ですから、手をつなぐどころか、駅や道端など人前で抱き合ったりキス、口づけ、接吻、など目にすることも増えてきましたしね。で、僕、何の話しをしていたんでしたっけ。ステディの話しからこういう話しになったんでしたね）

（曾孫様のご結婚相手のご友人のおしゃべりを聞いて、ハナさまが怒ってらっしゃった、というお話でした）

（そうそう。てくまくまやこんって変な言葉はなんですかっ、やばいって立派な大人、しかも女性が使う言葉ですかっ。看護婦さんが医者と結ばれるというのはよくある事ですが、それにしてもあまりに下心見え見えで恥ずかしくはないのですかっ。ハナ、今は看護婦じゃなくて看護士と言うんだ。まぁ、女なのに士なんですかっ。いや、最近は男の看護士もいるんで。看護婦じゃ具合悪かろう。ついでに保母というのも言わなくなったんだよ。まぁ、看護や幼児教育にまで男がのさばって来たんですかっ。それともそんなになよなよした男が増えたのですかっ。世も末ですっ。大体、女が道端で、しかも地下鉄の階段を上がってきた所で、こんな所で立ち飲み、立ち吸いするなんてどういうことですかっ。いや、ハナ、てくまくまやこんというのは、あれっ、あの頃ハナはもうこちらの世界だったっけ、ってことはオリンピックよりだいぶ後だったのかなぁ、医院に来る小さい女の子がよく言っていた、テレビアニメの中の呪文で、僕がこっちに来る前にもリバイバルで流行っていたんだ）

（すみません、テレビアニメって何でしょう）

（リバイバルもわかりませんわ）

（テレビのアニメ、テレビに映るａｎｉｍａｔｉｏｎ、テレビ番組の漫画で分かっていただけますか）
（あぁ、あの、漫画が動いてしゃべったりするものですね。びわちゃんが見ていました）
（おっ、生まれたての摩奈を抱いた綾子がぼんやり見ていましたのっ）
（もう一つは、ｒｅｖｉｖａｌですな。蘇る、イエスのような。我々は蘇りませんな）
（え～と、日本で、リバイバルと言うと、普通は、また流行るという意味で。つまり昔流行っていたものが再度流行る時に使います。それで、え～と、ハナに説明してましたのは、立ち飲み、立ち吸いは、今じゃ当たり前だとも。先ほど話したペットボトルを持ち歩いて、歩き飲みなんてのも。まぁ、いつでも水分補給しておく方が体にはいいわけですし、喫煙所は減りましたから、あったら吸っておいた方がいいですし、どの言葉だから男はいいけれど女は使っちゃいけない、なんてのも、まぁどんどん男女平等になってきていますしね）
（いつでも水分補給しておく方が体にいいのですか）
（汗をかくから、飲み過ぎちゃいけません、ってユリ言われていました）
（そうそう、日本の女性は、お顔に汗をかかれるのをみっともないと思われてましたわ。お水を飲まないのですか。そんなご苦労なさってらしたんですのね。わたくし、日本のご婦人はそういう風にできているんだと、うらやましく思っておりましたの）
（水が欲しくとも耐えよ、と尋常小学校以来、ずっと言われてましたよ、僕も。だから、教練の後など、水飲み場に走って行って、そういう時の水ってとってもおいしくて、ごくごく飲んでいると、そこにまた教官がやってきて言うんですよ。お前ら、我慢した分だけ水が美味くなるんだぞっ。納得してましたよ）
（赤痢疫痢に罹っても、水を飲ますと水溶性の下痢が余計にひどく

なる、つまりは水を与えたら水溶性の下痢で体力が消耗すると想われていたどころか、症状を悪化させると信じられていて、水は飲ませてはいけない、なんて時代もありましたしね）

（上から喰えば下から糞、上から飲めば下から尿、当然至極ですのっ。つまったらつまらないことになる）

（だんなさ～）

（実際、飲ませなくて出せないと腸がきれいになれませんし。下痢はむやみに止めない方がいい場合もあるんですよ。なのに、下痢するから飲ませないでは）

（羹にこりてなますを吹くですな）

（流石ロバートさん、一寸違う感じもしますが、それにしてもお詳しい）

（いや、そうでもないんですよ。羹は熱いものと思っていましたし、まぁ、これはたいして違わない様ですが、なますも吹くもわからなくて、鯰を拭くのか、鯰を吹くのか、どちらのふくにしても意味が分からずでした。で、鯰ではなくなますが食物だとはわかったものの、なますが何だかわからない。酢の物のことらしいのですが）

（そうそう、酢の物ですよ。正月などにめしあがりませんでしたか。それで、今でこそ、赤痢疫痢で下痢すれば、脱水症状になるから水分をどんどん摂らせますがね。夏期や運動したり入浴すると水分補給が必要だというのが今の医学です。医学の常識も変わりました。時代によって、社会によって常識や科学的と言われることも変わる。その内、やっぱり喫煙は身体にいいと言われるかもしれない）

（喫煙がどうしてそんなに嫌がられるようになったのでしょう。紫煙、良い香りですのに）

（そうだのっ。幸いにも線香の代わりに紫煙をくゆらせてくれる御仁がまだまだおられますがのっ）

（嫌い、悪いという声がだんだん大きくなると、嫌い、悪いの風潮に乗らないと、時代遅れ、仲間外れになったような気分にさせられて、一緒に嫌い、悪いと言う人がどんどん増えて、更にどんどん増

えてなんでしょうね。そうやって、日誌事変も正しいこと、戦争するのは周りが悪いからで自分の国が悪いからだなんて思えなくなる、思っても声を大にできなくなる。同じですよ。最近あちらの世では、いや、こちらの世と言うべきかな、どうも麻薬が広まっているらしいんですよ）

（麻薬ですか。阿片ですか）

（いや、阿片、ヘロイン、コカインはそれほどでもない様ですが、覚せい剤や大麻がね）

（時が経つと、麻薬の種類も増えるものなんだのっ。阿片以外、私は聞いたこともないですのっ）

（それで、覚せい剤や大麻は、どうも、喫煙率が下がるのと反比例して増えているように感じますよ）

（まぁ、恐ろしい）

（でしょ。煙草よりよっぽど害がある、その上、暴力団の資金源だそうですよ）

（暴力団って、なんでしょう）

（渡世人、風来坊、無頼漢いや、任侠とか極道でしょうか、あっ、やくざとも言いますね）

（恐ろしい方々ってことでしょうか）

（ユリ、お友達にはなりたくないです）

（なんだか恐い話しになってしまいましたわ。話しを元に戻した方がよろしゅうございます。わたくし共も、水は嬉しゅうございますわ。墓石に水をかけられると、身も心も清らかになったように感じます。日照りの後の雨のような）

（でも、雨は、ユリ、嫌いです。なんだか木陰もない所で傘を持たずにびっしょりぐっしょり、辛いです）

（あまり勢いが強いと、こちらの世から流されてしまいそうですものね）

（ここで流れりゃ、その内、東京湾、東京湾から太平洋、地球をぐるっと廻れるかもしれないよ）

（江戸湾じゃないのですのっ）
（はい、東京湾）
（仏蘭西まで行けるかしら）
（亜米利加にも行けますな。しかし、今の時代、飛行機の方が早かろう）
（飛行機は怖いです）
（落ちたところで今更死にゃしない）
（でも怖いです）
（え～と、話しを元に戻してもいいでしょうか）
（あっ、はい）
（ご隠居さん、申し訳ないのっ、ついつい口を挟む我ら）
（いえ、構いませんよ。それこそ、永遠の時ですから。ただ、僕が、何をどこまで話ししていたのか忘れそうになるので。え～と、それで、フレンチレストラン、仏蘭西料理の食堂に着きました。その日は午後は曾孫瑞樹と茜さんの結婚披露宴で貸し切りにしてまして、入り口を入るとすぐに受付ができていました。みなさんそこで記帳し御祝儀袋を渡すわけです。そこでまたハナが騒ぐんですよ。なんですかっ、この御祝儀袋は。この西洋かぶれみたいなちゃらちゃらしたのは。御祝儀袋と言えば紅白に決まっているじゃないですかっ、とね。いいじゃないか、花柄や造花やハートはきれいだと僕は思うけれど）
（歯跡がきれいなんですか）
（いえ、ハート）
（心臓ですね）
（そう、らぶらぶの意味で）
（ｌｏｖｅ，ｌｏｖｅ、愛愛ですな。言葉を二つ重ねる日本語の癖を英語にも適用している。うむ、興味深いですな）
（今の御祝儀袋には造花までついているのですか。楽しそう）
（ユリさん、長生きできたでしょうね。何でも楽しめる。でも、ハナはね、百まで生きられた方がそんなことおっしゃるから世の中ど

んどんいいかげんになるんですよっ。いや、僕が柔軟だから長生きできたとも思うんだけど、と心の中で思うだけにとどめました。折角披露宴会場まで辿りついたのにハナのご機嫌を更に悪化させるのはまずかったですからね、僕がもっと疲れてしまう。あら、あの方、どこかでお見かけしたような、ほら、千代子さんと話してらっしゃる方。あぁ、瑞穂のいとこだよ。千代子さんの姪御。まぁ、あんなに老けちゃって。当たり前だよ、瑞穂だって半世紀生以上生きているんだから。そうですわね、でも瑞穂は墓参りに来てくれるから見慣れてますもの。それにしてもなんでフランス料理なんですか。どこで式をなさるんですか。いや、式はしないみたいだよ。ほら、ここに書いてある。テーブルの上に置かれた披露宴の式次第と席を印刷してあるピンクの紙、あっ、桃色の紙を指しました。まぁ、私が嫁ぎましたのはお寺でしたのに、仏式のお式をなさらないのですかっ。いいじゃないか、フランス料理と仏式、どちらも仏の字で始まることだし。あなた、そんないいかげんなっ。いいじゃないか、良いかげん。あなたっ、お酒も召されてらっしゃらないのにどうしてもうっ。ハナ、人生、いや、こちらの世界でも楽しまなくちゃ。ぶつぶつ文句を言っていても楽しくなかろう。どうせ私はぶつぶつ文句ばっかり申してますわよ。いや、まぁ。ここでハナの機嫌をそこねてしまうと僕も楽しめなくなりますしね。ほら、あそこにかけてらっしゃるのが茜さんのご両親、その横が茜さんの弟だね、それと、茜さんの祖父母。ほうっ、秀二郎の方はご両親いらっしゃってないね。もうこちらの世界の住人なんだろうか。まだこちらでお目にかかってないがね。瑞穂の方は両親健在なのに。この座席表で誰がだれだかよく分かる。ほうほう、あそこにいるのが瑞樹の学友かな。うんうん、皆独身ならば、さっきの茜さんの、ほら、ここまで乗せてもらった看護学科仲間が狙っているお相手ってことかな。あの瑞穂ぐらいの女性は、ふむふむ、瑞樹と茜さんの高校一年生の時の担任か。仲人かな。あなたっ、仲人は普通ご夫婦でしょう。あの方お一人ですわ。ふむ、仲人も無しで挙式、いや披露宴ということなの

かな。司会はおっと、まるで冗談みたいだよ、ほら、ハナ、ここを見てごらん、司会は高校の同級生でもう結婚していて、歯科医だそうだ。ははは。その歯科医の結婚式ではきっと瑞樹が司会したんだろうな。歯科医ばっかり集まった席で司会だけは歯科医じゃなかったなんて、話しにならない、おっ、歯無しじゃ歯科医のお世話になる。あなたっ、何をばかなことばかりおっしゃってるのですかっ。まったくもうっ。ハナ、こうやって人生を楽しんだから僕は長生きできたんだよ。私だってあの時、死にたくて死んだんじゃございませんっ。わかったわかった。たしかに。じゃぁハナ、こちらの世界でも楽しまなくちゃっ。いえ、もう結婚ですっ。ここまで来るだけで充分疲れました。ハナ、つかれたのは、ハナじゃなくて僕たちが乗った人が憑かれたんだよ。あなたっ）

（うふふ、ご隠居さまって面白い方なんですね。お一人で漫才なさってらっしゃる）

（ユリさん、こうやって楽しめば、人生もこちらの世もより楽しくなりますよ。笑うと癌も治るそうですし）

（まぁ、癌がですか。不治の病ですわね）

（笑うと、雁が富士の山に行くのでしょうか）

（はっ・・・あぁ、不治の病というのは、治らない病気のことですよ、富士山じゃなくて。癌は雁じゃなくて、ロバートさん、フランス語ではなんでしょう）

（カテリーヌさん、ｃａｎｃｅｒです、英語と同じ）

（ロバートさん、ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ。それからマサさま、現在では癌も不治の病ではなくなってきていますよ）

（まぁ、左様でございますの。いい世の中になりましたわね）

（まぁ、ある程度は。ただ、保険が効かない治療法が多くてね。金持ちじゃないと治せない）

（まぁ、やはりまだ貧乏人には厳しい世の中なのですわね）

（そうですねぇ、皆、結局は自分が損しない、自分が儲けることばかり考えてしまうのでしょうかね。残念ですね。国会議員も官僚も、

皆。医者も、明治になってからは社会的地位をどんどん上昇させて、今や医者か弁護士が金持ちの代名詞ですからね）

（こちらで長生きしてしまうのも残念な部分もありますのっ。世の中どんどん良くなっていくと思いきや、大震災、世界大戦、え～と、新型爆弾でしたかのっ、嫌なことばかり知らされて。しかも相も変わらず、他人より自分が儲けることばかり考えている、それも官僚や議員もですかのっ。医者や弁護士もですかのっ。国家を論じ、国家を如何様に運営するかを決めたり、人の病を治したり、人を代弁する立場にあろうものがのっ。学問とはその為にするものだと思っておったがのっ）

（ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅは消えたのですかな）

（其の様でございますわね）

（昇れ帯樹ってなんでしょう）

（高貴な立場にあるものはそれ相応の義務が生じている、つまり社会に貢献すべきだという発想でしょ。例えば、裕福ならば慈善事業に精を出しなさいというような。僕はそう教わりました。倫理だったか世界史だったかの先生がおっしゃってました。君たちは将来帝大に入り、それぞれの道で帝国、帝国臣民に貢献していく立場になるであろう。役人になるか議員になるか、商人になるか。それぞれの道で、ノブレスオブリージュを忘れないように、とね）

（情けない世の中なのですわね）

（そうですね。実に情けない）

（泥棒を捕まえて見たら警官だったようなものだのっ）

（ははは、そりゃ哀しい。けれど、彦衛門さん、最近はそういうの多いですよ。まぁ、昔でもいたのでしょうけれど。僕、しょっちゅうあちらを旅してますからね。あちこちでテレビやネットのニュースを目にしてますとね、もう、ほんと情けない）

（ネットとは網、ニュースは時事報道ですよね。でも、網の時事報道とは、僕、わからないのですが）

第五話　セミテリオのご隠居　その十五　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は2月2日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十六

（我輩も理解できませぬが。網のニュースとは何ですかな）
（虎之介殿やロバート殿におわかりにならないこと、私もマサも、ユリさんにもわかりませんのっ。もしかしてカテリーヌさんは分かるのですかのっ）
（いえ、わたくしにもわかりませんわ）
（すみません。ついネットなどと申しまして。ｉｎｔｅｒｎｅｔ、インターネット、おっと、これも一昔より前にはなかったですね。え～と、どう説明いたしましょう。パソコン、先ほどご説明しました電脳機械というものが、今のあちらの世界では大層普及しておりまして、多くの事務所や家庭にパソコンが一台のみならず、それこそパーソナルと言うくらいですから一人一台持っていてもおかしく無い様な時代になっておりまして、そのパソコンを電話線につなぐ、いや、つながなくてもいい場合もあるが、いや、そこまで説明すると更にややこしくなるから）
（ご隠居さま、簡単な説明で構いませんわ。もう頭の中がごちゃごちゃになりそうなお話しみたいですもの）
（え～と、つまり、テレビとは違って、ネット、網ではなくてインターネットに繋がったパソコンでは見たい時に最新のニュース、報道を調べて見られるわけです。パソコンを使っている人に乗っていれば、そしてその人がパソコンでニュースを見れば、僕も一緒に最新のニュースを読めるわけです）
（便利な世の中になったものですな）
（隔世の感がありますのっ）
（だんなさ～、そりゃぁ隔世でございますわ。わたくしとて、こちらに世に来て早七十年）
（それで、そのぉ、人に乗って一緒にパソコンのニュース、つまり

ネットのニュースを見ていますとね、警官や先生の犯罪ってしょっちゅうあるんですよ。犯罪に手を染めないように教育する立場の先生と、犯罪者を捕まえる警察官が犯罪を犯すなんて、笑い話にしちゃいけない笑い話ですよね）

（情けない世の中になったものですのっ。哀しいですのっ。警察官や先生が犯罪者とは、消え入りたいですのっ）

（だんなさ～、消えないでくださいませ。だんなさ～のいらっしゃらない世はもうたくさんです、あちらの世だけで）

（嬉しいことを言ってくれるのっ）

（お熱いですわね。うらやましいです。ユリ、こういうご夫婦になりたかったですぅ）

（まぁ、ユリさん、熱さ寒さを感じられるのでしょうか）

（いいえ、どうして）

（今、お暑いとおっしゃったので）

（カテリーヌさま、お熱いのはユリじゃなくて、彦衛門さま、マサさまのことです）

（まぁ、彦衛門さま、マサさまは熱くなれるのですか、気の世界でも）

（いえ、あのぉ、カテリーヌさま、温度ではなくて、心が熱い、ですから、え～と、とっても親しいという意味で）

（それそれ、それですよ、現代用語でらぶらぶ）

（おっ、先ほどのｌｏｖｅ，ｌｏｖｅですなっ）

（情けない実態ですが、彦衛門さん、あまり悲観なさらないでくださいよ。実はね、警察官どころじゃないんです。先日見たニュースでは、検察官が検察庁の中で犯罪を犯したそうです）

（検察庁の中でですかっ。この前僕が行った日比谷の近くのですかっ）

（いえ、虎之介さん、東京じゃなくて、大阪らしいです）

（へぇ、警察官より上の立場の検事がねぇ）

（ほんと、ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅどころじゃないですな。

そんなひどいのはあちらの、この国だけなのですかな。いや、たぶん世界中なのですかな。嗚呼情けないことですな）

（それって、でも、僕は笑っちゃう訳ですよ。だって、検事が犯罪者なわけでしょ。ってことは、その検事を調べるのも検事なわけでしょ。その検事を裁くのが裁判官で、その検事の弁護をするのは、普段は検事と対立する弁護士なわけでしょ。そういう事態だと、たぶん傍聴人も報道関係者を除けば検事や弁護士でしょ。で、もし証人が出廷するとしても、それもたぶん同僚検事なわけでしょ。裁判所の中が司法試験合格者だらけになって、それぞれが論駁しようとして、ははは、笑えませんか。まぁ、裁判官が犯罪するよりはましなのかな）

（ユリには面白いです）

（落語の世界ですな）

（しかし情けないですのっ。誰を信じていいものやら）

（確かに、諧謔と申しましょうか。それにしても情けない世の中ですな）

（ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅの日本語はあるのかなぁ。日本には定着しない感覚なのかも。武士は食わねど爪楊枝、いや、高楊枝、ってのは一寸違いますしね。あれは痩せ我慢の見栄はりですね。しいて言えば慈善事業でしょうか）

（いや、ｎｏｂｌｅｓｓｅがｏｂｌｉｇｅをしなければ、ｎｏｂｌｅｓｓｅでない者からつきあげられる。貧乏人からの責めを防ぐ方策だったのでしょうが。散々騙されて来た者達が真実を知り始めて、社会は平等になっていくのかもしれませんしね。官僚や政治家や商人が甘い汁を吸うことが許されない、化けの皮が剥がされる、まぁ、いいことなのでしょう。おっと、僕は何の話をしておりましたか、あっ、曾孫の結婚披露宴、どこまで話ししましたっけ。え～と、会場には着いて、そうそう、メニューの辺りでしたっけ）

（目乳、最近耳にした単語ですのっ）

（わたくしの国の言葉ですわ。お食事の時のお料理の名前が書いて

あります）

（ユリの見たあれですね。ほら、彩香ちゃん家、お花屋さん家で見ました。お品書きでしょ）

（そのメニューにずらっとその日の料理の名前が並んでおりましてね、仏様とは関係無いけれど、同じ漢字の仏蘭西料理ですから、それもフルコース、え～と、これは英語で、つまり、一式全部というような意味なんですが、ともかくたくさん並んでいました。ハナは、こんなに、おいくらするんでしょう。これみなさんみんなお腹に入れるのでしょうか。まぁ、地元でこんなに立派な仏蘭西料理が召し上がれるようになったのですか。オリンピックの頃でしたら、まだ都内に数件しかございませんでした。愛宕が銀座になったみたいです。あら、次から次と、まぁ美味しそう、でも私は召し上がれないじゃないですか。あなたっ、こんな所に私を連れて来て罪作りですっ。口には入らず香りだけなんて、あんまりですっ）

（おうおう、そのハナさんの気持ち、私にはよく分かるのっ。辛いもんだ。しかし、鼻と目で楽しめるだけ気晴らしにはなるだろうのっ）

（ハナは気晴らしというよりも拷問みたいに感じたようでした。どうも、ハナは何事でも楽しむより苦しむ方が好きなようで。僕は思っていたんですよ。もしハナ生存の頃にこんな近くにこんないいお店があったら、さぞかしハナはでかくなったろう、なんてね。戦中戦後の飢餓時代を過ごした者は、なんでも蓄える習性がありますからね。たらふく食べて、太って早死に。幸い僕は、いや、僕もたらふく喰う方なんですが、煙草吸いますから食物が胃腸を早く通過するのであまり吸収しませんでした。そうそう、だから喫煙者が減ってデブが増えるんだな、デブは公害。電車の席は広く取るし、電車や車が走るのに負担になるし、夏は側に行けば熱いし。デブも減らせばいいんだな。いや、あれも最近の健診では胴囲を測るなんて変なことやっている。どうも厚労省は変なことばかりする、いや厚生省だった昔からだな、そもそも天皇の立派な兵に育つよう赤子を健

康優良児として表彰しておったし）
（またご隠居さまのぶつぶつ、ですか、でぶでぶ、ってぶつぶつと同じことなのかしら）
（いや、失敬、どうもハナの話をしておりますと、ハナに似てきました）
（それで、どのようなお食事だったのでしょう。あら、だんなさ～、わたくしが伺ったらお気の毒かしら）
（いいや、目と鼻で楽しめなかったから、せめて耳で楽しもう）
（え～と、もう五年も前のことですから、全部は覚えておりませんが、まずワインは全部、赤、白、ロゼ）
（ワインは葡萄酒のことですな）
（Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ，　Ｍｒ．　Ｒｏｂｅｒｔ）
（赤い葡萄酒はわたくしも時々いただきました。美味でしたわ。血の巡りに良いとか言われて）
（マサっ、私の死後、異国の酒を飲んでおったのかのっ）
（あらぁ、だんなさ～、お酒より甘くて美味しいんですよ。だんなさ～と時折頂いておりましたお酒はツンと来ましたでしょ。お酒に比べたら、赤い葡萄酒はお菓子みたいな。それに。大正や昭和の御代にはもう、日本でできた赤い葡萄酒がめしあがれましたのよ）
（長生きしたかったのっ。残念無念）
（ワインって、耶蘇教の教会で飲まれるものでしたわね、カテリーヌさま）
（そうそう、幼稚園の教会でこういうお話いたしましたわね。耶蘇教の教会では人間の血を飲んでいるということにされてしまっていたのは、葡萄酒だってこと）
（おばあちゃん、それって本当に葡萄酒だったのでしょうか。僕、肺病に効くかもしれないって言われて、養命酒は口にしてましたが）
（いえ、葡萄酒でした。養命酒も頂いたことございますよ。でも、あれは一寸薬臭いでしょ）
（養命酒、我輩も耳にしたことございますな。あれは、養老の滝の

水で作られたのですかな）

（養命酒は信州が発祥だったと思いますよ。養老の滝は美濃の国ですか）

（そうそう、養命酒は長野、養老の滝は岐阜ですね。どちらも逸話がありそうですね）

（お目出度い席なので赤白、紅白、それにお祝いで桃色なのかしら）

（いえいえユリさん、赤は肉に、白は魚に合うのですな）

（あら、そうなのですか。紅白に桃色って結婚式にお似合いですのに。婚礼の引き出物に紅白のお砂糖、それと生の鯛をお渡ししておりましたが、ご隠居さまの時には如何でした）

（そうそう、定番でしたわね、お砂糖と目出鯛。曾孫様のご結婚の引き出物にもございましたでしょ）

（マサさん、ユリさん、今はね、砂糖はさほど高価でもなく、鯛は料理できない人が増えましてね。魚嫌いも増えてますし。息子の瑞鏡の頃にはそれでも焼いた鯛を出しましたね。その後しばらく、結婚式に出ると、鯛を象った紅白の砂糖ってのがありました。一挙両得というのでしょう。孫の瑞穂の時に、それがいいんじゃないかと僕が言いましたら、お爺ちゃん、あんなのはみっともないわ。重いしかさばるし、今はもう流行らないのと言われたのを思い出しましたよ。最近の引き出物で食品は減りましたね。せいぜいカットされたウエディングケーキぐらい）

（切られた結婚焼き洋菓子、ですね）

（ケーキの高さはどんどん高くなりまして。勿論、僕とハナの結婚式は仏前でしたし、仕出しの箱膳で、ケーキなどありませんでした。息子の瑞鏡の時には、学生会館で、それでも三段のウエディングケーキ、孫の瑞穂の時には結婚式場で六段か七段だったか、上に新郎新婦の人形が飾ってありました。それにナイフを入れて切るわけです）

（まぁ、そんな高い大きなケーキをみなさまに切り分けるのですか。たいへんですわね）

（マサさん、切るのはほんの少しだけ。儀式みたいなものですよ。たぶん、そのほんの少し切ったケーキは同じ式場の次の結婚式でまた使われるらしくて。みなさまにお配りされるのは別にきれいに切り分けられたものだったと思いますよ）

（そのぉ、結婚式場ってのは何かのっ、神社やお寺なのですかのっ）

（ああ、なるほど。昔はなかったですね。今は、結婚式場と葬儀場とあって）

（それも、お寺や神社がなさるのでしょう）

（いえいえ、企業、つまり会社になってますね。結婚式も昔は家でしていたけれど、家じゃ狭い、葬式も家じゃせまい。参列者が入り切らない、家の中を片付けねばならない。料理も、昔なら結婚の場合も葬式の場合も近所が手伝ってってのが普通でしたが、今はね、マンションだったりすると近所付き合いもないですし）

（万所ってなんだのっ）

（ｍａｎｓｉｏｎ、大邸宅ですな。はは、自慢じゃないですが、我輩が来日前に住んでいたような、大きな館ですな。亜米利加の南部諸州には多かったですな）

（おっと、そうですね、ロバートさん、英語のマンションは大邸宅。日本語では違うんです。え～と、アパートが木造なら、それを鉄筋コンクリートにして、もっと高層にしたのがマンション、いや、しかし鉄筋コンクリートのアパートもあるし、う～ん、どう説明したらよいか。いずれにせよ、大邸宅じゃなくて、広めのアパートのような）

（ユリ、そのあぱぁとってのも分かりません。もしかして、木賃宿のことですか）

（う～ん、構造は似ていて、でも宿というよりはある程度長い時間住むのですが）

（あっ、下宿のような。賄いはついていないのかしら）

（僕分かりました。大震災の後にできた同潤会のアパートメントハウスですね）

（おうっ、ａｐａｒｔｍｅｎｔ　ｈｏｕｓｅを短くしてアパートですな、なるほど）
（同潤会のはたしかに鉄筋コンクリートでしたね。あれはアパートと言っても、昨今の日本語ですとどちらかというとマンションに分類されるような。要するにアパートというのはマンションより狭くて安いのでしょうか）
（あっ、もしかして、亀歩き青年の住んでいたのが、アパートかしら。ほら、皆様覚えてらっしゃるでしょ。あの時ご一緒したのはどなたでしたっけ）
（あぁ、ユリちゃん、あれね。なるほど）
（同潤会のアパートは、お若い方には最先端の近代生活の場と思われておりましたわね。お台所が便利だと伺ったことございますわ。わたくしは、人間が作った石の壁に囲まれて暮らすのが良いなんてとても驚きでした）
（地震でも壊れないように作られて。虎ノ門、小石川、日暮里、江戸川、青山、本所、あちこちにありました。でも、もしかして戦争で壊れましたか）
（爆撃でも壊されたのかもしれません。僕、その辺り詳しくなくて、ただ、再開発でどんどん取り壊されていましたね。今でも残っているのでしょうか）
（僕の頃には勤め人になって結婚して親から離れて官舎や同潤会のに住むというのが理想の形の一つでしたね）

第五話　セミテリオのご隠居　その十六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は2月9日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十七

（虎さん、そういう時代ありましたね。勤め人が一種のステータス、ええと、社会的地位かな、になったような。今や勤め人をサラリーマンと呼んで、サラリーマンは酷電に乗せられて兎小屋から運ばれ税金を払わされる奴隷とも言われて、おっと、この表現ももう一昔どころか二昔三昔ですね）

（あのぉ、ご隠居さま、わたくし、分からない言葉ばかりでしたの。一番最後の、ひと、ふた、みはひぃふぅみぃ、一二三のことでしょうか。昔って数えられるものなのかしら）

（カテリーヌさん、一昔は普通十年ですから、二昔で二十年、三昔で三十年ぐらいのことです、つまり、三十年ぐらい前には、サラリーマンは兎小屋から酷電に乗って運ばれる奴隷、と言われていたわけです）

（勤め人をサラリーマンと呼ぶのですかな。面白い表現ですな。サラリーは給与。これは日本が米で給与されていたから石高で表されるのと同様、報酬が塩で払われていた頃のラテン語の塩が語源なので理解できますが、マンは男性の単数ですな。複数のメンにはならなかったのですな。日本語化された英語にはなかなか奥深いものもあるのですな）

（ほう、昔は塩で払われていたのかのっ。ロバート殿はいかがでしたかのっ）

（彦衛門殿、貴殿の頃には米でしたかな。我輩の場合はすでに紙幣で払われておりましたな）

（うむ。なるほど。米換算ではありましたが、米で払われたことはなかったですのっ。それも親っさんの頃ですのっ。私が巡査の仕事を始めた頃は、もう俸給は紙幣でしたのっ）

（あのぉ、勤め人が奴隷並みになったのでしょうか、しかも兎小屋

に住んでいるのでしょうか。わたくしの頃、戦前は、勤め人はある種の地位がございませんでしたこと。兎小屋では、風が入って寒いでしょうに。天井も低くて家の中で立てませんわね）

（はは、マサさん、いくらなんでも、壁はありますし、天井もそんなに低くはないですよ。喩えです。兎小屋のように狭い家という意味で。それと、たしかに昔は勤め人は定年まで働ける、収入が安定しているいい職業的立場でしたね。たぶん、昭和の半ば、え～と、瑞穂が医者になった頃から変わりましたから、昭和半ばというよりも昭和後半ぐらいからでしょうか。勤め人の地位が落ちましたね。昔は企業が、え～と、会社ですが、大きいのしかなかったでしょ。銀行や輸出入の商社や、保険会社ぐらいでしたかね。建設は何々組とか、あとは店、商売でこじんまり、いや、こじんまりとしてなくてデパートでも、デパートであって、別に会社というのとは違う印象でしたよね。今は百姓なんて言い方はしませんし漁師や樵という言葉もあまり使われなくて、農業も水産業も林業も場合によっては会社組織になっていますよ。さもないとあんもないと、他の企業や他国に負けちゃいますからね。会社もすぐにつぶれる、会社も正社員じゃなくて、契約社員だの派遣社員だの、米国流になって、簡単に首切られる時代です）

（首、切るんですかのっ、それでは江戸時代に逆戻り）

（彦衛門さん、斬首ではなくて、馘首、会社を追い出すという意味ですよ）

（ちと安心したのっ）

（米国流とは、これいかに）

（ロバートさん、貴男のお国では、一生同じ所で働くという考え方はなかったでしょう）

（そうですね、確かに）

（ですから、チャプリンの映画にも出て来る様な、会社や工場で忙しなく働いている人たちは、いつそこをやめさせられるか分からない不安定な下層民のような扱いで描かれていますね）

（チャプリンの映画とは、我輩は存ぜぬが）
（おっと、申し訳ございません。アメリカのコメディ映画で有名な俳優なんですよ）
（コメディ、すなはち、喜劇ですな）
（ロバートさん、ありがとうございます）
（いえ、ｎｏｔ　ａｔ　ａｌｌ、どういたしまして）
（僕、名前だけ知ってます。チャーリーチャップリンですよね。日本にいらしたことがあるそうです。僕が幼い頃ですが）
（そうそう、戦前にも来日してましたね。モダンタイムスという映画は、戦前公開だったと思いますが、虎さんもご覧になってないんですね）
（ええ、見てません。あのぉ、それよりも、先ほど、江戸時代の斬首の話しの前にご隠居さんがおっしゃった、さもないとあんもないと、というのは今のあちらの世界の流行言葉でしょうか）
（おっと虎さんにつつかれました。いえ、別に流行語ではなくて、僕がごろあわせに時々使うんですよ。さもないとあんもないとって、何だか面白くありませんか）
（たしかに、さもないとアンモナイトになってしまったら大変ですね）
（アンモナイトって何ですか。ユリにはとても素敵な言葉の響きです）
（ユリちゃん、アラビアンナイトと混同していないかな。異国の王様に毎晩お話をしていた姫の話し）
（そうそう、それですっ。面白いお話しがあったような、婆ややお母様が語ってくださる日本の昔話とはとっても違っていて、お友達のお家でそこのお兄様が読んでくださったんだと思います。わくわくして聞いていました）
（それだったら、アラビアンナイトだよ。千夜一夜物語と言われていた）
（アンモニアでしたらわたくしも存じておりますがしみぬきに使い

ましたわ）
（おばあちゃん、それもはずれ。アンモニアは臭いでしょ。アンモナイトは大昔の貝なんだ）
（虎さん、幅広いですね。アンモニアにアンモナイトにアラビアンナイトですか。化学に地学に文学ですね。十七年間の人生でいろいろご存知ですね）
（いやぁ、十七年分しかないので、それにそこで止まったので、十七年分の知識が貯まったままなんです）
（なぁるほど。長年生きていると、長年の知識が貯まってはいても、なかなか取り出せないから思い出せないのですね。うん、こりゃ面白い。そうすると、老人がすぐには思い出せないことがあるというのは、思い出せない思い出ばかり貯まる状態なんですね。うん、こうやって若い者に刺激を受けると、記憶の引き出しがあちこち開けられて、心地よいものですね。それで、え～と、アンモナイトの化石、つまり昔のアンモナイトが石の中に入って石みたいになっているものですが、日本橋の三越の階段で見られるのですよ。もしかしたら、マサさんはご存知でしょうか）
（日本橋の三越には時折参りましたが、まぁ、あそこの階段でそういうものが見られたのですか。存じませんでした。残念ですわ）
（じゃあ、その内、皆の衆で見学に参りましょう。あはは、今の銀座をご覧になるのも面白いですよ）
（はい、是非、ご案内ください。ついでにユリの住んでいた京橋の辺りまでお願いします）
（銀座ですか。わたくしも久しぶりに見せていただきたいですわ。煉瓦街は、震災と大戦できっともう残っていないのでしょうね）
（ははは、当然です。今は、高い、高～いビル、ｂｕｉｌｄｉｎｇ、ビルディング、ビルヂング、摩天楼ばかりです。おっと、カテリーヌさんは驚かれるかもしれませんよ。最近の銀座にはカテリーヌさんのお国の物がたくさんあります）
（まぁ、夫がしておりました商売をもっと手広くなさる方がいらっ

しゃるのかしら）
（店ごとフランスの物ばかりなんてのがいくつも並んでいて）
（うわぁ、ぜひお連れくださいませ。フランス語を耳にできるかもしれませんわ）
（いや、店員、昔の言葉でいうと丁稚や番頭さん、いや、今はほとんど女性が店員に多いのですが、日本人ですよ。使っている言葉はフランス語より中国語が多いらしいです）
（えっ、どうしてですか。たしかに仏蘭西語と支那語は響きが似ているとは感じたことございますけれど、でも、全く異なる言葉ですのに）
（いやぁ、中国人が多数買いに来るので）
（世の中変わったものですな。仏蘭西の物を日本で売って、それを中国人が買いに来るとは）
（ご隠居さま、先ほどの、さもないと、なんでしたっけ。アンモニアではなくて）
（アンモナイト、さもないとあんもないとですね）
（えぇ、そのさもないとあんもないとからお話しが逸れてしまって、わたくし、まだよく分からないのですが、どうして勤め人の立場が奴隷になったのでしょう）
（いえ、奴隷になったというわけではなくて。う～ん、昔は大きな会社しかなかったですよね。ですから、そういう大きな会社で働いている人は少なかった。けれど、先ほど申しましたように、百姓漁師樵も会社組織化してきておりますから、ましてや何々組やかにかに店はみんな何々企業、何々社となっているんですよ。そうすると、そういう所で働く人も皆社員、給与を貰うサラリーマン。小僧で入って丁稚になって番頭になって大番頭になってというのでしたら、最初は何も知らなくて我慢する事ばかりでも、長く務めていれば知識も身に付く、地位も俸給も上がり、でしたが、会社組織になってしまうと、企業を運営経営し給与を従業員に払う立場にはそう簡単にはなれない。勤め人は定年まで俸給を貰うだけなわけでしょ。世

の中に仕事が少なくて、会社が少なくてという時代でしたら、勤め人というのは、過ちおかさなけりゃ決まった給与が定年まで貰える、しかも大きい会社で安定している、あの頃安定した職業でしたが、今じゃ、どこもかしこも会社みたいなものですから、給与は貰える。士農工商の士はいなくなって、農工商はみんな会社みたいになって、士農工商の身分の差もだいぶ意識されなくなりましたしね。まだ百姓を馬鹿にするとか、ハナみたいに戦後の買い出しで百姓に恨みを持っている世代もいましたが、ごく少数。今じゃ、食料危機になっても農家ならなんとか食べて行けるから百姓になりたいって若者も出て来ましたし。工も工業で大きくなれますしね、商も商いを大きく出来ますし、固定した身分で差別されるってこともなくなりましたからね。農工商で働いていても勤め人、サラリーマンなわけですよ。社長や経営者でなけりゃ。ただ、会社の規模の大小や内容によって給与はかなり異なりますから、勤め人だからといって決してうらやむような職業とは言い兼ねる。皆が平等になって、学歴も関係無くて）

（まぁ、学歴が関係無いのですかっ）

（そうですねぇ、ここ二十年ぐらいはそうなりましたね。中卒を金の卵と呼ぶ時代もはるか昔）

（そうそう、中学校を出ていれば、ましな仕事に就けましたのっ。私は藩校でも、退職の頃には中学校卒の巡査、帝大卒の署長がいましたのっ）

（あっ、それとは違って、え～と、皆の衆の時代の中学校はある程度生活力のあるご家庭からしか通えませんでしたね。大半が尋常小学校で終わり、一部が高等小学校まで。恵まれていて、学問も出来れば中学校、高等学校、帝大でしたね。戦後は、中学校三年間も義務教育になりまして、その頃は、中学校を終えて東京に仕事をしにくる地方の子が金の卵と呼ばれていたのです。からだを使ってする仕事が馬鹿にされてた時代、けれど、工業の生産の場では人が欲しい、けれどそんなに給料は払えない。中卒というのが、安くてしか

も素直な人材というわけで。あの頃はどこまで教育を受けたかで給料格差も大きかったですしね。もう三十年ぐらい前からでしょうか。高卒が当たり前になってきた。第二次ベビーブーマーの頃からは大卒もありふれてきた。大学を卒業したからって、特に偉い訳でも何でもない。そりゃ、資格のいる医者や弁護士はともかくも、何も大学行かなくたって、できる仕事はある。大学出てトラックの運転手をするなんて、という発言も昔はありましたが、今はトラックの運転手になれるなら良い。仕事そのものが無くなって、失業者がわんさかいますからね。学歴が仕事探しに役立つこともあるけれど、ぐらいの意味ですかね。どの時代にどの場所で産まれて育つかによって、大事なものも違ってきますし、運もありますしね。世が世なら、僕は医者じゃなくて坊主でしたし、案外、弟が医者、薮でも筍でもなく、あるいは薮や筍医者をやっていたかもしれませんし）

（まぁ、それでは、勉強を一生懸命する意味がないのですかっ。わたくしは娘も孫もみな、女学校を卒業させましたのに）

（いや、みながある程度の学を身につけるのは正しいのじゃありませんか。何も、より良い仕事に就くために上の学校で学ぶわけでもないでしょう。まぁ、そう思われていた時代は長い、といっても百年やっと続いたぐらいですか。大学で学ぶのにかかる費用とそれから仕事に就いた場合の生涯賃金と、高卒で仕事に就いた場合と、殆ど差が無いそうですし。生きて行く為に仕事をする為に上級学校に行くという必要性は無くなったとも言えますね。それでも皆、保険のように学歴をほしがるから、今の日本には虎さんの頃の大学の数の数十倍の大学があるんですよ。都内だけでも今や百二十ぐらい）

第五話　セミテリオのご隠居　その十七（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は２月１６日の予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十八

（それじゃぁ、学校に行かなくても同じなのでしょうか。わたくしの頃には、学ぶことはとても大切でしたのに）

（学ぶことは、たぶん人間にとっては大事なことでしょう。学ぶ場は学校だけではない。いえ、学校の外の方が、学ぶことは多いのでしょう。学校の外で学べるように学校では基礎を学ぶと言う事が大切なんだと思いますよ。けれど学校に、上の学校に行って更に学ぶことが絶対的に必要なわけではないのかもしれません。最近は不登校と言って、学校に行かない子も増えてますしね）

（学校に行かない子は、いつの時代でもおったのっ。家の仕事を手伝わねばならぬ、下の子の子守りだの、学校に行かせる金がない、女に学問は不要ぬ、どうせ他家に嫁ぐ、手に職つければ充分、など、当たり前のことだったのっ。学校に行かせると生意気になって、親を馬鹿にするからなんてのもあったのっ。警察も一緒になって親を説得したものだのっ。罰金を取るなんてのもあったのっ）

（わたくしの国でもそうでした。学校に行かない、行けないこども達がたくさん。わたくしも学校には行ってませんのよ。家で、教わりました）

（カテリーヌさん、それは、貴女のお育ちになった家庭環境が素晴らしかったのですよ。我輩の頃の亜米利加も、そうでしたな。あの頃、移民や黒人などが増えて参りましてな、馬鹿だから貧しいのだから、馬鹿は学校に来ても勉強しないから来なくて構わないなどと思われてましたな。我輩がこちらの世に参る前の大戦の折に兵士の知能検査をした所、九歳程度がいくらでもいたそうで、もっとも、知能検査がどれほど正確だったかどうかは存じませぬが、十四歳程度ならば成人とされたようでしたな）

（マッカーサー元帥が日本人は十二歳と言ったのはそういうことだ

ったのかなぁ、いくらでもいる九歳と成人並十四歳の間という意味か、おっと、僕、またハナになっていました、皆の衆、独り言です）

（それでは、仏蘭西でも亜米利加でも日本でも、私たちの頃には、学ばせることでは、別に日本が特別に西洋社会から遅れていたわけでもないのですわね）

（そうみたいですね。僕も驚きました。僕の頃、西洋に追いつけ追い越せで、日本の社会構造はまだまだ西洋文明とは差があると思われていた部分もありましたが、あの頃、日本同様に西洋社会でも学校に通わない子は多かったということなんですね）

（え～と、皆の衆、僕の言った、学校に通わない不登校というのは、そういうのとは違いまして、こどもが学校生活に馴染めないから、学校に行けない、行かないというものでして）

（ほうっ、時代は変わるものですのっ）

（あのぉ、ユリには、ご隠居さまのお話の中で、分からない言葉が他にもあったのですが。べびぃなんとかって、なんでしょう）

（ｂａｂｙ　ｂｏｏｍｅｒですが、ロバートさん、どう訳しましょう）

（おっと、それ、英語なのですかな。赤ん坊、急に集まる、ですかな、よく分かりませんが、急に赤ん坊が増えることですかな）

（ほうっ、あの英語は新しい単語なのですな。戦後使われていたのですが）

（あっ、戦後に赤ん坊が増えることですな。先の大戦の戦後にも確かに、赤ん坊がたくさん生まれました。殺した後、殺された後には産みたくなるものなのですかな）

（ユリさん、たくさんこどもが産まれる。そのことです。産まれた人のことや、その時代のことをｂａｂｙ　ｂｏｏｍｅｒと言うんです。それで、第一次ベビーブーマーが昭和二十年代前半、その子達が結婚して子づくりした四半世紀後が第二次ベビーブーマーでした）

（ついでにもう一つ。トラックっておっしゃいましたが、トロッコとは別の物かしら）

（トロッコは、線路の上を走るものですのっ。横浜に走ってましたのっ）

（彦衛門さん、そうだったんですか。横浜にね。僕は知らないです）

（わたくし、聞いたことあるように思います。わたくしが日本に参りました頃にはもうなかったのですけれど、ここを走っていたんだと、夫が横浜で申しておりました）

（英吉利では、炭坑で線路上を走らすものをｔｒｕｃｋと呼んでいたと思いましたがな。それがトロッコですかな）

（ロバートさん、トラックはそのｔｒｕｃｋですよ）

（あっ、僕わかりました。ご隠居さんがおっしゃる今のトラックは米語で、英語ではｌｏｒｒｙのことですよ）

（あら、ｌｏｒｒｙ、わかりますわ）

（つまり、トロッコはトラックでローリーなのですね）

（ほう、トロッコとトラックは別のもので、でも、英語、いや米語だと同じ言葉なのですね。面白いです。あっ、ユリさん、つまり、物を運ぶ車がトラックで、それをイギリスではローリーと呼び、イギリスではレール上を走る運搬車がトロッコなわけです）

（なんだかややこしいです）

（ご隠居さん、話しも入り組んで参りましたわ。わたくし、兎小屋に住んでこくでんで運ばれる奴隷というお話しもまだ理解できておりませんの）

（マサさん、辛抱強い。随分前の話しのようです）

（そりゃぁ、こちらの世は永遠ですから、辛抱強くなりますわ。好奇心はこちらの世でながらえる為に不可欠ですし。わからないままですと気がなえますし）

（兎小屋というのは、それほどに狭い家に住んでいるという表現で、酷電というのは、例の今はＪＲと呼ぶ電車、昔の省電が戦後国の電鉄会社だから国電と言われていたのにひっかけて、国のこくではなく、残酷のこくを使うんです。つまり、日本のサラリーマン、勤め人は、小さな家に住んで、少し前に話した例のラッシュ時に押し込

まれてぎゅう詰めの、残酷な電車に乗せられて運ばれる奴隷だと、どこかの外国人が発言したのに加えて日本人が自虐的に言ったのでしょう）

（兎小屋とはそういう意味だったのかのっ。私は、この前、ユリさんがご覧になってきた小学校の庭の鶏小屋の様なものかと思っておったのっ。つまり、人間が兎小屋の様な家に住んでいるのですかのっ）

（彦衛門さん、比喩です。先ほども申したように、ほんとに兎小屋に住んでいるわけでも、兎や鶏と一緒に住んでいる訳でもありませんよ。たぶん、欧米よりも住宅が狭いからそう言ったのでしょう）

（なんだのっ。昔は、土間で兎や鶏を飼うのはよくあったことだったがのっ。あれなら、兎も鶏も広い家だったのっ）

（ところで、どこまでお話ししましたっけ。結婚式場について、え～と、食事のことでしたっけ。もう五年も経ちましたからね、あんまり覚えていないのですが、彦衛門さんの為に思い出しましょう。え～と、ワイン、葡萄酒ですね、これが、先ほど申しましたように赤白ロゼ、それと、オードブルがフォワグラ。スープが、そうそう伊勢海老ので、あと、魚が何かと肉が何かと、サラダとチーズと、デザートがアイスとフルーツえ～と果物のことです、最後がコーヒー紅茶抹茶だったかな。素晴らしいと思ったのは、サラダです。何しろ花のサラダなわけです。桜や菫やひな菊など赤白黄紫ピンク、あっ、桃色ですね、彩りが美しくてね、まさに結婚披露宴向きでしたね）

（ユリ、わからない言葉だらけでした）

（我輩はフォワグラが懐かしい）

（わたくしもですわ。オードブルという言葉も）

（私には伊勢海老と魚と肉しか分からなかったの）

（わたくしは抹茶が美味しそうに響きましたわ。アイスというのも）

（僕には、何だか目の前で、色々な色と香が踊っているような印象でした。いいですねぇ、こんど結婚披露宴に行ってみたいです。で

も難しいですね、結婚式や披露宴に向かう方々、普通は、途中でセミテリオには寄ってくれそうにないですね）

（そうですわ。墓地は結婚式とは正反対ですもの）

（ロバート殿が懐かしいとおっしゃったほわなんとかはなんですかのっ）

（フォワグラは、鵞鳥にうんと食べさせて、絞めたあとのその肝臓を食べるんですよ。美味なんですな）

（あれは、脂肪肝ですからね。確かに美味しいのですが、残酷ですね。狭い檻に入れたり地中に埋めたりして動けないようにして、餌をたらふく無理矢理食べさせるんですから）

（鵞鳥さんが可哀想）

（ユリさん、鶏を絞めたことありますか）

（マサさま、無いです。できないです。ユリ、おさかなさんも駄目なんです。あの大きい目で見つめられると）

（まぁ、ユリさん好き嫌い激しい方でしたか。でもふくよかでいらっしゃる）

（あっ、ユリ、甘いものが好きなんです。おまんじゅうやお汁粉や。でも、生きている姿のままのは駄目です。お肉屋さんの裏に行くと、豚や鶏の頭が置いてあったりして、もう駄目です。牛肉は幸い、牛さんの頭まではお肉屋さんにもなかったので）

（ユリさん、鯨は大丈夫でしょう。鯨の生きている姿はそんじょそこらじゃ見られないですからね）

（はい、大丈夫です）

（でも、今は鯨こそ日本では食べられなくなっているんですよ）

（鯨さん、減っちゃったんですか。それとも、鯨を取れる人が減っちゃったんですか）

（減ったかららしいのですが、減ってはいないという人もいて、何よりも、鯨を殺して食べるなど残酷だと、欧米社会が騒ぎましてね。鯨しか食べないわけじゃないんだから、日本人は鯨を食べなくても構わないだろうとされてしまいました）

（ほうっ、それは面白い。我が国は鯨油の為に鯨を追って、鯨をたくさん捕まえてましたから日本に開国を迫ったのも、捕鯨船の補給基地としてというのもあった筈だったのですがな。鯨肉は食べていなかったと思いますがな）

（それこそ勿体ない。生き物を殺して油だけで終わりですかのっ）

（日本では鯨はとことん使いましたわ。肉は食べ、髭は撥條に、皮からも油を取り、そうそう、鯨尺は、物差しの高級品でした。残りは肥料にしておりました。殺生するのですから、とことん使わなければ失われた生命が勿体のうございます）

（ユリ、不思議なんですけれど、鯨を殺すのは残酷で、鶏や豚や牛を殺すのは残酷ではないのですか）

（僕もそう思うわけです。僕はユリさんとは違って、残酷だとは思っても鶏肉も豚肉も牛肉も魚も食べましたが、生き物を殺して食べるならどれも残酷じゃないか。何故鯨だけ騒ぐのかとね。彼等の言い分には、鯨は賢いからだというのもあって。それじゃぁ、鶏や豚や牛や魚は賢く無いのか。どんな動物だって賢いと思うわけですよ。一方的な人間の物差しで、どの動物が賢いか賢く無いかなんて、決められないと思うのですが。煙草と同じでね、世論が熱を帯びて、少数派が被害を受ける。世論作った方が勝ちなだけで、あとは理屈をくっつける。ところで、ケーキ、瑞鏡や瑞穂の時の様に高いのではなくて、茜さんの手作りで、持ち込みでした。ケーキに入刀して、本当に瑞樹と二人で人数分に切り分けて、デザートの時、え～と、食後の甘いもののことですが、その時に一緒に出てきました。宴も終わり、若い連中はカラオケに行った様です。喫煙所で瑞穂と僕はほっと一息。幸いにも瑞穂　が秀二郎さんに、このままお墓にご報告に参りましょうと言ったので、瑞穂に乗って、四人でここに戻れました。折角ここまで来たのですから、医院に参りましょうなんてハナが申すと思いきや、ハナのぶつぶつももう途絶えがちで、二人ともぐったりしておりましたから、助かりました）

（その空桶というのが、先日来、ここの私たちの間で何だろうとな

っているのですのっ。ご隠居さん、ぜひ、その空桶が何なのかご説明頂けますかのっ）

（カラオケですか、あはは。で、皆の衆は何と思われたのでしょうか）

（歌に関係あるらしいとは推測できましたの。で、だんなさ～は、空の風呂桶で歌うとさぞかし響いて心地よいのではと）

（我輩とカテリーヌさんは、何語だろう。またしても英語か仏蘭西語もしや独逸語、露西亜語を短くしたものではないだろうか、と）

（あはは、日本語ですよ。いや、オケの方はオーケストラですから日本語じゃないのですが。空っぽのオーケストラ）

（おっ、私の空の方はあっていたのっ）

（空っぽのオーケストラって、舞台の上に人がいなくて楽器だけが置いてあることかしら）

（カテリーヌさん、違います）

（え～と、オーケストラの様に音楽の部分は流れていて、歌の部分が入っていない、つまり録音されていなくて、その歌詞が画面に出てくるので、音楽に合わせて歌うことです。カラオケに行って、音楽に合わせて好きな歌を歌うということなんです。歌の数はかなり入っていて、え～と、どれくらいだろう。一冊に数百頁、各頁に数十曲、数冊はあるから、万単位ですね。それが機械に入っていて、曲を選んで合わせて歌うわけです）

（なんと。機械の中にそんなにたくさん曲が入っているのかのっ。では、探している曲が出て来るまでさぞ待たされるのっ）

（いや、あっと言う間です）

（レコォドを入れ替えるだけでもたいへんでしょうに）

（マサさん、レコードじゃないんですよ）

（まぁ、そうなんですか。朝子が小さい折、ラヂオから歌が流れる度に、ラヂオの中で小人さん達が楽器を弾いて歌っているんだと申しまして、そうじゃないのよ、ラヂオ局でレコォドをかけてるのよと説明したことございますが。レコォドでもないのですか）

（一度見て見たいものだのっ。私が空の桶と思っておったものをのっ）
（皆の衆、その内どなたかに乗って、歌いに行きましょう）
（僕、どちらかというと音痴ですから）
（虎さん、ご心配無用）
（そうですよぉ。どうせ歌ったって、ユリ達にしか聞こえませんよ）
（それでも、やっぱり恥ずかしい）
（あっ、虎ちゃんの弱み、分かりましたっ）
（ユリちゃん、案外意地悪なんだ）
（おほほ）
（おばあちゃんまで）
（いつもわたくしをおばあちゃん呼ばわりするからですよ、おほほ）

第五話　セミテリオのご隠居　その十八（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回、第五話　セミテリオのご隠居　その十九最終回は2月16日アップの予定です。

第五話　セミテリオのご隠居　その十九　最終回

「私のご先祖さま～、どちらにいらっしゃるんですか～。返事して下さ～い。お墓の場所、教えて下さ～い」
（あらまぁ、お墓の場所が分からない方がまたいらっしゃったみたいですわ）
（お茶屋さんで尋ねればよいものをのっ）
（お茶屋さじゃなくて、今は管理事務所ですよ。あそこに行けば、パソコンで一発検索なんですがね）
（その一発検索というのはなんですかのっ）
（あっ、それこそカラオケの、何万もある曲の中から探している歌いたい曲がすぐ出るのと一緒で。このセミテリオにあるお墓の家の名前や埋葬者の名前が分かれば、地図で教えてくれるんですよ）
（あぁ、あの地図ね。ここの住所は分かり辛いですよ。何号何番どうのこうのって）
（だんなさ～が入られた頃はまだ空いておりましたが、今はびっしりですものね。久しぶりにいらしたら一寸分からないですわね）
（ユリ、寂しいです。お墓の場所も忘れられちゃうなんて）
（ユリさん、まだよろしいのよ。わたくしの所には、わたくしの係累はどなたも訪ねて参りませんもの）
（我輩とて同様）
「この辺みたいよ。ねぇ、ママそっちの列探してよ。私こっち見るから」
「ねぇねぇ、これじゃないかなぁ。うん、これだぁ、こっちこっち」
「あっ、本当だ。アル、ここの場所覚えておいてね。うん、確かにお墓の住所もあっているし、名前も、裏見てみて」
「うん、ここだって」
（えっ、もしや、えっ、どなた）

「だって書いてある。彦衛門、マサって。他にも名前たくさん。なんて読むのこれ、温暖の温」
（えっ、ここのことかしら。わたくし達のことかしら。それぬくいと読みますのよ。長男の名前ですわ）
（まぁ大きな犬ですこと）
「アル、ここ覚えておいてね。また迷っちゃうかもしれないから」
「ワフッ」
（まぁ、犬が返事しましたわ。賢い）
（だんなさ～、どうしましょう。どなたでしょう）
（マサ、落ち着きなさい。どうしようもないのだからのっ。どなたかは、一寸待たれい）
（だんなさ～、このママと呼ばれた方、見覚えございます）
（ふむ、たしかに）
「そういえば、ママ、ここやっぱり来たことあるわ。小学生の頃かなぁ。おばあちゃんと、あっ、ママのおばあちゃんね、それとおかあさんつまりあなたのおばあちゃんと、克子おばちゃんと。この辺でお弁当食べたのよ。ママには曾祖父母だけれど、おばあちゃんには両親、おかあさんには祖父母だもんね。うん、ここだったわ。もう少しここが広かったような気がするけれど」
（だんなさ～）
（そう、そうだ）
（綾子ですわ）
（そう摩奈）
（この方が摩奈さんですか。立派なお嬢様）
（カテリーヌさん、立派なというのは普通の日本語では女性には使わないものなのですよ）
（まぁ、そうだったんですか。でも立派なお嬢様に見えますわ）
（この前、マサさまからお話伺った時には赤ちゃんだった摩奈ちゃんですか。もうこんな、えっ、おいくつぐらいかしら。もしかしたらそろそろお嫁入りなので、ご先祖様にご報告にいらしたのかしら。

ユリの頃でしたらとっくに嫁いでいる年齢ですわ）
（マサ、摩奈が赤ん坊だったから大きくなるのは分かるのだがのっ、この犬も大きくなったものだのっ。あの時には摩奈と同じくらいの大きさだったからのっ。大きくなって、バタ臭くなったのっ）
（えっ、まさか、でも、同じ色ですわね。あれから四半世紀ですか。みかけで、摩奈が五倍くらいになったかしら。この犬も五倍くらいかしら）
（あのぉ、バタ臭いってどういう意味でしょうか）
（バターですよ。バターの匂い、バター臭い）
（まぁ、バターは犬からではなく、牛のお乳からお作りいたしますのよ）
（カテリーヌさん、バターの匂い、つまり、毛唐が食べるもの、つまり、西洋人の匂いがするって意味ですよ）
（犬ですのに、人の匂いがするのでしょうか）
（日本の犬らしくないという意味で、匂いより見かけですなっ）
（それに、あのぉ、犬は四半世紀も長生きしないと思いますが）
（えっ、でも同じ名前なんですのっ）
（そっくりですのよ。色も形も。違うのは大きさだけ）
「曾祖父母の上の世代ってなんて言うの」
「曾曾祖父母でしょ」
「つまり、この彦衛門さんとマサさんってのは、私の曾曾祖父母なわけでしょ」
「そうよね」
「お墓参りなんて、ほとんどしたことないから、どうしたらいいの」
「え〜と、草むしりしたり、お水かけたり、お線香上げて、後はお話すればいいんじゃない」
「えっ、お話しするの」
「うん」
「草むしりは、する程生えていないわ。ここ、管理がちゃんとされているのね」

「じゃぁ水」
「うん、ちゃんと持って来ている。はい」
「これ、アルの水」
「お水はお水」
「そりゃそうだけど、何か変なの」
（ほんと、変ですわ。これ何でしょう。こんなもので水をかけられるのは初めてですわ）
（あっ、皆の衆、これがペットボトルですよ）
（やはり、ペット用の飲み水の様ですのっ）
（いえ、はぁ、たしかに。その大きな犬用の水のようですが、しかしペットボトルというのはこの容器のことでして）
（水には変わりないし、文句は言うまい。犬用の水入れだろうが、良いお湿りじゃのっ）
（ほんと、潤いますわ）
「ねぇねぇ、見て。彦衛門さんって、亡くなったのお正月だよ」
「お正月っ。忙しかっただろうなぁ。目出たいのだか不幸なのだか」
（そうそう、そうなのですよ。綾子さん、摩奈さん）
（私だって正月に亡くなりたくて正月を選んだわけじゃないんだのっ。女が揃って私をいじめるっ。まったく薩摩おごじょは気が強いのっ）
「摩奈です。はじめまして。彦衛門さんとマサさんの末っ子の悦さんの末っ子の朝子が私の母綾子の母です。わかりますか。つまり、私は彦衛門さんとマサさんの曾曾孫、玄孫です」
「今日は、母、朝子が亡くなったことを報告に参りました。もうご存知かもしれませんが」
（うむ。存じておるのだのっ）
（なぜか分かるのですよね。でもそういうこと、あちらの世にいると分からないものだと思うのでしょうね、それにしても母の名を呼び捨てとは、今の日本語は乱れております。あら、わたくしもハナさまみたい、あら失礼）

（マサ、マサは悦の母で朝子の祖母だのっ。朝子が母と言うのは悦のことだのっ）
（はい、だんなさ～、何を当り前のこと）
（綾子が母という時には朝子のことだのっ）
（当たり前です）
（母や父では、話し手次第で誰の事だか分からなくなるのっ。ましてや、父母は一人ずつだが、祖父母になると二人ずつ、曾祖父母になると四人ずつ、曾曾祖父母になると八人もおるのだのっ。名前で呼ぶ方が分かり易いのっ）
（はぁ～）
（それに、他人の前では身内の名前には敬語をつけないのっ）
（はぁ～、他人でしたら。でもわたくし達、朝子の祖父母ですわ）
（朝子の祖父母は身内でも、綾子の曾祖父母、摩奈の曾曾祖父母になると、遠い身内だのっ）
（そんな、だんなさ～、寂しいです）
「摩奈さぁ、きっとこのお墓、マサさん、しょっちゅう撫でてたわよね」
（そうですわ。だんなさ～と話したくて、涙浮かべて）
「きっと、悦さんも、ここに来て両親と話してたわよね」
（そうだったのっ）
「おばあちゃんは、どうだったのかなぁ」
「おばあちゃんって、朝子は、あんまり知らないみたいよ、末っ子だったし」
（そんなことないですっ、わたくしは覚えておりますわ）
（私のことは知らないだろうのっ、悦ですらまだ嫁いでなかったのだからのっ）
「ご先祖さま、母朝子は今、私と一緒に来ております」
（えっ、何を言い出すのだのっ。朝子は京のセミテリオだろうにのっ）
（孫の朝子がこの辺りにいるのかしら。あのお行儀の悪かった朝子、

鶏を絞められなかった朝子、歌が好きな朝子、おしゃれな朝子、この辺りにいらっしゃるなら、姿を見せて頂戴）
「母は、今私がつけているペンダントの中に入っております」
（ペンダントとはなんでしょう）
（ぶら下げる物ですよ。女性の装飾品の）
（ロバート殿、あいがとさげもした）
（あら、あれですわ。綾子の胸のところにぶらさがっている）
（ほうっ。朝子があの中に入っているのかのっ）
（なんだか窮屈そうですわ。でもいつも一緒っていいですわね）
「今から、ママと私は、ママのおばあちゃん、つまり悦さんの所にも私のおばあちゃん、つまり朝子さんが亡くなったことを報告に参ります。初めてお目にかかりました。今後ともよろしくお願いいたします」
（あらぁ、ご結婚のご報告じゃないんですね）
（子孫が続くと期待いたしましたのに）
（玄孫の次って何孫って言うのかしら。ユリ、知りません）
（墓石をこう撫でられておると、どうもくすぐったいようだのっ）
（触れられるって素敵ですわ。容易く乗り移れます）
（彦衛門さま、マサさま、そのままご一緒なされば、ご息女にも会えますわね）
（そのようだのっ。皆さんも如何かのっ。綾子と摩奈と二人だから、ロバート殿、カテリーヌさん、ユリさん、虎之介殿、ご隠居さん、分かれて乗られれば旅できますのっ）
（どうぞうどうぞ、皆様どうぞ。私の曾孫と玄孫にお乗りになって）
（いやいや、彦衛門さん、マサさん、お二人だけでどうぞ。曾孫さま、玄孫さまと、お孫様、お嬢様と水入らずの時をお過ごしくださいませ）
（僕も、そろそろハナのご機嫌伺い。彦衛門さん、マサさん、土産話を楽しみにしておりますよ）
（ご隠居さんのお話の続き、またお願いいたしますのっ）

（では、皆様、ご機嫌よろしゅう）
「またその内、お墓参りに参ります」
「アル、場所、覚えておいてね」
「ワフッ」

第五話　完

第五話　セミテリオのご隠居　その十九　最終回（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次話番外編呂は3月2日の予定です。

セミテリオの仲間たち　番外編呂　詩　出席番号２５番

悪魔の声がきこえてきた。
２５番　ふこう、不幸な番号だね。

ぼくは不幸なんだ。
ぼくが不幸な顔していたらママも不幸な顔になった。
ママが不幸な顔になったら、パパも不幸な顔になった。
ママとパパが不幸な顔になったら、妹も泣きそうな顔になった。
ママとパパと妹が不幸な顔になったら、ぼくはもっと不幸になった。
ママが不幸な顔してたら、パン屋さんのお姉さんもむすっとしてた。
パン屋さんのお姉さんがむすっとしてたら、パン屋さんのお客さんもむすっとしてた。
パン屋さんのお客さんがむすっとしてたら、スーパーのレジのおばさんもむすっとしてた。
スーパーのレジのおばさんがむすっとしてたら、
　配達のトラックの運転手さんも無愛想になった。
配達のトラックの運転手さんが無愛想にしてたら、タクシーの運転手さんがむすっとなった。
タクシーの運転手さんがむすっとしてたら、タクシーのお客さんが不機嫌になった。
タクシーのお客さんが不機嫌になったら、交通整理のおまわりさんがむっつりした。
交通整理のおまわりさんがむっつりしてたら、
　横断歩道を渡っていた中学生のお兄さんの目が冷たくなった。
中学生のお兄さんの目が冷たくなったら、中学校の先生が怖い顔になった。
中学校の先生が怖い顔したら、中学校の校長先生がもっと怖い顔に

なった。
中学校の校長先生がもっと怖い顔になったら、校長先生の奥さんが怒った。
校長先生の奥さんが怒ったら、お隣のおばあさんも怒った。
お隣のおばあさんが怒ったら、僕のママも怒った。
僕のママが怒ったら、妹が泣いた。
妹が泣いたら、
僕も泣きたくなった。
出席番号25番は不幸な番号なんだ。

めそめそしていたら、
天使の声がきこえてきた。

25番　にっこりだわ、すてきな番号。

僕はにっこりした。
ぼくがにっこりしたら、ママがにっこりした。
ママがにっこりしたら、パパもにっこりした。
ママとパパがにっこりしたら、妹もにっこりした。
ママとパパと妹がにっこりしたら、ぼくはもっとにっこりした。
ママがにっこりしたら、パン屋さんのお姉さんもにっこりした。
パン屋さんのお姉さんがにっこりしたら、パン屋さんのお客さんもにっこりした。
パン屋さんのお客さんがにっこりしたら、スーパーのレジのおばさんもにっこりした。
スーパーのレジのおばさんがにっこりしたら、配達のトラックの運転手さんもにっこりした。
配達のトラックの運転手さんがにっこりしたら、タクシーの運転手さんもにっこりした。
タクシーの運転手さんがにっこりしたら、タクシーのお客さんもに

っこりした。
タクシーのお客さんがにっこりしたら、交通整理のおまわりさんもにっこりした。
交通整理のおまわりさんがにっこりしたら、
　横断歩道を渡っていた中学生のお兄さんの目が輝いた。
中学生のお兄さんの目が輝いたら、中学校の先生が優しい顔になった。
中学校の先生が優しい顔したら、中学校の校長先生がにっこりした。
中学校の校長先生がにっこりしたら、校長先生の奥さんがにっこりした。
校長先生の奥さんがにっこりしたら、お隣のおばあさんもにこにこした。
お隣のおばあさんがにこにこしたら、僕のママもにっこりした。
僕のママがにっこりしたら、妹が笑った。
妹が笑ったら、僕も笑った。
にっこりしたらほんわりした。

悪魔の声より天使の声がいい。

第四話でセミテリオに遊びに来た翔君の詩でした。

セミテリオの仲間たち　番外編呂　詩　出席番号２５番　（後書き）

毎週水曜日に更新しております。
セミテリオの仲間たち第六話その一は　３月９日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その一

（コルネイユが鳴いてますわ）
（烏ですなっ）
（コルネイユがたくさん。コルネイユ、コルネイユと聞こえますわ）
（肩が凝るねぇ、いい湯だねぇ、とも聞こえます）
（クロウですね、クロウ、クロウと）
（苦労が多いのも肩が凝るのも、ユリ、嫌です。いい湯には浸れませんし。カァカァがいいです）
（ユリちゃんは、母さんがたくさんの方がいいんだ）
（母さんは一人です。ユリ、日本語が一番いいんです。虎ちゃん意地悪）
（烏が日本語と仏蘭西語と英語を使っているのに）
（虎ちゃん、烏が人間の言葉でないているとは思いませんっ）
（それにしても今日は烏がよく鳴きますね。また新しい住民が増えるのでしょうか）
（そういえば、いつもとは違う気を感じます）
（いや、何か、知っている気配）
（いえ、やはり存じない気を感じます）
（こちらに向かってきますよぉ）
（おっ、これは生きている気配ではなく、我らがお仲間の気配）
（あらっ、彦衛門さまとマサさまみたい）
（まさか、つい先ほど曾孫さんと玄孫さんに乗ってお出かけされたのに）
（ですわねぇ）
（あら、でも、やはり、彦衛門さまとマサさまですわ）
（お友達をお連れのようで）
（随分おはやいお戻りですこと）

（まぁ、戻るには乗らなくとも念じればよいからね）
（マサさま、もう戻ってらしたのですか。曾孫さまのお宅、そんなにお近いのでしょうか）
（カテリーヌさん、実はね、綾子と摩奈は、綾子の運転する車で別のセミテリオに行ったんですよ。途中、例の高速道路というものにも乗りましたわ。アルは大人しくて。だんなさ～とわたくしの方がひやひやしておりました。車の中にあんなに大きい犬と一緒なんてね）
（アルは、このセミテリオで、小便しなかったのを、みなさんご覧になったのっ。だから、車の中で私は小便ひっかけられないかと冷や冷やしておったのだのっ。で、あちらのセミテリオに着いて、今度こそアルがどこかで小便するぞ、他所様の墓に小便するなど不届き至極と、これまた私は冷や冷やしておったのだのっ。ところが、しないのだのっ。あちらのセミテリオは、自動車で中まで入れるので、降りてから墓までは近かったがのっ、それでも墓石がたくさん並んでいるのに小便しない犬ってのは、もしや病気なのではと今度は心配になってのっ）
（だんなさ～、またそういうお話）
（そうか、アルは私たちと一緒の間、飲まず喰わず、よって小便も糞も出さなかったのかのっ）
（だんなさ～）
（ユリ、そんな犬、見た事ありません。犬って、あちこちにおしっこしますよね）
（でもユリちゃん、ここでもよく犬を散歩させてるけれど、犬が小便しているの、僕、見た事ないよ）
（あら、そういえばそうです。みんなお水飲まないのかしら）
（そんなことないだろう。だって、ほら、なんとかって透明のふにゃふにゃのに水入れて持ってきていたくらいだから）
（犬さんたちも、気がたくさん漂っているから、遠慮しているのかしら。人間より犬さんたちの方が、わたくし達に気付きますもの）

（犬も進化したのかもしれないですな）
（あの、それで、だんなさ～とわたくしの娘の入っている墓地で、娘と話し込んでおりましたので、綾子と摩奈に置いてかれてしまいましたの）
（お爺ちゃん、その、お婆ちゃんとお間にいらっしゃる方はお爺ちゃんのお母さんですか）
（虎之介殿、貴殿におじいちゃんと呼ばれる筋はないのっ。それに、これは私の娘、悦ですのっ）
（お嬢さまなんですの。初めまして。わたくし、カテリーヌと申します。お母さま、お父さまにはいつも親しくして頂いておりますのよ）
（我輩はロバートと申す。元外交官です。お見知りおきを）
（僕、虎之介、大正十五年生まれです。肺病でこちらの世に参りましてかれこれ七十年）
（ユリです。ユリは西班牙風邪で十九でこちらに）
（初めまして。絵都と申します。申し訳ございません、まだ旅の疲れが残っておりまして、しばらく休ませてくださいませ。あっ、お父上お母上、わたくしの名は、絵画の絵と都の字を使っております。先ほどは悦という漢字を思い浮かべてわたくしをご紹介頂いたのに気付きました）
（お前が産まれた時に、初めてのおごじょで悦しくて悦と名付けたものを、親の付けた名が気に入らなかったのかのっ。親不孝者め）
（お父上、怒らないでくださいまし。空襲で戸籍が原簿も燃えてしまいましてね、戦後届けて作りなおして頂いた折に、戦前の苦しみから生まれ変わろうと思いまして、漢字だけ変えたのです）
（うむ。まぁ、暫くこちらで休んでおればいい）
（悦、いえ絵都は、墓石にも絵都で記されておりましたのよ。綾子と摩奈とアルが、墓まで連れてってくれて、でも墓石には悦の字がないんですもの。驚きましたわ。たしかに、墓石の名字は娘の嫁ぎ先でしたし、孫も玄孫もアルも墓前でくつろいでましたの。そちら

のお墓では、一番新しく入られた、娘と血のつながりのない方が生き生きとしてらっしゃいましたが、他の方々はみなさんほとんど化石でしたし、悦の字はないですし、でも悦の気配は微かにございましたし、どなたのお墓でしょうと思っておりましたら、絵都の名を見つけましたの）

（それでもまだ、悦だとは私には思えなくてのっ、それに存知ない方々ばかりの墓でのっ、悦、悦、ここにおるのかのっと呼びかけたら、もしかして富士見町のご両親さまでらっしゃいますか、と悦の声がしたんだがのっ、なんとも弱々しい声でのっ）

（もう昇華しそうでしたもの。昇華でもこどもに先立たれるのは辛いですわ。すでにこちらでももう息子も孫も昇華してしまって）

（どうも、私とマサは、好奇心が強過ぎて昇華までの道のり遥かのようですのっ）

（せっかく曾孫と玄孫に会えて、曾孫と玄孫に乗せてもらって久しぶりに娘に会えましたのに、昇華されては辛いものです）

（綾子と摩奈が、ここでの挨拶と同じ様に、朝子がこちらの世に参ったこと、朝子が綾子の、なんて言ったけのっ、胸の所でぶらさがっている）

（ペンダントですな）

（ロバート殿、あいがとさげもした。それでそのペンダントに朝子が入っていると聴いた悦いや絵都は、娘の最後も耳にして余計に昇華しそうになりましてのっ、娘もこちらなら、もう私も華になって昇天いたします、などと申すのでのっ、お前は両親より先立つのかこの親不孝者と思っただけで、さすが気の我ら、通じましてのっ、私とマサを見て、少し元気になったようでのっ。お父上お母上にお墓参りにいらして頂くなど、勿体のうございます。お久しぶりにお目にかかり、嬉しゅうございます。御両親さまのお墓に最後にお参りさせて頂いてから、かれこれ四十年になるでしょうか。ほんにお久しゅうございます。八十を過ぎた頃から転びやすくなりまして、墓参もできなくなりました。ほんにお久しゅうございます、とはら

はら涙を流すのでのっ。見かけは私より年上でも娘に泣かれると切なくてのっ。それで気晴らしに人に憑いて、乗ってあちこち旅する楽しみを伝えたのだがのっ、娘はこんな手を知らなかったようでのっ、娘から見たら孫、曾孫の綾子と摩奈に乗って、さっそく出歩こうと誘ったのだがのっ、いえいえ、わたくしの居る場はこちらですから、わたくしはこの家に嫁いだ身ですからと固辞されて、それでも誘う、娘は断る、再度誘う、娘は断る、こうしている内に、綾子と摩奈とアルはもう帰ろうかってなってしまって、そそくさと自動車に乗ってのっ、私とマサは置いてけぼり）

（まぁ、置いてけぼり）

（仕方ございませんわ。何しろ綾子も摩奈も私たちが一緒に乗っておりましたこと気付いてませんでしたし。それに、こちらに戻るのはさして難しゅうございませぬし）

（残念だのっ、綾子も摩奈も幼い頃は私たちに気付いていたようだったがのっ）

（仕方ございませんわ。大人になると、気遣うことが多くて、気配にまで気がまわりませんもの。わたくし達もそうでしたでしょ）

（いやぁ、気配はいつも感じておりましたのっ、特に墓場では）

（昔は暗かったですから）

（そうそう、銀座のアーク灯、初めて目にした時にはまぶしかったのっ）

（今は、こちらでも夜になりますと、街灯が灯りますでしょ、街でもないのに）

（そうですな。たしかに、墓場に灯りとは、ちと不思議）

（あらっ、明るいと、ユリ怖くないです）

（ユリちゃん、恐がりだったんだ）

（当たり前ですっ。墓地やお寺やお社の近くって、夕方になったら怖くて歩けませんでしたっ）

（おっ、ってことは、もしかしたらユリちゃんは、気配を感じてたんだね）

（あら、あの頃でしたら、普通でしょ。お友達もみ～んな怖がってました）
（不思議なものですのっ。こちらからは見える、聞こえる、嗅げる、あちらからは私たちを見えない、聞こえない、嗅げないのですのっ）
（夜にならないと星が見えないのと同じかしら）
（カテリーヌさま、お上手）
（しかしですのっ、昨今は、夜になっても、星が見えなくなりましたのっ。星の数が減っておるのかのっ。星も消えるのかのっ）
（お爺ちゃん、星はそう簡単に消えませんよ。セミテリオの周りが夜もどんどん明るくなっているから、星の明かりが見えないだけですよ）
（虎之介殿、然様かのっ、しかしながら、私は貴殿の祖父ではないのっ）
（確かに、暗いと、目が見えないと、香りや音はよく聞こえましたな。ユリさんのように、何かを感じるということもありましたな。気配などというものは、気のせいだと思っておりましたがな）
（なんか、ユリ、分かってきたような気がします。暗いとあちらとこちらがつながるのですね。少し怖くなくなりました）
（ユリちゃん、やっぱり変だよ。だって、あちらの世の人が怖がるのは、たぶん僕たちのことなんだから、ユリちゃんがこちらの世界に来て怖がられる立場なのに、怖いなんて）
（だって、あちらの世にいた時にはやっぱり怖かったんですもの）
（じゃぁ、墓場を明るくするのは、墓場に漂う僕達を怖がる人が多いからか、いや、あっ、そうか、セミテリオが明るいのは、あちらの世の人にこちらの世を知らせない為のものなんでしょうね。誰がそんなこと考えたのでしょう）
（いや、虎之介殿、たぶん、然様ではござらぬ。ほら、夜になるとセミテリオで良からぬことをする御仁がおるから、その防止策ではないですかな。まぁ、当人には良い事、端から見たら良からぬ事なわけで、いや、あれは良い事、いや、当人同士が納得しておれば、

であって、やはり犯罪になる場合は良からぬ事で）

第六話　セミテリオに里帰り　その一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は３月１６日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その二

（ロバートさま、何をお一人でぶつぶつ）
（いえ、我輩も薄暗がりで、あの時、刃の邪気を感じたのに、ほろ酔いで避けきれず、こちらに来てしまい）
（まぁ、そうでしたの、ほろ良いでしたの）
（何が辛いと申しまして、我輩に刃を振るった者の正体を知らぬことでしてな、どの筋の者だったのか、気になって気になって、昇華するどころではなく、こちらで生き延びております）
（わかった。ロバートおじさんみたいなのを邪気って言うんだ）
（我輩は邪気ですか、とほほ）
（わたくしは邪気ではございませんことよ）
（ユリもちがいますっ）
（僕も違うと思うけれど、自身無い）
（邪気であろうと芳気であろうと、だいじょうぶですよ。今までわたくし達、あちらこちら乗せていただいて、殆どの場合、気付かれておりませんでしょ。昨今のあちらの方々は、気配を感じないほどにお忙しいのでしょう、きっと）
（そういえば、ユリ、忙しいと言う字は心が亡いと書くって教わりました）
（忙しいだけではなく、世の中明る過ぎて、気配を感じられなくなってきているのだろうのっ）
（先ほどの、暗いと、目が見えない分、よく聞こえよく匂うですわね）
（然様、夜の便所はよく匂う）
（だんなさ～、昨今のお手洗いはあまり匂いませんわ）
（つまらないのっ、いや、つまったら大事、いや、失敬）
（しない事は忘れる。気配を感じない者がどんどん増える、辛いも

のですな。我らが存在は、存在していることすら忘れられる、忘れられるから感じてもらえない）

（忘れられるから化石になる、昇華する）

（辛いですわ）

（いいもん。ユリは楽しみます。忘れられてもいいですっ。楽しみますっ）

（ユリちゃん、その意気その意気）

（お父上、お母上、こちらの墓地の方々、みなさまこんなにいつもおしゃべりしてらっしゃるのでしょうか。お父上もお母上も生き生きとなさってらして、私よりよほどお若く見えます）

（おっ、悦、いや絵都、少しは疲れが取れたかのっ）

（はい、いいえ、まだ。こちらに参りますのには、疲れませんでした。そよ風に乗せられた様な心地良さで、お父上とお母上の間で両手を握られて、幼い頃のように幸福感で満たされておりましたもの。でも、こちらの世で過ごした二十七年というもの、あちらの墓地では、ただただだんまりの、無言の行のような年月でしたから体が、あら、体ではなく、どう申しましょう。気の体かしら、気の体中が凝っておりますようで。皆さまのお話しお伺いしておりますと、こちらでは皆さま固まっておりませんのね。不思議でございますわ）

（固まっておるとは、絵都さん、化石になりかかっておりましたな）

（え〜と、外人さん）

（絵都、ロバート殿ですわ）

（お母上、有り難うございます。ロバートさま、私のおります墓地では、みなさまご家族ごとに固まってらして、会話などございませんの。家が大事、家を一歩出ましたら他家。隣組などございませんの。ですから、みなさま無言の行者みたいで、私も、墓地に入るとはそういうものなんだと思いまして、義理の息子が入って参りましても、私は何も語らず。義理の息子の方は、お母さん、こちらの世を題材にしてカメラワークを考えたいのですがアイデアあったら教えてください、などと言われても、口を開かずでしたの）

（まぁ。絵都、こちらでも隣組など無いですよ。でもおしゃべりしたい方々がこうやって。こちらにも無言の行者方々もたくさんいらっしゃいますよ。どうしなければいけないなどと決まりもございませんし、それぞれが気楽に、気を楽しみますの）
（義理の息子とは誰のことかのっ）
（ああ、だんなさ～はご存知ないのでしたわね。絵都、いえ大戦前ですから悦だった頃、再婚したお相手の先妻さまのご長男の開さんのことですわね、悦、いえ、絵都）
（はい、お母上、左様でございます。開さんには、戦後お世話になりました。でも、私、カメラワークなどと言われましてもねぇ）
（そのカメラワークとは何ですかな。写真機の仕事、ですかな）
（え～と、ロバートさまでしたわね。カメラと申しましても、あら、あれも写真機なのでしょうか。あの、映画、あっ活動と申した方がよろしいのでしょうか、とまっているお写真ではなくて、動いているものを撮影するカメラ、写真機の事なんです。私もよくは存じ上げないのですが、カメラをどの向きから構えて、どの大きさで撮影するかということらしいのです）
（ほうっ、エジソンの発明した技術を元に、開発された映画を、絵都さまの義理のご子息が撮られていたというわけですな。浅草の電気館で時折目にしましたぞ。弁士がおもしろおかしく語るのが我輩は気に入りましてな。そうそう、日露戦争や忠臣蔵も見ましたな。弁士の日本語が素晴らしかったですな。あの独特の節回し）
（ロバートさん、日本語お上手ですのね）
（我輩、日本が長いものでして）
（ロバート殿はややもすると私よりこの国のことに詳しいですからのっ。日露戦争の活動は私も見たのっ。勇ましさに、西南の役を思い出してのっ、血が騒ぎもしたのっ）
（だんなさ～、あの頃は、温が無事に帰ってくるかどうか、私はとても不安でしたのに）
（まぁ、お母上、そうでしたの。お母上と違って、私は明治の女。

義理とはいえ育てた息子を戦、あっ、日中事変から始まった第二次世界大戦に取られましても、辛いとは感じませんでした。お兄さまが日露戦争に取られました時にも、そりゃ、生きて帰ってきて欲しいとは思っておりましたが、どうせ死ぬなら敵の一人を殺してからなどと思っておりました。私、女学校の帰りに電車の停車場まで、よくお友達と歌を歌っておりましたのよ。いつもでしたら、先生に見つかるとみっともない、およしなさい、でしたのに、戦争の歌でしたら、先生もお止めにならないものですから、余計に勇ましくなって、そうそう、戦勝の後にも、軍艦行進曲、手を大きく上げて、流石に袴の脚は上げられなかったのですが、もう行進みたいにして。パラソルを銃に見立てて肩にかけて。流石にこれは先生に叱られました。戦争、勝てば嬉しいものですわ。あの頃は、良かったです）

（♪旅順開城約成りて、敵の将軍ステッセル、乃木大将と会見の処は何処水師営♪ですね。僕、尋常小学校で習いました）

（ユリ、手まり歌なら知ってます。♪いちれつらんぱんはれつして、にちろせんそうはじまった♪　でしょ）

（ユリさんのも虎之介殿のも、戦勝後にできた歌ですよ）

（ユリさん、同じくらいのお年かしら）

（ええっ、でも絵都さま、とてもお年をとられてらっしゃる）

（あら、私、九十三でこちらの世に参りましたから）

（でも、日露戦争の時、私はえ～と、四歳でした。戦勝の提灯行列をぼんやり覚えているくらいです）

（絵都さまは、マサさまのお嬢さまですものね。ユリさんよりお若い筈はございませんわね。そして、マサさまより長生きなさったからマサさまより老けてらっしゃる、あら、ごめんあそばせ）

（構いませんわ。確かに、老けております。もうあちらの世に参りたいです。そうおっしゃるえ～と）

（カテリーヌです。わたくし、千八百八十八年生まれですのよ）

（千八百八十八年ということは）

（明治二十一年です）

（あら、私より少しお姉さまでらっしゃいます）
（お近づきになれて嬉しゅうございます）
（どうしてそんなにお若く見えるのでしょう）
（あら、ご存じない。あっ、そうでしたわね。あちらのセミテリオではおしゃべりなさらない、ご存知ないのですわね。私、こちらの世に参りましたのが三十五でしたので、その時のまま。でもね、絵都さまもお若くお見えになれますのよ。ご自分で念じられれば、お若い時のご様子を思いだされれば。気を張りつめてらしゃればそのまま保たれますわ。ただ、気を抜くとまた元に戻ってしまいます）
（然様、元の木阿弥）
（おっ、流石ロバート殿）
（えっ、なんですか、そのもとのもくあみ、早口言葉でしょうか）
（カテリーヌさん、元に戻ってしまうということですよ）
（漆を塗ったお椀、お高いでしょ。でも使っている内に漆がはげて、元の木の椀に戻ることなんです）
（あら、マサさま、そうでしたの、ユリはお坊さんの話しだと思ってました。木阿弥というお坊さんが、年とって修行をやめて元の奥さまの所に戻られてという。この前、ご隠居さまが、明治からは結婚するお坊さまが増えたとおっしゃってましたが、昔のお坊さまは結婚なされなかったから、あら、ひどいお話ですわ。木阿弥さんは、結婚なさってらしたのにご出家なさったのかしら。それで、修行が辛くて、また奥さまのところに戻られたのかしら、随分勝手なお坊さん）
（ふふふ、面白い。そういう解釈もあったんですね。僕、お椀の気に入りました。でも、僕が聞いたのは）
（虎之介殿、たぶん、武将の話だろう。後継ぎがまだ幼いから、殿の死を隠すのに、木阿弥という人を寝かせておいたが、後継ぎの息子が城主になれそうな年齢になったから、木阿弥は追っ払われたという）
（そうです。お爺ちゃんさすが元武士）

（筒井順慶が城主になったんですよね）
（然様、私はそう聞いた）
（何時頃の事ですの）
（私があちらの世に生まれる、ざっと五百年前のことかのっ、天文年間のことゆえ）
（面白いお話をかたじけない。我輩、意味は知っておりましたが、由来は知りませんでした。それにしても、木椀から、不誠実な坊さん、ごまかし武将だの、面白いものですな。我輩は塗りのお椀がはげるというマサさまのお話が一番面白かったですな。しかしながら、観阿弥世阿弥がいらしたのですから、木阿弥という坊さんもいそうですしな）
（わたくしもですわ。お坊さんやお侍さんのことは、どうもわたくしには分かり辛くて。塗りのお椀がはげるのって、とっても実感あるんです。美しい表面に指のあとがついたので洗おうと水につけておきましたら、女中が怒ったんです。まったく異人さんはなぁんにも知らねもんだから、それでわしらのせいにされたらとんでもね、なんて）
（おほほ、カテリーヌさん、懲りたようですわね）
（女中があんなに怒ったの初めて見たものですから。塗りの物は丁寧に大切に扱わなければいけないのですね）
（ユリもよく言われました。そっと、そうっと、って。いい塗りのお椀は、こどもにはもったいないって、特別の時にしか使わせてもらえませんでした。お正月やお雛祭りや）

第六話　セミテリオに里帰り　その二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は3月23日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その三

（先ほどユリさんがお歌いになった、手まり歌、もう一度歌っていただけますかしら）

（♪いちれつらんぱんはれつして、にちろせんそうはじまった♪）

（おほほ、幼いお子はよくそう歌っておりましたわね。やはり、ユリさんもそうでしたのね）

（あれね、いちげつだんぱん、ですのよ。♪一月談判破裂して、日露戦争始まった。さっさと逃げるは露西亜の兵、死んでも尽くすは日本の兵、五万の兵を引き連れて、六人残して皆殺し、七月八日の戦いに、ハルピンまでも攻め寄せて、クロポトキンの首を取り、東郷元帥万々歳♪）

（幼いお子が歌うのに皆殺しなんて、恐ろしいですわ）

（カテリーヌさん、♪あんたがたどこさひごさ♪の手まり歌はお聞きになったことございますか）

（あっ、はい）

（はい、ユリも知ってます）

（あれも、狸を煮て、焼いて食べてしまう歌なんですよ）

（そうそう、あれは御維新の時に肥後勢が川越の仙波山におったからのっ、そこで狸を喰ったんだのっ。あの頃が懐かしいのっ。その前、まだ薩摩におった頃に、英吉利相手の戦の折に加治屋の仲五郎どんと会ったんだ。私と同い年でのっ。日露の頃はまだ元帥じゃなくて大将だった筈だがのっ。富士見町にも時折顔出してたろう。そうそう、横須賀の小松で遊んだこともありましたのっ）

（だんなさ～、小松で遊んだとは聞き捨て成らないお言葉。ましてや娘の前で）

（いや、遊んだと申しても、遊郭ではないぞ。料亭ですのっ。あの頃はおのこの遊びとしては当然のこと。マサの麹町の兄上も、海軍

にいた矢衛門も行っておったぞ。それに私はたったの二度。東郷どんは芸者衆に歓待されておったのっ）
（矢衛門さまもですかっ。ご兄弟揃って、まぁ。お高いのに）
（お母上、殿方とはそうしたものですわ。長州のあの方よりよほどまし。お父上は亡くなる数日前まで、お国の方がいらっしゃると、いつも酒盛りでしたわね。私、襖を隔てて聞こえる薩摩言葉が半分もわからなくて、でも長州言葉よりはまだわかりました、長州では苦労いたしましたもの。そうそう、よく歌ってらっしゃった。♪酒は飲め飲め飲むならば♪）
（薩摩の歌ではないのだがのっ、酒盛りには都合が良い謡でのっ。薩摩の歌は西郷どんのが多いから歌えなくてのっ）
（あんなにお召し上がりになるから、だんなさ～早々とこちらの世界にいらして、わたくしを置いて）
（お母上まで早々とこちらにいらしてましたなら、私の人生、もっと辛うございました）
（でも・・・東郷さまはだんなさ～よりかなり長生きなさいましたのよ。昭和の初め頃までしたかしら。陸の大山さまはだんなさ～より少しお年上で、麹町の兄と同じ頃に亡くなりました。あの頃はいい時代でした。どちらにも薩摩の方がいらして、薩摩言葉で話せましたもの）
（ほんとに。日露の頃はまだ先にあんなに色々と苦労するなど知らず、娘時代はよかったです。あっ、ユリさんご結婚は）
（わたくし、お見合いも一度もしないままこちらに参りましたの）
（おうらやましい）
（絵都お姉さまは、それ程ご苦労なさったのですか）
（父上が・・・）
（私がどうしたってのだ。そりゃ早くこちらに来たがのっ）
（いえ、私がまだ女学校を終えてないのに、勉強とおやっどんとどちらが大事だ。おやっどんに決まっておる。勉強なんてしないで、おやっどんの看病をしろとおっしゃって、私が嫌がるのに退学届を

出されましたでしょ）

（絵都、もうあれから、え～と、百年以上も経っているではないか。まだ恨んでおるのかのっ）

（私、勉強したかったんです。なのに、温泉巡りに付合わされました）

（仕方なかろう。病は辛かったのでのっ。それに宮之城におった頃には温泉はいやというほどあったのに、東京にはないのだから）

（だからとおっしゃって、草津に半年程三度も。私はおさんどんと按摩の為に、勉強を捨てさせられたのです）

（絵都、すみませんでした。わたくしが参ればよかったですわね。でもあの頃、わたくしも血の道がよくなくて、それにだんなさ～が、悦が良いとおっしゃって。でも、だんなさ～がお亡くなりになった後、女学校に戻りましたでしょ）

（別の女学校に途中から入りまして、そこを終えて、上級学校に参りたいと思っておりましたのに、長州にいらした頃の父上が交わした男の約束で、もう父上がお亡くなりになってましたのに、元長州藩士の方のご子息との結婚をさせられて、私は長州くんだりまで下らされました）

（悦、いや絵都、その顛末は、墓前で報告されたから知っておるのっ。お前が妊ったらすぐに蝦夷に遊びに行って帰って来ず、お前は男児出産後、しばらくして上京し、相手が身持ちの悪いのを理由に、麹町の武人どんを通して別れたのだのっ）

（お腹を痛めた子を置いて上京、まぁ、お姉さま、お辛いことでしたでしょ）

（いえ、それは構いませんでした。あの頃の私、女学校を出て、東京から地方に下ったお嬢さま。嫁ぎ先でも夫を除けばたいそう大切にされました。上げ膳据え膳、家事一切することなく、近所の官吏の若奥さま方や地元のお大尽の奥さま方とお茶にお華、お琴にお香、一昔前の姫君の様な生活でございました。娘時代よりも一層退屈な。お母上とおしゃべりもできず、義父母さまも女中達も言葉が異なり

ますし、小説を読みたいと思いましてもなかなか手に入らず、することと申しましたら、下働きへ指図するのみで、傍目には幸せに見えたかもしれませんが、夫が家をあけっぱなしなのをひた隠し、一雄が生まれる前には帰ってくるかと思いましたが、一向に。お腹はどんどん大きくなり、余計に何もさせてもらえず、日がな一日縁側からお池に映る日の移るのを眺め、池から出られぬ鯉の姿に我が身を重ね、月を見ても花を見ても百人一首の歌の数々に想いを重ね千々に乱れ、鳥の鳴く声すら東京のとは異なり、山奥深くに隠遁させられたような気分は晴れず、神道で育ちましたから後仏壇はあってもお経も知らず、どなたにおすがりすればよろしいのかも定かでなく、一雄が生まれてすぐ、義父さまが蝦夷に葉書を出しましたが、お七夜にも戻らず、二週間経っても梨の礫、それでももう二週間待ちお宮参りを終えた後、嫁ぎ先を出て参りました。表向きは、防府町のお友達の家のお茶会、お招ばれされたのにお断りのお葉書を送った方に招ばれておりますのでお友達の処に一泊いたして参ります、一泊とはおっしゃらず、お産のお疲れをゆっくり癒してらっしゃい、留守の間、一雄はしっかりと守りますとの義父母さまの、言葉には出せずとも、不義理な息子をかばうこともなく、私の覚悟を察してらした眼差しだったと今も思っております。着の身着のままとは申せ、西洋式茶会に出るお洒落な着物と一泊仕度のまま、馬車に乗りまして、三田尻駅に直行、そこから汽車に乗って、京都で存じ上げておりました駅長さんのお宅に泊めて頂いて、また京都から汽車に揺られて・・・お母上、あの時は辛うございました。汽車旅で汚れた身とはいえ、遠路はるばる、その間、ずうっと富士見台のお母上を懐かしんでおりましたのに、やっとお母上に二年ぶりにお目にかかれましたのに、温の家に迷惑がかかるからと翌週には麹町の伯父さまのお屋敷に行儀見習いに連れて行かれるなんて）

（嫁いだ娘が里帰りはともかくも、いつまでも実家、それも家禄を息子の温の代に移した後で、富士見町では絵都も大変だと思いましたのよ。麹町の兄の家の方が、肩身の狭さは違ったと思いますよ）

（あのぉ、幼いお子さま置いていらして、お心乱れませんでしたの）
（初産でしたでしょ。自分のお腹が大きくなっていく、重くなっていくのにとまどい、健やかに育ってくれと、直にお父さまもお戻りになるでしょうと、お腹の子に話しかけておりましたが、生まれてしまうと、また元の乙女の頃の身軽さに戻れた嬉しさの方が大きくて。自分で育てたわけではないですし。あの子には乳母もおりましたし、産んだ後も他人任せ、繃を変えたことすら無かったですし、お祝いにお友達が訪ねていらした時ぐらいしか我が胸に抱くこともなかったので。後に他の子を産んで乳を含ませ育てたことから思いますと、ひと月あまりとはいえ、あの子は私を借りて生まれてきただけの様でした。半年あまりしてから伯父を通して正式に別れ話をいたしました折に、嫁入り道具の御処分をお願いしても、出奔した元夫はその時にも行方不明でしたのであちらからは何の文句も出ず、義父母さまが一雄を跡取りとして育てるということになりましたので、何の不安もなく）
（まぁ、お茶会にとおっしゃって出られたのがお子さまと今生の別れになったのですか。お子さまを婚家に取られて寂しくございませんでしたこと）
（寂しいというよりは、こんなものなのかと、そういう方多うございましたでしょ。まして男児でしたし、跡取りとして大事に育ててくださるでしょうから、不安はございませんでした。もうその頃は、私、実家ではなくとも、慣れ親しんだ東京の生活に戻っておりましたし）
（では、その後初産のお子とはお目にかからないまま）
（はい、いえ、え～と、会う機会はございましたが会いませんでした）
（まぁ、どうして）
（いつ頃でしたでしょう。支那事変の頃でしたかしら、当時、大連から帰って来て、松澤におりました時に、一雄は大陸に渡る前にご挨拶をと訪ねて参りました。女中が取り次いで、立派な軍服のこう

いう方が玄関先にいらしてると。でも、私、お部屋から一歩も出ず、そういうお方は存知ません、お人違いでございましょう、と会いませんでした）

（まぁ。絵都さまあちらこちらにお住まいになられたようですのに、よく分かりましたわね）

（尋ね歩いたのでしょうね。でもその時には私動転しておりましたから、気付きませんでした）

（再婚した碧の長男、先妻の子、開さんが同じ年齢で、その頃家督を継いでましたから、私は再婚した以上、再婚した家の者でしたから、前の嫁ぎ先の方を上げるのは間違っていると思っておりました）

（まぁお堅い）

（次女の克子はね、お母ちゃま、それでこそ明治の母、軍国の母です、などと申してましたが、末娘の朝子は、そんなに頑固じゃなくてもいいのに。せっかくお母ちゃまに会いにいらしたのに、それに私、父違いのお兄さまにお目にかかりたかったです、と散々申してました）

（悦、いえ絵都、当時、わたくしにもそういうお話しをしてましたわね）

（はい、あの頃は、私、そう思っていました。そう考えておりましたから、会うべきではないと）

（うむ、私の墓前でも話しておったの。私も、お前の初産、私の孫に一目会いたかったものだのっ）

（まぁ、だんなさ～。悦が会うべきでなかったと申してましたのに、私など悦が産んで以来、そのお子は、先の嫁ぎ先のお子とあきらめてましたのに）

（でも、お母上、あの当時の表向きの建前の考え方とは裏腹に、本音では苦しみました。とうに忘れた、実際、その頃は忘れようとして忘れられていた四半世紀も前に産み捨てたに等しいお子がどのように育ったのか、長州の義父母さまはおかわりございませんかなど、お尋ねしたいことは山ほどございました。いえ、突然訪ねてらした

時にはあまりに急なことで取りあえずお断りするだけで、でも、玄関払いを喰わせた後で、あんなこともこんなことも、と思いは千々に乱れました。でも、我が身を納得させました。旅発つ前に、産みの母親いえ、産んだだけの母親に会えず終いの方が、未練が残らないでしょう、などと。部隊名を書いた紙を置いてかれたのですが、咄嗟に破いて燃やしてしまったことも後悔いたしました。部隊名が分かっていれば、せめて手紙でも出せたのにと）

（お手紙なら先の嫁ぎ先に書けばよろしかったのに）

（いえ、はい、書くには書いたのです、何度も書いては何度も捨てて、やっと思い切って出した手紙は、あちらこちらの郵便局の印を押されて戻って参りました。お住まいを移されたのか、義父母さまはもう亡くなられていたのか。当時お茶にお華とご一緒なさった方々にお尋ねしようかとも一瞬思いはいたしましたが、昔の恥を不義理を今更とも思いましたし。一雄も跡取り長男でしたのに、大陸に軍人として参るなど、不思議でございました。女中が、士官学校か陸大を出られたようなご立派な軍服のお姿でしたと申してましたが、なにゆえに軍人の道を選んだのかと不思議でございました。それっきり伝手は途絶え、もしかしたら大陸で戦死したのか、大戦後無事帰国されたのか、何も分からずじまいです。こちらの世に参ります前には、こちらで会えるかもしれないなどと思っておりましたが、こちらの世はあちらより人口、いえ霊口が多いようで、思う様には会えないものですわね）

第六話　セミテリオに里帰り　その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は３月３０日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その四

（え～と、どうお呼びしたらよいのか、お爺ちゃんとお婆ちゃんのお嬢さまとお呼びするのは長過ぎますし、それにお爺ちゃんとお婆ちゃんよりお年上に見えますし、絵都さんとお呼びするのも失礼ですし、おばさま、ですか、え～と、絵都おばさま）

（はい、え～と、どなたでしたっけ。学生さん、ですわね、書生さんかしら）

（いえ、一高在学時にこちらに参りましたから、学生です、でも、あのまま生きておりましたら、もうとっくに八十路を超えております、芥川龍之介から竜虎に因んで名付けられました虎之介と申します。あっ、それで、絵都おばさま、霊口が人口より多いのは致し方のないことでして、あちらの世ではどんどん産まれますが、他界もするわけで、こちらの世では、他界されてらした方がどんどん増えて行く。昇華される方もそれなりにいらっしゃいますが、昇華なさらない、いえ、ここでお話してます僕達もそうなんですが、昇華したがらない、あるいは非常に？々あちらの世で思い出され、名前を行いを口にされる方々は、昇華なさりたくともなされないので、霊口はいや増すばかりでして）

（まぁ、そうなんですの）

（絵都、どうもそうらしいのだのっ。ほら、あちらではこちらを知らないから、死んだら終いみたいに、私もそう思っておったのだがのっ）

（こちらのこの状態を受け入れられない方々は早々に石になられるようですわ）

（受け入れられないとは、どういうことでしょう）

（何時の時代にも何処にもおりますな。古今東西、我が身の置かれた状況に必要以上に抵抗する者が）

（どういうことでしょう）
（苦しい立場から脱出したい、これはわかりますな。されど、我が身の苦しさから抜け出す為に、あるいは我が身が苦しまぬ為に、他者を苦しめる輩。こういう輩は他者の苦しみを推測できぬわけで、他者の苦しみを推測できぬ輩は、目の前にあるもの、我が目で見たものしかその存在を信じられぬものでして、それが極端になると、我が目の前で起きている事象でも、我が理性感性の範疇に無い事象は起きている事すら認められない、というわけでして。つまり、こちらの世などあるわけないと思ってこちらの世に来た者は、こちらの世が紛い物に見える、斯様な処に我が身があるわけがない、そうなると黙り込む、石になるわけですな）
（他にも石になる方もいらっしゃいますし、お華になる方もいらっしゃるの。ユリはお花ですから昇華したいんです）
（あちらの世で辛くて辛くて、もうこちらの世でもどなたとも口をききたくない。ご自分の世界に閉じこもられる方も石になられるようです。このご近所でも、墓石にはお名前たくさん書いてあっても、こうやっておしゃべりなさる方々や出歩かれる方々ばかりではございませんのよ。幸い、わたくしは、ロビンと一緒ですから）
（ご主人さまでらっしゃいますか）
（あら、いえ、次男ですわ。主人は英吉利に長男と参りました。たぶんあちらのお墓に。それこそ霊口が多過ぎて、それに遠過ぎまして、もう随分長い間会っておりませんの。ロビンは幼過ぎてお話はできませんが、一生懸命わたくしに話しかけて参りますのよ）
（まぁ・・・ところで、先ほど難しいご解説を下さった、え～と、ロバートさん、どちらのお国の方ですの。白いお召し物とパナマ帽からお見受けするところ、大正中頃の方でらっしゃいますかしら）
（ピィンポ～ン）
（卓球のことでしょうか）
（あはは、みなさまお耳にしたことございませんか。昨今のあちらの世では時折使われておるようでしてな。然様、という意味のよう

でござる）
（卓球の球があたるからでしょうか）
（虎之介殿、どうも違うようですな。それで外れの時にはブッブ～と申すようですな）
（それはもしかして不不でしょうか）
（絵都さん、不不とは）
（いえ、大連で、ぶ～なんとかって、断る時や嫌な時に支那人がよく使っていたのを耳にしておりましたから）
（不始末、不遜、不敬、不機嫌、不老不死の不ですのっ。漢籍の否定の文字ですのっ）
（だんなさ～、漢籍は支那の物ですから）
（一本取られもした）
（あのぉ、一本、何を取られたのでしょうか）
（あっ、カテリーヌさん、負けたという時にね、一本取られたと言うんですよ。あっ、でも、ほんとに、何を一本取られたんだろう。カテリーヌおばさん、気になって寝られないような事をおっしゃらないでくださいよ）
（虎ちゃん、大丈夫よ。セミテリオの時は永遠）
（いやぁ、永遠に眠れないと、僕たちだって昇華してしまうかも）
（だめ、虎ちゃんがいないと面白くないもの。ユリ、肋骨だと思うの。前、ロバートさんおっしゃってましたよね。男の肋骨から女が作られたって。ってことは、女が男の肋骨を一本取って、勝ち）
（おっ、それはいい。しかし、世の男は納得しないでしょうな。女の勝ちでは。それに、その日本語は耶蘇教が日本に入るよりも旧くからあるのではないですかな。糸などいかがでしょうか）
（糸、糸一本では何もできませんわ。白髪でしたらたくさんございますが。あら、だんなさ～、なんこなどいかがかしら、でも、あれは負けても一本取られませんでしたわね）
（わっはっはっはっ。皆の衆、この彦衛門を笑わせてくださりあいがとさげもした。珍しくロバート殿や虎之介殿がご存知なかったと

はのっ、その上、マサが忘れておったとはのっ。先ほど取られた一本を取り返せましたのっ。その一本取られたは、剣術のだのっ、隙を突かれた時に言う言葉だのっ）

（あら～、そういえば）

（そうえいばそうでしたね。僕も少しは習いましたが、もう忘れてました、面目ない）

（おっ、我輩古傷が痛みますなっ。あれは突かれたのか刺されたのか）

（ロバート殿、嫌なことを思い出させてすまんのっ）

（お母上、お父上、こちらのセミテリオではいつも斯様な調子なのですか）

（そうなんですよ、絵都。わたくし、楽しませて頂いてますよ）

（お酒を召し上がられてもいないのにお父上が斯様にご機嫌麗しゅうらっしゃるとは）

（絵都、あちらの世はあちらの事。地位もあれば立場もあったからのっ、本音の中にも建前があったがのっ。こちらは本音ばかり。本音の中にあちらの世の建前が時折顔を出すがのっ）

（で、絵都さん、我輩のような身なりの方をよく見かけたということですかな）

（えっ、あっ、はい。いえ、パナマ帽の方をよくおみかけいたしましたのは、帝都でも、それに外地で。大正の中頃から昭和の初めくらいでしたかしら。大連には、支那人はじめ、露西亜人、亜米利加や英吉利、独逸や仏蘭西の方々もいらっしゃって、そういう方々はよく白の上下にパナマ帽でしたの）

（ふむふむ。我輩、白の上下で思い出しましたぞ。今のあちらの世にも白の上下を街中で時折見かけますな。ＭｃＤｏｎａｌｄ’ｓに何度も入ったあの時、隣のえ～とどの州だったか、あっ、Ｋｅｎｔｕｃｋｙの店頭に白の上下の白髪の爺さんがいましたな。おっと、あの御仁はパナマ帽は冠っておらなかった）

（それって、フライドチキンのお店のことでしょうか。朝子が好き

でした。私に穴子寿司を買ってきてくれて、一緒に食べるのかと思いきや、朝子はフライドチキンを私の目の前で頂いてましたのよ。あの油の匂いで穴子寿司が不味くなりそうでした）

（ねぇねぇ、虎ちゃん、ご隠居さんがいらしたら、支那人のことおっしゃるかしら）

（ご隠居さんって、どなたですの）

（ほらそこのお墓の方なんですよ。とってもお元気な方で、あちこち飛び回ってらっしゃるの。今日もお留守みたいですけど）

（まぁ、そんなにお元気な方がいらっしゃるのでしょうか。私などあちらのセミテリオでずっと墓から出ずでしたのに）

（ご隠居さんは楽しいお方でのっ、その内、絵都もお目にかかれるのっ）

（ご隠居さんは、明治の三十何年でしたかしら、絵都より少しお若い方ですよ。愛宕でお生まれになって、一高、帝大出の医者さまで、百歳までででしたかしら、あら、絵都よりお年上ですわ）

（それで、どうしてそのご隠居さんが、支那人のことをおっしゃるのでしょうか）

（いえね、絵都、ご隠居さんは、明治大正昭和平成と生きてらして、どうも戦後は支那人と言う言い方は、なんでしたっけ、馬鹿にしてる呼び方だから、今のあちらの世では使ってはいけない言葉だとおっしゃってましたの。支那という国はもう無くて、今は、なんでしたっけ、とっても長いお名前のお国になったとか）

（お母上、平成の世は私ももうこちらでしたが、あちらで明治大正昭和と生きて参りました。満州国は戦後なくなり、中華民国は大きな国になって、お国の名前が長いものに変わって、でも普段はみなさん中国と呼んでおりますわ、いえ呼んでおりましたわ。でも、私が大連におりました頃には、支那人と呼んでおりました）

（あのぉ、パナマ帽って、ロバートさまのおかぶりになってらっしゃる帽子のことですわね。カンカン帽とは違うのかしら）

（ユリちゃん、カンカン帽って缶詰の缶でつくるから叩くとカンカ

ンって音がするんだよ。で、パナマ帽はパナマで作る）
（パナマって何ですか。高級な香しいバナナなら、ユリも知ってます。お口にしたことはないんですけれど。あのバナナみたいな果物からお帽子が作れるのでしょうか）
（パナマとは場所の名前でござる）
（あら、バナナじゃないんですか）
（パナマではバナナも採れますな）
（あら、では南洋のお国なんですね）
（あの辺りは南洋ではなかろう。ユリさん、亜米利加の位置はわかりますかな）
（はい、前、びわちゃんに乗せていただいて小学校に行った時に、地図で見ました。カタリナちゃんの所が南亜米利加ですよね）
（そのカタリナさんは我輩にもわからぬが、二つの亜米利加、北と南の間が細く繋がっている、その辺りがパナマですな）
（そこで作るからパナマ帽なんですね）
（いや、そこに我が国の大統領が行った時に冠っていた帽子だからだと言われておりますな）
（へぇ〜、ロバートさまのお話、なんだかややこしいです。バナナでもなくて、パナマという場所でもなくてなんて。それに、虎ちゃん、帽子を叩くなんてユリ考えたことございませんでした。あちらに生きている時に叩いてみればよかった、あっ、もちろん冠られているのではなくて、そんな失礼なことできませんもの。あら、でも他所様のお帽子を冠ってらっしゃらない時でも叩くなんて、それも失礼ですわね、お店の売り物を叩くなんて、商いの家で育ったユリには、やっぱりできませんし）
（虎之介殿、ユリさんをからかうものではありませんっ。ユリさんがお可哀想でしょう）
（ふふ、でも半分は本当だと、僕だって思っていたんですよ、パナマで作るんだって）
（えっ、それじゃぁ）

（そう、缶詰の缶で作るってのはでまかせ）
（カンカンって音がするのはどうなのでしょう。やっぱり叩いてみればよかったかしら）
（カンカンと音がするからカンカン帽と呼ぶのでしょうか。わたくしの国ではｃａｎｏｔｉｅｒと呼びますから、それでだと思っておりましたのに。たしかに硬いのですが、カンカンと音がする程でもございませんでしたわ）
（まぁ、カテリーヌさん、叩かれたんですか）
（いえ、叩いたことはございませんわ。でも、手触りで、分かりますでしょ）
（仏蘭西のお言葉からでしたの。わたくし、かんかん照りの日にかぶる帽子だと思っておりました。あら、でも、かんかん照りの日にかぶる帽子はどちらかというとパナマ帽の方かしら）
（ええっ、やっぱり、ユリ分かりません。カンカン帽とパナマ帽ってどこが違うのかしら）
（そうですな、たしかに形はそっくり）

第六話　セミテリオに里帰り　その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は４月６日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その五

（それで、まだ教えて頂いてないのですが、ロバートさんはどちらのお国の方なんでしょう）

（おっと、まだ申し上げておりませんでしたかな。亜米利加合衆国です）

（まぁ）

（　まぁ、とは失礼ですよ、絵都）

（すみませんでした。でも、お母上、アメリカには色々と複雑な思いがございます）

（絵都、わたくしがこちらに参ります前にも、大東和共栄圏を作ろうとがんばっていた日本に対してＡＢＣＤ包囲陣が敷かれ、石油や鉄が輸入できなくなって、日本はいじめられている様なものでしたから、絵都の気持ちもわからないのではないのですが、ロバート殿は、それより随分前に亡くなりましたのよ。ここのセミテリオでお付き合いさせて頂き、博識で日本のこともよくご存知ですわ）

（マサさま、かたじけない。絵都さん、お手柔らかにお願いいたします）

（お母上、そうはおっしゃっても、聡子も克子も朝子も尋常小学校から女学校までずっと、太平洋の両側で世界の警察をしているアメリカと日本、という風に教わっておりました。まだ国家として未発達なアジアの諸国を教え諭し治安を維持するのが、太平洋の西側に位置する日本の役目だと。けれど、所詮、アメリカは欧州の白人国家のお仲間、黄色人種は白人より劣っているからと、日本の覇権を快く思わず、日本を除け者にし、日本が我慢しきれなくなり、とうとう真珠湾攻撃、戦争になりました。婦人会の支部長やっておりましたでしょ。いくつもあった会が翌年には一つにまとめられて、殿方はどんどん戦場へ、残った私たちが、いえ、婦人会も上の役職は、

お年を召された戦地には行かれない町内会の要職に付かれている、退役軍人さんや大店の殿方が名前を連ねて、会合の度に最初に演説なさったりしてましたが、実際に動くのは私たち婦人でしたでしょ。それも、以前からのそれぞれの国防婦人会と更に旧い愛国婦人会が統合されましたから、表向きはみなさんにこやかに仲良さそうに、お国の為、銃後の護りなどおっしゃっても、一歩中に入ると、殿方の誰それを巻き込んで勢力争い、醜いものでした。それでいて　私たちは襷がけ、兵隊さんは命がけ　、みなさん白い割烹着に襷をかけて集まれば、神を敬ひ詔を畏れみ皇国の御為に御奉公致しませう、銃後も戦場だの、万歳して兵隊さんを送り出し、我が家の誉れだの、国防は台所からだの唱和し、貯蓄増強だの、金属供出だの隣組に回覧板を廻せばひそひそうわさ話なんだかんだどうのこうのと足の引っ張り合い。配給も滞るようになり、空腹を抱えての国防訓練、バケツリレーの消火訓練、はちまき絞めて竹槍訓練。そういう時はここぞとばかり威張り怒鳴りちらす退役軍人。それでもね、私、日本が戦に負けるなど思いもしませんでした。新聞でもラジオでも、どこそこで何隻撃沈、どこそこを死守など勇ましい話ばかりで、耐えれば，頑張れば勝つ、西洋がいくら強くとも、大和魂の前には膝を屈するだろう、神風が吹く、神国皇国大日本帝国万歳万歳万歳、でしたもの。窓ガラスにどう新聞を貼れば割れにくいか、男手の少ない中で防空壕を作り、先妻さまのお子の開は招集されてましたし、同じく光さんと、私の長女聡子はとっくに他家に嫁いでましたし、克子は療養中で神奈川へ、朝子は女学校ごと千葉へ疎開、松澤には妊った開の若妻と私だけでした。夜間になると鬼畜米英の軍機が頻繁に空襲、大事なものを詰めた背嚢を抱いて空腹をしのぎながらの眠れない日々。終戦の年の五月には空襲で、とうとう私達も焼けだされ、幸い節も私も怪我もなく、焼け跡に呆然と座り込んでいた私達のところに、翌日夕方、神奈川から克子が、千葉から朝子が、二人ともたどり着くまでに焼死体を嫌と言う程目にしたそうで、黒こげになったり生焼けの、まだぶすぶす音をたてたり灰色の煙が立つ、

申し訳ないけれどすさまじい悪臭のねじれたご遺体がいくつもごろごろ転がっていた、と青ざめた顔で駆けつけてくれました。克子の療養先の神奈川の方が近かったのですが、学校毎疎開し、県立高女に編入していた朝子はまだ学業半ばでしたから、皆で千葉に疎開いたしました。幸い、持ち出した背嚢にお金も貯金通帳も入れてありましたから、千葉で農家を間借りして、千葉なら安全だと思っておりましたのに、朝子が勤労動員で狩り出されていた工場に昼間空襲。女学生達が逃げ惑うのを米軍機はダダダダダッと追って銃撃したそうです。確かに帝国の飛行機の部品を作っていた工場でしたが、もんぺをはいていたからといって、操縦席から女か男の区別もつかないのでしょうか。朝子は幸い、工場内の事務机の下に逃げ、飛行機の音が遠のいてから机の下から出たところ、机の天板に穴があいていて、机の引き出しに弾が入っていたそうです。間一髪で助かったのですが、外に出てみたら、工場敷地内のあちこちに虫の息や絶命した級友達が倒れていて、お母ちゃま、とっても怖かったと、都内で焼死体をいくつも目にしてましたのに、その日の朝には普通におしゃべりしていた級友が何人も爆撃で亡くなり、朝子は涙も出ずに呆然としておりました。終戦後本来の女学校は再建され、授業も開始したのですが、松澤の家もすぐには再建できず疎開先にとどまり朝子は県立の方を卒業いたしました。それでも、朝子の元いた女学校の同窓会名簿は頂きまして、朝子の前後の学年は死去で住所が記載されていない方がたくさん。松澤の家によくいらした朝子のお友達もその時亡くなりましたし。米軍機のせいですわ。あたら若い命が、それも女性が。米軍機に狙い撃ちされたのですよ。米国の方を平然と受け止めよとおっしゃられても、お母上、無理ですわ）

（お爺ちゃん、すっごい迫力っす。歴史の授業より面白いっす）

（あらっ、どなたかしら）

（えっ、僕より若い声、どこ）

（俺っすか。あっ、俺、ちょっと来ているだけで、ここの住人じゃないっす）

（俺じゃなくて、僕と言いなさい。まったく躾がなってなくて、すみません。突然話しに割り込んで、すみません。私の孫でして。私の三男が墓参りしに来た時にここに一緒に来て、数日前からここにいるんです）
（え～と、まぁ、お宅さまがいらっしゃるのは存じておりましたが、いつもお静かに暮らしてらっしゃるので。義男さまでしたわね。まぁ、お孫さんがいらしてるのですか。あら、お孫さんって、随分若くこちらの世にいらしたようですわね。残念でしょう）
（ユリみたいに、ご病気ですか）
（まさか、我輩みたいに殺されたわけでもあるまい）
（事故というか、自殺というか）
（まぁ自殺ですの。カトリックでしたら同じお墓に入れていただけないこともございますのよ）
（お若いのにのっ、何故自殺など）
（あの，俺、自殺するつもりなかったっす、俺的にはあれは事故だったんですけどぉ、でも、俺が死んだあと、自殺みたいにされちゃって。まぁ、俺、矩雄達にいじめられてたから）
（俺じゃなくて、僕にしなさい）
（僕じゃ、保育園児か小学生みたいっす）
（僕、高校生ですが，僕と言います）
（お兄さん、昔の人でしょ）
（昔・・・たしかに。でも僕は高校生のままで・・・そりゃ生きていたらもう八十を超えてるけれど）
（ほら、やっぱり昔の人っす。俺のお爺ちゃんより年上っす）
（ところで、いじめられるようなひ弱には見えないがのっ）
（俺、のろいっす。でかいとのろくなるっす）
（おいくつですの）
（十四、中学二年っす）
（うわっ、この中で一番お若い）
（あら、ユリさん、わたくしのロビンが一番若いですわ）

（ば～ば～）
（ほら、ロビンが文句申してますわ）
（あら、カテリーヌさん、ごめんなさい。ロビンちゃんはお話できないんですもの）
（お話しできなくとも、心は通じておりますでしょ）
（カテリーヌさん、お許しになって）
（それでお名前は）
（武蔵っす）
（すみません。孫のしつけがなってなくて。ちゃんと、ですと言いなさい）
（無理っす。癖になってるっす。お爺ちゃん、もっとこのお婆ちゃんのお話聞きたいっす。歴史がこんなに面白いなんて思いもしなかったっす）
（面白い、ですか）
（だって、米軍機の爆撃のダダダダダッって、すっごい迫力っす）
（武蔵さん、私もね、空を飛んでいる米軍機なら、最初の頃はのんびり見上げておりました。でもね、あの戦争の時の生活、笑い話にはできませんわ。ほんと、ひどかった）
（終戦の日ってあるっす、夏休みの間に）
（まぁ、終戦がいつだったかもご存知ない。八月十五日ですよ）
（すみません、ほんと孫の躾がなってなくて）
（その終戦の日の頃になると、資料館が毎年、戦争中の暮らしってのをやるっす。それで、戦争中に使っていた、割れるお金とか、紙のランドセルとか、物が並ぶっす。俺、夏休み行くとこないから、暇で、毎年資料館行くっす。でも、いつも同じような物ばかり並ぶし、漢字も難しいし、つまんなくて。でもお婆ちゃんの話し聞いてると、すっごくわかるっす。だから面白いっす）
（戦争は、ＡＢＣＤ包囲陣でいじめられた日本がやむを得ず始めたものでした。いじめられていなければ、真珠湾を攻撃などいたしませんでした。原爆も落とされず、朝子の級友達も死なずにすみまし

た。私も戦後の苦労もせずにすみました）
（武蔵だって、いじめられていなければ、事故死ですんだものを）
（いじめはあったっす。僕的には事故死だけど、矩雄たちがいじめてたから、あいつら散々調べられたって思うと、いい気味っす。ざまぁみろ）
（こらこら、武蔵、言葉遣いに気をつけなさい）
（あら、その一寸意地悪な所、私気に入りましたわ）
（絵都こそ、お年を考えなさい。十四のお子と同じ考え方など、みっともないですよ）
（あら、お母上、お母上はあの頃、お父上のご病気にかかり切りで、私がどんな女学校生活でしたか、ご存知ないからおっしゃれるのですわ。そう、私もあの頃、十四でしたのね）
（女学校生活。いいなぁ。ユリ、あこがれます。美しい調べと甘い香りが漂う花園）
（ユリさん、そんなことございませんわ。花園には刺のある薔薇も、触るとかぶれる草や毒のある実、臭い葉も生えてますのよ。見かけと実態は異なるものです）
（まぁ、そうなんですか）
（あの頃の女学校は、私の娘達、光さん、聡子、克子、朝子の頃とは違って、まだ女学校に通う方は少のうございました。お金に余裕がなければ無理でしたもの。それに教育、ましてや女子教育をご理解なさってたご家庭だけでしたもの）
（あらっ、絵都お姉さま、ユリの家は余裕はありましたし、それに、和裁やお華やお茶や、色々身につけましたの）
（ユリさん、女子教育というのは、そういう伝統教育とは異なって、男子同様に、理科や数学や外国語も学び、偉い殿方の支えとなり家庭を築き、優秀なお子を育てる為の教育ですわ）
（でも、理科や算数の難しいのや他所のお国の言葉なんて、家庭に入っちゃったら、いらないでしょ。ユリはそういうお勉強は好きではありませんでした）

（たしかに、私も歴史や生物学や天文学など、大して役にたちませんでしたわ。英語は夫と出会ってからは話す時の基礎になりました）
（カテリーヌさんまでそういうことおっしゃる。わたくしは安政の生まれでしたし、まともにお勉強などできない時代でした。それでも、兄の書物をお借りしたり、殿方がうらやましゅうございました。それで、娘にも孫娘達にも皆、女学校に行かせました。それに、お兄さまが、女子教育に熱心でしたもの）
（お母上、たしかに、お父上より伯父さまの方が、私が女学校で学ぶことに熱を入れてらっしゃいました。お父上は、どうも、その辺り適当でしたもの）
（絵都や、おごじょには尋常小学校で充分だと思うのっ）
（だんなさ～、おごじょにも教育は必要でございます。兄もそう申しておりましたでしょ）
（いやぁ、武人どんは、その父上のご行状に困っておったからのっ。次から次へと弟妹ができるのは、父上に騙されるおごじょがいるわけで、おごじょがきちんと考えられるようにと。その程度なら尋常小学校で充分だのっ）
（まぁっ、だんなさ～、確かに私の父は手が早いと申しましょうか、節操がなかったとはいえ、おごじょが教育を受ければ父無し子を作るようなことにはならないのでしょうか。異国においつけ追い越せの時代、天子さまの下でおごじょもお国の発展にお役にたつ為にと思っておりましたのに）
（あのぉ、お父上お母上、お考えの違いは、よく分かりました。私、女学校のこと、ユリさんにお話ししてもよろしいでしょうか）

第六話　セミテリオに里帰り　その五（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は４月１３日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その六

（はいはい、絵都、それにしても元気になりましたね。こちらに参った時には、もう消えんばかりでしたのに）
（はい、皆さまのご様子や皆さまとのおしゃべりで、何だか若返った様です。それに、女学校の頃のことを思い出しますと、怒りと申しましょうか、若かった時の感覚になりますもの。あの頃は、もう）
（絵都お姉さま、何があったんでしょう）
（ユリさん、戊辰戦争や上野のお山の戦争、萩の乱や西南の役、ご存知でしょう）
（はい、戦の話しはあまり好きではありませんけれど、そういうのが私の両親の生まれる前にあったということは、聞いておりますし、小学校の教科書にも載っていたのを少しは覚えております。私の産まれる三十年一寸前に、日本のあちらこちらで、国を治めるのは将軍さまがいいか天子さまがいいか、阿蘭陀や中国朝鮮の他の夷国に門を開くかどうかで戦があって、その後には、武士には刀がいるかいらないか、いえ、武士はいるかいらないか、というような考え方の違いで、どれも天子さまと天子さまのお考えに刃向かう逆賊を成敗したのだと教わりました）
（そういう話は、私も血が騒ぎますのっ）
（我輩は日本の内乱時代と認識しておりますな）
（なるほど、内乱ですか。ロバートおじさん、それ分かりやすいです）
（ということは、こちらにいらっしゃる皆さまは、戊辰戦争も上野戦争も萩の乱も西南の役も、あったことと思ってらっしゃるのですよね）
（あったことと思ってらっしゃるとは、まるで無かったことの様に聞こえますわ。絵都、やはりまだ疲れてますわね）
（お母上、そういうお考え、その様な戦は無かったというお考えの

方もいらっしゃる、いえ、いらっしゃったのですもの）
（まさかっ。私は西南の役、まさにその場におったのっ。あれが無かったなど冗談にも程があるっ）
（だんなさ～、あったに決まっております。兄が従軍いたしました折に、私の家では、つもり札を玄関にかけて兄が戻って来るのを待ちましたもの。だんなさ～のお宅でもそうでしたでしょ。でも、それはあまりおっしゃらない方が）
（お母上、その、おっしゃらない方が、というのが元でした）
（えっ、絵都、どういうことなのでしょう）
（あのぉ、お姉さま、あったことと思ってらっしゃる、とおっしゃいましたが、なかったのでしょうか。確かにユリ、その時ま生まれておりませんでしたけれど）
（冗談じゃないのっ。私は全部あったと知っておるのっ）
（あったっす。戊辰戦争と西南の役は、教科書に載ってたっす）
（おっ、上野戦争と萩の乱は載ってないのかのっ）
（俺が覚えてないだけかも知れないっす）
（教科書に載っていたって、それがあったということにはならない、そういうお考えの方がいらっしゃるのです）
（んだもしたん）
（僕、理解できるような気がします。西南の役や日清日露戦争が無かったというのではなく、それはあったと父から聞いていますし、父を信じますが、生物学や地学は目で見える、物理や科学の実験は自分でやれば、教科書に書いてあることが事実だと認識できますが、それに比べて歴史は、その時代にその場で生きていた人にしかあったということはわからないですから、僕が、父の言ったことを信じられたように、教科書を信じられればいいのですが。教科書に限らず書物に書かれてあることが本当にあったかどうか。普通は教科書を信じますから。教科書はとても大事なわけですね）
（ふむ、なるほど。然し乍ら、戊辰戦争も西南の役もあったのだのっ）

（あったことを知っている人から見れば、あったことをなかったことにしてしまう人は、もう別世界の人間、互いに分かり合えない人になりますね）

（そうでしたのよ。先ほど、それはおっしゃらない方がとお母上がおっしゃったのは、お父上が西南の役で、薩摩の方々を成敗する側にいらしたからでしょ。天子さまのご命令でご成敗なさったのに、薩摩の出でありながら薩摩の同胞をご成敗なさったことは、薩摩の方々に対して申し訳ないと感じられるから、もしかしたら、薩摩の方々に恨まれるから、おっしゃらない方がよいとお思いなのでしょ。官軍側にいて、天子さまのご命令でご成敗なさったのに、何を恥じることがあるか、何を隠すことがあるか、それでも、薩摩の賊軍側からはうらまれる、からでございましょ）

（そうですよ。西南の役の後、だんなさ～も私も、薩摩には二度と足を踏み入れられないと、覚悟いたしました。一昔前まではご近所だった方々、だんなさ～の場合は藩校で机を武芸を共になさった方々が敵味方に別れて刀を銃を向け合ったのですもの。勝って官軍、勝った側とは申せ、とてもお顔を合わせられませんでした）

（今、お母上が、おっしゃらない方がとおっしゃいましたように、おっしゃらないくらいで済まされるのでしたらまだよいのですけれど、辛かったから、裏切ったから、後ろめたいから、そんなことはあったことにせず、無かったことにしてしまおうと、そう思ってらっしゃり、あったなど嘘八百、世迷い事血迷い事出鱈目だとおっしゃる方もいらっしゃったのです）

（どこに）

（女学校でのことですわ）

（まぁ）

（女学校の級友達のご両親さま、ご祖父母さまはほとんど　幕臣や薩長土肥のご士族、新政府に関わる方々や商家でしたから、大方は東京で生まれてましたから、東京言葉でしたけれど、それでも、ご祖父母さまやご両親さまのお国訛も一寸した時に表れましたし、ご

先祖さまのご威光を傘になさる方もいらっしゃいましたし）
（お爺ちゃん、ごいこうをかさになさる、って何）
（ご先祖さまが偉いから自分も偉いんだっていうような）
（雨が降るから傘をさすってのとは違うんだ）
（え～と、武蔵君、ご先祖さまの偉さを傘にして傘の下で雨に濡れないように、つまり、他人から自分を護るっていうような）
（なんとなくわかるっす。矩雄が、父ちゃんが町会議員だからえばってたのと同じかな）
（そうそう）
（薩長土肥や新政府や商家のお子がいらした事はわたくしも存知ておりましたよ。でも幕臣のお家の方は少なかったでしょうに。大方、駿府にお移りになられましたし。いづれにせよ、色々なご出身の方々と共に学ぶことはすばらしいことだと、わたくし思っておりましたわ）
（素晴らしい時もございました。おかっぱやお下げの無邪気な頃は。あら、お母上、幕臣のご子孫もいらっしゃいましたのよ。戦には加わらなかった方々や、新政府に登用された幕臣もいらっしゃいましたでしょ。あの千代さんも、お父さまは幕臣、お母さまは薩摩のお出でしたし）
（千代さん、そういえば、いつ頃からかしら、お遊びにいらっしゃらなくなりましたわね）
（そりゃそうです。私に合わせるお顔はなかったでしょう。お母上、よくお名前覚えてらっしゃいますね）
（薩摩恋唄の千代に八千代にの美しいお名前だと思っておりましたから。で、どうしてお顔を合わせられなくなったのでしょう）
（学級の中で、派閥に分かれてしまうものです。長州のお家の方々同士、幕臣の御子孫の方々同士、江戸以来のご商家の方々同士、どうしても、お話が合わせやすいですし似た様なご家庭ですものね。私も、薩摩の節さんや良子さんと仲良くしておりました）
（節さんは日向、良子さんは大隅のお出でしたっけ、確かに薩摩で

すものね。でも、宮之城とはだいぶ離れてますのに）
（それでも、長州や江戸東京に比べれば近うございましたもの）
（節さんって、あなたの義息の奥さまも節さんでしたわね）
（そう。昔のお友達と同じお名前でしたから、気に入りましたし、それに開さんが戦地に行っている間さんは大切にいたしましたのに、戦後節さんには裏切られました）
（まぁ。ああ、そういえば、そういうお話しもここにいらしてなさってましたわねぇ）
（あの頃はもう辛くて辛くて、一刻も早く碧さんと会いたくて、でも辛いだけでは死ねなくて、お父上お母上がこちらに私を招んで下さらないかと思っておりました。それに比べれば、女学校の時のことなど大した事では無かったのでしょうが、私は他人を信じ、お国を信じ、裏切られてばかり。あれが最初だったのでしょう。二年生の秋に、京都から転校生が入ってらして、その方、元は東京の方だったそうですが、お父さまのお仕事の関係で数年間大阪で暮らした方で、戊辰戦争の大砲の痕が残るお寺の事をお話なさったんです。まぁ恐ろしい。女に生まれてよかったですわ、でしたのに、それを耳にされた幕臣御子孫の薫さんが、見てきたような嘘をおっしゃい、そんな戦などございませんでしたことよとおっしゃったものですから、教室の中が侃々諤々。たしかに、どなたも戦を目にしたわけではないですし。でも、あの頃、どなたでも、そういう戦があったことは、ご存知でしたでしょ。薫さんが、開幕以来二百六十余年徳川家は常に天子さまを上位に置いてましたのに、戊辰戦争など幕府を陥れる悪質な嘘ですわ、私達唖然。薩摩の方々は確かに西南の役で同胞に刃を向けましたが、江戸幕臣は天子さまに刃向かうなど、起こりえませんわ、と声高に。みなさん、呆然。わたくし、何か間違ったこと申しまして、と背筋を伸ばしておっしゃり、あまりの御発言にみなさま何も申せず、ただただ愕然。その後で、私、節さんや良子さん、千代さん達薩摩の方々と、それに長州の方々とおしゃべりしておりまして、薫さん凄いわねぇ、あれじゃぁ反論できなくな

ってしまいますわ、私たち、どなたも戦を目にしたわけではございませんもの。でもそれじゃぁ、歴史を学ぶなんて意味ないですわねぇ。書物を書かれた方はもしかしたらその時代に生きてらしたかもしれなくとも、書写している間に中身は変わってしまうかもしれませんし、歴史のことはみんな嘘ってことにもできますわねぇ。あら、それじゃぁ、歴史を学ぶのは歴史から学ぶ為ってのも成立しなくなりますわ。で、私が、自分の目で見た物事しかあったことにならないのでしたら、家康さまが江戸開幕をなさったのも、嘘なのかしら。家康さまが江戸開幕なさってないのでしたら、幕臣って何なのでしょう、魑魅魍魎とでもおっしゃるのかしら、いえ、魑魅魍魎も普通は見えませんわ。千代さんも、幕臣の方々の家系は呪われてるのかしら、嫌ですわ、私の血の半分は呪われてるのかしら。唖然呆然愕然とさせられた私達、それ以降、薫さんを然るの君と名付けました。それから数日後です。然るの君がお仲間を数名引き連れて、すさまじいお顔で、悦さん、私のことを魑魅魍魎とおっしゃったそうですわね。幕臣は魑魅魍魎だともおっしゃったそうですわね。私、一瞬訳がわからなくなりました。薩摩長州のお友達との間で交わした冗談でしたのに、どこから漏れたのか。もしかして、下級生に聞かれたのかしらと思っておりました。でも、私達、幕臣の方々が魑魅魍魎と申した訳ではなく、然るの君とお仲間がそう思ってらっしゃるのかしら、でしたし、口伝えで話しが変わってしまったのだと、大して気にもいたしておりませんでした。千代さんはお父さまが幕臣でいらしたから、然るの君ともお付き合いなさってらして、数日後、千代さんが、然るの君が、さつまっぽとは私達付合わないことにいたしておりますのよ、と、わたくしに言われたんですよぉ、ってご注進にいらして。さつまっぽ、ほとんど耳にいたしたことの無い言葉でしたけれど、薩摩藩士を馬鹿にした言葉らしいと知りました。自分の目で見た物事しか信じられない方、ましてや歴史、しかもそれを経験した方々が生きてらっしゃる時に起きたことすらも信じられない，無かったことにしてしまう方々とのお付き合いはこちらも

願い下げですから、お付き合いしないという言葉そのものは大して気にもならなかったのですが、そのまた数日後、千代さんがおっしゃるには、さつまっぽ、つまり私達が、幕臣の家系は呪われているとおっしゃってることに大層腹をたててらっしゃる、と。あら、それ千代さんがおっしゃったことじゃないの。どうして私達の言葉になってるのかしら。それで気付きました。父方は幕臣、母方は薩摩の千代さん、どちらとも仲良くしたくて、でもお父さまの方の家系が天子さまに戦を挑むことなどなかったとする方がお気が楽になるのか、気のお強い然るの君のお仲間になってしまわれたようでした。ご自分のご発言すら無かったかのように。こちらのお仲間のお顔をなさって、あちらの方々の悪口を伝えにいらっしゃるなど、卑怯者のすることですわ。私、武蔵さんと同じです。意地悪。その時思ってました。千代さんを取り込んだ薫さん達、呪われていると思ってらっしゃる、ご発言なさったのは千代さんでしたから、身内に毒を抱えてらっしゃる、獅子身中の虫、いい気味ですわ、って。武蔵さんの意地悪な気持ち、よく分かりましてよ）

（んだもしたん。そんなことがあったのですか）

（お父上お母上にお話しできませんでした。それに戊辰戦争は無かったなど、あまりに馬鹿らしくて）

（あはは、身内の恥になることは、無かったことにしてしまいたいのだのっ）

（もしかしたら、無かったことにしてしまいたいと思ってらっしゃる方の方が、あったことをはっきり分かってらっしゃるのかもしれませんわ。それが辛い、ですから、千代さんはそちらのお仲間になりたかったのかもしれませんわね）

（あのぉ、ししんちゅうのむしって、早口言葉っすか。四文字熟語でもないみたいっす）

（早口言葉はいいのっ）

（獅子の体の中に虫がいるってことだのっ。役立つ様に見えて、実際は腹の中から獅子を喰う）

（獅子って）
（武蔵君、ライオンのことだ。ライオンの寄生虫）
（寄生虫、何かの授業で聞いた様な気がしまっす）
（僕も、分からない言葉があったんですが、さつまっぽとは、薩摩の人を馬鹿にした言葉なんでしょうか。僕の頃には使われてなかったように思いますが）
（幕末の頃から使われていたようだのっ。江戸の町人が、しきたりや言葉が違う薩摩の小柄な侍を小馬鹿にしてそう呼んでいたらしいのっ。悪口ということになるのだがのっ、ちと懐かしい言葉ですのっ）
（その後、どうなったんでしょう。ユリならやきもきしてしまいます）
（分け結びになって、つまり三年生になっても、そのまま、互いに無視しあって。いえ、無視すら私はしておりませんでした。無視するというのは、意識してのことでしょう。事実でも過去の事はあったことになさらない方々、声高にどこか間違ってらっしゃるかしら、などとおっしゃる方と同じ土俵に立つのは馬鹿らしくて。鬼の形相、蚤の心の方々と同じ土俵に立ってしまったら、同じ様に腹を立ててしまいましたら、こちらも鬼の形相，蚤の心になってしまいますもの。それこそ、魑魅魍魎の方々のお仲間にはなりとうございませんでしたし。それにそれどころじゃなくなってました。お父上が、看病に付合え、勉強などおいが死んでからでもいい。勉学より父の方が大事だろっ、とおっしゃってましたから、女学校を退学したくないのに、どうしましょうと悩んでおりましたし）

第六話　セミテリオに里帰り　その六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は４月２０日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その七

（それでお父さま、あら、彦衛門さまのことですわね。彦衛門さまがこちらの世にいらして、絵都さまは卒業なされたてからご結婚なされたと先ほどおっしゃってらしたから、その後女学校に戻られたのですわね）

（はい、あっ、戻ったと言うよりも、別の学校に入り直したのです。退学したのが三年生の途中でしたから編入試験を受けまして、三年生からまた三年間、九段の方の女学校は以前より近くて、家から歩いて行けましたので電車に乗ることもなく、前の女学校の方々から自然に足が遠のいて。転校生や高等小学校からの編入生も結構いらして、そうそう、病気療養で治られてからという方もいらっしゃいまして、年齢もまちまち。ユリさんのおっしゃる　美しい調べと甘い香りが漂う花園とは程遠い、勉学の日々でした。大学とまでは思っておりませんでしたが、専門には進学したいと思っておりましたので、勉学に勤しんでおりました。なのに、お父上は亡くなられてからも私の勉学をお邪魔なさって、許嫁の話しでございましたでしょ）

（それで長州にいらして、東京に戻られて）

（お母上には伯父の家に行儀見習いに出され）

（まるで鬼母の様におっしゃる。温はもう嫁女を頂いてましたし、あなたは出戻りでしたし、あなたが兄のところにいらっしゃれば、その内良いご縁もあるかと）

（お母上とは毎月一日にだけご一緒いたしました）

（おっ、私の墓参りだのっ、とは申せ、あの頃はこういうことが出来るとは知らなかったのでのっ、マサがこちらの世に来るまでは、ただただぼんやり、いや、ぼんやりしておったことすら気付かなかったのっ。知らぬということは見えぬ、できぬということですのっ）

（お母上は、こちらにお参りなさると、墓石を撫でて）

（ほうっ、もし気付いていたならくすぐったかったであろうのっ）
（お母上はお父上に小声でお話なさってましたが、私は、いつも恨み半ばで。退学させられたり、知らない殿方と結婚させられたり、あの頃は、なんで私の邪魔ばかりなさるのかと）
（はは、私は覚えてないのっ。あの頃の私は、気の世界を知らなかったからのっ。知らぬものは感じられぬ、気付かぬ。まぁ、お前の級友のように、あったことを無かったことにするよりはいいがのっ、在るということを知らぬと、無いのと同じだのっ）
（行儀見習いって何をなさってたんですか。ユリの知らない世界です）
（居候では申し訳ないから、少しはお手伝いするってことかしら。使用人達をどう配分するか、家事の切り盛りをなさる伯母さまのお手伝いをするというような。それと、従妹のお勉強も少しはお手伝いいたしました。従妹と一緒にお出かけしたり。お客さまがいらっしゃる前に、どういう献立にするか伯母さまと一緒に考えたり、伯父さまのお客さまにはよくお茶とお菓子をお出しいたしました。そうすれば、再婚相手が見つかるかもしれないって、伯母さまがおっしゃって）
（先ほど、満州にお住まいだったとおっしゃってましたな。その伯父さまは満州に渡られたのですかな）
（いえ、伯父のところによくいらしていた方から、満鉄のお仕事をなされてる甥御さんが奥さまを亡くされて幼子を抱えて困惑なさってるというので、一度会ってみたらと言われて。その甥御さんにはお兄さまとお姉さまがいらしてどちらももうご結婚されていて、ご両親はもう他界なさってるとのこと。伯父さまは、満鉄ならば安心だ、将来有望な会社だ。鉄道が無くなることはないだろう。係累も少ないようだし、それに、再婚同士なら上手く行くかもしれない、悦ももう三十路が近いから、嫁ぐつもりがあるのなら、ということで）
（絵都お姉さま、お見合いなさったのですね）

（あれはお見合いというのとは違ったと思いますわ。何しろその方、内地にいらっしゃらなかったのですもの。伯父さまの外遊に伯母さまの替わりに大連に随伴いたしまして、伯父さまのご友人のお宅にその方がいらして。伯父さまはお仕事の後、内地に戻りましたが，私はそのままそのご友人のお宅に居候させていただいて、碧さんには大連をご案内いただきました。碧さんのお子様、開さんが八つ、光さんが三つの時でした。開さんは丁度、一雄と同じ齢でしたから、一雄もこんなに大きくなっているのかしら、いえ、一雄はもう私の子ではない、などと思うこともございました。毎週、三人と私で大連の港や昔は露西亜のお役所だった所や、倶楽部やアカシヤの並木をお散歩いたしましたり、会社が新しく造っていた星が浦の浜にも光さんの手を引いて。光さんの左手は碧さんがお握りになって。開さんは最初は碧さんの横にいらして、でもだんだん、まるで私を護るかのように私の側にもいらっしゃるようになって、その内、恥ずかしそうに私の空いている手に手をつないで、四人で手をつないでお散歩いたしましたのよ。屋台でピロシキを頂いたり、ホテルで一緒に洋食を頂いたり、洋食も、独逸、仏蘭西、露西亜など色々ございましたのよ。街並もあの頃の東京以上に未来的で、碧さんのお住まいも、なんでも満鉄の方のご設計だとかで、西洋式住宅でした。その辺り、西洋式住宅の街並になってまして、西洋式で暖炉もございましたが、でも、オンドルでした）

（オンドルって何っすか、ピロシキは俺知ってっす。コロッケみたいなのっしょ）

（美味しゅうございました。わたくしも存じております。お茶の水の近くに美味しいお店がございましたわね。わたくし、ピロシキもですが、あの赤い、何でしたっけ、ぼる壱とかが、身体が暖まって好きでしたわ。給仕がみな露西亜風の服で）

（ルパシカですね。僕より上の世代の露西亜好きが着ていましたよ、あと芸術家気取りの連中も）

（お母上のおっしゃるのは、ボルシチですわね。赤い蕪で色を出し

ます。あのお茶の水のお店、そういえばお母上と参りましたわね。娘達を連れて。あれは、いつでしたかしら。日本がまだ穏やかな頃でしたわ）

（ぼるの後が壱ではなくて七でしたのね）

（なんだのっ、私がこちらに来てから、マサも絵都も美味なものを喰っておったのだのっ、悔しいものだのっ）

（武蔵さん、オンドルは薪や練炭を炊いて、床下から暖めるのです。朝鮮式だと聞きました。あれはとっても暖かくてね。日本も同じ様になされば冬は過ごし易いのにとあちらの世にいる間、ずっと思ってました）

（なるほど。いい方式ですね。暖かい空気は上に行くから、下から暖めれば、全体が暖まる。それに、床が暖かいと、足がつることもない。もしかして冬も布団が冷たくないわけですね）

（え～と、虎之介さんでしたっけ。そうなんです。お布団を早めに敷いておくと、お布団がぽかぽかといたしましてね。安眠できます。お布団はね、満人の女中には任せず、いつも私が開さんのも光さんのも敷いてました。あら、話しが前後してしまいましたわ。まだ一緒に暮らし始める前、光さん、可愛くてね。碧さんとご結婚したら光さんと毎日一緒にいられるのだと思いました。一雄の替わりに開さんを育てようって。もちろんそんなことは開さんには申しませんでしたけれど。碧さんも、温お兄様みたいにお優しい方で、一緒になることにいたしましたの。それで写真館で一緒にお写真を撮っていただいて、お母上にはお送りいたしましたわね）

（そう、絵都、あの頃は悦でしたが、悦がよければそれでいいと。悦は大連にお訪ねくださいと何度もお手紙をよこしましたが、わたくし、もう海を渡る気はなくて）

（もう、とおっしゃると、マサさまはそれ以前に外国にいらしたことがございましたのですな）

（いえ、外国などとんでもございません。それに大連はあの頃、外国ではなく、日本みたいなものでした。ただ、わたくし、船はどう

も苦手ですの。薩摩から東京に参りました時に、参りましたものですから）

「家の墓はどこだ」

（まぁ、またご自宅のお墓が分からない方のようですわね）

（斯様に多数ある墓の中から探すのは大変ですな）

（日本語ってやっぱり面白いものですわ。参るには来るという意味と降参という意味があるんですね、参ると参るわけですね）

（カテリーヌさん、それじゃぁ、これは分かるかのっ、まずいとまずくない、まずくないとまずい）

（えっ、それ、ユリにも分かりません）

（おいしくないとおいしい、おいしいとおいしくない、ですか。僕にもわかりません）

（あっ、それ、俺わかるっす。俺も同じっす。お爺ちゃん、え～と、俺のお爺ちゃんじゃなくて、そのぉ）

（私のことですのっ）

（そうっす。その、お爺ちゃんと俺、同じ様な体型だから、つまり、ごめんなさい、太ってるから。太ってると食べること、気になるっす。まずいとあまり食べたくないから、まずくならない、え～と、太るってことにならない。けれど、まずくないと、つまりおいしいと食べちゃうから、太るからまずいことになる、っすね）

（そう、流石、食べると太る身には分かる悩みですのっ）

（何か、お爺ちゃん、ひどくないですか。僕がお爺ちゃんと呼ぶと、私は虎の介殿の祖父ではないっ、とおっしゃるのに、武蔵君が言うのは構わないのですか）

（いやぁ、それは、つまり、武蔵君とは年の差が）

（たいして違わないと思いますが）

（でも、俺、平成生まれっすから）

（うっ、僕、大正）

（私は嘉永元年の生まれだから、のっ、虎之介殿と私は近すぎるのっ、武蔵君とは年が離れておるのっ）

（嘉永元年っていつっすか）
（千ハ百四十八年ですな）
（うわっ、外人さんなのに早いっす）
（で、虎之介お兄ちゃんは）
（大正十五年、千九百二十六年です）
（で、俺が平成七年、千九百九十五年だから、お爺ちゃんと俺はえ〜と）
（百四十七年の違いですな）
（うわっ、外人さんなのに、またまた早いっす）
（で、お爺ちゃんとお兄ちゃんでは、外人さんお任せしまっす）
（七十八年ですな）
（で、お兄ちゃんと俺は）
（六十九年ですな）
（そういう計算だとそうなりますが、けれど、こちらの世に来た時の年齢ですと、彦衛門さんが）
（六十一でしたのっ）
（僕は十七でした。で、武蔵君が）
（十四っす。あれっ、虎之介お兄ちゃんと三つしか違わない）
（だからですよ。武蔵君にはお爺ちゃんと呼ばれても怒らないのに、僕が呼ぶと）
（私は虎之介殿の祖父にはあらず、ですのっ）
（虎之介殿、まぁ、細かいことはいいではないですか。わたくしも、虎之介殿には、お婆ちゃんと呼ばれるのはちょっと。まぁ、慣れましたが）
（釈然としません、いえ、またちょいちょい呼ばせて頂く事に致します）
（俺、さっきまでずっと我慢して黙ってたっす。けど、外地とか内地とか大連とか満州とかどこにあるっすか、まんじゅうなら知ってっす）
（まぁ、今のお子さんは満州を知らないのですか）

（お母上、満州が無くなってから、もう六十年経ってます。戦後生まれの武蔵さんが知らなくとも不思議ではございませんわ。あっ、私の申します戦後は、お父上、戊辰戦争や西南の役ではございませんし、お母上の亡くなられた後の、日支、第二次世界大戦の戦後のことでございます。武蔵さん、昔の日本は強かったのですよ。西欧列強と並んでおりました。大東亜共栄圏という考え方で、阿片戦争以来弱くなった中国に代わり五族共和を唱えアジアの中心になろうと、いえ、なっておりました。その時、今の中国の東北端の辺りを満州と呼んでいたのです。都は新京、北の方で、そこまでは私も参りませんでした。ほとんど南満州の大連、港町におりましたのよ）

（へぇ～そうだったんすか。んで、内地とか外地はなんすか）

（元々の日本を内地、後から日本の国土になったみたいな所を外地と呼んでました。琉球も台湾も外地と呼んでましたわね）

（琉球って）

（武蔵、沖縄のことだ）

（外地ってことは外国だったっすか、沖縄は日本っしょ）

（江戸時代には、琉球には王様がいらしたのですよ）

（そうそう、我が薩摩藩が支配しておったのっ。なのに、清とも通じておってのっ）

（へぇ～。王様がいたっすか）

（琉球は、大戦後は本当に外国でしたね。パスポート、旅券が無いと行けなかった）

（まぁ、義男さん、中国になってしまったのですか）

（いえ、アメリカが支配してましたよ。四十年程前まで三十年近く）

（五族共和って何かしら）

（あっ、それは僕が説明しましょう。元々は中華民国が言い出してたんですね。漢族、満族、蒙古族、回族、西蔵の五民族の内、一民族による支配は不平等だと孫文達が唱えていたんです。大日本帝国が満州国を建国した時に、五族を、日本人、漢人、朝鮮人、満州人、蒙古人にしたんです。要するに、色々な民族が一緒になってよい地

域、よい国家をつくろう、ってことだったんですね。ただ、僕がこちらの世に来る前のことでしたが、日本に一方的にそんなこと言われたって、他国、他国民は従う気になるわけなくてね。あっ、今、こちらの世ですから言えますが、こんなことあの頃にはおくびにも出せませんでしたね）

第六話　セミテリオに里帰り　その七　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は４月２７日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その八

（五族共和で、みんなで一つになって大きい国になろう、ってののどこが悪いのかのっ）
（みんなで仲良くって言ったって、仲良くしたくない人っているもの。ユリ、わかります。それにみんなの中に、仲良しになりたくない人もいるってこと、よくあるでしょ）
（仲良くしろって言われたって、押しつけられて仲良くできるわけないっしょ）
（確かに。学校の先生はよくおっしゃった。でも、嫌な奴っていますからね）
（すぐ乱暴したり、いばったり、人の物盗ったり隠したりする奴）
（そうそう、陰で悪口言いふらしている人とかね、ユリ、大嫌いでした。あっ、絵都お姉さまのなんでしたっけ、なんとかの君の話もそうかしら。先生は仲良くっておっしゃったって、嫌ですよねぇ。それに、先生がいない時に誰かが先生みたいにそんなこと言ったら、やっぱり嫌だわ、ユリ）
（俺、その先生みたいなだちっていたっす）
（だち、って何かしら）
（え〜と、カテリーヌおばさん、日本語っす、友達のことっす）
（我輩もそのだちというのは初耳ですな）
（私もだのっ。新しい日本語のようですのっ）
（俺のだち、友達の慎也ってのがそういう奴で。保育園の時から一緒で、とっても頭がよくて、性格もいいってのかなぁ。先生みたいなこと言ってったっす。葬式に来てくれてうれしかったのはあいつだけ。ほんとは、慎也なんて呼びたくなかったっす。保育園の頃、最初は慎ちゃんって呼んでたっす。けど、テレビの漫画で、幼稚園に通ってる、なんかちょっとエロっぽいしんちゃんって子がいて、それで俺のだちの慎也は、しんちゃんって呼ばれるの嫌がるっす）

（エロってなんでしょう）
（え～と、外人のおばさん、エロ知らないっすか。うっそぉ。だって、エロって、英語だっしょっ）
（そのだっしょというのは英語のｄａｓｈですかな）
（あ～、外人のおじさん、だっしょっは日本語っす）
（僕分かりますよ。エログロナンセンス、なんか退廃の匂いがぷんぷんしますね。僕の頃、日支戦争の頃からは唾棄された言葉ですね）
（わたくしも、耳にしたことはございますわ。お下劣お下品で、女性は口にしてもいけない言葉だと思いました）
（私は聞いたことないのっ）
（ユリも知りません）
（ナンセンスは、わたくし、分かりましてよ。仏蘭西語ですもの）
（うわぁ、外人のおばさん、フランス語も知ってるの）
（わたくし、仏蘭西人ですの）
（フランス・・・外人ってみんな英語しゃべるんじゃないんだ。あれぇ、おばさん、昔の人でしょ。そんな昔にも日本にフランス人がいたっすか。へぇ～）
（わたくし、傷ついて参りました。わたくし、そんなに昔の人なのでしょうか。外人ってみんな英語を話せると思われるのでしょうか。わたくしは夫と英語で話せることを少し誇らしく思っておりましたのに、英語はあたりまえなのでしょうか、いえ、英語より仏蘭西語の方が格式高いですのに）
（武蔵君、君、幕末の日本の歴史はまだ学校で習ってないのかな。フランスは江戸幕府の軍の近代化を助けたのだが。それと皆さん、エログロナンセンスは全部フランス語ですよ）
（まぁ、虎さま、わたくし存じませんわ）
（それは、いつもの日本語のお得意ので、短くしていますから。ｅｒｏｔｉｑｕｅ、ｇｒｏｔｅｓｑｕｅ、ｎｏｎｓｅｎｓｅですよ）
（ｏｕ　ｌａ　ｌａ、まぁ）
（それは、んだもしたんと同じようですな）

（んだもしたんってフランス語っすか）
（わっはっはっ。薩摩言葉が仏蘭西語かのっ。驚いた時に使う言葉ですのっ、日本語ですのっ）
（日本語・・・あっ、方言っすね。俺がかんますとか水くれというとお爺ちゃんが分からなかったのと同じっす）
（そうそう、かんますはまだかき回すと似ていますし、動作があったのでわかりましたが、水くれと言われた時には、随分乱暴な言葉遣いだと思いながらコップに水を入れて渡そうとしたら、武蔵がきょとんとしてました）
（義男さんはこちら、あっ、セミテリオではなく、東京の方ですものね、お孫さんと言葉が通じないのはお辛いですわね）
（いやぁ、大半は問題なかったですよ。テレビの全国放送のおかげで、どこでも標準語は通じますから。でも、幼い子は、育った場所の言葉を覚えますからね。水くれと武蔵が言ったのは小学校の一年生の時ですよ。ですから余計に乱暴な言葉遣いだと思いましてね。注意しようとしたら、武蔵が、朝顔の鉢に水くれしないとと言うんですよ。で、私、それは、水やりと言うんだ、朝顔が水をくれって頼んでいるのかな、と言うと、武蔵が学校の夏休みの生活の紙を見せてくれましてね、そこに、水くれをわすれないように、って書いてあるんですよ。気持ち悪くてね。やるのは人間、くれと言うのは草花の立場の言葉だと、今でも私は思うんですがね）
（所変われば品、いえ、言葉が変わるですな）
（そう、ですから、所変われば言葉変わるで、私は仏蘭西人ですから仏蘭西語ですのよ、武蔵君）
「家の墓はたしかこの辺だったのになぁ」
（またいらっしゃいましたわ。先ほどの方）
（管理棟で訊いてくればいいのに）
（お恥ずかしいのではございませんか。ご自分のお家のお墓の場所を尋ねるなんて）
（武蔵君、仏蘭西語の方が英語より格上として扱われていることを

ご存知かな。外交官たる者、フランス語は必須）
（外交官ってなんすか、外交員なら慎也のお母さんがパートでやってたけど）
（外交員とは我輩も知らぬが）
（外国人さんだから知らないのかなぁ）
（武蔵君、こちらのロバート殿はややもすると私より日本語が達者ですのっ、いや、ややもしなくとも達者ですのっ）
（いえ、左様な事はございませんな。何しろ、そのややもすると、のややが分かりませぬ。意味は分かるのですが、なぜ動くという字をややもすと読めるのか不思議でなりません）
（日本語は漢字が特に難しいですものね。わたくし漢字はあきらめましたのよ）
（あっ、俺と同じっす）
（こら、武蔵、お前は日本人で中学生だろう、あきらめてどうする）
（お爺ちゃん、こっちの世界に来てまで言わないでよ。それにもう、あきらめて構わないっしょ。まさかこっちの世界にも学校があるなんてことないっしょ）
（武蔵君、学校はない。安心していい。けれど、学習意欲、向上心が無いと、こちらの世界から早く消えてしまうやもしれぬ）
（えええっ、そうなんっすか）
（いや、冗談。好奇心が無いと、消えるらしいのです）
（へえ～）
（でも、漢字は別にいいっしょ。漢字は小一の時から嫌いっす。一年生の生って字、俺、ぶって読んだっす。だって、爺ちゃんの好きな将棋の羽生名人の名前だと生をぶって読むでしょ。で隣の市の名前は羽生って同じ字なのににゅうって読むし、小四だったかなぁ、埼玉県の地図見てたら読めない地名があって、それだと、生をせ、って読むし、こういうのは全部人や場所の名前だから特別だとしても、生まれるの時はうって読むし、家庭科だと生物はなまって読むのに、理科だと生物はいって読むっしょ。なのに最初に覚えさせら

れるのはせいって読むわけで。で、一生ってしょうって読むでしょ。いくつ言ったっけ。ぶ、にゅう、せ、う、なま、い、せい、しょう、ここまでで八つっしょ。他にもあるのかなぁ。たった一つの漢字なのに八つもあるっす。たまらないっすよ。それに書き順だとかはねるとか、送り仮名とか、うんざり。外国人さん、こんなに読み方あるの知ってっすか。それに外交員は知らないっしょ。方々にいるのに）

第六話　セミテリオに里帰り　その八　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は５月４日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その九

（方々にいるのが外交員ですかな。外交官と似てますな。我輩もかつては外交官でしたが、普通はあちらこちらの国に本国から派遣されて）

（あっ、似てるっす。外交員ってね、市の事務所から毎日あちこちの家に行って、保険に入りませんかって勧誘するっす）

（あら、それでしたら、わたくしの頃にもいらっしゃいました。徴兵保険や火災保険の勧誘員のことですわね）

（ほうっ、つまり、外交員というのは、保険の勧誘を行う者のことですな）

（そうそう、それっす）

（ｐａｒｔでやるとは、一部でやるということですかな）

（パートってのはアルバイトみたいなので、おばさんがやるっす）

（アルバイトとは、独逸語ａｒｂｅｉｔ労働ですね）

（あるばいとが労働で、ぱぁとが一部で、えっと、ユリ、ついていけません）

（おばさん、日本人っしょ、分からないのは古い人だからっすか）

（まぁ、カテリーヌさま、ユリも傷つきました。古い人ですって）

（カテリーヌおばさんもユリちゃんも、古い人には違いない）

（まぁ、虎ちゃんまで）

（だって、僕から見たって、お二人は僕より四半世紀も早く生まれてるんですよ。僕が生まれた時には、もうお二人ともこちらの世界にいらしたでしょ）

（そりゃそうですけれど、やっぱりユリ、古いと言われるのは嫌です）

（申し訳ございません。本当に私の孫は躾がなってなくて）

（あのねぇ、アルバイトってのは、学校行きながら仕事するっす。んで、パートってのは、学校は終えて、え～と、あれっ、俺にもよ

くわからない。でも、パートって男の人には使わないかもしんないっす。んで、どっちも一日中、毎日働くんじゃなくて、一日数時間ずつしか働かなくてってののことっす）

（まぁ、勤労学生、苦学生が今のあちらの世にもたくさんいらっしゃるのですわね。涙が出ますわ、いえ出せませんけれど）

（どうして涙が出るっすか。こちらの世界だと涙が出ないってならわかるっすけど）

（お勉強の志をお持ちの方が、お勉強をお続けになるために、働かれるのでしょう。大変なことですわ）

（そうっすか。俺、高校生になったらバイトできるって楽しみにしてたのに）

（楽しみになさってらしたのですか。義男さま、お孫さん、しっかりしたお子さんですわ）

（マサさま、昨今のあちらの世では、アルバイトはお涙頂戴ものではないのですよ。武蔵だって、アルバイトして稼いだ金で楽しもうって考えだったと思いますよ）

（そうっす。アイポッドシャッフルを買いたいって思ってたっす）

（なんですかのっ。そのあいぽっどなんとかと言うのは）

（我輩にもわかりませぬな。英語でもないようですなｓｈｕｆｆｌｅは、確かに英語でかき混ぜるという意味ですが）

（かんます、ね。でも英語っすよ。ｉＰｏｄって書くし）

（いやぁ、アルファベットで書くから英語とは限りませぬし。新しい言葉なのでしょうな、きっと）

（で、そのあいぽっどなんとかとは、なんですかのっ）

（音楽を聞く、このくらいので）

（携帯電話というものとは違うのかのっ）

（携帯はね、あれは電話だし。高校に入学したら新しいの買ってくれることになってたし）

（なんだか、分からない世の中ですわね）

（そんな小さいので音楽が聴けるのですかな、いやはや世の中の進

歩というものは。もっとも、あの大きさで紐の繋がっていない電話を持っている御仁がたくさんいるわけですし）

（紐っすか）

（武蔵さん、コードのことですよ）

（まぁ、絵都までよその国の言葉を知っているんですか）

（お母上、私、女学校で幾ばくかは教わりましたが、そちらではなく、戦後も随分生きておりましたから。戦後の日本語は大分変わりましたのよ。漢字は簡単になり味がなくなりましたし、カタカナ言葉の外来語が増えましてね）

（紐・・・紐ねぇ、んで、エロいしんちゃんの話しはしなくていいのかなぁ）

（その前に、エロなんでしたっけ。ユリ、わからないんですけどぉ）

（ユリさま、ｅｒｏｔｉｑｕｅ、ｇｒｏｔｅｓｑｕｅ、ｎｏｎｓｅ、ご存知ないままの方がよろしくてよ）

（ユリちゃん、うん、そう、知らないまま、ユリの乙女のままでいた方が幸せだよ）

（ええっ、ユリが知っちゃいけないことなんですかぁ。ユリ、そりゃ箱入り娘でしたけどぉ、でも、井の中の蛙さんはいやですぅ）

（扇情的、不気味、意味不明とでも訳しましょうかな）

（ロバートさま、ありがとうございました。ユリ、日本語になってもあまり分からないかもしれません。気持ち悪い幽霊みたいな、お化けみたいなのかしら、でもお色気があって、うわぁ、なんだか柳の下の女郎さんみたいな、あら、女郎さんがどろどろに溶けて柳の下で手招きしているようなってのかしら）

（へぇ、ユリちゃん、女郎にさんを付けるんだ）

（だってぇ、お可哀想じゃございませんこと。ご家族の為に身売りなさるなんて）

（そりゃそうだけど）

（麹町の兄もそう申しておりました。ですから売娼伎撤廃を申しておりましたのに）

（あのぉ、女郎さんってなんすか、ジョロウグモってのは知ってっす）
（上臈蜘蛛のことだのっ、女郎とは正反対だのっ）
（彦衛門殿、左様でござるか。我輩は妖怪の名だと聞いたことがあったのだが）
（おうおう、見目麗しき妖怪のことですのっ、ですから上臈）
（もう、みんなの話しわかんないっす）
（あら、ユリも、武蔵さんのお話、わかりませんっ）
（ユリさま、いいお年をして、ムキになられませぬよう）
（お父上、お母上、こちらのお話はほんに面白ぅございます）
（絵都もずぅっとこちらにいらっしゃいな）
（あらお母上、こちらにはお兄様のご家族もいらっしゃるのでしょ。小姑の私がいてもよろしいのかしら）
（ええ、ええ、構いませんわよ。もう世間体も気にすることないですし、それに、温も嫁女も誠もその嫁女も一応いることにはなっておりますが、絵都、気配を感じないでしょう。嫁女達はそれぞれのご実家の方に出て行かれたままですし、温は些とも目覚めませんし、孫の誠は嫁女に付いて参りましたし、ここ、空いてますわ。ましてやわたくし達、嵩の無い身、些とも窮屈ではございません）
（そうそう、それがよろしいですよ。武蔵も、このままここにいれば良い）
（でも、ここの話ついていけないしぃ）
（あら、そんなことおっしゃらないで、武蔵さん）
（そうそう、君がいるとユリちゃんが元気になるし）
（若い方の気は強いですものね、生きる気力になります、あらっ、生きていないのに、変かしら）
（いやいや、気の我ら、気力が大切ですな）
（お若いですから、ご両親様の所に行かれたい時には、念じれば、すぐに行けますわ。わたくしは、仏蘭西までとても無理ですけれど）
（う〜ん、じゃぁ、もう少し、お爺ちゃんの所にいることにするっ

す）
（武蔵さん、居させて頂きます、とはおっしゃれないかしら）
（ええっ。そんな舌噛みそうな、時代劇みたいな。そんな言葉しゃべれってならやっぱ居たくないっす）
（まぁまぁマサさま、ここは無礼講で）
（え～と外国人のおじさん、無礼講ってなんっすか）
（う～ん、酒が飲みたい）
（だんなさ～、それは無理というもの）
（武蔵君、無礼講とは、地位も身分も関係なく酒を飲もうということですな）
（ふ～ん、地位と身分ね。身分差別って戦後無くなったって教わったすよ）
（ほ～ぉ、士農工商は明治の初めに四民平等になったとは知っておるがのっ、身分が無くなったのかのっ）
（華族士族平民がなくなったのですかっ。わたくしは士族ではなくなったのですかっ。あら、華族士族平民ですと三つですわねぇ、何が足りないのかしら）
（穢多、非人かしら）
（それじゃぁ五つになりますわ）
（おばさん、今言った言葉、言っちゃいけないっす）
（はっ、穢多、非人って言っちゃいけないのぉ）
（ユリちゃん、穢多、非人は平民の中に入れるんだ）
（虎之介殿、それでは三つのままではありませぬか。四民平等が成り立ちませぬ）
（ですねぇ。でも、最初は華族士族卒族平民で四つだったので、まぁ、名称だけ残ったのでしょう）
（へぇ～、卒族なんてのがあったんですかぁ。ユリ、知りませんでした）
（うん、兵卒って言葉、ユリちゃん聞いたことあるでしょ。あの卒。士族を二つに分けていたらしい。上級士族と下級士族とにね。四民

平等というのは、四つの身分の間で身分が異なっても結婚できるってことで）
（でも、実際は、同じ身分の方とご結婚なさいましたわね）
「おかしいなぁ、この辺なのに。あれっ、さっきここ通ったかなぁ」
（然様。貴殿は先ほど通られましたな）
（管理棟でお尋ねになればよろしいのに）
（お母上、あの身なりでは管理棟には入れませんでしょ）
（絵都・・・おばさん、お姉さん、お婆ちゃん、どうお呼びしたらいいのか、やはりとまどいますが、え～と、そう、実際はね、やっぱり同じ身分の者同士でないと、両家が嫌がってましたね）
（そうでしたわねぇ義男さん。戦後、そんなこと言ってられなくて。自由恋愛になって、でも興信所使って調べてましたわ）
（興信所ってなんすか）
（え～と、どなたかのことを調べる事務所で）
（それって、浮気の調査しますって入るチラシみたいなのっすか）
（浮気っ。武蔵君、中学生でしょ。うわぁ、ユリ、信じられません）
（ユリおばさん、あのね）
（おばさんっ）
（もう、ユリ、嫌っ）
（ユリさま、まぁまぁ）
（あのねぇ、おばさん、もう平成なんっす。浮気なんて言葉、小学生だって知ってっす。で、浮気の調査すんのは探偵事務所っす）
（探偵とな）
（何やら、警察の探偵のようですな）
（おっ、警察。私の血が騒ぎますのっ）
（警察に探偵がいたっすか）
（悪い人を捕まえる前に、調べるだろう。その巡査を探偵と言うんだ）
（へぇ、デカ長じゃないんだ）
（デカ長とはなんですかのっ）

（俺、知らないっす。でも、テレビで刑事物をすると、デカ長ってよく言ってっす。内の母ちゃん好きだからよく見てるっす）
（刑事、そういえば以前、虎之介殿が、ほら、いつぞやの亀歩き青年の時、警察官に乗って行かれた折の話し、まだお伺いしてませんのっ）
（母ちゃんって、お母様が警察のお話を好きなんですか、まぁ）
（まぁって、フランスのおばさん、婦人警官ってのもいるし。今ね、男と女も平等っす。み～んな平等。女がなれないのはすもうとりぐらいっしょ）
（まぁ。それでは警察官にも軍人にもなれるのでしょうか）
（お母上、軍はなくなって、自衛隊と言うんですよ。婦人自衛官も婦人警察官もいらっしゃいます）
（まぁ、女の身で敵を殺すのですか。女の身で人殺しを捕まえるのですか・世も末でございます）
（お母上、あの日支から世界大戦になった後には、幸いにも日本はどちらとも戦争いたしておりませんのよ）
（あのぉ、武蔵さん、わたくし、確かにフランスのおばさんですけれど、カテリーヌって名前がございますの）
（だって、その名前、なんだか覚えにくいっすよぉ）
（カトリーナ台風というのがございましたね。私がこちらの世に参る少し前でしたが、アメリカで大騒ぎになっていました、あっ、あれは台風とは呼ばないのでしたっけ）
（そんなことあったっけ。俺覚えてないっす）
（昔カスリン台風というのもございましたね。息子、あっ武蔵の父のことですが、そこの店の近所のご老人が話してました。息子も生まれる前でしたが、今息子がいる辺りは大変だったようです）
（おっ、それ、前に誰かが話したことあったのっ）
（我輩でござる。我輩が旅しておった折に、電柱の印を見せられましたな。いや、見せられたのは我輩ではなく我輩が乗っておった御仁でしたがな。そうそう、武蔵君、そのカスリンとカトリーナとカ

テリーヌ台風は同じなのですな）
（はぁっ。だって、カスリン台風ってのは、俺も聞いたことあっすけど、それって父ちゃんが生まれるより前の日本っしょ、お爺ちゃんが死ぬ前のアメリカの台風と、フランスのおばさんがどうしていっしょなんすか）
（カテリーヌさんは、英語読みするとキャサリンなのですな、当時、キャサリンと発音し辛い日本人はカスリンと言っていたらしいのですな）
（えええっ、そうっすか。キャサリン先生だったら、イギリスのＡＬＴと同じっす。キャサリンだったら覚えていられっす）
（なんですの、そのえいえるてーってのは）
（えいえるてーじゃなくって、ＡＬＴっす）
（僕にもわかりません）
（我輩にもわかりませぬ）
（えええっ、アメリカのおじさん、ええっとロバートさんにもわからないっすか。英語っしょ。英語の授業を手伝ってくれる、英会話の先生のことっす。俺の市にはイギリスから来てたっす）
（ふむ。また新しい英語が生まれているようですな）

第六話　セミテリオに里帰り　その九　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は５月１１日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その十

（ユリ、気になってるんですけど、女性が警官になれるんですか。あっ、でも、ユリ、なってみたいかも。軍服みたいなの着てみたいわぁ。サーベルぶらさげて、お髯はやして、おいこらっなんて）
（ユリちゃんには似合わないって）
（虎ちゃん、分かんないでしょっ）
（昔はなれなかったっすか）
（昔・・・ユリの頃は、お店のお手伝いするとか、お茶やお華やお琴や和裁の先生とか、小学校や女学校の先生とか、あとは、女給さんとか芸者さんとか女郎さんとか、やっぱり、女の身でできる仕事は少なかったです。いいなぁ、なんでもなれるなんて）
（武蔵さん、み～んな平等って、華族も士族もなくなったってことでしょうか。あら、皇室は）
（まさか、天子様も平等かのっ）
（元々四民平等には皇室は入ってませんでしたね）
（あっ、天皇のことか。天皇はね、今もお正月と誕生日にはテレビに出るっす）
（天皇と呼び捨てですかのっ。嘆かわしい、陛下ですのっ）
（なんで）
（天皇陛下様、せめて天皇様、いえ、天子様とおっしゃるものです。でも良うございました。皇室も無くなられたのかと思いました）
（あっ、それは、戦後占領軍が苦労したそうです。皇室も平等にしたかったそうですが、それだと日本国民がまとまらないということで、残したそうですよ。でも、皇太子は平民と結婚しました、いえ、平民出身の方と）
（どうして天皇に様や陛下が付くっすか）
（皇室は四民平等とは別ということですのっ）
（どうして皇室は別なんっすか。皇居ってすっごく広いっす。あん

な広い所に住んでいるからっすか。金持ちだからっすか）
（いや、そりゃ、昔から代々続いておられて、日本の国の始まりからで）
（だって、日本の国の始まりだからって一人だったわけじゃないっしょ、一人だったらこどももできないし、続かないし）
（ですから、神武天皇が日本の国をおつくりになられて、それから二千六百年以上日本の国を治めてこられた偉いご家系ですから）
（うっそぉ。今まだ西暦二千年とちょっとだってのに、二千六百年も前だと縄文時代っしょ）
（ですから、とてもとても昔から）
（縄文時代に天皇がいたっすか）
（という風に私達は教わったのでしてのっ）
（ふ～ん、変なの。まっいいか。大人の、それに昔の人の考えって分かるわけないっす。でもお爺ちゃん、皇太子が結婚したのって、俺の生まれる前っす）
（武蔵、そりゃお前の生まれる前ではあるが、お爺ちゃんが言う皇太子は平成の天皇のことだ）
（まぁ、義男さままで、呼び捨てですか）
（そうですねぇ、普通は陛下って付けないですねぇ、僕のちょっと上の方は、国民学校で育ってましたから、陛下を付けるのかもしれませんが）
（あっ、そうか。今の皇太子とは違うんだ）
（皇室は二代続けて平民と結婚なさったんですか）
（いえ、ですから、今は平民という言葉も無いですし）
（そんなに騒ぐことなの。誰と結婚したっていいじゃん）
（そうはまいりませぬ。どういう所で育ったかはとても大きな事なんですよ）
（そうかなぁ。み～んな同じ人間なんだから、誰と結婚したっていいっす）
（わたくし、仏蘭西育ちですが、英吉利人と結ばれました）

（外人さんどうしですもの）
（あら、ゆりさままでそんなことおっしゃいますの。仏蘭西と英吉利とでは言葉も風習も宗教も異なりますのよ）
（外国人だと、何かいけないっすか）
（まさか、武蔵君、その武蔵君の言うみ～んな平等には外人も入るのかのっ）
（もち。あっ、もちろん、もちろんっす。それと、ここの人、よく外人って言ってるっしょ。けど、外人って言っちゃいけないって、英語の教科書に書いてあったっす。外人って言われると外国人が嫌がるって）
（外人と言われて、どうして外人は嫌がるのかしら）
（そうですわねぇ。でも、どうして外人がいけなくて外国人だといいのかしら）
（俺、忘れたっす。なんでだっけ）
（外人って外の人でしょ。どうしていけないのか、ユリ、分かりません）
（外国は国の外の国、国外は国の外。だとすると、外人は人の外の人ってことになりますな、というのは如何ですかな）
（ロバート殿、それは非道い。人ではないかの如くですのっ）
（然し乍ら、我輩もその外人、外国人なのでありまして）
（あっ、ユリ、それなら分かります。だったら怒りたくなります。でも、そう考える人って、ロバートさまみたいに日本語に堪能な方ですね。外人さんなのに、あっいけない、外国人さんなのにユリより日本語分かる方って、ユリ、尊敬しちゃいます）
（ともかく、外国人もみ～んな平等だから、誰と結婚したっていいっす。クラスにもいたっすよ。父ちゃんが日本人で母ちゃんがフィリピン人とか、母ちゃんが日本人で父ちゃんがブラジル人とか）
（ハーフですわね。可愛いお子さんが生まれますでしょ。両方の良い所取りで）
（ハーフってのも言っちゃいけないっす）

（まぁ、どうしてでしょう）
（ハーフって、ロバートおじさん、半分って意味っしょ）
（然様）
（今はダブルって言うっす）
（倍ですな）
（倍って、半分の四倍になりますね）
（うん、半分日本人、半分外国人というよりも、日本人と外国人の両方って考えるって）
（なぁるほど、面白い）
（ユリ思うんですけど、両方の良い所取りとは限りませんでしょ。短気で親切な人と気長で意地悪な人とが結婚したら、短気で意地悪な人が生まれるかもしれないでしょ）
（へぇ～、ユリちゃんって否定的なんだ）
（虎ちゃん、どうして）
（だって、気長で親切な人が生まれるって考えるもの）
（うっそぉ。虎ちゃん短気で意地悪なのにっ）
（うっ、僕としては気長で親切なつもりなのに）
（ははは、どう組み合わさって生まれるかは、分からぬものですのっ。なぁ、マサ、我がこども達、色々でしたのっ。肌の色も背の高さも、鼻や口、眉毛の形など、私にもマサにも似ていない者もおりましたのっ。性格もそれぞれ。兄弟なのによくもこれほど違うもんだと思ってましたのっ、マサ。まぁ、目だけは、私もマサもこの通りぎょろりとした目ですからのっ、こども達に共通してましたのっ、ほらここにいる絵都もですのっ）
（ユリさんと虎さんのお話、面白いですな。たしか我輩の国の逸話にございましたな。貴女の美貌と私の頭脳を持ったこどもが欲しいと求婚した男性に、貴男のお顔と私の頭脳を持ったこどもが生まれるかもしれませんわと言って断ったとか）
（なるほど、それは面白い）
（うわぁ、たいへんです）

（だっしょ、だからぁ、誰と結婚したっていいっしょ）
（でも、文化が違うと大変ですわ）
（お母上、たしかに。戦後、私、生活が大変でしたの。家は焼け、戦争に負けて満鉄が無くなり、満鉄の株も紙屑、その上、貯金は封鎖されて、そんな私の生活を見て、朝子はお金はある商家育ちに嫁ぎましたでしょ。商家に嫁いだのではなく、商家育ちの官吏と結婚したのですが、やはりお育ちがね。士と商では文化が違うので、色々と大変だったようですわ。婿が異動で関西に赴任してからはあちらの親元と離れられて気苦労が減ったようですが、それまでは盆暮れのお付き合いでも、あちらさまはやたらめったら派手で、これ見よがしとすら思える湯水の様な金遣い。質素倹約を旨とする士族とは異なりましてね）
（まぁ、絵都お姉様、先ほども少しお話なさってましたが、戦後もそんなにご苦労なさったのですか）

第六話　セミテリオに里帰り　その十　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は５月１８日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その十一

「番号の記憶間違いかなぁ。手帳も失くしてしまったし。でも確かこの辺の筈」

（みなさまのご子孫ではございませんか）

（ユリの弟の子の子孫じゃないと思います、もう、分からなくて、たぶん）

（僕の子孫でもないと思いますよ、僕も、たぶん）

（我輩のではなかろう）

（わたくしの子孫でしたらもう少し日本人らしくないと思います）

（マサ、私達の子孫にいるかのっ。直系でないといるかもしれないが、僕の家と言ってるから、違いますのっ）

（お爺ちゃん、僕の知らない、あの年くらいのおじさんっていないっすよね）

（いないね）

（夢さまの所とか、ご隠居さんのお宅とか、でもお見かけいたしたことございませんわね）

（あら、北口の方に去って行かれました。お話、続けますわね、ユリさん、戦争に負けるということは、並たいていの辛さではございませんでした。それまで負けるということを体験いたしたことございませんでしたもの。確かに薩英戦争では薩摩が負けましたが、私が生まれる前のことでしたし。戊辰戦争や西南戦争では私の父方は勝ちました。もっともこれも、国内でのことでしたし。私が生まれた四年後に日清、十四歳の時に日露、満州におりました時に日独、帰朝いたしましてから日中、全部日本は勝ち続けておりましたから、日米戦争でも、日本は勝つと信じておりました。真珠湾攻撃で目覚ましい活躍でしたし。蒙古襲来の時の様に、いざという時には神風が吹くと思っておりました。まして、日米戦争は欧州でのドイツとイタリアとお仲間でしたものね。負けるわけが無いと。　ドイツと

イタリアが戦線離脱した頃からは、　本土決戦に備えよ、一億特攻などの言葉も紙面を賑わしでおりましたし、ラジオが日々伝える戦況も勇ましく日本に有利な状況ばかりでしたし。敵機来襲の空襲警報が頻繁になっても、　吹くであろう神風の名を取った特攻隊の神風が活躍してらしたし。耐えねば、ここで踏み堪えねば、戦地ではもっと苦しんでらっしゃる、銃後の護りはしっかりと、と思っておりました。配給品がとどこおり、家を焼けだされ、それでもまだ、負けるなど思いもしませんでした。一億総玉砕、まさかそんなことねぇ。千葉で間借りしていた農家の軒先で、農家から分けて頂いた、と申しましても購入した、いえ、疎開先で配給もとどこおってましたからね、闇米ですわね、その貴重な玄米をこれまた貴重な一升瓶に入れて、棒でつついておりましたら、正午からラジオで大事な放送があるから集まるようにと連絡が入り、でも、私、松澤で焼けだされた時に、ラジオを抱えておりましたから、ラジオも一緒に疎開しておりましたので、公民館には参りませんでしたのよ。疎開先では言葉も違いましたし、田舎者ばかりで、お話が合いませんでしたからね、最低限のお付き合いしかいたしておりませんでしたの）

（確かに、言葉の違うのは辛いですわね。でも、みなさまとお付き合いすると、楽しいものですよ）

（まぁ、お母上、お母上も、富士見町にお住まいの頃はおっしゃってらしたではございませんか。どこそこのどなたかは、何々の出で、卑しいなんだかんだと）

（あちらの世におりました頃はね。わたくしも、薩摩から出て参りまして、色々言われておりましたから、つい。でも、そういうことは大したことではない、みなさんそれぞれ色々ご苦労なさってらして、何を大切にしてらっしゃるかが違うだけなのではと、老いていくにつれて考え方が替わりましたわ）

（マサ殿には何が大切ですかな、我輩は、日本のことを知りたい、もっと知りたいというのが最大関心事でしたがな）

（薩摩育ちだからと馬鹿にされてたまるか、と思っておりました。

こども達が、江戸のこども達となんら変わらない、そう思われる様に気を遣いました。でも、薩摩の出だということを誇りに思わせたいので、どう伝えるか、苦労いたしました）

（ほう、マサはそんなことに腐心しておったのか。考えなくとも、我らはあの緑の山、青い水、竹を揺する清い空気の宮之城の出であるのっ）

（だんなさ～。女は、日々の生活で苦労いたすものなのです。お買い物に参りますでしょ。最初は、言葉やしぐさの違いから、すんなりとは進まず、その内、あちらはこちらが田舎者、江戸育ちではないからと言い、こちらは相手の学のなさのせいにして、学の無いのは、学ぶ機会がなかったのだろうと思え、学があろうとなかろうと、他人に対して心を閉ざすか開くかの違いだと思い、他の方を何かで分けてしまうのは、それはわたくしが尊大なのではと省み、いえでもやはり、話の通じない方はたくさんいらっしゃると思い、話の合う方々と話しが合うのは、ご出身階級や稼ぎや出自とは関係無く、他の方に対して同じように心を開くかどうかであって、他人に尊大になる人は卑屈にもなるのだと見極められるようになりました）

（うわぁ、マサさま、さすが長生きしてらっしゃった、いえ、あちらの世だけじゃなくて、こちらの世でも。ユリなんて、お話楽しめるなら、どなたでも構わないのに）

（どの家庭に生まれるか、その家庭がどの社会的経済的階級に属するか、その家庭が属する地方、国家がどのような経済的国際的立場にあるかで、色々と異なりますね。そういうのが色々とつきまとうのが人生なのかと、僕は思います）

（なんだかみんな難しいことばっかりっす。どこで生まれたって、いつかは死ぬんだからどうでもいいっす）

（武蔵君、こういうものにとらわれて生きていくのがあちらの世）

（でも、考えたって仕方ないっす。だって、どんな家、どんな国に生まれるかなんて、自分で選べないっす）

（そうですわね。わたくしも、もし英吉利に生まれていたならとか、

自国でもナポレオンの頃、ルイ何世の頃に生まれていたならなどと考えはいたしましたが、それはそれで楽しかったものの、いつどこに生まれるかなんて選べませんものね）

（キャサリンおばさん、さすがフランス、ナポレオンが出て来るんだ）

（カテリーヌですわ）

（皆様、お話続けてもよろしいかしら。大事な放送のお話でしたのよ）

（絵都、ここではいつも井戸端会議。いつもこんな調子で、時には、何の話をしておったのかわからなくなるのっ。あまり気にせずに、気楽にのっ。さもないとあんもないと長生きできぬのっ、いや、もう生きてはおらぬがのっ。昇華したくなければ、だがのっ）

（父上、そのさもないとあんもないととは何でしょう）

（おっと、つい使ってしまったのっ。今日はいらっしゃらないが、ご隠居さんの口癖でのっ、語呂がいいので気にいってるのでのっ）

（それでは続けさせて頂きます。大事な放送のことでしたわね。大事な放送とは何が放送されるのかしら、もう暫く持ちこたえてと首相がおっしゃるのか、アメリカの首都でも攻撃した成果を語られるのでしょうかなどと想像しながら、慣れない炊事をいたしておりました。ありがたき放送ということでしたが、まさか陛下が直接お語りになるなどとは、思っておりませんでしたの。戦争はまだ続くから、松澤の家を建て直すのは無理でも、千葉で仮住まいをしようと土地は購入いたしておりましたのよ。でも、男手が無いに等しい状況でしたでしょ、家は建てられず、私が間借りと申しましょうか、母屋とつながった隠居部屋をお借りしていたのですが、その辺り一帯の田畑を小作に出してらっしゃった大きなお家で、母屋にもラジオがございましたから、正午の重大放送は二台のラジオから聞こえて参りました。独特の抑揚のお声に、陛下の玉音だと気付くまで間がございました。陛下の玉音だと気付いて、姿勢を正しました。横で、節さんも大きなお腹を抱えたまま姿勢を正しておりました。雑

音が入っても、お言葉は理解できましたの。でも、心が付いて参りませんでした。負けを認めることは、悔しくて、玉音にもその悔しさが滲み出てらして、私でも悔しいのに、ましてや陛下はどれほどお悔しいことか、いっそのこと一億総玉砕とおっしゃられたのでしたらどれほど胸がすくことか、潔く死にますものを、でも陛下が負けを認められたのでしたらそれが正しい道なのでしょう、呆然といたしておりました。空を見上げますとね、鳶が一羽、輪をかいてました。母屋の方から農爺と農婆がいらして、あれはどういう意味だったんでしょう。一億衆とか、残虐なる爆弾、我が民族の滅亡、戦陣に死し、職域に殉死。国体の精華を発揚、つまり、一億戦え、総玉砕という意味なのでしょうか、と尋ねられました。戦の負けを鬼畜米英に伝えるということを私達臣民にお伝えになられたのですよと、お教えいたしました。その頃、私のラジオからはどなたかが玉音放送のお言葉を平叙文になさってましたが、それでも母屋の方々はまだ半信半疑の様子。遅れて届いた朝刊を見て納得なさったようでした。克子と朝子が戻って参りまして、あら、あの日、二人はどこにいたのかしら、ともかく戻って来た克子は、お母ちゃま、情けないです、辛いです、一方朝子は、これで朝までぐっすり眠れると喜んでおりました。その晩以来、ぐっすりどころか、私は心配で心配で眠れなくなりました。戦争に負けたということはどういうことになるのでしょう。何しろ負けたことがございませんでしたでしょ。で日清、日露、日独で日本が勝った時に、負けた側の清と露と独はどうなったかを思い出そうといたしました。賠償金を頂いたのかしら。あら、でもたしか露西亜からは頂かなかったのではなかったかしら。あら、でも半島を頂いたのだったかしら。まぁ、どうしましょう。国が払うということは私も払うことになるのでしょうか。碧さんの残した財産で買った松澤の土地、家も燃やされて、こちらには土地はあれど家は建てられず、貯金は日々の生活で減っておりますのに、でもまだ株が、あら、満鉄はどうなるのかしら。大東亜共栄圏はどうなるのかしら、株の配当は続くのかしら、まぁ、生活ど

ういたしましょう。ここの間借りを続けている間はお家賃、それに食費、まぁ。克子は女学校を終えたものの、朝子はまだ卒業させなくては。節さんも臨月。開さん、無事に戦地から戻ってらっしゃいませ。女四人では心細いです。それまで自分は気丈だったと思っておりましたのに、負けたと耳にして以来、どんどん気弱になっておりました。悶々と眠れぬ辛さの筈でしたが、とろとろしておりましたら朝子に揺り起こされました。お母ちゃま、雄鶏が鳴いてますよ。朝ですよ。空襲警報ではなくて雄鶏に起こされるなんて、朝までずっと眠れるなんて、負けるって素晴らしいことですわ、と朝子が申したのを覚えております。負けるのが素晴らしいなんて、考えたことございませんでした。そんなこと考えるのは不遜不敬非国民でしたものね。若さとは明日の不安を感じないことなのでしょうか、と気付いた途端に、明日どころか数年先まで想像して不安にかられておりました自分が、もう老婆の域に入っているのだと気付かされ、余計に心細くなりました。先行きの不安にかられて気落ちしている私を見た朝子は、お母ちゃま、心配したって何も始まらないでしょ。ともかく何かしなくちゃ。克子は睨む様な目つきで寡黙でしたが、朝子は元気でした。娘達をうらやましく思いました。実際、その時に感じていた不安など生易しいもので、あの頃は不安を上回る現実に押しつぶされてしまう日々でしたが、それでも、九十三まで生きてしまいましたものね。死んだらどれほど楽になれるか、肌身離さず持っていた碧さんの写真を胸に、碧さん、迎えにいらしてと何度も思いました。空襲警報は鳴らなくなりましたが、それまで張りつめていた空気が緩んで、夏の暑さが急にこたえるようになり、ヒグラシの声に老いを感じ、それまでの戦中の数年を振り返り、ふと気付くと、支那とだけの戦いがいつの間にかお相手が増えていたまるで悪夢の様な。悪夢なら目覚めてほしい。支那と戦を始める前の穏やかな生活を続けられれば良いのに。でも悪夢ではなく現実。生きている、生き続ける方が苦しい、身があれば食べねばならず、お金の価値はどんどん下がる一方で、随分前に、松澤に奉公に来ていた

女中の実家に先に疎開させていた大連から持ち帰った支那の象牙の麻雀牌や端渓硯や李朝の白磁の花瓶や碧さんから頂いた元は露西亜貴族の物だったというカメオなど、終いには娘達の雛人形やお道具まで、克子や朝子の結婚の時に持たせようと思っておりましたものを片端から物物交換致しまして、物々交換できる物があっただけ救いでしたが、でも、私自身も含めて、人間の業の深さ、買い手の欲深さには辟易いたしました。この方々に由緒ある物の価値が分かるのかしらと思いながら、でも価値があると思うから食物と交換して頂けるのでしょうけれど、情けない。そう感じる自分が情けない、辛い。私が亡くなる前まで持っていられた碧さんの思い出の品は、数葉の写真と結婚した時に頂いた金の指輪だけでした。あら、あの指輪、私が亡くなる前に生前に肩身分けとして克子に送ったのですが、どうしたのかしら。あら、ごめん遊ばせ、松澤の防空壕には十二月に戻りましたのよ。埋めておいて燃え残り、幸いにも盗まれなかったとはいえ湿気で傷んだ和服等も食品との物物交換に使えますでしょ。九月に生まれた赤子を抱いた節さんが、武蔵野町の簡易住宅が入手できたご両親の所に移るというので、ついでに皆で松澤町まで参りましたの。松澤から千葉に疎開した時以上に焼け野原だと思い込んでおりましたのに、高い建物と言えば、確かに少なくて、駅近くの丸ビルや、皇居のお堀周りのビルなど、後で知ったのですが、米軍が戦後の接収用に爆撃しなかったビルがいくつか、それと増上寺の門ぐらいでしたが、もう一面バラックだらけで、色々な物を売っているんですよ。復興のめざましいこと。私どもは、母屋で三日置きに湧かすお風呂を頂いておりましたでしょ。それなりに清潔だと思っておりましたが、焼け野原のバラックの辺りは何だか猥雑な匂いがしておりました。正体の分からない煮込み料理や、古着など売っておりましたから、そういう匂いが立ちこめていたのでしょうね）

第六話　セミテリオに里帰り　その十一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は５月２５日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その十二

（増上寺の門っ。懐かしいのっ。あの門に上ると、江戸湾、いや東京湾がすぐ近くに見えてのっ。東海道を走る汽車も見えましたのっ。桜島は見えませんでしたがのっ）

（ほう～。増上寺の門に上れたのですか。東京湾が見えたのですか）

（へぇ～。お爺ちゃんでも驚くことあるっすか）

（武蔵、私はお爺ちゃんではあるが、ここにいらっしゃる彦衛門さまよりはずっと若いからね）

（あっ、そうっす）

（義男殿、増上寺の門、上れないのかのっ）

（あそこに上れるなど、考えても見ませんでした。それに東京湾が近くなどとは。あの辺り、ビルが多いから、今は東京湾は見えないと思います、いえ、何しろ上ったことがないので定かではありませんが。門で上ったことのあるのは、天安門ぐらいですよ）

（天安門とは、東京のどこにある門ですかのっ。凱旋門とは別の門ですかのっ）

（凱旋門はフランスですね）

（いや、日本にもあったのっ、日露戦争凱旋門）

（ほうっ、日本に凱旋門があったのですか、いやはや）

（あれっ、お爺ちゃん、また驚いてるっす）

（凱旋門のことは、以前どなたかとお話いたしましたのっ）

（そうそう、僕は見た事なくて、ユリちゃんは見たことあって、っての）

（天安門は中国ですよ）

（中国なら、絵都の初婚のお相手がいらした、つまり私の旧友の住む、いや住んでおった地で、少々詳しいのですがのっ、中国のどちらで）

（彦衛門さまは、中国にもお住まいだったのですか。天安門は北京

ですが、彦衛門さまの頃にはなかったのでしょうか。結構古い物だと思っておりましたが、でも毛沢東が上って演説していた場所ですから、それほど古くはないのでしょうか）

（長州と雲州と伯州とあと、マサ、どこに異動したかのっ。中国には赴任いたしましたが、北京というのはあったかのっ）

（わたくしは存知ません。その毛沢東という方も）

（ニュースで見た、中国の偉い方々が上って演説する門に、外国からの、私は戦争をしたわけではないのですが、それでもうっかりしたら恨まれているかもしれない日本人観光客が、天安門に上れるなんて、驚きでしたよ）

（あっ、大戦後なんですね。観光客としてですか。戦前支那にはたくさん日本人いらしたので義男さまもその中にいらしたのかと）

（僕は戦後も戦後。たった十年程前ですよ。年金生活で暇をしていたので）

（年金とは、よいご身分で。官吏だったのでしょうか）

（えっ、いえ、官吏だったのは親父で）

（まぁ、お父様の恩給が頂けたのですか）

（いえ、まさか。僕が自分で払っていた年金ですよ）

（それでご旅行ができる程、ゆとりがあられた。やはり裕福なご家庭なのですね）

（いやぁ、そんなことないです。僕の世代の年金はいいんですよ。今はひどいらしいですね。会社務めでないと、毎月六万ちょっとらしいですよ）

（まぁ六万も）

（ユリちゃん、物価は分からないよ。僕たちの頃なら月給四十円って高給取りだったけれど）

（絵都、月六万というのはよいのかのっ）

（私がこちらに参った頃ですと、もう六万では厳しかったと思いますよ。間借りでもお家賃が二万円ぐらいでしたから、後、食費と光熱費でかつかつだったのかしら）

（まぁ、それでは今のあちらの世は大変なのですねぇ。いえ、今もかしら。いつも生きるのは大変ですものね）
（それで自殺してセミテリオに来る方が多いのですわね。日本では自殺は構いませんでしょ。キリスト教では自殺は禁じられてますのよ）
（日本では自害というのはある種美徳でしたからな。我輩には不思議でなりませぬが）
（毎月納めて、年金貰う頃になったら、騙されたって思うらしいですよ。幸い、私の世代はぎりぎりそう思わされなかった。いえ、会社務めはねまだましなんですよ。武蔵の父がぼやくことぼやくこと。年金払わされて、きっと貰う頃になったら光熱費もまかなえないってね。で、恩給生活の、つまり公務員の年金はいい。で、国民年金を管理している公務員はそこそこの生活ができて、管理した国民年金で生活する方はかつかつ以下。よくみんな耐えていると思いますよ）
（国民は騙されるものです。私も預金封鎖に騙されました）
（それでも義男さまは、ご旅行）
（いえ、安いもんですよ。パックツアーなんで）
（ぱくつあーとは何ですのっ。ぱくぱく、ぱくつくことですかのっ）
（旅行っす。喰うことじゃないっす）
（新しい日本語ですかな）
（えっ、ロバートおじさん、英語っす。ｐａｃｋ　ｔｏｕｒ）
（ほうっ、ｔｏｕｒは確かに旅行だが、包みの旅行ですかな、ぱっく、パック、あっ、ｐａｃｋａｇｅですかな。ｐａｃｋａｇｅ　ｔｏｕｒっ。Ｔｈｏｍａｓ　Ｃｏｏｋが初めたあれですな。運賃も宿も含まれているという。おっと、彦衛門殿、あながち間違いではないかもしれませぬな。食事も付いているというのもありましたな）
（ほら、ぱくぱく旅行ですのっ）
（そうそう、それです。確かに色々食べました。家内と参加したんですよ。後十人ほど。北京についてからは中国人で日本語ぺらぺら

のガイドがついて）
（がいどんとは何でしょう。通弁のことでしょうか）
（お母上、案内人のことですよ）
（通弁ってなんっすか）
（通訳のことを昔はそう呼んだんだよ）
（私が幼い頃には通辞とも呼んでおったのっ）
（ふ～ん、言葉って変わるっすね）
（しかしのっ、中国に旅行するのが贅沢とは、まだまだ世の中貧しいのかのっ。新幹線で大阪まで行き、そこからまた鉄道に乗るだけではないのかのっ）
（いえ、飛行機ですよ）
（ほうっ）
（その案内人、がいどんでしたかのっ、が日本語ぺらぺらなのは日本であるからして当然とはいえ、何故がいどんは中国人なのですかのっ。中国人とは支那人のことであろうのっ。支那から中国にやってきた留学生の、え～と、武蔵君が言ってた職業学生ですかのっ）
（あっ、バイトっすね）
（いえ、中国に住む中国人ガイドで、でも日本語はぺらぺらでした）
（いやぁ、中国に住んでいるなら、日本語はぺらぺらであろうのっ。私が赴任した頃も、そりゃぁ方言はあったが、皆日本語を話しておったのっ）
（お父上、お父上のおっしゃる中国は、長州や芸州のことでございましょ）
（他に中国はあるのかのっ）
（お父上も先ほどおっしゃってましたでしょ。中国人は支那人と。つまり、中国は支那のことですわ。今は、支那とは呼ばず、中国と呼ぶのですよ。北京はその中国の首都で、天安門は北京にあるんですよ、ところで義男さま、天安門は古いと思いますよ。溥儀皇帝が住まわれた紫禁城の門ではなかったかしら）
（ややこしいですのっ。で、日本の中国は中国のままなのですかの

っ）
（いえ、中国地方と言います）
（それでは、支那の地方みたいですわね）
（いや、長州や芸州の辺りは昔から中国と呼んでおったのっ。支那を中国と名付けた方が後ですのっ）
（天安門や、後ろの故宮や、そうそう、万里の長城にも行きました。あれはすごいですね。でも、高齢者には疲れました。　北京ダックも頂きましたよ）
（横浜で頂いたことござるが、本場のはさぞかし美味なのでしょうな）
（大連で見かけたことはございますが、なんだか汚らしくてね）
（勿体なくてね、どうして皮だけ食べるのかと）
（へぇ～。肉はどうするん）
（肉を食べるのは通じゃないそうでしてね）
（ほんと勿体ないですわ。でも、どなたかが肉を召し上がるのかしら）
（肉を食べようとしたんですよ。そしたら、ツアーの同行者に邪道だと言われて）
（人の数だけ意見がありますからな。我輩、外交官でありながら、亜米利加と日本しか知らぬままこちらの世に参りましたが、それでも育った所は南部、外交官の常識として仏蘭西語も学びましたから、仏蘭西の文化も少々。面白いものでして。食事のマナーも、国それぞれ異なるのですな。いや、亜米利加国内でも、武器を持っていないことを表すためにフォークを持たない手をテーブルの上に出すべきである、いや、左手でナイフを持たない時には左手はテーブルの下にあるべきだというのもございますし、野菜が出て来るのも、亜米利加では最初ですが、仏蘭西ではカトリーヌさん、最後ではなかったですかな）
（然様でございますわ。ロバートさま）
（よって、我輩は、それぞれの国の文化をあまり気にせぬようにな

りましたがな。気にしていると疲れます。うどんや蕎を静かに頂くと、日本では文句を言われましたが、音を出して食べようったって、やたら空気ばかり飲み込むわけでしてな）

（ロバートさんにそうおっしゃられると、私、今更ながらにあの時に北京ダックの肉を食べなかったのが悔やまれます。そういえば、皿を傾ける時にも西洋ではあちらに、中国では手前に傾けるようでしたね、あれっ、逆でしたか）

（食い物の恨みは長いのっ。ここにおると、食い物の話しが出るとたまらぬのっ）

（だんなさ～）

第六話　セミテリオに里帰り　その十二　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は６月１日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その十三

（私もそのぺきんだっくとやらを食してみたかったのっ。しかし、そのだっくとは何かのっ。肉とおっしゃるからには、魚か鶏か豚か牛か、さてまた羊か、はてまた蛇かそれとも鳩か、雀か鯨か、犬猫鼠か）

（彦衛門さま、恐ろしゅうございます）

（カテリーヌさん、貴女の国では蛞蝓を食すのではなかったかのっ）

（蛞蝓ではなくて、蝸牛ですわ。然様ですわね。食は文化、人それぞれ地域それぞれ食それぞれですわね）

（中国人は、脚のあるものならば机以外何でも食べる、と現地のガイドが冗談半分で言ってましたね。たしかに、地面を見ても、蟻はいないし、空を見ても鳥がいなかったのには、驚かされました。生き物でいるのは人、どっちを向いても人人人。早朝ホテルから下の道路を見ておりましたら、車道には車とバスが溢れ、歩道にも人があふれ、車道と歩道の間には自転車専用道路があり、そこも自転車であふれておりました。人はたくさんいましたね。人以外に生きているものは見なかったですね。本当に何でも喰うのじゃないかと。先ほどの天安門の前を駱駝の列が歩いている絵葉書がありましたが、駱駝も見ませんでしたしね、まぁ、中国のことですから動物園に行けば大熊猫はいるんでしょう）

（大熊猫とはなんですのっ、熊と猫の半分こ、間の子ですかのっ）

（だんなさ～、熊と猫は無理でしょう。猫が熊の子を孕んだら、産む前にお腹が破裂してしまいます）

（マサ、猫が雄なら文句あるまい）

（それでは生まれた子を母熊が食べてしまいますわ）

（お爺ちゃん、俺もわかんないっす。大熊猫って何っすか）

（パンダのことだよ）

（な～んだ、パンダっすか）

（パンダとは何ですかのっ）
（僕も知りませんが、武蔵君は知ってるのですか）
（我輩も存知ませぬな）
（わたくしも、聞いたことございませんわ）
（ユリも知らない、けど、ユリ知らないこと多いから）
（ほうっ。みなさんご存知ないのですか）
（へぇ〜。上野に行けばいるのに）
（上野とはそこの上野かのっ）
（うん。上野の動物園にいるっすよ、他にもあちこちの動物園にいるっすよ。あっ、でも、上野のパンダは俺がこっちに来る前に死んだんだっけ）
（どんな動物ですのっ）
（小さめの熊くらいの大きさで、白と黒で、耳と目の周りは黒で）
（で、その小さめの熊は喰わないのですかのっ）
（そりゃぁ、食べないと思いますよ。大熊猫は、中国にしかいないそうで、外交に使っていますしね）
（ほうっ、その大熊猫は外交官ですかな。いやまさか、この時代、もしや動物も人間並みになったとか）
（いえいえ、中国にしかいないからこそ、他の国に親善使節として、こうちょっとした手みやげのような）
（あ〜、成る程。分かりました。しかし、大きい動物を大変ですな）
（あ〜、やはり、その大熊猫の肉が貴重なので、他国に土産に持って行くのですな）
（いえ、ですから、大熊猫は殺さないで、だいじにだいじに船か飛行機で届けるわけで）
（おっ、新鮮な肉というわけですな）
（いえ、ですから、殺さないで、動物園で見せるわけで）
（おっ、駱駝の見せ物興行の様なものですのっ）
（駱駝が見せ物になったのですか）
（明治の中頃でしたかのっ）

（ほう～。まぁ、そんなような）
（パンダ、大変な騒ぎでしたわね。私も記憶しております。でも、一度も見には参りませんでした。あれは綾子だったかしら。学習雑誌の付録の世界の不思議とかいう歌留多で、花札くらいの絵札にスフィンクスやピサの斜塔等と描いてあったのを見たのが初めてでした。もう半世紀以上前のことですわね。お婆ちゃま中国にいらしたのに、パンダ知らないのと聞かれましてね、あの絵札を何度も見たのですが、竹林を背景に座っているパンダ。でも、大連におりました時には全く存じませんでした。その後はテレビで何度も見ましたわ。ですから、スフィンクスは、伯父さまがご洋行の折に撮られたお写真がありますよとお話しましたのに、興味示さずで）
（あら、わたくし、その写真見せて頂きましたわ。砂漠の中にお顔がありますでしょ）
（そうそう、武人どんの、私も見ましたのっ）
（でございましょ。ですから、私、伯父さまは偉いお方でね、と。でも綾子は、お婆ちゃまの伯父さんじゃ私と離れ過ぎてるって、全然関心無いようでした）
（まぁ、お兄さまもがっかりですわね）
（で、絵都、大熊猫とは竹林に住むものなのかのっ、ならば宮之城に向いてますのっ。何しろ香具夜姫の地）
（まぁかぐやひめって、本当にいらしたんですねっ、ユリ、嬉しいです）
（かぐやひめって、あの昔話のですか。わたくし、日本語のお勉強の時に少し。お姫さまが、何人もの殿方から逃げて月にいらっしゃるお話ですわね）
（ユリちゃん、カテリーヌさん、月に行けるわけないですよ、あれは物語）
（えっ、行けますよ。っていうか、行ったっすよ。俺が生まれる前っす。その後、行ったっての聞いたことないっすけど）
（ほらね、やっぱり。行けるのよ）

（いや、ほらね、やっぱり、行けないんだよ。武蔵君のだって、物語）
（いや、あれはパンダ騒ぎのもう少し前でしたかね。アメリカ人が宇宙船に乗って月に行って、月面歩行したんですよ。テレビで見ましたよ）
（テレビは作り物が多いのではなかったかのっ。ご隠居殿がそうおっしゃってたのっ）
（まぁ、そう言われれば元も子もないですが）
（でも、ほら、絵都さまおっしゃってらした、ご自分の目でご覧になったことしか信じられなくなりましたなら、絵都さまの何とかの君と同じになってしまいますっ）
（私も、そのテレビ、欲風園で見ました。たしかに、月の上をアメリカ人の宇宙飛行士が歩いていましたわ）
（ほらね虎ちゃん、行けるのよ）
（然様、月にアメリカ人が行ったという話しは、我輩、ご隠居殿から耳にいたしました）
（ほらね、虎ちゃん）
（でも、これじゃぁ、聞いた、見たって人が多くいたら、本当にあったってことになってしまいますね）
（ほう～虎之介殿、なかなか厳しい）
（真実と偽物を見分けるのは難しいことですね）
（香具夜姫とアメリカ人、どちらも月には行っていないのか、両方とも月には行ったのか、どちらか片方は月に行ったのか、さぁ）
（あのぉ、なんだか難しい話みたいっすけど、月の話じゃなくて、俺思うっすけど、かぐやひめは竹薮っしょ。竹っすよね。パンダが食べるのは笹だと思うっす）
（笹と竹は違うものなのですか、わたくしには同じ物に見えますが）
（違いますわ。竹は物干竿になりますが、笹はなりませんもの）
（七夕に使うのは笹でしょ、芽を頂くのは竹でしょ）
（笹竹という種類があったように、僕記憶しておりますが）

（あれはいつ頃でしたかね、初めて大隈猫が日本に来たのは。日中国交回復で大熊猫が頂けることになって、日本のあちこちの動物園が手をあげましてね、武蔵の父がまだ小学校入学前でしたかね。で、上野動物園に来て。それからしばらくして、私、出張で名古屋に参りました。会議場が割と動物園の近くだったんですよ。それで、時間が空いた折に、名古屋の社員がご案内いたしましょうかと。それで動物園をぶらぶら歩いておりましたら、パンダはこちら、と矢印がありましてね、ほうっ、上野の次にこちらにもパンダが来たのか、上野ではすごい行列で混むから息子達もまだ連れて行っていないが、ここで見られるなら写真でも撮って持ち帰ろうと思いながら進みましたら、ガラス越しに食パンが置いてあるんですよ。あれには騙されましたね。ああいう騙され方は、いいもんですね）

（えっ、お爺ちゃんも騙されたっすか。血のつながりっす。俺も騙されたっす）

（お前は人が良いからすぐ騙されるんだろう）

（ううううん、そうじゃなくって、パンダ矢印にっす）

（お前はあの頃まだ生まれてなかったし、それに武蔵、お前は名古屋には行った事ないだろう）

（名古屋じゃないっす。埼玉で）

（食パンが置いてあったのかい）

（ううううん、やっぱりパンダって矢印があったから、行ってみたら、レッサーパンダだったっす）

（ああ、あのたぬきくらいの、茶色と黒と白の。あれも可愛い）

（狸ですかのっ、狸汁は美味ですのっ）

（いや、あのパンダも食べないと思いますよ）

（ユリ、見たいなぁ、両方。その狸ぐらいのと、大きい熊猫っての）

（ユリさま、わたくしも目にしたいですわ。その内、どなたかに乗って、動物園に参りましょうよ）

（そうですわね）

（僕もご一緒いたします）

（我輩もお連れ頂きたい）
（あらっ、ロバートさまは、私達より乗るのお上手でしょ）
（私も参りたいですのっ）
（だんなさ～、だんなさ～の場合は、如何に召し上がるかでございましょ）
（しかし気の我が身、そう願っても喰えぬのっ）
（お母上、お父上は相変わらず食い意地が張ってらっしゃるのですね）
（食い意地とは、娘に言われたくないですのっ）
（ははは、彦衛門さん、鼠や猫は知りませんが、蛇は中華料理にはあるそうです、私はちょっと手が出ませんでした。羊肉は串刺しの様なのを露天で売ってたので、一口だけ。で、ダックはあひるですよ）
（あひるは家の鴨と書きますな。家鴨と鴨とは別のものなのですかな）
（ロバートさま、以前そのお話なさいませんでしたか）
（ユリもしたような気がします）
（そうでしたっけ。僕のいない時でしょうか。僕、鴨の白いのが家鴨だと思ってましたが。理科は苦手でね）
（カテリーヌさん、フォワグラは何で作るのでしたかな）
（あれは、鵞鳥ではなかったかしら）
（そのほわぐらとは何ですかのっ）
（鵞鳥に無理矢理食べさせてその肝を食すものですな）
（鵞鳥と家鴨と鴨ってどう違うのかしら）
（♪すずめはすぅずめ、チュンチュン♪）
（雀は違うでしょ、ユリ、雀なら分かりますっ。小さいもん。あと、鳩と烏もわかりますっ）
（あっ、ユリおばさん、これ、俺の父ちゃんが小学生の頃流行っていた歌っす。あれにあひるは出てこなかったかなぁ、って思ったっす。すずめは大きくなっても、たかにはなれないって歌っす）

（なんだか現実的な歌ですね）
（夢がない歌っ）
（日本には鳶が鷹を生むという諺がありますな）
（ロバート殿、一寸違うような）
（鳶と鷹の場合は、親子、今の武蔵君の歌は、一人の一生ですね）
（で、雀が違うのは分かるけど、ユリ、やっぱり、鵞鳥と鴨と家鴨は分かりません）
（こういう時にご隠居さんがいらしたら教えて頂けるのに）
（やっぱり、♪あひるはあ～ひる、ガァガァ♪）
（あらっ、鴨も鵞鳥もガァガァって鳴きますっ）
（あら、先ほどの方、戻ってらした）
「おかしいなぁ、この大きな石碑の近くだって言われてたのに」
（まだ探してらっしゃるのですね）
（本当にこの大きな石碑なのかしら。このセミテリオにはこのくらいの大きな石碑はたくさんございますのに。話しを続けてもよろしゅうございますかしら）
（お疲れでなかったら、ぜひ）
（ええ、大丈夫ですわ。先ほどから時折、みなさまの面白いお話を聞かせて頂いておりますし。それでは、続きを。節さんのご両親の住んでらした武蔵野村の辺り、軍需工場が多かったので、空襲がひどくて、それでも、あり集めの材木で焼け野原に簡易住宅をなんとか建てたとのことで、孫娘を暫く預かっていただけることになりましたの。でも、後から考えますと、その頃から都内の方が食糧調達が難しくなりましたでしょ。あのまま千葉にいらした方が、少なくとも日々の食物にはこと欠かなかったと思いました。預金封鎖の後は、余計に現金より現物でした。燃え残った現物はどんどん食物に交換されて。復員してらした方々の手で、翌春には千葉の方も小さい家が建ち、小さな庭というより畑にして何種類もお野菜を作り始めておりましたの。母屋の老爺に教わりながら、見よう見まねで自給自足。初夏からは育った野菜を武蔵野にお裾分けしようと、でも、

お送りするのは恐ろしくてね。食べ物だと分かると途中で盗まれたりしますでしょ。それで持っていこうとすると、駅で没収されかけたりでしたから。大変でした。松澤の焼け跡に畑を作りなさいなと節に申しましたが、お義母さま、作っても食べ頃になったら盗まれてしまいますわ。乳飲み子を抱えてずっと見張りをしているわけにも参りませんでしょ、と言われました。実際、どなたかご近所の方が、私の、いえ、名義は開さんのでしたが、焼け跡を耕して、お野菜を育てていたようでした。地代を頂こうとは思いませんでしたよ。皆様大変でしたし、私は千葉で最低限の物は採れましたし、お隣さんですものね。国会議事堂の前も畑にしていた頃ですから、空き地があれば畑にしないと飢え死にしかねない時代でしたしね。その頃まだ、本人からは何の連絡もございませんでしたが、終戦直前には開さんの部隊はどうも北支の方にいたらしい、その内引き上げて来るだろうからと、焼け跡に棒を立てて、棒の上に濡れないように庇をつけて、全員無事であることと、武蔵野と千葉の連絡先を二つ書いた紙を貼りました。初めて米兵を目にしたのはあの時でしたわ。千葉の農村までは米兵もやって来なかったものですから。克子が、これが鬼畜なのぉ、お母ちゃま、どう見ても日本人より大きくて清潔よ。大連を後にしたのは、克子も朝子も幼い頃でしたから、欧米人の体格の良さの記憶がなかったのでしょうね。お母ちゃま、手足が長くてかかしみたいね、と申しながらも、米兵の背の高いこと、脚の長いことにやたらと驚いておりました。私も驚いていたんですよ。大連におりました時には、印度人は見かけたことございました。白い服にターバン巻いて、女性の方も布を巻き付けた姿でしたわね。ですから焦げ茶色の肌までは存じておりましたが、ほんとに真っ黒の黒人がいるとは。お顔の中で白目の部分と歯が真っ白に目立つんですね。黒人の兵隊さんは、少なかったですけれどね。その頃の復員兵は皆着の身着のままで、寒いですから何枚も着重ねて、そうそう入浴もできず臭かったですものね。寒さしのぎにお髯もぼうぼうでしたし。それに比べて、米兵、いえ、アメリカの兵隊さんだけじ

ゃなかったのですが、やはり圧倒的にアメリカ兵でしたものね、身なりもさっぱり、香水みたいないい匂いもして、何より快活。戦争に勝つということはこういうことなのだと、身なりが良くて、外套も立派で、快活で、我が物顔。私も碧さんも自分たちが戦争をしたわけではなかったのですが、大連でこういう風に見えたのかと、支那人達はこう感じていたのかもしれない、とも思わされました。でも、日本兵に比べて、なんと申しましょうか、なよなよかしら。例えば、気をつけっができないような印象でしたわ。背筋がしゃんとしていないというのではなく、指先までピンと張りつめたというのが無くて、こんな規律でも日本に勝てたのかと、悔しくて。街中のあちらこちらに横文字があふれていて、娘は四人とも外人先生のいらっしゃるミッション系の女学校に通わせましたが、朝子の時にはもう英語の授業は敵性言語だということで半年で終わっていました。でも克子は五年間しっかり学んでおりましたから、看板を読んでは、あら、何々のお店ねなどと興味しろがっておりました。娘達は外人先生の授業を受けてましたのにね、神父さんはご年配の方でしたし、尼さん方は女性でしたし、若い白人を見た記憶が無かったのでしょうね。街を闊歩する米兵の振りまく香水とは違った独特の空気に、朝子は嫌い、臭いと言っておりましたが、　ほんの少し前まで、皇国の臣民だの撃ちてしやまん、だの大和魂だの勇ましいことを申しておりました克子が、鬼畜だった筈の米兵集団の体臭でしょうか、この匂い、私好きよ、　アメリカの匂いって何なのでしょうね。ロバートさま、ご存知でしょうか）

第六話　セミテリオに里帰り　その十三　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は６月８日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その十四

（アメリカ人の匂いの件はよく訊かれました。長く日本にいるアメリカ人からは匂わないそうで。多分に、食生活なのではなかろうかと。亜米利加人は、牛肉をよく食べますからな。それでかと。日本に参ると、そうそう牛肉は食べられませんでしたから匂わなくなるのではなかろうかと。我輩、日本人というより、日本の匂いなら申せるのですが）

（ロバートおじさん、日本の匂いって何の匂いっすか）

（糠漬けですな）

（まぁ、糠漬け。懐かしゅうございます。糠をかきまわすあの小さな幸せ）

（まぁ、わたくしは苦手でございました。臭いでしょ。なんであんな臭いものをお口に入れられるのかと。残り物のお野菜を女中が自分用に漬けておりましたの。でも、台所の床下に隠しておりましたから、文句も言えず）

（カテリーヌさま、それは隠してあったのではなく、糠漬けとは床下に置くものなんですよ）

（まぁ、そうでしたの。わたくし、てっきり、わたくしに見つかると叱られるからと女中が思って隠していたのだと）

（おほほ。床下に置いておくと、地の気が育ててくださるの）

（地の気ですか）

（わたくしたちは空の気ですわね）

（あれは、温度と湿度が発酵に丁度適しているからで）

（虎ちゃん、温度とか湿度とか発酵って理科でしょ）

（うん）

（虎ちゃんって理科に弱いんでしょ、信じていいのかなぁ、ユリ、地の気の方がいいもん）

（あっ、ユリちゃん、意地悪になった）

（そりゃぁ、いつも虎ちゃんに意地悪されているから、時には仕返しよ）

（糠漬けって台所の床下で作るものっすか。スーパーで買って来て冷蔵庫に入れとくもんだと俺思ってたっす）

（スーパーって、あっ、ユリ思い出しました。チェリー。びわちゃんからお花屋さんちの彩香ちゃんに乗り移った時の。何でも売っている所でしょ）

（へぇ〜、スーパーってもしかして、昔はなかったっすか。じゃぁどこで食べ物売ってたっすか）

（お米屋さんや八百屋さんやお魚屋さんやお肉屋さんや乾物屋さんや）

（乾物屋さんってなんっすか。八百屋や魚屋は今もあるっすけど）

（え〜っ、武蔵さん、乾物屋さんを知らないのぉ。乾物屋さんって、昆布とか干椎茸とか干海老とか干物とかお海苔とか売ってるのよ）

（あっ、それっ、全部スーパーで売ってるっす）

（いい時代になりましたねぇ。六十年前には考えられませんでした。何もかも不足しておりましたのに。今は何もかもあふれているんですねぇ。あの時の、いい匂いがする清潔な米兵って克子の言葉が怖くてね。昼日中からちゃらちゃらした服と厚化粧の若い女が米兵の腕にぶら下がってましたのよ、あちらこちらで。克子が悪い影響を受けたらどうしましょうって、心配でなりませんでした。朝子は朝子で、お母ちゃま、東京ってやっぱり千葉とは違うわ。みんなもうもんぺなんてはいてないもの。私も昔みたいにお洋服着たい。そう申されても、服どころか食物が先、朝子の卒業までまだ二年、何より寒い冬を越す方が先でしたものね。年が明けた頃、克子が神奈川に療養する前まで教わっておりましたお琴の先生が、音楽学校を受験してみないかとお葉書をよこしました。数年間お琴から離れていたのに今更と私は思いましたのよ。なのに、克子は、焼けなかった先生のお家にしばらく居候させていただいて、そういう時にもお米を持たさねばなりませんでしたでしょ、母屋から買って持たせまし

たよ。で、受かってしまったんです。普段でしたらお目出度いことでございましょ。でも、先立つ物が。幸いにも終戦前に千葉の土地を買ってましたし、松澤の方も家はなくとも土地は残ってました。でも、何しろ、ただでさえ不安なところに、二月に預金封鎖をされましたから、旧円紙幣は使えず、三月からは預金引出額が制限されましたから、ただ同然で千葉の家と土地や松澤の土地を売って食物に換えることも考えましたが土地があれば、お野菜はできますものね。そんな食費中心の生活費ですらままならないのに、合格されても授業料も出せず、結局克子には涙を飲ませました。がっかりするかと思っておりましたら、案外あっけらかんとして、お母ちゃま、私、死にものぐるいでお琴をおさらいしたので、もう充分です。それに、もしかしたら私、案外英語が好きかもしれないから、英語でお仕事探します、米軍には英語を使えるお仕事がいっぱいあるって。私は、年末に見た、米兵の腕にぶらさがっている若い女達を思い出してぞっといたしまして、まさか克子、ああいう真似はなさらないで。お母ちゃま、ご心配なく。お琴の先生の所で以前お友達だった方のお父様が紹介してくださるって。ということで、数日後、娘は働き始めました。一年ぐらいはそのお友達のお家に居候させて頂いて、もちろん、お米は持たせましたよ。克子が千葉に帰ってくる度にお野菜も色々持たせました。克子が最初にお勤めいたしましたのは丸の内にあった占領軍の事務所で、翌年からは出来立てのグランドハイツ、あらっ、グランドではなくて、グラントでしたかしら。よく克子に直されましたっけ。そこのＰＸで働き始めました）

（ＰＸとは軍隊の購買部のことですな）

（日本にそういう場所ができたのですか。占領されるということは、そういうものなのでしょうか）

（お母上、日本も日本、都内にですわ。お母上は成増の飛行場をご存知でしたかしら）

（いえ、わたくしは。でも成増でしたら分かりますわ。農村地域でしたでしょ。一面大根畑でしたかしら）

（あっ、僕、分かります。成増飛行場ですね。僕がこちらに来る少し前だったと思いますよ。首都防衛飛行隊の飛行場ですね）
（あの頃は、帝国陸海軍の施設はもちろん、あちらこちらの大きめの建物や洋風建築が片っ端から接収されました。成増飛行場はグラントだったかグランドハイツになったのです）
（我輩思うに、グラントではなかろうか。グラントでしたら亜米利加の、以前お話しいたしたリー将軍の好敵手がグラント将軍でしたな。我輩が小学生の頃に大統領になられたので、そのお名前かと思いますがな。南北戦争の北軍の将軍として名高い方でしたな）
（おっ、ロバート殿、覚えておりますのっ。南町奉行か北町奉行かと私は尋ねた覚えがございますのっ）
（そうそう、それですな）
（負けても人気のあった南の将軍でしたのっ。そのお方のお相手の名ということですのっ）
（然様、グラント将軍）
（でも、皆さんグランドっておっしゃってましたわ）
（ｂｅｄがベットになり、Ｇｒａｎｔがグランドになったわけですな）
（ふ～ん、それって、全部東京の話しっしょ。東京に大根作っていた所があったり、羽田空港以外に飛行場があったり、それだけでも不思議なんっすけど、そのなんとかハイツってのはなんっすか）
（空港とは飛行場のことですのっ。で、飛行場の名前が羽田ですかのっ、こりゃ面白い。飛行機の羽は田んぼで取れる、わはは。おや、もしかして、そうなのかのっ。飛行機の羽は何で作るのかのっ）
（ええええっ、そうなんですか。ユリ、飛行機の羽って金属だと思ってましたぁ）
（ユリちゃん、当たり前だよ。僕が昔乗せてもらったグライダーの羽は布だったけれど）
（ほらぁ、それに、鳥の羽って羽でしょ、とんぼの羽って羽でしょ。紙飛行機の羽って紙でしょ、だから、飛行機の羽が、例えば麦わら

だったら軽いから飛べると思ったんだけど）
（だんなさ～。羽田はわたくしは存じておりますよ）
（そりゃ、マサは私より三十年も長生きしたからのっ）
（だんなさ～、計算間違えてらっしゃいます。わたくし、だんなさ～より二十四年分長生きいたしました。だんなさ～がこちらにいらしてからも、わたくしはあちらで三十一年長らえましたけれども。羽田って、だんなさ～、鈴が森刑場のもっと南、六郷より海よりですわ）
（そんな辺鄙なところに飛行場があるのかのっ）
（辺鄙だからこそ、飛行場が作れたのだと思いますよ）
（辺鄙だったっすか。へぇ～。周り、工場や倉庫がいっぱいで）
（武蔵君、あの辺りは漁師と猟師の村だった筈）
（あの辺りで魚や、もしかして狸や猪や熊が取れたっすか）
（狸や猪は、僕も知らないけれど、魚は取ってましたね。海苔も作ってましたね）
（私が江戸に参った頃は、狸や狐、鹿はおったのっ）
（そうそう、浅草海苔。浅草じゃなくて羽田で採っても浅草海苔って言ってましたわ）
（お母上、みなさま、私がこちらに参ります前にも、まだ羽田で海苔は作っておりましたよ。それに、新幹線の中から漁船が見えました。開さんが時折海外へ出かけられて、そういう時には私も飛行場にお見送りに参りましたのよ。今は、あそこ、新橋、いえ浜松町からモノレールで行けますわ）
（モノレールって、遊園地のですか）
（うっひゃぁ、お爺ちゃん、ここの話しって面白いっす）
（武蔵君、何が面白いのですか。遊園地の話ですか）
（ほら、武蔵、失礼だろう。皆様すみません）
（いえいえ、楽しんで頂けるなら幸いですわ。わたくしのロビンももう少し世の中を知ってからこちらに参りましたなら楽しめましたのに、ロビンは遊園地も存じませんもの。あら、湿っぽくなってし

まいますわね、申し訳ございません）
（浜松町から羽田空港までモノレールが走っているんですよ）
（んまぁ）
（では、飛行機に乗る前に、遊園地気分ですわね）
（いや、もう、山手線と同じ様な感覚で、十分以内に一本ぐらいあるのではないでしょうか）
（んまぁ、電車が繋がってしまいそうです。よく、前がつっかえませんこと）
（競馬場の脇、東京湾の上を走るんですよ）
（ほぉっ、東海道線と同じですのっ。あれは品川辺りは海の上を走っておったのっ。競馬場は、無かったがのっ）
（うっそぉ。新幹線が海の上を走ってるっすか）
（武蔵君、新幹線ではなくて、東海道線ですのっ。あの超特急というのには私も京都まで乗ったことがありますが、下に海があったかどうか、何しろあの速度、怖くて景色を観賞するゆとりなどなかったのっ、マサ）
（まぁ、お父上お母上、新幹線にも乗られたのですか。まぁ、勇敢ですこと。いえ、私は生存中は乗りましたわ。朝子のいた京都まで）
（そう、絵都や、同じですのっ。私とマサは、お前がこちらの世に来たことを知らせにここに来た朝子に乗ったのですのっ。絵都の孫の綾子が摩奈を生むので実家に帰る時でしたのっ）
（まぁ、そうでしたの。私があちらのお墓に入ってすぐの頃かしら。私、ここに参る時の様な移動ができるとはまだ存知ませんでしたから。存じておりましたなら、ご一緒いたしましたのに。生まれたばかりの曾孫に会えたのやも）
（お爺ちゃんとお婆ちゃんののあの面白い話、ユリちゃん好きだものね）
（あら、虎ちゃんだってお好きでしょ）
（わたくしも好きです。マンナの摩奈さん）
（我輩も楽しませて頂いております）

（あら、みなさまご存知なのですか。知らぬは綾子の祖母の私だけ）
（まぁ、その内、絵都にも話して進ぜよう）

第六話　セミテリオに里帰り　その十四　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は６月１５日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その十五

（え～と、それで、あの超特急ではなくて、昔の、え～と、私があちらの世に生きておった頃の東海道線ですのっ。汽車ですのっ。おっ、もしかして武蔵君は汽車を知らないのかのっ）

（いえ、知ってっす。秩父鉄道の汽車に乗ったことあるっす）

（ほう、今でも秩父は汽車なのですのっ。秩父事件の頃のままですのっ。あの時は汽車が大活躍したのっ）

（いえ、月に何回かだけ、観光用に汽車を走らせてるっす。普段は電車っす。秩父事件ってなんっすか）

（ほう、武蔵君は知らないのかのっ。絹糸が安くなって困った百姓が反乱起こして、警察や軍隊が出動したのだがのっ。当時は大騒ぎでしたのっ。明治の一揆ですのっ）

（それ、わたくしも少し覚えておりますわ。横浜でも騒いでおりました。輸出いたしました絹糸が欧羅巴で安く売り叩かれたそうで。夫の同業者が嘆いておりました）

（あのぉ、俺が、いえ、僕がおばあちゃん、絵都おばあちゃんに質問した、なんとかハイツっての、まだ答え貰ってないっす。ハイツってアパートっすか、近所、あっ、俺、いえ僕が生きていた時の近所にたくさんあったっす）

（武蔵、あれは、なんとか荘という名前じゃ古臭いから、なんとかハイツとかメゾンかんとかと呼んでいるだけだ）

（あっ、アパートって亀歩き青年の家みたいな所ですね、ユリ、わかりました）

（ｈｅｉｇｈｔｓは、高い所という意味ですがな）

（そんなに高いアパートじゃないっす。ほとんど二階建てで、たまに三階建てもあるっすけど。あぁ、高いって家賃のことっすか。それも安いって、矩雄が言ってました。アパートなんて貧乏人の住む所だぜ、よかったなお前はアパートじゃなくて。アパートなんかに

住むのは貴重な一票の時にしか頭下げる価値のない奴達だってのが矩の父ちゃんの口癖だって）

（矩雄ってのは、お前をいじめていた子だね。そんな言い草の親だからろくな子が育たないんだ。え～と、ロバートさんでしたっけ。いえ、それも違うんです。終戦時、私は小学校に上がる前でしたが、たしか、私がこちらの世に来た頃に、都内最後のハイツが無くなったんだと思います）

（そうそう、都内には何ヶ所かありましたわ。たしか、グランドハイツの他にも、代々木にも、オリンピックの前はワシントンハイツがありましたし、もう一つ永田町にもあったんじゃなかったかしら。ともかく広くてね。あっ、武蔵さん、アパートみたいなのではなくて、中にお家がたくさん、とてもたくさんある広い場所をハイツと呼んでいたようですよ）

「もうっ、どこなんだ、家の墓はっ」

（あきらめればよろしいのに）

（いやぁ、自分の家の墓をあきらめるわけには参りませんですな）

（いえ、あきらめて管理棟にいらっしゃれば、という意味でございましたの）

（こりゃ早とちり失敬、然様ですな）

（でも、管理棟に行って、ここまで戻ってくるのって結構大変っす）

（確かに、生きていると歩く身としては遠いですね）

（今の我らも、あちらの世の人々に乗って動くのは結構大変ですがね）

（あらぁ、ユリ、この前、カテリーヌさまとご一緒して楽しみました）

（でもユリちゃん、カテリーヌさんが降りちゃった後、寂しかったんだろう）

（そうですぅ。虎ちゃんすぐ意地悪言う）

（夢さんやご隠居さんみたいに乗りこなせるようになったら楽しいでしょうね）

（乗りこなせるようになったら、カテリーヌさま、一緒に上野に行きましょう。ユリ、大熊猫と小さい熊猫と見たいです）
（お母上、先ほども申しましたように、戦争に負けるということは、占領されるということで、占領されるということは、占領軍が来るということで、帝国陸海軍では考えられなかったことなのですが、あちらの方々は、皆さん家族を呼び寄せるので多人数になって。しかも、あちらでの生活そのままを望みますから。ハイツの中には遊ぶ所も買い物できる所もあって、町そのものの様ですよ。）
（じゃぁ、ディズニーランドみたいなのっすか）
（アメリカの遊園地ですか。武蔵さん、私、参ったことないのでわかりませんわ。デズニーの映画なら綾子を連れていくつか見に行ったことございますが、デズニーランドはアメリカにあるのでしょう）
（ディズニーランドって浦安にあるんだけど）
（浦安って千葉のですか。あんな漁村に、デズニーランドがあるのですか。もう占領されておりませんのに、デズニーランドまでアメリカは作ったのですか）
（漁村・・・結構大きな市だと思うけど）
（武蔵、浦安は三十年ぐらい前から開発されていたけれど、その前は、ほんと漁村だったね。べか船だらけ）
（懐かしいですわ、べか船）
（おや、絵都さんの疎開先は海辺でしたか）
（いえ、でも、海の上にたくさん出てましたでしょ。遠くからでも点々の様に見えました。れんげ畑の向こうの青い海に）
（べか船ってなんでしょう）
（カテリーヌさんもご覧になったことございませんか。小舟ですわ。海苔を取ったり、一寸した荷物を運んだり）
（築地から見えたのがそうかしら）
（あっ、もしかして、ユリも知ってます。川を上り下りする小ちゃいお舟でしょ）
（ふ～ん。やっぱ海苔とってたっすか、東京湾で）

（今は採ってないのかのっ）
（私がこちらに参ります頃は、まだ採っておりましたわ。あんな汚い湾でよく作れると思ってましたが）
（絵都、江戸湾は美しかったがのっ、まっ、薩摩の海には負けるがのっ）
（お爺ちゃんはたまに会社への行き帰りに乗換駅で見かけるぐらいだったが、家には鎌ヶ谷からかつぎ屋さんが来ていて、お婆ちゃんは時々海苔や魚や野菜を買っていたよ。他にも浦安や佐倉からも）
（お爺ちゃん、かつぎ屋さんってなんっすか）
（そういえば私がこちらの世に来る頃にはもう見かけませんでしたね。武蔵が知らないのも無理ないか。随分大きな籠を背中にしょって、首にふろしき包みまで巻いて、電車に乗って都内まで魚や野菜を売りに来ていたんだ。その日の朝の採れたてで新鮮でね、一軒一軒馴染みの家を回って売り歩いてた。確かに私が幼い頃はかつぎやのおばちゃんって呼んでいたけれど、馴染みにな二十年も経てば、かつぎ屋のおばあちゃんって呼んでいたくらいだからね）
（ふ～ん）
（ハイツは、遊園地とは違うと思いますよ、武蔵さん。でもね、街中に映画館もボーリング場も、小さめの遊園地や小中高の学校もあって）
（ボーリングとは、球転がしの遊びですな。一升瓶ほどのこういう形のものを並べて、このくらいの球を遠くから転がして遊ぶ場所ですな。あの瓶状のを並べるのを人がやっておりましてな、重い球が転がってくる所で瓶を並べるなど命がけの仕事と思っておりましたな）
（ほう～。死人が何人も出たからかのっ）
（ユリ、怖いです）
（ロバートおじさん、今は、機械がやってっす。自動で）
（私も人が並べるのは見たことないですよ。いつ頃でしたっけ。え～と、もうかれこれ四十年になるでしょうか。日本でやたらとボー

リングが流行った頃がありましてね、私も仕事帰りに週に何度か同僚と行ったものでした。その頃すでに機械で並べてましたね）

（そのハイツのＰＸ、購買部で克子は働くことになったんです。お母ちゃま、すごいのよ。全部アメリカなの。アメリカにいるみたいなの。もちろん全部英語。で、それぞれのお家の前は広～い芝生で、ハイツの中を子供は自転車、大人は自家用車で走ってるの。数軒集まった前にはブランコやジャングルジムがあったり、私のいるＰＸも、ぜ～んぶアメリカの物ばかりで、みんな英語で書いてあって、中にはどう食べるのかわからないものもあって、食べ物だけじゃないの。食器や寝具やお化粧品やお洋服やお酒や雑誌や新聞やレコードや自転車やラジオや洗濯機や玩具やともかく何でもあるの。みんなアメリカから運んでくるのよ。車だって新しい車を運んで来て、車ばっかり売るお店まであるの。ＰＸで売っている物はみんな色もきれいで、日本のみたいにぼんやりした色じゃなくて、はっきりした色で、総天然色って感じなのよ。総天然色って言えば、ライフって雑誌なんて写真ばっかりで、日本にはあんな雑誌、支那と戦争始めた頃から無くなったでしょ。他にもアメリカのお店やレストランもあって、私達もそこで軽食を買えるの。天国みたいな所。ちょっと前まで日本とだけじゃなくてヨーロッパでも戦争していた国なのにあんなにあるの。日本は戦争中も今も物資不足でしょ。なのに、あ～んなにあるの。日本が戦争に負けたのは無理ないと思ってます。少し前までは鬼畜米英、神国日本などと申していた娘のあまりの変わり様に、驚いておりました。もう目がきらきら輝いていました。お店の中で上官に会っても気をつけなんてしないで、軽口たたいているし、フレンドリーなの）

（ｆｒｉｅｎｄｌｙ　とは友の様に親しげという意味ですな）

（ロバート殿、あいがとさげもした）

（毎日英語ばかり話すのよ。それも楽しい。日本と違ってね、嫌なことは嫌ってはっきり言えるのも素敵。私は米軍に雇われて、しかも物を買ってもらう立場なのに、商品を渡すと、にっこり笑ってｔ

ｈａｎｋ　ｙｏｕって言ってくれるのよ。あっ、お母ちゃま、ＧＩが若い男で私が若い女だからってんじゃないのよ。小さい子も、お年を召された方も、み～んな、といった調子でしたから、その内ＧＩと恋愛でもしたらどうしましょうと心配しておりました。みっともないでしょ。米兵と一緒にいると、パンパンみたいに見えてしまいますものね）

（パンパンってなんすか）

（あっ、それ、ご隠居さんが話してました。ユリが知っちゃいけない言葉らしいです。ユリがだめなんだから、武蔵君もきっとだめよ）

（どうして）

（ははは、武蔵にはちと早い）

（あっ、そういうことっすか。そんなの別になんてことないっす。援助交際みたいなのっすね）

（援助交際って、なんでしょう）

（武蔵、援助交際という言葉はお爺ちゃんも知らないよ）

（えっ、知らないっすか。え～と、つまり、中学生や高校生の女子が、男と付合って金貰うっす）

（まぁ。中学生や高校生がですか。世も末ですわ）

（もしかしたら、生活苦でかしら）

（生活苦って生活が苦しいからってことでしょ。違うっす。遊ぶ為に遊んで金儲けるっす）

（まぁ・・・）

（警察はそういうのを許しているのかのっ）

（いえ、見つかったらたぶん捕まるっしょ、補導かな）

（まぁ・・・）

第六話　セミテリオに里帰り　その十五（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
毎週水曜日に更新しております。
次回は６月２２日の予定です。

第六話　セミテリオに里帰り　その十六

（パンパンなどと私が口にしばかりに、申し訳ございませんわ。克子はグランドハイツのフェンスのすぐ外にアパートを借りて一人住まい始めましてね、時々私も千葉から出て来て泊まったりしていたのですが、そういう時には、ハイツの中の物を買ってきてくれるんです。日本人従業員は本当は買えないそうですが、中のアメリカ人からプレゼントされたことにすればいいとかで。克子が勤め始めて二、三年経った頃でしたかしら。私が克子の夕食を作って待っていた時、アパートのお部屋の扉を開けるなり、お母ちゃま、今すぐ食べて、溶けちゃうからって、冷たいこのくらいの箱を渡されたんです。アイスクリームですよ、冬だというのに。冬にはからだの冷えるものは食べたくないですよ、と私が申しましたら、だって、夏じゃ持ってくる間に溶けちゃうじゃないの。それに冬にアイスクリームを食べるのって、中じゃ流行っているのよ、ですって）

（絵都おばあちゃん、今の日本なら、冬にアイスクリーム食べるっす）

（武蔵さん、あの頃、日本の冷蔵庫は、夏に氷を入れて食品が傷まない様にする木製のものばかりでした。まだそれもお持ちでないお宅が多かった頃です。克子は日中はハイツの中におりましたでしょ。勿論アパート暮らしでは木製のも持っていませんでした。フェンス中ではどのご家庭にも電気冷蔵庫があって、冷凍食品が詰まっているなんて申してましたけれどね。冷凍ですのよ。冷蔵ではなくて。で、いくら冬でも、置いておけないので、アイスクリーム、頂きました。克子がそれまで天国と言っていたことがよぉく分かりました。火鉢に暖まりながら、冷たい箱の四隅からそぉっと紙をめくって、匙ですくって口に入れました。冷たいっ。でもその次に幸せが口の中に広がりました。あんなに豊潤なアイスクリームは大連でも頂いたことございませんでしたし、アイスクリームはその後、こちらの

世界に来るまで何度も頂きましたが、あの時のアイスクリームほど美味しいと思ったことはありませんでしたわ。誇りを失っておりましたなら、舌を出して箱の紙を嘗めたいくらいでしたもの。流石、そこまでは出来ませんでした。明治の女が然様な恥ずかしい事はできませんでした。額こそ戦後少なくなりましたが、それでも細々と修養団には寄付いたしてまして、会員ではおりましたしね。貧しい時こそ、他人様の好意、善意が身に滲みますし、他人様に優しくなれるものなんですね。これだけは、私、終世絶やしませんでした。きっと、地球のどこかのお困りになってらっしゃる方々に何か届けられるのだろうと。どんなに騙されても、騙すよりはましです。心の平和が得られますものね）

（そうですわ。他人さまの物や土地や生命まで奪おうとする人がいる反面、他人さまと共に生きよう、助け合おうとなさる方々がいらっしゃるから、生き辛いあの世が少しは救われているのですものね。幸い、物も土地も命も、こちらでは奪えませんから、奪いたい者はここの世では永らえぬ様でございますし）

（あの頃、日本の食生活も漸く落ち着いてきた頃でしたが、戦前戦中戦後のすさまじい変化、疎開先の千葉にようやく建てた朝子と住む家とソ連抑留から帰って来て開さんが建てていた松澤の家と克子の住む成増のアパートと、あちこちいったり来たりで疲れ果てておりましたが、あのアイスクリームを口に含んだ時には、幸せってこういうことだった、美味しいってこういうことだったのねと、大連で碧さんと過ごした陽だまりの様な甘い幸せの日々をとても久しぶりに感じました。豊潤、濃厚、口の中から全身がとろけていくような、柔らかい布に包まれている様な、ほんと、天にも昇る心地とはこんな感じなのかしらと思わされました。で、目を開くと、克子がにっと笑っていて、お母ちゃま、分かるでしょ、私が天国みたいな所っていつも言うのが。満鉄の株はぱぁ～になりましたし、預金封鎖で貯金は大層目減りしましたし、焼けだされてますし、それまで戦争に負けたことが悔しくて残念で仕方なかったのですが、あの時

初めて、もしかしたら戦争に負けたことはよかったのかもしれない、と思えました。それほどに素敵な味わいでした）

（その天国みたいな味というのを、私も味わいたいものですのっ）

（だんなさ～、今私達は天国みたいな所におりますでしょ）

（しかしのっ、喰えぬ身ですのっ、これはかなり辛い）

（その頃、克子はアメリカの物を色々持ち帰って来ておりました。先ほども申しましたように、本人は買えないけれど、贈り物として頂くことはできましたから、贈り物という形を取ればよかったようですし、ハイツの中の米兵家族と一緒に車で外に出る時には持ち出せましたし、古本や古着も構いませんでしたのよ。ですから、古着も大分。その頃の日本の綿製品は安物と申しましょうか、質が悪かったのですが、アメリカの物は質が良くて、色落ちもいたしませんでしたでしょ、私、ほどいてアッパパーをよく作りました。克子のも朝子のも私のもね。夏場には重宝いたしました。ただ、直六十になろうとする老婆にはアメリカの布は色も柄も派手で。その内、克子が持ち帰ってきてました家庭婦人向けの雑誌を見て、朝子は自分で作るようになりましてね。そうそう、アメリカの雑誌も独特の匂いがございましたわ。あら、変ですわねぇ。雑誌はお肉を食べるわけではないのに、どうしてあの匂いなのかしら）

（多分に、紙やインキの匂いですな。我輩は、日本の和紙に墨というのが気に入っておりましたな。墨にも独特の香りがござろう）

（へぇ～、墨っすか、あれがいい匂いっすか、ふ～ん）

（克子と違って朝子は器用でしたのよ。姪にあたる幸子ちゃん、あっ、開さんと節さんの長女ですが、その子の服を作ったのが最初でしたかしら。次第に自分の服も作るようになりまして、最初は手縫いでしたが足踏みミシンも米軍のお古のシンガーを克子を通して買いましてね。買ったはいいけれど、どうやって運びましょう。郵便も回復してましたし鉄道チッキもございましたが、大きくて重くて運べませんでしょ。あっ、その頃には女学校を卒業した朝子は、上の学校に入る程成績も良くなく、いえ、何しろ、卒業はいたしまし

たものの、戦中は学校毎工場で仕事していたようなものでしたし、まともにお勉強してはおりませんでしたでしょ。英語など敵性言語でしたしね。きちんと勉強してみたい、などと申しておりましたが、なかなかね。それで、疎開先の卒業した方の県立高女の同級生のお家の製麺工場で事務の仕事をしていたのですが、戦中こそ男手が足りなくて女でも働けましたが、戦後は復員してきた元の従業員がどんどん戻って参りまして、戦地帰りの方々は、ふぬけみたいになってらっしゃる方々か、殺気立ってらっしゃる方々ばかりでございましたでしょ。　若い女性は色々と卑猥な言葉を投げかけられたり居づらくなっていたようで、　アメリカの古雑誌を見て服を作る趣味が高じて、ご近所の方から頼まれるようになっておりましたので、お代はその頃、お野菜やお魚をお金の替わりに頂戴しておりましたから、製麺所をやめました。現金収入は減るわけですが、でも、ほっともいたしました。士族の娘、高女を卒業させたのに事務とはいえ工場で働かせるのは、辛く思っておりましたもの。それで、シンガーのセコハンミシンを買ったのですが）

（セコハンってなんっすか）

（英語ですわねぇ、ロバートさま）

（英語ですかな。セコハン、申し訳ないが、我輩には判りかねます）

（セカンドハンドでしたよ、たしか）

（義男さん、かたじけない。なるほど、ｓｅｃｏｎｄ　ｈａｎｄですな、二つ目の手、すなはち、二人目、すなはち中古。なぁるほど、また何でも短くする日本語なのですな）

（そのセコハンミシンを千葉まで運ぶのにチッキを使って鉄道とリヤカーで運んで頂くのに、途中で盗られたらどうしよう、途中で倒れて壊れたらなどと考えあぐねておりましたら、克子が、友達に頼んで運んでもらうわ、と。千葉の家で朝子と共にご馳走を作って楽しみにしておりましたら、昼過ぎに、後ろの蓋を開けて、中にミシンを太い綱で固定した大きな車から表れたのは、これまた大きな白人の男性で。唖然呆然、朝子と顔を見合わせてしまいました。克子

の友達は、てっきり運転お上手なお転婆お嬢様、日本の方だと思っておりましたのにね。コンニチワ。トーキョーカラ、マシーントキマシタ。オーストラリアカラキマシタ。ワタシノナマエワピーターデス。ドーゾヨロシクと変な節回しで言われまして。ミシンを軽々と一人で持ち上げて、家の中に設置して下さってから、お手拭きをお渡しいたしましたら、アリガトーゴザイマスとにっこり笑われて、朝子にはウインクするんですよ）

（ウインクとは、片目をつぶることですな、軽い挨拶の様な）

（ロバートさま、ありがとうございます）

（あいがとさげもした）

（大柄なピーターさんが窮屈そうに卓袱台の前にあぐらをかいて座って、五目寿司を珍しそうに見ている間、目配せして克子を呼び、どういう関係なの、あなたまさか、と小声で尋ねましたら、克子は、ただのお友達よ、ミシンを譲って下さったハイツのお宅の少尉のお友達なだけだから心配しないで、と）

（ロバートおじさん、チャブダイってどういう意味っすか）

（ほっ、卓袱台は日本語ですな）

（えっ、日本語っすか）

（武蔵は知らないのかねぇ。そういえばいつの間にか卓袱台は見なくなりましたねぇ。私がこちらに来た十年前にはもう見かけませんでしたね）

（えええっ、卓袱台が無くなったんですかぁ、あんな便利な物ないのに、ユリ、信じられません。ほら、女中さんや小僧さんがお食事の時には、あれをぱっと開いてすぐに食卓にできたでしょ。ユリもお稽古のおさらいをする時なんか、よく使いました）

（ぱっと開くっすか、どうやって）

（ほ～んとに、武蔵君、知らないのっ、信じられない）

（こう、脚が開くんですよ。脚がばらばらか、二本ずつ）

（えっ、脚がそう開くって、椅子っすか）

（椅子ではなくて、食卓でね、テーブルだよ）

（テーブルっすか、へぇ～）

第六話　セミテリオに里帰り　その十六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第六話　セミテリオに里帰り　その十七

（ｔａｂｌｅ．．．いや、我輩は卓袱台が何かではなく、武蔵君が卓袱台は理解できずとも、ｔａｂｌｅで理解できることが驚きでしてな。今の日本はそうなっておるのですな。こりゃ愉快。いや、美しい日本語が失われているという意味では残念ですなぁ。しかし興味深いものですな）

（ただ、低い、正座して食事する時用ので。丸いのや正方形のや長方形の座卓だ。あっ、だから無くなったのですね。最近の日本人は正座しなくなりましたからね）

（まぁそうなんですか。お茶やお華のお稽古も無くなったのかしら）

（そんなことはございませんわ。いえ、ないと思いますわ。私がまだあちらの世におりました頃にはお茶もお華もお琴もちゃんとお教室ございましたもの）

（あ～よかった。ユリのおさらいした事、み～んな古くなってなくなってしまったのかと思いました）

（おっ、もしや、悦、柔道、剣道、弓道、なども、ちゃんと道場、あるんだろうのっ）

（だんなさ～、それ、全て、兄が学校教育に奨励いたしたものですわ。無くなる筈ございませんことよ）

（いえ、母上、え～とお父上、柔道、剣道はしっかり残ってますわ。柔道などオリンピックにも取り入れられましたの。でも弓道は、あまり。日本全体でどれくらい弓道場があるのかしら。でも剣術は、お父上もご存知の様に、廃刀令がございましたでしょ。ですから、剣術はもはや。道場でも竹刀だけ。もっとも大戦の時にも刀は持って参ったのですが、それも敗戦で）

（亜米利加が廃刀令を出したのかのっ）

（私も詳しくは存じませんが、今ではご家庭で刀をお持ちになるに

は、いちいち届けなくてはなりませんのよ）
（巡査の佩剣は）
（あれも、今のおまわりさんはお持ちではないですのよ）
（あの、刃の美しさがのっ）
（彦衛門殿、あの美しさは魔性の光ですな）
（然様、ロバート殿にはお分かりいただけますのっ）
（刀が美しいっすか）
（然様、美しいですのっ）
（へぇっ、あんなもの、博物館にでも行かなきゃ見れないし、それに古臭いし）
（嘆かわしい事でござるのっ。武蔵という名前を持ちながらのっ）
（武蔵坊弁慶っすか、だって、弁慶って最後に何本も刀刺されたっしょ。刀は俺の敵みたいなものっす）
（刀が刺されたのでしたかのっ。いや、あれは矢が何本も刺されたのであって、刀というよりも薙刀で体を支えておったのではなかったかのっ）
（まぁ、彦衛門さま、弁慶さんと同じ頃のお方なのですか）
（いえいえ、カテリーヌさま、だんなさ～は弁慶さんの最期より、え～と、六百五十年も後に生まれましたの）
（まぁ、でも、彦衛門さまのお話よう、ご覧になったみたいで）
（あはは、よく語られる話でしてのっ。島津家家臣としては、鎌倉が発祥みたいなものでして、武蔵坊弁慶も赤の他人と呼ぶのはちと辛いような）
（で、武蔵君の名前は弁慶から取ったのですかな）
（いえ、私は宮本武蔵のつもりだったんですがね。どうも、宮本武蔵は現代には馴染まないようで、武蔵は弁慶の方が好きでね）
（俺、どっちもあんまり。だって戦うっしょ。そういうのあんまり好きじゃないっす。刀って人を殺すもんだっしょ）
（ほうっ、今の若いおの子は、情けないものですのっ）
（だんなさ～、おの子は戦う者と思ってらっしゃいますのね。戦わ

ないで済むのでしたらそれにこしたことございませんのに）
（しかしのっ、血が騒ぐということはないのかのっ）
（俺はあんまりなかったっす。矩雄やあいつのダチはそうだったっすけど。だから先生達に睨まれてたし、年鑑にも入ったみたいだし、俺が死んだ後も調べられたし。だから、戦うなんてのは、警察に捕まる奴らの好きなことっす）
（流石、血が騒ぐと年鑑に載るのですね）
（虎之介お兄ちゃん日本語間違ってっす。年鑑には載るのではなくて入るっす）
（おっ、お兄ちゃんとは、嬉しい言葉、ありがとう）
（いえ、武蔵さん、年鑑には載るものです。その年の目立った事柄が整理されて載るのですよ）
（あっ、あの図書館なんかにあるものっすか。誰も開かないのに古いのがずらっと並んでる。あれじゃなくて、年鑑ってのは、え～と、悪い事したら入る所で）
（刑務所とは違うものなのかのっ）
（年端の行かない、大人になっていない子を入れる所ですよ）
（感化院のことですか）
（矯正院のことではなくて）
（いえ、今は少年院と呼んでいますよ）
（あっ、少年院とは違うっす。あっ、でも俺あんまり知らないっす。ただ、矩雄やダチは、年鑑上がりだと箔は付くけど、少年院上がりには負けるって言ってたっす。だから、年鑑は少年院とは違うっしょ）
（もしや、警察官も戦わぬ時代なのですかのっ）
（だんなさ～、警察官は戦いませんわ。西南の役ぐらいでございましょ）
（いえ、皆さん、そんなこともありませんよ。悦さんもご存知でしょ。学生運動）
（あ～、はい。そうでしたわねぇ）

（学生の運動ですか。それでしたら僕の頃にも、天皇の赤子として敵と戦う為に、健康な身体を作る為、運動は奨励されてましたね。ただ、僕はもう、肺病で体育もろくに出来なくなってましたが、体を鍛えるのは、特に中学生や高校生には当然のこと）
（虎之介さん、違いますのよ。学生が政府に反対して運動することを、学生運動と言ってましたの）
（へぇ～、そうだったんですか。つまりアカの学生ってことでしょうか）
（アカ、そうだったのでしょうかねぇ。六十年の時、私はまさに学生でしたが、う～ん、誘われて一度だけ。でも、別に自分をアカだとは思ってませんでしたね。絵都さん、どう思われます）
（さぁ、私もあんまり存知ませんわ。でも、学生運動って随分長い間でございましたでしょ。六十年安保より前から七十年安保の後もでしたものね）
（その六十だの七十だのあんぽんだの、何かのっ、あんぽんたんのことなのかのっ、おっ柿のことかのっ）
（あっ、なんか、歴史の教科書に載ってたっす）
（あんぽんたんや柿が歴史なのかのっ）
（まぁ、たった少し前のことですのに、もう歴史の教科書に載っているのですか。それではやはり私も古い人間ってことなのかしら）
（絵都、六十年も七十年も経てば、人間古くなりますわ）
（いえ、お母上、六十年とは千九百六十年、つまり、え～と、昭和三十五年のこと、七十年は昭和四十五年のことですわ。たった四五十年前）
（一人分の人生かしら、あら、でもわたくし一人分の人生を生きられませんでしたわ）
（僕も）
（俺もっす）
（ユリも）
（おっ、何やら、私とマサは、それに絵都も、長生きの家系ですか

のっ）
（まぁ、何だか申し訳ないような）
（無いものねだりですもの）
（お父上、お母上、長生きがよいとは限りませぬ。人生が長ければ長い程、辛いことも多うございました）
（お歳を召された方はよくおっしゃいましたわね。でも、ユリ、やっぱり番茶も出ばなの花も恥じらう年頃でしたでしょ。もっと生きたかったです）
（うむ。僕もそう・・・ですね。もっともあの時に死なぬとも、すぐに赤紙で戦地で死んでたかも知れませんしね。戦地での苦しみから逃れられただけ、どうせ死ぬならあの時に死んだのはよかったのかもしれません。もっとも、あの当時斯様な事を申しましたら、非国民、もっと死ぬ目に遭っていたやもしれませぬし）
（俺、死ぬ予定じゃなかったんだけど、俺、馬鹿したっす）
（おうっ、あんぽんたんだったわけですのっ。で、あんぽんは何かのっ、美味しそうだのっ）
（あんぽん柿ではなくて、お父上、え～と、条約の名前ですわ。義男さま、安保って何でしたっけ）
（日米安全保障条約ですね。日本とアメリカが相互に安全を保証しあうという条約でして、それでアメリカの基地が日本にたくさんあるんですよ。でも、それは日本国民の主権を侵すということで、また、ベトナム戦争に日本から爆撃機が飛ぶということで、学生が多数、戦争反対運動をしまして、それを学生運動と呼んでいましたね）
（そういえば、ご隠居様もその戦争のお話をなさってましたな。しかしながら、我が国の爆撃機が日本からねぇ。そういう関係になったのでござるか。昔はただただ捕鯨の為の給水地を求めて開国を迫りましたのにな）
（えええっ、アメリカが捕鯨してたっすか。たしか今じゃ、日本が鯨を取るのをアメリカは反対してるんじゃなかったっすか）
（武蔵君、亜米利加は、鯨の油が必要でしたからな、鯨を追って日

本近海まで来ておりましたな）
（へぇ～、それじゃぁ、今鯨が少ないのは、日本人が食べるからじゃなくて、アメリカ人が採り過ぎたからじゃないっすか）
（そうかもしれませぬが、我輩、そこまでは詳しくないのでして）
（ふ～ん）

第六話　セミテリオに里帰り　その十七（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第六話　セミテリオに里帰り　その十八

（それで、あんぽん柿に似た件で、巡査と学生が戦ったのですのっ）
（なんだか、学生さんとおまわりさんが柿を投げ合ってる戦いみたいですわ）
（それは面白い。硬い柿なら痛かろう、柔らかい柿なら衣が汚れる。おっ、当たると服が血まみれならぬ熟し柿まみれ、ははは）
（だんなさ～、猿蟹合戦ではございませぬわ）
（雪合戦みたい。ユリ、やってみたい。でも、きっと、女の子がそんなみっともないって叱られちゃったかしら）
（日本人ではないわたくしから見せて頂くと、なにやらお子同士のほほえましいお遊びの様にも聞こえますわ）
（弾が飛ばない戦争でしたら、ほほえましいですわねぇ）
（運動会の種目のようですね）
（どうして弾を飛ばし、生命を奪うことを考えるのでしょうね。人間は利口なのか馬鹿なのか）
（そのあんぽん柿戦争で我輩の記憶の引き出しが開きました。昔、欧州でじゃが芋戦争というのがございましたな）
（仏蘭西にじゃがいもを広めたＰａｒｍｅｎｔｉｅｒが捕虜になった戦争ですわね）
（然様）
（ロバート殿、その戦争ではじゃがいもを投げ合ったのかのっ、じゃがいもも当たりゃ痛かろうの、が、死なぬ）
（いえ、じゃがいもを盗みあったのでしたかな）
（いえ、たしか、兵隊さんがお暇でお腹がすいたので、じゃがいもを掘って食べたらしいですわ）
（掘った芋いじるな、を思い出すのっ）
（お爺ちゃん、それ、何ですか）

（私は虎之介殿のお爺ちゃんではないですのっ。で、虎之介殿、掘った芋いじるなは判らぬのかのっ、ロバート殿、お判りであろう）
（いえ、我輩にも判りませぬが）
（ほうっ、私が江戸に下ったおり、いや、東京に上京した頃に目にした英吉利語の会話本に載っておったのだがのっ。ほったいもいじるな、これは英吉利語ではないのかのっ。この芋は甘藷なのか馬鈴薯なのか里芋なのかと気になったので覚えておるのだがのっ）
（だんなさ～、それどういう意味なのでしょう）
（マサ、たしか、今何時じゃ、という意味の英吉利語が、掘った芋いじるなだったのだがのっ）
（今何時じゃ、ですか・・・Ｏｈ、Ｗｈａｔ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｉｔ　ｎｏｗ・・・ほうったいみぃずぃなう・・・ほったいみじな・・・なぁるほど、ほったいもいじるな、ですな、これはいい）
（じゃのっ、掘った芋いじるな、は今何時じゃ、ですのっ）
（たしかに）
（柿でも芋でも雪でもなくて、学生さんたちと機動隊さんたちが戦ったのです）
（まぁ、戦ったと言えるのかもしれませんね。テレビや新聞ではしょっちゅう報道されてましたよ。どこそこでデモ隊と機動隊が衝突、何人逮捕などとね）
（デモ隊とは何ですの）
（機動隊というのも、何ですかのっ、陸軍の隊ですかのっ）
（デモ隊は、え～と、あれはデモンストレーションですかね）
（ｄｅｍｏｎｓｔｒａｔｉｏｎ、見せる、ですかな）
（ロバートさん、そういう意味なんですか）
（はい）
（よくわかりませぬのっ）
（あっ、僕、なんとなく判ります。あのぉ、フランス革命やロシア革命のような、民衆の蜂起行動でしょう）
（あら、そうおっしゃられれば、わたくしにも判りますわ。王様や

政治家に対して、普通の人々や貧しい人々がみんなで集まって文句を言うことですわね。お金持ちには怖いこと）

（おっ、一揆みたいなものですかのっ、いや、日比谷焼討事件のようなものですのっ、暴徒、鎮圧。おっ、血が騒ぎますのっ）

（そういうこともありましたな。日露戦争終結の頃でしたかな。かつて鹿鳴館のあった辺り、我輩が生きておりました時、目が最後に見たのも日比谷の森、皇居の森の黒い陰）

（まぁ、ロバートさま、日比谷で亡くなられたのですか）

（たぶん）

（まぁ、たぶん、なのですか）

（生命の最後の瞬間はなかなか曖昧でしてな）

（然様ですわね）

（デモ隊ってあれみたいなものかしら。確かに日比谷焼討事件に似ているような。お父上、あの頃私女学生でしたでしょ。記憶にはございますが、あの頃はテレビもございませんでしたし、伯父さまが大変だったことはお母上から耳にいたしましたが。新聞も、女子が読むものではない時代でしたし。安保の方は、六十年のも七十年のも、あちこちの大学の学生が集まって、列になって道路を歩いて、理由は存じませんが、機動隊と衝突してという白黒の映像、テレビでしょっちゅう目にいたしましたわ。そういえば、学生運動も日比谷や国会議事堂前や新宿、それと方々の大学でしたわね）

（そうそう、日大、明大、早稲田、中央、東大、方々軒並みでしたね）

（東大の安田講堂とか、どこでしたっけ、赤軍派が閉じこもって、機動隊が大きな球をぶつけて家を壊したり、テレビでずっと中継してましたね）

（安田講堂ですか。駒場は大丈夫だったんですね）

（いやぁ、駒場もやってましたよ、たしか。井の頭線に乗ると、何でしたっけ、あの独特の字体で書かれた、え～と立て看でしたっけ、見えましたよ）

（あら、義男さん、井の頭線にお乗りになってましたの、私もホームがあの沿線にございましたのよ。ですから時折渋谷にお買い物に）
（おっ、懐かしいですねぇ）
（ほんとに）
（ホームは停車場のことであろう。そりゃ鉄道沿いにあるに決まっておるのっ）
（停車場はｐｌａｔｆｏｒｍ、プラットフォーム、なるほど短くしてｆが発音できぬからホームですな。停車場から近かったということであろうか。それとも、絵都さまのおっしゃるホームはｈｏｍｅ，家庭のことでござろうか。いづれにせよ絵都さまはあの辺りに住んでおられたのですな、神田川の水源近く）
（はい、たしかに住んでおりましたが、家ではなくて、老人ホーム）
（老人の家ですかな）
（まぁそのような。老人が集まって住む場所で、病院もございまして、有料のと無料のとございました。節さんと折り合いが悪くなりましてから、開さんが私にそこを買って下さって、終身おりましたのよ。まぁ、体良く追い出されたみたいなものですわ）
（まぁ絵都、追い出されたのですか。なんと冷たい息子と嫁）
（お母上、いたしかたないですわ。息子とは血がつながっておりませんし、まぁ、育てはいたしましたが、まして嫁女はね、私が連れて参りましたとはいえ、嫁女にしてみれば、私よりご自分の連れ合いや腹をいためたお子達が可愛いに決まっておりますし。もうあの頃、私は裏切られるのには、慣れとうなくとも慣らされておりましたもの。高女の時の親友に始まり、最初の連れ合い、お国にも勝ち戦だから耐えよ忍べよと、家は焼かれ、食べるのも大変で負けてみれば満鉄の株はぱぁ、預金封鎖、娘は、あら、娘達のことはまだこれからお話いたしますわね。義理の息子が帰還して暫くすればホームに追い出され、やはり長生きなどするものではございません）
（ほうっ、父には裏切られたとは申さなかったのっ。よしよし。で、絵都、機動隊とは陸軍かのっ）

（お父上、今の日本には陸軍も海軍もございませんのよ）
（今は、自衛隊で、陸上と海上と空上、いや、航空自衛隊がありますよ）
（で、機動隊は自衛隊の陸上の部隊の中にあるのですのっ）
（いえ、機動隊は警察の中にありますよ）
（警察っ、おっ、それで、警察は学生相手に戦うのですのっ）
（今も戦っているのでしょうか）
（ええっ、俺、そんなの聞いたことないっす。機動隊ってのは、時々、外国から偉い人が来ると、警備してるってのテレビで見たことあるっす）
（学生運動、七十年の頃は、学生相手に戦っていたのは機動隊でしたね）
（へぇ～、そうだったんすか）
（で、佩剣も無しで戦うのですのっ）
（六十年の頃は警棒だけでしたかね。七十年の時は、こう、何て言うのでしょう。盾を持ってましたよ。あれは前が見えなくて不便そうでしたね。で、最近のは透明だったか）
（へぇ～、透明・・・今はジュラルミンだっしょ。あれっ、でも両方あるのかなぁ、前が見えるのと見えないのと）
（ジュラルミンって何でしょう）
（軽い金属ですよ）
（で、佩剣は無しですのっ）
（そうですねぇ。刀は無しでしたねぇ。かわりに、というか、警棒と放水車や催涙弾）
（放水車とは水を撒くものだのっ。火消しでもするのかのっ）
（火消し、まぁ、たしかに学生の中には火炎瓶を投げる者もいましたね）
（火炎瓶って何でしょう）
（瓶の中に燃える液体を入れて、液体に浸した布の端を瓶の口に持って来ておいて、そこに火をつけて投げるらしいです）

（ほうっ、で、火が付くから火消しの水を撒くわけですのっ。ということは、警察と一緒に火消しも出動していたのですのっ）
（あ～、いえ、たぶん、消防署は出ていなかったと思います。警察が放水車を持っていたのではないでしょうか。それに、放水車は火を消すためではなく、水圧で学生を散らす為に使っていたのではないでしょうか）
（ほうっ、水圧でですか。騒いだ血も冷めてしまいますのっ）
（佩剣の代わりに警棒と盾と水、もう一つ何かおっしゃってましたが）
（あ～、催涙弾）
（ほうっ、やはり弾を使うのですのっ）
（弾と言っても、銃弾ではなく、え～と、涙を流させるガスを入れた弾で）
（ほうっ、泣かせるわけですのっ。血は流させぬが涙は流させる、ですのっ）
（おまわりさんは盾と警棒と水まき車となんとか弾で、学生さんは火炎瓶だけですか、なんだか可哀想）
（いやぁ、何と呼ぶのでしたっけ、角材を持ってましたよ。それにヘルメットかぶって、口と鼻をタオルや手拭で覆って）
（そうそう、テレビで初めて目にいたしました時には、私、建築現場の方だと思いましたもの）
（その、減る目とか倒れるのは何ですかのっ）
（ｈｅｌｍｅｔ、兜ですな）
（タオルは手拭）
（ふむ、兜。兜につきものの鎧はないのですかのっ）
（鎧・・・お父上、江戸時代ではありませぬ）
（戊辰の折には、甲冑の者もおったがのっ。実は私も身につけたことはないですのっ。動き辛いそうですのっ。日清、日露の折にも鎧は無かったですのっ。しかしながら、弾よけを身体には身につけぬというのも変なものですのっ）

（そうですねぇ）
（確かに不思議ですな）
（頭は護っても、心の臓、五臓六腑は護らぬのですかのっ）
（我が国では、例の南北戦争でも、いえ、独立戦争でも鎧に相当する物は身につけてませんでしたな）
（ふむ、摩訶不思議）

第六話　セミテリオに里帰り　その十八（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第六話　セミテリオに里帰り　その十九

（最初から戦などなさらなければよろしいのですわ）
（わたくしもそう思います）
（どうして殿方は戦がお好きなのかしら）
（皆様、今では自衛隊には女性も入れますよ）
（まぁ然様なんですか）
（うわぁ、おまわりさんだけじゃなくて、兵隊さんにもなれるんですかぁ。あの素敵な軍服、女の子でも身につけられるんですかぁ。羨ましい。ユリ、着てみたいです）
（ユリちゃん、似合わないって）
（虎ちゃん、すぐ意地悪言うんだから）
（だって、その髪型じゃぁね）
（ええっ、この髪型じゃいけないのかしら）
（兜になるとか）
（たぶん、自衛隊の女性は皆髪の毛短くしてますよ）
（まぁ、坊主刈り、それはユリ駄目）
（そこまで短くはしていないと思いますが、結ってはいないと思いますよ。それこそ、ヘルメットに入りませんしね）
（ほらユリちゃん、やっぱり諦めなきゃ、それに、こちらの世にいるわけだしね）
（いつか、このセミテリオに自衛隊の女性がいらしたら、ユリ、絶対に乗せて頂きます）
（どの方が自衛隊の方か、判ればねぇ。軍服着て墓参りしてくれればいいけれどさ。その時は、僕もユリちゃんについていってあげるよ）
（虎ちゃん、意地悪なんだか親切なんだかわかりゃしない）
（ふふ）

（ほらほらマサさま、カテリーヌさま、ユリちゃんのように戦好きな女の子もいるってことですよ）
（あらぁ、ユリ、戦が好きなんじゃなくて、あの軍服が素敵なの。凛々しくて）
（え～と、自衛隊は軍隊ではないので、もしかすると軍服とはよばないのかもしれません）
（ユリ様、戦争に負けて帰還してらした帝国陸軍や海軍の兵隊さん達はそれはそれはよれよれぼろぼろの軍服とも呼べない様な服でしたのよ。一方占領軍の軍服はしゃくに障るくらい凛々しくて、物資の差が戦力の差だったのかと情けなく思わされましたわ）
（それで、鎧をまとわぬ巡査と学生が戦ったのですのっ。なにやら戊辰戦争のような、いや、西郷どんの私学校と巡査が戦った西南戦争に似てますのっ）
（もっとも、実弾も刀もないですからね、鎧は必要なかったのかもしれませんね。それよりも如何に素早く逃げるかの方が大事だったかもしれません）
（逃げるのでしたら、最初から戦わなければよろしいのに）？
（然様でございますわ）
（いやぁ、男の血が騒ぐのですのっ）
（弾も刀も使わぬゆえ死なぬ戦であるならば、餓鬼の遊びと変わらぬではないですかのっ）
（いやぁ、死人も出たんですよ）
（弾も刀も使われなかったのにかのっ）
（圧死があったそうです。それに、安保反対運動とは別に、学生運動の中でも暴力的な連中は色々と武器を準備していたようで、浅間山荘では機動隊の方も数名亡くなりましたよ）
（ほうっ、いよいよ、ますます戊辰戦争ですのっ）
（戊辰戦争ではあれは使われたのでしょうか）
（あれとは、義男殿、何かのっ）
（え～と、一寸申し上げにくいのですが、排泄物）

（おおっ、私の好きな話ですのっ。しかしながら、う～む、戦国時代には使われたという話も耳にしたことはあるがのっ、戊辰戦争では、たぶん、使われていないと思うがのっ、やはり、武士の情け、敵も人なり、糞尿ではあまりに敵が哀れ）

（それがですねぇ、成田では使われたようなんですよ。やぐらの上から糞尿を浴びせかけられたというかつて機動隊だった人の話しを延々聴かせられて参りましたよ、なんでも、臭いを落とすのが大変だったとか、宴会の席での話しですからね、ビールが不味くなりそうで）

（おおおっ、ビール、しかし、ビールは酒ほど香りませぬな。東京麦酒とか大阪麦酒とかありましたのっ。私はビールは腹が膨れる割には酔えないので好きではありませんでしたがのっ。おっ、確かにビールは似ておりますのっ）

（だんなさ～。またそういうお話）

（いやいやマサ、今回ばかりは私が始めたのではないですのっ、義男殿が始めた話ですのっ）

（義男様、この手のお話、宅の彦衛門は好きですのよ。お気をつけ遊ばせ。ところで、成田とおっしゃると杉並ですわねぇ。たしかにあの辺りでしたらわたくしがこちらに参ります前、まだ田畑が広がっておりましたから、さぞかし、あら、だんなさ～、わたくし口にできませんわ）

（マサ、何も遠慮することはないのっ、生きている限り喰えばひねるもの。今ではひねる前に喰えもしない、残念ですのっ、そのかわりしぶることもないのっ）

（お母上、杉並の成田ではございませんわ。千葉の成田です）

（千葉の成田、あら、新勝寺の成田、あちらでですか。まぁ、お寺が大学になったのでしょうか。たしかに弘法大師さまのお寺ですから、学問と少しは関わりございますかしら。でも、汚いですわねぇ、学問の場で糞尿を使う戦いですか）

（いえ、寺でも学問の場でもなく、空港で）

（まぁ、飛行場で糞尿ですか。まさか飛行機からですか）
（いえいえ、成田に東京の空港を作ることになりまして）
（あら、東京には羽田に空港作られたのではなかったかしら）
（私も義男さん、少し前に義男さんからそう伺いましたがのっ）
（はい、羽田に作られて、でも羽田では狭いからと、もう一つ）
（まぁ、それで成田山新勝寺を飛行場にしてしまったのですか）
（弘法大師さまがお可哀想。ユリも成田山新勝寺に初詣に参ったことございますの。あんまりですわ）
（いえ、みなさま、お寺ではなくて、成田の田畑を、東京の新しい空港にしようとしまして）
（まぁ、今では千葉も東京なのですか。東京はどんどん広がっておりますのね）
（え～と、カテリーヌさん、そうではなくて）
（カテリーヌさま、私にもわかりましてよ。なぜ東京からあんなに離れた場所なのに、東京空港なんて名前をつけるのか、当時生きておりました私にも不思議でございました。銀座通りがあちらこちらにあるのと同じで、東京という名前を付ければ価値が上がるような考え方だったのかもしれませんわ）
（東京とて、東の京でござるな。京も都も中心の場所という意味だと、かつて教わりましたがな）
（あら、みなさま、私、何のお話をいたしておりましたかしら。あっ、千葉は千葉でも成田ではなく鎌ヶ谷の時のお話でしたわねぇ。そうそう、ピーターさんに初めてお目にかかった時のお話でございましたわね。はぁ～）
（まぁ、絵都さまお疲れかしら。そろそろお休みになられては）
（いえ、疲れてはおりませんのよ。ただねぇ、あの日が・・・）
（あの日が、どうなさったのですかな）
（いえ、まぁ、練馬から鎌ヶ谷まで十里程を行きは克子とピーターさんと二人だけでしたでしょう。夕方にはまだなっておりませんでしたが、帰路、東京のどこかで克子が降ろして頂いても、うっかり

すると暗くなり始めると思いまして、帰りにまた二人だけにするのは気が進みませんでしたので、私も克子のアパートに参ることにいたしましたの。今程車は多くありませんでしたし、何しろ占領軍の車でございましょ。土ぼこりをあげて飛ばすのですのよ）

（車が飛ぶのかのっ。今、いや、もう何十年も前から車は飛べるようになったのかのっ）

（つい先ほど絵都の所に参った折の綾子の車は飛んでませんでしたわねぇ）

（いえ、お父上、お母上、飛ばすとは、スピード、あっ、速度を上げて走ることですわ。ですから恐ろしくてねぇ。それに穴ぼこだらけでございましたでしょ。がたんがたん、車がしょっちゅう跳ねるのですよ。気分が悪くなりまして、そうしたら、お母ちゃま、ピーターさんが、そこで横になっていて構いませんって。横になれば、と克子が申しましたので、私、横になりましたの。でもねぇ、頭の下からしょっちゅう突き上げられて、大きなもぐらに突かれるようで）

第六話　セミテリオに里帰り　その十九（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第六話　セミテリオに里帰り　その二十

（もぐら．．．動物だってことは知ってっすけど、動物園でも見た事ないっす）
（まぁ、武蔵君、もぐらを知らないのっ。武蔵君、埼玉にお住まいでしたでしょ。ユリの頃は東京にもいたのに。もぐらさん、ちょっとふにゃふにゃしていて、でもかわいい、あら、かわいいってユリが言ったら、百姓には邪魔者なんですよって婆やに言われました）
（これこれ武蔵、他所様のお話に割って入るものではない）
（ええぇっ、だって、みんな割って入ってばかりじゃないっすか）
（構いませんのよ、義男さま。こちらではいつもこんな調子ですもの）
（然様ですな。皆、それぞれの思い出を、思いを述べる）
（さもないとアンモナイト、こちらの永遠の様な時を過ごすには暇を持て余し過ぎますのっ）
（おかげさまで、わたくしも日本語が上手になったように思います）
（ほらお爺ちゃん）
（いやぁ、でも、武蔵、お前は一番年下だからね）
（あのぉ、この中では、わたくしのロビンが一番若いです）
（おっと失敬。しかしロビン君は聞いているだけですね。お行儀よろしい。武蔵とは違いますね）
（ロビンちゃんはねぇ、話せるわけないですものね。まだ赤ちゃん）
（あんまりお年のこと、おっしゃらないで。ユリ、若いつもりでしたのに、何だかお婆さんみたいに感じてしまいます）
（ユリさん、私よりお若いですわ。お生まれでもお見かけでも）
（ふふっ、ユリちゃん、お生まれでもお見かけでも、僕より老けてる）
（ほらぁ、虎ちゃんやっぱり意地悪）
（ねっ、ですから、義男さま、やっぱりお年は関係無く）

（ほらお爺ちゃん）
（はいはい）
（それで、大きなもぐらにドンドン突かれているようでまんじりともせず、でも、運転してらしたピーターさんもその右横に座っていた克子もピョンピョン跳ねながら楽しそうに話し続けておりまして、時折キャッ、ワーオなどと、子守唄にはほど遠いにぎやかさでしたのよ。そしたら突然ギャッと外で声がしまして、キィィッと車が止まりましてね、私座席から転げ落ちかけまして、後ろの窓から外を見ましたら百姓が一人悲鳴を上げて飛び跳ねているじゃありませんか）
（そういえば、綾子の自動車の前にも、他の自動車の前にも人払いはおらなかったのっ）
（だんなさ～、馬車鉄道の頃ではありませぬ。自動車の前にいちいち人払いがいては、いくら人口が倍になっても、人が足りませんでしょ）
（そういえば、そうでしたわね）
（汽車の前にも人が乗っておったのだのっ）
（へぇ～。そうだったっすか。よく落ちなかったっすね）
（汽車や自動車って鉄でできているのでしょう。鉄がぶつかったら、ユリなら痛いです）
（ユリちゃんじゃなくたって痛いさ、それに重い）
（ぶつかったのかしら、はねてしまったのかしら、まぁ大変と私おろおろしてましたのよ。飛び跳ねてるくらいでしたから生命に別状ないことは判りましたが、痛そうで。そうしましたらね、克子が、お母ちゃまは気にしなくていいからと言って、外に出て行って百姓に話しかけてからピーターさんの所に戻って来て何か話して、するとピーターさんがお財布から出した紙幣を克子が百姓に渡して、百姓はぺこぺこしてましたから、納得したのでしょうね。お母ちゃま、気にしなくていいのよ、と克子はもう一度私に申しまして、占領軍の車だし足の上をタイヤが通ったくらいだから無視してもいいんだ

けれど、ピーターさんは悪いからってお金をお渡しになったの、と。何て申しましょうか。仕方ないのかしら、占領軍がお百姓をひいたのだから仕方ないのかしら、でも何か喉に小骨が刺さったような、ですから今でも覚えておりますが）

（殿の行列を邪魔して英吉利人や亜米利加人を斬ったら戦になったのっ）

（あっ、それ知ってっす。生なんとか事件っしょ）

（然様）

（百姓は軍人には弱いですわねぇ、昔からどこでも）

（そうっすか。今もそうなのかなぁ。男女平等でもっすか）

（ましてや占領軍ではねぇ）

（絵都さまもオノマトペをたくさんお使いになりますのね。日本語のオノマトペ、本当に面白いですわ）

（オノマトペとは、カテリーヌさん、なんでしょう）

（俺もわからないっす）

（ユリ、覚えました。外国語にはほとんどないんですよね。ロバートさま）

（武蔵君、擬音語擬態語のことだよ）

（勉強になりますわ）

（でしょう。絵都、勉強はこちらの世でもできますのよ）

（だのっ、絵都。故に、あの時には私の按摩の為に女学校をやめても構わなかったのですのっ。勉強はこちらでもできる。然し乍ら、按摩は身体がなければ出来ぬものだからのっ、こちらでは無理だのっ）

（お父上・・・）

（うむ、ユリさん、擬音語は少しは英語にも仏蘭西語にもありますがな。擬態語は無いに等しいですな、とは申せ、我輩の存じておる外国語はそう多くはないのでして、世界のあらゆる言語の中にはオノマトペの豊富な言語もあるのではないかとは思っております）

（擬音語と擬態語って、そういえば国語の時間に習ったっす、でも、

あんまり覚えてないっす。虎之介お兄ちゃん、何のことですか）
（うわっ、またお兄ちゃんだって、嬉しい言葉。武蔵君、擬音語とは音に似せた言葉、先ほどのドンドンとかがたんがたんとか。で、擬態語とは、様子を表す、例えば先ほどのぺこぺこがそう）
（お兄ちゃんありがとうございます）
（おっ、武蔵君がちゃんとございますって言えましたね）
（あ～、思い出したっす。そういえば、俺のダチがチャリに乗っておかまほられかけて、チャリごと倒れて、ちょっと怪我して、チャリがちょっとゆがんで）
（チャリって何でしょう、オノマトペかしら）
（チャリチャリ、何か玩具の銭を手の中で揉む様な）
（チャリって自転車のことっすよ）
（チャリ、Ｃｈａｒｌｉｅでしたら人の名ですが、自転車の意味では英語ではないですな）
（仏蘭西語でもないですわ）
（日本語っす）
（日本語に斯様な言葉はあったかのっ）
（わたくしは存じませんわ）
（私も）
（僕も）
（私も聞いたことないですね）
（日本語だと思うっす。よく使うっす、ママチャリとか）
（ママは母のことですかな）
（そう、ママチャリってのは、お母さんが乗ってる自転車のことっす。前や後ろにかごが付いていて、サドルが低くて）
（サドルとは乗馬の折の鞍のことですな。なるほど、自転車の座席が低い、女子供にも乗り易いということですな）
（あっ、ママチャリは男の人でも乗ってっす）
（ふむ、ややこしい）
（で、おかまほられたとは）

（お釜って、お台所で使うお釜でしょ）
（♪おかまかぶってどこ行くの、お釜壊れていかれません♪）
（お母上、それ、克子や朝子が幼い頃歌っておりましたわ）
（あら、絵都、あなたも、それに私もですよ）
（マサさま、その唄、懐かしゅうございます）
（まぁカテリーヌさままで。まさかお国の唄ってこと、ございませんわねぇ）
（露地で日本のお子がお手をつないで遊んでましたでしょ）
（はい、ユリも遊びました。♪勝って嬉しい花一匁、負けて悔しい花一匁♪）
（お釜は掘れませんわねぇ、彫るのかしら）
（あのぉ、おかまほるってのは、後ろからぶつけるってことでぇ、ともかく、　俺のダチがチャリに乗っておかまほられかけて、チャリごと倒れて、ちょっと怪我して、チャリがちょっとゆがんで）
（武蔵の友人が自転車に乗っていて、後ろから追突されて、自転車ごと倒れて、怪我をして、自転車も壊れた、ということだね）

第六話　セミテリオに里帰り　その二十（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第六話　セミテリオに里帰り　その二十一

（うっす）
（はいそうです、とは言えないものかね）
（うっ、はい。んで、そのダチ、えっと友達、お爺ちゃん、俺、いや僕のいつもの言葉じゃないと話しが続けれないっす）
（続けられない、だろう。う～ん、困ったもんだ）
（いいんですよ、武蔵さん、いつもの調子でどうぞ）
（そうそう、義男さんも、あまり気になさらないで）
（ほらね、お爺ちゃん、じゃぁ、続けるっす）
（んで、俺のダチ、その車の人、えっと、車を運転していた人の車に自転車も乗せられて、病院行って、一応頭も、レントゲンだか何だかで見てもらってから、その人が一万円以上払って、次に自転車屋さんに連れてかれて、どれでもいいって言われて新しいの買ってもらって、あと三万円もらって、誰にも言わないでくれって言われて、家に帰ったら新しいマウンテンバイクだから母ちゃんが驚いて、んで、母ちゃんには話したらしいんだけど。だから、車にひかれたら金貰って得したって。母ちゃんは怒っていたらしいっす。警察に届けなきゃいけないのにって）
（そうそう、時折届けがありましたのっ。馬車鉄道に轢かれてというのが）
（馬車鉄道の前では人払いしてましたのにねっ）
（危ないからっすか。それとも生なんとか事件の時みたいに大名は偉いからっすか）
（危ないからですのっ。汽車や馬車は偉くはなかろうのっ）
（けど、絵都おばあちゃんの話しの兵隊は偉かったっしょ）
（偉いでも危ないでも、ユリは汽車や馬車や自動車にぶつかられたくないです）
（ところで、マウンテンとは山という意味ですな、バイクとはなん

でござろう）
（やだなぁ、おじさん英語の人っしょっ。バイクってバイクっす。英語っす、自転車のことっすよ）
（自転車はｂｉｃｙｃｌｅ、バイシクゥですな、おっ、また日本語流の短くしたものですな、なるほど）
（んなことないっす。だって英語の教科書にもバイクって書いてあったっす。え～と、ｂｉｋｅっす）
（ほうっ、英語も短くするようになったのですな、ほうっ、我輩もう古い人間なのですな。で、山の自転車ということは、登山もできる自転車ですかな）
（ひょえっ、登山じゃないっす。あっ、でも、山みたいなってか、でこぼこした所でもへいちゃらっす）
（武蔵君の住んでた辺りは山なのかのっ。山はいいですのっ。空気がきれいで、鳥がたくさんおって、花も咲いて、温泉もある。あぁ、宮之城が懐かしいですのっ）
（えええっ、温泉なんてないし、鳥は、鳩と烏と雀ぐらい、花も桜とあとは何が咲くかなぁ、菊と藤ぐらいっす。空気なんてちっともきれいじゃないし。あっ、山なんてないっすよ。遠くに見えることもあるっすけど、俺の住んでたとこ、関東平野のへそって言うか、真っ平らっす。坂もないっす）
（鷺も鳶もいないのかのっ、私の頃には江戸、いや東京にも鷺も鳶もおったのっ、マサ）
（宮之城でしたら、鶴も時折）
（あっ、鷺、小さいのいまっす。時々だけど）
（小さいのかのっ、大きいのはいないのかのっ）
（大きいのって）
（このくらいの）
（そんなに大きいのはいないっす、このくらいのだけっす）
（山も無ければ、登山用自転車は不要でござろう）
（だって、かっこいいっす）

（格好ですか）
（うっす）
（ふむ）
（後ほど克子が似たようなことを申したんですよ。ピーターさんはお金を払っただけましだって。何でも、克子の仕事仲間の日本人の方は、進駐軍のお仲間とご一緒に何台もの車で海水浴に行った折、やはり日本人の足をひいたらしくて、その時には車の中でいいよ、いいよ、行っちゃおうって、げらげら笑っていたそうです。お酒も入っていたらしいのですが、あんなの構わないって。生きてるから文句言えるんだし、って。そのお友達は、車の後ろの窓から、日本人が怒っているのを見て、申し訳なくて辛かったそうですよ）
（兵隊さんには何でもありなのかしら）
（占領軍はやはり日本人より偉かったのだのっ）
（危ないから人は除ける。除けられていい気になる、すると偉くなった気になるのでしょうか）
（うむ、いや、たぶん、一人ではないと気が大きくなるのと、まぁ、若さ故の無謀なのですな。ほら、日本語で若気の至りと申す）
（僕も、わからないでもないですね。寮生活など、そんなことの連続のような。僕は肺病で早々に引き上げましたが、ひどいもんでした。いえ、まぁ、それが生きていた証のような、ひどいけれど楽しい思い出ですね）
（なるほど、あの学生運動の時には学生と機動隊に分かれていた連中が、中年過ぎて、あの頃は楽しかったなどと話しているのと相通じる所がありますね）
（まったく、殿方はわかりませんわ）？
（それでしたら、最初から戦わなければよろしいのに）
（いやぁ、そこがね）
（でも、喧嘩はなさらない方がよろしいですわ）
（人と人でしたらともかくも、国と国ですと、死にたくない、戦いたくない方々には迷惑ですわ）

（然様ですわねぇ。私も、あの頃は・・・国をあげての戦いでしたでしょ。やれ中国が悪い、やれ朝鮮が賢くないから、やれ台湾は指導してやらねば、やれ口を出す欧米、でしたものね。偉い方々がそうおっしゃるならばそれが正しいのでしょうと、国を護らねば女子供が生き延びられない、大義が、正論が、東亜が、帝国が、皇国がでしたもの。若い生命が戦地で、戦争に行かなくとも空襲で、原爆で女子供もたくさん死にました。あの頃は、殿方の戦好きにつられて、私も戦好きに慣らされてたのでしょうか。議論を交わすのが賢い、馬鹿ならば黙って従え、女子供は黙って男の言うことをきいていればいいんだ、そんなでしたものね）

（そうそう。ユリもそう育てられました。女の子は、お茶にお華、嫁いで子を成し、子を育て、夫をたてて。家の外のことは男に任せておけばいいって）

（わたくしもですのよ。ですから、それじゃぁ女の子はお勉強しなくてもいいのかしら、と一緒にお住まいになってらした先生に申し上げたことございますの。そしたら、教養を身につけ作法を身につけ、立派な殿方と結ばれ、賢いお子を生み、女の子なら女の子らしく、男の子なら男の子らしく育てられるようなマダムになる為に、お勉強は必要不可欠なのです、とおっしゃられて）

（俺、その、何々らしくって嫌いっす。小学生の時には小学生らしく、五年や六年になると上級生らしく、中学校に入れば中学生らしくとか言われたっす）

（武士は武士らしくといわれましたのっ）

（武蔵君、いい所に気付きましたな。我輩、その日本語、興味深く観察いたしたことがございましてな。我輩は亜米利加人だが、亜米利加人らしからぬ振る舞いと？々言われましてな、では亜米利加人らしい振る舞いとはなんぞや。どうも、日本語を話せず、日本のことを知らずでなければいけないようでしたな）

（らしく、とは、社会が期待するあるべき姿なのでしょうね）

（曖昧ですわね。わたくし、異人らしかったとは思っておりますが、

でも、異人である以前にわたくしでしたのよ）
（僕、思うのですが、らしくない存在ですと、周囲が判断に困るからというのもあるのでしょうか。らしくあれば、まとまった存在、分類しやすい、統率しやすい。個人の人格、個人の幸福よりも、集団としての一体化、集団の理念を個々にあてはめ、同じでなければならない、一律でなければならないという発想）
（お兄ちゃん、難しいっす）
（うむ。武蔵君、つまり、中学生になっても小学生みたいだったり、あるいは学生ではない振る舞いをすると、武蔵君を中学生としては見られなくなり、それは困ると思うから、中学生らしくしなさいと言われるのでは、ということなんだけれど）
（う～ん、わかんないっす）
（中学生ならばこうすべきだというのが曖昧に決められていて、その曖昧の範囲からはずれたことをすると、中学生らしくしなさいと言われる訳ですよね）
（そうっす）
（つまり、その曖昧の範囲からはずれたことは、武蔵君としてはしたいこともあるけれど、中学生らしくしなさいと言われるからできない訳ですよね）
（そうっす）
（ということは、そのしたいことをすることが武蔵君であるならば、中学生らしくしなさいという言葉で、武蔵君を周囲が期待する中学生という枠にはめようということですよね）
（はい）
（つまり、周囲の枠が大事で、武蔵君個人がしたいということは大事にされない訳ですよね）
（あっ、そうかっ。だから俺、らしくしなさいって言葉嫌いだったっすね）
（そう、ですから、らしくしなさいとは、社会の曖昧な期待の枠であり、それは文化とも呼ばれるわけで、でもそれは法律には書かれ

ていない事柄でも社会による個人の規制をしていることであり）
（虎ちゃんのお話だと、らしくしなさい、ってずるい言葉みたい）
（とも言えますね。で、多用される）
（そう、日本人は、らしくあれ、という言葉で自分をも規制する、我輩そう感じておりましたな。武蔵君によれば、今の日本も同じ様でござる）
（その時々で、期待される姿は変わるのでしょうか。光さんも、聡子も克子も朝子も、娘達はみなカテリーヌさんやユリさんや私とどこか似た教育を受けてましたわ。あの頃、あちらこちらでそうだったんですわね。嫁の節も。良妻賢母温良貞淑忠君愛国。光さんも聡子も軍人さんに嫁ぎ、共に戦死なされ、朝子は戦後官僚に嫁ぎ、光さんは戦後再婚なされて四国に参りましたが遺伝なのでしょうかねぇ、光さんのお母様と同じで癌でね、私より先にこちらに参りました。聡子は軍人の遺族年金では生活できないからと働き始め、もうこちらの世に参りましたが、一人で鎌倉に住んでおりましたのよ。たまにホームには来てくれましたが、お母ちゃまはいいご身分ですわ。私もこういう所に入ってもいい歳ですのに、空きもなければお金も足りないですもの、ここまで来るのも大変なんですよなんて申してました。朝子は京都でしたしね、娘達はみんな離れて行って、婦、三界に家無しですわ。いえ、私にはホームという家があっただけ、聡子に言わせればましなのでしょうね）
（三階に家なければ、一階でも二階でもいいっしょ。でも、どうして女の人は三階に住んだらいけないっすか）
（三階ではなくて、三界）
（ええっ、あれっ、かいでもがいでもいいっしょ）
（いや、漢字が違う。建物の一階二階の階ではなく、世界の界だ）
（世界が三つってことっすか）
（あのぉ、わたくしもわからないのですが。天国とあちらの世と地獄かしら）
（あら、私も存じませんわ。私、勝手に、嫁ぐ前の家、嫁いでから

の家、夫亡き後の家と思っておりました。嫁ぐ前の家は父の家、嫁いでからの家は夫の家、夫亡き後の家は息子の家、違うのかしら）
（おおっ、何やら、坊さんが話しておったが、そういうのではなかったのっ、三つの界で世界は一つとかだったが）
（だんなさ～、三つで一つとは、またややこしい）
（我輩もそれは存じませぬ。ご隠居様がいらしたら、教えてくださろう）
（あっ、ご隠居様はお寺のお生まれですものね。今度ユリお尋ねするの忘れないようにしなくっちゃ）

第六話　セミテリオに里帰り　その二十一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第六話　セミテリオに里帰り　その二十二　最終回

（光さん、聡子さん、朝子さん、あら、克子さまは）
（克子はもっと遠い所に参りました）
（もっと遠いとは、こちらでござるか）
（いえ、こちら程遠くない、あら、でもこちらも近いですわねぇ）
（こちらでもなく、京都や四国よりも遠い所ですか）
（はい、シドニーから車で二時間程かかる町に）
（しどにぃとは）
（オーストラリアですね。ということは、ピーターさんと）
（はい。ミシンを運んで下さった時が初めての出会いだったそうですが。往復の長い道のりで気心知れたのかもしれませんわね。でも、釈然といたしませんでした。戦中、あれ程、鬼畜米英などと申しておりましたのにね。恋は盲目。そんな遠くに行かないでと申せば、お母ちゃまだって満州にいらっしゃったでしょ。満州はあの当時日本でしたよ。でも海を渡られたでしょ。言葉も違うのに。もうハイツで困らないくらい英語で通じてますわ。気候も違うでしょう。満州だってここより寒かったでしょ。白人との間の子ではこどもが可哀想ですわ。愛があれば大丈夫。それに間の子は可愛く賢く生まれるそうですよ。どんな暮らしになるか、生活はできるのかわからないじゃないですか。今の日本のどん底生活よりましよ。鬼畜米英って言ってたのはどなた。お母ちゃま、オーストラリアはアメリカでもイギリスでもないですよ。どんなに反対してもだめでした。反対すればする程、もしかしたら熱を上げたのかもしれません。ピーターさんも何度も鎌ヶ谷までいらして、ママサンダイジョーブ。カツコサンシアワセニシマスでした。朝子の作ったウェディングドレス、あっ、西洋風の婚礼衣装ですよ、お父上お母上、それを着て、写真館で写真を撮って、ピーターさんと克子の同僚も集まって、ダンスホール、え〜と西洋風の踊りの場所です。そこで披露宴みたいなの

をして、克子は皆さんの前で口づけいたしましたのよ。皆さんははやし立ててましたが、私と朝子はもうどこを見ていいのやら、下向いておりました）

（へぇっ、口づけってキスのことっしょ。結婚式みたいな所だったら、キスぐらい構わないっす）

（えええっ、ユリも下向いちゃいます）

（へぇっ。じゃあ、テレビドラマなんて見れないっすか）

（武蔵、昔はそういう時代だったんだよ。今みたいに人前で、電車の中でも平気で男女がいちゃついたりするなど、昔はあり得なかった）

（まぁ、今は電車の中で、公衆の面前でですか、まぁ）

（ほんの数年前までは人前で男女が手をつなぐことすら無かったのに、少し前まではお琴をたしなむ大和撫子だった克子が皆さんの前で口付けでしょ。私も朝子も逃げ出したかったですわ。まぁ、そんなこんなで克子はオーストラリアに嫁ぎました。船ではなく、プロペラの飛行機で参りましたのよ。最初の頃は毎週、私がこちらに参る前頃でも月に一度は便りをくれました。航空便用の紙は薄くてね、小さい字で書いてくるので読むのも大変でしたが、書くのも、書き辛くて、終いには慣れましてね、薄い紙でなくとも、裏表書けば同じ量書けると気付きました。航空書簡は書くのも受け取るのも慣れませんでした。書くのには量が少なく、受け取ると、どこを切ればよいかわからなくて、よくばらばらにしておりましたわ。おほほ、思い出してしまいました。初めて航空書簡を受け取りました時に、克子は何を慌てているのかしら封筒だけで中身がないなんて。でも気付きましたのよ。封筒に字が書いてありますの。ばらばらにしてつなげて並べて読みました）

（そのぉ、絵都、航空なんとかというのは、手紙が飛行機に乗って届くというものかのっ）

（はい、然様でございます）

（ほうっ、手紙が飛行機にのっ、隔世の感ありですのっ。私の頃に

は手紙は下男や書生に届けさせたものだった）
（私の頃には、船で届きましてよ。仏蘭西から日本まで）
（いや、私の頃にも、明治になってからは人が持ってきましたのっ。人が、次には馬で、それから汽車に乗って。で、飛行機で届くというのは、飛行機が空から絵都のいる場所を探して落とすのかのっ）
（お父上、まさか。そんなことしておりましたら、空中が飛行機だらけになってしまいますわ。それに、風で飛ばされて、下で受け取る者はうろうろおろおろ）
（おっ、私、思い出しましたよ。戦争末期、敵機がビラを撒きましてね。拾ったらすぐに届けよと。戦後もよく飛行機からビラを撒いてましたね。どこそこの店の開店大売り出しなどと）
（へぇ、そんな時代があったっすか）
（で、飛行機はどうやって絵都に手紙を届けるのかのっ）
（お父上の頃と同じですわ。郵便配達人が届けて下さるんです）
（おっ、飛行機から郵便配達人が飛び降りるのかのっ。それは恐ろしい）
（恐ろしくないですわ。♪見よ落下傘、空に降り、見よ落下傘、空をゆく♪　あっ、でも、落下傘は使いませんのよ。飛行機が飛行場についてから郵便局に、郵便局からは郵便配達人が届けて下さるんです）
（なんだ）
（その唄、懐かしいですね。僕がこちらの世に来るほんの少し前の映画の唄ですね。藍より蒼き、とか真白き薔薇が花開くでしたね。僕にはどうも吐血の印象があるのですが）
（きれいな唄ですわね。節も素敵。虎之介殿がこちらにいらっしゃる少し前で、でも私はその唄、存じませんわ）
（然様でございましょ。私、後になって、やはり戦争は酷いもんだと思いましたのよ。それでも、この歌は美しいと思っておりました。美しいから恐ろしいのかもしれませんわね。戦争の酷さを感じられませんもの。一番は美しくて、そこに惹かれて私も歌い始めました

の。女なら、乙女なら惹かれる歌詞ですわ。でも、二番、三番四番と歌詞が進むにつれて、恐ろしくて残酷で。悲壮。純白の落下傘に赤い血をとか、肉弾粉と砕くとか、撃ちてしやまぬとか。一番だけでしたら、今でも私、好きですのよ。克子は四番まで勇ましく歌っておりましたのに、心変わりして。今頃、克子はどこにどう漂っているのかしら）

（どこかでその内、会えるかもしれませんわね）

（難しいのかもしれません。風の便りでは、克子の遺骨と遺灰は海に流したそうですもの。魂は風に乗って来るのでしょうか。それとも海の水の中でしょうか）

（海の水は蒸発して雲になり雨になって地面に降り注ぐ、ということになってますよ）

（虎之介さん、ありがとうございます。これからは雨が降る度に、克子がいるかもしれないと思えますわね）

（うわぁ、そうっすねぇ。空気にも雨にもいられるっすね、なんか面白い）

（克子が嫁いだ頃は、白豪主義とやらで、差別がひどかったそうですよ。お母ちゃま、朝鮮人は怖いとかあそこは通っちゃいけませんとかおっしゃってらしたでしょ。今、それより酷い目に遭ってます。ピーターさんと一緒に歩いていても、顔を背けられたり、一人でお店に行くと売ってくれなかったり、言葉も大丈夫だと思ってたのに、英語は英語でも発音の仕方が違って、お相手のおっしゃってることがわからなかったり、話しても通じなかったりやらで、最初は辛かったようです。ほらごらんなさい、とも、もう申せませんでしたしね。その内こどもも二人、女の子と男の子と生まれて、私には間の子の孫ができました。お母ちゃまオーストラリアに遊びにいらっしゃいと何度か言われましたが、船ならまだしも飛行機は怖くてね。里帰りは三度、最初の二度はホームまで子供を連れて来てくれましたのよ。可愛くてねぇ。ジェニファーちゃんとマーカス君。髪の色が茶色っぽくて、目の色も黒より茶色なくらいで、真っ白な肌の色

を除けば、日本人とあまりかわらない子供達。あちらでは日本人と言われ、日本でも日本語話せませんから変な顔されて、やっぱり間の子は可哀想だと思いましたわ）

（絵都や、そのぜに何とかとまー何とかは、このセミテリオに来たことはあるのかのっ、覚えていないのだがのっ）

（お父上お母上、克子はいつもホームにも突然来てました。前もって来日のお手紙は頂いてましたが、予定は未定の子で。慌ただしく来て、もっとゆっくりして行けばと申しても、いえ、お母ちゃま、都内のお友達にも会いたいし、この子達も少しは観光させたいし、それに、ほら、朝子のとこの従姉妹達にも会わせたいですし忙しいのよ。この子達、ここにいても、お母ちゃまとお話できませんしね、でした。お墓参りなど、ましてやひいおじいちゃんひいおばあちゃんのお墓までは気が廻らなかったのでしょうね）

（残念ですわ。わたくしの曾孫達ですのに。会いたかったですわ。あら、その曾孫達が綾子と同じくらいということは、もしかしたらもう曾曾孫もあちらの世にはいるのかしら。会ってみたいですわ）

（マサさま、羨ましいです。マサさまは、曾孫の綾子さんや綾子さんのお嬢さん摩奈さんに会えましたでしょ。私など、自分の息子ですら一人は英吉利ですもの。孫にすら会えてませんわ）

（あらぁ、ユリなんて、自分の子すらいないのに）

（僕だってそうですよ）

（我輩もですな）

（ええと、俺もっす。けど、そんなに子や孫や曾孫やひいひい孫に会いたいものっすか）

（そりゃそうですのっ。自分の血が流れた者がどのような容貌なのか、元気でおるのか、知りたいものですのっ）

（孫は子より可愛いと、世間では申しますものね）

（だのっ。孫が子より可愛いならば、曾孫は孫よりもっと可愛いだろうしのっ）

（んじゃぁ、お爺ちゃん、僕って可愛いんだ）

（そうだね。可愛い）
（ふ～ん）
（しかしですのっ、マサ、曾孫や曾曾孫に会ったところで話はできまい。こちらの世とあちらの世では話しができないのは当然だが、会ったとしても、曾孫達ですら日本語は話せなかったのだのっ、何かを話してくれても意味が分かりませぬのっ）
（我輩でよければ通訳いたしますが）
（おっ、その内、オーストラリアに渡る者をうまく見つけられましたら、ロバート殿、是非オーストラリアまでご一緒下され）
（あはは、そんなに容易く見つかるとも思いませぬが）
（だんなさ～、あの超特急ですら振り落とされそうでしたのに、飛行機なんて、わたくし恐ろしくて）
（それじゃぁ、マサは留守番すればよいのっ）
（あらぁ、だんなさ～、そんな）
（仲のよろしいことで）
（お父上お母上、私は、御両親様のそういうお言葉ですら気恥ずかしいですわ。克子は祖父母に似たのかしら。あっ、それで、ピーターさんが退役してからはご両親の牧場をお手伝いされて。そうそう、克子は車の運転もできるようになり、馬にも乗るようになり、そんな写真も送ってくれてました。カリエスで体の弱かった子がねぇ。人生なんて判らないものですわね。お父上お母上にお嬢様に育てられた私は再婚し、先立たれ、家を焼け出され、満鉄の株はぱぁになり、預金封鎖はされ、つれて来た嫁には追い出されたも同然。殆ど父の顔も知らずに育った克子は、療養生活をし、お琴で芸大に入りかけ、ハイツで仕事をし、朝子のミシンが縁で出会ったピーターさんと一緒にオーストラリアまで行き、馬にまで乗るなんて。あの青白かった子が、真っ黒に日焼けして。そうそう、お琴はね、昔取った杵柄で、あちらで教えていたそうですよ）
（人生先は見えませんからな。我輩とて、日本に骨を埋めたいとは望んでおりましたが、あんなに早く、殺されてとは夢にも思ってお

りませんでしたしな）
（俺だって、あれで死んじゃうなんて思ってなかったっす）
（武蔵君はどうしてこちらの世にいらしたの）
（ええっ、まだ恥ずかしくて言えないっす）
（恥ずかしいことなんですか）
（俺的には）
「あったぁ　やったぁ　うぉ～　わぁ～　やっとあったぁあああ」
「くわっくわっくわっあああ」
「くわっくわっくわっあああ」
（烏さんが警戒してますわ）
（そりゃそうだ、あの大声）
（先ほど、この辺りをうろうろなさってらした方ですわね）
（やっとご自分のお家のお墓が見つかったのだろうのっ）
（結構お年齢を召されてらっしゃった）
（なのにあの声は、それこそ恥ずかしい）
（何やら臭いますわ）
（あの風体ですからね）
（でも、終戦の頃は、あの臭い、あの風体でもましな方でしたわ）
（まぁ、きれい好きの日本人が、あんなになってたのですか）
（うわぁ、ユリ、嫌）
（ユリちゃん、僕らも、まぁあんなだった、かも）
（そうでしたわ。だから、ユリ、高校生って苦手でした）
（日も暮れて参りましたし、そろそろ）
（ごゆるりとお休みくださいませ）
（お久しぶりにご両親さまのところでお甘えになってくださいな）
（そうそう、三界に家はなくとも、こちらの世では、あちらとこちらとお墓は二つありますね）
（ありがとうございます。みなさまにお話できて、長年の胸のつかえが取れた様に感じております。また、みなさまとお話できて若返ったようでございます。今日のところは、ごきげんよう）

第六話　終わり

第六話　セミテリオに里帰り　その二十二　最終回（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

セミテリオの仲間たち　番外編葉　書簡

拝啓

春風若葉に香る候、皆々様には遥々東京からお越頂き、田植のお手伝ひ頂き、感激至極でござゐます。帝國の未来を担ふ末は博士か大臣かの皆々様の若き力を泥まみれの作業に就かせましたこと、恐縮至極。夏休みには再度御助力頂けるとのこと、有難き幸せ、お待ち申し上げます。皆々様の今後共の益々の御発展と僭越ながら御勉學に励まれますやうお祈り申し上げます。

敬具

紀元二千六百三年皐月末日

阿部清一郎

姪、西沙織代筆

高山弘毅様皆々様机下

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

青葉若葉のみぎり、益々御清栄のことと御喜び申し上げます。先日は微力ながら我らの力を発揮できたと自己満足、貴殿に御礼状を認めることを皆ひも揃って失念致してをりましたこと、誠に恥ずかしき次第。早速の礼状を頂き、僕達の未熟さを思ひ知らされました。座學と教練では學べぬ帝國國民食糧生産の厳しさと共に、自然の懐、

泥の暖かさ、水の冷たさを久しぶりに感じられた素晴らしき体験をさせて頂き感謝致します。夏休みには一同揃って押しかけますので、よろしく御願ひ申し上げます。

敬具

紀元弐千六百参年水無月吉日

東寮

理乙壱班代表　高山弘毅

阿部清一郎様

追伸壱、田植えの時期に水無月とはこれ如何に。

追伸弐、代筆の姪御様、西沙織様にもよろしく御伝へ下さゐ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

残暑厳しき中、皆様には益々御清栄のことと御喜び申し上げます。先日は、田の草むしりを御指導頂き誠にありがたうござゐました。四つん這ひで汗水たらした後の、井戸水で冷やされた西瓜は格別美味でした。虫送りも初めての体験でした。誠にありがたうござゐました。次は稲刈りの御手伝ひに参らせて頂きます。先づは御礼まで。稲穂の撓はな稔りを祈りつゝ

敬具

紀元弐千六百参年文月吉日

東寮

理乙壱班代表　高山弘毅

阿部清一郎様御家族皆々様

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

まだまだ残暑厳しき折、皆様ゐかが御過ごしでせうか。折角の夏休みを、草むしりにゐらして頂き、誠にありがたうござゐます。こちらから御礼状を認めるべきところ、先にお葉書頂き、誠に申し訳ござゐません。西瓜や虫送りを楽しまれたこと、嬉しき限りです。大したおもてなしもできませんでしたこと、御無礼お許し下さゐ。稲刈りの御手伝ひに来られるとのこと、期待致してをります。

敬具

紀元二千六百参年葉月吉日

阿部清一郎

西沙織代筆

高山弘毅様皆々様机下

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

新涼のみぎり、皆様には相変はらず御多忙のことと推察　致します。黄金色に実った一面の稲穂、蝗が飛び雀が舞ひ赤蜻蛉が浮く下での稲刈り初体験、國民の食糧を生産することの喜びと厳しさを体験させて頂きました。田植時の小さな苗がここまで育った過程で僕

達も僅かばかりでも貢献ができたのではと自負しても構はなひのでせうか。これからは僕達も勉學の秋に突入です。弥生にまた皆で押し掛けます。ではまた来春。

敬具

紀元弐阡六百三年長月吉日

東寮

理乙壱班代表　高山弘毅

阿部清一郎様御家族皆々様

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

秋冷の候、高山様並びに東寮乙壱班の皆々様には大変御世話になりました。お陰様で稲は乾燥、脱穀まで終了致しました。玄米をお送りできず残念です。再来週日曜日には國民學校秋期運動会が催されます。採れたての薩摩芋や里芋しめじや椎茸と共に新米でおもてな致したく、皆様御揃ゐのお越しをお待ち致します。

敬具

紀元二千六百三年神無月朔日

阿部清一郎

西沙織代筆

高山弘毅様皆々様机下

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

澄み渡る秋。玄米まで無事終了との事、お喜び申し上げます。また、収穫量も昨年に比べて微増とのこと、ほっとしてをります。僕達の所為で収穫量が減りでもしたらと心配してをりました。秋季運動会及び御馳走御招待誠に有難うござゐます。僕達、来週日曜日の前日より強歩訓練にて、残念乍らそちらに参れません。来春田起こしではまたご指導宜しく御願ゐ申し上げます。

敬具

紀元二千六百三年神無月四日

東寮理乙壱班代表　高山弘毅
阿部清一郎様御家族皆々様

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

早春の候、益々御清栄のこととお喜び申し上げます。先日の田起こしに参った僕達、昨年よりは力も技量も上達したと自負してをりますが、相変わらずの御迷惑をおかけしたことになったやもと悔やまれも致してをります。卒業が早められるとの噂があり、進路先の決定等予定が不明ですので、田植には参れずとも夏の草刈りには一同揃って参る所存でをります。

敬具

紀元二千六百四年弥生中日

東寮理乙壱班代表　高山弘毅
阿部清一郎様御家族皆々様

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

桜の花も満開間近。東寮理乙壱班の皆様益々御健勝のこととお喜び申し上げます。先日は田起こし御手伝ひ頂き誠に有り難うござゐました。昨年に増し若き力に助けられた次第です。田植に来　られなゐとの事、残念ですが、近くの中學校學生一學級勤労奉仕頂けるとの事ですので、御心配なく御勉學に御励み下さひますやう。夏の草むしりにての再会を御待ち申し上げます。

敬具

紀元二千六百四年弥生末日

阿部清一郎

西沙織代筆

高山弘毅様皆々様机下

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

拝啓

炎熱の候、益々ご健勝のほど御喜び申し上げます。流石二年目と

もなると、四つん這ひの草むしりにも少しは慣れた様に感じられましたが僅か二度目で斯様な発言、お笑ひ下さひ。空気よりはひんやりした田の土が心地よく、また田に接してをりますと、地球の広大さを実感致しました。

やはり、卒業が早まることになり、本来ならば夏休みですが、寮生活最後に一層真剣に勉學交遊に身が入ってをります。退寮後、理乙班員は各々の道を進み勉學を続けることになりましたので、実家住所を別紙に記しました。なほ、進路ですが、久保と清水は工、佐藤と水野は医、藤本は薬、私、高山も薬の予定でしたが、思ふところありて農に変更致しました。

紀元二千六百四年度東寮理乙班として書状を差し上げるのも今回最後となりました。僅か一年半、計五回、計一月余の勤労奉仕でしたが、阿部清一郎様御家族皆々様には、御家族同様に可愛がって頂き、喰ゐ盛りの僕達一同食事も腹一杯頂き、春の桜と雲雀、夏の星空と蛙の大合唱、秋津島とはこのことかと言はんばかりの蜻蛉の大群、秋の薄と虫の声、青春の一頁、貴重な体験をさせて頂きましたこと、誠に感謝に耐へませぬ。

田植え時には御手伝ひできず、また稲刈りにも揃っては参上できず、心苦しいばかりです。

阿部清一郎様、御奥様キミさま、御長男御奥様里子様、よっちゃん、稔ちゃん、西沙織様、健人君、沙喜ちゃん大変有り難うござゐました。

時節柄、皆々様の今後共益々の御健康と國民食糧生産増加、戦勝を切に御祈り申し上げます。

敬具

紀元二千六百四年葉月中日

東寮

理乙壱班代表　高山弘毅

阿部清一郎様御家族皆々様

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

澄みわたる秋、藤本さまゐくゎがおすごしでらっしゃるでせう。伯父に最後にお便りを頂いてから一年以上経ちました。たいへんご無沙汰致してをります。その間の周囲の変はりやうに驚いてをります。

八月の二十日には、健人、沙喜と共に、私、飛鳥山の焼け残った実家に戻りました。稲刈りの手伝ひに再び伯父の所に戻り、その帰路、先月二十四日、王子で降りました折に、下りの電車の中に藤本さまをお見かけしたやうに思ひます。夕方の四時前頃でしたが、國民服の方々で混雑した中に目立ちました學生帽の方数名の内、お一方が藤本さまでした。いえ、たぶん藤本さまだったと思ふのですが、丸い黒縁眼鏡のやや横を向いてらしたお顔が藤本さまそっくりでした。あっと思ったのですが、お声をかけるのを躊躇っております内に発車して。その時刻、藤本さま、王子を通られましたでせうか。周囲の他の學生さんの中には、伯父の所に勤労奉仕にゐらした方々のお顔はなかったやうに存じます。

突然、斯様なお便りを差し上げます事、申し訳ござゐません。懐かしさのあまり。高山さま初め、久保さま、佐藤さま、清水さま、水野さま、理乙壱班の皆さまゐかがお過ごしてらっしゃるのでせう。皆さま揃ってご進學なされて、その後ご無事でしたでせうか。

健人も沙喜も、こちらの中學、小學校に通い始めました。教科書を墨で塗ったそうです。私の従兄になります清が戦地から無事帰還するよう、叔父も叔母も里子さんもよっちゃんも稔君も待っております。よっちゃんは、来春から國民學校です。そして私、間があきましたが、女子大に通えたらと、受験勉強を始めてみました。勉學の喜びを感じる日々です。

兼好法師さまではございませんが、よしなしごとを書き連ねてしまいました。
お返事、頂けましたら幸ひです。
かしこ

西沙織

一九四五年十月一日
藤本浩二さま

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

天高く馬肥ゆる秋、
懐かしく水茎麗しいお便り大層驚きました。阿部清一郎様御家族、西様姉妹弟様御元気の様子、何よりです。本当に驚きました。高山にではなく小生に、しかも封書、しかも開封跡が無いどころか検閲印すら押されていない。
そして、確かに小生その頃王子を通りました。敵機も我が帝國の機も飛ばず天高い秋は本物でも、馬は草食めば肥ゆるとも人は腹空かす昨今、講義は無く、荒川の上流で釣りでもして魚を喰おうと、揃って釣りに出かける途中でした。実際、秋鮎で少しは腹が満たされました。
一年前までの勤労奉仕の頃が懐かしく思出されます。阿部様の所ではたらふく食べられたことや、満天の星、菜の花、沙喜ちゃん、よっちゃんと作った蓮花の髪飾りや草笛鳴らし、縁側で沙織さんや皆と皇學の将来を語った事、健人君に化學を教えた事、里子さんに抱かれた稔君、阿部様御夫婦との炉辺での作業、全て、懐かしく思出されます。
農の高山、工の久保と清水、医の佐藤と水野、皆元気です。理乙

壱班の仲間とは、學内で時折出会います。　東久邇宮内閣が総辞職しましたし、まだまだ先行きの見えない日々ですが、その内、一同会してみたいものだと。その折には沙織さんも飛鳥山からなら近いですから是非ゐらっしゃい。

ところで、沙織さんからお手紙頂いた事、皆には内緒にした方が良いのでせうか。それとも、皆に連絡しても構はないでせうか。念の為。

藤本浩二

昭和二十年十月五日
西沙織様

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

謹啓
涼風の候
皆様には益々ご清栄のことと心よりお喜び申し上げます
このたび

哲也　次男　浩二
由峰　長女　沙織

柿下重徳博士夫妻ご媒酌により
桜山区公会堂第二会議室にて
十月十五日午後十五時より
結婚式を挙げることになりました
心ばかりの祝宴をご用意いたしました
ご多用中誠に恐縮ではございますが
ぜひご出席くださいますよう　お願い申し上げます

敬具

昭和二十五年九月吉日

藤本哲也
西　由峰

セミテリオの仲間たち　番外編葉　書簡（後書き）

第五話登場の瑞鏡の後輩達の戦前から戦後の文通の一部でした。
お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その一

（今日は烏も鳴きませんわねぇ）
（こう雨が降っておったのではのっ）
（でも、豪雨ではないですし。しとしとと、いいお湿り）
（そのしとしともオノマトペですわね。こういうのがしとしとしとなんですね）
（そう、ざぁざぁ降られちゃたまんない。夕立じゃあるまいし）
（♪ぴっちぴっちちゃっぷちゃっぷらんらんらん♪）
（マサ、その歌も私は知らないのですのっ）
（ユリも知らないです）
（あっ、僕知ってます。作詞は北原白秋なんですよ）
（まぁ、読んではいけませんって言われてました）
（えっ、北原白秋ってユリちゃんの頃、ふ～ん、いけなかったの。いい詩が多いのに）
（その、ぴっちなんとからんらんもオノマトペなのかしら）
（そうでしょうな。我輩、雨音としては初めて耳にいたしましたが、雨の音のように聞こえますな）
（俺もその歌は知ってっす。けど、じゃのめがわからなくて、蛇の目って書くっしょ。なんか恐ろしいっす）
（蛇の目傘、とんと目にしなくなりましたな。あの日本情緒）
（最近の傘は華やかですものね。殿方でも模様の入った傘をさしてらっしゃることございますし）
（ユリ、もっと近くで紫陽花見たいです）
（紫陽花、一寸遠いですわねぇ）
（ここからじゃ、白いのと水色のと青いのと紫のと丸い固まりでしか見られないでしょ）
（ですわねぇ。近くで見せて頂きたいですわねぇ）

（日本の紫陽花ではないようですな）
（えっ、日本のじゃないっすか）
（日本の紫陽花はもっと背か高いものですな）
（でも、日本で咲いてるっしょ。それに、保育園の時、かたつむりが乗っている紫陽花ってあれだったし。紫陽花にかたつむりは付き物っしょ）
（憑き物とはまるで私達のことみたいですのっ）
（けど、かたつむりあんまり見ないっす）
（えええっ、かたつむり、いないんですか）
（うっす。あんまり見ないっす）
（見えなくとも私達憑き者はおりますのっ。かたつむりとて同じではなかろうかのっ）
（戦後、殺虫剤を随分使用しましたからねぇ。虫は減りました。おっと、かたつむりは虫じゃないですね）
（あら、でも、でんでんむしってユリ言ってました）
（♪でんでんむしむしかたつむり♪）
（そう、マサさま、その歌です）
（哀しいのっ、その歌も私は知らぬのっ）
（いずれにせよ、かたつむりも殺虫剤に弱いのでしょうね）
（最近、雀もあまり見かけなくなりましたね）
（虫を殺せば、虫を食べる鳥も減りましょう。雀は虫を食べるのかどうかは存知ませんが）
（雀が食べるのは米ではなかろうかのっ）
（でしたら昔に比べて田んぼが減った東京には雀は住めませんわね）
（いやぁ、都内に田畑が減ってからも、雀は米屋の前によくおりました）
（お爺ちゃん、お米はスーパーで売っているから）
（でも、雀って、お米しか食べないなら、秋しか生きていられませんもの。他の物も食べるのじゃないかしら）
（なのに雀さんがあんまりいないってのは、やっぱり虫が減ったか

らかしら。可哀想。雀のお宿の昔話はほんとうに昔話になっちゃいます。なんか、ユリ、そんなの嫌です）

（もしかして、雀が減ったのは、勉強し過ぎたからだったりして）

（えっ、どうして）

（だってたくさん勉強するとこどもたくさん作らないっしょ。ほら、慎之介は父ちゃんも母ちゃんも大学出ているから一人っ子で、あれっ、でも、家の父ちゃんもそうか。でも、母ちゃんは短大だし、だから俺と姉ちゃんで二人。美羽ちゃんとこは高卒と中卒だからこども四人もいるっしょ）

（えっ、そうなんですか、お勉強たくさんすると、こどもはたくさん作らないんですか。じゃぁユリだったらどうだったのかしら。でもあの頃、高等小学校行く子は少なかったし。でもユリ、三人はこども欲しかったし）

（確かに、高学歴は多産ではないと言われているが、雀が勉強ねぇ）

（だって、俺が小学生の時に図書館でお爺ちゃんにきいたっす、学問ってなぁにって、そしたらお爺ちゃん、勉強のことって教えてくれたっす）

（確かに、学問は勉強だが）

（大きな本の中にいろんな昔の人の事が書いてあって、その中に古そうな本が出ていて、探そうかなって思って、でも勉強する雀なんて、舌切り雀よりつまらない話しだと思って読まなかったっす）

（舌切り雀は判るが、勉強する雀の出て来る昔話ってありましたかね）

（さぁ～）

（学問の雀って本っす）

（学問のすすめじゃないでしょうか。福沢諭吉先生の書かれた）

（それでしたら我輩も読みましたな）

（福沢翁のですのっ。自由民権運動の活動家がよく引き合いに出してましたからのっ、私も読みました。いいことが書いてあるのですがのっ、明治の、あれはいつだったか、大隈殿が追い出された時の、

つまり、明治政府とは相容れない部分があってのっ、立場上あまり声を大にしては、あの書物は良いとは言い辛くてのっ）

（それかなぁ、違うみたいっす。福沢って人で、慶応大学作った人のっす）

（そうです福沢諭吉。早稲田を作ったのは大隈重信）

（だから、その慶応大学作った福沢って人が書いたのが、学問の雀っす）

（それ、やっぱり学問のすゝめ、学問のすすめのことじゃないでしょうか）

（すの後につが斜めになった字があって、だからすっめって読んだけど変だから、すずめのことかって思ってるっす。あれ、すすめって読むっすか。えええええ、雀じゃないっすか。そんな、今まで勉強する雀の昔話だと思ってたっす。そんな、そんな、いまさら。あっ、でも、やっぱりつまんない昔話っしょ。読まなくてよかったっす）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その一　（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その二

（草葉の陰で福沢翁もさぞかし大笑いしていることだろうのっ）
（苦笑いかもしれませんわ。ご自分が昔話を書かれたと思われてらしたなんて）
（でも、勉強する雀のお話しって、ちょっとユリ、読んでみたいかも。武蔵君、どんなお話だと思ってたのかしら）
（えっ、昔の、畳に座って、雪灯りで一生懸命本を読んで勉強してる雀の絵があって、んで、黒板の前に雀の先生がいてっての）
（武蔵、正しくは、一生ではなく一所だよ）
（お爺ちゃん、中学の国語の先生が言ってたっす。今は一生懸命でいいんだって、いいことになってんだって。だって、一つの所を守るのに懸命よりも、一生、ずっと懸命な方がいいっしょ。俺の一生は短かったし懸命でなんてなかったっすけど）
（時代が変わると漢字も意味も変わるものなのですな）
（武蔵さんの学問の雀の昔話、蛍の光と雀の学校が一緒になった様ですわね　♪蛍の光窓の雪、文読む月日重ねつつ♪）
（おっ、マサが歌う歌、珍しく私が知っておりますのっ。蛍雪の功、晋書の車胤と孫康の話ですのっ）
（その節はスコットランドのものでござるな）
（あら、そうでしたの。ユリ、日本のだと思ってました）
（朝鮮人も歌ってましたね）
（そうそう、朝鮮語のですわね。私も聞いたことありますよ。いつもお別れの歌を歌うんだなって思ってました）
（いやぁ、戦中は朝鮮語で歌うのは禁止されてましたよ、あっ、僕の言う戦中は支那事変ですが）
（もう一つは、♪ちいちいぱっぱちいぱっぱ、雀の学校の先生は♪）
（その歌、マサは前にも歌ってましたのっ。だが、そちらは知らぬのっ）

（だんなさ～、もう一つ思い出しました。これは、だんなさ～もご存知ではないでしょうか。♪起きよ起きよ寝ぐらの雀～遊べよ雀、歌えよ雀♪）
（マサお婆ちゃん、それって、雀じゃなくてちょうちょの歌っす）
（あら、武蔵さんは知らないですか。一番目はてふてふ、でも二番目か三番目は雀ですのよ）
（そうですのっ。私もその歌は知ってますのっ。絵都が歌っておりましたのっ）
（ええ、尋常小学校で教わりました。私も雀の、一つ思い出しました。我と来て遊べや親の無い雀）
（絵都お婆ちゃん、それって、歌ってより短歌か俳句っす）
（五七五の俳句ですよ。一茶の。俳句も歌ですのよ。あら、私、今日は口を閉じていようと思っておりましたのに）
（まぁどうして）
（先日お話致し過ぎましたもの。もの言えば唇寒し秋の風ですわ）
（それも俳句っすか）
（はい、芭蕉の）
（ふ～ん）
（あらごめんなさい。やはり、唇寒しみたいですわ）
（武蔵が行儀悪くて、すみません）
（いえ、あちらのセミテリオではみなさま寡黙でしたから、こちらでつい調子に乗ってしまいました）
（いえいえ、そんな、こちらのみなさま、おしゃべりとお散歩ぐらいで永遠の時を永らえておりますのよ）
（そうですよ。お話してくださる方がいらっしゃらなきゃ、ユリ、退屈しちゃいます）
（一茶だの芭蕉だの懐かしいですのっ）
（ねぇねぇ、雀は、遊んだり歌ったり、学校もあるんだから、雀が勉強する昔話があったっていいっしょ。けど、その福沢って人、古い人っしょ。明治のなんて古いからどうでもいいっす）

（福沢翁は、私と同じ年配だと思いますがのっ）
（つまり明治より前の生まれのわたくしどもも古いってことですわねぇ。あら、武蔵君、だんなさ～やわたくしのお話もどうでもいいかしら）
（そんなことないっす。もういいっす。なんか、みんなにいじめられているみたいっす。もういいっす。んで、日本の紫陽花ってどんなっすか）
（武蔵君、本当に見たことないのですかな。いやぁ、知るは一時の恥、知らぬは一生の恥、いや、もう死んだ我らには恥もなかろうが、知りたいということはいいことでございますからな。それこそ学問の勧めですな。しかも好奇心を持てばこちらで永らえられる。あそこに見えるのとは違って、もっと木の背が高くて、花、いや、あれは厳密には花ではなく額だそうですが、額は学問の学ではないですよ、武蔵君。その額、花に見える部分が大きくて、丸というより平らな円で色も淡く如何にも日本の色でして）
（ふ～ん、やっぱ古い花っすか）
（ふむ。まぁ、古の日本の美でしょうな）
（ふ～ん）
（こう雨が降っては、烏も飛ばなきゃ、我らもどこにも参れませぬな）
（えっ、そうっすか。雨だとだめっすか）
（どうもね。雨だと流される）
（邪気は流され易いようですが、僕たちの中に邪気はいますか）
（ユリ、邪気なつもり無いです。無邪気です）
（ユリちゃん、自分で無邪気って、いい年して）
（虎ちゃん、また意地悪）
（だって、いい年でしょ、僕だって。この中でいい年じゃないのは武蔵君ぐらい）
（あら、お忘れにならないでくださいな。わたくしの所のロビンを）
（おっとすみませんでした、カテリーヌさん。ロビンちゃんこそ、

無邪気そのもの）
（然様ですのっ。赤子が無邪気でなければこの世、いや、あちらの世は救われぬ）
（まだ世の辛さも毒気も知らぬ無邪気な赤子に、私達、いや、あちらの世で、大人はどれほど救われたことか）
（然様ですわね。だんなさ～も、赤子が生まれる度に優しそうなお顔になられてました）
（私は今でも充分優しいですのっ）
（ほんに。わたくし、いつもおそばにいられるマサさまが羨ましいですわ）
（ほんと。ユリも彦衛門さまみたいな方に巡り会いたかったです。虎ちゃんみたいな意地悪じゃなくて）
（そういうことを言うユリちゃんも、最近意地悪になったみたいだよ）
（虎ちゃんのが伝染ったんです）
（まぁまぁ）
（うわっ、傘が歩いて来ます。あら、でもあの傘、柄の向きが逆。それにあんな小ちゃい傘、小人さんがいるのかしら）
（おはようございます。あら、もうこんにちはかしら）
「ワン」
（うわっ、傘が吠えました）
（ユリちゃん、傘の下に犬がいるんだよ）
（うわっ、あらこの犬、前会ったことあります）
（ユリさん、私、夢ですよ）
（まぁ、夢さま、お久しぶり。ご帰宅ですか）
（いえ、ちょっと用足しに。今日は日が日なものですから一応）
（まぁ、雨の日に）
（あら、傘の下ですもの。濡れませんわ）
「なんで雨の日にわざわざ」
「だって今日一応爺の命日だしねぇ、それに平日なら民男に会わな

いですむし」
「わかんないじゃん。叔父ちゃん、都内の会社でしょ」
「あの子がわざわざ会社の昼休みに来るとも思わないし。うっ、妖怪お婆々忘れてた。あっ、でもあそこの兄弟仲悪いし来ないわよね」
「あれだけ揃いも揃って口悪けりゃね。でもさぁ、死人に恨まれたくないから命日ぐらいお墓参りくるかも」
「さっさと帰らなくちゃ」
「兄弟は他人の始まりか。私は結婚したら二人は産む。一人っ子じゃ可哀想」
「あら可哀想だったの。もう一人欲しいってきいたら、いらないって言ったくせに」
「あれは、小さかったじゃない。それに周りで弟や妹できた人がみんなつまらないって言ってたし。大体、こどもをもう一人作るかどうかをこどもにきいてどうするのよ」
「あら、望だけにじゃないわよ。両方のお婆ちゃんにもきいたわよ。そしたら二人とも、もう孫はいらない、だったし。健も次も女の子ならいいけどだったしね。ほんとはもう一人いたっていいと思っていたのは私だけだったんだもん」
（お前はまたほっつきあるいて。何日だと思っているんだ）
（うわっ、久しぶりに聞こえました。え～と、なんでしたっけ。偏屈じゃなくて、頑固じゃなくて、小言幸兵衛じゃなくて、え～と）
（一徹爺さんってお呼びすることにしたんじゃなかったっけ）
（そうそう、虎ちゃんありがとう）
（然様でしたわね。一徹爺さんはお出かけお好きでないのでしたわね）
（まぁ、主人にそんなお名前頂いてたのですか。おほほ。たしかに一徹。いえ、偏屈ですし頑固ですし、小言だらけですし、どれでもよろしかったのに）
（夢、お前はなんということを。みっともない。お前はそもそも俺を置いてすぐ出かける。俺を何だと思ってるんだね）

（あちらの世で五十年以上連れ添わして頂きましたわ）
（俺がいたからお前は生きていられたんだろうが）
（そうかもしれませんわねぇ。でももうこれ以上死ぬこともないですし、あなたがいなくても平気）
（よくも屁理屈をこねおって。お前はこの家の人間じゃないか）
（もう家など関係ございません。もう私の好きなように生きます、いえ行かせて頂きます）
（なんだ、俺に向かって。だからお前は馬鹿なんだ）
（あなたが馬鹿だ馬鹿だと私のことをおっしゃってたから、私、自分が馬鹿なんだと、長年洗脳されてました。でも、気付きました。馬鹿でなかった私に馬鹿だ馬鹿だと日々おっしゃって、私を馬鹿だと思わせたあなたこそ馬鹿なんだって）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その三

（せんのうとは何ですかのっ）
（あっ、脳を洗うって書きます）
（頭を洗うってことかしら）
（洗髪とは違うのでしょうか）
（髪ではなく、頭を洗うのですか）
（頭を洗うと馬鹿になるのかのっ）
（それでユリもみなさんも、髪をあまり洗わなかったのかしら。長い髪を洗うのは水がたくさんいるからだと思ってました）
（いえ、頭を洗うと漢語で書いて、つまり、え～と、思い込ませるという意味で）
（ほうっ、義男さん、あいがとさげもした）
（いやぁ、新しい日本語だからね。彦衛門さんやマサさんの頃どころか、もしかしたら絵都さんもご存知ない言葉かもしれないだけで）
（はい、私も存じませんでした）
（何を判らないこと言ってるんだ。だからお前は馬鹿なんだ）
（そう、馬鹿でしたわ。あなたに五十年も連れ添って。もっと早く愛の所に行けば私の寿命を全うできたかもしれません）
（何言ってるんだ。　おまえはそうやってすぐにほいほとしっぽを振って出て行く、若い者とどこぞにいって何が楽しいんだ、浅はかな、おまえはいつもそうやって俺の言うことを聞かない、そもそもその態度は何だ、口を閉じていれば、耳を閉じていればいいというのか、耳をよぉくかっぽじって聞くがよい。おい、俺の言うことを聞け、聞いているのか、誰がおまえを養ってやったと思っているんだ、この墓だっておれの父が買ったからお前はここに入れているんじゃないか、なんだその目つきは、殴られたいのか。　医者の俺がいたからお前は長生きできたんだ）
（もうこちらの世では殴れませんでしょ。いえ、お医者様なら、ま

してや精神科のお医者さまなら、私の苦しみを判って下さってもよろしかったのに）
（俺は病院だけで疲れていたんだ。家に帰ってきてまでお前の相手などしておられるか）
（釣った魚に餌はやりませんでしたものね）
（何言ってるんだ。餌はやってたろう。子供を三人作って、ちゃんと喰わせて着せて三人とも大学まで行かせた。誰のお陰だと思ってるんだ）
（はいはい、あなたのお陰でしたわ。でも釣った魚に餌だけやっても生き生きとは生きられません）
（何を贅沢な、つべこべ言うんじゃない）
（なんだか、やっぱり小言爺さんなのかしら）
（申し訳ございませんわ。主人がうるさくて）
（いえ、構いませんのよ。でも夢さまたいへんですわね）
（おほほ、ですから私は愛と望とマックとお散歩、いえ、いつも一緒です。もう主人の小言は沢山）
（夢、家の恥を誰に話してるんだ、この馬鹿者が）
（あら、恥だと思ってらっしゃるんですか）
（ああいえばこういう、まったく）
（わたくし、やはり釣ったお魚には餌をあげるのは当然だと思っております）
（カテリーヌさん、釣った魚は餌をやる前に食べますよ）
（えええっ、釣った魚は放すっしょ）
（えっ、武蔵君は釣った魚は食べないの。ユリそんなの信じられないです）
（だって、釣った魚喰ったら可愛そうっしょっ）
（ほう、面白いものですな。所変われば品変わる、時代変われば行動変わる。然し乍ら、釣った魚を放していては釣る意味がない、楽しめませぬな。おぅ、もしや釣りは食糧を得るためではなく、競技ですかな、だとするならば、釣った魚は放しますな）

（あのぉ、わたくしの申しましたのは、釣った魚に餌をあげなければ死んでしまいましょう）
（当然です）
（釣ったお魚、つまり、人の場合なのですが、結婚して、餌、いえ、お食事を差し上げなければ、死んでしまいますもの。ですから、結婚したらお食事を得られる術がなければ困りますわね）
（はい）
（でも、食べ物だけ与えられてもおもしろくないですわね）
（はい。まぁ然様ですわねぇ）
（ですから、釣って餌をあげるだけではだめで、構ってさしあげなければ、つまり、結婚して食事を与えるだけではなく、構うって事が大事なのでは、とわたくし思うのですが）
（そうかっ、放しちゃ結婚できないっすね。結婚したら、構わなきゃならないっすね。やっぱ、結婚って面倒っすね。釣られなきゃ、魚は自分で餌探すっし。餌を探せないようにしたらちゃんと責任取らなきゃってことっすか）
（結婚が面倒なんて、そんな。ユリは結婚したかったです）
（いえ、ユリさま、ユリさまももしご結婚なさって、お食事だけではつまらなかったと思いますの。構って頂きたいと思いませんでしたでしょうか）
（ユリ、結婚してないから判らないです。でも、ご夫妻の間に会話がなかったら、もし食べて寝てこどもつくって死ぬだけだったら、つまらないかもしれません）
（でございましょ。夢さまと偏屈爺様の間にもご夫妻の会話は今でもございますが、夢さまは楽しそうではありませんもの。ということは、その構うというのが、わたくしの国で申すａｍｏｕｒなのではないかと）
（アムール、あっ、俺、知ってっす。ロシアの川っしょ）
（あはは、武蔵君、ａｍｏｕｒは仏蘭西語でして、英語ではｌｏｖｅですな）

（ああ、なんだ、ラブっすか。結婚するならラブは必要っしょ）
（ええっ。ユリわかりません。らぶって何かしら）
（ユリちゃん、ラヴって愛のことだよ）
（虎ちゃんありがとう。流石元高校生）
（武蔵君、私の頃には結ばれるのに愛は必要なかったですのっ）
（えええっ、彦衛門お爺ちゃんの頃には、愛なしで結婚するっすか。あっ判ったっす。見合いっしょ）
（まぁ、そんなような。もしかして、義男さん、見合いはもう無いのかのっ）
（そんなことないですよ。でも、随分減りましたね。彦衛門さんとマサさんは、お見合いでしたか。絵都さんはお見合いとお伺いいたしましたが）
（私達は幼なじみでしてのっ。絵都には見合いさせましたのっ）
（お父上、私のは見合いでしたでしょうか。お父上が早々とお決めになってらしただけで、私、嫁ぐまでお相手を存知ませんでしたし。見合いましたのは婚礼の席。それまでは釣書しか存知ませんでしたもの。あれも見合いでしょうか。再婚の折には、たしかに伯父が間に入ってお見合いでしたわ。碧さんとは何度もお目にかかってから決めましたし）
（昨今の結婚事情は、もしかしたら昔と違っているのかもしれませんね。私の時代には恋愛結婚が増えて来て、学校や職場で出会って、お相手に手紙を書いたり、お付合いして、親に紹介して結婚して、でしたね。息子の頃には、手紙が電話になって、最近は電話は電話でも携帯電話ですしね。それに、少し前までは、付合ってから結婚して、結婚してからえ～と愛を交わして、こどもが生まれるってのが普通でしたが）
（それはわたくし共も同じでございましたわ。お付合いして式を挙げて、結ばれてこどもが生まれて、当然でございましょ）
（いやぁ、どうも昨今は順が違いまして、どうも、お付合いして結ばれて一緒に住んで、こどもができてから式を挙げる）

（まぁ、式も挙げない内から一緒に住まわれるのですか、まぁ）
（昔もそういう方いらっしゃいました。ユリの尋常小学校のお友達、ご近所の方、式なんて面倒くさいもの挙げてませんでした。式は、お金が無いとできないでしょ。ユリの両親はきちんと式を挙げるのが当たり前と思ってましたけれど、ちょっと貧しい方々でしたら、お稲荷さんの前でご挨拶するくらいってのもたくさん。神主さんをお願いすればましな方だったかもしれません。ユリはね、親戚の方と神社で、その後お家でお食事って思ってました。でも、ユリそのずっと前にお相手もまだ決まってません内にこちらの世界に参りましたから、残念です）
（うん、僕の頃もそういうのありましたね。でも、一緒に住んでこどもができると逃げる男がいたでしょ）
（そうそう、そうでした。式は挙げなくてもいいけれど、籍は入れなさいって言われているお友達がいました。そうしないとこどもが出来た途端に逃げる男がいるって）
（籍、戸籍のことですのっ。昔は人別帳でしたのっ。お寺別で）
（お寺と言えば、江戸、いえ東京に参りまして、親鸞聖人のお寺が多いので驚きましたわ）
（そうでしたのっ）
（浄土真宗はどうして薩摩では御法度だったのでしょうね）
（さあなっ）
（御法度ってなんっすか）
（禁止ということだよ、武蔵）
（禁止って、キリシタンみたいのっすか。へぇ〜。キリスト教だけじゃなかったんだ）
（まぁそうでしたの。わたくしも初めて知りましたわ。浄土真宗のお寺って、築地の大きいお寺が然様でございましょ。まぁ、あそこも禁止されていたのですか）
（いえ、カテリーヌさま、薩摩では禁止されておりましたが、江戸、いえ東京では禁止されておりませんでしたのよ）

（仏教でも禁止されてたなど、不思議でございますわ。築地のお寺や浅草や芝や上野や、お寺はみな大きくて。カトリックの教会は市ヶ谷と神田の小さくて）
（いいかげんにしろ、うるさい、出てけ）
（はいはい出て参ります。折角命日ですから参りましたのに、雨も止みましたしではまたその内）
（はいは一度でよい、いいかげんにしろっ、もう来なくてよい、勘当だ）
（まぁ、勘当ですって）
（かんどうってなんっすか。何かいいことあったっすか）
（武蔵の言うかんどうは嬉しくて感情が動く方だろう。一徹爺さのかんどうは、席を抜くというか、縁を切るというような、もう関係無いというような）
（バツイチのことっすか）
（ばついちってなんでしょう）
（ええっ、バツイチしらないっすか、離婚したってことっす）
（まぁ、離縁のことを今ではバツイチと言うのですか）
（英語ですかな。我輩の知らない英語がまた増えたようですな）
（ロバートおじさん、英語じゃないっす、日本語っす、×が一つってことっす。二度離婚するとバツニ、三回だとバツサンって感じっす）
（ばつとは罪と罰の罰ですかな）
（じゃなくて、〇×の×っす）
（おぅ、エックスみたいな記号のことでありますな。しかしながら、なぜ離婚が×なのですかな）
（わたくし、判ったような気がいたします）
（ほう、マサがかの）
（ほら、例の人別帳、いえ、戸籍に、結婚して娘が戸籍から抜かれると、娘の名前の上に〆の字を大きく書かれますから。だんなさ～がこちらの世にいらして、温に家督相続なさった時にもだんなさ～

のお名前の上に大きく〆を書かれましたの。だんなさ～の人生が〆られたようで辛くてね。で、絵都、いえまだ悦でしたが、長州に嫁いだ後、悦の名前の上に〆が書かれまして、で悦が兄の所におりました折には一度悦の名前が戻されて、悦が碧さんと結ばれた後はまた悦の名前の上に〆が書かれました。他家に嫁ぐと、前の家からは〆出されたことになるのでしょうね、これも辛いものでした）

（ああっ、あれって×じゃなくて〆だったんですね、なぁるほど）

（じゃぁ、本当はバツイチじゃなくてシメイチって言わなきゃいけないっすか）

（私はバツ二、いえシメ二なのですわね、いえ、シメサンなのかしら）

（えええっ、絵都、碧さん亡き後、また結婚したのかのっ、そんな話しは聞いていないのっ）

（うわぁ、絵都おばあちゃん、バツサンなんっすか）

（いえ、二度嫁いで、一度死にましたから、〆は三回書かれたわけですから）

（ってことは、結婚しなくても、皆一度は死ぬからみんな〆一）

（そっか、俺もバツイチってことっすか、変なの、結婚したこと無いのに）

（わたくしは戸籍ございませんでしたもの）

（然様ですな、我輩にも戸籍はなかったですからな。然し乍ら、息をしなくなると〆るとは、意気な計らい、いやぁ、そりゃぁ、息をしなくなっちゃぁお〆いよぉ、〆は終い）

（ロバートさん、なんだか変です）

（へぇ～、外国には戸籍ってないっすか）

（戸籍で〆を書かれる、これでお前の人生終わりと告げられるわけですかのっ、ちと辛いものがありますな）

（もしかしたら、それで〆が×になって、バツと呼ぶ様になったのでしょうか）

（おっ、虎之介殿、何か気付かれましたかのっ）

（いえ、戸籍に〆が書かれると、バツが悪い。バツが悪いのバツは場の都合という意味で×という記号ではなかったのですが、しかし、バツが悪いと感じる、それにバツは悪いと感じる。ゆえにバツを×と表す、いかがでしょうか）
（うわぁ、虎ちゃんすごぉい、流石学生さん）
（おっ、ユリちゃんに褒められた。滅多にないこと）
（なぁるほど、たしかに、〆は×ににていますね。〆を書かれたらバツが悪い、こりゃいい。こちらの世でもあちらの世の疑問が解決されるものなんですね）
（まるは）
（うむ。もしかしたら、了承の意味で印鑑を捺していたからというのはいかがかのっ。判子の丸い縁の形。それに丸は輪、輪は和に通じるのっ）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
Xバツの語源は〆しめ、セミテリオの仲間たちの解釈、如何でしょうか。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その四

（なんだか〆〆で湿っぽい、先ほどまでの雨でただでさえ湿っぽいのに）

（あのぉ、さっきからしめ、しめって、×のことだってのはわかるっすけど、しめってなんっすか）

（今の若い者は使わないからね。ほら、大人が封筒の裏、糊を貼って封をした後に×の様な字を書くだろう。封筒を閉めた印）

（ああ、あれっすか。あれ、うん、俺たち使わないっす。へぇ、あれを〆って言うっすか。〆の封筒は別にいらないっすけど、シールの貼ってある可愛い封筒だったら、欲しかったっす）

（シールですか。懐かしいですわ。孫からよくそういう書簡が届きました）

（絵都や、強いるとは何かのっ）

（お父上の頃にはございませんでしたか。ぺたっとくっつく）

（ぺたっとくっつくのは、うむ、秋に野原に行けば裾に色々緑や茶色の実が付いたがのっ、ぺたっとというのは、紙や手拭を濡らせば）

（いえ、切手の大きさで）

（郵便切手のことかのっ、あれは米粒糊で貼るもの）

（いえ、最近の郵便切手には元々糊がついておりますの）

（元々糊がついていたら、どこにでも付きますのっ、どこにでも置いておくわけにはいきませぬのっ）

（いえ、そうではなくて、かわいた糊で、嘗めて貼りますの）

（舌切り雀ではあるまいし、糊を嘗めるのかのっ、我が娘にあるまじき行い）

（いえ、お父上、水を塗ってもよいのですが、ついぺろっと）

（ふむ、便利になったものですのっ、で、何故、武蔵君はその濡らさず貼れる郵便切手ではないものが貼ってある封書が欲しかったの

かのっ）
（ラブレターじゃなくても、女の子からだとそういうの来るっしょ）
（かぶれたのかのっ）
（おじいちゃん、折角僕がロバートさんより先に解説しようとしたのに、かぶれたじゃなくて、ラヴレター、恋文ですよ。英語で）
（然様、ヴがブになる日本語式英語ですな）
（恋文。中学生でかのっ）
（まぁ、そういう時代なのですか）
（うっす。携帯でもいいのに、女の子ってそういうの好きっしょ。特にバレンタインなんかだと）
（ばけたいへんとは何かのっ）
（え～と、今度は僕、解説できません）
（我輩にも判りかねます。手紙ではなく携帯ということは、携帯電話で電話をかけるということなのですな、いや、バレンタインはヴァレンタイン、おっ、判りました）
（父上、私、判りましてよ。克子がね、グランドハイツの中ではご主人様が奥様にチョコレートを買ってきて贈る日だと申してました。こども達は、学校で交換するらしくて、その頃になると売店でもカードがたくさん売れたそうです。年賀状の様なものらしいですわ。克子はオーストラリアからわざわざ、二月の半ばに着く様にとチョコレートを毎年送ってきてましたの）
（かあどとは何かのっ、ねんがじょぉとは何かのっ）
（カードは歌留多状の物で、それを封筒に入れてお送りするのです。年賀状、そういえばお父上お母上の頃にはございませんでしたわね）
（へぇ～、年賀状、なかったっすか）
（そういえば武蔵さん、年賀状は戦後ですね。当たり前になっておりましたが、あの習慣、戦前はございませんでした。お父上、お母上、年賀状とは、年賀のご挨拶を葉書でいたすことですわ）
（年賀の挨拶を、葉書でですか、絵都、それは直接訪ねられない程遠方に住んでらっしゃる知人が大勢いらっしゃる時代になったとい

うことかしら）
（いえ、お近くの方にも書いておりましたわ）
（なんと無精なっ。近くなら訪ねて参ればよいものをのっ）
（年賀状には籤が付いておりまして、それが楽しみで。ですから頂いた方には差し上げませんと）
（年賀状に籤、ほぅ、面白そうですのっ。籤を付けるということは、逓信省が籤を扱うということですかのっ。お上に認められたものなのですのっ）
（年賀状は、お友達など増えて行って、でも、段々減って参りまして、来なくなったら亡くなられたのだろうと。段々遠出もできなくなりますと、年賀状でしかお付き合いが無くなった方が増えて行き、頂く年賀状の枚数が年毎に減って行くのは淋しいものでしたわ。私も、亡くなった年には勿論書けませんでした）
（こちらの世からあちらの世にその年賀状が届いたら、不気味でしょうね）
（驚くっしょ）
（その風習、亜米利加ですとクリスマスカードの交換と似ておりますな）
（年賀状は、うっす。俺たちも小ちゃい頃はダチに書いてたけど。でも、バレンタインのチョコは女子が男子に送るだけっしょ。ああああっ、女子同士でも交換してたっけ。ちょっと気持ち悪かったっす）
（確かに武蔵の言う通り、日本では女性が男性にチョコレートを贈る日のようですね）
（ほうっ、本当に、風習は土地や時代によって異なるものなのですな、しかし、Ｓｔ．Ｖａｌｅｎｔｉｎｅ，ｓ　Ｄａｙは我輩がおりました日本にはございませんでしたな。そもそもＳｔ．Ｖａｌｅｎｔｉｎｅは聖人でして）
（はい、仏蘭西でもそのようにお祝いしておりました）
（お前はやっぱり俺のことが好きなんだな。だが勘当したんだ、つべこべ言わずにさっさと出て行け。金輪際戻って来なくてよいから

なっ）
（ですから、勘当なんて、こちらの世では意味の無いことでございますわ。どちらにいたしましても、愛と望とマックと一緒にまたその内、私のお顔を拝ませて差し上げますわ）
（お前の顔など見たくない。知らん。勝手にしろ）
（はいはい、勝手にさせていただきます）
（尻尾振ってほいほい出かけるお前には犬がお似合いだな）
（はいはい）
（はいは一度でよい）
「そろそろ帰ろうか」
「どこかで食べて行きたい」
「どこで、銀座か渋谷か」
「だめだわ。今日はマックいるし」
「じゃぁすぐ近くのドッグカフェ行ってみようよ。雨も止んでるし」
「ええっ、あそこの、カフェなんとかねぇ、美味しいかなぁ」
「かふぇじゃるだんわふみゃうよ。ねぇマック、行きたいよねぇ」
＜ワン＞
（やっぱりちゃんとマック君が見えている方がいいです。傘がワンワン言っているみたいなの気味悪かったです）
（ほんとっす。真っ黒な犬っすね）
＜ワン＞
（あらっ、武蔵君とユリに返事してくれたみたい）
（へぇ〜、そうっすか）
「やっぱりやめた。家まで我慢するわ。爺の近くにはいたくないもの。早く家に帰りたい。コンビニでお弁当買えばいいし」
（みなさま、よろしかったらご一緒なさりませんか）
（あら夢さま、ありがとうございます。あっ、夢さま、これ、わたくしの娘悦ですの。今里帰りしておりますのよ）
（はじめまして。夢と申します。お母さまにはお世話になっております）

（あら、お世話なんて、何もいたしておりませんわ）
（いえいえ、主人の愚痴を聞かされて御迷惑でございましょう）
（お気になさらないでくださいませ。わたくし共には何も）
（そうでしたらよいのですが。外面はいいですものね、でもお耳に入りますでしょ）
（いえいえ、ぶつぶつぐちぐちは、中身を知ると気が重くなりますしね、聞かないようにしておりますの。ご心配なさらないで。折角お招き頂きましたけれど、娘とも久しぶりに会えましたので、今日のところはご遠慮いたします）
（そうじゃのっ、私達より老いた娘一人置いていくのもなんですしのっ）
（あら、わたくしは絵都とお留守番いたしますわ。だんなさ～、いってらっしゃいましな）
（いやぁ、私はマサと一緒でなくては）
（あらまぁ）
（あのぉ、ユリ、乗せて頂いてもいいかしら）
（もちろんどうぞ。私と一緒に愛に乗られますか。望やマックにも乗れますのよ）
（えっ、それじゃぁわたくしも。わたくしも愛さまに。あら、重いかしら）
（いえいえ、そんなことございませんわ）
（えっ、俺も行きたいっす）
（いやぁ、武蔵、お前はやめておきなさい。まだ躾がなっていないからご迷惑だ）
（ええぇっ）
（構いませんのに）
（いえ、足手まといになりますし、遠慮させます、武蔵も今はここで居候の身ですし）
（足手まとい、でも、ユリ達こそ、あちらの世の方々の足手まといじゃないかしら）

（乗っていられるかどうかは、武蔵君次第。それこそ独立自尊、学問のすゝめの世界やもしれませぬ）
（いやぁ、まだ武蔵は慣れてませんし）
（うっす）
（僕、行こうかな）
（ええっ、虎ちゃん来るの、なんかなぁ）
（ユリちゃん、最近ほんと意地悪になってきた）
（だからぁ、虎ちゃんに似て来たの）
（いいよ、僕はマック君に乗るから）
（えっ、犬に乗るの）
（人には添うてみよって言うだろう）
（あれって、馬には乗ってみよ、でしょ。犬と馬じゃ違うじゃない）
（いや、意味は同じ、試してごらんってことだから）
（でも、馬は人に乗られるの慣れてるかもしれないけれど、犬、それもこんなちっちゃな犬に乗るの）
（ユリちゃんもだけど、僕、重くないし、馬、いや、犬が合うかもしれないし）
（ふ～ん）
（みなさま行ってらっしゃいませ）
（土産話を楽しみにしておりますのっ）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その五

「じゃぁ、家まで直行、あっ、駅前で、やめた、バス停の近くの方のコンビニでお弁当ね」
（さきほどもおっしゃってましたが、コンビニって何でしょう）
（えっ、知らないっすか。どこにでもあるっす。何でも売ってる店っす）
（雑貨屋さんみたいなのかしら。でも雑貨屋さんってお弁当は売ってないですねぇ）
（あらっ、武蔵君、いらしたの。お爺さまは）
（えへへ、俺、逃げて来たっす。ほら、お爺ちゃん、生きている時と違うから、俺のこと捕まえてられないっすから）
（まぁ）
（はじめなきゃ慣れないし）
（そうですわね）
（折角の雀の勉強だし）
（おほほ）
（実は僕もつい乗ってしまいました。丁度で先から帰ってきたばかりで、何やら面白そうなので）
（まぁご隠居さんまで。ハナさまは）
（ハナはいつものことで、僕のことには無関心ですから、何も申さず）
（え～と、我輩も）
（えっ、ロバートさま、どちらに）
（もっと下の方です。実は、虎之介殿の言葉に惹かれましてな、我輩も、犬が合うかどうか試してみようと）
（まぁ、マック君可哀想に、虎ちゃんとロバートさんと、いくら重さがないからって）

「なんか、マックいつもと違う」
「誰かに憑かれたんだったりして」
「犬には憑かないでしょ。犬は敏感だから。私はなんか前と同じ人が乗っているみたい」
「おばあちゃんのお友達だったりして、おばあちゃんはまたいるみたいだけど、っていうか、おばあちゃん、ほとんどいつも一緒にいるみたい」
「やっぱり爺とは一緒にいたくないのかなぁ」
「そりゃね」
「うわっ、その話いいわ。暗くなる。せっかくお墓から離れたのに」
「何よ、自分で始めたくせに」
「うん、ごめん」
（このお二人、母子ですよね。なんだかお友達みたい）
（ユリ、お友達になれそうです。あら、でもあちらの世とこちらの世ではお友達になれないですね）
（まぁ、ユリさん、ありがとうございます。愛はね、私にもこんなでしたのよ。ですからお前の教育は間違っている、と主人がしょっちゅう。まぁ、確かに、私が娘の頃は、親に対しても敬語でしたものね。愛も、小学校の頃は、まだ作文にもお母様がおっしゃいました、なんて書いておりましたが、高校の頃から私を呼ぶのに、夢さん、でしたもの。もう私はあきらめてます）
（へっ、そうだったっすか、母ちゃんなんて言っちゃいけなかったっすか）
（でしたのよ。国語の教科書にも、お父様がおっしゃいました、でしたもの）
（へっ、俺が小学校の頃の作文の始まりって、先生あのね、だったっすよ）
（望もそうでした。先生にあのね、など、私の頃には考えられないことでしたのに。あらっ、武蔵さんは何時頃こちらにいらしたのかしら。望とあまり変わらないお生まれかしら）

（俺、まだこっち来て二年経ってないっす。今っていうか、来た時は中学二年）
（ってことは十四歳で、生きてらしたら十六で、望は今年二十五になりますの。十も違わないのですね）
（はっ、三歳上だともうおばさんっす）
（紫陽花が近くで見られてよかったです）
（たしかに、かたつむり、いませんわね）
「マック、ちょっと、止まらないで」
「マック、どうしたの」
（うわっ、振り落とされる）
（犬が合わないのですかな）
（僕たちのこと、気付かれたのでしょうか）
（ロバートさん、しがみつきましょう）
（いや、この際、もちっと中に入るに限りますな、耳の中などいかがかな）
「マック、どうしたの」
「ノミでも付いたかなぁ。こんなとこでぶるぶるなんて珍しいもの」
「そりゃここ犬の散歩多いけど」
「マック、どうしたの。今度からフロントライン付けてこなきゃね」
「マック、大丈夫よ、ノミ、いないみたいよ、帰ったらシャンプーね。痒いの嫌でしょ」
「いやだ、耳まで掻いている」
「ノミじゃなくて、まさか外耳炎。でもこんな急に。マック、汚い手で耳掻いちゃだめ、化膿しちゃうから、ほら、やめなさいってば」
（うわっ、耳の中でも振り落とされそう。ロバートさん、ここもあまり居心地良くない）
（やはり犬が合わないのですかな）
「愛ちゃん、抱っこした方がいい。抱っこして手を抑えた方が」
「マック、ここは歩きたいんでしょ。滅多に無い地面だから」
＜ワン＞

「じゃあ、掻くのやめなさい。そうそう、いい子ね」
「紫陽花がきれい」
（あれっ、ユリちゃんと同じこと言ってる）
（虎ちゃん、女の人は、お花が好きなもんなんですっ）
（だって、僕の所からは花は見にくい）
（ここの墓地はいいのよね。四季折々の花が咲いて。土もちゃんと残しているし）
（そう言えば最近地面は少なくなりましたね）
（ここも通路はアスファルトか砂利）
（道路もタイルや煉瓦や）
（地球が覆われているのですね）
（お花や草や木や虫が可哀想）
（ですわね）
（あっ、だから武蔵君、土竜を動物園でしか見た事ないんですね）
（これじゃぁ、地面の中で生きていられませんわね）
（気付いたら地面の中に閉じ込められている、うわっ、ぞっとします。よかった、ユリもう死んでいて）
（うっ、僕、毛の中に閉じ込められている気分です）
（虎ちゃん、それ、自業自得でしょ。土竜さんとは違いますっ）
（ほんと、最近、ユリちゃん口も悪くなってきたね）
（はい、虎ちゃんに教わりました）
（まったく）
（はい）
（愛が中学生の頃から、どんどん舗装されてきて。ニーニャの散歩の度に、土の地面を探すのが大変でしたわ。それ以前は今程舗装されていなかったのに）
（夢さまはどちらにお住まいでしたの）
（私、その頃はもう横浜におりました）
（まぁ横浜。懐かしゅうございます）
（まぁ、カテリーヌさんは横浜にいらしたのですか）

（いえ、わたくしは築地でした。でも横浜には何度か夫と。横浜も変わったのでしょうね。もう馬車など走っておりませんわよね）

（はい、たぶん、観光客用のを走らせることもたまにはあるらしいのですが。あら、カテリーヌさん、私も馬車は戦後の一時期に荷馬車を目にしたことがあるくらいですわ。後は観光用のに乗ったこともありました）

（まぁ、夢さまユリよりお若いのかしら）

（私、昭和元年生まれです）

（まぁ、私がこちらの世に参ってからお生まれになったのですね、まぁ）

（よろしいじゃございません。お見かけは私の方がずっと老けております。主人など、そんなに塗りたくったって婆さんは大して変わりゃしないのに何をぐずぐずしているんだ、でしたもの。カテリーヌさんは、女の花盛りでございましょ。私もその頃は幸せでしたわ。まだ民男と愛が中学生、久が小学生で、女の花盛りどころか子育て真っ盛り。それまでの板塀も取っ払って、金網沿いに薔薇を咲かせて。愛は小学生の頃から犬を飼いたいと申してましたが、義理の父母が嫌いで飼えなかったんですよ。近くの動物園がただでしたから、それで我慢させておりました。で、義父母が先ほどの墓に入りましてから、それまでの平屋を、二階建てに立て直してからプードルを買ったんですよ。小さい犬なら家の中でも飼えますでしょ。それがね、ふふふ、プードルですからてっきり小型だと思い込んでおりましたのに、原種で大型でしたの。どんどん大きくなって、子馬ぐらい。でも家の中で飼い始めましたから今更外にも出せず、あら、ニーニャでしたら、ロバートさんも虎之介さんもご苦労なさらずに乗れましたのにね。あら、でもニーニャでしたらこちらには連れて来られませんでしたわ）

（もうお亡くなりになったから、でしょうか）

（いえ、あっ、もちろんもう他界いたしましたが、ニーニャは大き過ぎて地下鉄や電車には乗れませんもの）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その五（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その六

（えっ、犬が電車に乗れるんですか）
（はい、バスや営団地下鉄は無料、ＪＲはえ～と一日二百七十円だったかしら、新幹線も乗れるそうですよ）
（まぁ、バスや地下鉄はただなんですか。あら、ユリも今は望さんにただ乗りしてますけど。あら、虎ちゃんなんか、ただ乗りできるマック君にただ乗りしてるっ）
（このただ乗りは命賭けなんだからね、ユリちゃん。それにロバートさんもただ乗りしてる）
（命ったってっ、もう関係ないっす。落ちたってこれ以上死なないっす）
（武蔵君、犬に乗るのと人に乗るのでは随分違いますな）
（乗り心地、ご推察いたします）
（あっ、お爺ちゃん、ほとんど初めましてっす）
（いやぁ、お互い顔は見かけてますからね）
（やっぱ、セミテリオには年寄りが多いっすね）
（そりゃそうだ。天寿を全うしてからの方が多いですからね）
（百まで生きられたご隠居さんにそうおっしゃられると、我輩など立場がないですな）
（わたくしもですわ、ロビンも、それにユリさんも虎之介さんも武蔵さんも）
（いやぁすみません。ところで夢さん、今は営団地下鉄とは呼んでませんよ。東京メトロ）
（あらあら私としたことが。そうでしたわね、慣れなくて。いつまでも国電を省線と呼ばれる方を古いと思っておりましたのに。その国電すら古くなって、私も古くなりました）
（夢さま、まだこちらには新しいでしょ。夢さまが古くなんておっしゃると、ユリ辛いです）

（ご隠居さまがおっしゃったメトロ、仏蘭西語ですわね。何故かしら。最初の地下鉄は夫の国、英吉利でしたからチューブとお呼びすればよろしいのに。それに、日本は英語をたくさん使ってますのにね）

（亜米利加ではｓｕｂｗａｙですな）

（僕、今まで考えた事なかったのですが、ｔｕｂｅとｓｕｂｗａｙとｍｅｔｒｏを聞いて、なぜｍｅｔｒｏにしたのか判ったように思います。ｔｕｂｅではホース、管のことですが、あるいは自転車のチューブなどと紛らわしい、ｓｕｂｗａｙではサンドイッチの店の名前と紛らわしい、ｍｅｔｒｏなら元々ｍｅｔｒｏｐｏｌｉｔａｎ，ｍｅｔｒｏｐｏｌｉｓですからね。首都大学や首都銀行や首都の好きな都民が選びそうな名前ですね）

（いやぁ、また日本語お得意の短縮形ですな。しかしながら、ｍｅｔｒｏｐｏｌｉｓはラテン語のｍｅｔｒｏをギリシャ語のｐｏｌｉｓに付けて、母なる街という意味ですからな、メトロだけですと、母ですな。ははは、こりゃ面白い、母は地面の中を走る。すると、メトロに乗るということは母の胎内で地下を走るということですかな）

「マック、そろそろケージに入って。あっ、先に足を拭かなきゃ。ケージがドロドロになっちゃう」

（ｃａｇｅとは檻のことですな）

（うわぁすごい、マック君、自分で入るんだ、犬のくせによく分かってる）

（ユリさん、愛や望に聞こえていないと思いますから構わないのですが、あの二人は、犬のくせになんて聞こうものならすさまじい議論になりますよ）

（えっ、犬は人間より馬鹿だから）

（ユリさん、それも、あの二人にかかったら大変）

（まぁそうなんですか）

（彦衛門さまがいらっしゃらなくて良かったですわね）

（えっ）
（マック君のことではなかったかしら。それとも摩奈さんがお連れだった犬のことかしら。彦衛門さまは、美味そうだとおっしゃってませんでしたっけ）
（まぁ、そんなこと知ったら、この二人がなんて言うか。何しろ、愛は貝や海老を茹でる時に、一つずつ、一匹ずつ、丁寧に洗って、ごめんね、でも美味しく食べてあげるからね、許してね、って。沸騰した鍋に入れたらすぐ蓋をして、暫く目をつぶっているんですよ。苦しまないようにって願いながら。望にいたっては、その側にもいられない、絶対に自分では調理しませんわ）
（まぁ、浅蜊も蜆も蛤も海老も美味しいのに）
（それがね、望は海老が大好きで）
（あら、変なの）
（お魚やお肉は平気ですの）
（平気らしいですよ。二人が言うには、あれはもう切ってあったり、もう死んでいるからって。自分の手で殺すってのがダメらしくて。ちょっと前まで生きていた新鮮なものほど美味しいのに。でも、確かに今は、自分の手で殺すこと少ないですよ。お店でも切り身で売っていたり、パックに入っていたり。この中で一番お生まれが古い方はどなたでしょう。え～と）
（俺ではないっす。絶対に）
（パックとは器のことですな。で、カテリーヌさん、ご年齢をお尋ねするのは失礼ですかな。我輩とどちらが先に生まれましたかな。我が国のＣｉｖｉｌ　Ｗａｒは我輩が生まれる前に終わっておりましたが）
（わたくしもそれより後でございますわ。Ｔｒｏｉｓｉｅｍｅ　Ｒｅｐｕｂｌｉｑｕｅの開始より二十年近く後でございます）
（おっ、我輩はその開始時ですから、つまり、我輩の方が年上、古いということになりますな。で、ご隠居さんは）
（そのとろわなんとかは存じ上げませぬが、僕は十九世紀最後の年

に生まれました）
（って千八百九十九年ってことっすか）
（いや、丁度千九百年ですよ。世紀は一から始まり零零が最後なのでね）
（あっ、そういえば習ったっす）
（ということは、我輩が一番古いということになりますな）
（ご隠居さま、お召し上がりになったもの、ご自分で殺されたことございますかしら）
（え～と、いえ、無いと思います。まぁ、僕は一応寺に生まれてますから、殺生はなかなかという環境でしたよ。一応、生臭い物は食べないことになっておりましたし。一応ですけれどね）
（僕、卵だったら生で食べたけれど、あれは殺すというのとは違いますしね）
（我輩も、鶏など料理人がが殺してましたがね）
（それだったらユリも、下男さんが）
（それでしたらわたくしも女中が）
（自慢じゃないけど、俺、ゴキブリなら殺した事あるっす）
（でしたらわたくしも、蚊でしたら。ゴキブリはダメです）
（そういえばあの時、ゴキブリの家を見て気絶したカテリーヌさんは消えましたっけ）
（ユリだって蠅なら）
（望はね、キャーキャー言いながらでも殺すんですけれどね、愛が平気で殺せるのは蚊ぐらいかしら。ハエは家から追い出しますし、ゴキブリ殺す時はごめんなさいって）
（まぁ）
（一昨晩もね、ゴキブリの赤ちゃんを見つけて、愛が慌てて近くにあった綿棒の空の容器で捕まえて）
（うどんを作る時のですね。ユリ、あれ転がして遊んでいたら、婆やに取り上げられました。ゆがむと使い物にならなくなるんですよって。でも麺棒の空の容器って何かしら）

（あっ、俺も叱られたことあるっす。あれ振り回してたら、大事な商売道具をって。でも、容器になんて入れてなかったっす）
（うどんのじゃなくて、耳掃除の）
（えっ、耳を掃除するのに、あんな太いもの、どうやって使うんですか）
（あはは、ユリさん、麺棒ではなくて、綿の棒。両端に少しだけ綿がまいてあって、まとめて売るのに、透明の容器に入っているんですよ）
（耳掃除に綿ですか。なんだかくすぐったそう）
（耳あかには二種類ありましてね、一説によれば、弥生系は乾いているから耳かきで構わない。縄文系はねばついているから綿棒の方がよいそうで。もっとも、アメリカンファーマシーで、ジョンソンのを売ってましたが、日本製のが売られるようになったのは随分最近だったと思いますよ）
（へぇ〜、そんな麺棒、いえ綿棒があるんですか。僕も初耳です）
（もしや、Ｊｏｈｎｓｏｎ兄弟の会社ですかな。我輩より若い。それにしても懐かしい。アメリカンファーマシーなるものが戦後の日本にはできたのですな。我輩、ちと早く生まれ過ぎた、いや死に急いだか。いや、日本と戦争した時に生きていなくてこりゃ幸いだったのかも）
（で、その望が捕まえたゴキブリをどうするか、望と愛で相談しているんですよ。殺虫剤で殺すって望が言えば、愛は、一寸の虫にも五分の魂、生まれて来てすぐ死ぬんじゃあまりにも可哀想じゃない。じゃぁどうするの、一寸って、何センチだっけ。三センチぐらい。ってことは五分って半分なら十五ミリかぁ。このゴキの赤ん坊、二ミリぐらいだから魂は一ミリ、一ミリの命をどうするかってことかぁ。で、どうするわけ。えっ、とりあえずこのまま。じゃぁ飢え死にしちゃうじゃない。餓死と殺虫剤とどっちが楽。私ね、殺虫剤の方がよいかもと思ってましたが、愛にも望にも伝えられなくて。戦中戦後の飢えを体験しておりますでしょ。餓死が恐ろしくて。蚊で

すら、痒くしないなら血ぐらい吸わせてあげるのに、ですよ）
（ははは、そりゃ面白い。しかし、あれは吸血する前の麻酔みたいなもので、その麻酔が痒みの元でしてね）
（まぁ、ご隠居さま、そうなんですか）
（痒くて気付かれたら殺されるから）
（ですから愛が申すのですよ。痒いから気付いて殺すわけで、痒くなかったら気付かないから殺さないで済むのに、って。蚊とぐらい共存できるって）
（しかし、蚊も伝染病を媒介しますからね。マラリアや日本脳炎やフィラリアや）
（そうそう、犬にも蚊はいけないそうですね。ニーニャの頃から言われてました。蚊を避けなさいって．今は飲み薬があるそうで）
（蚊も悪さしなければ殺されないのにね）
（蠅も、あれはウイルスや病原体を媒介しますからね、退治した方が良いでしょう）
（そういえば、蠅たたき、ほとんど使わなくなってましたわね。そうそう、昔、蠅とりリボンってございましたわ。あれもとんと見かけなくなって）
（えっ、あれ、無いのですか。どこにでも吊るしてあったのにね）
（そうそう、お店など、リボンに蠅がびっしり付いていて、取り替えればいいのに、ってよく思いました）
（ユリ、それ知りません。蠅なんてあまり気にしてませんでした。どこにでも普通にいたでしょ）
（そう、衛生状態悪かったですね。でも、こうまで蠅も見かけないというのも、先ほどの話ではありませんが、殺虫剤の効果なのでしょうが、アンバランスなものを感じさせられます）
（アンバランスとは釣り合いが悪いということですな）
（いつもながら、ロバートさん、有り難うございます）
（いやぁ、いつもながら、最近の日本人の言葉は、いえ、最近こちらの世にいらっしゃる方のお話には日本語以外の言葉、特に英語が

多用されているのに驚いておりましてな。勉強になります）
（うわぁ、ユリ、地下鉄乗るの、初めてです）
（ユリさま、わたくしもですわ）
（僕はあちらの世にいた時に乗ってますから）
（我輩も最近あちこち出歩いておりますからな。しかしながら、この乗り心地はあまり愉快なものではないですな）
（籠の中の犬に乗ってますからね。もしかして、今日の面々の中で最古参のロバートさんは、籠に乗られたことはありますか）
（一度だけ、試しに乗せて頂きましたがな、あれはこれよりましでしたな。よくこのマック君が平気ですな。捕まるところも無いのに。もっとも犬ではつかまり様が無いですかな）
（僕、なんだか酔いそうです、籠酔い、犬酔いでしょうか）
（おっ、みなさま、ほらほら、これがスイカです。パッとタッチして改札を通れる）
（うわぁ便利。いちいち切符を買わなくていいのね。でも立っちって、赤ちゃん言葉。ご隠居さんが使われるとかわいらしいです）
（いえ、立っちじゃなくて、英語の触れる、です。それに、歩いて通りながらですから、座っているわけではありませんから、立っているのと同じですし）
（なぁんだ。でもすごいですねぇ。触って通るだけで）
（昔の改札の鋏の音が懐かしいですわ。あのカチャカチャいつも鳴らしてたのが）
（すごいと思ってました。よく指が腱鞘炎にならないものだと、よく切符をさっとつかんでさっと見られるものだと）
（切符、見るだけなら、秩父鉄道が今でもそうっす）
（切符に鋏は入れないのですか。何回でも使えちゃう）
（じゃないっす。出る時には切符渡すっす）
（まぁ、これが以前ユリさまがおっしゃってらした動く階段ですのね）
（そうそう、カテリーヌさん、これです）

（変なの。おばさん達、エスカレーターが珍しいっすか）
（おばさんですって、まぁ）
（何だか妙なものですね。前の人の尻しか見えません）
（仕方なかろう。犬の目の高さで見る世もおつなもの）
（うわぁ駅。地下に駅なんて、怖くないのかしら）
（汽車じゃないのですね）
（地下で汽車を走らせたら、煙が大変でしょうね）
（おばさん達、電車も乗ったことないっすか）
（そんなことないです。でも汽車の方が多かったかしら）
（地下じゃ真っ暗な中を走るのかしら）
（いえ、ちゃんとライトで照らしますよ）
（ライトとは電灯のことでござる）
（ロバートさまありがとうございます。ただ、そのぉ、下の方からお声が聞こえてくるのには、どうも慣れません）
（まぁ、女駅員さんがいらっしゃるのですか、ユリもなりたい）
（なんか、ユリちゃんって何にでもなりたいのかな）
（虎ちゃん意地悪。だって、ユリの頃は女の子はお稽古のお師匠さんかお嫁さんぐらいにしかなれなかったんですっ）
（ユリさん、もしかして、あの声ですか。あれは録音してあって、まぁ、駅員に女性もいらっしゃるかもしれませんが、あの声は録音なんで、毎回同じものを流すんですよ）
（録音って）
（音や声を貯めておくのですよ、ほら、ユリさんも蓄音機はご存知では）
（あぁ、あの大きな喇叭がついていて、黒くて丸いのがくるくる回るのですね）
（そうそう、あれがもっと進化しましてね）
（世の中変わりましたねぇ。お金みたいに音も貯めておけるのですね）
（その内、命も貯めておけるようになるかなぁ）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その六（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その七

（うわぁ、降りてくる人もたくさん）
（もうこの時刻ですもの。少ない方ですわ）
（よかった、お爺ちゃんが一緒じゃなくて）
（どうして）
（だって、お爺ちゃん、俺が電車に乗るとき、いっつもうるさいっす、あっ、うるさかったっす。あっそうかっ。生きていないから、関係ないっす）
（えっ、どういうことかしら）
（電車が入ってくると、ほらほら白線より内側じゃなきゃ危ないだろう。電車に乗ろうとすると、ほらほら、降りてくる人の邪魔になる。脇によけて。乗ったら乗ったで、子供は座らないもんだ、なんだかんだと、ずっとうるさかったっす）
（まぁ、それが躾というもの。こどもの内に躾ってないと、大人になって周りに迷惑かけますからね）
（けど、俺の場合、仕方なかったっす。俺が住んでた所、電車なんて校外学習でもなきゃ乗らないっす。みんな車っしょ。だから、小一の時なんか、隣の駅までわざわざ電車に乗る練習の授業まであったっす。列に並んで、白線より内側で、降りる人が先で、乗ったら静かに、座ろうなどと思わず、ちゃんとつかまってとかなんとかかんとか、色々注意ばっかだったっす。銀座線にはお爺ちゃんと何回か乗ったことあるっすけど、いつも銀座線は日本で一番古い地下鉄って聞かされたっす）
（古いのに壊れないのですか。ユリ、一寸怖くなりました。乗っている間に地面が落ちてきたらどうしましょう）
（ユリちゃん、大丈夫だよ。僕たちはもう死なないから。それにしても、今のあちらの世では、まだ電車の乗り方を教えなければなら

ないのですね。なんだか、僕の時代のような）
（今は、都内の地下を、それこそよく地面が落ちないものだというくらい蜘蛛の巣みたいに地下鉄が走っていますよ。しかも地上の建物はどんどん高く重くなっていますしね。東京だけではなく、地下鉄は、横浜や名古屋、京都、大阪、神戸、福岡、仙台や札幌でも走ってますよ）
（まぁそんなに方々で）
（よく日本列島が沈没しないものですね）
（お爺ちゃんは、田舎で育つと電車にも乗れなくなるのかと俺を見て驚いてたっす）
（田舎、ですか）
（たしかに、俺のいたとこ、田舎だったっす）
（私ね、その田舎って言葉、苦手ですわ）
（まぁ夢さま、どうしてでしょうか）
（主人が何かと言うと、田舎者、田舎者と私を馬鹿にいたしましたのよ）
（夢さま田舎のご出身なのですか）
（いえ、私の家は、家康の頃から代々江戸、東京ですわ。最初は市内で、後に山の手）
（なのに田舎者、なのですか）
（まぁ、山の手もお江戸の頃は大いなる田舎でしたから、市内とは違いましたけれど。でもそういうのではなくて、主人の悪口の一つですわ）
（つまり何でしたっけ、え～と、偏屈爺さんは田舎者がお嫌いということかしら）
（私にではございませんでしたが、ご近所の方を肥溜かつぎのどん百姓の倅の癖してなどという言葉も申してましたし、田舎やお百姓さんを馬鹿にしてましたから）
（おやおや、偏屈爺さんはそういうお方だったのですかな、鼻持ちならない。たしか、僕と同じ一高帝大とお聞きしましたが。そうい

う輩もいたのですね）

（何か嫌ですね。僕も。ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅの感覚を持っていない、威張って怒鳴り散らす、たしかにそういえば、いつも夢さんには威張って怒鳴り散らしてますね。偏屈爺さんと皆さんに呼ばれてますが、僕達には別に怒鳴りませんよ。夢さんがいらっしゃらない時には独りでぶつぶつ）

（お百姓さんがいなかったら、お米もお野菜も頂けませんわ）

（それに、便所が詰まる）

（虎ちゃん、まるで彦衛門さんみたいなこと言わないで）

（いやぁ、だって、汲み取ってもらわなきゃ、便所は詰まります。つまらない話ではなく、つまる話。おっと本当に彦衛門さんみたいになってきました。失敬）

（そうそう、あれは本当に困りましたね。関東大震災の後など、しばらく汲取されなくて、家が倒れなかった者でも苦労。家を失くした者など場所にことかいて、夜半に道路ででしたねぇ）

（ご隠居さままで、なんですか。御不浄のお話なんて、彦衛門さんみたいですっ）

（いやいや、あの当時、帝大生が路上の排泄物の処理をしたのですよ。これぞまさにｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅ。まぁ、帝大から上野は目と鼻の先でしたしね）

（つまるって、ぼっとん便所のことっすか）

（ええっ、武蔵くん、それって）

（便所ですよ、武蔵君）

（だって、普通の便所なら、水流せるっしょ）

（今は水で流せる方が普通だということですね）

（まぁまぁみなさま、愛の所に行けば、水洗トイレは見られますから。今は、ほとんど水洗ですのよ）

（まぁ夢さまそうなんですか）

（ええ、マックのもそちらに流すんですよ）

（えっ、犬専用のお便所もあるのですか）

（あっ、はい、あります。でも、そこは水洗ではなくて、マックのトイレトレイから拾って、人間用のに流すんです）
（えっ、その早口言葉みたいなのもう一度お願いします）
（トイレトレイですか）
（トイレはご不浄のことでしたわね。仏蘭西語が元で。で、トレイは）
（英語で皿のことですな）
（まぁ、お皿が犬のお手洗い）
（いえ、お皿じゃなくて、ご覧になればお判りいただけますわ）
（おっ、地下鉄が入ってきましたな）
（うわぁ、すごい風。飛ばされちゃう、しがみつかないと）
（その点、籠の中は安心）
（白線の内側に下がらなきゃ、あれっ白がなくなって、黄色だけになってるっす。この前まで白い線と黄色いぶつぶつだったのに。俺、まだこっちに来てそんなに経ってないってのに、もう変わってるっす）
（武蔵君、僕、今気付きました。僕の頃には白い線だけでした）
（世の中の移り変わりは早いものですわね。私がこちらに参りました頃には両方でしたのに）
（夢さま、この黄色い線はどうして幅が広くてぶつぶつなのでしょう）
（視覚障害者の為だそうですよ。乗ったり杖で触ると判るらしいです）
（四角しょうがいしゃ、それって日本語ですか。ユリ、わからないんですけど）
（視野の視に覚えるの覚）
（目暗のことですわ。盲人）
（そうそう、最近はそうやって言葉を変えれば差別がなくなるとばかりに、やたらめったら長たらしい言葉が多くてね。言葉狩りですね）

（Ｄｏｒｔ，ｗｏ　ｍａｎ　Ｂ?ｃｈｅｒ　ｖｅｒｂｒｅｎｎｔ，
ｖｅｒｂｒｅｎｎｔ　ｍａｎ　ａｍ　Ｅｎｄｅ　ａｕｃｈ　Ｍｅｎｓｃｈｅｎ）
（おぉ、ロバートさんはドイツ語もご存知でしたか）
（いえ、ご隠居さん、このくらいは）
（その言葉、わたくしも耳にしたことございます。もしかして、仏蘭西語では　Ｌ?　ｏ?　ｏｎ　ｂｒ?ｌｅ　ｌｅｓ　ｌｉｖｒｅｓ，ｏｎ　ｆｉｎｉｔ　ｐａｒ　ｂｒ?ｌｅｒ　ｌｅｓ　ｈｏｍｍｅｓ　ではございませんかしら）
（あっ、ハイネの言葉ですね、フランス語でしたら僕も少しは）
（英語ですと、Ｗｈｅｒｅ　ｔｈｅｙ　ｂｕｒｎ　ｂｏｏｋｓ，ｔｈｅｙ　ｗｉｌｌ，ｉｎ　ｔｈｅ　ｅｎｄ，ａｌｓｏ　ｂｕｒｎ　ｐｅｏｐｌｅ、焚書坑儒みたいなものですよ）
（本を燃やす所では最後に人も燃やす、ですね）
（焚書坑儒、俺わかるっす。先生を生き埋めにしちゃうっしょ）
（日支事変の頃の日本もそうでしたね。発禁処分になったり、なんでもかんでも検閲されて。人も警察や特高に殺されたそうですね。こういう話はひそひそと語られてました）
（何だか嫌な感じ。ユリにはちんぷんかんぷん。どうして武蔵君まで判るの。何だかユリだけ除け者）
（あら、私もあまり判りませんわ）
（よかった夢さまも。でも夢さま女学校お出になられたのでしょ）
（まだ敵性言語と言われる前でしたが、でも、英語を学んでから随分経ってますもの。ほとんど覚えておりませんわ。その癖、神武綏靖安寧懿徳孝昭孝安孝霊孝元開化なんてのはいまだに）
（おっ、僕もそれ覚えてますね）
（ユリも）
（なんですの）
（俺も分からないっす。何っすか）
（日本の歴代天皇の名前ですよ）

（まぁ、日本の方って覚えさせられるのですか、あら、そういえば私もフランスの王様の名を）
（我輩も歴代大統領の名を覚えましたからな）
（へぇ～、みんなたいへんだったんだぁ。俺そんなので覚えたのは、え～と、九九ぐらいっす。あっ、あと、歴史の少しぐらいっす）
（少しですか）
（少しでいいっす。歴史って、後で生まれる程、覚えること多くて、絶対に損っす）
（話しを元に戻させて頂きたいのですが、書を燃やす処では終いに人をも燃やす。旧い言葉、我輩より旧い言葉ですが気になりますな）
（でも、どうして）
（いえ、我輩、言葉狩りに関しましてはちと苦言がございましてな。日本語に限らず、新しい言葉に置き換えれば意味が変わると思う御仁が多くて。確かに、前の言葉が孕む悪意や誤解は無くなったかの如く感じられるが、使う者の側の心に悪意や誤解があれば言葉を換えても中身は同じですからな。我輩も最近まではたいして気にしておりませんでしたがな、先日の散歩で現在の我が国の文章を目にしましてな、武蔵君流に申せば、なんだこりゃぁと思ったわけです。何でもＰＣ、Ｐｏｌｉｔｉｃａｌ　Ｃｏｒｒｅｃｔｎｅｓｓ運動というのがあったそうで、それ以降、ｐｏｌｉｃｅｍａｎやｆｉｒｅｍａｎではｍａｎ、つまり男であり、女性警察官消防官もいる以上　ｐｏｌｉｃｅ　ｏｆｆｉｃｅｒ、ｆｉｒｅｆｉｇｈｔｅｒでなければならない、　Ｍｉｓｓと　Ｍｒｓ．では結婚しているかどうかが判るので、Ｍｒ．で婚姻の有無を問われない男性敬称に比べて女性差別だとされて、　Ｍｓ．にしたなどと、どんどん新しい言葉を作ったのですな。まぁ判らないでもないのですが、だからと言って差別がなくなるわけではなし。ＩｎｄｉａｎをＮａｔｉｖｅ　Ａｍｅｒｉｃａｎに、　ＮｅｇｒｏをＡｆｒｉｃａｎ　Ａｍｅｒｉｃａｎに換えて、まぁ確かに差別が少なくなったのかもしれませんがね、それにしたって過去の文化を反映した言葉ですからな、その差別が

あったというのも含めた上での文化ですしな）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その七（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その八

（ユリ、ロバートさんのお話、ちんぷんかんぷん）
（俺、少しは分かるっす。一応英語勉強したし）
（ふむふむ。テレザの明日さんも同じようなことをおっしゃってましたね。天然痘は問題ないが、癩病は使えないと言われたそうで）
（どっちも怖い病気ですね）
（ユリ、知ってます。天然痘はあばたになるし、癩病はお鼻やあちこちが溶けちゃうんでしょ。でも、どうして天然痘は使えても癩病は使えないのかしら）
（翻訳は構わないが、そのままでは出版はできないと言われたそうです。癩病という言葉には昔からの誤解があり偏見があるからと。それで、ハンセン病に換えてくれと。その偏見には、国も関わってましたしね。ハンセン氏病患者をつい最近まで無理矢理隔離いや監禁してましたし。それで明日さんは困ったそうですよ。原書で扱われている時代には既にハンセン氏が菌を発見していたが、舞台のブラジルの田舎ではそんなこと知るわけもなく、原書にも癩病とあり、ハンセン病とはなっていないものを、ハンセン病とは書けない。それで僕のところに相談にきて、僕も困ったのですが、出版社の提示してきた重い皮膚病という言葉に置き換えることになって、でも、どうもね、僕も後味悪かったですね。犬好きなマキ先生もね、韓国旅行の前に、韓国語で犬をケと言うのよ、簡単でしょなんておっしゃってたのに、帰国してから、ケは使っちゃいけないと言われた、差別用語だから、って。三つ覚えても四つ忘れちゃう程耄碌していてもせっかく覚えたのにと言ってたのも思い出しました。どうも、使っちゃいけない言葉が世の中にはあふれているらしい）
（マキ先生とは、ご隠居さんの病院の先生ですか）

（いえ、昔、小学校の先生だった方で。僕、先生と言われるのが嫌いでね。でもマキ先生は僕のことを先生って呼ぶから、僕もマキ先生と呼んでいたんですよ。嫌がってましたがね、でも学校の先生だから先生でいいでしょう、と。そしたらそんなのは昔のことです。先生こそ現役のお医者さまなんですから先生で構わないじゃないですか。いや、僕は半分現役だとしても先生と呼ばれる程の馬鹿じゃなし、と返したのですが、それでも、先生は私より先に生まれたのですから、やっぱり先生ですわ、と。埒開かなくて、堂々巡りですからね、結局、互いに先生という呼称を外さないまま今日まで）

（今日って、今もこちらの世でおつきあいあるんですか）

（いえ、僕が病院に遊びに行くとね、マキ先生がよく来ているから、おしゃべりしているんですよ）

（マキ先生もどちらかのセミテリオから病院にいらっしゃるのですわね）

（いえ、マキ先生はまだあちらの世界でご存命）

（えっ、あちらの世のマキ先生と、こちらの世のご隠居さまが、お話できるのですかっ）

（あらユリさん、覚えてらっしゃいませんかしら。わたくし、ほら、セミテリオで遊んでらしたお子、え～と、ことねちゃんだったかしら、あの時、お話できましたわ）

（そういえばそうでしたわね。でも、ことねちゃんは幼かったから）

（僕思うのですが、年齢ではなく、感受性ではないでしょうか）

（然様でございますわ。私もね、あちらの世におりました時、物心ついた頃は、そうでしたし、五十ぐらいから後もそうでしたわ。その間は、あちらの世では忙しくて聞こえなくなっておりました）

（この前、誰かが言ってたっしょ。忙しいって漢字は心が無いってことだって。それっすか）

（かもしれませんわね。実際、愛も望も、私、いえ、私達のこと感じているみたいですし。それに、望は動物のことも感じるらしいですわ）

（まぁ。犬や猫とお話できるんですか。ユリ、信じられない）
（それって、ドリトル先生みたいなのっすか）
（そのドリトル先生って、武蔵君、どこの先生ですか。中学校の、それとも小学校の、それともどこかのお医者さんですか）
（えっ、どこのって、本の）
（ドリトル先生物語でしょ。全部でたしか十二冊でしたわ。愛が大好きでね。何度も繰り返して読んでました）
（えっ、あの本っすか、十二冊を繰り返しっすか。動物好きなら面白いですよって、図書館の人に勧められたことあるっす。けど、一冊目で、難しくて。何冊もあるっしょ。あれを何度も繰り返して読んだっすか。すっげぇ）
（終いには愛は原書まで揃えて読んでましたよ。でも、望は武蔵君と似たようなもので、数冊で止めたみたいです。で、今更ながら、言うんですよ。ドリトル先生の世界は、人間の一方的視点だから、って。すると愛が、動物の権利や立場や諸々を人間と同じように扱う視点を持っただけでも、素晴らしいことなのに、と。ドリトル先生の話題になると、愛と望は互いにゆずらず）
（あのぉ、おしゃべりに夢中になっている内に、いつの間にか、ユリ達、電車、いえ地下鉄に乗って、降りちゃったんですね。ユリ、初めての地下鉄、もっと味わいたかったのに）
（ユリさん、まだ電車にも乗りますし。あまり変わらないですから）
（ユリ、電車なら乗ったことあります）
（ふっ、なんだか俺の小学校の時みたいっす。乗ったことないってのがいたっすよ）
（えっ、武蔵君、それって、僕の頃と変わらないような）
（え～と、虎ちゃんでしたっけ、何時のお生まれですの）
（虎之介と申します。僕は大正十五年です）
（あらっ、同じ。私は昭和元年ですけれど）
（えっ、どうしてっすか。どうして同じっすか）
（武蔵君、西暦と違って、元号は、天皇で変わるから。大正十五年

も昭和元年も同じ一九二六年なんだ）
（私の方が少しばかり後に生まれたことになりますわ。貴重な昭和元年）
（そうですねぇ。昭和は元年も六十四年も一週間前後ですからね）
（あら、武蔵君、困った顔してる）
（えっ、だって、お兄ちゃんとお婆ちゃんが同じ年なら、お兄ちゃんとお姉ちゃんと呼ばなきゃいけないのかって、けど、お婆ちゃんをお姉ちゃんとはちょっと呼べないし、だからって、お兄ちゃんをお爺ちゃんても呼べないっすよ）
（あら、私はお婆ちゃんでいいですよ。望って孫もおりますし。あっ、それで、ええ、私の頃は、女学校の修学旅行が伊勢参りでしたの。それまで、鎌倉ぐらいまでしか乗ったことのない方ばかりでしたでしょ。みんなわくわくして。実際のところ、顔や襟は煤で汚れるし、座席に座ってばかりではお尻が痛くなりましたし、散々でしたが、でも帰宅すると、女中達が羨ましがってね、一度も乗ったことないって。そういう時代でしたわね）
（えっ、なんか違うっす。電車はあるっす。けど、電車の駅まで遠くて、駅まで、俺が小さい時はバスが一日三往復ぐらいあったっす。けど、みんな乗らないからバスもなくなっちゃって。タクシーは高いし、だから、父ちゃんだけじゃなくて母ちゃんも運転習いに行って車持つようになってるっす。だから、電車乗らないっす。お兄ちゃんやお婆ちゃんの話だと、電車が走ってないみたいっすけど、違うっす。電車は走ってるっす。けど、小中学校に行ってる間は使わないっす。高校に行く様になったら使うっす）
（ユリ、よくわからないんですけど、高校になったら電車乗るんでしょ、でも駅は遠いんでしょ。駅までどうやって行くのかしら）
（あっ、チャリ、自転車っす。それか、雨の日なんかだと母ちゃんか父ちゃんが駅まで送ってくれるか、母ちゃんがまとめて父ちゃんとこども達を駅まで送るかしてるみたいっす）
（それでなのすな。我輩の頃より、日本の空気が汚れている様に感

じるのは。車に乗る人が増えたのですな）

（そうですよ。なのに、肺癌患者が増えたのは、煙草のせいにして、まったく。僕は煙草を八十年吸い続けて百まで生きて癌にはなりませんでしたからね。癌になるかどうかは、体質も関係している筈なのに。値上げすれば喫煙者が減って肺癌患者が減るから値上げしようなんて屁理屈ですよ。喫煙者が減ったおかげでこちとら煙草の香りも嗅ぐ機会が減りました、まったく。いや、僕の独り言、失敬）

（いやはや、我輩も最近煙草の香りにはなかなか接することできず）

（嬉しいことをおっしゃって下さいますね。ロバートさん、ところで、まだ電車があるだけましですよ。もう何十年になりますかな、かれこれ三十年くらい経つでしょうか。方々で電車すら廃止されましてね。バスも電車もなく、タクシーは高くて、過疎地の高齢者や貧乏人はどこにも行けやしませんよ。年とってから免許取ろうとして教習所に通っても、物覚えが悪くなってますからね、反射神経も落ちてますしね、何度も試験受けてやっと免許取って。金も大分かかりますし。それで運転していたら、今度は高齢者が運転するのは危ないと言われますし。僕は免許、若い頃に取りましたが、都内でしたから本当に運転したことなど滅多になくて。まぁ、都内はね、電車や地下鉄があるから別に困らないでしょう。でも、バスも電車も無くなった地方に住んでいると、僕より若い世代がたいそう苦労しているらしい）

（なんか、やっぱ、昔の日本と同じっすか）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その八（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その九

（もしや、ご隠居さん、その高齢者というのも、言い換えですかな）
（うん、ユリも変な感じしてました。老人、ご老人じゃいけないのかしら）
（うふふ、ユリさん、今じゃ、病院では患者様って呼ぶんですよ）
（えっ、そうなんですか）
（うっす。俺みたいなガキでも、さまって呼ばれっす）
（へぇ～）
（それって、お医者様が偉くなくなったのかしら）
（う～ん、偉いとか偉くないとか、どうなんでしょうね）
（主人は、いつも、俺は偉いんだぞと自慢ばかりしていました）
（僕も医者でしたが、自分で自分を偉いと思ったことはありませんでした）
（ご隠居さまは、お坊さんになりかけたそうですし、お医者さまですし、お金もお持ちでしたでしょうし、お偉い方なのではないかしら）
（勉強をいっぱいなさったから偉いのかしら）
（僕、たしかに勉強はしましたが）
（職業次第なんじゃないですか、医者に弁護士、社長に先生）
（勲章を頂く方が偉いのかしら）
（でも、それだと、勲章をあげる方は貰う方より偉いってことになるし）
（あら、主人でも勲章頂きましたわ）
（長年医者をやっていれば勲章は頂くでしょうね。僕もでした。でもねぇ、頂いたからって、う～ん、周囲は皆、喜んでいましたが。長く一つのことしてれば、貰える仕組みらしいですしね。新聞に毎春、毎秋と紙面にずらっと並んでましたよね。消防、司法、外交、教職、あと大して公費をもらえないただ働きに近い民生委員とか保

護司など何か公の役に立つことを長くやっていれば、あるいは何かの団体や業界の長をやれば貰えるようでしたよ。おっ、あれだと、公務員はよい立場。年金だけでも良いのに、金に名誉、なぁるほど、お手盛りってわけだ）

（ご隠居さん、やっぱり偉いんですね）

（いやぁ、僕は一介の町医者に過ぎませんよ）

（ほらぁ、そうやってご謙遜なさるかたは、本当に偉い方なんですよ）

（そう言われてしまっては、僕はどうしたらいいのでしょう。何も言えなくなってしまいます）

（ほらほら）

（ですから、貰えて当たり前みたいなもので）

（でも、頂かない方のほうがよっぽど多いですもの）

（先ほど申しました様に、ある程度公務みたいなことを長年していれば、お国に尽くしたことになって、貰えるんですよ。おっ、そういえば、職業によって、貰う勲章の等級が違う、これは、国による職業差別なのだろうか）

（そうなんですか。へぇ～）

（そういえば、わたくしたちのセミテリオにも、正何位とか従何位とか書いてある墓石をおみかけしますが。あれも勲章ですかしら）

（あぁ、あれですね。戦前、え～と、この場合の戦は太平洋戦争のことですが、それ以前は、ほら、士農工商はなくなっても華族があったから、あれが、公侯伯子男に分かれてましたからね、それとの関係で。江戸時代には動物にも位を授けたそうですよ。象や馬や）

（えっ、江戸時代に日本に象がいたっすか。もっと昔になんとか象ってのがいたってのは図鑑で見た事あるっす。けど江戸時代にもいたっすか。象って暑い所の動物っしょ）

（ナウマン象ですね、武蔵君）

（うっす、なんとかじゃなくてナウマンっすね）

（いや、その昔の象ではなく、江戸時代に献上されたかどこからか

買ってきたのかなんですよ。その象に位を授けたそうです）
（あっ、そういえば彦衛門さんのお墓にも書いてありませんでしたっけ）
（象に位の後に、彦衛門さんの位じゃ、なんだか彦衛門さんお気の毒）
（ここにいないっしょ）
（いらっしゃらないからって、ユリ、やっぱりお気の毒に感じてしまいます）
（人間は象より偉いからですか）
（普通そうでしょう）
（象はそうは思っていないかもしれませんよ）
（えっ）
（で、あのお爺ちゃんは、偉い人だったっすか、象と同じくらい）
（本人がこちらの世に来る前に作られた墓なら、偉ぶりたい人だったのかもしれませんね。でも、あのセミテリオに、位が書いてある墓石は多いですからねぇ、そういう時代だったのかもしれませんね。天皇陛下に頂いた位を書かざるは失礼なりとか）
（でも、彦衛門さまって、偉ぶったこと、ございましたっけ）
（う〜ん、ない、と思います）
（じゃぁ、本当に偉い人なのかしら、ご隠居さんみたいに）
（いやぁ、僕はそんな）
（ほらほら、またまた）
（偉いのは、キリストさま、聖母マリアさま、王様、皇帝も）
（天皇陛下）
（戦前と戦後では天皇のあり方も違いますしね。たぶん、最初の頃は民をまとめていた。武士の時代には案外今と同じ。明治以降戦前は神にされてましたからね。今の天皇は、敬愛される存在）
（けいあいって何っすか）
（敬われ愛されるってことだよ、武蔵君）
（それって、アイドルみたいなもんっすか）

（アイドルって、ユリ分かりません）
（ｉｄｏｌですな。まさか怠ける方のｉｄｌｅじゃぁなかろうし。いやぁ、日本語の意味と英語の意味は同じなのでしょうか。英語でｉｄｏｌは、見えるものであり、必要以上に愛される存在、つまり、中身以上に盲目的に崇拝される存在をｉｄｏｌと言うのですが）
（それ、仏蘭西では偶像のことですわね。特にカトリックではない宗教の）
（え～っ、ロバートおじさん、カテリーヌおばさん、そうっすか。ええええっ、じゃぁ、アイドルってみんなそうっすか。っていうか日本語が変なんっすか）
（いや、武蔵君、英語だと思っていたら和製英語、本来のとは異なることがままありますからね。日本語のアイドルは英語のｉｄｏｌ、ｉｄｌｅのどちらともたぶん違うのでしょう。さもないとあんもないと、日本でアイドルと言われる人は中身が伴わないのにちやほやもてるとんでもない人ってことになってしまいますからね）
（うわぁ、出たぁ、ご隠居さんのさもないとあんもないと）
（ふふ。もしかしたら、そのアイドルというのが偉いを作るのかと、ふと思いました。自分はなりたいけれどなれない、その自分はなれない人にあこがれ、崇拝し、夢中になる。アイドルはもっともっとすばらしくなってほしい、という。だから、もっと偉い人になってほしいのかもしれませんね）
（僕たちの間では、偉いのはアリストテレスにアルキメデス。デカルト、カント、ショーペンハウエルでしたね。僕たちだって勉強すればそうなれるかもしれないと思ってましたから、そのアイドルというのとは違うかもしれません）
（学者ってことかしら。何かがおできになる方）
（ベートーベン、ショパン、モーツァルト、ゴヤ、ミケランジェロ、ダヴィンチ、シェークスピア、フォンテーヌ、セルバンテス）
（音楽や絵画や小説で有名な方ですわね。でも、有名と偉いは同じことなのかしら）

（地位が高い方、知識が多い方、お金をたくさんお持ちの方、何かが特別お上手な方ってことかしら）
（軍人さんも偉いでしょ。江戸時代ならお侍さん）
（神主さんやお坊さんも）
（それって、あんまりいない人ばっかりみたいっす。俺、テストでいい点取ると、偉いねって褒められたことあったっす。滅多になかったけど。あっ、つまり、滅多にない仕事や滅多にいない人なら偉いっすか。すごい人なら俺もいっぱい知ってるっす。イチローや藍ちゃんや愛ちゃんジョーダンやボルトや）
（ユリ、誰も知らないです。どんなすごい事なさったの）
（この中で、知っているのは、武蔵さんと私ぐらいでしょう。皆、スポーツ選手ですよね、武蔵さん）
（僕もイチローは知っていますよ。夢さんスポーツお好きですか）
（いえたいして。ですが、退職した後、主人が一日中テレビを点けっぱなしにいたしてましたので。そうそう、棒で球を打って何が面白いと申しておりましたのに、横浜ベイスターズの試合を見るようになりましたのよ。あなた野球は馬鹿になさってらしたのに、と申しましたら、見てやっているんだ、でした）
（スポーツとは運動のことなり。ベイは湾、なるほど横浜港のことですな。スターズは数多くの星と申しましょうかな。がそれにしても籠というか檻の中は窮屈至極）
（うっす。野球とゴルフと卓球とバスケと短距離）
（えっ、ユリ、野球ぐらいしか判りません）
（ユリさん、野球やゴルフや卓球は球を打つ競技で、バスケは）
（あっ、バスケットですね、以前ロバートさんが話されてました。球を籠に入れる球技）
（短距離は走る競技です）
（あっ徒競走と同じ、ユリ、走りたい）
（徒競走って何でしょう）
（かけっこですよ、みんなで走って競争する）

（そうそう、かけっこ。懐かしい言葉ですわ。それね、東京弁だそうです）

（そうでしたか）

（はい、愛が学生の頃には、地方から上京してくる学生さん、女の子も増えてきてましてね、愛がかけっこと申したら通じなかったそうですわ。東京にも方言があるのだと思わされました）

（つまり、武蔵君にとっては、すごい人とは、運動能力のある人ですね）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その九（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十

（他にも知ってっす。所ジョージとか、タモリとか、タケシとか）
（その方々はどんな運動の選手かしら、どこの奥にの方なのでしょう）
（カテリーヌさま、みな日本人ですよ。芸人）
（僕も知ってます。芸が達者で、テレビによく出て来る方々ばかりですね）
（主人が嫌いな方々ばかりですわ。何で球を打って年間億単位で稼げるんだ、なんでテレビに出て馬鹿話して億も稼ぐんだ。何で医者より稼ぎがいいんだ。人の命を預かる医者と人を笑わせる奴らとどちらが偉いのか。こんな社会は間違っている、許せないって始終申しておりました）
（あはは、医者より稼げるものは許せない、ですか。ご主人にとっては医者が偉いわけですからね、スポーツ選手も芸人も、それぞれの能力を活かして仕事をしているわけですがね。努力の方向が違うだけで。人を楽しませるのはなかなか難しいことだと思いますよ）
（でも国民なんとか賞ってのあるっす。ほら、野球の王とか、爺ちゃんぐらいの人が好きなおばさんの歌手、あっ、爺ちゃんいないから、あれっ、何ていったっけ）
（武蔵さん、もしかして、美空ひばりのことかしら）
（うっす。え～と、夢お婆ちゃん、ありがとうございます）
（あのぉ、野球の王って、王様なのでしょうか）
（それだったら俺でも説明できるっす。人の名前っす。日本人じゃなかったのに巨人の選手して、今は別の所で監督してるっす）
（そうそう、それで国民栄誉賞を頂いたので、主人がね。棒で球を打って、台湾人だったくせに金は稼ぐは賞はもらうわ、と。そういえば、先ほどの患者様って言葉が使われ初めた頃も主人が怒ってましたわ）

（何も怒る必要ななかろうに。本当に怒りっぽい方なのですねぇ。なぁるほど、感情的な方なんですね。だから声高になる）
（患者と医者が対等なんて許せない、でした）
（色々と差別の多い方なのですねぇ。国籍、職業、性別、たいへんですねぇ。生き辛かったでしょうねぇ。偏屈爺さんも、おっと失礼、夢さんのご主人もこだわる方向を変えれば良かったのにねぇ。自分の究める、究めた部分にこだわって満足していれば楽だったでしょうねぇ。他人と比べることで自信を確固たるものにしていると、他人より優れていると思う反面、他人より劣っていると思う部分も出て来てしまいますからねぇ。自身に自信を持てば心を平穏に保てたでしょうに。おっと、精神科医の奥様にいまさらながらの発言、お許しください）
（紺屋の白袴ですな）
（猿も木から落ちるっしょ）
（うわっ、武蔵君、偉い）
（へへへ）
（弘法も筆の誤りというのもありますな）
（俺、やっぱ、猿が木から落ちるってのが一番分かり易いっす。あとのは、俺知らない言葉いっぱいで）
（医者の不養生の類。精神科医が自分はなんともできない、ということですねぇ。辛いものですね。ご主人に限らず、最近のあちらの方々、どうもこだわる方向が金儲けに傾いている様で、もっと自分の選んだ職業を究めればよいものを、なんて僕は思うんですよ。もっとも、金稼げなきゃ生きていけませんし、昨今、昔と違って、職業は選べても、終身雇用でなくなった分、会社は使い捨ての人材を派遣業者に送ってもらえばいいですし、安上がりの使い捨てにされている身には究めるなんて無用ですしね。プロが少なくなりましたねぇ。プロになっても別の会社に派遣されるやもしれずですから、仕方ないのかもしれませんが。昔は、官僚も政治も、ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅありましたからねぇ。社会的地位を得たら、余

った金は公の為、民の為に使っていましたが、政治資金規制法や寄付禁止などでがんじがらめにされているのをいいことに、自分の為だけの蓄財してますからね。こちらに金は持ってこられるわけでもなし。まぁ、こちらの世に来るまで何年生き続けることになるのか分かりませんからね、周囲を信用できなきゃ蓄財してしまうのでしょうね。情けない世の中で。おやおや、また老人の死人の繰り言申してしまいました。こちらの世でも、あまりこだわらない方が楽ですよ。雲散霧消できるやもしれない。こだわると化石になってしまいますからねぇ。化石は砕けるのに時間がかかるから辛い）

（主人は化石になりたくなくて四六時中ぶつぶつなのかしら、いえ、でも、こちらの世があることにも文句を申しておりますし。こんな筈じゃなかった、こんな世界がある筈はない、とも）

（化石って石みたいなものでしょ。ユリ、そんなの嫌です。肩が凝りそう）

（ユリちゃん、こっちの世じゃ、たぶん肩が凝るって、感じないと思うけど。それに、ユリちゃんおしゃべりだから、当分化石にはなりそうないよ）

（虎ちゃん、分からないじゃないの。化石になって試してみてくれるかしら）

（ユリちゃん、ほんと最近口が悪くなったね）

（はい、おかげさまで）

（もう）

（肩に力の入った生き方をすると肩こりする、なんてね、ははは）

（もう、ご隠居さんまで僕をからかわないでくださいよ。同窓生のよしみでもう一寸かばって下さってもよいのではないでしょうか）

（まぁ、虎之介君も、一番肩のこる生き方をしていた頃にこちらの世に来ましたからねぇ）

（もう）

（あのぉ、目の見えない方のためのぶつぶつと、夢様のご主人様のぶつぶつと、同じなのでしょうか）

（おう、カテリーヌさん、なぁるほど。面白いことに気付きましたね。両方ともカテリーヌさんが気になさってるオノマトペですな）
（ほんとっす。俺、今気付いたっす。文句はぶつぶつ聞こえて、でこぼこもぶつぶつで）
（凸凹は、ぼつぼつとも申しませんでしたっけ）
（そういえば、そうですねぇ）
（つぶやくのつとぶを入れ替えればぶつぶつになりますね）
（ぼつぼつをなまってぶつぶつなのかしら）
（これからは主人がぶつぶつ申す度に、黄色いぶつぶつを思い出して気が紛れそうですわ。カテリーヌさん、ありがとうございます。主人も、昔はあんなではなかったのですけどねぇ。どうも、医局のトップになった頃から威張り散らす様になって。丁度その頃、同居しておりました義母が亡くなりましたし、今から思うと、男性の更年期だったのでしょうか。私も更年期でしたけれど、子供達がどんどん大きくなってきてましたし、娘時代みたいに女中がいるわけでもないですから炊事掃除洗濯で忙しくて、おまけにニーニャも飼い始めましたし、こどもたちは最初だけで、勉強が忙しいやら学校からの帰宅が遅かったりで、結局私が朝晩散歩に連れ出してましたしね。子馬ほどの大きさになったニーニャの散歩は、今思うと、いい運動だったのかしら。野毛山の辺りはその名の通りお山で坂が多うございますから、いい運動でした。ラジオ塔の辺りまでお散歩することもありましたっけ。昔が懐かしくてね、ラジオ体操をしていた頃はこういう人生を歩んでいる自分を想像もしておりませんでしたし。戦争になることも、負けることも、みんな過ぎてみればあっという間だったのですわね。義父が亡くなってから建て替えた家でバラを育てたり、そんなこんなで主人の小言いえ大言で振り回されてうんざりの更年期を紛らわしておりましたわ）
（僕は、国籍や職業が違っても、女だろうが男だろうが人間として、対等だと思うんですよね、野球だろうが医術だろうが、台湾人だろうが日本人だろうが、患者だろうが医者だろうが、どれだけ稼ごう

が勲章もらおうが、こちらの世に来りゃ同じ。それに、仕事はまぁ選べるけれど、生まれる場所や親は選べるわけじゃなし。そりゃ、ただで病気を治療するとでも言うなら、立派な人でしょうけれど、患者は金払うわけですからね）

（金払わないのに何かしてくれる人が偉いってことっすか。う～ん、金払わないでも何かしてくれる人、いるっすか）

（お金を払わなくても、道を教えて下さるでしょう）

（それは親切、でしょ。ユリだってお金頂かなくても、道を訊かれればお教えいたしました）

（偉い人より、親切な人の方が素敵ですわね）

（何だか、判ってきたような気がします。お金を払うことで相手の知識を利用できる場合は対等ってことでしょうか。つまり、知識は売り物。その売り物を買うのだから、商店で買い手をお客様と呼ぶように、患者様）

（う～ん、でも、お金を払う払わないじゃなくて、偉い人っているもん）

（さっきからユリちゃんが言ってる仕事の人でしょ）

（お仕事なのかしら。でも、お仕事しなくなっても、偉いお仕事してた方ってあちらの世にいる間、ずっと偉いでしょ。こちらの世にきても、偉いってことでしょ）

（そんなことはないと思いますが、でも偉い人ってこちらの世にきても、あちらの世の人がお墓参りしてくれますね）

（ずっと、いつまでも身内でもないのにお墓参りしてくれる人がいる人が本当に偉かった人なのかも）

（でも、やっぱり、偉いって、俺、判んないっす）

（例えば、勉強する雀の福沢諭吉さんは偉い人になると思うよ）

（そうっすか。お墓に知らない人も来るからっすか。でも、俺には雀の福沢さんも別に偉い人でもないっす）

（もしかすると、偉いというのは皆に勝手に思わせるようにする、そこが変だから元に戻そうとする、だから、患者に様をつけるって

ことなのかもしれません。昔の医者は、以前も話しましたが、特に偉いというわけでもなかったですし、弁護士もね、代弁者でしかなかったわけですよ。便利な人でしたけれどね。明治以降、偉いという印象を自分たちで作っていったのかもしれませんね。金を貰っても、助けてやってる、治してやってる、という風な）

（でも、みんなが対等だと、神が頂点にいる耶蘇教を禁止したのと同じ理屈で、偉い人から見たら危険な発想）

（う～ん、偉い人になりたい人は、何かでみんなより上、できたら一番上になりたいってことなのでしょうか）

（人間は歴史から学ばないようですねぇ。奈良平安の後、武士が出て来て、力で、武士が貴族より上に立った。武士の中でも下克上で、力の差で、武士の中の序列が変わった。江戸時代には、士農工商として、一番下にしたい百姓を武士の次にもってきて、不満を押さえた。武士の中で、夷敵が表れた時にこれじゃいかんという考え方で、士農工商とは別格にしていた皇族を立てて、徳川家を追い払い、大戦後は今度は皇室を神から民に下げた。低く見られていた労働者の権利を認めたものの日本が共産主義国家になるのを恐れて労働運動を取り締まった。今のあちらの世は一応皆平等に見えて、実態は世襲になってしまった感のある議員や官僚が偉くなってきたから、増税で不満のたまってきた市民をどう懐柔するかってとこですかね。古今東西、虐げられている者の鬱憤晴らし、ガス抜きには、祭り、酒、煙草、賭け事を取り締まらないというのが定説なのですが、酒税もさることながら煙草税など無茶苦茶で、それも、煙草は身体に悪いと悪者にして世論を作り上げて一見上手に操作しているが、その内、反乱が起きるやも。下にあるものをうまく懐柔できなくなると、入れ替わるってのが歴史なんですけどねぇ。イギリスの宗教や政治に居辛くなって新大陸アメリカを求めた人たち、カトリックへの不満から新教を作った人たち、王の贅沢に不満で起きたフランス革命やロシア革命、イギリス人の圧政と差別に立ち上がったインドの人々、中国の文化大革命の前と最中と後、人間の歴史を見て行く

と、偉い人と偉くない人は入れ替わるものなんですね。どれだけ穏やかに入れ替わるかどうかの差はあっても。入れ替わった直後は偉いという存在を作らない様にしていても、権威、権力を手中にして時が経つと、腐敗するというのか、おだててておだてられて偉い存在になってしまうから、また下になった者の不満がたまる）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十一

（なるほど。ご隠居さん、流石です。で、偉くはない立場でも、偉い人の側にいればおこぼれにあずかれるから、偉い人に、あなた様は偉い、偉いっておべっかつかう）

（偉くはなれないが、何がその時、その場で偉いのかが分かればそうするものなのですな。偉くはなれない自分の変わりに偉い人を作る。哀しいですな）

（だんだん鈍くなってきて、おべっかだということに気付かなくなり、余計に偉くなった気分になるから、段々無茶をし始める。おべっか使う方は、悪い事を伝えると自分の評価が落ちるやも知れず、悪い事は伝えなくなる。偉い立場にいる者は、余計に下にいる者の不満に気付かなくなる、自分が下にいた時の不満を忘れてしまう）

（そうそうだから腐敗していくんですな、虎さん。なんらかの力を持つ人が偉い人、というのはどうでしょう。だから偉くなりたくて、なんらかの力を持とうとする）

（まぁ、精子だって競争して卵子に突入しようとしますからね。人間の、いや、人間に限らず雄の持つ特徴なのだとしたら、もうどうしようもないことなのでしょうか）

（なんだか性教育受けてる気分っす。あれつまんなかったっす）

（ご隠居さま、なんだか身も蓋もないお話ですこと）

（いやぁ、案外これが真実かもしれませんぞ。精子ですらそうなのでしから、男は本能的に女を手に入れるために競争する。卵子が元気な精子を望むように、女は元気な男を望む。元気な男を探す手段として、男の職業を気にする。そういう職業に就きたいと男が願う、如何でしょうか）

（人間は歴史から学ばないものだとするならば、いつまでも、偉い存在はあり続けることになりますな）

（入れ替わるだけということでしょうか。入れ替わられるまでどれ

だけ長続きさせられるか）
（殿方のお話、理解はできなくもないのですが、殿方とわたくし達とでは本当に違いますのね）
（そう、ユリ、偉いなんてどうでもいいから、みんなが病気や貧乏で苦しまなければそれでいいのに）
（ですわねぇ）
（しかし、みんなが対等になってしまい、偉いという概念が無くなった頃には、精子の能力も衰えて、人類滅亡かもしれませんね）
（えっ、どうして）
（英雄色を好むというのもありますな、つまり、英雄がいなくなれば、皆平等、すると人類滅亡ですかな）
（元気な精子は元気な男のもの。英雄は元気であろうから、元気な子孫が繁栄するやもしれませんからね。もし精子の競争が男の競争心と関係があるとしたら、なのですが、その場合、男が競争しなくなるということは、もしかしたら精子が競争しなくなるということやも知れず、精子が競争しなくなると、よりよい子孫を残すどころか、子孫そのものが出来なくなるやも知れず。僕がまだあちらの世におりました頃から、精子の数が減って来ていると言われてましてね、おっと、この話は以前しましたっけ。それで、我が曾孫のところはなかなか子供ができなくて、人工授精でという話。最近三つ子が生まれたということ、お話しましたっけ）
（まぁ三つ子ですの。お珍しい。おめでとうございます。それに玄孫ですの、素晴らしいですわ）
（はい、ありがとうございます。しかし、自然には妊娠しなかったわけですからね）
（ユリはそのお話、お伺いしたと思います。玄孫さんにその内、お目にかかりたいです）
（はい、是非）
（僕も、以前玄孫さんの三つ子の件はおうかがいしました。世の中が平和になってきているということかもしれませんね）

（別の言い方をすれば、人類滅亡が近づいているということですかな、やれやれ。我輩の目の青い内には平和な地球は望めぬのですかな）
（人類滅亡と人類平和とどちらが先になることやら）
（玄孫って何っすか）
（玄孫とは曾孫の子のことですよ、武蔵さん。素晴らしいでしょう）
（ええと、曾孫って孫の子っしょ。つまり、孫の子の子ってことっすか。うっひゃぁ。でも、そっちはまだわかるっす。ただ、なんかぁ、さっきの難しい話っす。歴史、そんなに知らないし。稔る程頭を垂れる稲穂かな、というのあるっしょ。麦は実ってもまっすぐで、競争しているけど、稲は競争しないっての）
（武蔵君、歴史は知らなくとも、よくご存知ですね）
（うっす。俺の住んでたとこ、田んぼや畑ばっかっす。んで、いつも不思議だったっす。だって、米も麦も結局筍っしょ）
（そんな、武蔵君、麦と米と筍は異なる植物だよ）
（あっ、俺の言いたいのは、筍の身長比べるってあるっしょ）
（おうおう、筍の背比べですな）
（武蔵君、外人さんに負けてるぅ）
（外国人っす）
（だってぇ、ユリの頃は外国人さんなんて舌を噛みそうな言葉使ってませんでしたっ）
（んで、麦も米も、皆筍みたいに同じ高さだから）
（ふむ、面白い視点ですな）
（だから、世界に一つだけの花と同じで、同じ身長で、誰が偉いとかってないって言うかぁ）
（その世界に一つだけの花って何でしょう。ユリかしら、ユリだったらいいなぁ）
（あっ、世界に一つだけの花って、歌っす。あっ、ここのみんな誰も知らないっすね。俺が小学校に入学した頃の歌っすから、もう十年ぐらい前の）

（私、存じておりますわ。紅白歌合戦で歌ってましたよね）
（たぶん）
（紅白歌合戦、懐かしいですね）
（紅白歌合戦って何でしょう、お歌のことでしたら、もしマサさまがいらしたらお判りになるかしら）
（いや、マサさまは、戦前にこちらにいらしてますからね。紅白歌合戦というのは、戦後、最初はラジオで、その後テレビで毎大晦日に放送されてましてね、男は白、女は紅に分かれて、歌を競う番組ですよ）
（へぇ～、面白そう。で、ユリの知りたいのは、その世界で一つだけの花はユリじゃないんですか）
（俺もよく覚えてはいないっす。けど、どの人も、世界に一人しかいない人だから、一人一人が大切なんだから、って意味っす。誰が偉いとか目立つとかそういうんじゃなくて、って）
（なるほど）
（ふ～ん、ユリじゃないんだ。残念）
（いやぁ、ユリちゃんも、その世界に一つだけの花だったってことだから）
（あらぁ、虎ちゃん、優しい）
（僕は基本的には優しい筈なんです。何しろ高校生としての誇りがありましたからね）
（いいなぁ、俺なんか埃っぽい中学生って言われてたっす）
（うわぁ、ユリ、そっちの方が判り易いですぅ）
（武蔵君、今の時代、あちらでは誰でも中学生になれるようですが、僕の頃は、高校生になるのはほんの一握りでしたから。高校生になれるということは、社会に出て、それこそ偉くなる将来が約束されてました。あの頃は、偉くなるということは威張って権力を振りかざすということではなく、社会のために何を為すべきかということでしたから。勿論、そう言われる事自体、実際には威張って権力を振りかざす、頭を垂れない者がいたということなのですが、それで

もｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅの意識は皆一応は備えていただろうと）

（おう、又出て来ましたね。ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅ。以前皆で話したことがございましたな。あの時には武蔵君はいなかったと思うが、説明必要ですかな）

（いいっす。要するに、頭を足れる、っしょ）

（まぁ似た様な、些か異なりますがな）

（いいっす。難しいこと嫌いっす）

（ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅ、ほんと死語ですね。いや懐かしい。戦後しばらくは続いてましたね。いつ頃からだろうか、ｎｏｂｌｅｓｓｅ　ｏｂｌｉｇｅ　は消えましたね。やはり高校生が世に溢れた頃から、いや、猫も杓子も大学に入るようになった頃からでしょうか。おっと、別に差別しているわけではないのですが、何も、勉強するのが嫌いな、あるいは勉強が苦手なのに就職の為に大学に行く必要などないと僕は思っておりますのでね）

（俺勉強嫌いっす。だから大学行きたいなんて思ってなかったっす。んで、馬鹿だから、その猫も杓子も、って、猫は分かるっす。猫は大学行かないっしょ。けど、杓子って何っすか。あっ、聖徳太子が手に持っているものっすか）

（おしゃもじのことでしょ）

（おしゃもじじゃないっしょ。あれ、カンニングペーパーだって誰かが言ってたっす）

（堪忍って何かしら、我慢することかしら）

（ほほほ）

（カンニングとは機敏、ペーパーとは紙のことでござる）

（機敏な紙って、違うっす。カンニングペーパーって、テストなんかの時に見る紙で、テストの前に覚えられなかった時に書いておくので）

（テストとは、試験ということでござる）

（試験の時にずるするために書いて隠しておくもののことですね。

僕の頃にもありました。潔しとしない輩がしてましたね）

（ほほほ、主人がね、実物を持ってきてくれたことがありましたわ。鉛筆の芯のまわりを薄くくるくる桂剥きみたいにして、その剥いた所にとっても小さい字で書いてありました。主人は、こんなことを考えたりしたりする時間があるなら勉強すればいいものを、とぷりぷり。これで退学処分になるやもしれず、全くと。私は、鉛筆の桂剥きをなさる技術に感心いたしましたのよ。鉛筆って、お大根より長いでしょう。さぞかし苦労なさったのだろうと。きっと外科手術などお手の物になるかもしれませんわって、で、そう申しましたら、だからお前は馬鹿なんだ。そんなことを言っているんじゃない。こんな小狡い小賢しい手段で単位を取得しようなどと、医者の風上にも置けぬと、ぷりぷりでした）

（鉛筆の桂剥き、たしかに、大変そう。ユリ、お大根の桂剥きもできません、いえ、できませんでした）

（聖徳太子のしゃもじも大学行かないっすね、けど、猫の大学とかおしゃもじの大学って、あったら面白そうっす）

（戦前、貴族院議員など無条件に偉い人でした。馬鹿なことをする人もおりましたが、それでも皆、それなりに国の将来を真剣に考えておったと感じておりましたが。どうも、昨今のあちらの世の政治家は。おっと、また話しが元に戻ってしまいそうです。こちらの世に参ってもこんな僕ですからこちらの世からは当分消えそうにないですね）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十一（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十二

（大戦後、憲法が変わって民主主義になりましたのにね。主人がよく申しておりましたわ。我が家は代々選挙権を持っておったって自慢気に）

（えっ、選挙権って、二十歳になったら誰でもあるっしょ。あんなもん、俺はいらないやって思ってたっすけど、矩推の父ちゃんなんか、まだ俺が小学生の頃でも、二十歳になったらよろしくなんて言ってたっすよ）

（武蔵君、選挙権は昔はお金持ちの男の人にしか無かったんだよ）

（へぇ～）

（そうそう、ユリのお家でも選挙に行けるのは父だけでした）

（ユリおばちゃんってお金持ちだったっすか）

（父はお店を持っていたからかしら）

（俺んとこもうどん屋っすけど、金持ちじゃないし）

（二十歳以上なら誰でも投票できる。なのに投票率はどんどん下がり、選ばれたと言っても、ひどい所では住んでいる人の十分の一ぐらいの人に名前を書かれただけでトップ、一番上になれる。しかもなったらなったで、はぁ、話すのもうんざりしてきました。話が元に戻りそうですね、男というものは、いや、僕も男ですが、それに今の代議士には女もいますよ）

（へぇ～、女の人でも代議士になれるのっ。ユリ、なってみたかった）

（ユリちゃん、また。ほんとユリちゃんって何にでもなりたがるんだね）

（だってユリの将来は、あそこで西班牙風邪に罹らなきゃ、今のあちらの世でいろいろできたかもしれないでしょ。面白いわぁ）

（でもね、ユリさん、今の代議士は、ほんとひどいもんですよ。使

うのに足りなきゃ税金増やすことや国債で増やすことばかり考えて、その内破産しそうですよ。いや、ほんとはとっくに破産しているのですがね、何しろ貸し主が国債持っている国民というわけで、破産には至らないだけで。金が無尽蔵に湧いて来るとでも思って増税するなら、誰にでもできる。湯水の様に使うなら誰でもできる。少ない予算をどう配分するかどう使うか、方々で主婦がやりくりしていることを、自分たちの歳費からまずは削ろうとは思わず、隗より始めよは死語になってる。歳費数千万円貰ってる選ばれた偉い人ということになっている政治家がやりくりできないとぬかす。やりくりに頭を使うのが政治家であるべきなのに、国民と言う他人から奪って、どんどん奪ってばかりじゃ泥棒並みですよ。馬鹿だってできる。あの歳費で居眠りしたりファーストクラス、特等席で外遊したり、何のための国会議員なんだか。国会内でのまともな議論よりも、国会外での勢力争いで、政党に分かれ、政党の中でも派閥争いし、国会の場では、体裁のいい言葉や準備された資料で討論で、その場では何もまともに決まらない。互いに批判するどころか足の引っ張り合いばかりでしてね。確かに内閣が入れ替わる度に失言大臣が続出ですよ。偉くなったと思った途端に口がすべる、本音が出る。偉いのだから耳をかっぽじってよく聞け、これが正しい、こうあるべきだ、と権力ふりかざしての暴言失言それで辞任。辞任したらそれ以上国会で責任追及する暇があるなら、予算のやりくりにこそ時間を割くべきなのに、瑣末なことで国会の場をまともな国政を討論する場ではなくしている。首相なんてころころ変わる。それだけやりゃもういいだろう、次は俺の番だと言わんばかり。頭を垂れるなんて言葉どころかありゃ狸と狐の馬鹿合戦。そこに狢官僚が加わるからもうひっちゃかめっちゃか偉くなりたい目立ちたい、儲けたい合戦。国民は知ってても手を拱くか無関心に陥り、嘆かわしや。いっそのこと直接民主制にして、代議士無くしゃぁ、歳費も浮くだろうに。案件を一つずつ全部国民投票にして、決まったことを官僚が実行する。ましてや今のあちらの世はネット社会、いやぁ、これを話すと

長くなる。ここは独り言にしておこう）
（俺、学級会や児童会や生徒会と同じで、国会でもみんながその場で考えて意見を言うんだって思ってたっす。違うっすか）
（ほう、学級会というものがそういうものならば、こども達の方がよっぽど民主主義を具現化してますね）
（あああっ、そういえば慎之介が言ってたっす。そのぐげんかってのは俺馬鹿だから判らないっすけど、慎之介が県のこども議会ってのに行く前には、言うことを紙に書いてそれを覚えさせられたって。あれみたいなものっすか。だから、こども議会に出ても、皆で何かを議論するってんじゃなくて、形だけで、あんなのは議会じゃないって、慎之介、俺にぶつけてたっす。けど、俺馬鹿だから）
（まぁ、武蔵さん、ご自分のことを馬鹿だからっておっしゃるの、お止めになった方がよろしくてよ。私もね、主人に散々言われて、だんだん自分でも自分が馬鹿だから何を考えても仕方ないなんて思わされてあちらの世で生きて参りましたの。今思うと、もっと自分に自身を持てばよかったって）
（夢お婆さん、だって、今更どうにもできないっしょ。こっちの世界に来ちゃ）
（あら、こちらでも、ご自分を馬鹿だと思うと、お辛いでしょ）
（辛くはないっす。楽っすよ）
（武蔵君、それは逃げですね）
（そうかなぁ。危ないものから逃げるが勝ちってのもあるっしょ）
（なるほど）
（政治は地に堕ちていますからね、政治家は稼ぐから偉いのかもしれませんがね。おっと、これ皮肉ですよ）
（いやはやそれにしても檻の中は狭いですな）
（偉いと言われる職業、立場に立てば権力を手に入れる。しかし、精子の宿命同様、その立場を狙う者は多い。だからその立場を維持しようとする。維持できないことも知っているから、そうなった時の為に財を蓄える。こちらの世には持ってこられないのにね。あち

らの世で生きていた証なんでしょうかねぇ。例えば、大店の主人、会社の社長、政治家、官僚、王侯貴族、皆宝石や財産や土地を蓄える。で、先ほどのに戻って、財のある人に群がる人がいて、偉い偉いとおべっかを使う、ごまをする）

（胡麻をすると、偉くなれるのですか）

（カテリーヌさん、ごまをするとは、おべっかをつかうと同じ意味です）

（どうしてかしら。胡麻をするはわかりますが、どうして）

（あっ、俺も判んないっす。どうしてっすか）

（すり鉢にくっついて離れないから、おべっかを使う人はいつも偉い人に偉い偉いって側にくっついて離れないらだそうです）

（流石虎ちゃん）

（へぇ～。今、ごま、煎ったのもすったのも売ってるっす）

（まぁ、つまらないじゃないですか。ユリね、あのすり鉢の中をすりこぎぐるぐるごりごり廻すのって見ていてすごぉく面白そうで、でもやって見るとうまく廻らなくて）

（あのぉ、わたくし、ごまでもう一つ分からないことがあるのですが、いいかしら）

（カテリーヌさま、普段お静かな方なのに、珍しいですわ。ユリに答えられるかどうか）

（あのぉ、お子達が、集まって歌ってましたでしょう。こう、握った両手をみんなで出して、一人だけ片方の指をその間に突っ込んでいく時の楽しそうな歌、あれにもごまって出てきますでしょ。でも、あの歌、全然分からなくて。ごまみそずいずいって、大豆だけではなくてごまでもお味噌をつくるのでしょうか。あれも、すり鉢なのかしら、すっている音なのかしら）

（♪ずいずいずっころばし、ごまみそずい♪　うわぁ、懐かしいです。あっ、でも、どういう意味なのかしら。あの歌ね、指を突っ込むのを早くしたり遅くしたりできるから、あれで、歌の最後に指を突っ込まれた手をひっこめて、あら、でも、それで何を決めたのか

しら。ユリが遊んだの、もう随分前なので、忘れてしまいました。カテリーヌさま、お役に立てなくてごめんなさい。もしかして、武蔵君だったら知ってるかしら）

（ええええっ、俺に振ってくるっすか。俺だって随分前に、保育園で遊んだだけで）

（僕、茶壺奉行が関係あると聞いたことがありますよ。でも、さぁ、あれで何をしようとしていたのか、僕も知りません）

（♪せっせせのよいよいよい夏も近づく八十八夜♪っての、あれ、お茶の歌っしょ、あれなら女子が中学でもやってたっすけど）

（マサさまがいらしたら、お判りになったかもしれませんわね。ユリも、今不思議に思ったのですけど、武蔵君の通っていたのって、保育園っていうんですか。幼稚園じゃなくて）

（うっす。保育園。あれっ、でも幼稚園ってのもあったっす。えっ、何が違うんだろう）

（幼稚園は昔からございましたわ。幼稚園に通うのは、お金持ちのお家の子。保育園は、母親も働かなきゃならない貧乏な家の子でしたわ。私の頃も愛の頃も望の頃も。幼稚園の子はお育ちがよくておっとりしていて、でもひよわかしら。保育園の子は良く申せばたくましいけれど、悪く申しますと粗雑というか）

（まぁ、そうなんですか。では、以前わたくしとユリさまがお訪ねいたしました幼稚園のお子達はお育ちがよろしいのかしら。あらっ、それじゃぁ、武蔵君は、あら、ごめんなさい）

（いいっす。俺、育ちいいなんて思ってないっす。爺ちゃんが言うように、電車の乗り方も知らない田舎者っす。それに母ちゃん、父ちゃんと一緒に働いてるし、けど、貧乏じゃないっすよ。お店はあっても金持ちでもないっすけど）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十二（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十三

（うわっ、電車、そういえば、地下鉄道、いえ、地下鉄に乗っているのに、うわっ、初めて乗ってるのに、ユリったらおしゃべりが楽しくて、地下鉄を楽しんでませんでした。あらっ、なのに、もう降りられるなんて、そんな、ユリ、地下鉄初乗り、実感ないです。ひどい）

（ユリさん、大丈夫ですわ。地下鉄も、今から乗る京浜東北線も中はあんまり変わらないですから。違うのは、地下鉄でしたら外が暗いから車窓に鏡みたいに人が映りますが、電車は外の景色が見えるくらい。それに私たち、こちらの世の者は、鏡には映りませんもの。ほら、ユリさん、今買っているのがマックの切符です。いえ、有料手回り品ですわね。二百七十円ですわね）

（まぁ、このことですのね、前ご隠居さんがお話なさってらした、人間は西瓜で立っち。でも、犬は西瓜じゃなくて切符なんですね。それも、人間が売ってくださるのですね。あっ、マック君は籠の中で立っちしてませんね。虎ちゃんとロバートさんも犬にお座りかしら。へぇ〜。あら、でもお高い）

（その日の内なら日本全国、国鉄、いえＪＲにはどこまでも乗れますのよ。人間は長距離や特急に乗れば高くなるのに。犬は赤ちゃんでも大人になっても料金一緒ですし）

（あらっ、じゃぁ人間よりお得。ところで、愛さんと望さんはどちらにお住まいなのでしょう）

（川口ですわ、埼玉の）

（荒川の向こうのですか）

（鋳物で有名な所ですね）

（キューポラの映画がありましたね）

（キューポラって何でしょう。もしかして、丸い天井のことかしら）

（バチカンや教会の建物によくあるあれですかな）
（いえ、キューポラって、鋳物の工場の屋上にある、あら、あれ何かしら、煙突かしら。あれの名前ですのよ）
（それでは、キューポラの映画とは、鋳物の工場の映画でしょう）
（いえ、あら、もうあまり覚えておりませんわ。吉永小百合が出ていたことと、愛が小学校の一年生だったかしら、夏休み中に校庭で映画会があって、その時に見せて頂いたのですが、でもこども達に見せたくらいですから、恋愛ものではなかったのかしら。団扇で扇いで蚊を追いやるのが大変だったことは覚えておりますのに）
（校庭でですか、体育館じゃなくて）
（武蔵さん、あの頃はまだ体育館がある小学校なんて少なくて。ゴザを持ち寄ってみんなで）
（ゴザっすか。ビニールシートじゃなくて。ゴザって聞いたことはあるっすけど、見たことないっす。どこで売ってたっすか）
（へぇ〜、ゴザってもうないの。ユリ、信じられない）
（畳も減ってきてますしね、お米屋さんはあっても農家から出す時から紙袋ですからね。昔は米屋さんの空になった俵をほどけば簡単なゴザもできましたね）
（へぇ〜。僕も信じられません。米を紙の袋で運ぶなんて、紙が破けそうで、ちょっと怖いですよ）
（ビニールだと、武蔵君、お高いのでしょう）
（ううううん、百円ぐらいじゃないっすか。あちこちでもらったりすっから、家に何枚もあるっす）
（百円って高いです。それが何枚もあるって、武蔵君のところ、お金持ち）
（なことないっす。家、貧乏だとは言わないっすけど、絶対に金持ちじゃないっす。父ちゃんも母ちゃんも、いつも、きついきつい、って。仕入れが上がっても、うどんの値段そんなに簡単に上げられないって）
（あら、初めて聞きました。武蔵さんの所、うどん屋さんなのです

か）
（うっす。夢お婆ちゃん。俺のいた辺りってうどんが名物っす。川口知ってるなら、もっと上の方、利根川に近い方、知らないっすか）
（利根川。あまり。荒川ですら、愛が結婚するまではほとんど存じませんでしたのよ。川と言えば多摩川でしたもの。あとは神田上水と、そう、隅田川ぐらいかしら）
（利根川知らないっすか。俺が生まれるずっと前に来た名前のある台風で決壊して大洪水になってっての。俺の中学の美術のおじいちゃん先生のお父さんがそのころ青年団にいて、流木が土手にあたると決壊するからって、大雨の中、対岸の青年団と流木を押し合ったって話してくれたっす）
（もしかして、それ、カスリン台風のことでしょうか。多摩川も大変でしたわね。あの時は）
（あら、それって、わたくしの名前と同じ台風のことですわね）
（そうそう、そうでしたね）
（おう、我輩が乗った青年と行った先で聞いたのでしたな）
（へぇ～そうっすか。おばさんは台風の名前っすか）
（違いましてよ。わたくしの方が台風より先ですもの）
（ところで、隅田川は荒川と同じではなかったでしょうか）
（まぁそうですの）
（百円ってやっぱり、ユリ、高いと思います）
（いや、ユリさん、ほら、今の物価はユリさんの頃とは違いますから。百円で買えるものは、例えばライターとか、おっ、煙草が吸いたい）
（我輩も。吸えなくともよいから煙と香りだけでも）
（ライターが百円もするのですか。やっぱり高いです）
（いえ、ですから、ユリさん、使い捨てのライターで安くて）
（えええっ、使い捨てで百円なんて、いえ、百円もするものを使い捨てなんて）
（ユリお姉さん、今の百円って安いっす。俺のこの前までの小遣い、

月三千円だったっす。それに、百均行けば、お菓子や定規や皿や雑巾や、石鹸や何でもかんでも百円っす。あっ、消費税がつくけど）

（消費税って何でしょう）

（百円のものを買うと、五円の消費税を取られる仕組みでしてね。もうかれこれ四半世紀前でしょうかね。百円につき三円を取るとして、時の総理が将来割合を上げることはないと明言したのに、十年もたたずに百円につき五円になりましてね。まったく、政府も官僚も、あちこちにいい顔したくて歳出を減らす工夫ができないものだから安易に歳入を増やすことばかり考える。お手盛りで増やした自分達の歳費や議員定数を減らすことから始めるならばまだしも。おやおや、また愚痴ってしまいました）

（あっ、だめだめ。ユリはお話しに参加しちゃいけないの。じっくり見せて頂くんだから。みなさん、ユリには話しかけないでください）

（ユリちゃん、別にユリちゃんに話しかけてるわけじゃなくて、ユリちゃんが話に加わって来るんだろう）

（虎ちゃん意地悪。ほら、そうやってまた話しかけてる。ユリは井戸端会議が好きなんですっ。あらっ、でもユリがお尋ねしたんでした。川口にいらっしゃるのですね、というか、ユリは今、川口に向かっているんですね）

（ええ、そうですわ）

（然し乍ら、この犬の檻からは他人様の脚ばかりでつまらないものですな）

（ロバートさま、こちらに上がってらっしゃればよろしいのに）

（カテリーヌさん、なかなかそれが。我輩、人から人に乗り移る術は習得いたしましたが、どうもこの檻の編み目が、そちらに乗り移る前にちぎれそうで）

（そう、なんだかここから出たら心太になりそうで）

（おほほ。では、マック君がそこから出されるまで我慢なさいませ）

（なんだか、カテリーヌさんも意地悪になられたような）

（あらまぁ、いえ、わたくし、そんな）
（おっ、ここの駅ではエスカレーターは走らないようですな）
（ご隠居さま、何をおっしゃってらっしゃるのでしょう）
（そうだよお爺ちゃん。エスカレーターが走るわけないっす）
（いやいや、夢さん、武蔵君、エスカレーターが走るかの如く注意書きする駅長さんもいらっしゃるのでして）
（そんな）
（あるのですよ。時折、駅に貼られています。エスカレーターは走らないで下さいってね。でが抜けてる）
（ふ～ん、そんなの、俺、気にしないっす。小学校の廊下に書いてあったっすよ。廊下は走らないって。あれって、廊下に走るなって言ってるのと違うっしょ）
（ほうっ。学校でね。すると、で抜きは今では正しいことになっているのでしょうか。それとも学校の先生の世代がもう間違っているというか、なんともはや）
（気にしないと、日本語がどんどん乱れて行きますわ）
（まぁ、それも時代の流れかもしれませんが。抵抗したくなりますね）
「今日はマック落ち着かないわね」
「たぶん、いっぱい連れてきちゃったんじゃないかなぁ」
「おばあちゃんが、それともあなたが」
「両方」
（おほほ。当ってます）
「まさか、マックにも乗っていたりして」
「まさかぁ。マックがいやがるでしょ。それに、あそこは人間の墓地でしょ。今日はドッグカフェの前通らなかったし。あそこならペットのをマックが乗せてくるかもしれないけど」
（すみませんねぇ。僕乗ってしまったんですよ。人間ながら）
（まこと、かたじけない）
（ほらぁ、虎ちゃん、やっぱり犬には乗らないものなのよ）

（えっ、でもそんなこと決まっているわけじゃなし。それよりユリちゃん、僕たちの話に乗って来ちゃだめなんじゃなかったっけ、ほら電車が入ってきた）

（あっ、あれは違うっす。山手線っす）

（えっ、どうしてわかるの）

（お母ちゃんが時々歌ってたっす。ユリお姉ちゃんより後で生まれたのにユリお姉ちゃんより老けてる母ちゃんっす。♪丸い緑は山の手線、真ん中通るは中央線、新宿西口駅の前♪って。あっ、でもここ新宿じゃないっすね。あれっ、山の手線っすか、それとも山手線っすか）

（そういえば、どちらが今の言い方なんでしょうね。どちらでもいいんじゃないでしょうか。Ｅ電ってのもありましたし。ＪＲの考えることはわかりませんよ。国電の赤字を解消するのに煙草値上げして、なのに駅から喫煙所を無くしたくらいですからね）

（ＪＲって、あら、あの文字ですか。あらっ、日本語じゃないのも書いてあります。何語かしら。ＡＢＣは、ほら、前、少し英語のお教室で見ましたし、ロバートさんやカテリーヌさまのお墓にも書いてありますでしょ）

（僕がこちらの世に来る前とは大違いですね。外国語が街中にあふれているのは段々分かってきていましたが、駅の表示がこんなに色々な言葉で。漢字にひらがな、ローマ字、それに英語と、中国語ですか、あともう一つは、朝鮮の文字ですか。敵性言語どころか属国の文字まで表記するなど、僕の頃でしたらもうたいへんな騒ぎになったでしょうね、ましてやあの頃は省電で国の管理下でしたしね。戦争に負けたからあちこちの言語で表記しているのでしょうか）

（省電が国電になってＪＲになるくらいですもの）

（あら、それでしたら、仏蘭西語でも書いて頂きたいですわ。たしか、その戦争ではわたくしの国は勝った側でしたわね、ご隠居さん）

（そうですねぇ。でも、たぶん、英語はともかくも、中国語とハングルは、あっ、ハングルって朝鮮の文字ですよ。朝鮮というと二つ

に分かれている北の方を言いますし、日本とまぁ仲のよいのは南の韓国の方ですしね。北の方はスパイがいるとか、日本人も拉致されてますしね。で、中国語とハングルが書かれているのは、たぶん、戦争とは関係無くて、いや、戦前に中国や朝鮮から来た人や軍や企業に強制労働者として連れて来られた人やその子孫も多いのかもしれませんが、その人たちは日本語読めますからね。今は、中国人や韓国人が多いからじゃないでしょうか。留学生や今なら観光客や）

（拉致って、日本人が拉致されているんですか）

（そう。最近、いえ、僕がこちらに来る前に分かってきたのですが、北朝鮮のスパイにたくさん拉致されているそうです）

（怖いっす。父ちゃんなんか、お前だって拉致されるかもしれないんだから、暗くなったら男だからって平気でうろつくなって言われてたっす）

（へぇ～）

（何故拉致するのですかな。かつて南北亜米利加用に奴隷にしようと阿弗利加から安く黒人を買ったのと同じですかな）

（ロバートさん、たぶん違いますよ。たぶん、日本の文化を学ぶためじゃないでしょうか。日本人に化けたスパイを作る為の）

（我輩が外交官だった時代とは随分アジア情勢が異なってますな。いやはや）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十三（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十四

（あのぉ、ユリ、おっかない話しより、さっき武蔵君が歌った歌、あれが気になってるんですけど）
（ユリさん、武蔵さんの歌ったのは、ＣＭですよ。あっ、ＣＭってコマーシャル、テレビで宣伝する為の歌のこと。ラジオのもございましたわね。あら、でも覚えておりませんわ）
（夢さん、ラジオも民間ができたのは戦後ではなかったでしょうか。だとするとここにいる皆の衆の中で、ラジオのＣＭソングを聞いたことのあるのは夢さんと僕と武蔵君ということになりますね）
（然様でございますわね。ごめん遊ばせ）
（ユリさん、元の歌はご存知かしら。♪おたまじゃくしは蛙の子♪というのと、♪太郎さんの赤ちゃんが風邪ひいた♪というのがあります）
（いえ、ユリ、どちらも知りません。でも、ユリには、さっきの武蔵君のがいいです。もう一回歌って）
（♪丸い緑は山の手線、真ん中通るは中央線、新宿西口駅の前♪っすか、でも、ここ新宿じゃないっすよ）
（ううーん、緑は山手線って覚えられるでしょ。あら、でも、さっきの電車もう行っちゃいましたけれど、緑じゃなくて銀色でした）
（ああ、あれね、真ん中に緑の線が入ってるっすよ）
（昔は全部黄緑色でしたわねぇ）
（もっと昔は小豆色）
（それだったら省電と同じですね。僕の知っている電車）
（ユリも乗ったことあります）
（わたくしも）
（我輩も。ところで、下の檻の中から質問失礼、いえ、上からよりはよろしいでしょうか。え～と、夢さん、先ほどの歌、元はアメリ

カの歌だとはご存知でしたかな）
（まぁ）
（僕も知りませんでした）
（ああ、僕は聞いたことありますよ。本堂で占領軍の若いのがじゃれあって歌ってましたよ。太郎さんも赤ちゃんも出てこない。あの時までは日本の歌と思っていました。ハレルヤハレルヤと歌うので、上官がこちらを見て申し訳ないという顔をしたのですが兵達の騒ぎを黙認していたのを覚えています。）
（♪Ｍｉｎｅ ｅｙｅｓ ｈａｖｅ ｓｅｅｎ ｔｈｅ ｇｌｏｒｙ ｏｆ ｔｈｅ ｃｏｍｉｎｇ ｏｆ ｔｈｅ Ｌｏｒｄ～～Ｇｌｏｒｙ，Ｇｌｏｒｙ，Ｈａｌｌｅｌｕｊａｈ！ Ｇｌｏｒｙ Ｇｌｏｒｙ，Ｈａｌｌｅｌｕｊａｈ！ Ｇｌｏｒｙ Ｈａｌｌｅｌｕｊａｈ！ Ｈｉｓ ｔｒｕｔｈ ｉｓ ｍａｒｃｈｉｎｇ ｏｎ！♪ですな。それとも、♪Ｊｏｈｎ Ｂｒｏｗｎ’ｓ Ｂｏｄｙ ｌｉｅｓ ａ－ｍｏｕｌｄｅｒｉｎｇ ｉｎ ｔｈｅ ｇｒａｖｅ♪の方でしたかな。どちらも♪Ｇｌｏｒｙ Ｇｌｏｒｙ Ｈａｌｌｅｌｕｊａｈ！♪の部分は同じですが。奴隷廃止論者のＪｏｈｎ Ｂｒｏｗｎが絞首刑にされたのを黒人達が歌って、その替え歌が北軍の行進曲みたいになりましてね。亜米利加人ならよく知っている歌ですよ。いずれにせよ、いくら負けたとはいえ、寺で歌うのはちと、いや随分失礼ですな）
（でございますわね。ａｌｌｅｌｕｉａは主を称える言葉ですものね。あら、でも、カトリックと申しますより、元はユダヤ教のですわね。どちらに致しましてもお寺でというのは）
（いや、まぁ、戦争が終わって、負けようが勝とうが、平和にはなりましたからね）
（ロバートさんが歌うのって初めてですね。いつも歌うのはマサさまでしたもの）
（我輩、歌はちと苦手でしてな）
（アメリカでも日本でも替え歌ができるということは、すてきなメ

ロディなんですね。太郎さんの赤ちゃんも、おたまじゃくしも、愛も歌ってましたもの。望は歌っていなかったかしら）
（メロディとは節回しのことでござる。♪ハニホヘトイロハ♪）
（ロバートさん、ありがとうございます。でも今では♪ドレミファソラシド♪ですのよ）
（　イロハニホヘトは使わないのですかな）
（えっ、使わなくなったのですか）
（ユリ、その新しい方、知らないです。あっ、だから、小学校に行った時に、変だなぁって思ったんですね。気付きませんでした。あらっ、でも、ハとかトとか書いてありました）
（ユリさん、それ、ハ長調とかト長調じゃないかしら。ハニホヘトイロを使っているようですわ）
（ややこしいのですね。日本語は。カタカナとひらがなと漢字だけでも充分数が多いのに、音楽の方も両方なのですか）
（あっ、電車、これに乗るのですね。これ、空色の線が入ってます。もうみなさんユリに話しかけないでくださいね）
（うわぁ広い。先ほどの電車より広くて明るい感じです）
（先ほどの電車は両方とも地下鉄で、中でも銀座線は一番古いから狭いですね。一寸前までは銀座線は時々照明が切れる場所もありましたしね）
（あら、窓が大きくてお外が見えても高い建物ばかり。こんなに高い建物ばかりになったんですね。うわぁ、じゃぁ、東京に住む人ってすごぉく増えたのかしら）
（僕がこちらの世に着た頃、東京府の人口は七百数十万で、日本の十分の一に達したと覚えていますよ）
（今、たぶん一億三千万人ぐらいですから、ユリさんがいらした頃の二倍以上ですね）
（うわぁ、でも、でも、人間が二倍になったなら、平屋の建物が二階建てになればすむでしょ。なのに、みんな何階あるのか分からないくらい高いです）

（ユリさん、今から参ります愛の住んでいる所はね、愛の結婚したお相手の健さんのお父様が退職なさる随分前に川口に買われたものですし、私が住んでおりました野毛山の家も、それより少し前に主人の両親が私達と住むために世田谷にあった家を売って引っ越しましたのよ。東京オリンピックの頃から、そうやってどんどん遠くに引っ越すようになりましたの。東京で働く人は神奈川や埼玉や千葉に夜帰るようになって、神奈川、埼玉、千葉の東京寄りの町はベッドタウンと呼ばれるようになりました）

（ベッドとは床のこと、タウンとは町のことですな）

（へぇ～）

（東京の人口が二倍で二階建て、神奈川増やして三階建て、埼玉増やして四階建て、千葉増やして五階建て、あらっ、でも、五階よりもっと高い建物だらけです）

（ユリちゃん、その計算変だよ。だって東京の人口の半分が後の三つの県それぞれと同じってわけじゃないし）

（ユリわかりました。今のあちらの世は女の方も色々なお仕事なさってらっしゃるから、そのまた二倍かしら）

（ユリちゃん、その計算、絶対変だって）

（ははは、まぁ、今の会社は、色々と物が多いですからね。その物の置き場所も要るでしょうし）

（人が増えれば、売る物が増える。売る物が増えれば、売る物を置いておく場所が増える、だから売り手が増える。つまり人が増える。これがぐるぐる回っているとも言えませんか）

（人が増えれば病人も増える。病人が増えるから医者が増える、だから医院が病院になる、あはは、我が医院もそうやって大きくなったのでした）

（増えた人が死ねば、墓も増えてるっすか）

（墓の場合は日本では家ごとが多いですからな。おっと、我輩はあちらの世でもこちらの世でも一人住まい）

（あっ、あらっ、運転手さん間違えたのかしら。駅に止まりません

でした）
（あはは、この時間帯の京浜東北線は快速運転していますからね）
（さっき秋葉原に止まった時、東京駅のと音が違ったでしょう）
（えっ、電車の音ですか）
（いえ、駅の音。電車が出る時に、駅で音楽みたいなの。あの美しい音。妖精が出て来るみたいな、ねぇカテリーヌさん）
（でしたわねぇ。あれ、オルゴールかしら）
（そういえば、昔は無粋な音でしたねぇ）
「ほら、望、あなた座りなさいよ」
「愛ちゃんは」
「愛ちゃんって誰。外ではやめてよね」
「ん。で、座らないの」
「うん。座ってマックを膝に乗せて」
（おっ、膝の上だと我輩も座り心地がよさそう）
（でも、何も見えなくなりました。愛さんの脚ばかり。マック君は外が見えなくても文句は言わないのでしょうか）
「ねぇ、マックを網棚に乗せたらどうするかなぁ」
（それは勘弁願いまする）
（ロバートさん、視界が開けてそれも酔狂かもしれませんよ）
「だめ。私、自分が座っている時に、誰かに上にどさって荷物置かれると気分悪いのよね。それまで床に置いてあったのだったりすると、土やほこりが落ちてきそうで。犬だって、犬の嫌いな人にしたら嫌だと思うし。それに、万が一揺れて落っこちたら、マックが怪我しちゃう」
「そうかっ」
（さっきまで雨だったからかしら。お外がまた暗くなってきたみたいです）
（あっ、ユリさん、私もよくＪＲに乗るとそう思いました。ＵＶカットで窓が暗くなっているらしいですよ。でも、傘を持っていない時など焦りました）

（ゆぅ？ぃかっとって何ですか）
（紫外線、切る、でござる）
（紫外線を着るのですか。紫外線って何かしら）
（ユリちゃん、虹の色言えるかな）
（七色ですよね。え～と、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫）
（はい、よくできました。その紫の外にあって、見えない光を紫外線と言う）
（うわぁさすが虎ちゃん、元高校生）
（おっ、最近にしては珍しくユリちゃんに褒められた）
（その紫の外にある光を着るのですか。異国の物語の妖精みたい）
（ユリさま、わたくしも思いました。きっと可愛らしい虹色の妖精）
（あっ、いえ、え～とどう申しましょう。紫外線を遮るのがＵＶカットですわ）
（どうして紫外線を遮らなければいけないのかしら）
（あっ、それだったら俺も知ってっす。母ちゃんいつも外に出る時にＵＶカットクリームをべたべた塗ってたっす。日焼けするって）
（　へぇ～、見えない光なのに日焼けしちゃうんですか。　日焼けっていけないんですか。色白は七難を隠すってユリの母も申しておりました。日傘を差しなさいって。でも、日焼けしていないとなんだか弱そうでしょ。今の電車って、電車に乗る人の日焼けまで心配するほど親切なんですか。省電とは思えない）
（ユリさん、省電ではなく、国電、いやＪＲですし。それに日焼けは今ではよくないこととなってますよ。皮膚が老化する、場合によっては皮膚癌にもなる）
（まぁご隠居さん、そうなんですか。あっ、でもユリ達は日焼しない）

第七話　セミテリオから犬にも乗って　その十四（後書き）

お読み頂きありがとうございました。
霊園セミテリオの気の世界を、お楽しみ頂けましたなら幸いです。
お読みになられたあなたと、書き手の私が共に生きておりましたら、
来週水曜日に再会いたしませう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7397l/

セミテリオの仲間たち

2011年11月17日03時27分発行